

奇譚クラブ 臨時増刊

女体緊縛写真集 V 定価一〇〇〇円(送50円)



天然色写真

柔肌に喰い込む麻縄 前田真知子
首縄横臥二態 前田真知子
典型的後手縛り 前田真知子
自由な肢のもたえ 前田真知子
麻縄と統肌の明暗 前田真知子
厳しい縄目を味う 前田真知子
準備態勢OK 前田真知子
股間縛りの表情 前田真知子

女体緊縛の華 本誌写真部構成

金髪碧眼の美女	シラ・ゲ
笞打ちの態勢	関谷富佐子
鞭撻の痛苦	関谷富佐子
浣腸責の序曲	長井葉津子
亀甲縛りの美態	左近麻里子
麻縄と白肌の対照	中河恵子
陽を浴びた柔肌	左近麻里子
猿ぐつわに喘ぐ	中河恵子
緊縛裸身の露り	中河恵子
責め疲れの放心	梨花悠紀子
没我の心境	中河恵子
痛打の末の悦慮	関谷富佐子
沖縄美人の緊縛	座間明子
剣玉子の縛り	佐々木真弓
狂変する裸女	川路叢子
責めくたびれて	佐々木真弓
紅毛碧眼の白人を責める	シラ・ゲ
海老責の狂態	川路叢子
ボリウムに挑戦	座間明子
鞭打の下に挑	関谷富佐子
祭壇の人身御供	渡部好美子
稚妻は縄を知りぬ	金原加奈子
開股の正面と背面	中河恵子
華麗な開股責め	中河恵子
イルリガートルを前に	長井葉津子
非情な責めの終末	長井葉津子
両手吊りの晒し	中河恵子
柱縛りの完了	川路叢子
処女縛りとまどう	三浦純子
麻縄に身をゆだね	中河恵子
盗視するSMの目	佐々木真弓

緊縛女体の光と影 編集部構成

両手挙げ棒責め	川路叢子
柱宙縛りに浮く	長井葉津子
後手吊りに苦しむ	中河恵子
どこでも責めて	佐々木真弓
鞭の法悦境	関谷富佐子
ムチが痛い、許して	関谷富佐子
柱を挟んだ連縛	関谷富佐子
花と蛇の静子です	中河恵子
針責めをして頂戴	渡部好美子
二つ折りの女体	長井葉津子
猿ぐつわの哀歎	中河恵子
日本式縛りの白人	シラ・ゲ
マソの女王に答	関谷富佐子
柱しばりの恥らう	金原加奈子
夫婦プレイの慈味	渡部好美子
長襦袢の艶姿	花坂道子
豊満ボインを誇る	愛川悦子
美女今縛られる	梨花悠紀子
受入態勢充分	関谷富佐子
折檻にも汚れず	前田真知子
海老責への展開	佐々木真弓
責めてみたい碧眼の女	シラ・ゲ
日本式高小手縛	シラ・ゲ
猫の目のような女	絹川文代
足吊りのある風景	中河恵子
亀甲縛りの媚態	中河恵子
M女二輪の花	渡部好美子
苛責に乱れた黒髪	中河恵子
開股縛りの幻想	中河恵子
鏡の前での放恣	前田真知子
愉悅のひととき	川路叢子
ハリツケ晒し	左近麻里子
これから、どうするの？	長井葉津子
美しき吊り	前田真知子
苦痛か悦楽か	関谷富佐子
一筋の縄の魔術	中河恵子
逆エビ縛りに入る	三浦純子
愛撫の責め	渡部好美子
俯瞰撮影	前田真知子
黒縄と白肌	中河恵子
身動きできぬ境地	座間明子
ボリウムを縛る	中河恵子
浮上した女体	中河恵子
麗しき背面	金原加奈子
汚辱の縄	佐々木真弓
高小手本縛り	川路叢子
責めの陶酔境	関谷富佐子
失神したマソ女	関谷富佐子
前手縛り悶悦	中河恵子
柱の彼方の天国	三浦純子
荒縄の海老責	前田真知子
美と縛の女神	梨花悠紀子
はげなれた猿轡	長井葉津子
可憐な置物	佐々木真弓
ながし目の天使	川路叢子
酒の肴になる	関谷富佐子
妖蛇の洗礼	前田真知子
奔弄されるままに	川路叢子
海老縛りの妙味	長井葉津子
柱につながれた女	前田真知子
痛さをこらえる異国の女	シラ・ゲ
責の果の諦観	前田真知子
痛打の一瞬	関谷富佐子
ホステス裸人生	佐々木真弓

カメラ・ハント楽我記 辻村 隆
女体緊縛の醍醐味を語る 塚本 鉄三

女性モデル募集

勇敢な女性の出現を望む

▽規定△

入選作品の

入選決定しました。入選作品は編集部にて慎重に検討の上、
入選品を公表し、速かに筆者に通知致す。如何
に入選品の著者権は当社に移行することを前
以て御承知願います。
一、応募作品はすべて未発表の自作の作品
に限ります。たとえ未発表の作品でも他社へ
投稿されたものはお断りします。作品の中に
他人の作品を引用する部分があります。作品の中
出処へ作者、書名などを明記して下さい。
紙を一枚以上使用下さい。枚数は四百字詰換算にて
三十枚以下三百枚まで。三百枚以上に亘ると
きは縮切は毎十五日に一回、入選作品は出来る
だけ早く誌上に掲載致します。
一、懸賞応募作品は一般の原稿、読者原稿と
區別するため第一頁に「懸賞」と書き下さ
い。連絡先（氏名）は必ずお書き願います。住所
への氏名を公開したり他へ洩らしたりなどは
絶対に致しませんから御安心下さい。返戻は致
しませんが、若しご入用でしたらコピーをと
って置いて下さい。
箱第41号の送付先は、大阪市住吉郵便局私書
送（第一種郵便便にて）して下さいます。直接の訪
問並に持込みは固くお断り致します。

○本誌の内容充実刷新のため、並に本誌の文献資料性向上のため、女性の写真モデルを募ります。本誌の女性読者の方で写真モデルとして活躍を望まれる方は、どうか勇気を奮って御応募下さるよう、お願い致します。

○本誌愛読者の女性の方でしたら、国籍、年令、遠近は問いませんから御遠慮なくお申込み下さい。採用の方には壹万円以上拾万円までの謝礼を差し上げます。

○応募されました方々の個人的な秘密は絶対に漏洩致しませんから御安心の上御応募下さい。尚その際、お好みの傾向を出来るだけ詳しくお書き下されば幸いです。

○誌上掲載を原則としておりますが、若し掲載を望まれない方がありましたら、その旨添記して下さい。御都合に依って分譲用又は助手介添え或はプレイのみの出演をして頂きます。その時の報酬については改めて御相談に応じます故御照会下さい。

○モデルに關してのお申込みは、年令、略歴の他に身長と体重をお書き添え願います。写真を同封下されば尚結構ですが、若しお手元に適当なものがなければ、なくとも差支えありません。

申込先 大阪市住吉郵便局私書箱第41号
暁出版株式会社編集部宛

〔塚本鉄三・撮影〕

緊縛と美の周辺

＜深田菊子＞



奇
譚
ク
ラ
ブ



十月号目次

〔昭和四十七年〕

〔第二十六卷〕第十号 通刊第二九六号

本文

「開股に惑溺する瞬間」	〔松本たえ〕	小林 平吉	(21)
懸賞告白『Mモデルを志願したい私』		高橋 道子	(22)
告白「十冊の奇譚クラブの雑誌」		笠井奈保子	(30)
告白「美と醜の谷間を埋める」		田宮 雅夫	(42)
連載・時代S小説『紫蘭の門』	(14)	風流極道軒	(44)
告白「真知子慕情」		中田 博	(60)
文献渉獵「女相撲書誌雑考」	(中)	雄松比良彦	(62)
告白「夫婦交換プレイ」に魅せられた私達の場合		早坂 信治	(72)
連載S大河小説『パロディ「花と蛇」』	(十)	山光 純	(78)
告白「夫に内緒の投書」		三浦 純子	(90)
連載小説「大噴火」	〔第四十九回〕	千葉 青鬼	(96)
女性切腹史「花の墓碑銘」		中康 弘通	(104)
臨月腹憧憬「夢に見た桃子緊縛」		高野 原美	(110)
三部作『不毛の愛』	(さすらいの夜と青い朝)	久留木 栄	(116)
告白「ゴム衣泥責めプレイの体験」		梅川 幸子	(128)
「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ	〔鈴木千鶴子の巻〕		
『東京の踊り子浣腸記』		塚本 鉄三	(132)
連載・奴隷妻小説「命預けます」	(二)	柴 利好	(150)
連載・アブ紳士行状記『M派交友録』	(31)	鬼山 絢策	(170)

緊縛と美の周辺……………深田 菊子
 菱縄と柔肌と猿轡●麻縄の拘束……………笠井奈保子
 のもとに●諦観と恍惚のポーズ……………前田真知子
 緊縛感にうめく一瞬！●女体の量感をいたぶる……………鈴木千鶴子
 浣腸器は柔肌を襲うか●浣腸責めに悶えた結果……………深田 菊子
 腋の下を擦らないで……………前田真知子
 顔、手首、腰部と足と●没我惑溺の表情●倒れさせたい瞬間！……………鈴木千鶴子
 浣腸責めのひととき●白肌は光のなかに●どこが痛いはいえ●カメラは狙いをつけている……………高村 浩子
 双丘をくびる●悦虐を待つ間●羞恥責めの序曲●蛆上の鯉……………笠井奈保子
 痛さに耐えて……………

S Mの分野に於ける……………平山 連浣
 福井桃子さんのM男に……………天野真曾雄
 飼育されたい……………西原 浩
 渡部好美様へ……………野村 浩二
 「好美のお便り」に答えて……………青山 三樹
 サディズムとマゾヒズム……………小田原一郎
 に対する誤解……………山井 二良
 緊縛許可証……………扇 由起夫
 フォト「わが家の妖花」……………北川まりこ
 鼻責通信「鼻責め法楽」……………江田 秀昭
 早坂夫人慕情雑誌……………佐野 寿
 M女の妄想「われは見世物」……………江田 秀昭
 奴隷志願の牡犬……………佐野 寿
 フォト「馬になりたい」……………

和装の似合う……………山添清子さまへ……………船橋 喬雄
 イメージ画「強盗遊び」……………志羽 利也
 サロン楽我記(第百回)……………辻村 隆
 編集部に対する或る通信……………鳥井 宣孝
 私でも「縛りのモデル」……………江崎 悠子
 に使ってもらえますか？……………梶 美鬼
 いよいよ充実の奇ク……………佐野みさ子
 S M代理妻……………編集部
 編「集部だより」……………高村 浩子
 M女通信……………世田谷一郎
 雨の降るある日のこと……………小杉 実
 奇クの「三人娘」を……………
 いじめたい……………
 「奇ク特派員記者」希望……………

懸賞入選告白……………村田 恭子……………(182)
 「ローソク責めの魅力と快味」……………
 S Mカメラ・ハント△深田菊子の巻△……………辻村 隆……………(186)
 『羞恥責めの実態』……………
 夫婦プレイの告白「北川楼」の裸女郎……………北川まりこ……………(211)
 「切腹女」の陶醉「傷痕」……………井上 則子……………(214)
 手記「マゾの放浪記」……………木村 洋子……………(222)
 読者通信……………編集部選……………(266)
 イメージギャラリ……………飯田ひろくに……………(26)
 坂旭(29)・「女賊の最期」岡たかし(52)・「橋口の仇花」須坂旭(52)・「愛縄押売」須坂旭(52)・「水入り寸前」椿寿郎(66)・「悲劇のヒロイン」一名古屋S生(82)・「出荷準備OK」飯田ひろくに(86)・「孤剣の図」室井亜砂路(107)・「危険な悦楽」志羽利也(159)・「羞恥」く(86)・「メカニズムルーム」岡たかし(125)・「関谷富佐子慟哭」室井亜砂路(178)・「扇風機をどうぞ」岩波大介(185)・「M感情発電」飯田ひろくに(213)





菱 縄 と 柔 肌 と 猿 轡

〈笠井奈保子〉



麻縄の拘束のもとに
諦観と恍惚のポーズ

＜笠井奈保子＞



緊縛感にうめく一瞬！

〈前田真知子〉





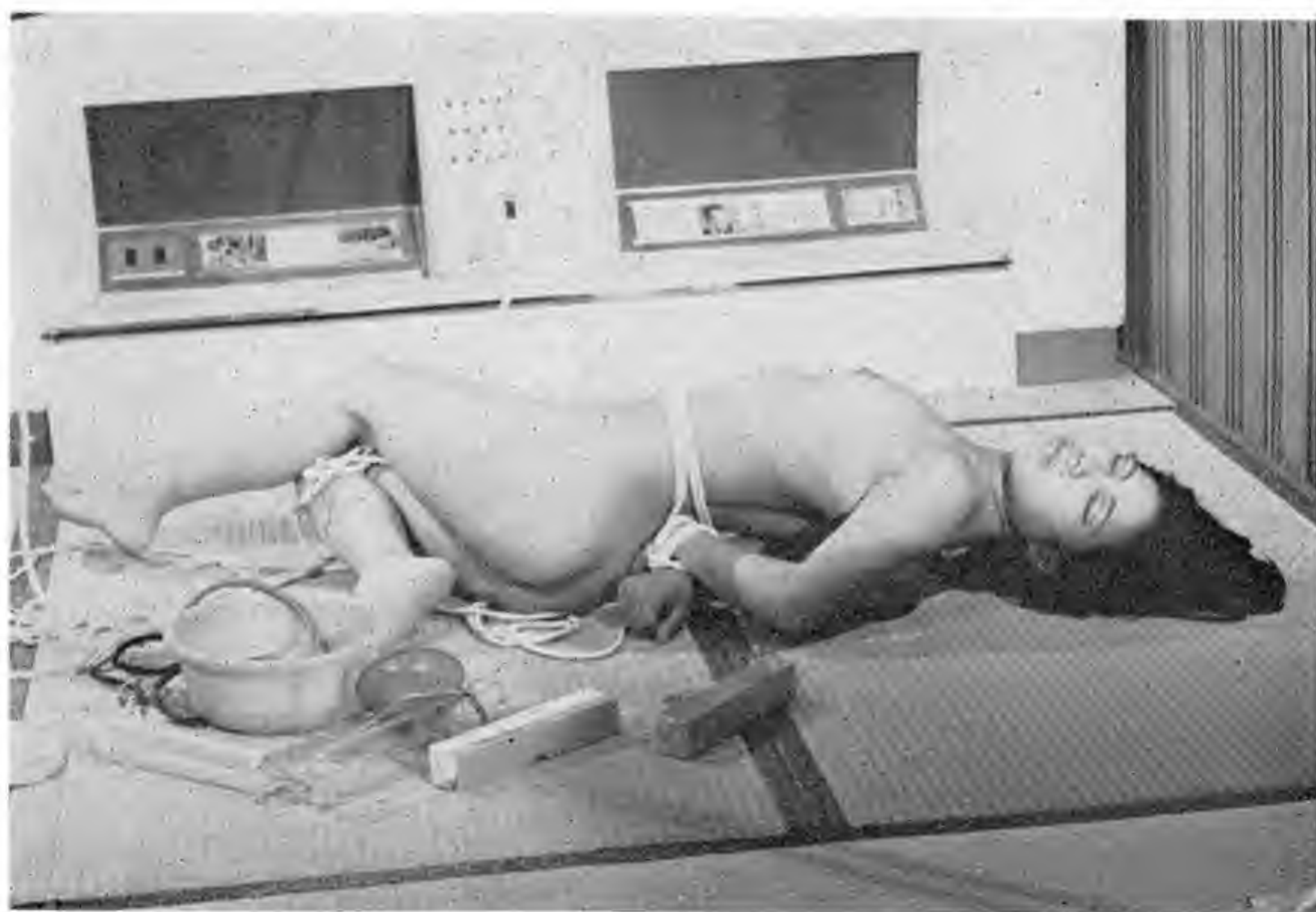
女体の量感をいたぶる

〈前田真知子〉



浣腸器は柔肌を襲うか

＜鈴木千鶴子＞



浣腸責めに悶えた結果



「腋の下を擦らないで……」

＜深 田 菊 子＞



顔、手首、腰部と足に。

〈前田真知子〉



没我、惑溺の表情

〈前田真知子〉

倒れさせたい瞬間





浣腸責めのあとのひととき

〈鈴木千鶴子〉

白肌は光のなかに映える





どこが痛いか、言ってみろ

〈鈴木千鶴子〉

カメラは狙いを付けている





双丘をくびる
悦虐を待つ間

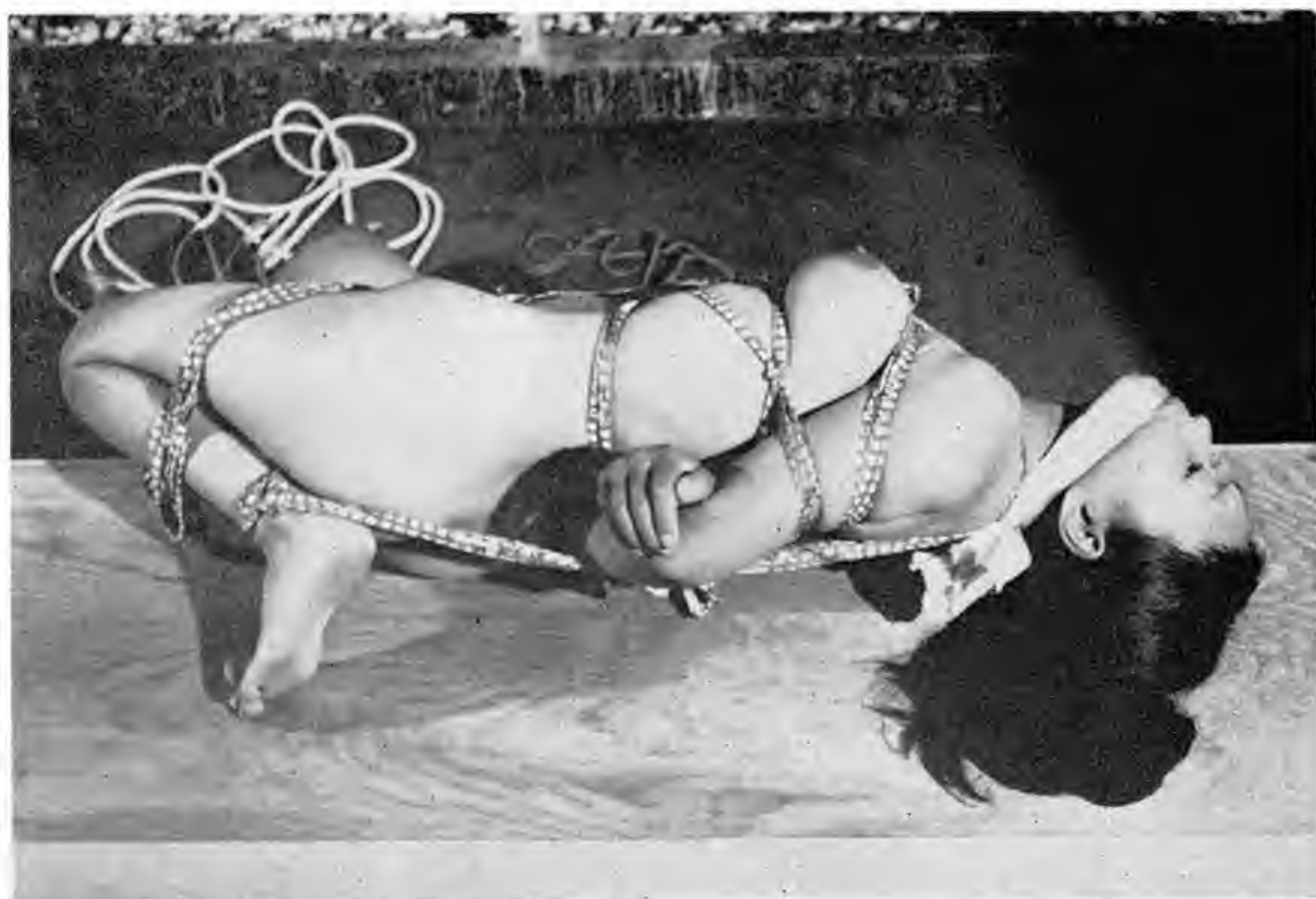
〈高村浩子〉



△高村浩子▽

羞恥責めの序曲

組上の鯉





痛さに耐えて……

〈笠井奈保子〉

奇

譚

ク

ラ

ブ

1972年10月号

＜第26巻第10号・通刊第296号＞



開股に惑溺する瞬間

……モデル・松本たえ……

縄という小道具を媒介としなかったならばこのようなポーズは、敢てとることは出来なかったであろう。そこに、縄の果たす役割の限りなき魔力が秘められているといってもよいだろう。縄はM女を束縛するばかりではなく、彼女を啓発し、そして、揺るぎなき愉悦

の花園へと誘い込んでゆくことになる。この愉悦のなかでM女は昇華し、やがて縄の魅力に対して屈服した結果、その唯一無二の信奉者として、高々と優勝の旗を、そのメインポールに掲げることだろう。

(静岡市・小林平吉・記)

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表



Mモデルを志願したい私

△私のM性は、どうして引きだされたか?▽

高^{たか}橋^{はし}道^{みち}子^こ

こんな長い文章を一度も書いたことのない私ですが、奇譚クラブの本の中に、原稿募集の記事が目にとまりましたので、私のM性がどのような感じでひきだされたかということを書いてみたいと思います。

それともう一つ、ヘモデル募集の記事がありました。私のような女の子でも大丈夫なものでしょうか。雑誌に出ているような事は一度もした事のない私ですが、ともかく、最近うつした写真がありますから、これを同封致します。

私は男性から見ると、とてもセクシーな感じがすると、よく言われます。うらないでも「あなたは外見は、とてもセクシーだ」と書いてありました。よく彫刻の先生がほしがる肉体をしている事は事実です。

二度ばかり彫刻のモデルのお仕事をした事がありますけれど、まだ学生(大学)です。で、ためらっています。もし宜ろしかったら、おつかい下さいませ。時間は夏休みに入ってからありません。

年令、二一才

身長、一五九センチ
体重、四八キロ

好みの傾向、自分でも、よくはわかりませんが、私の告白手記を読んでいただければ、おぼろげにでも、わかって頂けると考えています。(特にくすぐられる事に弱い)

最近でも、石田令子さんのように、縛りのモデルになりたい……という通信を寄せられる勇気のある方が誌上に登場しておられるので、私もモデルにアルバイトとして、なっても——という気持ちで、ついペンを持って

しまいました。

写真、同封します。自分では余りうまくとれているとは思いませんが、外に適当なのがありませんので、これを同封しました。

〈手記〉

「私のM性は、いかにして引きだされたか」

○

私と彼との出会いは、まったく奇妙なものでした。彼の経営する会社に、私が書類をとどけに行ったその晩、誰もいない会社の中で彼と結ばれてしまったのです。

どうして、彼と私が結ばれたのか、今になっても、私にもよくわかりません。ただ言えますことは、ふと気がついてみると、私は処女を失った女になっていたのです。そして、ハンドバッグの中には、彼がくれたお金が入っていたということでした。

その時の様子を思い出しますと、私としては、夢の中での出来事のように感ぜられ、何かキツネにつままれた様な不可解な気持でありました。

私がどうして、そのような形で処女を失ったか?……(愛していない男に……)

この事の心理的变化は多分、私が金銭的な面で苦労していたから——というたった一つ

の理由だったのに違いありません。それとも結婚の約束までした男との別れが、もたらし結果だったのでしょうか。

いずれにしても、この心理的变化の分析は後の事にして、私がどのようにして、M性を持つようになったか、或は彼の心理作戦に負けたのか、いずれにしても『ミーコのM性』が引きだされてゆく過程を書きたいと思います。今では、すっかりM願望の女に変化してしまいました『ミーコのM性』は、奇譚クラブに載っていましたM願望の女とは、また変わっていて、「ミーコ独特」のものだと信じております。

彼との関係は、一週間に一度、又は十日に一度という約束が自然に出来ていました。といますのは、二人の住んでいる所が、距離的に見ても、二時間位の場所にあったからです。彼の仕事も社長ともなれば自然と忙しく夜の時間のあいている日は、極めて少なかったし、私も私で週に一度位しか自由に時間を都合する事ができなかったのです。

そんなわけで、彼と逢えるのは、週に一度というのが限度でした。

それは街に北風の吹く寒い日でした。彼と二週間ぶりに逢うため、K町のいつもの喫茶

店へ来て待っていました。いつも彼が早く来るといふよりは、私の方が大てい三十分は遅刻するのが常でした。それでも彼は文句をいわずにニコニコして、いつも快く迎えてくれるのでした。

それなのに、今日はどうしたとか、約束の時間が、とっくに過ぎていくのに、彼の顔が見えないのです。

私は心細くなってきました。

彼が今夜、ここに現われなかったら、どうしよう——。そんな不安が胸をよぎり、いらしてきました。

「久しぶりの今夜をたのしみにしていた私なのに……」そう思って、しよげきっていました。やら、やっと彼のふとった姿が見えました。

「どうして、おそくなったの?」

私は顔を合わすなり聞いていました。

「うん、ちょっと買い物があったので……」

彼は言葉をにぎしていましたが、それでも私は彼が来てくれた事がうれしく、彼の太い腕にすがりつきました。彼は茶色の大型の紙袋をテーブルの上に置きながら席につきました。

食事が終わり、彼がレジで支払いをしているのをドアの外で私は待っていました。北風

が冷たく吹いているのに、彼はいくら待っても出てきません。待ちくたびれてドアを半開きにしてみますと、彼はレジの男の人（多分店の主人でしょう）と何か道路の方を指さしながら話しているところでした。

やっと彼が出てきました。私は、すぐいつものモーテルへ連れていってくれるものと思い歩きはじめようとしたら「ちょっと用事を思い出したので、待ってられないか」と言うのです。私は不満そうな顔をしました。

それを察してか、彼は、「すぐ戻るから」と言いました。私は彼が、このままいなくなっちゃうような気がして、何だか心配になってきました。

「何分で戻るの？」ってきいたら、「五分で戻るから……」と言います。

「五分も待つ。もうミーク、寒くて待てないわ」って、甘えたら、「じゃ、店のなかで待っていないさい」と、答えて、さっさと歩きだしました。「早くしてネ」私は彼の後姿へそんな言葉を投げかけていました。

私はまた店の中へ入り、さっきのテーブルの所で待つ事にしました。ウェイトレスが熱いお茶をついでくれました。お客は入れ替り入ってきます。アベックが多いです。

私は何もすることがなく、手持ち無沙汰でした。レジの人が時々私の顔をジッと見るようです。私は目のやり場に困って下をむいてしまいました。

さき程、彼と別れるとき、「これを持って……」といって私にわたした茶色の紙袋に目がうつりました。袋の口は、ただ折り返しただけで封はしてありません。

何が入っているのだろう——と、のぞき込んでみたら一冊の本が入っています。

ああ、本なら丁度よかった。彼を待っている間に見ていよう……と、そう思って、なにげなく取りだしてパラリとめくってみたら、驚いた事に女の人の縛られている写真が出ているではありませんか。

びっくりするより、おかしく思いました。彼がこんな本を、どこで買ってきたんでしょう。それにしても、物好きなんだなあと、思いました。

女の人がハダカで縛られている意味が何をするのか、私にはわかりませんでした。

そして、これは一体、何の本だろうかと思ひ第一ページを開けてみました。大きな字で「マゾ願望の女」渡部好美——という文字が私の目にとまりました。

ああ、そうか、こういうことをするのが、マゾなのか——。

ひょっとしたら、彼は今夜、私にこの本を見せて「こんな遊びをやるうよ」なんて言いだしはしないかと心配になってきました。

もし彼に、そんなことを言われたら、すぐ断ろう——と思う反面、こんなにスゴク縛られるのじゃなくて、手首と足首だけ、ほんの軽くだけだったら縛られてみたいような気がしないでもありませんでした。

私は一人でアパート暮らしをしているので、お風呂は大衆浴場へ行かねばなりません。すると、体に青アザがついたりすると困ってしまいます。彼にそんなことをしようといわれたら、きっぱり断わらないと大変なことになる——私は断わることにきめていました。

二週間前に彼と逢った、あの夜のこと。

何回か結ばれたあと、二人でお茶を飲みながら部屋にあったテレビを見ていました。テレビといっても、このモーテル専用のチャンネルがあつて、そう……、あれは2チャンネルだったでしょうか。ポルノ映画を上映しているのです。テレビの脇に上映時間を書いてあるのを彼が見て2チャンネルに合わせたのです。

外国映画でした。私は、ものうい気持で画面に、ぼんやりと目をやっていました。ところが、ピシッというムチの音がしましたので私はハッとして我にかえりました。

女の人が手首を揃えて縛られ、ぶらさげられていました。もちろん全裸で……。

男の人が手にムチを持っていて、「私の言うことを聞くまで、ぶつ」と言っているらしいのです。

全裸で、しかも皮のムチで男の人に力いっぱい、ひっぱたかれたら、誰だって悲鳴をあげるにきまっています。

このシーンを見ていた彼が、「ミッコもやってやろうか」と言いましたので、「イヤッこわいッ」と、思わず彼の胸に顔をうずめていました。画面を見ていたとき、この叩かれている女の人が、もし自分だったら……。

そう思うだけで、身がすくむようでした。

彼は寝そべっている私を起こして、平手で私のお尻を叩きはじめました。テレビのムチの音と共に、私のお尻にも平手打ちの音がしました。叩かれた所が熱を帯びているようなのが、見なくても私によくわかりました。

「イヤ、イヤイヤ」と、私は無意識に叫んでいましたが、しびれるような痛さは、別段い

やでもありませんでした。でも、私はこのようなことをされるのは、はじめてでした。

彼が私の首すじにキスマークをつける時、強く肌を吸います。乳首に唇を当て、痛い程強く吸って歯を当てたりします。私は頭がしびれて気が遠くなる様な快感に襲われます。

前にも、私の足の指を噛んだり、キスマークをつけながら歯型を残したりしました。でも、今日のように、むきだしのお尻を平手で叩かれるのは始めてでした。

私は、もう身体中に汗が、うっすらとにじみ、燃えあがるように熱くなっていました。

「イヤッ、ヤメテ……」

何度となく口走ったにも拘らず、彼の平手打ちは一向に、やみそうにありません。

私は、こんなになされている自分が恥かしいので、自分への気やすめに「イヤ、イヤ」と言っていました。もし彼が私の願いを入れてお尻への平手打ちをやめたとしたら、私はきっと失望したことでしょう。

彼の手は容赦なく、私のお尻をピシヤリ、ピシヤリと叩き、私はただ、子供のように痛がり、イヤイヤをするだけでした。

やっと平手打ちがすんだかと思えますと、まるで狂ったように私の身体の上におおいか

ぶさり、私の足の指を歯できつく噛みはじめました。余りの痛さに、私は思わず悲鳴をあげてしまいました。

私の足から、一番弱いと思っている腰のあたり、それに腕、胸——と、あらゆるところを歯できつく噛むので、私はころげまわって逃げました。目に涙をうかべて痛さをこらえながら、「イヤ、イヤッ」を連発しながら、彼にしがみつきました。

噛まれた個所がズキンズキンと痛く、そこだけが、ぽつと火がついたように熱く燃えていて、私も今までになく激しい興奮をしていたとしか言いようのない気持でした。

そういえば、今夜二人で食事をしていくときに、「この前の所、あとになった？」と彼が聞いた事を思い出しました。私は、「やっ」と、なおったわ」と答えました。とにかく、彼に身体中を噛まれてからの私は、昼間でも彼の事を思い出し、毎日でも彼に逢っていた気がして仕方がなく、そして彼に甘えたく無茶苦茶にされたかったのです。

○

そんな事を考えていたら、彼がコートのポケットに両手をつっこんで戻ってきました。何も買ってきた様子がないので、ここで

……イメージギャラリー……『早く打って……』飯田ひろくに……



私やレジの人に聞かれてはならない話を、わざわざ電話ボックスまで行ってかけてきたのかなあ———と感心したりしました。

彼に寄り添って歩きながら、「どこへ行っ

てきたの？」と、そっと聞いてみました。

彼は、つっけんどんに「ちよっと……」と言った言葉を、にがして言います。この時は随

分、冷たいんだなあと思い「この本返すわ」

と、紙袋を渡したら、「この本、見た？」と聞きます。「うん、ちよっとネ。だって退屈だったもん———」と答えたら、「こんなの、どう思う？」と訊ねます。

「うーん、ちよとやあねえ……」と、テレかくしを笑いでかくしました。彼はそれでも、本の感想を、しつこく聞いてきます。

「あんな本、生まれて始めてみるワ」とか、「こんな本、買う人ってあるかしらネ。世の中には、物好きな人もいるわね」とか、

「男の人って、いやらしいワ。あんな本みてよろこんでるんだもん……」とか、

「こんな事をする人って、少し頭がおかしいんじゃない。第一、あんな事をする人、日本の中にいるのかしら。外人なら変わった人もあるから一人や二人いるかもしれないけど」といった風に勝手なことを喋りました。

彼はニヤニヤしながら、こんな事を口走っている私を見下ろしているのです。

やがて、行きつけのホテルに着きました。

係の人が私達二人のための夢の部屋のカギを開けてくれました。部屋の中へ入って私はいそいでドアのカギをしめました。早く、二人だけになりたかったのです。

私はお茶の支度をしながら「お茶飲む？」

とききました。すると彼は私のそばに寄ってきて、「あとで……」と言いながら、私を椅子から立たせ、きつく抱きしめキスをしました。私はもうキスをされただけで、頭がしびれ、いや、頭だけでなく、全身がしびれて立っていられなくなりました。

夢心地でいますと、彼は「こっちへ来てごらん」と私を誘って、さっきの本を出し、ペー지를パラパラと、めくりました。

女の人ハダカで縄で縛られている写真を指さしながら、「僕たちも、こんなのをやってみる？」と言います。

「そらきた」と私は思い「イヤッ」と、きっぱり断りました。

「だって、あとがつくもの。そしたら、お風呂に入れなくなっちゃうから、イヤ。この前だって、一週間目だっていうのに、まだ青アザが残っていたもの。やっときれいになったのが二日前よ。だから、お風呂へ行ってシャンプーすることも、できやしないんだもの」「お風呂なんて、一週間に一回位でいいんだよ」と無責任な事を言います。

私は三日に一回、または四日に一回はシャンプーするし、お風呂は毎日、入らないと気持ちが悪いです。ましてや一週間も十日も、

お風呂に入れないなんて、考えただけでも不潔な感じがします。

そんな事を考えますと、私は身体に青アザができるのは困るのです。

「どう？ 紐でしばっていい？」

彼は尚も強引に迫ってくるのです。

「紐なんて、この部屋にないじゃない」

「それが、あるんだよ」

「じゃあ、見せて——」

彼はコートのポケットから麻縄をとりだして見せました。

「いやーだ。こんなので縛られたら、縄のあとがつくし……」

「じゃあ、仕方がない。よすよ」

彼は縄をコートのポケットに、しまい込みました。私は少し、がっかりしました。

仮に私のアパートの部屋にお風呂がついていたなら、大衆浴場に行く必要がないから、私はOKしていたかもしれないのです。

そう思いながら、もし彼に縛られたら、どんな気持ちになるだろうかと思いました。

私は彼に抱きかかえられてダブルベッドへ運ばれました。

私達の場合、一回きりということはありませんでした。時には六回も数えた時だってあ

ります。四、五回というのは常のことで、私はそのたびに、溜息をつき目には涙さえうかんでくるのです。そして、自分でも、わけのわからない呻き声を洩らしてしまうのです。

どうして、そんな声が出るのか、わかりませんでした。私の場合、声を出すんじゃないと言われたら、もう気が狂いそうになってしまいます。声が出せるから、まだいいので、出さなかったら、私の身体は一体どんなになっってしまうでしょう。

声を出しては隣の部屋の人達に聞かれてしまうような部屋で、二人の関係を持ったとしたら、声を出すのを我慢するのが苦しくて、苦しくて、私はきつと狂ってしまうんじゃないかと思っています。

彼とこうしてホテルの一室で逢うようになってから、今日で何回目になるでしょうか。多分、十二回か十三回目でしょう。私の女としての成長は、ずいぶん早いものなんじゃないのかと思っています。

五回目位で私は女の本当のよろこびというものを知りました。今まで、男に抱かれる女の前よろこびなんて、あれは小説の中での誇張したお話だと、信じて疑わなかった私ですのに、今では男に抱かれて、よろこびの声をあ

げているのです。

私は幸せでした。満ち足りた気分でした。

今夜も一回終わったあと、彼から「手を縛らせてくれないか」と言われたとき、ただなんとなく、素直に「じゃあ、軽くネ」と言っ
てしまいました。

彼は私の手首をうしろへ回して縛り、おお
向けに寝かしました。彼は手と足をいっしょ
に縛りたかったらしいのですが、私は最初だ
からということ、手首だけにしてもらいま
した。

足が自由なので私は安心していました。

彼は責めてきました。というよりも、私の
一番弱い所、つまり、首すじと脇腹に攻撃を
しかけてきたのです。

私は足の裏、首すじ、顎の下、脇腹、太股
のツケ根なんかをサワラレルだけでも、ピク
ツとするほど敏感なのです。

両方の手首を縛られて仰向けにされたまま
私の弱い所を責められると、私はもう苦痛と
快感が入り混じって辛抱が出来なくなり、奥
歯をキリキリと噛みしめていました。

彼は私の身体を、前と同じように噛みはじ
めたのです。この前は自由が手にありました
から、彼の胸を手で押しあげ、幾分でも彼の

顔を私の肌から離すことができたのですが、
今度は、そうはゆきません。

手首が背中中で縛られて自由がきかないとい
うことが、これほどまでに私をやるせなくし
てしまうのでしょうか。

私は苦痛にたえかねて、身体を右左にくね
らせつつ、うめき声をあげ、とうとう声を出
して泣きだしてしまいました。泣きだすとい
っても、それは普通の痛さとは違って、痛さ
プラス快さで、しびれそうでした。

彼は、そんな私の泣き顔を、じっと見てい
ます。私は恥かしくて仕方なかったけれど、
両手の自由がきかないので、手で顔をかくす
こともできません。

彼は、わざと私をじらすのです。私が燃え
に燃えているのを、よく知っていながら、そ
の要求に応えず、私の口からじかに、それを
言わせようとするのです。

私は自分の身体が、今どのように変化して
いるか、それを、すっかり彼に知られてしま
い、とても恥かしいのに、更に、その事を口
に出して言えと、彼に強要されても、言える
筈がありません。

彼は私が、そんなあけすけな事を言えない
女だということをよく知っていて、こない

たぶりを楽しんでいるのです。

でも、こんな彼のじらし方は、長く続きま
せんでした。濡れに濡れた私の方が辛抱でき
なくなってしまうのです。とうとう、彼の
強要する通り、「×××××をして下さい。お
願いします」と、言わされてしまいました。

私は、この時程、彼を大切な人だと思った
ことはありませんでした。

私はうれしくてたまりませんでした。身も
心も、完全に彼に屈服したということが、こ
んなにも私を変えてしまうものでしょうか。

その時、私は「なんでも言うことをきくか
ら、私を捨てないでネ」と、何度も何度も彼
に懇願していました。

普通、今までの私でしたら、彼のそばで寝
ているというだけで満足でしたのに、今夜は
どうしてか、自分から進んで、
「抱いて、きつく抱いて……」

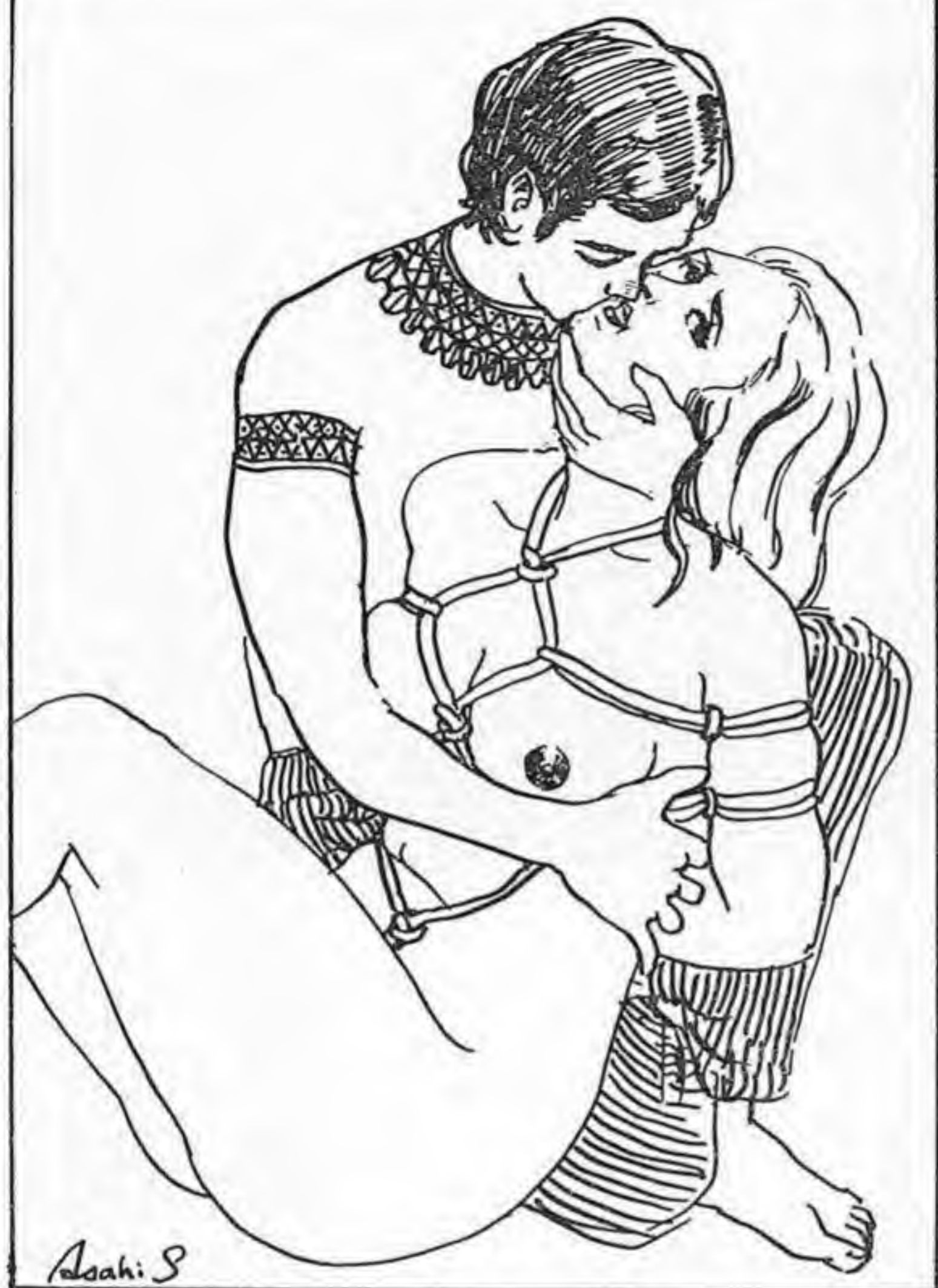
そう言いながら、彼の胸に顔を埋めて、ま
たしても泣いてしまったのです。

私は幸せでした。彼にどんな事をされても
私は彼から離れられない——と、この時、心
にかたく、きめていました。

でも、こんな私の願いにもかかわらず、彼
とは別れなければならなくなったのです。

「逢うは別れの始め」とは、よく言いますが、ようやく春が訪れようとした頃、彼はもう、私の前には姿をあらわさなくなっていたのです。その事を、今ここで書くのは、余りにも悲しくて、ようペンを持ちません。

○
そんなわけで、初めに書きましたように、私はアルバイトでMのモデルをしてみたいと思いたったわけです。もちろん、セックスを伴ったSMプレイでもかまいません。



……イメージギャラリー……

『愛縄押売』……

須坂

旭

Asahi S

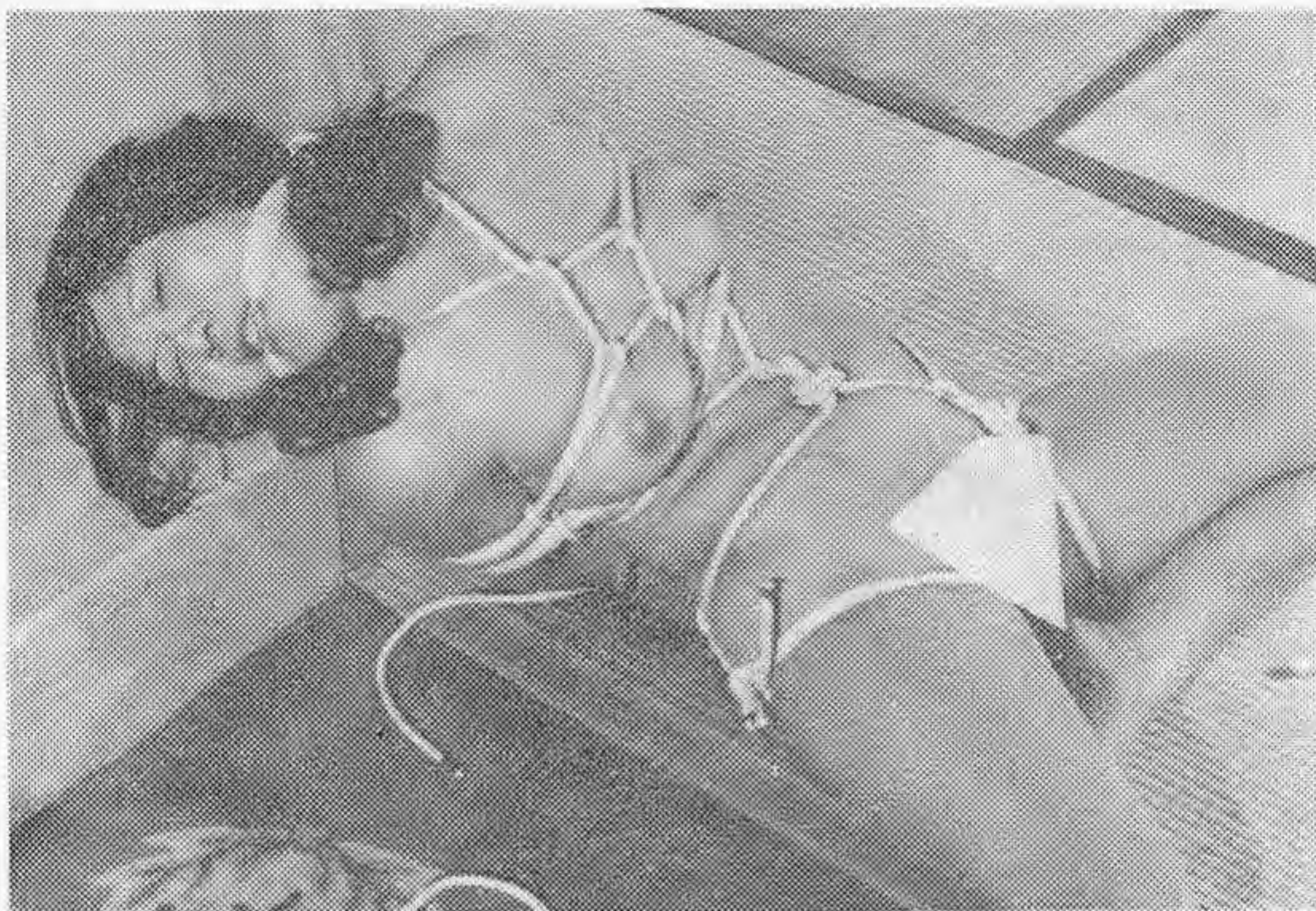
私のこの索莫とした気持を、幾分でもやわらげる事ができたら、うれしいですし、それによって、奇クの一頁でも、飾れる事ができたら、読者の皆さまにも楽しんでいただける事と思います。

こんな私が、果たしてM性を持っているのかどうか、自分でも、よくはわかりません。この私の告白をお読み下さいました読者の方々の中で、この点について、ご意見がございましたら、どうかお教え下さいましたら幸せに存じます。

彼は私より二十才以上も年上でしたので、私はどちらかといいますと、私を愛玩物として可愛がって下さったうえ、何事についてもリードして下さいような方を好みます。

私は七月の下旬から九月の中頃まででしたら、いつでも身体はあいています。でも、大阪へは一度も行った事はなく、と言いますより、一人で長い旅をした経験が一回もありませんので、どうか、私の住んでいますアパートの近くまでおいで下さいますよう、お願いいたします。

なお、同封しました写真の誌上掲載はかまいませんが、もしお使用になりません節は、どうか、お返し下さるようお願いいたします。



告

白

十冊の 奇譚クラブの

雑誌

笠井奈保子

私は自分が大学ノートに書いていた自由日記帳を奇譚の七月号と八月号の二回、のせてもらいました。九月号にものせてもらっているかもしれない。

そして、そのあとも、書いた日記帳を見せるように言われておりますが、書こう書こ

うと思っても、なんだか書けなくなってしまいました。誰に見せるあてもなく、自分の好きなままに書いているときは、面白いほど鉛筆が走っていったのに、雑誌にのせられる人に見られる……ということを意識しますともう、なかなか書けません。

こんなことを書いては……という気持が先に立ってしまうのでしょうか、書こう書こう書かなくてはいけない……と、気ばかりあせ

っても一向にペンは先へ進みません。

それで、とうとう私は、自由日記帳を書くのを、やめてしまいました。というよりは、書けなくなってしまったのです。

そんなとき、ふと、自分の机の上に目をやると、十冊の奇譚クラブの雑誌をみつけたのです。一月号は、お客さんが置き忘れていったのを手に入れたのですが、それがきっかけとなって、塚本鉄三さまを知ったのです。

二月号からは、私が書店で探し求めたものが、色とりどり、ずらりと並んでいます。最近号では編集部から頂いた分もあります。昨年の十一月号と十二月号は、塚本さまから分けて頂いたものです。

十冊の雑誌が、ずらりと並んでいるのは、まことに見事なものです。こうして揃えて積んでみますと、やはり、一月号と二月号、それに七月号と八月号を一番、何回も読み返したものですから、手垢もつき、角っこのところなんかが、そりかえったようになっていきます。それだけに、なんといっても、なつかしい奇クの一月号。

塚本鉄三さまの書かれた文章「全日空機で来た女」の中に出てくる松本たえさんのシャシンが、私が初めて心を動かされた『縛られ

た女』のシャシンになります。奇ク一月号にのっている、この松本たえさんのシャシンによって、私は今までの眠りが目覚めさせられ一ぺんに縛られた女の人のシャシンが好きになってしまったのです。

なんで、こんな縛られた女のシャシンが好きなのか、自分でもよくはわかりません。奇

譚クラブという雑誌を見るまでは、女の人が縛られるなんて考えてもみなかったのです。それが、松本たえさんの全裸で縛られているシャシンを眺めて、はじめて、自分の胸にドキリとするものを感じたのです。

この世の中に、こんな世界もあったのか、と、目を開かせられた思いでした。そして、





こんな雑誌が発行されていることに、驚きの目をみはりました。そして、どうしても、こんなシャシンを見たいものだと思いました。

私は清水の舞台から飛びおりる思いで、塚本さまに手紙を書いたのです。

そのとき、返事をもらえるなんて、自分でも余り期待していなかったのです。姉の家に

寄宿したり、義母^{はは}のしている寿亭という小料理屋の手伝いをしたり、それに、彦根市に住んでいる父のもとへ、お正月で帰ったり、という不安定な生活をしていましたから、寄りついたところへ根を下ろすというような、浮草的な気持でいたのです。

それが、思いがけなくも、折るかえすよう

にして、すぐお返事をもらい、生まれてはじめて、じかに、縛られた女の人のシャシンを見せてもらうことが出来たのです。

そのときの私の驚きもさることながら、今までの浮草のような生活をつづけてきた私にとって、一つのよりどころが出来て、その点でも大変うれしいのです。

私の心の中にある——秘密の玉手箱——に大切にしまっておける物が出来たわけです。

今まで、自分でも気づかなかったナニモノかが、徐々に形をつくって、粘土細工のように目の前にあらわれてきたような気持なのです。自分の心の中に、このような甘美で妖しい悪魔が住んでいたとは、今の今まで、知らなかったのです。

それが、奇クの一月号を妙な機会から手にすることが出来て、それがきっかけとなって見てはいけないモノを見てしまったのです。

なぜ、私が、このように同性の縛られたシャシンに心がひかれるのでしょうか。自分でも不思議に思います。

でも、自分でも、その理由はわからないのです。そんな理由などを考える前に、直接、胸にズンと、ひびいてくる激しくて熱いモノが私の全身を燃え上がらせてしまうのです。

ただ、わけもなく、頬がほてって赤くなり胸がワクワクしてくるのです。

なつかしい奇クの一月号を手にするのは、なんとなく、そら恐ろしく、ページを開くのも憚られるのですが、その反面、見たい、見たい——という強い気持が、心の底から湧いてきて、わななく指で、自然と開いていってしまうのです。

余り書店へなど、行ったことのない私が、もし、寿亭のお部屋で奇クの一月号を見つけなかったとしたら、決して、今のようない気持にはならなかった——と思います。

今、午前四時半です。

昨夜から降っていた雨は、まだ止まずに、時々激しくなったり、時には小降りになったりしています。

町工場が近くにあるせいか、モーターの回転するような音が、こんな朝早くから、私の坐っている机の前の硝子窓をふるわせております。

私は、自由日記が書けない埋め合わせに、今、拙いペンを走らせています。気ままなので、気が向けば、夜通し起きていることであるのです。昼寝できるときはよいのですが、出来ないときは眠くって、仕方ありません。

ん。こんな私を、お嫁にもらって下さる方であるでしょうかしら。

私は二十一。

今年中に結婚したい——と思っています。とても二十三まで待てそうにありません。もし、こんな私でもよい、という方があったら、今すぐにでも、お嫁に行きたい。

といっても、お嫁入りの支度は、なにもしません。お茶も、お花も知りませんし、学歴も、やっと高校を出ただけ——。

それに、貯金が少しあるだけの貧しくて、魅力的でない一人の女の子。

とりえは身体が丈夫なこと。少しふとり気味なのが悩み。これでも二年前から比べたら



大分、痩せた方です。

シャシンでごらんになった通りのスタイルと顔です。今では、縛られることは大好き。はじめのうちは、縛られた女の人のシャシンを見るのが好きでした。それが、どうしたとか、自分が縛られることが、大好きになったようです。

ですから、もし、そのようなSMに関心のある男性の方だったら、私の彼として似合うのじゃないか——と、考えています。

お酒は、きらいです。煙草は、ようのみません。甘い物は好きです。一食や二食は欠食しても、死ぬような泣き声は立てません。こんなことを書いていて、私は急に恥かしくなってきました。なんだか、求婚広告を出しているみたいで——。

奇ク六月号で、私は初めて誌上に登場し、生まれて初めて縄で縛られた自分の姿を、皆さまの前に見せたのです。

塚本さまのペンで、そのときの私のことが精しく書かれています。あの『春宵一刻値千金』という文章は、そっくり、そのときのままです。

自分のシャシンを見て、私は面映い気持ちになりましたが、なんとなく自分のハダカが縛ら



れて、晒し者になっているみたいで、気持ちがよかったです。こんな気持ちを、自虐とでもいうのでしょうか。

それと、もう一つ、自分の経験したことを相手の方に、このように巧みに書かれてみますと、「ああ、ルポの記事というものは、こんな風を書くものかなあ」というコツみたい

なものを、感じました。

といいましても、いざ、自分がエンピツを持って書いてみますと、とても書けそうにありませんが……。

このときは、私も初めてでしたし、もう、何が何だかわからず、むやみに、顔ばかり真赤になってしまって、その赤くなった顔をか



くそうとして、更に顔を赤く
はてらせてしまう有様で、汗
びっしょりでした。

ですから、縛られていると
きは、恥かしさいっぱいで、
殆ど夢中で時を過ごしてしま
いました。

それが、終わってしまって
家に帰って思い返してみます
と、そのときの快感が胸いっ
ぱいに溢れてきたのです。

もう一度、縛られてみたい
——
もう一度、あんな目にあっ
てみたい——

そんな思いが、もう矢も楯
もたまらず、心の内に溢れて
くるのです。

今、六月号の雑誌を開いて
読み返してみますと、あのと
きのことが、遠い遠い昔の出
来事のように、なつかしく、
甘酸っぱい思い出として、胸
によみがえってくるのです。
泣きたいような切なさで、

私の胸をチクチクと刺戟するのです。

私を、このような切ない思いにさせて下さ
る方が、私の彼氏であつたら、私はどんなに
幸福なことでしょう。

どなたか、私の前に、そのような方が現わ
れないでしょうか。

私は何度も何度も、このルポルタージュを
読み返してみ、文章には書かれていないウ
ラにある魔物のような魅力を手さぐりして
みるのですが、私の乏しい想像力をもってし
ては、それは、とても手中に握むことは出来
ませんでした。

何だろうか——

私は、その雲のような、泡のような、とり
とめもない甘酸っぱい思いを掴みたくて一生
懸命でした。

でも、何遍、読み返してみても、それは、
私の前に姿を現わしてはくれませんでした。

ただ、甘く切なく、そして泣けてきそうな
思いだけが、心の底に残るだけでした。

それは、あのルポの文章とシャシンが、か
もし出すハーモニーの中に、私が実際に経験
した思い出がミックスされて、出来上がった
料理を味わっているようなものでした。

私は、いらだたしさが先に立って、もどか



しい気持を、なんとかまとめたいものだ、
頂いた自分のシャシンを、例の玉手箱の中
から取り出して眺めてみました。

こんなところを撮られたのかしら——と、
自分でも予想外の場面が出てきます。

後手に縛られた背面を見せているのなんか
は、自分では、その背中の方は見えないので
すから、向こうむきになっている女性（すな
わち自分のこと）が、どのような顔をしてい
てどのような気持でいるかを、想像するのは
大変、興味があります。

そして、結局、その女性が自分であると、

思い至ったとき、そこに露出症的な快感が胸
をジーンとさせるのです。

一枚、また一枚と、自分の縛られたシャシ
ンを、めくりながら眺めていますと、きわめ
て複雑な気持に襲われます。

そんな自分のシャシンを一人で、じっと眺
めて悦にいつているということは、非常にヘ
ンなことだと一般の人には思えるでしょうし
実際にヘンなのです。

私自身も、そう思います。

それでも、私は見たいのです。

他の女の方の縛られたシャシンを見たかっ

た私ですが、この頃では、自分のシャシンも
同じように見たいのです。いや、最近では、
自分のシャシンを見る機会の方が、はるかに
多いように思います。

これは、どうしたワケでしょうか。

私には、それが何故だか、わかりません。
十冊、積まれている奇譚クラブの雑誌の中
で次に私が手にしたのは、やはり、私の書いた
自由日記帳の「私の玉手箱」がのっている
七月号でした。

六月号で、始めて自分のことを記事にされ
たのも驚異でしたが、七月号で自分の書いた
日記が、このように整理されて雑誌にのった
のは、更に驚異でした。

大学ノートに、エンピツで書きなぐった日
記が、このように立派に活字になるなんて、
私には夢にも考えられませんでした。でも、
実際に、こうして雑誌になってみますと、誰
に見せるアテもあるわけではなく、というより
見せないために書いた自分の日記が、白日の
下に晒されたということで、心の裡を覗かれ
たように恥かしかったです。

身体の外側ばかりか、日記という心の秘密
を暴かれたことで、私にとっては、凄いショ
ックでした。強くすすめられたことに渋々従

ったとはいふものの、このような心の重荷になるとは、考えもしなかったのです。

私としては軽率だったと悔まりました。

何故、あのとき、きっぱりとお断わりしなかったのだろうか——かと、後悔しました。

それなのに、今、七月号を手にとって、読み返してみますと、そこに、自分であって自分でないところの別人の日記が、活字になっているようで、興味が持てたのです。

自分の姿を自分で眺める——

これは二重の楽しみがあるのです。

時間の経過が私の心に、このような変化を与えてくれたのでしょうか。

それに、七月号では、私の大好きな松本たえさんのシャシンが沢山のついていたのは、うれしかったです。

塚本さまの筆で、「観世音菩薩の化身」というルポ記事が書かれているのは、少しねたましかったけれど、六月号では、私も書いてもらったのだから、仕方がないと思います。夜は、すっかり明けてきました。

疲れているのですけど、目は冴えて、少しも眠くないのです。

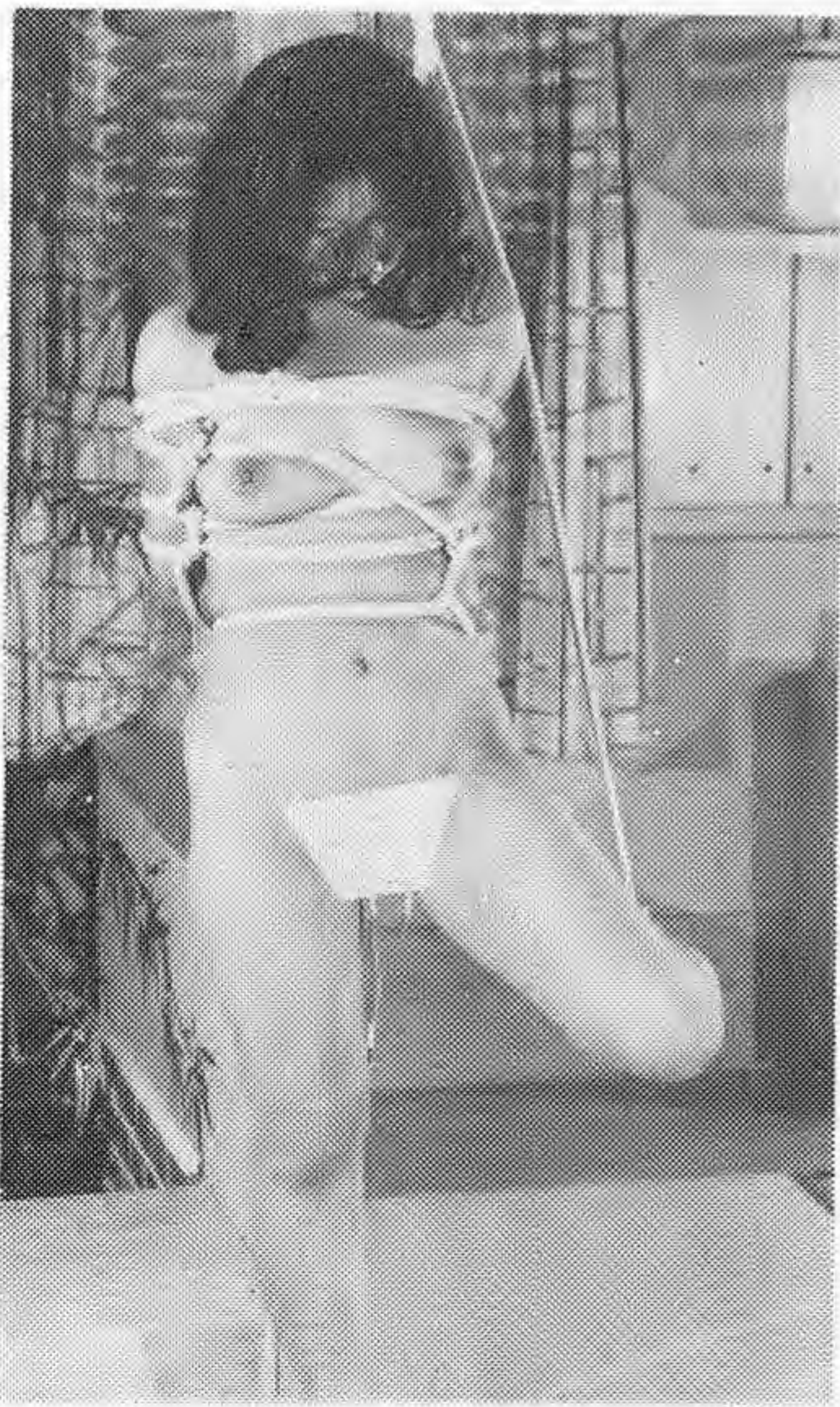
自分のシャシンを眺めていますと、太股のところや胫のところが、こんなに太かったの

かと自分でも驚くほどのことです。痩せているとは考えてはいませんが、こんなに肉がついているとは、ちょっと、自分でも予想外なのです。

やせたい、やせたいと思って、減食したり美容体操をしています、余り効果はありません。運動不足なのと甘い物が好きなのが影響しているのかもしれませんが、松本たえさんくらいに痩せたいものだ、常々思っている

のですが、七月号の七六頁や七七頁にのっている自分のシャシンを見ていますと、ほんとうに肥っているなと思います。

七月号の口絵にのせてもらいました私の四枚のシャシンは、やはり、そのときのことか思い出されて、なつかしいです。口にかまされた手拭いは、叫び声を放つのを防ぐためでしょうが、ううう——と息苦しく、唇の端が締めつけられますので、思わず充血してしま



います。

口をふたされること
が、なぜ、私をこのよ
うな気持ちにさせるので
しょうか。

縄といい、手拭いと
いい、まるで私の心の
奥底を見すかしたよう
に、土足でドカドカと
荒しまくってゆくので
す。

まだまだ、私のこの
白い肌を赤く染めて、
羞かしめる小道具があ
りそうに思えます。そ
れがなんであるか、今
の自分にはわかりませ
んが、これから、それ
は自分の身体で、じかに知らさせるのではな
いだろうか——と、本能的にそう感じます。

私の知らない未知の魅惑が、私の目の前に
立ちはだかつているような気がするのです。

今、手元にある奇クのなかで一番新しい雑
誌の八月号にも、四枚の私のシャシンをのせ
てもらっています。



この自分のシャシンを眺めてみて、真実、
恥かしい——と思いました。

前田真知子さんと深田菊子さんと比べてみ
て、見劣りのする自分の身体に、やりきれな
いものを感じたのです。これが自分の身体な
んですから、どうしようもないのですが、で
も、やはり、自分の身体を見るのは、イヤな

のです。なくなっしてほしい
——とさえ思いました。ほ
んとうです。

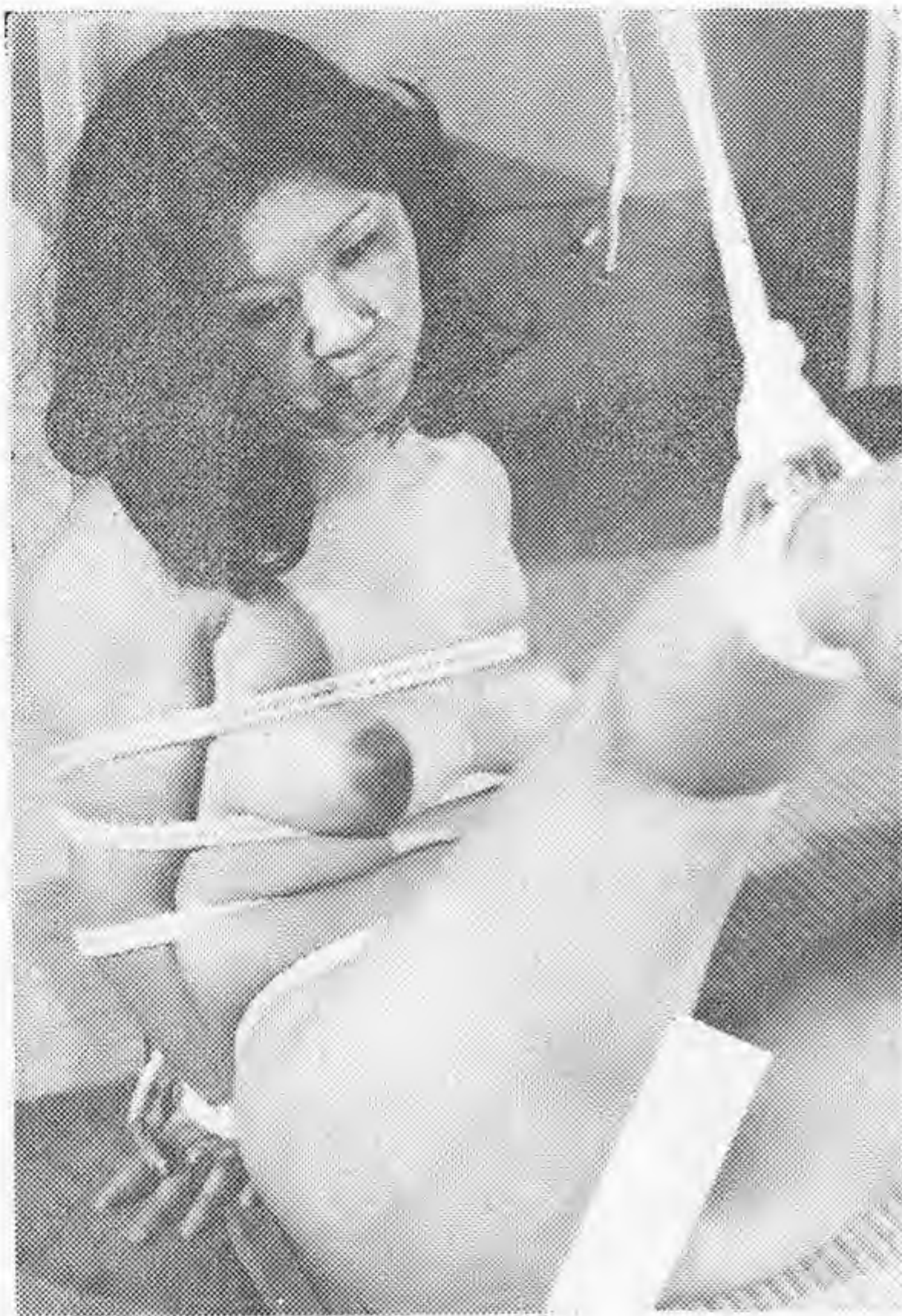
八月号には、『七つの土
鈴と玉手箱』という私の自
由日記の抜粋がのっている
ので、なんとなく救われた
気持です。

こんなに沢山のシャシン
をのせてもらって穴があれ
ば入りたいような気持がし
ます。その上、晴れがまし
いような気持がします。日
記の文章が、もっと上手だ
ったらいいのですけれど、
なにしろ、雑誌にのせても
らえるような文章は書いた
ことがないものですから、

仕方がありません。

塚本鉄三さまの「私の縛った思い出のM女
たち」は、大変興味を持って読ませていただ
きました。こんなに沢山の女の人達を縛って
シャシンを撮ってこられたのかしら——と驚
きました。

若くて美しい方々が沢山おられるのに、び



っくりしたり、悲観したり、複雑な気持で小さい胸を痛めています。若さという点では、私も若いけれど、その他の点では、他のM女の方たちが、みんな上みたいに思えて、この自分が、いとおしくて淋しいです。

「これを読んでみたら——」

と、塚本さまから、奇クの12月号と11月号

を頂いたのですが、その12月号に、塚本さまの書かれた△M女の生態▽というカメラ・ルポが、のっています。私に対する参考にと、わざわざ下さったのでしよう。

『マゾ』という言葉の意味さえ、よくは知らなかった私。その本当の意味は、これからもなかなか、わからないでしょうが、この奇ク

十二月号に掲載されている△M女の生態▽という文章は、私に対して、おぼろげながらも、『マゾ』という言葉をも、理解させてくれました。

この文章の中に出てくるボインの大きな女性の気持も、なんだか、私にもわかるような気持がします。名前が書いてありませんので何という方かは存じませんが、なんとなく私には親しみが持てました。

一冊の奇クを隅から隅まで繰り返し読んでみて、自分の心に、なにかしら身近かな、そして共感するものを持てる文章が多いのには自分でも不思議なほどです。

生まれて初めて奇クの1月号を手にしたときは、それはもう、松本たえさんのシャシンだけが目の中に火の玉のように飛び込んできて、他のことは見向きもしなかったのですが、こうして、自分も縛られ、そして、それが自分の気持に、ぴったりしてくるとなると、あちらこちらと読みたくなりました。

十一月号では、荒尾慶子さんの告白「行く川の流れ」が、文章も上手でシャシンも美しくて気に入りました。こんな女性だったら、きつと男性に好かれるだろう——と、そう思い、自分もこんな女性になりたい……なれた

ら、さぞ幸福だろうと思いました。

今、私の手元にあります奇クは、この十冊なのです。そして、やはり何ととっても、塚本鉄三さまの書かれた文章に目がいてしまいます。そして、最初の頃、いただいたシャシンの女性の方——、中でも、時々「M女通信」として書いておられる高村浩子さんの告白には、目が向いてしまいます。

自分も、この浩子さんのように、文章がうまく書けたら、ドンドン書いて雑誌にのせてもらえるのに——と、残念です。もっと、学校にいたとき、文章を書くことを勉強しておいたらと、今になって悔まれます。

五月号の、高村浩子さんの「私は縛りのモデルになりたい」という告白なんか、私は何度も何度も、繰り返し読みました。

自分が文章を書くときのお手本にしたいと思って、一生懸命に何度も読みました。雑誌にのっている浩子さんのシャシンも素敵でした。浩子さんもスゴイポイントで、すばらしいですね。もし、文通出来るとしたら、松本たえさんと高村浩子さんになりたいと思います。

これから、若い女性の方のシャシンや文章を、どんどんのせてほしいものです。

私なんか顔にも才能にも自信はありません



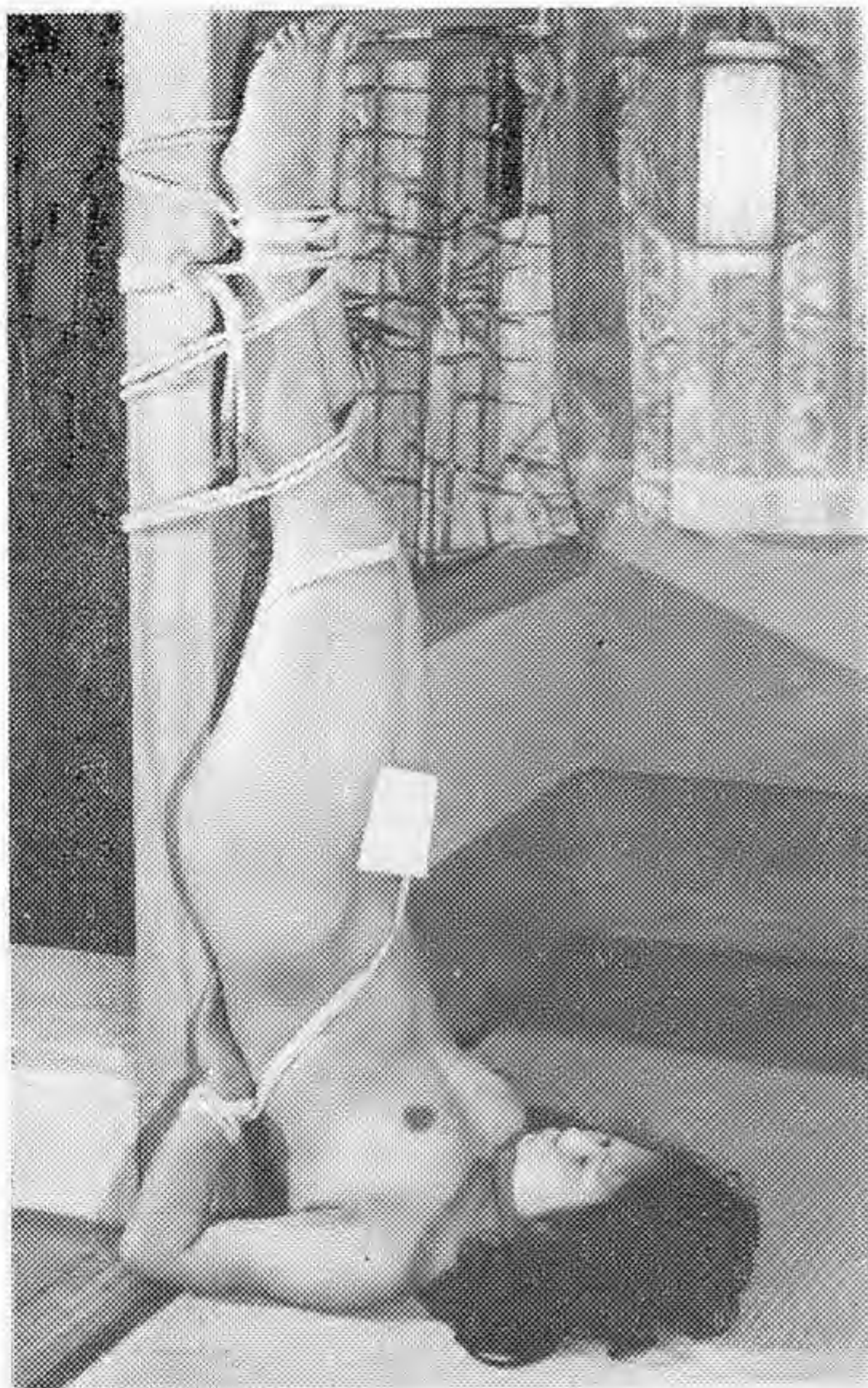
が、前田真知子さんのように、その両方を備えられた方がおられるのは羨ましいです。

今月に発行される九月号の発売日が楽しみです。私が塚本さまにお渡しした自由日記はどうなっているかしら？

それに、この前、写してもらったシャシンは、どれをのせてもらったかしら？

馴れてきたら不思議なもので、シャシンにしても、のせてもらえるものだったら、出来るだけ沢山のせてほしいと思うのは、初めの頃の自分の気持ちから考えてみて、自分でも、おかしいなアと思います。

自分の縛られたハダカの姿を、出来るだけ多くのファンの方々に見てもらいたいという



気持は、この頃、特に強くなったようです。

これは、なんというのでしょうか、見られている——と、考えただけで、生理的な快感が、じわじわと、にじみ出てくるのです。

八月号の口絵の左のページにのった二枚のシャシン「開股を迫る縄」の正面からうつされたのなんか、私の望むものです。

限らない羞かしさが、身体中を真赤に染め

て、消えいりたいたいように顔を埋めているところの私は、ファンの皆さまにとっても、一つの魅力だろうと思います。

それにも増して、私にとっては、たまらない欲びなのです。理由は、私にもわかりません。ただ、そういう場面を想像するだけでも私の全身は燃え上がってしまうのです。

今でも、同性の方の縛られたシャシンは見

たいと思います。その女性の方を、あたかも自分であると置き換えたとき、そこに私は、甘美な樂園を見出すことが出来るのです。

しかし、今では、そういうことをしなくても、自分の身体が一糸まとわぬハダカにされて、グルグルと縛られ、そしてシャシンにうつされているのです。ですから、自分のシャシンを眺めることによって、写されたときのことを回顧し、そして更にその上に、あらぬ空想をつけ加えることが出来るのです。

雑誌にのせられて、多くの異性の目に触れるということは、見られている——と、そう考えるだけで、私の胸は高鳴ります。

雑誌にのせてもらうということが、これ程までに楽しいことだとは、今の今まで、私は知りませんでした。

自由日記は書けなくなってしまいました。私のシャシンだけは、少し宛でもいいですから、奇クの雑誌に、これからものせてほしいものだと願っております。

もし、こんな私に興味をお持ちの方がおられましたら、ぜひ、お便り下さいませ。

字は下手で恥かしいのですけど、出来るだけ、お返事は差し上げます。

——(おわり)——



~~~~~  
△ 告 白  
~~~~~

美と醜の

谷間を埋める

田 宮 雅 夫

私が、あのマルキ・ド・サドの著した『悪徳の栄え』を読んだとき、私は自分の性欲の本体の何たるかを、初めて鮮烈に認識した。

私が21才（大学三年）の夏休みであった。

しかし、私が自分に妙な性癖があるのに気づいたのは随分、昔の事であった。といつて私自身にも、それが何時頃であったか、はっきりとは思ひ出せないが、とに角、高校に入ったか、入らないかという頃の事であろうと思う。

私には、つまり自分のアヌスを刺戟して興奮するという一種の変わった性癖があったのである。私がこのような性癖を行なう時、きまつて頭に浮かべるのは、私の幼少の頃に遊んだ、俗にいう八お医者さんごっこVの幼児体験である。

私は、この幼児体験を回想すると、いつも特定の四人の少女の顔が脳裡に浮かび、そして彼女たちが四つん這いになって、臀部を私の方に向けて居る情景を思い出すのである。

ところが、私が数多くの友人に問い訊してみると、この八お医者さんごっこVという幼児体験は、誰もが経験しているのに、皆が皆其の対象を女陰としているのであった。

つまり私がアヌスばかりを対象として、この幼い戯れを経験したのが、私特有のものであった事を知ったのである。私はこの時、自分の異常性に気づいたのであったが、しかしこれに対し、別に自己嫌悪を持ったわけではなかった。

私は高校に入った当時から、心理学に興味を持ち、宮城音弥氏の『精神分析入門』を初

め、フロイドに至るまで種々の本を読みあさった経験を持っていた。そして、私は一方、高校に入ってから、通常的に、いわゆる「性に自覚めた時」——莫然と覚えるノーマルな性欲（女を抱くという性欲）とは、どこか異和感を覚える——かなり観念的で、幻想的で、更には妄想的でさえある——一種の欲望を、なんとなく感じていたのである。

そして、『悪徳の栄え』を読んでから、現在に至って、セックスというものに対して、次の様に考えるに至った。

先ず私にとって、二つのセックスの形態がある。いわゆるノーマルセックスとアブノーマルセックスである。

後者は私に於いて、アヌスへの浣腸と責め及び豊満な臀部への底知れぬ執着——。これは総じて、愛撫と破壊的欲求とを同時に包含している——かなり逆説的なものである。

私にとって、前者、後者、いずれが私の本物のセックスかといえば、7対3の割合で後者、即ちアブノーマルセックスが、より強いであろう。前者は精神的作用が多過ぎる故、動物的、原始的感觉に基づくものが、セックスという見解からして、これは私に於いて、セックスの本質を成していない。

男女によりとは言わないが、人により異なる事はあるがセックスはセックスであって恋愛の終極的な存在ではないと私は信ずる。

恋愛は極めて精神的な要素が多いが、セックスは恋愛のように、精神的過程は必ずしも必要ではなく、又、即感覚的なものである。

人間は動物の一種でありながら、その文明を以て増長し、人間を他の動物と区別した。

人間を美化し、高尚なものに観念してしまつた。其の結果、セックスと云う人間の有する最も動物的で、原始的な感覚に基づく行為をも、それが『文明的審美感』からして、醜悪であるとして、逆に、これを理屈や観念を以て美化する必要を生じた。

これこそ『文明的セックス』と云うべきであらう。何と高慢な歴史なんだらう。

現代の一般的セックス論は、全く自己正当化論に過ぎない。本質を失つた空論である。

いわゆるアブノーマルセックスの総体を、

『異端』とするセックス論があったとするならば、ノーマルセックスを以て、セックスの本質とするものであらう。ところで本質論と云うものは、通常に於いて、すべての共通要素を抽出して、それを抽象化するを常とするが、この意味での本質をノーマルセックスに求めるならば、『セックスの本体は、人間の性感覚を基礎にした、男女相互間の生殖作用と、それに伴う性的興奮である』と云う事となるらう。

然し異端、即ち例外を認める本質論は、本質論ではない。現にアブノーマルセックスは

存在しているのである。「レズ」然り、「ホモ」然り、「サド」「マゾ」また、然り。

従つて、セックスの本質論が存在する要件としては、これらすべての形態のセックスを包含する事が必要である。

然し、古代の有数の哲学者たちは、「生」を論じ「方法論」を論じながら、真実、又は本質と云つたものを追求して、結果的には、「万有の真相は、一元にして尽きず」と云う事になつてゐる。つまり、どういふ学者も異なつた結論を導いてゐるのである。

私は「セックス論」として何ら異ならないと考える。即ち「これがセックスである」などと誰も論告する事は許されないと、解する。

そこで私は、私自身に於いて、セックスをこう考えた。

「セックスは、人間の最も原始的で、動物的且、私の心に社会的に植えつけられた観念からすれば醜悪的な感覚を「基礎」にした個々の人間等相互間の作用、及び、以て生ずる性的興奮の総体である。但し、作用の外形的形態は「基礎」の如何によつて変更し得る。即ち、其の人間固有の体質、又は気質に、ある種の幼児体験が加わる事に依つて、この「基礎」が少々変わる事がある。この変わった方向の如何、及び、変わった度合に応じて、将来に於ける、其の個人のセックス形態も変更する。従つて、この変更の可能性は、人間誰

でも、生まれながらにして、多かれ少なかれ有しているのである。換言すれば、人間は皆潜在的にアブノーマルセックスに対する欲望発生の可能性を秘めて、生まれて来ると言える」

女性と云うものは、とかく、自分のいわゆるアブノーマルセックスに気付くと、それを排斥しようとする。然し、排斥しようと思えば思う程、この種の実に根の深い願望は、強迫観念の場合のように、強く定着して来ると私は考えた。

私は思うに、自分は、先天的要素と幼児体験によつて、アヌスへの欲望を有するに至り後天的要素と、後順位の女とのセックス体験に依つて、この欲望実行に関する不可能性を有するに至つたと考えてゐる。

然し、現在に至り、私は「己のセックス」を知つた事に依り、これらの問題は、すべて解決し得るものと云う自信がある。

自分のセックスから逃げようとせず、良く見詰め、明確に自覚し、それを許容するならば、仮に前述の如く、恥じ、ためらつて逃避しようとしてゐる女性が居ても、それは解決し得る問題である筈である。

なんとなれば、「セックスとは、其の人間有の独特のもの」であるからである。

連載・時代S小説

紫

蘭

の

門

(14)

カット・岡たかし



美濃 菊

豊香と千登世の二人が骨のずいまで多勢の

で、内記の家の庭の、石灯籠のしたに埋められてあるというロザリオを求めて、安房に飛んだことは云うまでもない。

「こ、これにてお許しのほどを！」

男たちにしゃぶりつくされる光景をまのあたりにみた衣笠内記は、いくら祖先代々の家訓とは云え妻の美和の操には代えられぬと、乙夜のロザリオにまつわる秘密のすべてを白状したのであった。

直ちに鞭兵衛たちが東条藩弓組々頭石川の案内

風流極道軒

女という字は“せ”の字に似ている女という字は“め”の字に似ている女は、つまり、女せめ

——女・責めらるるものと知れ

平伏する衣笠を見おろすのは藩主・領田下野。老中職にある彼の眼は冷たかった。

「余の命令にここまでさからった罪はなんとするぞ、衣笠！」

主君の命とあらば即刻、応ずると思いきや最後の、それも土壇場になるまで秘密を打ちあけようとしなかったこの家臣に、領田は激しい憤りを抑えようとしめない。

「お許しのほどを、いかなるおとがめなりとお受けいたしまする」

この衣笠の言葉が、また悪かった。

「しかとか！」

「御意のままに」

領田の顔が、淫らにひきつる。

かに繰りひろげられたが、その庶民化は、おそく徳川初期、水戸中納言光圀が家臣の安積沮泊（巷談では渥美格之進こと格さん）に栽培させて以後のことだという。

それが宝暦の頃、爆発的人気をよび、天保ともなると江戸では目黒、青山、染井、さらには駒込が名所として、もてはやされるようになったが、なかでも小石川の老中領田さまの中屋敷の美濃菊は格別との噂が高かった。

「今日は無礼講じゃぞ。みななもの、存分に振舞うがよい」

八百八丁の噂をよそに領田は、菊の花びらをうかべた盃をゆったりとのみほすと、お流れを用人の樺山に、たまわった。

茶室風の離れ——ここだけは、ぴったりと雨戸を閉ざしたなかで、違い棚の大輪の美濃菊が、馥郁とした香をはなっている。

次々とまわされる盃を最後にうけた逆剝の美女衛門が、おしいただくように、それをのみほすのを、満足気にみやった領田は、

「美女衛門、今日は女谷流の秘術をつくして凌辱いたせ。うちうちのことじゃ、遠慮は無用じゃ」

平伏しながら美女衛門は、さきほど隣室でかいまみた一組の男女を睨にうかべる。

二重菱に縄をかけられ猿ぐつわまでされた若い武士と、それに身をすりよせている紅色の湯文字ひとつの新妻らしい女。（あれが、美和という女か。かねて藩中随一の美女と噂には聞いていたが……）美女衛門の心が、おどる（まさしく芙蓉の花を偲ばせる女……）と――。

その隣室から声が洩れてきた。

「衣笠氏。御内室をお借り申すぞ。フッフッフ、まさしく美形よな」

「衣笠、どうじゃな、気分は。女房殿が翻られるのを目のあたりにするのも乙なものじゃろうて」

「衣笠さま、失礼いたしました奥さまを」

熊坂、入江、池尻……いずれも、衣笠の上役、朋輩、下役のものたちであった。

「ムッ……ウ、ウウウ……」

激しい息づかいと、暴れるのをとり押えているらしい物音がつつわってきて、領田たちが、静かに耳を傾ける。

衣笠内記は、生地獄の底におちていた。

こともあろうに自分の妻が、同僚や上役、さらに軽輩のものにまで嘲られようとしていく！

いまさら主君領田を極悪非道とののしって

も、家老、用人たちの振舞いを畜生、外道とののしっても、もうすべては遅い。

同じ弓組に属する入江が、
「さあ、美和殿。殿の御前じゃ。お化粧くずれを直してしんぜよう」

化粧箱をひきよせ金時絵の櫛をとり出すと上役の熊坂に、美和を衣笠からひき離させ、鶴亀紋の飾り元結だけが残っている黒髪に櫛目を入れていく。

必死で身をよじって熊坂の腕のなかから逃がれようとする妻の姿が、衣笠の血走った瞳のなかで夢魔のようにおどった。

採りたての水蜜桃を思わせる双つの乳房が熊坂や池尻の武骨い掌のなかで、ころころと柔らかい珠のように翻弄される。声にならない呻きを猿ぐつわのなかで洩らし、紅色の布からこぼれた白い膝を、しっかりと合わせてけなげにも抵抗をつづける妻……。

「内記。おぬしも幸福な男よ。このような女房殿を、夜毎夜毎に、いつくしんでおったのはのう。美和殿、これからは拙者たちが、この世にふたつとない極楽へ、あなたを連れて行ってさしあげましょうぞ」

黒髪を撫でおわった入江たちは、縄尻をひいて美和をたち上がらせると、裸身をかこむ

ようにして、襖の向こうに声をかけた。

「お弓組配下衣笠内記の妻美和、重罪をおかした夫、内記の助命のために、殿へお目通りを願っております」

「許してつかわす。入れ！」

領田のとりつくろった声がして襖が開く。

肩を押されて、掛燭、菊灯台がこうこうと輝いているその部屋に押しこまれようとする寸前、チラッと、こちらを振り返った妻の凄愴な眸を、夫である内記は、いつまでも忘れることはなかった。

はだか引き廻し

「願いの筋とは何じゃ。云うてみい」

押し出されるやいなや、猿ぐつわをはずされてその場に平伏した美和に、おおように領田は声をかけたが、この場の仕儀は、多分に芝居がかったものであった。

これから美和を、彼女の知友やかおなじみの前で責めることは既定の事実。ただ、責め賜る理由づけのあるほうが、より面白からうという樺山の発案が採用されて、夫の内記を鋸引きの極刑に処す。もし許してほしければ妻である美和が、たとえどのようなことでも

命令に従うこと——という二者選一をもってこの若い夫婦に迫ったのである。

そのときの夫の気持のわからぬ美和ではない。(そんな辱かしめをうけるくらいなら死んだほうがよい。美和、死ぬのだ。縄をとかれるようなことがあれば即座に刀を奪いとりまず俺を刺し殺せ。そして、お、お前は……お前も死ぬのだ、武士の妻らしく)猿ぐつわのなかで夫は、そう叫んでいた。美和とて、同じ気持であった。なんで、おめおめと多勢の顔見知りの中で罵りものにされるのを甘受できよう。

だが、樺山は、こうも云った。「もし自害するようなことがあれば、美和殿。二人とも全裸の屍を日本橋の袂にさらして腐るにまかせようぞ。それだけではない。衣笠一族、そなたの両親兄妹眷族すべて逆さ磔にかけてくれようとの殿のお言葉じゃ。どうじゃな、そなたの身ひとつで多くの男女の生命がたascarうえに、そなたたち夫婦の罪も許してつかわそうとの有難いお慈悲なのじゃが」——人一倍、恥を知る美和ではあったが、これでは耳をかたむけるほかはあるまい。そして耳傾けているうちに、自分ひとりが犠牲になればと思いはじめるのが、女心のつねという

ものであろう。乙夜のロザリオを恨み、そのようなものを後世に残した豊太閤を呪ってみても、はじまらないことであった。

隣室で、ひとり身悶える衣笠の耳に、美和の思いつめた声が伝わってきた。

「……夫、夫の生命をおたすけただけですならば、妾の、この身は、い、いかようになりましょうとも」

「フフフ。殊勝じゃ、殊勝な心掛けじゃ。だが、ちとばかり恥かしい目に逢わずばなるまいが、それでよいかの」

「……ハイ」

蚊のなくような声であった。衣笠は、狂ったように猿ぐつわのしたで叫ぶ(や、や、やめろ！ 美和！ 死、死ぬんだ！ 舌をか、かむんだ、美和！)

「では、まず裸のまま、この中屋敷のなかを一廻りしてまいれ。どうじゃな」

返事はなかった。無いのが当然かも知れない。何百坪というこの中屋敷、何百人かの家臣、仲間、小者、女中、それにお出入りの商人たちも居よう——そのなかを、裸で廻ってこいとは、まったく言語道断の命令！

憤怒を五体にみなぎらせた衣笠は、縛っている縄をふりほどこうと狂いまわるのであつ

だが、女谷流の達者である美女衛門の子分・美男の槍助、陰間の架助たちのかけた二重菱縄は、ゆるもうともしなかった。

「いやと申すかな……美和殿。いかがなされる……」

樺山の声につづいて、あとはなにやら低いボソボソした、やりとりがつづく。

違い棚の美濃菊がこの場の仕儀も知らぬげに、清雅な香りをただよわせていた。

どこの国の王様であつたらうか——また作者は誰であつたらうか。

王様が、美しいお妃に、裸で町中を馬にのって廻ってきたさいと命じ、結局はお妃がそれに従ったというお話、ご存知のかたも多いと思う。そのとき、賢いお妃は、町中の戸という戸を閉めさせ、節穴にまでめばりをさせてお廻りになった。お妃にはそれだけの権力がおありになったから。だが今、美和の場合そのような力のあるはずはない。数百の好奇あふれる淫らな眼がいつせいに注がれるであらうし、なかには、ちかよって、触ろうとする不心得者も出てくるであらう。

しかも美和を慕っていた男も多い。お徒士組の前島、お馬廻り役の内藤、小姓組頭の川瀬……それに、美和の美貌をねたんでいる女

中たち。朝夕、挨拶をかわしていた同じ長屋の根本、三橋、相川。それに、その女房たち……美和にとっての一步一步は、針地獄、血の池地獄を歩くにも似た屈辱と苦悶の連続とならう。

ボソボソと云う声が、やんだ。

「よくぞ申した、美和殿。それでこそ殿のお怒りもとけるであらう」

樺山の声につづいて上役の熊坂が、

「では、その最後の腰のもの。拙者がとってしんぜようぞ、美和殿」

「そのまえに、な、美和殿。さきほどの言葉を申しあげるのじゃ、早く、殿にな」

ふたたび樺山の声がして、衣笠は脳天をなたで、たちわられるような美和の言葉を聞かねばならなかった。

「美和は、ふつつかではございますが、殿さまのおいしいつけどおり、は、はだかで、この中屋敷を廻ってま、まいります。ア、アカ裸で……まだ美和は赤裸ではござりませぬゆえ、お、お湯文字を、ぬがせていただきとうございます。熊坂さま、入江さま、それに池尻さま……どうか妾を、ア、ア、赤裸になされてくださりませ……」

「待ってましたぞ、美和さん。さあ、とって

進ぜよう。そのままでは、取りにくい。立つて」

「そう、もすこし前へ、殿のま正面。そうそう、殿のお手が届くところまで」

「ほれ、ほれ。殿がお盃をたまわるといっておられる。唇をあけて、もっとあけて、よし……もう一杯……ハッハッハッ」

美和のなにがおかしかったのか、いつせいに笑い声が隣室であがるのを衣笠は聞く。

「よし、よし、では、剥ぎとりまするぞ。お覚悟は、よろしいな」

「ア、アッ……お、やめになってくださりませえ！」

尻あがりに高い悲鳴が、ガンガンと衣笠の耳にとびこむ。つづいて、

「ア、アッ、アッ……あなた……あなた……許、許して、くださいまし。あなたのために……妾は、妾は……ア、アッ……」

美和の悲痛な叫びと、
「立て！ 立ったままで、よく検分をお願い申し上げるのだ」

興奮した男の声がして、パチッと柔らかい肉を、うつ音が、つたわり、

「アッ！ お、お許しを！ 妾、こ、このよ
うな、ほんとに、もうお許しを！」

泣き声というよりも悲鳴にちかい叫びが、シーンと静まり返った中に、ひびきわたる。男たちが、一糸まとわぬ姿にむきあげた妻の裸身を、いったいどのようになぶっているのか、あいの襖でしきられて、みることが

できないだけに、よけい内記の血が騒ぐ。「フッフッフ……」この含み笑いは主君の領田のものである。とたん、「キヤアッアッ！」と美和の金切声。どっとあがる淫らな高笑い——。



イメージギャラリー

『女賊の最期』

岡 たかし

衣笠の心臓が、ギューッと縮まったが、再び静寂。ボソボソした、やりとり——。

「扇をさかさにしたようでござりまするな。色つやといい、形といい、まったく申し分がござりませぬ」

樺山の声につづくように、

「ア、アレッ！ お、お許し、お許し下さりませ。熊、熊坂さまア！ キヤアッ！」

ドタッと青畳をうつ鈍い音がしたのは妻がころがった音でもあらうか。

「フッフッフ、暴れても無駄ですぞ、奥さま。ほれ、もそっと静かになされい！」

それが下役の池尻の声であると知ったときの内記の形相はまさしく地獄の鬼であった。

（あれほど目をかけてやったのに、畜生！池尻！ 八つ裂きにして、くりようぞ！）

そんな内記には、おかまいなしに、男たちのうわずった野卑な言葉と、美和の狂ったような絶叫が、つぎつぎと聞こえてきて、どのくらいのときがながれたであらう。

頂点に達した怒りが内記を虚脱状態に陥れたとき、サアッと雨戸が繰られて、正午ちかい秋の陽ざしが、離れに白銀のすだれのようながれこんだかとみると、江戸随一の美濃菊のお花島が燦爛とした装いを見せた。

「大事な大事な奥さまの御旅立ちじゃ。見送ってさしあげてはどうじゃな」

入ってきた樺山が、内記を縁側にひたしてその角柱にあらためて縛りつけた。

その場所から衣笠内記はみた――。

二人の男に左右を、三人目の男に縄尻をとられた妻の美和が、中庭の敷石を踏んで長廊下へと歩んでいく姿を！

背中に三つ、乳房から腹にかけて五つと裸身に八つの菱形をつくる女谷流八角縄で、統のような光沢をおびた美しい肌をガッチリと縛りあげられたアカ裸の身が、早くも庭仕事をしていた二人の小者に見つけられてしまうのを、夫の内記は、はっきりと見る！

手をやすめたその小者は、縄尻をもつ池尻に招きよせられるまま、二尺の近さまで近よると袖をひきあって、ささやきあい、ぞろぞろとついていったが、敷石がつきると長廊下への階段。まずは部屋の中から引き廻すつもりなのであろう。うなだれながら一段一段と熊坂にひたてられて上っていく美和の輝くばかりの双臀を見送ると、仕事もそっちのけで仲間に知らせるために散っていく。

内記が目にするのできた妻の哀れな姿は、そこまでであった。

長廊下の角をまわったあと、どうなったかは、想像するほかはない。いや、想像などしたくないことではあったが、しっかりと閉じた内記の臉のうらに、次々と妻の姿がうかんでくるのはどうしようもないことであった。夫がどんなに苦しんでいるか――美和にはいたいほど、よくわかった。

が――

それさえ忘れさせるような屈辱が、美和の前に、たちはだかつていたのである。

長廊下の角を廻るとお納戸部屋がつづき、お局がある。誰が知らせたのであろう、襖という襖はみな開けはなたれて、黒山のような人垣が、あちこちにできていた。

「美和さまだわ、藩中随一の美女の！」

「ほんにまあ、な、なんという恥知らず」

「妾だったら直ちに舌を嚙んで死んでしましますものを！」

女たちが口さがない言葉をかわし合うなかをかき分けるように美和は歩かされていく。

台所、水屋、式台、一の間、二の間、三の間と数十もあるう部屋をひとつ残らず廻って歩く。仲間部屋から女中部屋、さらには玄関を出て別棟になっている長屋のすみずみまでを何度か失心しそうになり、両脇を熊坂たち

に抱きかかえられ双臀を青竹でなぐられ、こづき廻されながら美和は、ただ歩いていく。

「アッ」と美和が呻いたのは、昨日まで住んでいた懐かしかるべき部屋の前であった。

わざわざ開かれている仕切戸のなかに、花嫁道具として持参してきたばかりの鏡台がチラッと見え、それが一層、美和の羞恥をかきたてる。それもつかのま、縄尻をひたくられて、内股に一步踏み出すと、顔なじみの根本、三橋、相川たちが、夫婦そろって興奮しきった顔を並べていた。

「おかわいそうに……」という声がないではなかったが、大部分は、いまでは、御主君の怒りに触れて女囚となった美和を、蔑むような眼付きで眺めていた。

美和は、全身を錐でつつかれるような思いで、いたたまれないように前に進む。

一刻も早く、この苦痛から解放されたい！「も、もっと、早く、早く、歩かせて下さいませ」

わざと、ゆっくりと歩く熊坂に、息も絶え絶えに訴えてみたが、

「殿から、時間をかけてゆっくり廻れと命令されておりますのでな、美和殿」

池尻が、得意そうに縄尻をひいていう。こ

の男、ふだんなら殿のお目通りもかなわぬ軽輩なのだが、衣笠夫婦と昵懇だというだけでえらび出され、殿から直き直きお声を賜わったことが嬉しくてたまらない様子。

「ほれ、美和殿。そこに、前島さまがおられまするぞ」

とその池尻が云ったのは、長屋を廻りおえて庭に通じる柴折戸にさしかかったときであつたろうか。

「前……前島……さま……」

美和の美しい素足が、小石の上でピタッと釘づけになる。

前島といえば、美和に何度となく懸想文をおくりとどけて、はては螢狩りの夜、いやらしい振舞いに及ぼうしたので、おもわず頬をなぐりつけてしまった御留守居役の息子ではないか。

「美和殿。フッフッフ、これはまた、おみごとな姿でござりまするな。これ、美和殿」

虫酸の走るような声とともに、小石を踏む音がして、うなだれた美和の顔をのぞきこんだ前島は、「ご機嫌はいかがでござるかの」とからかいざま、サアッと手を、何おおうものとなない美和の乳房にのぼす。

「ア、アレッ！」

あまりの仕打ちに、立っていることもかなわず、よろよろと蹲ってしまった美和の背に「あのとき拙者のいうことをきいておれば、このようなざまにはならなかったものを。のう、内藤、川瀬。そうはおもわぬか」

「いかにも、いかにも。前島氏とだけは限らぬ。せめて拙者の妻になっておれば」

「いや、この川瀬の女になっておれば随分とかわいがってとらせたものを！」

内藤と川瀬、この二人もまた美和に惚れていた若侍であつた。

「このようなざまになつては、百年の恋も一度にさめるて。フッフッフ。池尻、少しの間、勵つてもかまわぬであらうが」

上役の息子に云われるまでもない。主君の領田から触れさせてはならぬと命じられてはいない。熊坂たちと眼を見交して頷くと、大喜びした前島は、

「それ、それ、美和。お前のような恥知らずは武家の女ではない。いや、花街の女でも、このような目にあえば、舌を噛んで死ぬであらうに！ この売女！ なにをいまさら蹲つて隠す。隠したとてなんになる！」

草履が、美和の腰を蹴りあげると、「アッ！」と喘いで、ぶざまな恰好で、横倒しにな

る。そこを、三人がかりで手足を押えこみ、円陣を描いて見守っている何十人の人々に、「よおく見ておくことだ。ご主君の命令に抗った女は、ほれ、このように！ 女のいちばんかくしておきたいところまで、白日のもとに曝す憂目にあわねばならぬぞ！」

「近うよつて、よく見ておけ！ 殿もお許しになつておる。ほれ、この乳房、このへそ！ この内股……フッフッフ、美和、どうじゃどうじゃ、美和！」

天女だ、女神だ、この世の花だと、自分にあれほど懸想していた男が、よりによってこのような仕打ちにでようとは！

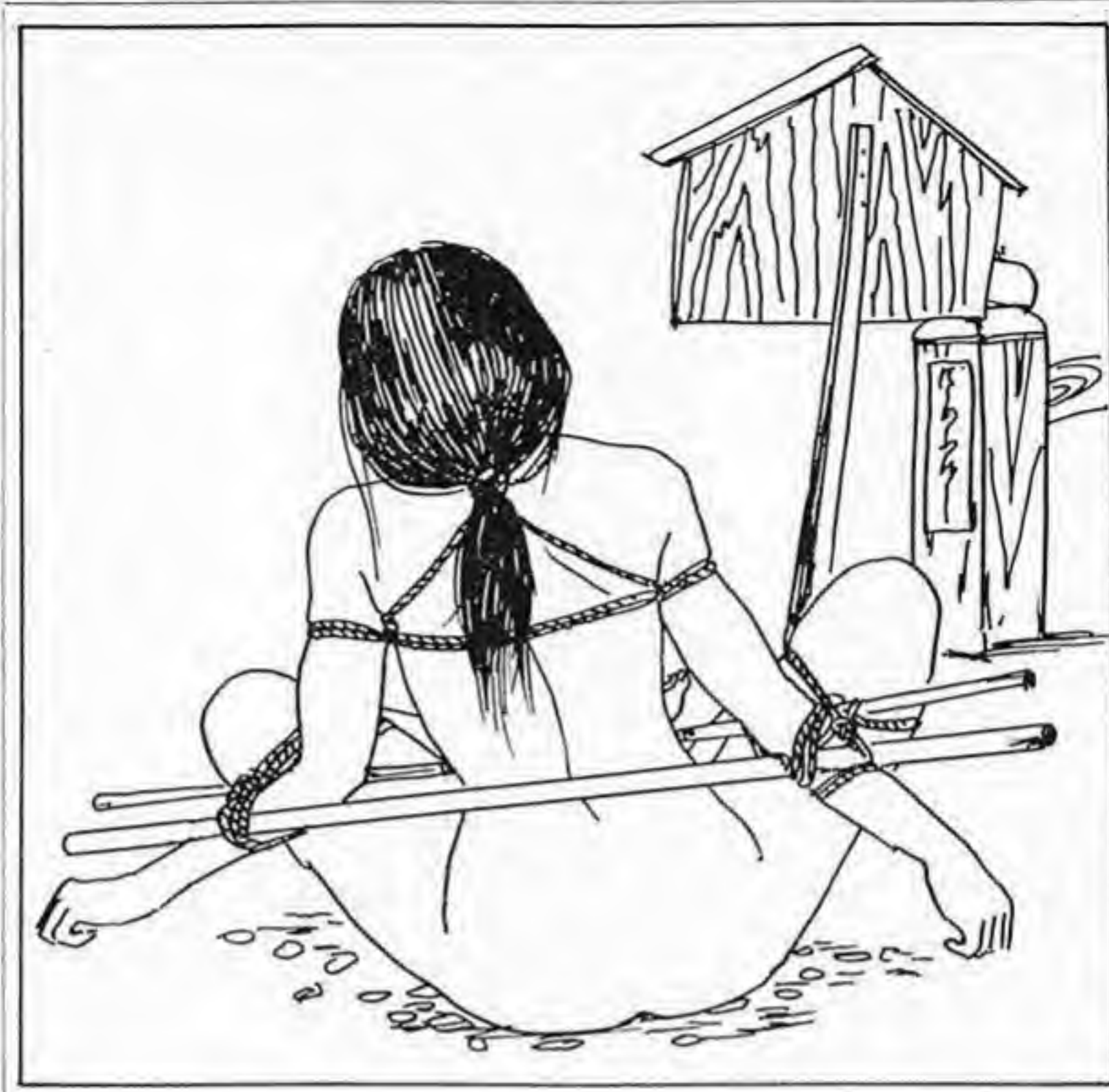
ひとおもいに、死、死のう。死んでしまおう——と舌を噛み合わせようとしたものの、夫の顔、夫の父・母、自分の父母、兄妹が、無惨な逆さ磔や鋸引きにされている場面が、臉をよぎる。

「ア、アウ！」

この呻きは、死ぬに死ねない美和の五臓六腑からこみあげてきた絶叫が凝りかためられたものであつた。

仰向けにされ、魅のすみずみを撫でさすられ、足蹴にされても、耐え忍ばなければならぬ——。

イメージ……『橋口の仇花』……須坂 旭
ギャラリィ



燦々と照りつける秋の陽ざしがさしこむ余地のないほどの人だかりのなかで、美和は、けなげにも、自分を「石になったのだわ、石に」と思いこむことでこの屈辱を切り抜けよ

さて、ここで——
もしものことであるが、読者諸賢よ。
もしもあなたの奥さまが、美和と同じ目に
あうとしたならば……。もしも、億にひとつ

うと決心する。
（石だわ。妾は、石になったのだわ！）
だが、前島たちの颯り方が激しさを増すにしたがい、その決意もどこへやら、狂ったような悲鳴をあげつづける美和であった。
散々、鬨ったあと、ベエツと唾を吐き捨てて前島たちが去ると、再び縄尻をひかれて美和は立ちあがる。もう屈辱を屈辱と感ずることもできないような前後不覚の状態でそれでも、本能的に裸身を「く」の字にまげて、よろよろと一歩一歩、必死で歩いていくのであった。

この「紫蘭の門」がテレビ化されることになり、ヒロインの美和を演ずることのできる清雅な美貌の持主は、あなたの奥さま以外にないとプロデューサーに白羽の矢をたてられ懇望されたとしたら、あなたは、イエスと答えになるであろうか。
多分、あなたは……。
では、この引廻しのあと、あなたの最愛の奥さまが、どのような場面に出演なされるか御知らせしよう。

馬 竿 筒

「ご苦労じゃったの、美和殿。殿のお怒りもこれで幾分か和まれたようじゃ」
正面の領田をチラッと仰ぎみた用人の樺山は、ぐったりとうなだれている美和によびかけると、ふたたび雨戸をびったりと閉めきらせ、燭台に灯りを入れた。
「では、美女衛門、あと、たっぷりと責めませえ」

樺山が座につくのと反対に立ちあがった美女衛門は、
「まずは女谷流開き（そのびらき）」
と子分の槍助たちに合図をおくる。サッと

立ち上がった四人の子分は、領田に向かって一礼すると、美和の縄を、といていった。

（縄をとかれた瞬間、相手の刀を奪って俺を刺し殺せ！）と夫の眼は語っていたが、そのようなすきはなかった。もちろん槍助たちが油断していたとしても、いまの美和にそれだけの気力が残っていたかどうか――。

縄が、バサッと青畳におちたとき、彼女がとった第一の動作は、自由になった両手で、下腹と乳房をおおいかくしたことであった。

「ヘッヘッヘッ、奥さま。いまさらお隠しになるがらですか。あれだけ、たっぷりと御開帳になったあとですぜ」

からかいながら牢助と槍助は、左右から同時にとびついて腕をとると、まだいたいたしい縄痕の残っている手首に縄をからませ、部屋東西の柱の鉤にかけて、グイグイッとひっぱる。

「アッ、アッ……」ピーンと両腕を真横に伸ばされてしまった喘ぐ美和の、正座している膝に手をかけた架助が、「お開きなせえ。それとも、ほれ、こうしてほしいのか」

ぴったりと合わせている太腿に割り込もうとする手を恐れて、思わず美和の腰がくねって膝が割れる。

「世話をやかしたくなしにしましょうぜ」

双臂のしたからはみ出した足首を、むんずと捕えて、あざやかな手付きで縄をかける。

と、同時にもう片方の足首にも槍助の捕縄がからまり、「そうれ！」と呼吸を合わせた二人が縄を手もとに引いたから、

「ア、アレッ！」

バランスを失った美和の下半身が、くねくねと妖しく躍る。が、それもしばらくの間で左右に別れた架助と槍助のあやつるままに、美和のすんなりとのびた美しい脚は、結局は「八」の字に押しひらかれてしまう。

「つぎはこの膝をその肩までくつつける。いいかい、奥さん。フッフッフ……」

含み笑いを片頬にうかべた槍助が、美和の足首からピーンとはりつめている手元の縄をじよじよに美和の背後へと、もっていく。

まず青畳からうきあがったのは白い踵。つづいてふくらはぎ、膝の内側、そして、太腿が離れて、美和の右脚は斜め上へと、たかだかと吊りあげられる。

「ア、アッ、お、お許しを。許して下さい」訴えもなんのその、架助が槍助と同じように左脚を吊りあげていき、真横にのばされている肘のあたりで、足首とひとつにすると、

くるくるっと縛りつけてしまった。

槍助がこれに応じて右肘と右足首の上の、ほっそりした部分を一つにしてしまったことはいうまでもない。

「園開きと申しますのは、こういうことでございまして。ほれ、このとおり」

真正面の領田たちからみると、両腕を真横にのばし、その左右の肘にそれぞれ足首を縛りつけられた美和の姿は、三角形を逆にしたような「▽」に見える。

その「V」字型に吊りあげられてしまった太腿のまえに膝をすすめた美女衛門は、燦めくように白い内股を指さして、得意げに主君の顔色をうかがう。

美和がもう、狂ったように身を悶えさせ、絶叫をあげた。

ここで、再び「もしも」の話――。

読者諸賢よ。ヒロイン美和の大役を、みごとに演じて帰ってこられた、あなたの奥さまは多分、撮影所での状況を、つぎのように報告なされることであろう。

（まずね、妾、仰向けにされちゃったの）

（裸でかい）と、あなたが興奮して尋ねる。

（ええ）奥さまの声も、ふるえる。

（妾、セツトに入るまえに助手のかたの手で

裸に、されて、しまったの)

(パンティもか)

(……え、ええ。とっても、とっても恥かしかったのよ、あなた!)

ゴクンと生唾をのみこんで、あなたが、

(それから、どうした。おい、全部、あらいだらい白状してしまうのだ!)

(それから手と足を押えられて、そう、ね。

何人くらい、いらしたかしら。監督さんに助

監督さん。プロデューサーの辻山さん。助手

のかたが三人に大道具、小道具の係のかた。

カメラ係に……)

(おい、そんなに、たくさんの男が!)

(メイキャップに床山さん。スクリプターの

かたに、守衛さん)

(守衛! そんな直接、製作に関係のない男

たちもか、おい!)

と、あなたが、せきこんでいうと、

(そうよ。だって、妾……)

さすがに「美人だもの」という言葉は、お

しとやかに囁みこらされて、そのかわり、

(妾、とっても魅力的なんですって)と甘え

るように、おっしゃる。そして、

(仰向けにされて両足をあげ、左右に開く。

はれ、こ、このように)

あなたは、もう、たまらなくなる。愛する

妻が数十人の男たちのまんなかで、こ、こと

もあろうに、こんな淫らなポーズを!

(そして両脚をグウッと頭の方にのぼす)

(そ、それから!)

(首とね、頭を、助手のかたに持ちあげられ

て、ほれ、こ、これくらいまで、顔が太腿に

触れるくらいまで押しつけられて)

(手は、手はどうしてた。なぜ、反抗しなか

った。おい!)

(だって、あなたア、手は真横にのばして縛

りつけられているのよ)

(そ、それじゃあ、まるで……)

(だってえ、お役目でしょ。妾、美和なの)

と夢見るように、おっしゃった奥さまは、

(殿方は、美女でなくてはお責めにならない

って、ほんとうかしら)

と、ここで、ちよっぴり奥さまは、自分は

美人だと思っていらいっしやる本音を、責めら

れるのは美女ばかりという言葉で間接的に表

現あそばされる。

いかがです?

ともあれ、美和の受難は更につづいたので

ある。

「下林、責めてみないか。余が許す」

美女衛門が退いたあと、領田から声をかけ

られたのは、こと拷問にかけては藩中に並ぶ

ものがないといわれる下林であった。

あまりの光栄に、顔をサアッと緊張させて

末座からすすみでると、

「女を責めまするは久しぶりでござりまする

が、御意のままに」

「下、下林……六平……」

惨めに開かれてしまった裸身をハッと縮め

る美和の瞳に、ありありと嫌悪のかげが、う

かんだ。この下林もまた昵懇の間柄。しかも

夫の内記よりも、はるかに地位が低い。

「奥さま。殿の御命令でござりますれば、失

礼つかまつって……それにしても、まったく

惚れ惚れするほどのお躰でござりまする」

「無、無体なことをなされますと、ゆ、ゆ

許しませぬぞ!」

美和の毅然とした声も、せせら笑いで迎え

られて、下林が、棒状のものを取り出す。用

意してきたものが、ここで役に立つことにな

った。

「何じゃな、それは」との領田の問いに、

「馬竿筒と申しまする」

直径一寸近く、長さ二尺余。表面に、たわ

しよりも幾分やわらかそうな真紅の毛が、び

っしりと、うえこまれてある。

「なにか仕掛けがあるのか」領田が、筒状の望遠鏡でもものぞくように片目をあてた。

「小さな穴がございまする」

「いかにも」「その筒に、この棒をあわせ用いまする」と下林がうやうやしく領田に捧げ

たのは、先端が皮でまかれてある棒。

「フム。まるで、こどもがつかっている水鉄砲じゃな」

まさしく、青竹を利用して片方のふしに小さな穴をあけ、水を入れて、こちらから布を巻いた心棒を突っこんで押すと、小さな穴か

ら圧縮された水がシュウツと、ほとばしる玩具に似ている。

「して、いかように用いるのかな、下林。そちは拷問倉で罪人を相手にして水責め火責めの責め折檻が上手ときいておったに、これはまた、ハッハッハッ、馬竿筒とはのう。云い得て、まことに妙じゃわ」

「恐れ入りましてござりまする」

思ってもいなかった主君の満悦の笑いに、いよいよ張りきった下林は、手渡されたその筒を左手にしっかりと握ると、くるりと身を一回転させて美和の正面に坐ったが、そこは主君の目に、自分の躰が邪魔になると知ると膝行して、ななめ前に陣取り、

「では、殿。ただいまより女囚、美和を『馬竿筒責め』にかけまする！」

高らかに叫ぶと、

「御主君にたてつく衣笠内記の妻、美和。これよりこの下林六平、役儀によって取り調べる。神妙になされませい！」

なにを神妙にせよというのであろうか。

美和は、その下司根性に、羞恥を忘れるほどの怒りをおぼえたが、それもつかの間、下林の右手が、獲物を狙う青大将のような素早さで伸びる。



イメージギャラリー

『女囚あそび』

志羽利也

いや、それは、伸びる——というよりも喰いつくというほうが、より当を、えていた。

下林の鋭い指の爪が、遠慮も会釈もなく、滑らかな柔肌をつまみ上げる。

「ヒ、ヒユウッ！ な、なにを！ なにをなされまする！」

齒の根をガチッ、ガチッと、かみあわせて美和は叫んだが、それは女の最後の悲鳴であった。

が、下林は、平然と、「女は魔性じゃ。まだまだこれしきのことだ」といい捨てると、「女には限度というものがござりませぬ。ほれ、このように悲鳴をあげてはおりまして、まだまだ奥が深いものでござりまして、のう美和殿。いや、美和、そうじゃろうが」

飽きることを知らぬように下林の左手の指が、クモの脚に似た蠢きを始める。

「アッ、アッ！ 下、下林……止、止めるのです。無礼な！ ゆ、ゆるしませぬぞ！」

大きく白い逆三角形「▽」の字にされて、抵抗ひとつできない身ではあったが美和は、この下司きわまりない男に、骨の髄まで罵りつくされて行くのかと思うと、全身の毛穴から血が、ほとばしる思いであった。

が、その抵抗も下林が「では、ごゆるりと

参りまするぞ」と、真紅の馬竿筒を取り上げ

「ヒイ、ヒイイッ……」

口笛のように鈍いひびきが美和の口から洩れたとき、おわりをつげた。

「ヒヤアッ、ユ、ユルシテ、オユルシヲ！」
「武士たる拙者を呼び捨てにいたした罰じゃわ、美和殿。フッフッフ……」

馬竿筒の真紅の部分は一寸刻みに、凝視する男たちの視界から消えて、あとは、もう半分くらい。

「云うてみい、美和殿。下林さまが好きじゃと、大好きじゃ。抱かれてみたいと、その唇で云うてみるのじゃ！ どうじゃ！」

どうじゃという声に強い調子が、こもる。

「こ、これでもか！」

筒が、くるくると回転する。

額から玉のような汗をにじませ、美しい眉をひそめ、白い齒をむきだして美和は狂ったように呻く。

「ウッ、ウウウッ……」

吐き出される熱い息が、下林の顔にかかり水蜜桃のような乳房が激しく波立つ。

むっちり肉のついた双臀を基点に、角度の広い「V」の字に吊られていながらも、美和の惨めさは、燭台の光をあびて妖しいばかり

りの美しさを増すばかりであった。

「よい香りじゃ。藩中随一の美女と云われるほどはあるな」

鼻の孔を、おっぴろげた領田は、

「下林。遠慮はいらぬ。そちは左からやれ。余は、右側から責めようぞ。それに、槍助たちも、足でも腋でも思うところを狙いうちするがよからう」

「ハッ、有難う存じまする」

平伏した下林が、その名の示すように「下林」への攻撃を再開すると、領田の右手の指は、太腿から脇腹をのぼり、そこだけが月の夜のような蒼白さをもつ腋のつけねを、もてあそぶ。

「美和。フッフッフッ、どうじゃ。くすぐったからう。どうじゃ」

同時に槍助が左腋をなぶり、棒助たちが、天井に向かって、さしのべられている美和の足をつかむと、指の股を一本一本、押しひらき足の裏を、こちょこちょと、くすぐる。

名状しがたい絶叫が、鈴木春信描く浮世絵の美女に似ている美和の、ふっくらした頬をいっそうふくらませ、自分の意志では押えようのない被虐の疼きが五体を押しつつむ。

（こ、こんな、はずでは。いけないことよ。

美和、そ、そんなはしたない。アッ、ダメです！ ダメよ、美和……」

人妻であり、しかも憎んでもあまりある男たちに責められているのだという自意識が美和の心に、よみがえり、溺れてはいけなまいじましいほどの努力をつづけてはみたものの所詮は女。領田たちが、おもわず顔を見合

わせたほどの悦虐の絶叫が、ほとばしった。「若い女というものは、いったん、せきをきったとなると、こうも、すさまじいものかのう。到底、余一人では女を、このようにする事は不可能じゃ。下林、その馬竿筒、余が貰い受くるぞ。その代り、五十石の加増じゃ。いや、この女の夫の禄高と同じく百五十石にとりたてて仕わそう」

「あ、ありがたき幸せ。では、殿、とくと馬竿筒の威力を！」

左手で筒をにぎり、右手で把手をとった下林は、じいっと美和の表情をみまもっていたが、ここぞ！ という瞬間を見つけたのであらう。力いっぱい把手を押す。

「ウ、ウ、キュウ。キイイ……ヒャアア」

ひととき五体を大きく痙攣させた美和は、次の瞬間、ガツクリと全身の筋肉の働きをためてしまった。

この水鉄砲に似た責め筒の先端の小さな穴から、なんらかの液体が押し出されたものに相違ない。

同時に、ツ、ツウーとすすみよって、うなだれた顔をおこし、その唇のなかに何粒かの紫色の丸薬をふくませた下林は、

「もう大丈夫でござる。縄を解き、自由にいたしても絶対に逃げは、いたしませぬ」

「逃げぬとな。抵抗もいたさぬというのか」「御意！」

下林が自信をもって答え、美和の四肢を縛っている縄を、さっさと解いた。

領田たちの好奇の視線のなかで、まるで骨という骨をなくしてしまったように、ぐったりと背疊にうつぶせていた美和の裸身が、ものの数呼吸ののち、奇妙な動きかたを始めたではないか！

両手で上半身を支えておきあがった美和は夢みるような眸で一座を見廻すと、誘うような、しぐさで自らの胸の双つの隆起を、まさぐってのち「ア、アアア……」と、やるせない喘ぎを洩らし、右脚を前にのばして、

「おおっ！」という、どよめきがあがる。「下林、これは何としたことじゃ」「媚薬にござりまする。媚薬と、ひとくちに申しまして、いろいろと使用法もちがいまするもの」

溜息が、あちこちからあがったのは、美和が、腰をうかせたせいであつた。

あえぐように身を揉んでいた美和が、今度は坐り直して、踵を爪先立たせて中腰になり双臀をその上にのせてから自ら両膝を一直線になるくらい大きく、開いたではないか。

「すごい媚薬じゃ」

領田が息をひそめる。

「三刻か四刻ほどは効力を保ちおりまする」

「こいつは参った！ のう、美女衛門。これでは、そちの出る幕がない」

「下林さまの秘技、まったく感服のほかはありませぬ」

さすがの美女衛門も、どうやら南蛮渡来らしい媚薬の効能に、ただ啞然とするばかり。

その眼前で、美和は、女の本能のままに行動し口走るほかはなかった。

「ど、どなたさまでも、よろしうござりまする。早う、妾を抱いて下さりませ。早う、早う、お、おねがいござりまする」

芙蓉の花をおもわせる藩中随一の美女に、
こう呼びかけられて拒む男はあるまい。

興奮の渦巻く座中に、

「下林、そちが一番手じゃ。余がじきじき検
分してとらせるによって首尾ようつとめよ」

主君、領田の声が、ひびいた。

「ハ、ハッ。有難きしあわせ！」

並み居るお歴々をさしおいての、この光栄
に小倉の袴をぬぎ捨てた下林は、いくらか緊
張した面持ちであった。

あとは、くじ引き——石川、熊坂など十人
前後の侍たちが、われがちに、くじをひいて
一喜一憂するさまには、おかしいほどの真剣
さが、こめられている。なかでも六十才近い
用人の樺山が五番くじをあてて満更でもなく
悦に入っている光景は、淫らななかにも、ほ
ほえましくさえ見えた。

美和晒し

秋の日は、とつぷりと暮れていた。

普通ならば、夕餉もおわり静かであるはず
の中庭が、今日に限って、ざわめかしいのは
長廊下の中央に、晒しものにされている衣笠
美和のせいであった。磔柱に「大」の字に架

けられている。

まだ意識は、回復してはいなかった。

猿ぐつわの上の、しっかりと閉ざされた臉
が、いつもより、ふくらみ、一本の白い棒の
ように左右に伸ばされた双腕につづく脇腹が
篝火に映えて、なまめかしい。征服されつく
した女の哀れさが、泥濘にまみれた芙蓉の花
のような色香を、にじみ出させていた。

いつ、媚薬の魔力から解放されるのである
うか。下林は、三、四刻ほどと云った。

すると、もう正気づいてもよい頃——。

が、はたして正気づくのがよいのであるう
か。むしろ何も知らずに、このままでいるほ
うが美和にとって幸福なのではなからうか。
「赤い痣が、ちょっとみただけでも二十三、
四。ほれ、あのようなところにまで、ついて
おる」

小者の一人が、六尺棒で、かすかに息づい
ている内股のあたりをつつき廻すと、下女の
一人が、

「いやらしい！ まだ、いじめられたりない
って顔してるじゃあないのさ……この女」

「ほんとだよ。それに、あそこにくっついて
いるものを、ごらんよ。イヤァーダ！ 妾」

「どこに、どこに」

「あそこよ。ほれ、左の乳首のところ。あそ
こなんかに、あのようなものが、つくはずな
いのにさ。ねえ」

「お末さんたらあ、いやだあ！」

欲求不満なのは、何も江戸城大奥の女たち
だけではない。ここ領田家の中屋敷の数十人
の下女や女中、さらには、せまい長屋で、隣
の耳を気にしながら、つつましかに暮して
いる江戸勤番の中・下級武士の妻たち——い
ずれも満ちたりてはいない。

その欲求不満が、十数人の男たちによって
思う存分に哭きわめかされたであろう美和に
対する嫉み心となってあらわれてくる。そし
て、もだえた美和をハレンチと、きめつけ、
女の風上にもおけない存在とみる。

お末という女が、ほうき尻で、ぐったりし
ている美和の腹をつきあげると、あとはもう
われもわれもと物干竿、青竹、なかには長押
にかけてある稽古用のなぎなたまで、もち出
して磔柱の美和の裸身を罵り始める。

「ウ、ウウウ……」

猿ぐつわの端から、一筋の涎のようなもの
を垂らして美和が、かすかに呻いた。

「気がついたらしいよ、この女狐！」

お末のほうき尻が、豊満な乳房のつけねを

ぐりぐりつと、えぐりつける。

「ウウ……」

悪夢からさめたときのように、不安のかげをうかべた表情で、焦点の定まらぬ眸が、うっすらと開く。

もうろうとした意識の底で鈍い痛みを全身に感じて美和は、五体を何度か、無意識のうちにくねらせていたが、二度、三度、長い睫毛をパチパチツとしばたかせて、やっと意識をとりもどす。

そして、我に返った美和が見たものは、数十人の男や女、老若をとりまぜて、憑かれたように自分を見上げている視線だった。

なにごとだろう……という風に、げげんに眉を、ひそめた美和は、次の刹那、稲妻にでも打たれたように五体を硬直させた。

（あなたあ！ 内記さま！ 妾は、もうこれ以上は生きてはおられませぬ……）

激しく顔をのけぞらせた美和は、力いっばい舌を噛んだ。そして死ぬはずであった。

しかし、領田たちは、せっかく手に入れた美しい獲物たる美和を、まだまだ殺すような真似はしない。ここ半年や一年、飽きがくるまで、颯りつづけるつもりである。

そのための猿ぐつわ——美和の自害を、さ

またげているのは、こともあろうに、下林と池尻の煮しめたようなフンドシであった。

それに気づいた女たちが、いっせいに野卑な叫びをあげる。仲間や小者が、輪をかけたように囁きたて、抵抗ひとつできない裸身にわらわらと、ひしめいていく。

篝火に、照らし出されるその異様な中庭の光景を、一面に咲き匂った美濃菊のかげから二つの影が見つめていた。

「お前さん、無理だろうねえ……」

「そうだなあ、あの女だけならなあ」

「旦那が、座敷牢に閉じこめられていたのはねえ」

「どうやら乙夜のロザリオは、麻布六本木にある元禄屋の別宅らしいし、ここはこれで」

「ひきあげるとしましうかねえ」

美和という女を救いだすことはできるだろう。が美和を救い出すと、あとに残った夫の衣笠内記は無用のもの、直ちに殺されてしまうに違いない。かとして、天井うらから観察しても、嚴重をきわめる地下牢から内記を救い出すことは不可能。不人情のようではあるが美和が殺されることは、まずあるまい。しばらくは我慢してもらおうと、虹の陣兵・洗い髪のお妻の二人は判断したのである。

「かわいいそうだわねえ、あの女のひと」

「お前、身代りになってやってもいいぜ」

「そうだわねえ。桜の花も、ほれ、このように美しく匂っているし、妾、つかまってみようかしらねえ」

馥郁と咲き匂う菊の花を、桜という。

「スッ裸にされて、数十人の男に世話されるのもオツなものだぜ」

「ほんとだねえ、お前さん。妾でも結構、女だものねえ……アレ、雪が降ってきたわ。はやく、徳夜叉さまに知らせましょうよ」

「そうしよう。それにしても、美しい雪じゃねえか。お前が降らせているんだろ」

「そうだわ、妾が降らせてる。そして、お前さんも降らせてる。キレイだねえ」

菊の花をむしって、雪のように虚空にはうりなげていた二人は、やっと、あやしい影にきがついたのであろう、おっ取り刀で馳けつけてきた、安房は東条十萬石領田藩の牢奉行

鈴木四郎太夫をはじめとする十数人の侍たちの目のまえで、花吹雪とともに消えてしまった。

—（つづく）—

×

×

×

×



一九七一年一月号、この月の奇クは私にと
って忘れることの出来ない一冊である。この
時以来、前田真知子という一人の女性は、私

の心の中に強く灼きつけられたのである。何
故、これほどまでに彼女は私の心の中に忍び
込んでしまったのであろうか。それは当時、

< 告 白 >

真知子慕情

中 田 博

同じ学生だったという親近感もさることなが
ら、誌上に登場された他のM女性には大変失
礼であるが、これほどまでに清純な感じのす
るM女性には、いまだかつて、お目にかかっ
たことがなかったからである。

「Mの天使」という言葉は、彼女にこそ、ふ
さわしいと思った。それゆえに、この清純さ
の中に潜むM性を考えた時、非常にひかれる
ものを感じたことも、また事実である。「女
は顔だけでは分からない」という言葉を、ま
ざまざと思い知らされた。前田真知子が白線
処理をされた自分の写真を眺め、全国の愛読
者がどんな想像をしているのだろうと考えた
時、果たして彼女自身の心境は、どんなもの
であらうか。その事を考えると私自身もゾク
ゾクとしたものを感じずにはいられない。

さて、一月号で前田真知子を知って以来、
私は同じ東京に住んでいる彼女に、なんとか
して会いたいと思った。そこで六月号の読者
通信にも書いたように、都内の各大学のキャ
ンパスを、彼女の面影を求めて歩き廻った。
そして会えぬままに悶々としたものだった。
そう簡単には探し当てられる筈のないことを承
知しながらも、じっとしていられない気持だ
ったのである。これは実行には移さなかった
が、彼女が京都の法華クラブに宿泊した日は
分かっていいるのだから、当日の宿泊者名簿を
見せてもらい、その中から東京在住の彼女と

同年令の女性をピックアップして、その一人を当たってみようか、とまで考えたものである。

こうして私のアイドルとなった前田真知子ではあったが、どうした訳か誌上から、まったく姿を消してしまった。しかし私は一日として彼女のことを忘れた時はなかった。それから一年、今年の四月号で前田真知子は「京都慕情」という美しい紀行文で、再び私の前に姿を現わしてくれた。しかも彼女のM性はこの一年の間に更に高揚していたのだ。

六月号に発表された提崎昭人氏の「思う様の記」は興味深く読ませてもらった。文中、氏が前田真知子の性格を、無口のくせに相当に意地っぱりで、よく人に突っかかるタイプという気がする、と分析されていたが、私自身も同様に感じていた。更につけ加えるならば、彼女は学生時代、学生運動に携わっていたかどうかは分からないが、私が学生時代に接していた女性活動家に共通した性格、大げさに言えば生き方が、彼女の中に見られるように感じた。また提崎氏は、文中で「京都慕情」から前田真知子のM性を実証づける部分を引用されていたが、その部分の重複は避けるとしても、その他にも、私の脳裡に強く灼きついた部分が数多くあった。

「女として、もう既に十分、生育した自分の身体を、そして一糸まとわぬハダカの自分を

眺めているとき、あからさまに、自分のすべてを、すみずみまでさらけ出してしまいたいという強い欲望が燃えあがってくるのを、どうすることも出来なかった」

「奇巧の緊縛モデルとして、麻縄できびしく縛りあげられ、ハダカの身体のすみずみまでをカメラの目で執拗に追い迫られる——と、そう考えただけで、私の全身が燃えあがってしまうのだ」

「縛られて自由のきかない制限下において、はつきりと写真にうつされることは、恥かしければ恥かしいほど直接、生理的な快感につながるのである。どうすることも、押さえることも出来ない生理的な快感は、また激しい羞恥感を私に与え、その強い羞恥感が、またより激しい生理的快感につながっていた」

「全裸にされたときは、自分はどうされるのが好きだ、という強い衝動が胸をゆさぶったし、縄が白い肌を締めあげてゆくと、今までに経験したことのない、やるせないような快感が全身を、しびれさせたのであった」

M女性としての心境が、これほどまでに如実に表現された文章が、これまでにあっただろうか。私は今さらながら彼女の清純さの中に秘められたM性を再認識したのであった。

ところで、六月号に掲載された私の読者通信は、四月号を見た直後に書いたもので、私は彼女からの返事を待ちに待った。しかし、

二週間経っても、三週間経っても、彼女からの返事は来なかった。

三月下旬、私は苦しさに耐えかねて、また彼女の愛する町を更に詳しく知るために、京都へと旅立った。「京都慕情」で彼女が紹介されていた場所を訪れ、二カ月前にこの同じ場所を彼女が歩いていたのだと思うと、感無量であった。五月号の編集部だよりで彼女が奇巧の愛読者を配偶者に望んでいると知り、一度は欲しかった私ではあったが、六月号の編集部だよりは私を奈落の底に突き落とした。それは彼女が元のボーイフレンドから手紙をもらったということである。結局、彼女は元の鞘におさまるような気がしてならない。

彼女とのプレイの可能性が絶望的となった今、私は、彼女が辻村氏のカメラハントに登場されることを願うものである。今までの単なる緊縛モデルではない真のSMプレイを体験した時、彼女の清純な表情や、女として最もかくしておかなければいけない個所が、どのように変化するか大変、興味深い。特に、辻村氏の得意のバイブ責めや、浣腸に悶える様子を、辻村氏の筆で克明にレポートされることを望むものである。

真知子さん、ぜひカメラハントに出演して下さい。きっと、今までの緊縛モデルでは得られなかった、更に激しいM感覚が得られると思います。

文献
渉獵

女相撲書誌雑考

(中)

雄松比良彦(カットも)



三、明治、大正、昭和

江戸全盛の余韻としての興行女相撲は、やがて消え去った。その後も時々それらしいも

女相撲の興行を生むには至らなかった様である。

以下、同一筆者が異なったペンネームを用いておられるものもあるが、故平井通氏を除

のは登場し、戦後もないではないが、東北と九州に伝えられるような、催し物としての女相撲も、厚く身体を包んで行なわれるもので

それも中年以上の婦人しかやり手がないというありさまである。別府の夜のショーに裸に渾姿の女相撲があるともいうが実物は見ていない。現代は女相撲のイメージは虚構の中にのみあるといえる。昭和元禄も裸の

き原則として指摘しない。不明の分もあり、センサクが失礼になることもあるので。

○ 明治初年の女相撲禁令

明治政府は、その後の史観では、日本の近代化のレールを敷いたとして不当に高く評価されている。それ以前の日本の伝統を野蛮、未開視する劣等感が強く、これが現代までの日本への江戸以前の遺産の伝承について致命的断絶となって、今日の何国人か分からない日本人を生み出す第一歩となった。薩長の田舎者が要職につき、微妙複雑な文化は精神的にも理解出来なかった点もあろう。丁度、第二次戦後、伝統や良習を知らずして成り上がった文化人どもが外国の口車によって我国の風習をコキ下ろしたのと同断である。日本の近代化は何も明治政府がやったのではなく、世界でも珍しい近代社会を実現していた江戸

期の江戸、大坂、京都などの大都会にすべてが準備されていた事を強調せねばならない。単細胞的、唯物史観が事態を不幸にした。

さて女相撲が見世物であったか興行物であったかは別として明治初期に禁令の出ている事は衆知である。朝倉氏、及び後述、石田竜蔵氏によると明治五年三月十九日、男女蛇使及び相撲その他、醜体の見世物が差し止められ、ついで同十一月、違式註違条例が發布されて、東京府が通達、羅卒番人が査察する事になる。その二十五条に「男女相撲並びに蛇使その他醜体を見世物に出す者は一十より少なからず二十より多からざる」違式答罪に処する、とある由である。石田氏の文は警視庁公文年鑑等によるものである。しかし平井蒼太氏の諸文では明治六年七月十九日、御布告二五六号として違式註違条例九十カ条が出たとあり、太政大臣三条実美名で、その二十一条に上記の如くあるとされていて多少、違っている。女相撲どころか二千年の伝統のある男の相撲まで明治七年五月二十八日の東京府よりの警視庁への通達の中で元来、角力業は裸体となり鼓勇勝負を決し或は身を傷ついたりもするのでなるべく漸次廃絶せしめるべく内務省へ具申することについて諮問してい

る。同十七年三月十日明治天皇の芝離宮での天覧相撲等をへて大相撲が生きのびたのは、まことに幸いであったが、女相撲は上記の如く禁止され（これら禁令は「男女相撲」の禁令であるとの意見もあるが）その後の明治二十三年十一月二十七日に至って素裸の女相撲は東京では全く差し止められている。

外国の風俗を基準にして日本の風俗を野蛮云々とする風潮は今日でも、ますます多い。

先日にも国鉄の「ディスカバー・ジャパン」なる国籍不明のポスターで「渾姿は風紀を害するからお断わり」という話が、新聞に出ていた。水パンは上品で渾は下品とは、まことに奇妙な発想である。なぜ渾が下品でナイフやフォークが上品ということにならぬのか。

○ 静軒痴談 寺門静軒著 明治八年（一八七五）

内容的には江戸期に入れるべきだが、刊年が此処なので、そのようにした。静軒は前出「江戸繁昌記」を出して当局にニラまれ、明治元年に歿している。本書下巻、「角力」の項に「本邦明和中ニ女角力ハヤリシトキク、漢ニテモ女角力ノコト、司馬公ノ集ニ、上元ノ婦人相撲ヲ論ゼシ状アレバ、宋ノ世ニ流行セシコトトミエタリ。近年兩國ノ觀場ニ、盲

人ト女子トニ、角力トラセ、又近日ハ豚ト犬トニ、スマヒトラス云々」

○ 女相撲物語 賣茶翁 刊年等未詳

明治二十三年十一月十三日よりの有名な回向院興行を記しているとして、平井蒼太氏の諸文にのせられているが明らかでない。賣茶翁というのは、私、不敏にして例の著名な黄檗僧（まいさおう）のことしか知らないが、これは一七〇〇代の人なのだが。

○ 檜重雜筆 刊年等未詳

これも平井氏の書にあり、大阪千日前見世物として明治三十年ごろの諸目中に女相撲ありとしている。画家小出檜重氏のことか。

○ 押道の栞 刊年等未詳

同右。大正年間、長野県下に女相撲興行の事ありとする。

○ 古事類苑 武技部

著名、且、茫大な資料である。全体は千巻に上るといわれており、「相撲節」「相撲」について、広範な古書の引用が列挙されているが、「第二十、雜載」に「江戸繁昌記」や「嬉遊笑覧」の女相撲を引用している。

○ 女角力 今東光作 同人雜誌「不同調」

第二卷第四号大正十五年四月（一九二六）

中村武羅夫氏の主宰、新潮社のバックで当

時、著名の文人を同人として刊行された「不同調」は大正十四年から昭和四年に及んだが活動としては比較的、地味なものが主であったせいか、他の同人誌のように花々しく取り上げられる事がない。現在、原誌もコピーも所蔵しないが、先年この作を見た時には大変強い印象をうけた。純文学の分野における、きわめて特異な、注目すべき作品であろう。

小品ではあるが当時の今東光氏の筆力の一端を、うかがい知りうるものである。次項にのべるエッセイでも今氏は、今少し女角力をかいてみたかった、とのべられているが、これから発展して氏の女角力をテーマにした作が現われなかったのは惜しい。尤も氏は、この後、例の特異な生活に入ってゆかれるのではあるが。私の手元のメモによれば「不同調」大正十五年の四月特大号の創作欄には十人の作家が短篇をのせているが、このうち第百十七頁―百二十三頁に、この作が載っていた。内容については、これも既に雪崎京人氏の御紹介がある。雪崎氏の広範な御知識は驚くべきものがある。冒頭の一文「三月初旬に女角力の椿興行団は浅草に小屋がけした」太鼓櫓の上で撥をさばきながら話しあう二人の女力士、若緑と八重桜。興行は、ぜんぜんの不入

りである。まだ男も知らぬ八重桜は十七。父母も知らず、女角力へ売られた身の上。年増の若緑の口からは、わびしい述懐めいたものが出る。まばらな観客の中に、よく見に来ている色白の若い男。八重桜を好んでいるらしいが判らない。彼女の勝ちに長い拍手をしてくれる。八重桜も、ほのかに恋心を抱く。しかし、それはそれ。又、果てもない巡業の旅に出てゆく……。この女力士達は刺し込みを着て猿又を二枚はき、その上から、しめ込みを、がっちりしめるといふ、大正期の出でたちである。

「若緑さん。あたしも彼の人に、ほんの少し惚れたわ」と、八重桜は一つふとんの中で話しかける。その日、例の若い男が見に来ていて、突然衝動を感じた彼女は相手の親友、若緑を荒っぽく土俵に叩き伏せたのであった。

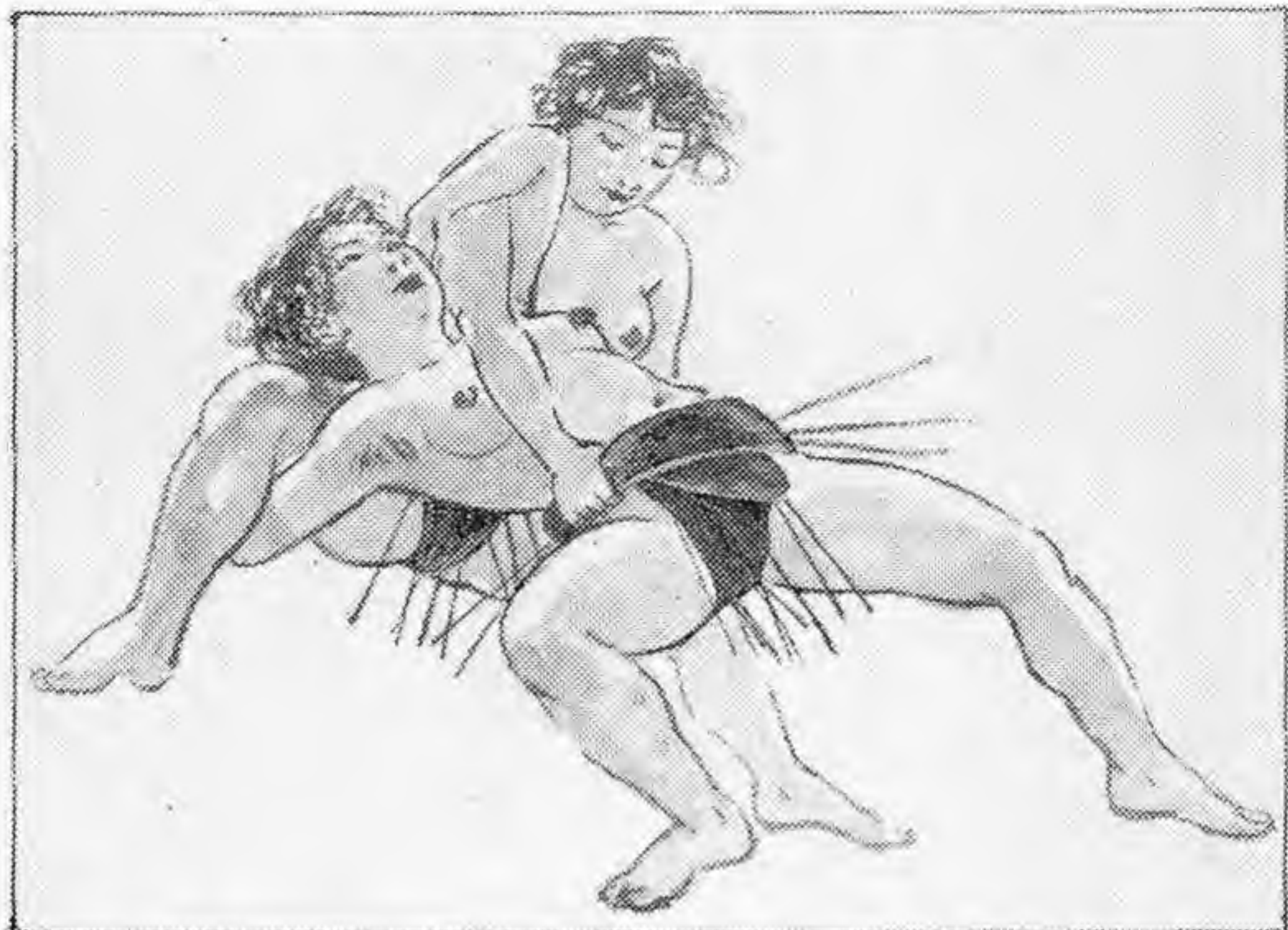
「誰でも一度は、そんな時があるもんだヨ。みんな覚へがあるヨ」といって若緑は静かに寐息を立てる。八重桜は泣きじゃくりながらいつか眠ってしまった。――ヘタな抄録をすると今氏に失礼になるが、大体こういう作である。次項の中にも今氏の書かれている「あわれな、いぢらしい女角力」の娘力士の描写からは、一種ほのぼのとした感銘をうける。

○ 女角力のこと 今東光作 「不同調」

第二巻第五号 大正十五年五月（一九二六）

これは今東光氏自身が、前出の作を書いた動機や女相撲に対する感懐、ごく簡単な女相撲の歴史などについて二ページ弱に書いたもので、小説に女角力をかいたのは今東光のみであることや、柳橋で西郷・大久保などが芸妓の裸角力を見たらしいなど述べてある。前作のいきさつについては「三月初めに浅草で女角力を見た。実は何にも書けないので、ぶらりと散歩に出て、ひよんな見世物を見たのだ。さうしてその晩、一気に書き上げた」とある。その一行が、例の高玉組であった事や警察から差し止められて、どこかへ旅立って行ったらしいこと。雪崎氏御指摘のように、純文学畑での女相撲といえば現在、上記の作くらいしかあるまい。今氏は直木賞作家としてカムバック後、幅広い活動をしておられ、河内相撲を題材にした作などもあることだから、この辺で又、女相撲をテーマとした中篇か長篇をもつてされないものであろうか。現文壇をみわたして、氏はもっとも、ふさわしい作家のように思われる。出来れば江戸時代を設定して、美女力士の活躍でも書いていただきたいものと思う。なお、この大正十五年三

----- 娘相撲図絵 ----- 『わざがえし』 ----- 雪 崎 京 人 -----



月に今氏が浅草で見られた女角力については平井蒼太氏も、和歌森太郎氏も記述しておられるが、以下、平井氏による概要を記してみよう。和歌森氏の「相撲今むかし」には、「高玉」の垂れ幕の写った初切りの写真が入っている。女力士は後出「猫又」と「千歳山（川?）」。

子の飛入りを許したため三月二十四日、当局より禁止された。以後、東京では見世物女角力興行は一切、不許可となる由である。連名は東、張出大関遠江灘くん、大関大井川きぬ天竜川さゑ、関脇東海道ひさ、小結金剛石きみ、張出前頭猫又しん、前頭国見嶽つた、小柳みよし、佐渡島さだゑ、出羽花てる、若緑さみ、最上川さだ、瀬戸山ふみ、君の里さん仲仙道はる、君の森さき、出羽里よし、馬見崎みつ。西、張出大関千歳川さだ、大関梅の里しま、関脇手柄山ちよの、小結隅田川みゆき、前頭北海道とめ、太田川ちや、小松山かじ、若桜みつゑ、若港みつゑ、若港やす、一二三山きよ、浦勇いよ、一力まつ、国勇つね司天竜みきを、金竜山とし、勝勇ゆき、出羽崎きく、総務三十五名、とある。これらの女力士のうち、今氏の御作の中に「若柳」「天竜」などという名が実際、使用されている。忘却の彼方に去った高玉一座も今氏の作品として残った次第だ。

○ 見世物研究 朝倉無声著 雑誌「中央公論」 大正十五年八月より連載 該当部分は同年十一月号（一九二六）のち春陽堂より単行本として昭和三年（一九二八）刊行 女相撲については、上記十一月号に「第十

三 珍相撲」として出ている。鳶魚老と並んで江戸風俗・文芸の大御所による貴重な文献で、とくに江戸期女相撲の歴史や文献は、殆どこれにつきていっているといつてよく、その後の諸解説の基本をなしているものである。昭和期に出た女相撲についての論説は（引用を明言されているか否かは別として）興行に関する限り、殆ど本書の孫引きを出していない。虚構の方の典拠が鳶魚老につきると同断である。本書には、もちろん女相撲の他にも盲女女の相撲、座頭のみ相撲、女と獣の相撲なども、あげてある。再刊が、のぞまれる。

○ をんなの角力 武田麟太郎作 同人誌「真昼」 大正十五年一月（第八号）（一九二六） 雑誌「文明」昭和二十二年一、二月号にも再録

実物未見。この作家の最初期の秀作として注目されたものという。内容は、もちろん女力士の取組などではなくて、雨で興行が休みの女力士が子供に乳をふくませている、といったペーソスが主題の様であるが、この作家が女相撲を見た事があるらしいのは面白い。

また、これを書いた時代の武田氏は無名の新人であつたのだろうが、従つて既に知名であつた今東光氏と同様には論じられぬとして

も純文学畑にあらわれた女力士を扱つた二つの作品が、きわめて年代的に接近したところに存在していて、それが丁度、高玉組を中心とする興行女相撲の最後の余燼のあたりになるのも興味がある。武田氏の作風からして、どのような作品であるか一寸、判らない。氏が相撲一般に関心をもっていたかどうか、それはそれとして、最近発表された資料であるが、鈴木彦次郎氏によれば、武田氏は文士相撲にも出て来たらしい（雑誌「太陽」特集・大相撲「なつかしや大森相撲協会」）。「文明」の所蔵先も欠本が多く、六興出版社の全集にも収めてない様である。

○ 明治秘話 石田龍藏著 日本書院 昭和二年（一九二七）

これは後に昭和九年、宏元社から「明治変態風俗史」と改名されて再版されたものである。笹川臨風博士著として、よく引用されるが、笹川氏は序文をかいているだけである。

「明治珍聞女相撲」として有名な明治二十三年十一月十三日の興行について述べているのだが、とくに本所相生警察署の調査として、女力士たちの身元や年令、体格などをのせてあるのが珍しい。なお又、「成上り者と明治風俗」では、西郷、大久保、大村、木戸、山

縣、松方、井上など、ことごとく下士輕輩の成上り者であるとして、それが明治の悲劇のひとつでもある、その一例として、先の今東光氏のエッセイにもあらわれる挿話をのせているので、少し引用する。「今東洋百華美人伝中の一節を記すと（中略）一タ八士あり、二州橋東の青柳亭に至り歌妓十数人を聘して宴を張る。八士皆……儼乎たる名士……忽にして慷慨痛憤絶呼……歌妓其勢に怯れ家人皆手に汗を握る。一士議を出して曰く、汝歌妓輩裸体となり角力をなすべしと勝つ者は賞あらんと、歌妓逡巡して答ふる者なし。士曰く汝なざざれば帰さずと自ら階を撤す、妓輩相顧色を失なふ、士怒り曰く命に従はざれば猶此柱の如くなるべしとて刀を抜き柱を切る。

（中略）時に一妓あり進んで曰く、為すも辱められ為さざるも亦辱めらる……事茲に至るむしろ進んで為すべしと、衆に先だち衣帯を脱し跳ねて対手を求む、衆妓これに励まされ……八士之を見て云つて曰く快なり快なり云々、各四五番を角し、皆二十両ばかりの金を得たり（中略）當時有名某公（木戸孝允）なり……他の七士を聞くに皆有名の……西郷大久保ら皆此中にありと（下略）。芸妓の女相撲もいいが、ずい分ひどい事をやったもの

である。わたくしは彼らのこういうやり方を強く批難する。女闘美史の風上にもおけぬ徒輩である。

昭和初年ごろ、一時さかんに出版された風俗文献は、今日なかなか目にふれないものも多いが、酒井潔著「らぶ・ひるたあ」（昭和四年、文芸市場社）、松浦泉三郎著「好色見世物志」（昭和七年、風俗文献資料刊行会）雑誌では「奇書」第二巻第二号（昭和四年）に田中香涯氏の文章等、女相撲についてふれられているが未見である。こまかく拾えば、おびただしい風俗文献の殆どに女相撲を一言した個所くらいはあると考えてよいが、今後は、ますます調べにくくなるであろう。

○ 人体異形見世物考 桃源堂主人著

○ 徳川時代の見世物暦 皆川美彦著

○ 好色のそきからくり 岡田 甫著

この三者はいずれも例の雑誌「風俗資料」（風俗資料刊行会）第三冊「世界見世物研究号」昭和五年（一九九三〇）に掲載。興行女相撲にふれている。

○ 見世物女角力志 耿好洞人 同第三冊

○ 続見世物女角力志 同第四冊

平井通（蒼太）氏の女相撲ものは数種あり

この辺が初期ではないかと思われるが、内容的には、どの文章も大体、同じではないかと思われる。これも、その一つ。後出「歴史公論」のものがコンパクトにまとまっている。

この他、氏の著作として

○ 女角力の話 雑誌「デカメロン」昭和六、七年（一九三一、二）

○ 女角力考Ⅰ、Ⅱ 雑誌「変態黄表紙」

昭和三、四年（一九二八、九）

○ 見世物女角力志 和装単行小冊 昭和八年（一九三三） 百部限定（信楽で発行）などがあるが未見。御所蔵の方があれば梗概をおしらせ願えると幸である。

（附記。氏の遺作「おんなすもう」が昭和四十七年三月刊行された。後出）

後述する斎藤夜居氏の本や「日本艶本大集成」に述べられている、いろいろの風俗資料書について、いちいち実物にあたりたいのであるけれども、われわれの世代では、いささかムリな話と思われる。

○ 見世物女角力のかんがへ 平井蒼太著 雑誌「歴史公論」（雄山閣）第五巻第五号 昭和十一年（一九三六）

この号は「相撲の変遷」特集。平井氏の女

相撲ものの代表的なもので、西鶴にはじまり明治、大正、昭和までの変遷の主要なものはすべてあげてある。又、この一文は後述する古河三樹氏の（新版）「江戸時代大相撲」にも長文で引用されている。

○ 相撲と民族（俗？） 中山太郎著 掲載は右と同じ

雨乞い女相撲の民俗について二・三の資料が記されている。他にないので貴重である。

○ 仇討女角力（あだうちおんなすもう）村松梢風作 中一弥画 雑誌「講談倶楽部」（大日本雄弁会講談社）昭和十二年九月号—昭和十三年十一月号（十五カ月連載）（一九三七—一九三八）

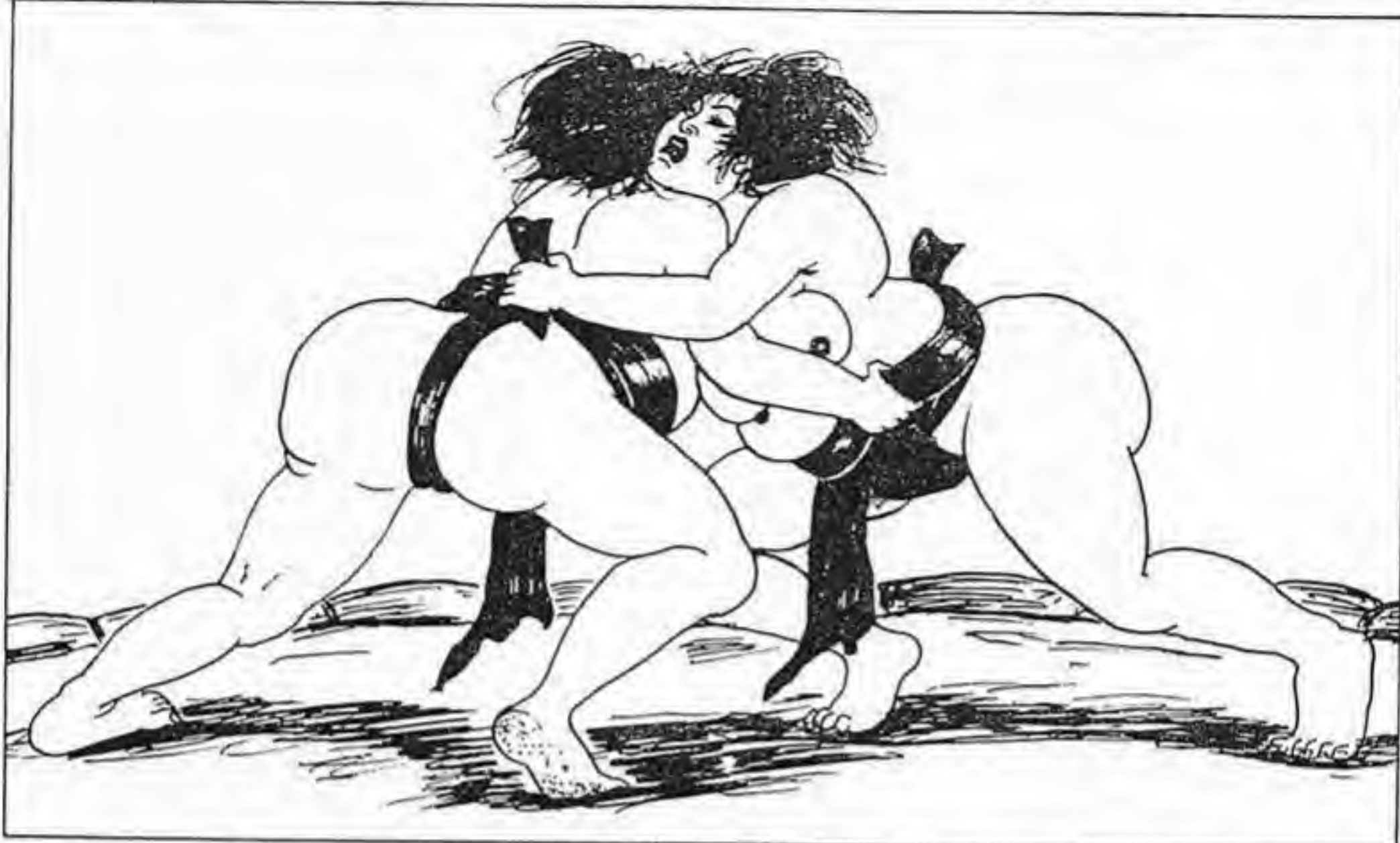
村松氏が「講談倶楽部」に執筆された唯一の長篇。女相撲を点景的に使用した作は他の作家にもあるが、何よりも著名作家が女力士を主人公とした（現在までのところ）唯一の大衆文芸として、特異のものである。すでに本誌旧号で雪崎京人氏の梗概紹介があった。これは大衆文芸としては、さほど注目されなかったものか、単行本も出た様だが版も多く重ねず、その後、文庫本に入って普及することなかった様で、今日では殆ど見る事が出来なくなってしまうのは、まことに残

念なことである。どういふわけか梢風氏の全集は刊行されておらず、死後かなりたっているのに計画されない様で、この作と限らず梢風ファンにとって遺憾な事と思われる。大衆雑誌の運命として、そのコピーは、すべて保存されておらず、アカデミズム偏重のゆえに各地の公立図書館にも全く所蔵がない。国立国会図書館編集の逐次刊行物所在目録によっても、全国で唯一カ所、某市の図書館が出てくるのみ。しかも、そこに出向いてみると残念にも、すでに廃棄されて無いという具合である。実物を入手したければ根気よく古書をあさるのであるが、すでに三十五年後の今日、しかも戦災による大焼失をへて、丁度この分が十五冊、揃って見つかるとも思われないから、一部分で満足せねばならぬかもしれない。ともあれ、昭和期の女相撲文献として屈指のものであり、諸氏の探索の参考に少し書誌的に詳記すると以下の如くである。昭和十二年八月号第二十八―九頁間の折込広告に「作者の言葉」を入れた特大見出しの予告文ここでは表題は「仇討ち女相撲」となっている。著者が「女角力」の字を用いられたのは江戸時代の慣用によるものであろう。本文は十二年九月号、カラー口絵（中一弥画）には

じまり、十三年十一月号で完結。雪崎氏の御紹介にもある通り、父を殺された武家娘、清原梅乃が遇然のことから女力士梅ノ森お梅となり、やがて、めぐりあって亡父の仇を討つまでの物語。いわゆる娘仇討ちものであって、仇討ち相撲としての仇討ちではない普通の仇討ちであるから、女相撲そのものを延々と書いてあるわけではなく、取組の場面なども二―三個所、上記でいえば、十二年十一月号（お梅の初陣土俵と今一番）と、十三年二月号（將軍上覧女相撲）にあるくらいのものである。中一弥氏の挿画もカラー一枚をふくめて全体で丁度六十枚あるが、凛々しい揮姿の好力士が描かれているのは上記十二年十一月号のみで、初陣の俄相撲で意外の心得を発揮したお梅が相手力士をうっちゃるところと、お梅が土俵に上り、水をつけようとして、ふと観衆の中に相愛の武士藤由紀太郎の姿を見出し、ガク然とするところ、の二葉しかないのは、いささか残念である。今一枚、これは裸ではないが、褌と馬簾下がりをつけた梅ノ森が雲竜模様の広袖をはおって、あけ荷の前に坐り物思いに沈んでいるところも描かれている。中画伯の美人画は定評があったから、その麗筆で更に、いくつかあればよかったのだが、

本文にその場面がないので仕方がない。他の挿画では、男マゲに結った女力士梅ノ森の着物姿が可愛い。序でながら、田沼時代（この作の時代設定は安永元年、二年であることが判る）の女相撲のいで立ちは、まだ女マゲであり、本当は見世物的なもので、この作のいうように、ちゃんとしたものでもなかったと思われるけれども、かりに土俵その他の仕様作法、風俗が、平行する同期回向院大相撲に似せたものであったとしても、今日のそれは、いささか異なっていることは御存知の通りであるが、この作では叙述も挿画も全く昭和十二年ごろ、つまり現在の大相撲そのままの女力士が描かれている。これは、さすが江戸文芸以来の伝統をひく大衆文芸としての正道をゆくもので、ヘタにあまり厳密な考証を振りまわすのは考えものである。江戸歌舞伎の舞台などにしても、当時としては、たとえば平安時代の女が当時の風俗、今でいえばミニスカートかパンタロンで出て来たりするところがよかったのであろう。講談等、男の大相撲物も大体そのようになっている。「この時代の相撲の風俗はこれこれ……」というのも悪くはないが、昔風の褌をしめた女力士が昔風の作法（仕切りの形も今とは多少、違

----- 女角力のイメージ ----- 『水入り寸前』 ----- 椿 寿郎 -----



う)で取組んでも現代の大衆にはなじみが悪く、私自身なども、そうである。これは、本誌に執筆される女闘美愛好諸氏の御作も、すべて時代のいかんをとわず、揮の形をはじめ、仕切り等の作法や、(江戸初期を設定したものにも、居眼相のかまへはないであろう)勝負の内容、極まり技など、大体現代の仕様に則っておられるのと同趣味といってよい。個人差もあるが、現代の女闘美愛好(髪形等をのぞいて)は現在の相撲を女性に移したものとして感じ取られるからである。初期の大衆文芸の諸考証の弱さを、三田村鳶魚老が手きびしく批判しているが(「大衆文芸評判記」昭和六―七「日本及日本人」)、それとこれとは別であろう。また上記のように、あまりにも下卑た見世物では、武家娘が身を投ずるには適當でなく、いくら見世物でも、そこには幾分の風格ある興行物として、回向院に準じた女力士社会が書かれてい

るのも悪くない。

この項が長くなるが、私が先年始めてこの作に接した当時、大いに清原梅乃にとりつかれ、古今集ではないが絵にかきたる、おみなを見て徒に心を動かす仕儀となつて、この作の展開する隅田川の中洲(なかず)から大川を眺めに行ったり、梅乃の故郷である二本松市外の箕輪村へ行ってみたり、(「金色夜叉」にひかれて熱海へ来る人もあったとか)したものである。この中洲に女角力の本拠があったというのは、どの文献にも全く見えていないから、梢風氏の創作であろう。私の子供のころは今少しマシだったが、現在のの中洲は倉庫街の上にハイウェイのおっかぶさる殺風景百パーセントのところである。もっとも江戸ッ子は御存知の様に、この作の中洲と今の日本橋中洲町とは別の土で出来ているから懐旧にふけても意味がないが。「中洲」の初代理立ては安永元年に出来、町家が建ったのは同四年であるから、この作とは、いささか前後しているが、それはそれでよい。その辺のことは、たとえば「隅田川とその兩岸」三巻をみられたい。何はさて、大川は昔のままで、ここに美しい逞しい武家娘が女力士として土俵の生活を送り、大川の真中、船と船

を合わせ、愛人の武士に助太刀されて父の仇を討ちはたしたなどと空想するのは、わずらわしい日常を逃がれる絶好の手段である。この作が有名になっていたら、今の清洲橋あたりに「女力士梅ノ森仇討之跡」とでもいった碑など立てばよいのだが。

なお、この作については岡田貞三郎述「大衆文学夜話」の附表、その他にも触れられている。

○ 相撲記 舟橋聖一著 創元選書（創元社） 昭和十八年（一九四三）

現在、横綱審議委員の同氏が戦争中、執筆されたもの。氏と相撲の関係は有名で、御作の中にも多く出てくるが、その扱い方を見ていると、一種「高級なエロティシズム」を相撲に意識しておられる様である。女相撲を扱ったものはないが、本書は一言のみだが雄略女相撲に言及されているので取りあげた。相撲一般の文献としても、すぐれている。

○ 日本相撲史 横山健堂著 富山房 昭和十八年（一九四三）

「義残後覚」の比丘尼のこと、又「女角力の盛衰」の項に、雄略以来、昭和初年までの諸資料による通史をのべている。本書は今日でも入手しやすい。なお、同名の書は酒井忠正

氏の上、中巻本としてもあるが、これには采女相撲しか出ていない。

○ 禪をばづした女相撲 尾崎栄一作 津田浩画「奇抜雑誌」（B5判） 昭和二十五年十月号（一九五〇）

あまり上品な表題ではないが、この辺に終戦直後の開放的な雰囲気のあるのが面白い。

いわゆるカストリ雑誌の一つで、これらにのせられた女相撲ものは本稿では後に一括してまとめて述べるつもりであるが、この作は二色刷の二ページ見開き口絵で女力士の、がっぷり組んだ図もあり、巻頭に大きく扱ってあるので、B5判ものの代表として、ここに加えた。沖中村と矢の目村の対抗女相撲大会があり、矢の目村のチームの主将桃子は、女力士のトレーナーで小学校代用教員の美男子大井と、はげしい稽古を重ねるうち、お互いに好き合ってしまう。大会の当日、大将同士の必死の取組中、ハプニングで桃子の禪が、ばらばらと解けてしまい、しかも次の瞬間、素裸の桃子は相手の富士に土俵の下に仰向けに突き落とされるといふ、今様黄表紙のようなもの。江戸時代のもものは女相撲をとりあげても優雅なものであったが、時代が下ると露骨になってくる。その後、版を改め、署名も柳

原潤之助とかわり、「風俗科学」誌上に別の女相撲のカットをさしかえて「恒例女相撲大会」の題名で再録された。

○ （女闘探求）土俵に女体は暴れまわる 土俵四股平作 戸山笑作画「怪奇雑誌」（B6判）第四卷第七号 創文社 昭和二十六年（一九五二）

女力士、八重桜千珠と花吹雪艶子の三番勝負。戦後いわゆるカストリ雑誌群に土俵四股平氏のものされた多数の女闘ものの一つで、それらは一括して後述してあるが、この作はそれらのなかでも、とくに珍重にあたっていると考えて、ここに別項とした。同氏が本誌に連載の「女闘美考現」と共に、氏のいわゆる「女闘美（メトミ）」の解説と、両女力士の取組の克明な描写が特色。三番勝負の一番目は寄切り（突出し？）で艶子の勝、二番目は寄倒しで千珠の勝、三番目は大相撲のすえ、禪のとけおちんばかりにゆるんだ艶子が千珠を倒す。「お艶の乳房が、ふりわけられた様に千珠の乳房を尻に敷いた。その下にゆるんだ一重禪が汗にぬれている。前袋もゆるんだプエスがのぞいて物凄い乱闘だ」土俵氏の戦後の諸文は別として、それ以前のものは、われわれにとって明らかでなく、これも識者の

御教示に俟ちたい。前述のようにカストリ雑誌などは将来、全く残存しないと思われるので、この際、同氏の作をあつめて「土俵四股平全集」として残しておけば、後世の愛好者たちに喜ばれると思うが、どこか出版を引き受けられぬものであろうか。

同じ昭和三十六年の「怪奇雑誌(B6)」に載った特色あるものとして

○(天下泰平)女相撲四十八手 港新平画 第四卷第八号

があるが、多色刷の口絵で、いろいろの極まり手を五センチ角くらいに二十二手、かきわけたもの。一図ずつ禪の色や模様をかえてあり、髪形もちがえてあって面白い。このうち数枚は当時、発行の大相撲雑誌のグラビアを、そのまま女化してある様である。

○巴御前 富田常雄作 鈴木朱雀画 新聞連載小説 刊本は講談社三冊本 昭和二十九年(一九五四)

連載分の第六十八―七十二回が巴の相撲になっている。ほぼ同時代の同類である板額は吾妻鏡に詳記されているのに対し、巴の記述は全くないところから、現在では軍記物に虚構された伝説上の仮空の人物とされているこ

とは御存知であろう。宝光院で高倉天皇相撲節に上る相撲人の手合があり、勝ち抜いた可炎房に対して義仲が、いやがる巴をむりに立合わせたところ、巴は相手を目よりも高く差上げて放り投げたが、松の枝につかまらせて命は助けた、というくだり。裸形に禪(たふさぎ)をしめて立合う様にいわれた巴は、さすがに小袖のまま取組んだ事になっている。

○織田信長 山岡莊八作 田代光画「小説倶楽部」昭和二十九年九月号―三十五年五月号、該当部は冒頭(一九五四) 現行本は講談社 昭和四十六年

この著名作の冒頭が尾張の少女たちの娘相撲で始まるのは、あまりにも有名であろう。この場面も、その時代にはなかった仕切りや(相撲史上、微妙な時代ではあるが)おそろく、なかったであろう土俵線など、又たわむれに少女たちのシコ名になっている何々川という、いい方など現代的にかかれてるのは他にふれたと同様である。「勝った者を妾にしてやる」というのは素人の女相撲につきもので「色里三所世帯」などと同巧であるが、前記「相撲祝言」のように、嫁取りに男が相撲する事は自然であろう。容姿のもっともみるべき者はさりながら、力業で勝ち抜いたも

のを選ぶ、という感覚は確かに何かある様である。吉法師信長が娘相撲を見たという史料も言伝でもない様であるから、これは莊八氏の創作であろう。ただ「信長公記(しんちょうこうき)」天正九年四月二十一日、信長公安土の上覧相撲は史実として大分あとになるが、この力士たちの中に「うめ」という者がいて「面白き相撲仕り、是又度々御詞を加へられ恭き次第なり」と記されている。この頃には「うめ」という男子俗称があったのであろうし、「うめ(梅)」という女名は歴史的に、いつごろからのものか知らぬが、これが女であったと空想すると甚だ愉快である。「義残後覚」の比丘尼のように、しかもこれは裸に禪をしめて男達に挑み、それらを投げ倒したというわけである。

○眠狂四郎無頼控 百話 柴田鍊三郎作 鴨下晁湖画「週刊新潮」昭和三十二年十二月(一九四七) 単行本は光風社 昭和四十五年第八十九話として女力士おくらと男の元力士のごろつきとの取組がある。初出の方には鴨下画伯の取組の図一枚。――(未完)――

へ編集部より。本稿は二回分載の予定でしたが、都合により三回に変更させていただきま



私達の場合、自分達夫婦の秘めごとを、同好のファンの前に告白すべきか、否かについて、随分と迷い続けました。

私達夫婦の間で、お互いの意志を尊重し、秘密を守れることを前提とするならば、こういうことは、永久に告白すべきものではないだろうし、あえて沈黙するにしくはないと、考えながらも、毎号登場される同好夫婦の方々

の活躍を見るにつけ、羨ましく限りだと思いつけてきました。

しかし、結婚以来、私達の夫婦の間には子供もなく、他に気兼ねのないままに家内と大いに楽しんでたSMプレイが、当然のことながら、いつしか来るべきマンネリの壁に突き当たり、より以上の刺激を求めようとする欲求が、ついに私の沈黙を破らせ、羞恥心を捨てさせてしまいました。

私自身、常に変質的傾向を自認している者にとって、「奇ク」を通じ、私達夫婦の性癖

『夫婦交換SMプレイ』に

魅せられた私達の場合

早坂信治

を告白すれば、今後、私と同じ性癖を持つ人々とも、極めてオープンに語り合えるであろうと期待し、勇気をふるって拙い告白を書かせて頂いた次第です。

早速にも、京都の巻坂様を始め、国分様、東京の松原様より、過分の讃辞を戴き、今更ながら、長い期間に亘って積極さに欠け、迷い続けた結果、欲求不満をかこっていた今迄の自分が、腹立たしくさえ思えてなりませんでした。

奇ク三月号に始めて採用して戴いたフォト

と手記のことは、家内は全く知りませんでした。誌上に掲載された、自らのプレイフォトを見た時の、家内の驚きは、それは大変なものでした。

それでも、始めて自分の緊縛フォトを誌上で見たせいか、上気した面持ちで何度も読み返しているうちに、いつの間にか私の性向欲望に似通ってしまった家内にとっては、久しぶりの新鮮な刺激になって、感じられた様子でした。

私達は、駆け落ち同然の長い同棲生活からやっと周囲の了解を得て暗れて結ばれ、改めて迎えた新婚旅行で、記念の夫婦プレイを行ないました。

それ以後、妻は私の限りない欲望によって飼育され、次第に羞恥の中にあって責められることを自ら求めるようになり、そのあくなき責め地獄のルツボの中に陶醉するようになりました。

そんな妻に対して、私はあらゆる方法で責め、より効果的な羞恥責めはないものかと、考え続けてきました。

『花と蛇』の、鬼源同様の私の忍耐強い調教の甲斐があつて、今では、
「バナナ切り」

「玉子飛ばし」

「習字」

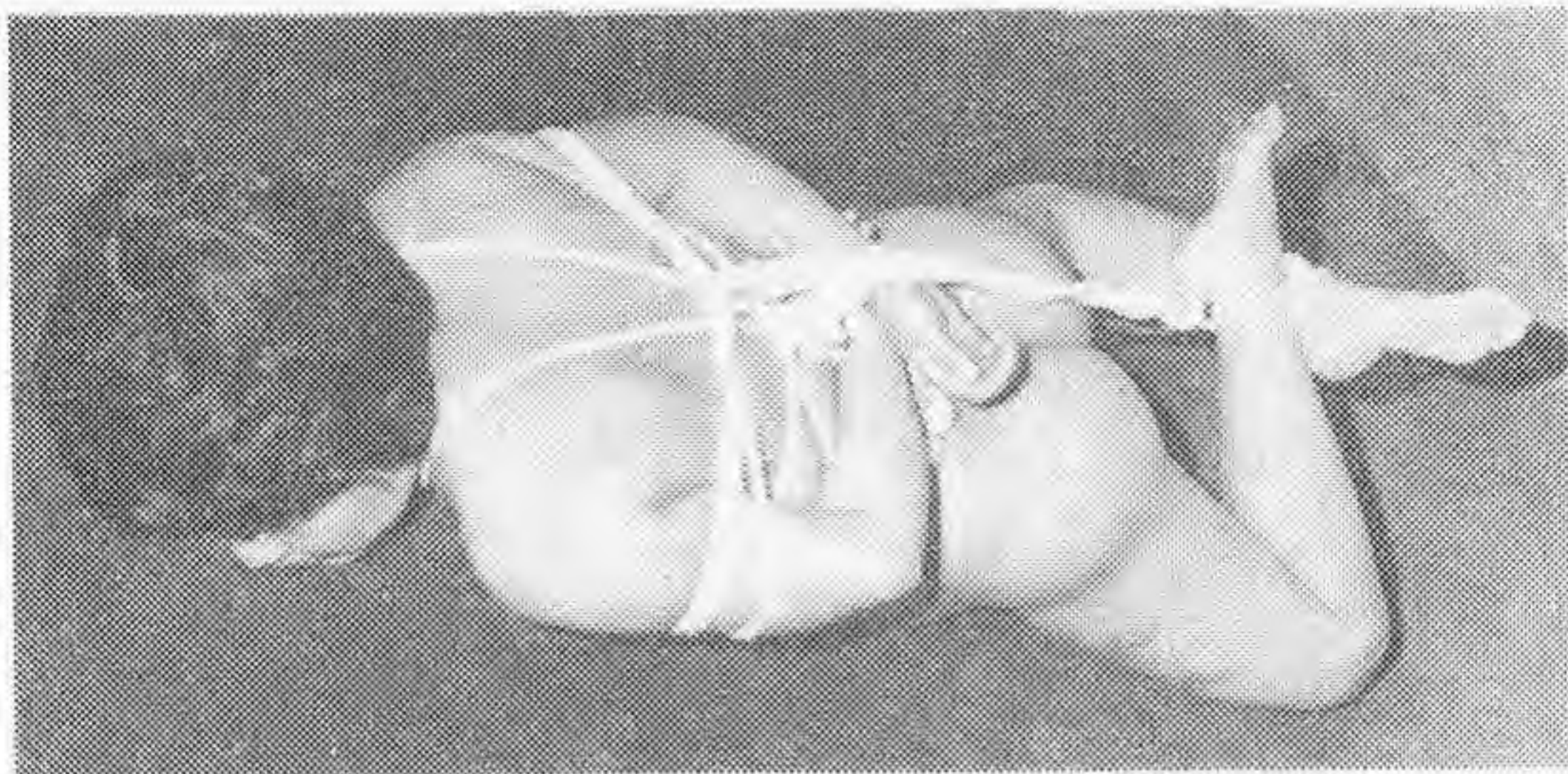
「煙草ふかし」

と、どんなむつかしい珍芸でも、こなせるようになった妻に、愛虐のうずきにも似た欲びすら感じながら、私の前で、懸命になっておどましい、そんな珍芸を演ずる妻の姿に、

限りない愛情を覚えるのでした。

ある時は、股間から臀部にかけて、麻縄でT字帯のように縛り上げて、全裸の上に薄いワンピース一枚だけを着せた妻と、通勤電車に乗り込み、ドアに吸いつくようにして舐めをすばめ、眉をしかめて私に助けを求めるような妻の眼差しに、燃え上がるような変質的





欲望を感じながら、自己の陶醉を求め続けたこともありました。

行楽シーズンともなれば、得意の油性絵具で、妻の白い肌いっばいに刺青を描き、やくざ女に仕立てあげ、

「恥かしいから、そんなことやめて！」

という妻を、無理押しに温泉宿の混浴風呂へ先立たせた後から、私は平静を粧いながら知らぬ顔して入浴し、妻の背中一面の見事な刺青を見て、ひそひそと囁き合っている、まわりの入浴客の話に耳を傾け、変質的な欲望を満足させました。

そんなことをした夜は、今まで味わったことのない爛れたような快楽に、夜の更けるのも忘れて、夫婦プレイに没入するのでした。

童女趣味から始まった私の欲求は、妻に対する剃毛へと発展してゆきました。

剃毛によって、より新しい刺激を加えようとする私の欲望が、更に抜毛に悦虐を求めました。その変わった欲求に対して、妻は困惑したような表情を見せながらも、私に命ぜられるまま、素直にテーブルの上に大の字になるのでした。

四肢をテーブルの脚に固定されて身動きも出来ない妻は、すでにカットされて、あたか

も芝生のようなになったそれを、一本、一本抜かれてゆきます。

そのたびに、軀をふるわせ、喜悅の呻きにも似た声をあげながら、被虐のよろこびに浸っているのが、私の目の前にある果汁が如実にそれを示しているのです。

日を追って進められる抜毛の作業に、次第に蒼丘の面積もせばまり、そこに拡がる二度と繁茂することのない童女さながらのそれに私は嗜虐の桃源境を見出し、激しく湧き出る男の欲求を吐きつけてゆきました。

私の場合、そのような童女さながらの妻の秘丘をさらして開股緊縛にしたり、股間縛りにしたりすることに、限らないSとしての、悦楽を味わいました。

時には、そうした緊縛によって、すでに悦虐の巻を浮遊している妻に対して、愛玩用の秘具を使用した責めを行ない、たえまなく去来する絶頂感に全身を痙攣させながら、恍惚とした状態に陥るまで止めませんでした。

悩ましい官能美に満ち満ちた、そうした妻の恥態を目の前で眺めることによって、私は改めて、S男子の本望を知ることが出来るのでした。

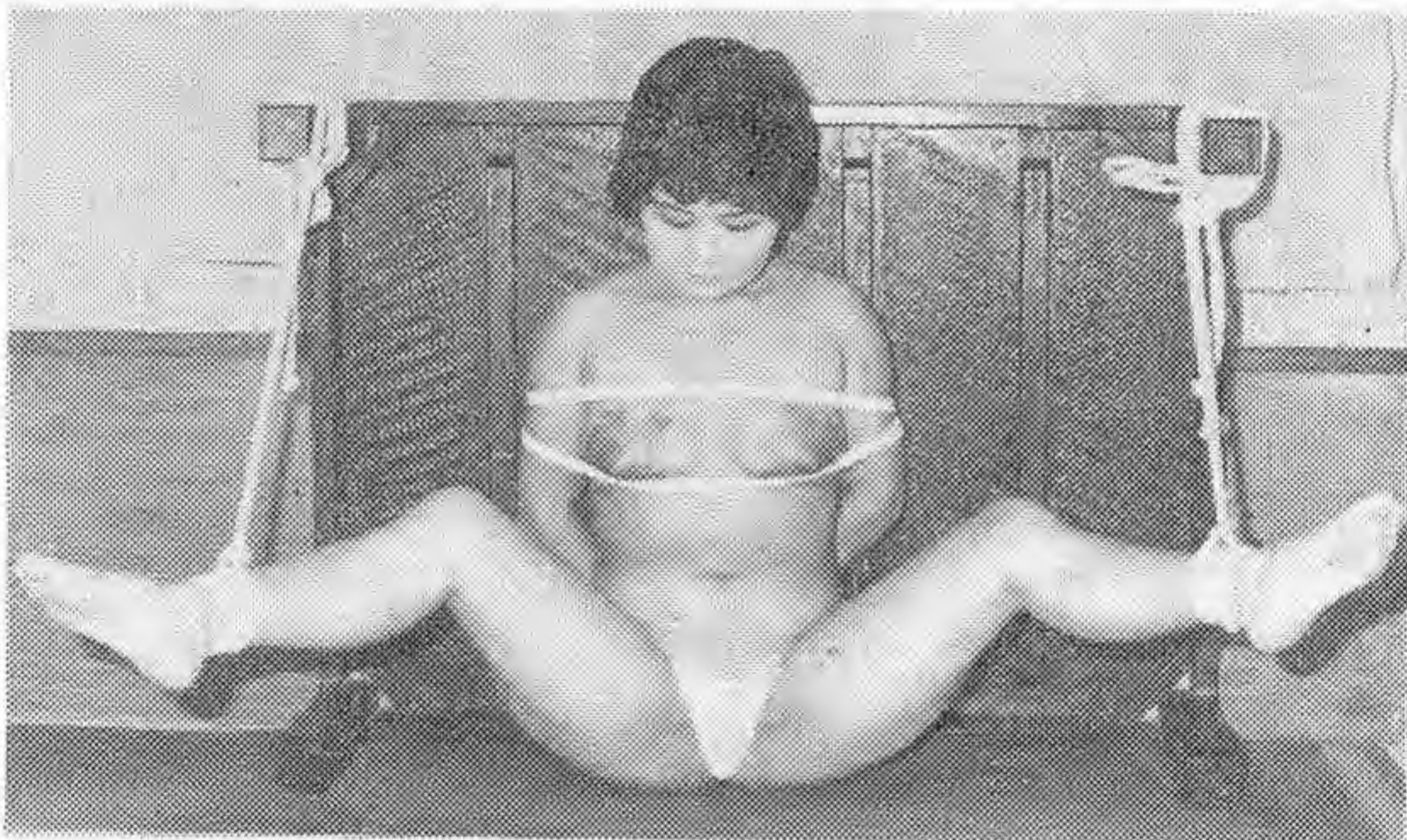
私自身、このような変質的な性癖に人生の

欲びを感じていますが、反面、どんな恥かしい責めを命ぜられても、ぐち一つ言わずしかも、羞恥に身も世もない風情を示しながらも、次第に自分のそんな姿に陶醉するように溺れてゆく妻を、いとおしく思わずには、いられないのです。

今まで、多数の同好の夫婦の方が、「奇ク」の誌上に登場されましたが、そのどの夫婦の方々も、私達と同じように、長年の夫婦プレイによってマンネリ化し、その結果、ほとんどの方が、△交換プレイ△を希望しておられるようですが、私達もまた、その方々と同じように、そうした望みを持つようになってきたのも、当然のなりゆきでした。

最近になって、益々エスカレートしてきました私の変質的な欲望が、より新しい刺激を求めて、うごめきだし、それが私達夫婦のプレイの中にも現われ始めました。

嘗て、渡部光雄氏が、その告白の中で、「SMに総べてを賭けて理想の夫婦愛を作ろう」と決心された、いきさつを書いておられますが、彼こそ私達夫婦プレイ信奉者のパイオニア的存在ではないでしょうか。深い夫の愛にささえられながら飼育され



た好美夫人が、やがて被虐願望に開眼し、夫に命ぜられるままに、如何に強い責めに対しても、それを快楽に結びつけ、その責めの中に陶醉してゆくさまは、華麗でさえあります。

そして、堅いきづなの中で長年に亘って楽しんだ夫婦プレイが、いつしか忍び寄ったマンネリ化に悩むようになり、より激しい刺激に欲念を燃やし始めたのも当然のなりゆきと言えるでしょう。

遂には、神聖たるべき夫婦の間に、第三者を招き入れ、夫以外の男性の手によって美しい夫人が恥かしい責めを受け、そこに生まれる新しい刺激に思索を抱き、それに伴う不安に苦悩しながらも、SM夫婦プレイの耽美を極めた渡部夫妻の姿こそ、私達同好の夫婦にとって、憧れの的といわねばなりません。

渡部光雄氏が、この夫婦プレイ同好者の羨望の極致ともいうべき境地に達成するまでの過程にあって、当初、夫人に対して、未知な不安想像プレイを、言葉によって現わしています。

その不安と欲望の混迷する中であって、夫人自らの口から、「他人と楽しみたい」

と言わしめ、新しい次元の夫婦愛を作り出されたことは、単に言葉を利用したプレイの結果でなく、氏の最良の飼育と、従順な夫人の人柄によるものと思われます。

私としても、全く氏の考えに肖るべく、未知の不安想像の中から生まれる、一種の異様な得態の知れぬ刺激に酔いながらも、言葉によって繰り返し言い現わし、より激しく変化する想像プレイを実践しました。

特に私の場合、『夫婦交換プレイ』に激しい欲望を感じ、色々なアイデアを夫婦プレイの中にとり入れました。

先ず、「奇ク」に登場される同好夫婦の方達から、交換プレイを望んでいられる夫婦の方を妻に示し、

「この奥さんの旦那さんに、責めて戴いてはどうか？」

と、何度となくプレイの中で、妻に強要するのです。時には、妻の追欲を、より激しく感じさせようと、終始、目隠しを施し、被虐中の想像を、感覚的に責めながら、

「羞恥責め忍耐テスト」

「秘具による歓喜テスト」

「浣腸耐久テスト」

「飼育妻奉仕テスト」

「アニマル・テスト」

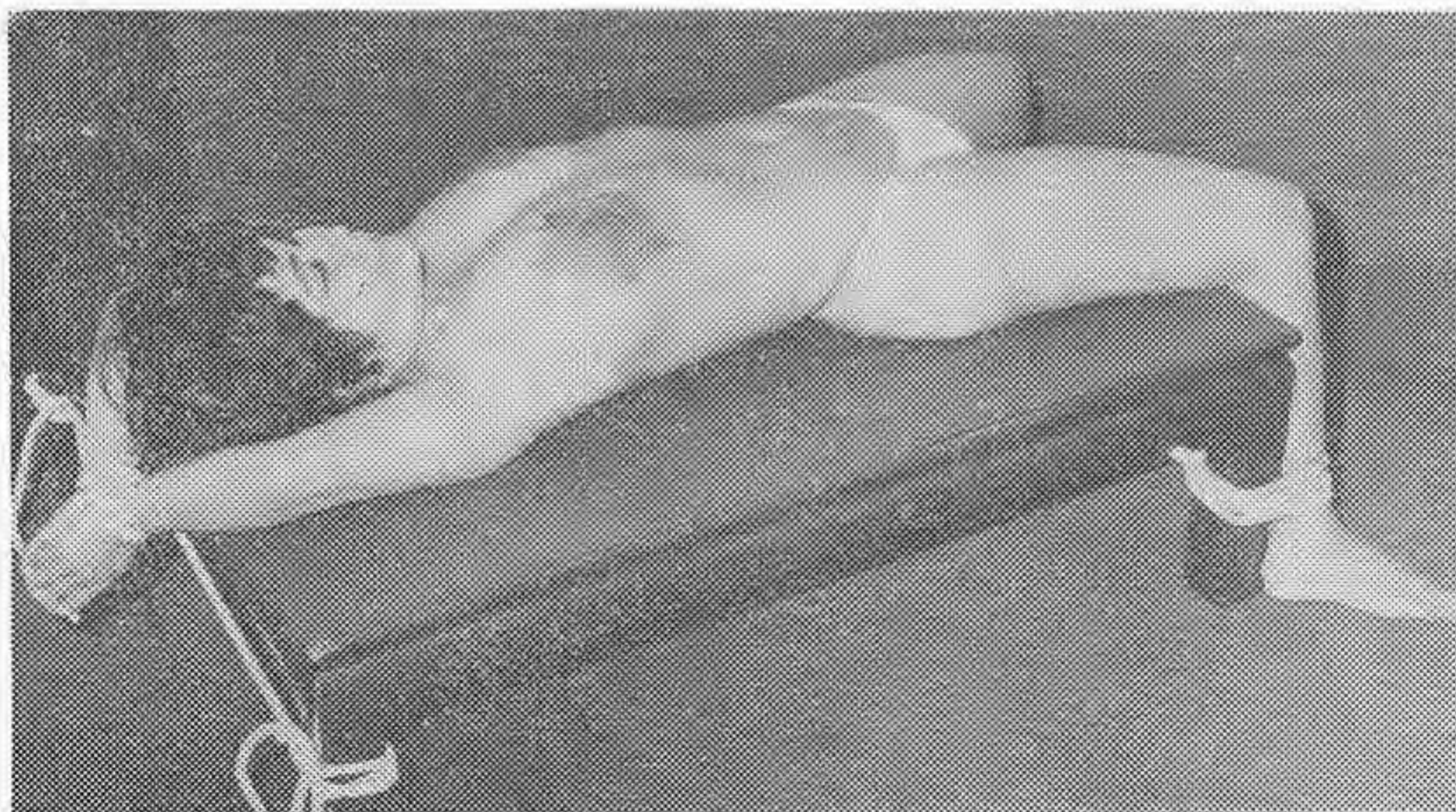
等々、交換プレイの課題テストを、被虐に悶える妻に求めたのです。

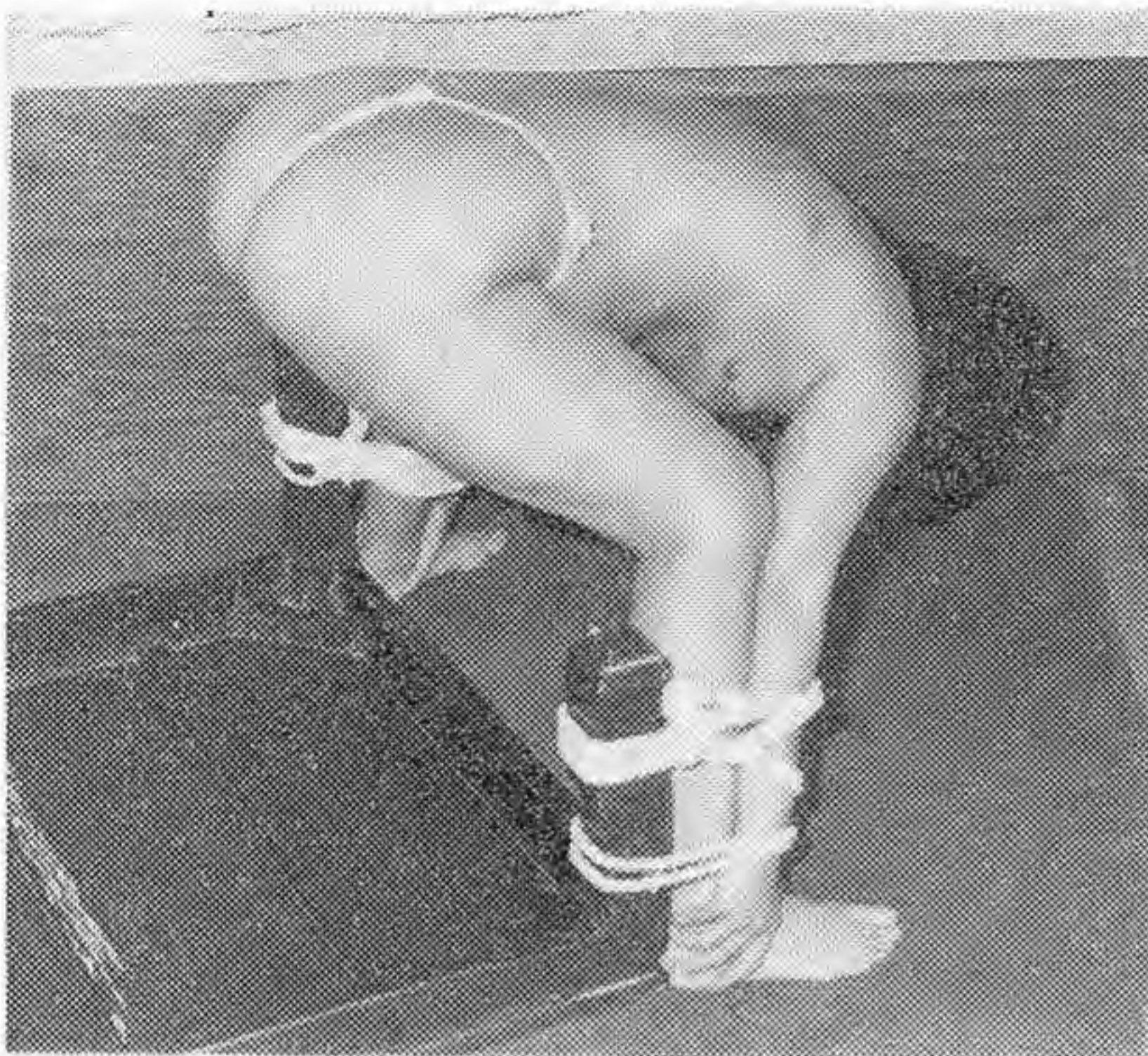
そうすることによって、未知の中から生まれる新しい刺激に、一層の欲びを知ることが出来、それに伴う不安を感じながらも、飼育の過程で、被虐願望の女に完全に生長してゆくのでした。

そうした妻の気持の中に、未知の不安想像に含まれた新しい刺激が徐々に熟成し、やがてそこに強い願望を感じて、自らが、そうありたいと——願うことを期待しながら、私の言葉による強要は辛抱強く続けられました。

始めのうちは、なかなか妻の口から、それに対する返事は聞かれなかったのですが、無理に、私の欲求に対して、返事することを促しますと、唯黙って、心苦しそうな表情で私を見つめるばかりでした。

しかし、長い間の飼育によって、羞恥責めに欲びを感じるようになってしまった妻の願望が、激しく追い打ちをかける私のプレイに燃え上がり、忘我の境地に誘われて、いつしか最高に達してしま





ます。

そうなりますと、言葉を使って求められる想像交換夫婦プレイが、私達夫婦の間に、妖しい雰囲気をも、かもしだします。

それから生まれる新しい刺激が、フトその錯覚に陥らすのか、悦楽に悶えながら、一層

激しく全身をうねらせて、恍惚のたかぶりに陶酔する様子が、しばしば見受けられるようになりました。

目を追って激しくなっていく、想像交換プレイの中で、いつもの通り、交換プレイを促す私の耳に、愉悦の声に混じって、とぎれとぎれの妻の言葉が聞こえました。

「あなたさえ、よければ……」

新しい刺激、より豊かな昂奮を求めようとして、手を変え、品を変えて、私の限りなき欲望によって、ここまで成長し、私の変質的欲望を満足させられるようになった妻のこの一言によって、私は最高の愉悦を覚えると共に、より強い愛情を妻に対して感ずるのでした。

今後、「奇ク」を通じて、夫婦プレイのマンネリ化に悩む同好の夫婦の方に呼びかけ心から親しく私達夫婦と交際して戴ける方達の出現をお待ちすると共に、近い日、夫婦

交換プレイのレポートでも書いて、「奇ク」の誌上を飾りたいと念願するものです。

△追記▽

文筆にうとい私が、やっとの思いで、この原稿を書き上げ、投稿の間際になって、八月号を受け取り、いつもの通り「奇クサロン」から順を追ってページを開きました。

五月号以来の井上浩様の投稿文を読ませて戴いたところ、貴重な稿文の殆どが、私達に對して好意的な内容で、幼稚な夫婦プレイにも拘らず、身に余るお賞めの言葉を戴き、家内共々、大いに感激致しました。改めて厚く御礼申し上げます。

尚、「編集部だより」によりますと、奥様を編集部が取材なされる由、奥様の勇気もさることながら、貴兄の御飼育の程が窺われて嬉しき限りです。

今後一層、夫婦プレイに向かって、より新しい魅力を開拓されるよう祈ります。これから先、私達夫婦にも色々と御指導並びに、御交際をお願い申し上げますと共に、御活躍を心からお祈り申し上げます。

× × × × ×

× × × × ×

カット・岡たかし



客人たち

客人たちに対して粗相のないよう充分に吟味された昼酒の膳部が奥座敷にもうけられていた。床の間を背にし、見事な塗り物に盛られた馳走を前にして上気嫌な客人たちは、とつときの冗談をとばし合ったが、それらはいずれも博打か女に関することばかりである。いずれ劣らない道楽者の彼らにとって当然とっていいことで、千代が面白おかしい合の

連載・S 大河小説

パロディ

花

と

蛇

(十)

山光

純

手を入れ、座はたちまち賑やかになった。

今日の訪問の目的が目的だけに、すこしずつ酒が入るにつれ、当然、話題は急速におちるべきところへ落ちてゆき、千代や森田が卑猥な冗談をとばすと、もっとひどい言葉で客が、それにむくいるといった風で、われがちに、だみ声は、際限もない卑語でみたされつくすのである。

二人目の客は著名な私立病院長で産婦人科医ということだが、その診察があまり信頼できないという噂があるのを見ると、流行のニ

セ医者なのかもしれず、にもかかわらず数多い患者をひきつけているところなど、多分にミステリアスな匂いがする。ただ確かなことは、ごく普通の放蕩には、あきあきしていることくらいであろうか。肥えふとり、目の飛びだした容貌から、ひそかにハガマのあだ名を奉られていた。大体、金さえ払えばカタのつかないものはないという尊大な主義の持主であった。

一同が一しきり埒もない下等な話題で大笑いしている時、狒々会長が、千代が座にいな

いのに気がついた。

「おいおい、千代ばあさんは、どこへいったんだ。それに女どもも一向にあらわれんじゃないか」

「森田親分。いいかげんに、もったいをつけるのは、よしにしましょうや」

と三人目の客も言う。客の中でも一番若く陰險な目付きの彼は、実力派の高利貸のほか、手広く雑多な仕事に手を染めている。何が本業なのかよく分からない男である。金はしこたま持っており、こうして遊んでいる間にも金は更に殖えつづけているらしい。

「まあまあ。そういわずに、ぐっとあけましょうや」などと田代や吉沢たちが、とりなすようす。一方、出入口のほうを向いて「なにをしてるんだろう」

それから何度か盃が交されてアルコール分はたかまったが、座は逆に白らけ気味で、沸々会長の仏帳面が不気嫌に変わろうとした頃であった。

すると金泥の襖が開かれて、

「ああら、随分お待たせしてしまったようですわね。さあて、女たちをご気嫌うかがいに下さいますわよ」

と千代が芝居がかった遣手婆めいた口ぶり

で、にこやかに現われた。

二人の女が敷居の上に両手をついたとき、ざわめいていた座に、さっと一瞬の静寂がおとずれた。

客たちの前に、いきなり全裸で引きだすのは得策ではないと考えた千代の作戦で、二人の奴隷女——小夜子と静子夫人は、久方振りに衣類を身にまとうことを許されていた。調教だの罰則だのと、さまざまの口実をつけて彼女たちを何度も凌辱してきた邸の連中は、女たちの裸身は見慣れていたが、改めて今挨拶に出た衣類をまとった姿に、いいしれぬ新鮮さを感じとったようである。

「ほほう、美人だ——」

と、ながい沈黙の後、感に耐えないように客の一人が洩らしたのは、場を代表した感想であった。

二人ともこの酒席に引きだされ、又してもどのような恥辱の振舞を命じられるのかが分からないうまま、眸を伏せている。

静子夫人は瓜実顔の頬を、わずかに紅潮させ、座の視線が遠慮会釈もなく全身を撫でまわしてくるのに耐える。彼女は、こぼれるばかりの乳房を真黒いブラジャーで押さえ、同

じ漆黒のごく小さな三角のパンティを股下に喰いこませていた。それに、スケスケのベールのような、やはり黒いネグリジェを羽織っているが、それとても非常に短く、ほとんど剥きだしのヒップをおおうには至らないものなのだ。

静子夫人の純白の肌に噛みつくおぞましい衣裳は、その白と黒の対照を鮮かに見せて、こよなく煽情的であった。胸の隆起は熟しきって小山の様に盛り上がり、たとえばセックスのような激しい動きをすれば小さなブラジャーからはみ出してしまうに違いなかった。

誰しもが、この春情に濡れそぼったような姿態を、むさぼるように見詰めながら、その邪魔な衣裳を剥ぎとり、奔放なポーズで責めさいなむ瞬間々々を想像しているのだろう、沈黙はつづいた。

客たちにしてみれば狂喜したフィルムからの先入観があり、邸の連中には、クライマックスを迎えるときの夫人の声が耳元に、はつきりと残っている。彼女を、ぎりぎりにまで追いつめ、汚辱にまみれさせて弓なりにそり返らせる時、その豊満そのものの全身から悦楽の虹がたちのぼる、その時、つねに静子夫人は一糸まとわぬ姿であった。

たしかに、静子夫人が本人に他ならないことを居並ぶ男女に示すためには、彼女は全裸体で座に出ねばならなかったのだ。

静子夫人の飼育者である千代は、そのところを心得ていた。餓狼に、いきなり美餌をあたるのは得策ではない。舌なめずりをさせ狂おしく足掻かせる。美しい様子をズタズタにさせるまでの時間は、できる限り先に伸ばしたほうがいい。自分の演出した効果を十分に感じとった千代は、金齒をむきだした満足げな表情で、

「さあ、奥様——お客さまにご挨拶しないのかい」

満座の注視が注がれているなかで、躊躇は許されるはずもない。

高貴な美貌の麗人は、深い愁いをたたえた明眸をあげ、座をみわたすようにしてから、やがて嫣然とした笑みを浮かべた。

「遠山静子でございます。日頃は、お写真や8ミリの中で、お客さまにお目にかかっておりますので、静子、お羞かしゅうございますわ。でも、森田組の皆さまが、とてもよくして下さいますので、せいぜいこれから、もっともっといいポーズを取らせていただこうと、お稽古に、はげんでおりますの。どう

か、お笑いにならないで下さいましね。お隣のお嬢さんは、村瀬小夜子さん。静子なんかより、ずっとよくできた、お嬢さまですことよ。さあ、小夜ちゃん。お客さまに、ご挨拶を……」

静子の紹介で、座の男女も視線を小夜子に移し、改めて、こちらも悪くないと唸るのだった。

小夜子は、銀色にピカピカ光る超ミニドレスを着けていた。ドレスは窮屈すぎるほど、ぴったりと引き絞られており、体の曲線が、あますところなく、なぞられる。胸元から縦に一本の切り込みがあり、ほとんど臍のあたりにまで通っている。

安物のバーに出没する売春婦そのままの、いかがわしいスタイルをしていても、大宝石店の令嬢としての気品が美しく面に表われているのを感じとり、彼女の素姓を知っている者は口をだらしく開いている。

瓜実顔の静子夫人とはちがって、小ぶりな丸顔の小夜子は濡れた唇を赤くいろどり、はっとするほど可憐な容貌をみせる。丸く大きな瞳が、とりわけ印象的である。

アメ色のねっとりとした髪に悪趣味な飾りをつけていても、長い睫毛に囲まれた黒い瞳

は深山の湖の色を思わせるほどに澄み、あらゆる汚濁を浄化したかのように清楚な表情であった。

このむっとする煙草とアルコールの匂いのこもった真昼の酒席に、元の令嬢を引きだすのは乱暴なことであった。千代を始めとする周囲の目が光っているのを知りながら、それでも小夜子はオロオロとして、救いをすぐ隣の静子夫人に、もとめるのだ。静子は耳元へ唇をよせ、

「小夜ちゃん、あたくしたちには言われる通りにやるほか、一切の自由はないのよ。——可哀想な小夜ちゃん。——さあ、皆さまのご気嫌をうかがって……」

その力づけに、弱々しく背く小夜子の大きな瞳に、みるみる涙がたまり、溢れるのを静子夫人は見た。

「小夜ちゃん……あたくしが、できるかぎりのことをして差し上げるから……取りみだしたりは、しないのよ……わかって？」

「ええ、静子お姉さま……」

この二人のやりとりを、憎々しげに睨んでいた千代が、

「さあ、もういいかげんに悲劇ぶるのはよしにしたら。小夜子、いいからお客様のお酒の

相手をするのよ。静子姉さんがお手本を示してくれるから、真心をこめてやるんだよ」

うながされて、二人は立つ。二人の美女はかばい合うように歩を運んだが、すうりとした太腿の内側の白さが、灼きつくような劣情を、そそのめるのだ。

「ヒヒヒ……気に入った。それにしても驚きだよ。まったく気に入った——こんな商売をやらなくたってよさそうなものだが」

「いいや、そこが変なんです。二人とも」と千代が、けたたましく言う。「虫も殺さぬ顔をしているクセに、あっちの方は、もう写真なんかで、ご承知の通りでしょ」

「じゃ、趣味と実益をかねての商売というわけだ。まあ、一杯いこう。スターとご同席で光栄だ。ヒヒ……」

否応なく目の前に差し出された茶碗酒をうけとるとき、静子夫人の両手は、ぶるぶる震える。すかさず別の客が、

「なんだい、純情めかして。例の映画でみせるのは演技で、本当はそうじゃないとでもいいたいのかよ」

「いえ、そうじゃありませんわ。み、皆様の前へ、こんな恰好で出て恥かしいの。お酒すっかり、いただいてもよろしくて？」

邸の連中以外とは、あまり顔を合わさない

ため、この何ともいいようのない姿で酒の席に出るのは予想したより、ずっとはげしい辛さである。正客の狒々会長は穴のあくように静子の顔を眺め、つづいて、うすいネグリジエに包まれた軀の線に喰いいる。

「いやですわ。そんなにご覧になっちゃあ」

「別にかくすこともないぜ。いずれ中身はゆっくり拝見できるようだから。それに、その娘は挨拶が、まだのようだが」

「ご、ごめんなさい……このお嬢さまは、小夜ちゃん」

「あ、あたくし、村瀬小夜子です……」

「なあんだい、たったそれだけのご挨拶とは恐れいった。そうだ、思い出したぞ。あの映画に出てきた女だ……何と……」

と、隣にも、もちかける。

小夜子は絶望の眼差しで睫毛を、しばたたくが、頼みの静子夫人は隣の客の杯を受けているところだ。肩でほっと溜息をついた彼女は、最早どうでもなれとばかりに、大きな盃の酒を一口飲んで激しくむせる。

「若い奴らの廻しにかけられて、何回も失神

したじゃないか。忘れんぜ……」

「い、いわないで……」

「どこまで猫をかぶる気なんだよ。いまさら恰好をつけようたって底は割れてるんだぜ。ヒヒヒ……」

と見事に禿げた頭を撫でさする。明らかに主客は、あまりいい酒とはいえない。

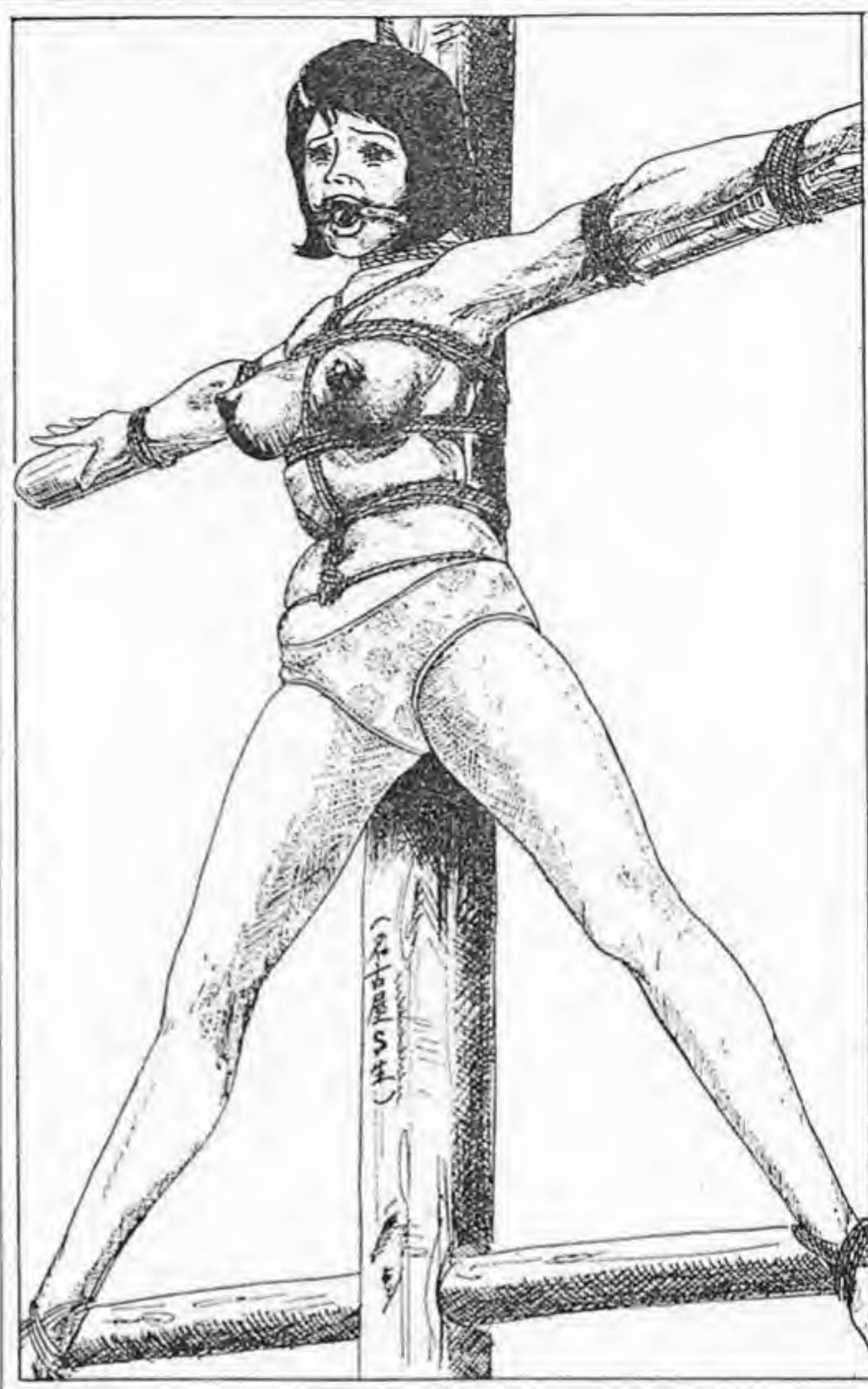
「もう、いわないで。お、おねがい。でないと、あたくし……」

会長は膳を横にずらし、白々と剥きだしになっている彼女の太腿に掌を滑らせる。覚悟はできているとはいえ、ヒルのように吸いついてくる感触に、ぞっと鳥肌が立つ。

小夜子には久し振りに与えられた衣服の感触は、まるで夢を見るような嬉しさだった。それがどのように蓮葉なセンスのない衣裳であったにせよ裸身にまともなものがあるというのとは何と奢侈な気持ちにさせてくれることだったろう。その一方、この歓楽の邸のセックスの饗宴に追い使われる毎日を過ごしている彼女には、ドレスをまとうて客の前に出てただそれだけですむ筈は、とうていないという諦めの気持もあった。

上等のブドウ酒くらいで、ほとんど飲んだことのない酒を口にしたり、ドレスの裾から

……イメージギャラリー……『悲劇のヒロイン』……名古屋S生……



強引に入りこんでくる手をはねのけることも出来ずにいるのも、すべてこのいいようのない諦めの心からだった。

義雄に奪われて以来、肉体はほしいままにされてはきたが、心はまだ観念しきっていない。スカートの下にもぐり込んだ手が、さらに奥に向かって進む。酔いと羞恥に打ちのめ

されて、小夜子はたちまち首筋から喉元までを紅く染めるのであった。

「ほうら、間違いないとお前だったぜ。相手役が四人の、あの、すごい場面のあるフィルムさ。何という題名だったかな……」

忘れようとして忘れられる筈のものではない。撮影の時、彼女は自分の出来る限りの反

抗はしたと思う。殺されてもよかった。この世の中に、そんな行為で身を立っている女もいるということだったが、今そうした加虐が自分に加えられる悲しさは又一しおだった。その為、撮影は難行したが、結局のところ目的のテーマは完全にフィルムの上に残り、終幕近い頃には、小夜子は男たちの意のままに動く、哀れなセックス・スターとして好奇の見物を集める自分を発見していたのだ。

「いわないで……おねがい……」

必死になって小夜子は会長にとりすがっていた。自分がたまらないほど可哀想に思われたのだ。譚言のように同じ科白をくりかえす彼女を抱きよせ、客は更に掌をすすめる。

客人の悪ふざけをプロらしく、さりげなくいなしながら、歓心を買うのは小夜子にとって至難のことである。指先がそれ以上、侵入しないように、短いスカートの上から押さえる。掌を引きもどしたりして、不快な気分になられるのは何よりも怖ろしい。

小夜子は焦点の合っていない、うるんだ瞳を宙にまわせ、たて続けにピンキーな吐息をもらした挙句、ついに敗北した。主客の耳もとに朱い唇をよせ、

「あれは『処女強姦』といえますの……」

といってしまったから、真赤になった顔を
みられまいとして深々とうなだれてしまう。
その一瞬のスキについて狒々おやじは一氣
に掌を進攻させる。

「あ——」

彼女の喉から絞りでた声は、あまりにも生
々しく、見ない振りをしている森田親分がギ
リリと、のぞきこんだ程だった。

キラキラ光る超ミニドレスの下に小夜子は
一枚の布きれも与えられていなかったのだ。

ややあって、小夜子は狼狽して我を失う寸
前で、けなげにも氣を取り直した。なだらかな
首筋を大きく後ろにそらせて、きれいにセ
ットされた黒髪を振っていたが、やがて泪の
粒が光っている大きな瞳を相手にむけ、

「わるい、おじさま。小夜子を狂わそうとな
さいますのね。でも、やさしくいじめて下さ
らないと、イヤです」

そうした媚態は、これまでの彼女に、まだ
もとめることのできない素振りだった。ゆる
く尻をくねらせながら、男の耳朶をやわから
く囁む。

小夜子を遠目に見る千代は、ガブガブと酒
を、あおりながらも、二人の女から目を放さ
ない鬼源の席に近より、

「小夜子なんか物にならないと思っていたけ
れど、やっぱりあんたが予言した通り、あの
女は、まだまだ成長しそうね。これからは、
もっと目をかけてやって、腕によりをかけて
仕込んでちょうだいな」

「そりゃ、わかっていませあね。あっしがガ
ンをつけた通りでさ。まあ、まかしといてく
んなせえ。その代りといつては何だが——」
「なにさ、はっきりお言いよ」

「千代さんの前で何だが、このところ、どう
もあっし自身が、もひとつ冴えねえ感じでし
てねえ。小夜子を預ると、あっしが泣かせる
ことになりやすぜ」

「静子だけじゃ、物足らないというんだね。
まあ、あんたの好きなようにやっとくれ」

鬼源は、黄色い齒をむきだして笑う。実際
のところ、ここしばらく静子夫人の調教に打
ちこんでいたので、静子の肉体がやや飽食気
味なのだ。無論、静子の熟しきった軀と拔群
の奉仕ぶりは汲めどつきない快樂の泉そのま
まであり、調教もまだまだ中途半端なのが
そこは名だたるエロ事師のこと、このきわめ
て贅沢な申し出も受けいれられようというも
のである。

小夜子の肉体には、静子夫人の代役をつと

められるだけの素質がある。ついこの間まで
まだ青い蕾でしかなかった元の令嬢は、今、
多勢の男女の前でも客をそらさずに、捨て身
で氣嫌をとり結ぼうとしている。ただその身
体は、静子夫人とちがって、まだ鍛えこまれ
ていないため、たて続けに何人もの相手をさ
せるのは一寸、無理かもしれないが、女は全
体に仕込み方しだいだ。第二の花形スターは
鬼源によって育て上げられるだろう。

「といったところで、例の話なんです、あ
っしはやっぱり、これからの教育を考えて小
夜子にやらせるべきだと思ひやすぜ」

話は、すこし前にもどる。今日訪ねて来た
三人の客たちが酒宴の前に持ちだしたのは、
この世の邪惡を極めるような、淫虐な申し出
だった。

それは——。

色々な都合があつて、仲々到着しない香港
犬を待ちきれないファンたちが、金にものを
いわせて探しだしてきた犬を、ぜひ邸のスタ
ーにけしかけたい、という相談である。

極東の奇蹟などといわれ、日本が急速に経
済的な成長をとげるに至った今日、国民生活
の充実にともなつて、特に大都市の享樂施設

は今や世界に冠たる名声を博している。「鬼源モノ」フィルム製作もその一冠といえるのだが、金をかけて探す気になれば「ドッグ&ホワイト・ショー」専門の犬など、すぐに見つかるといわれる。

ただし、有名な香港の魔窟で本格的に仕込まれた支那犬との比較は簡単にできないだろうが、狒々会長の話によると、すでに人間の女との経験を充分につんだ巨大な西洋犬だということである。

ごく普通の刺激には飽々した客たちが、中年のしつこい嫌らしさをむきだしにして、ぜひ、この世紀の取り組みを実現して貰いたいということまで一致したのだ。

「鬼源モノ」のファンとして、スターたちを一目この眼で見たいという願望にまったくのいつわりはない。彼女たちと膝を交え、生のままの美肌の匂いを嗅ぎたいという気持ちも純粹である。しかし、いずれ劣らぬ猛者揃いの客たちは、それだけで引き下がって満足するような手合いではなかった。

「要するにワシらは、お抱えのスターの一人と、この犬との一戦を見たいんだ。そのためにはカネも出す。組の資金のことでも今後其充分に相談に、のるつもりでいる」

というのである。

迷惑ながら支配下にある性奴隷たちに挨拶させることを承知した千代へ畳みかけて、「これは、森田組と長年のゆかりをもつ客の総意なんだ」

と開き直られると、千代にはたちまち二の句がつけなくなるのだ。

森田組がまだ数人の三下だけの組織で、ころうじて息をついていた頃、祝儀代りに賭場に出入りしてくれた旦那衆がなければ、組はとつくの昔に、もっと大きな組織に吸収されてしまっていたにちがいないからである。

そうした故事を背景にして、談判は三対一で行なわれ、途中、席をはずしていた森田親分が応接に戻った時、千代は、もっともらしい理屈に追いまくられて、目を白黒させていた。客は、いずれ劣らない交渉事の名人ばかりである。あの美人スターたちに一目合わせで貰えるだけでいい、という最初の要求が、すっかりエスカレートしていることが千代には分からなかっただけで、客たちは意気どみどうしようもなく強引であった。

助けを求めようとした森田は、客たちのいうことを支持した。「そりゃ、いいフィルムができるに違いないぜ、いいアイデアじゃな

いか……」森田親分は狡猾にも、その8ミリや写真が、どれくらい価値を生むかを、いち早く計算したにちがいない、あるいは既に相当の金が森田組に流れているのかも知れなかった。

「じゃ、けっこうですよ」

と千代も、とうとう折れたのだ。一体に気まぐれ行きあたりばったりで、面倒な考えごとを好まない彼女は、邪魔くさくなって承知した。カメラのアングルや、ポーズに趣向をこらし、出来る限りエロティックな雰囲気をもりあげた中での、犬と女は、考えてみればすごい見ものになるに違いないのだ。

相談はそれからしばらく続き、数日後に多数の森田組縁故の客人を招く催しのプランがきまった。それぞれのショーに主演する女優の配役は森田組に一任された。

さて、小夜子が嬌声をあげ、雰囲気盛り上がっている酒席で静子夫人は客の中で一番年若の高利貸のご機嫌とりにあたっていた。

若さにまかせて多分に無鉄砲な仕事をしてきたという評判で、考えようでは三人の中で一番あしらいにくいのが彼ではないかと思われる。

静子夫人は最初に差された吸物椀の酒の効きめで、その色白の首筋から頬にかけて艶っぽい色に染まっている。豊かな髪は、すこしばかり乱れ、とろりとした眼元に媚びかける微笑を、うかべている。

忌わしくも恥辱にみちたコケチッシュな姿で、酔った男の気嫌をうかがわねばならないとは、何という苛酷な定めであろうか。この淫蕩な空気に、とっぷりと浸って、夜昼を分かつたぬ饗宴の遊び女として、彼女が玩弄され続けなくてはならない理由は、いったいどこにあるのか。

しかし、客を誘いこむハスキーな静子夫人の声に、毛ほどの悲しみも、感じられない。暴行者たちの調教は、すばらしい成果をあげつつあった。

「ねえ、お客さま。静子のこんな姿を、お笑

四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る 団鬼六作『花と蛇』特集第四弾

本誌S42/1よりS44/4までの連載分を収録し、四馬画伯の華麗なる口絵を附した集大成ですが、重版刊行は致しません。只今、若干在庫がありますので、未入手の向はお早めには是非蔵書の一部にお加え下さい。申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号 暁出版株式会社へ。
略号『花』 定価五〇〇円(送共)

いにならないで下さいましね。静子、あなたのように立派な方の前にでると、もう羞かしくって……」

「ほほう、お前でも恥かしい気がするのか」

三人目の客は爬虫類のように冷酷な顔つきをしており、先程から少しづつ、ほぐれてきているとはいえ、表情は、きわめて乏しい。うす色のサングラスをかけたままなので、感情の動きが読みとれないのだ。

その取りつく島もない言い方に、もう途方にくれたように静子夫人は、そっとあたりを見ながら、目をしばたたくのであった。こうなれば、あとの方法の一つしかない。

「あたくし、あなたのお隣に坐らせていただいても、よろしくて？」

それでも、僅かだけ身をよせてくれた男の膝に、ほてった豊かな臀部を、すりつける。

「そんな風におっしゃっちゃあ、イヤ。だって静子は“おんな”ですよ。そんなふうに殿方に、じつとこんな姿を見つめられると、もう消えてしまいたい気持になるの。ええ、いつだって……」

「そんないい軀なら、なにも羞かしがることはないぜ」

「ええ、ありがとうございます……」

と、ようやく相槌を打ってくれるようになった客に、感謝をこめて真白い糸切歯を見せ艶治に頬笑みかける。そして、くねくねと腰をゆすって若い男の心をひこうと、ウイंकをしてみせるのだ。

そして尚も挑みかかるように、邸の日常の裏話を、鼻にかかった声ではじめる。それもとより興ざめる調子ではなく、柔らかくセクシーな、ちよっぴりマゾがかった語り口である。程よく廻った酒が、彼女の整った容貌にピンクのベールをかぶせている。聖母の面に、性奴隷の肉体を備えた女――。

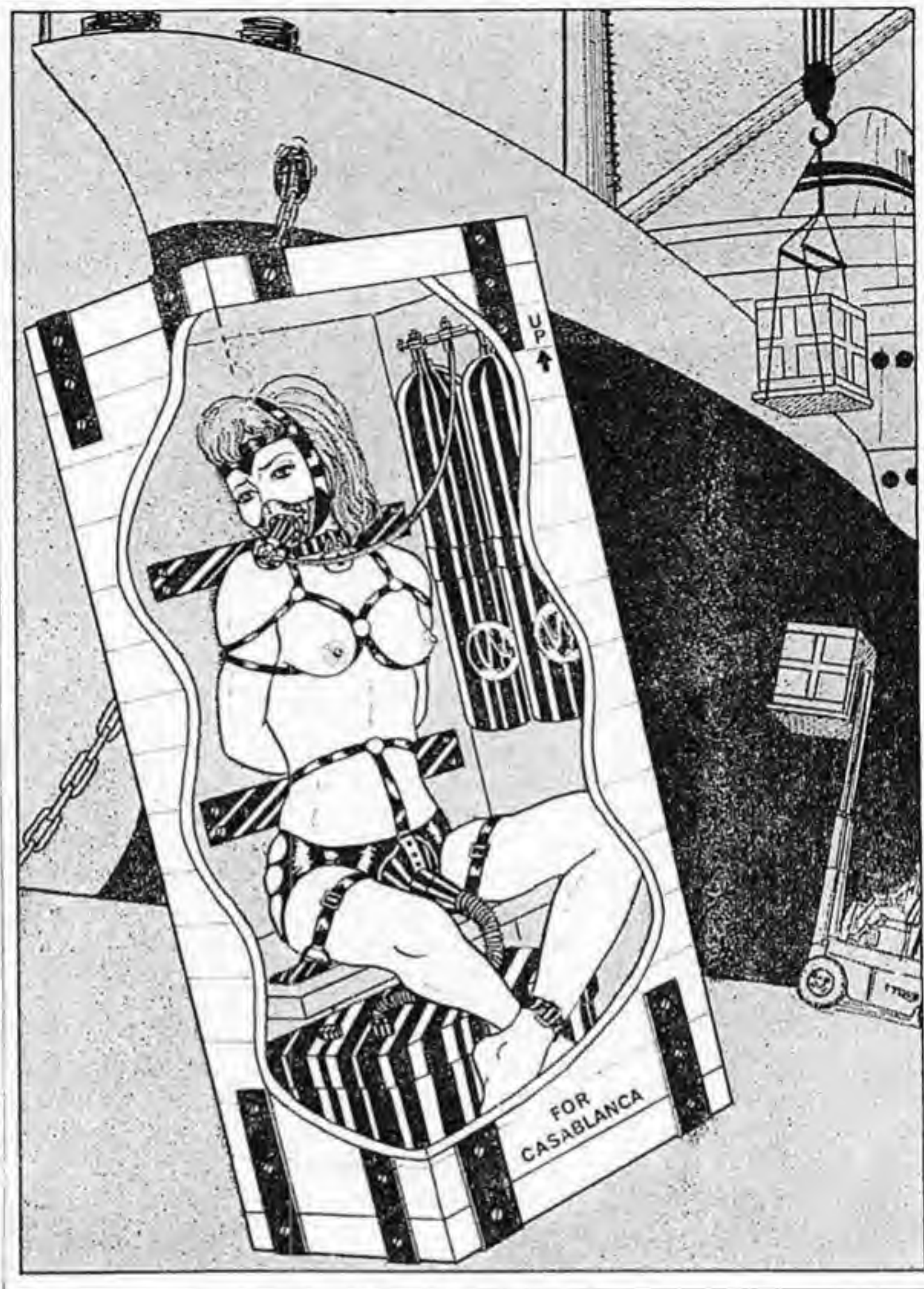
うす色のサングラスの下から、男の目が身体に注がれているのを知ると、

「静子、お酒をいただいたので、すっかりほてってしまった。このネグリジェ、取ってもいいかしら？」

男の胴に、まっ白い腕をからみつかせて、切なげな眼差しで下から見上げるのである。たっぷりとした柔らかい女体からは、煙るような体臭が匂い、首筋のあたりに何本もの後れ毛が甘肌にはりついていていた。

天の邪鬼をよそおう客は静子夫人にみつめられたまま、ゆっくりと煙草をくわえ、ライターを鳴らす。いかにも女を齒牙にかけてい

……イメージギャラリー……『出荷準備OK』……飯田ひろくに……



ないというポーズが露骨である。

静子夫人は、嗚咽をこらえるように舌であえぐ唇をしめしていたが、とうとうどうにでもなれとばかり、一声喉元で鳩のような声をだしたかと思うと、ついにレースのネグリジ

エの裾に手をかけ、ゆっくりと頭から脱ぎ去ったのだ。

女の肉体は周囲の様子によって自在な変化をみせるものである。月の光の中ではビーナスのようなその曲線は、この乱れた宴席の中

では肉欲のシンボルに変化している。真黒いブラジャーと、同じ小さなパンティは、この熟しきった女体をきびしく締め上げる拘束衣そのままだった。

しかも静子夫人は、ますます大胆に悩ましい声で、

「ねえ、あたくしのオッパイ、ぜひご覧にいたたいの。このブラジャー、はずしていただきたいわ」

高慢な客の反応は、いち早かった。イライラした手付きで半球のような乳バンドを引きむしるようにする。と、

たちまち、片方の象牙でできたような見事な乳房が衆目のまえに、こぼれ出たのだ。

黒と白の色彩効果もさることながら、露出されたバストは、男たちを逆上させる比類のない魅惑の丘そのものである。なおも静子夫人は、もっと低い慄える声で、男の耳にささやきかけ、そして目を閉じた。

「スナップが、後ろについていますの。はずして、ちょうだい……」

声より早く、ひっかかっていたブラジャーは、ハラリ、と下に落ちる。

奇蹟的な、すこしのたるみもない、たわわな双乳が、彼女の荒い呼吸につれて、ゆっく

りと上下していた。ごくうすいピンクの乳頭が、打ち震える花のように頂点で羞じらっているのだ。

今はもう、口をあんぐり開いたままの客の手が、ただ一つ残された小さなパンティのほうにのびるのは当然のことであった。

「ああ。お待ちになって……」

身悶えて小さな腰の布を守ろうとする静子夫人の背後に、いつの間にかしのびよった千代が、小声でだが、きびしい叱責をあたえる耳打ちを、はじめるのだ。

片手で胸をおおい、首をたれて千代のお説教を神妙にきいている静子夫人の半裸身に満座の注目が集まる。ごく小さな三角のパンティが小山のような双臀に喰いこんでいる。彼女が千代に因果を含められていたのは、ほんの数分だったが、それは随分、永い時間であるように一同には思われた。

「ええ、千代さん。おっしゃる通りに致しますわ。もし、しくじりそうだったら、力づけてくださいね」

一とたび始まった加虐ショーは、坂道を転がる石のように、ますます淫猥になってゆくものであることを、元より知らない静子夫人ではなかった。

悲愴に決意してみると、彼女の美貌は象牙でできたような色艶に、もどった。崩れかけていた上体を、むりに起こし、哀訴にくぐもった声で、

「どなたか、静子を、素、素っ裸にして下さいまし。静子は、そうしてやろうとおっしゃって下さる方のほうへと参りますわ……」

更に、いい知れぬ憂愁をたたえた眼を宴席にむけ、

「ああ、そこにいたのね、小夜ちゃん。あなたも羞かしいでしょうけれど、ほら、お客さまにお願いして、ハダカになってこちらにいらっしゃい。これから、皆さまの前で、あなたと静子が、……あなたと静子が……」

ここまでを、どうやら気丈にも言った彼女だったが、万感が迫り、もうどうしようもなく、うつむいてしまい、身を揉む嗚咽に浸ってしまふのであった。

代って千代が、どうしようもないノロマなんだから、と毒づきながら胸を張り、

「つまり、奥様のおっしゃりたいことは、これから二人で、ボルノ・スターの女王の名誉を賭けた競技をお見せするから、どうか皆さんに審判役になっていただきたい。という訳なの。ふふ、そうでしたわねえ静子奥さま。」

さて、只今の奥様とお嬢さまのご希望をかなえてやって頂ける方は、どなたでしょうか？」

程よく廻った酒が手伝って、ほとんど全部の男が「よし、引きうけた」とか「俺が脱がせてやる」など、喚声とともに双手をあげたのである。

女の勝負

さすがの千代でさえ、どうかと思ったような、きわどいやり方で、猫が鼠を弄ぶように一寸試し五分刻みに、とうとう元の通り全裸体に剥がれてしまった静子夫人と小夜子。その二人を、懊悩から立ち直る余裕をあたえずに宴席の中央に追いやると、千代は、さも得意気に一座を見渡してみせるのだった。

普段なら葉桜団のズベ公たちにも手伝わせるのだが、今日は進行を一手に引き受けている。それは、このスターたちのボスが、他ならない千代夫人であることを客人たちに認識させておきたいがためらしかった。

いいだしたら、とことんまで卑劣をさせないと承知しない千代のことである。二人の性奴隷は齒の根が合わないような怖ろしさを感じ

じて肩をくっつけあっている。慎ましい女なら誰もがする、乳房と股間に両手をあてがうポーズを、彼女たちは、とっていた。

にもかかわらず、午後の光が射す中で二つの肉体を凝視すると、それぞれの特徴が、よく分かるのである。

静子夫人の肉体は、最近ますますみがきがかかり、女盛りの絶頂で大輪の花を咲かせているのに較べて、小夜子を並べてみると第一、皮膚の色からして違っていった。

静子夫人の肌は極めてキメの細かい餅肌で脂がしぶいた、ねっとりとした白さであるが小夜子の方はキメの細かさではひけを取らないが、たとえば繭を作る前のお蚕のように透明な白さに澄んだ肌である。内腿とか腕の付根などの柔らかい部分には静脈が美しく浮いており、そこは小夜子のもっとも敏感な個所であることを教えている。

静子の肉体は生地獄の耐えまない調教で、おびただしい体験をかさね、その官能の練習の練獄で、どうにでもなれと居直ったところがあるような、一種のふてぶてしさがあつたが、小夜子の全裸は、胸の隆起と双臀の肉付きで静子に迫ろうとしているが、全体のなまめかしさでは、まだ及ばず、したたか、くび

れたウエストから臀部に沿って盛り上がってゆく曲線に今一つ、重みが足りない。かてて加えて、首すじから上が小ぶりなので、その肌色の透明な白さを加えて観賞すると、全体に、ややアンバランスな痛々しさすら、感じられるのである。

それとても無理はない。もともと大宝石店の一粒種として、綿でくるむように大切にされてきた若い令嬢を、遮二無二、女にし性戯習熟のみを強制すれば、普通なら全体に並行して成熟するはずの肉体も、アンバランスに発達するのではないだろうか。

しかし、このアンバランスな美しさは、天稟の稀有のものである。すでに鬼源と千代が話しあっていたように、静子に続くスター№2は、この小夜子だろう。奴隷としての奉仕に関しては、まだ静子夫人に遥かに及ばないが、京子などとはちがって邸の男女の前に、すっかり褶伏してしまう従順さと、とりわけパツチリとした明眸、整った鼻筋の美貌は、その軀の、どことない痛々しさを加味して、男たちのサディスティックな衝動の対象として、こよない女なのである。

だが、日常の鬱憤の吐け口を求めて、サディスティックな遊戯を高度に楽しみたくなれ

ば、何といっても静子夫人を選ぶべきであろう。一片の愛情も、いたわりも持ち合わさない男であることを知りながら、優しい笑みを絶やさず、時には自ら進んで欲心を買う彼女の態度は、奴隷として見上げたものである。しかし、相手が気まぐれに命じるままになる時、どうしようもなく眼を伏せ、全身を羞恥の紅で染める彼女の心根の哀れさを、理解してやろうとするものは誰もいない。男たちはあれこれと注文をつけ、あげくの果てに、ずしりとした臀部に、ピシヤリとお仕置をしりして、大笑いをする始末なのだ。

「さて、いよいよこの辺りで待望のゲームをやって貰うことにしましょうよ——」

千代は金齒をむきだし、金壺眼をギラつかせながら宣言するように言う。

「同性として目をそむけるほど嫌な競技なんだけれど、お客さまのご要望で、どうしてもこの二人に勝負して貰わなくちゃならないのよ。どんな競技ですって？ あら恥かしい。そうね、このお二人が飛び上がってよろこぶような競技ですわよ。ホホ……」

——(つづく)——

× × × ×

× × × ×

作六鬼団



決定版

●瞠目のサディズム小説総集篇遂に成る!!

昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚「奇譚クラブ」誌上に連載中でありましたが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発行となつた訳であります。八カ年の集積を味読して下さい。

●客号「花決定版」●定価一、〇〇〇円(送200円)●

第一章 発端 第二章 人探しの場 第三章 麗人の来 第四章 援者の来 第五章 狼への好 第六章 魔の地 第七章 怖さの美 第八章 淫蛇の執 第九章 美姉妹の危 第十章 色事子の受 第十一章 美落の微 第十二章 密室の秘密 第十三章 脱走の失敗 第十四章 華やかな宴 第十五章 地獄屋敷へ 第十六章 翻弄される身代金 第十七章 一千萬円の身代金

――内容主要見出し一覧――

第二十二章 身代金奪取の失敗 第二十三章 涙の宣誓 第二十四章 連命の逆転 第二十五章 奇妙な三々九度 第二十六章 飼育される白い動物 第二十七章 悪魔と悪女の悪業 第二十八章 屈辱の地獄 第二十九章 逃走の恐怖と失敗の結末 第三十章 悪鬼達の残忍な所業 第三十一章 落花無残の修羅場 第三十二章 淫らな美女の調教 第三十三章 すすまじいショーの展開 第三十四章 汚水にまみれた宝石 第三十五章 華々しき美女の屈伏 第三十六章 対峙する美女と美女 第三十七章 あくどい陥穽 第三十八章 羞恥図絵の展開 第三十九章 清純な令嬢の屈辱 第四十章 人身御供の令夫人 第四十一章 深窓の美少女とズベ公 第四十二章 小夜子への執拗な調教 第四十三章 変性色事師の登場

第四十四章 生れかわるスター京子 第四十五章 激しいスターへの訓練 第四十六章 低脳男と令夫人の結婚 第四十七章 愛弟子を調教する静子夫人 第四十八章 羞恥と屈辱の日本舞踊 第四十九章 悪魔たちの哄笑 第五十章 地下室の羞恥と汚辱地獄 第五十一章 珍芸を開陳する令夫人 第五十二章 淫靡な時代劇ショー 第五十三章 華々しきショーの展開 第五十四章 野卑な妾二人のいたぶり 第五十五章 ズベ公達の邪悪な責め 第五十六章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち 第五十七章 悪党の執拗ないたぶり 第五十八章 文夫と小夜子の屈辱的対面 第五十九章 勝ち誇る悪党一味 第六十章 中国伝来の秘法 第六十一章 緊縛された美女の涕泣 第六十二章 新しい餌食への触手 第六十三章 苦痛と屈辱の生地獄 第六十四章 恐怖の責めめ 第六十五章 結末なき責めの結末 第六十六章 甘美な拷問に悶える夫人 第六十七章 新しい儀の到来と静子の狂態 第六十八章 あくなき汚辱に泣く美女 第六十九章 ニューフェイスに飼育開始 第七十章 肉体の悪魔に魅せられた女 第七十一章 熱気を帯びたマゾの競演 第七十二章 女盛りの妖美な肉体 第七十三章 優雅な木馬夫人の崩壊 第七十四章 美女と野獣の奇妙な闘争

お申込は大阪市住吉郵便局私書函第41号。〒558 暁出版株式会社宛

△告

白▽

夫^{おと}に内^{ない}緒^{しよ}の投^{とう}書^{しよ}

— 三^み —浦^{うら}純^{じゅん}子^こ —

私がやむにやまれない気持ちから、読者通信を投書したのが、七月号にのってから、全国の奇クファンの方々から、たくさんのお便りを頂き、ほんとうに有難うございました。

丁度、大阪の実家に祝い事があって、帰っていたときでしたので、夫としばらくの間ですが離れて生活していることが、私を解放した気持ちにさせたのかもしれない。

結婚した当初は、あれほど熱心に、私を飼育するために努力してくれた夫なのに、現在の私のように、すっかりMに開眼して、責

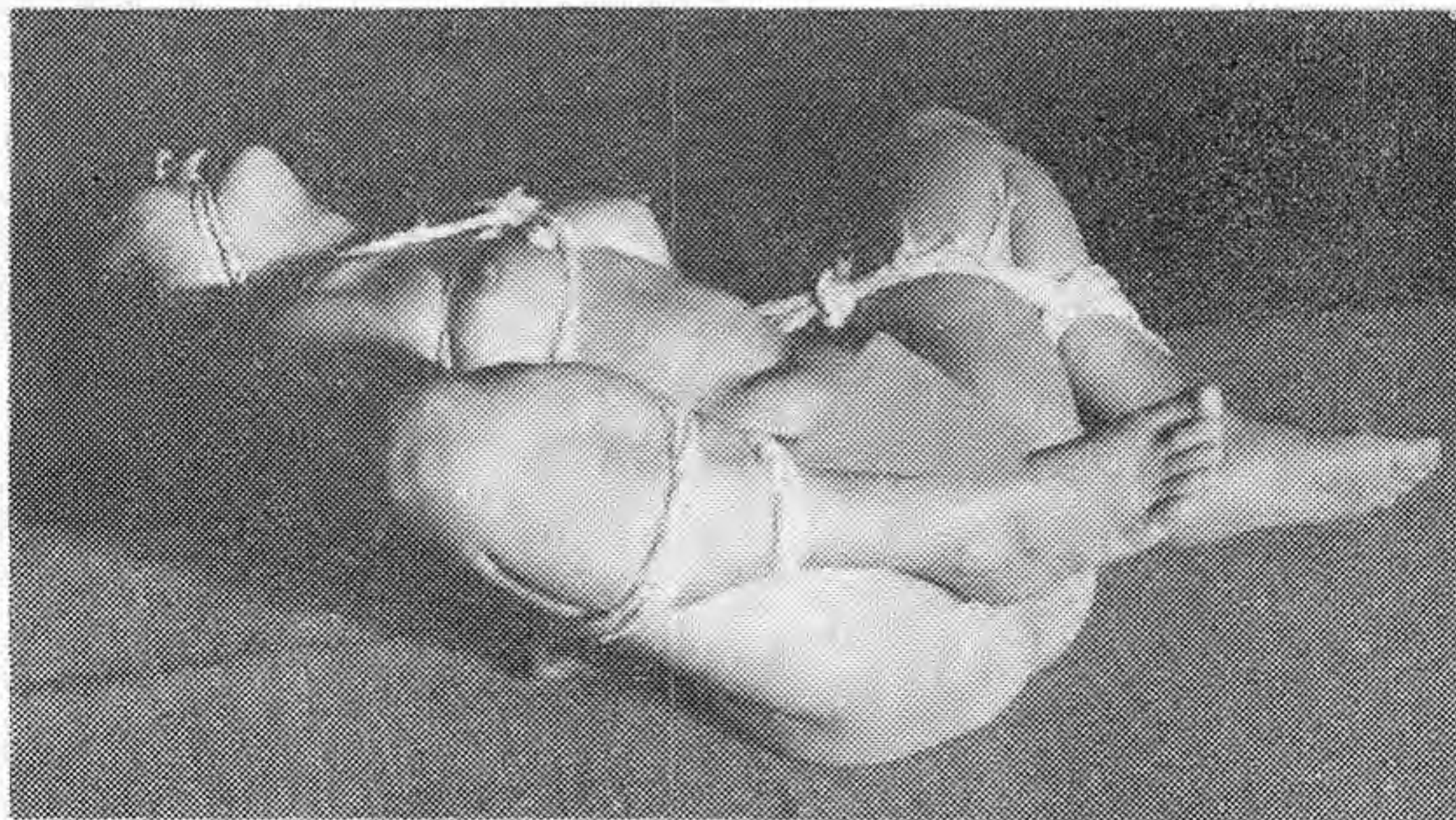
めてほしくて、たまらなくなっていますのに夫は一向に、かまってくれないのです。

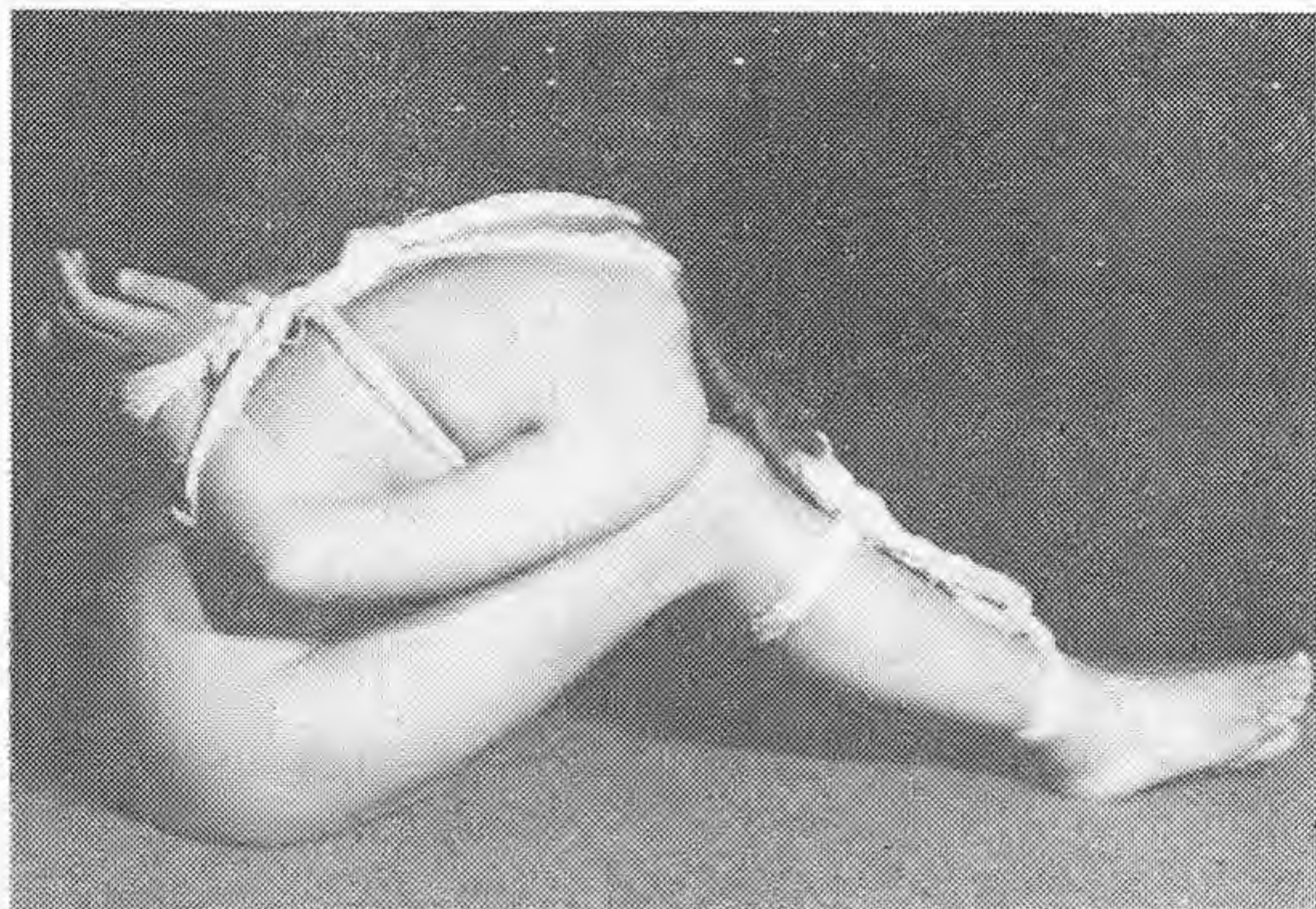
何一つ知らなかった私が、この頃では奇クなんかを読んで、あれこれと主人に要求するようになったのが、かえって気にいらないのでしょうか。私が、

「今晚はプレイしましょうね」

恥かしさをこらえて誘いの言葉をかけても、

「いいや、今日は疲れてるから……」





などと言って逃げてしまうのです。今日こそ、身も心もこなごなになるようなSMプレイを楽しもうと思って、いきごんで誘いかけたのに、このように軽くかわされてしまったのは、私の心の吐け場はありません。

新婚当時は、喫茶店の奥まったテーブルの片隅で、おそろおそろハンカチを出して、「軽く括つてもいいだろう」きわめて控え目に、私の両の手首をうしろに回わさせてゆるく縛ったりした主人でした。そんな格好の私の上からコートを着せかけて舗道を寄り添って歩いたりするのは、二人っきりの秘密のようで、たまらなく楽しいひとときでした。

そんな軽いアソビが、私にとってでは生まれてはじめての刺戟で、その快感に身も心も打ちふるえるようでした。

珍しさが先に立っていたのも、ほんとうのことです。どんなことを夫からされても、みながみな、私にとっては新鮮な刺戟で、魅力に満ちていました。

こんなに、私を心から愛してくれる夫に対して、私は感謝の気持ちでいっぱい、逆らうということの出来ない従順な妻でした。なに一つ知らなかった私を啓発して下さったのですから私は、夫の思いのままのイガタに、はめられた妻として生長していったのです。

SとかMとか、そんなことは一切、知らなかった私が、夫の手から奇クを見せられたときは、——この世の中に、こんな本があったのか、と大きな驚きを抱きました。

でも、いつとはなしに、夫の留守には、独りで秘かに奇クを読みふけるようになっていました。特に、夫婦プレイの記事には目が吸いつけられるのでした。

毎夜毎夜、行なわれるSMプレイが楽しくて仕方がなく、夜になるのが待ち遠しく感じられるようになってきた頃、縛り方も次第にきつくなってきました。痛さに耐えられない程のときもありましたが、そのあとに訪れるしびれるような悦楽のことを思うと、そんな痛さも耐え忍ぶことができましたし、また、

いつとはなしに、その痛さが快さに、すり変わってゆきました。

縛りばかりでなく、浣腸とかムチ打ちなんかもされましたが、ムチの音が外部にもれると、いけないという心配から、ムチ打ちの方は余り、しなくなりました。

——奇譚クラブのモデルになれ。

夫から、そう言われたとき、私は泣いて許しを乞いました。

「それだけはカンニンして下さい」と。

それを材料にして、それからは毎晩の様に夫から「モデルになれ」と責められました。

そして、いつしか、私も、自分がモデルにならなければいけない運命だという風に、観念してしまいました。

カメラテストとかいうことで、私は夫の車に乗せられて、指定の場所へ連れてゆかれました。そこはどこのなのか、私にも、よくはわかりませんが、先方からも迎えの車が来ていて、私一人だけ乗り換えさせられました。

私は夫と一緒にくるものとはばかり思っていました。いや、家で夫と話していたときは、「僕も一緒に行くから、心配しなくてもいいんだよ。いつも家でやっているプレイを、ほんの軽くやればいいんだ」

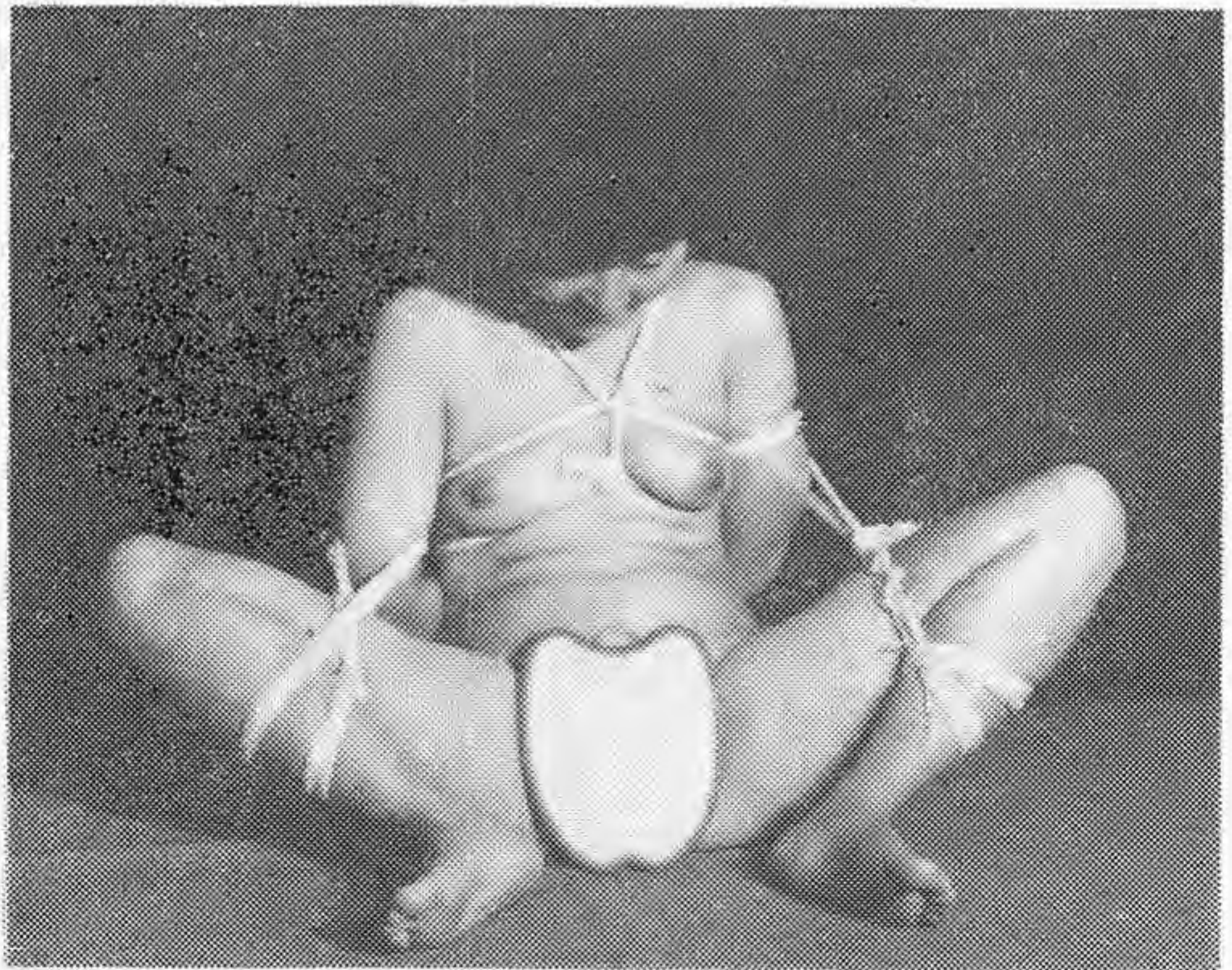
そう言っていたのに、あれは、私を素直に連れだすための口実だったのでしょうか。

私は、生まれてはじめて、夫以外の男性の方の手で縛られました。

ただ、気も動揺して、がたがたふるえているばかりで、何をされているのか、何をされたのか、さっぱり覚えていません。言われるままになっていただけです。

縛られて全裸のまま、いろんな格好をさせられたばかりか、そんな姿を写真にとられたのには、驚きましたが、それでも恥かしい嫌な気持ちが、かえって今までにない新鮮な刺激を私に与えてくれました。

家に帰ってきた私に対して、「どうだった？　どんなだった？」



しつこく尋ねる夫に対して、私が返事を渋っておりますと、もう待ちきれなくなったよ



うにSMプレイが始まりました。

それは今までにない激しさで燃え上がり、私は身も心も、くたくたにされました。昼間の余燼が身体の奥底で、くすばっているところへ、夫に火をつけられたのですから、一ぺんに燃え上がってしまうのも当然でした。

夫も非常に満足したようでした。

そのとき、撮影してもらった写真は、一枚ずつ全部、頂きましたので、それからあと、長い間、私達夫婦の夫婦プレイの刺激剤として、いつも活用することが出来たのです。

その頃から、夫は私の縛られた姿をカメラで写すようになりました。勿論、自分で現像焼付は出来ませんので、奇クの編集部にお頼

みして、やって頂いたのですけれど……。

その次に、辻村様のカメラハントで縛られましたときは、夫以外の男性の方の手で責められますことに、少しは馴れてきていましたので、少しは平静でおれたのですが、なにしろ「エビ責め」とか、「開股縛り」とかを、手加減もなく、ビシビシとやられましたのでその責めのきびしさに度肝を抜かれました。

特に、お尻を突きだした格好で上にしたまま、縛って放っておかれたときは「早く解いて……」と思いました。「それが出来ないときは、せめて布ぎれ一枚でもかけて……」と思いました。でも、私は、顔を真赤にしてうんうん——こらえながら、何一つ言葉に出しては、よう言いませんでした。

そんな格好の私を、さんざん放っておいてその上、あっちからも、こっちからも写真に撮ったのです。そればかりか、あの恐ろしいパイプが私の身体に襲ってきたのです。

全身に電流がかかったようになり、やがて身体中がバラバラになってしまいました。

あのときのことは、今でも決して忘れることは出来ません。

あれから、大分の月日が、たちました。

夫は相変わらず奇クは読んでいるようです

が、私とのプレイは、だんだんと情熱を失ったようで、お義理で仕方なしにやっているといった風でしたが、やがて、それもなくなりすっかり遠ざかってしまいました。

意欲を失ってしまうと、不思議なもので、当初の頃は、あれほど、狂ったようにプレイに情熱を傾け、私の身体をむさぼりつくしてやまなかった夫なのに、ここ一年ほどは、ぼったり、とだえてしまったのです。

そんなとき、私が実家の祝事で大阪へ帰る機会を持ったのです。四日市から大阪といえ、近鉄を利用したら、あっという間に着く距離なんですけれど、久しぶりに夫の手元をはなれ、のびのびした気持ちになりますと読者通信に投書してみたい——という、くつろいだ気持ちになったのです。

沢山の方々から通信をいただき、ほんとうに、びっくりしました。初めのうちは、一々お返事を書いていましたが、夫に内緒でしたから本当の住所も書けず、それに、あの方には、お返事を書くにも書けない状態になってしまいました。

当然のことですが、毎月、奇クを買い求めている夫の目に、私の通信が入りました。「何故、こんなものを勝手に出したんだ」

そういつて責められました。

「よくも夫の顔に泥を塗ってくれたな」

とスゴムのは、まだいい方で

「純子は、俺にかくれて浮気をしたかったのだろう。この尻軽女め」

そんなことで、とうとう本格的な責めになってしまいました。本当に夫との久しぶりの、SMプレイでした。新鮮さもありましたし刺激もありました。歓喜にむせぶ私に対して「純子へのサービスのつもりで縛っているんだよ」

というような意地悪を言います。

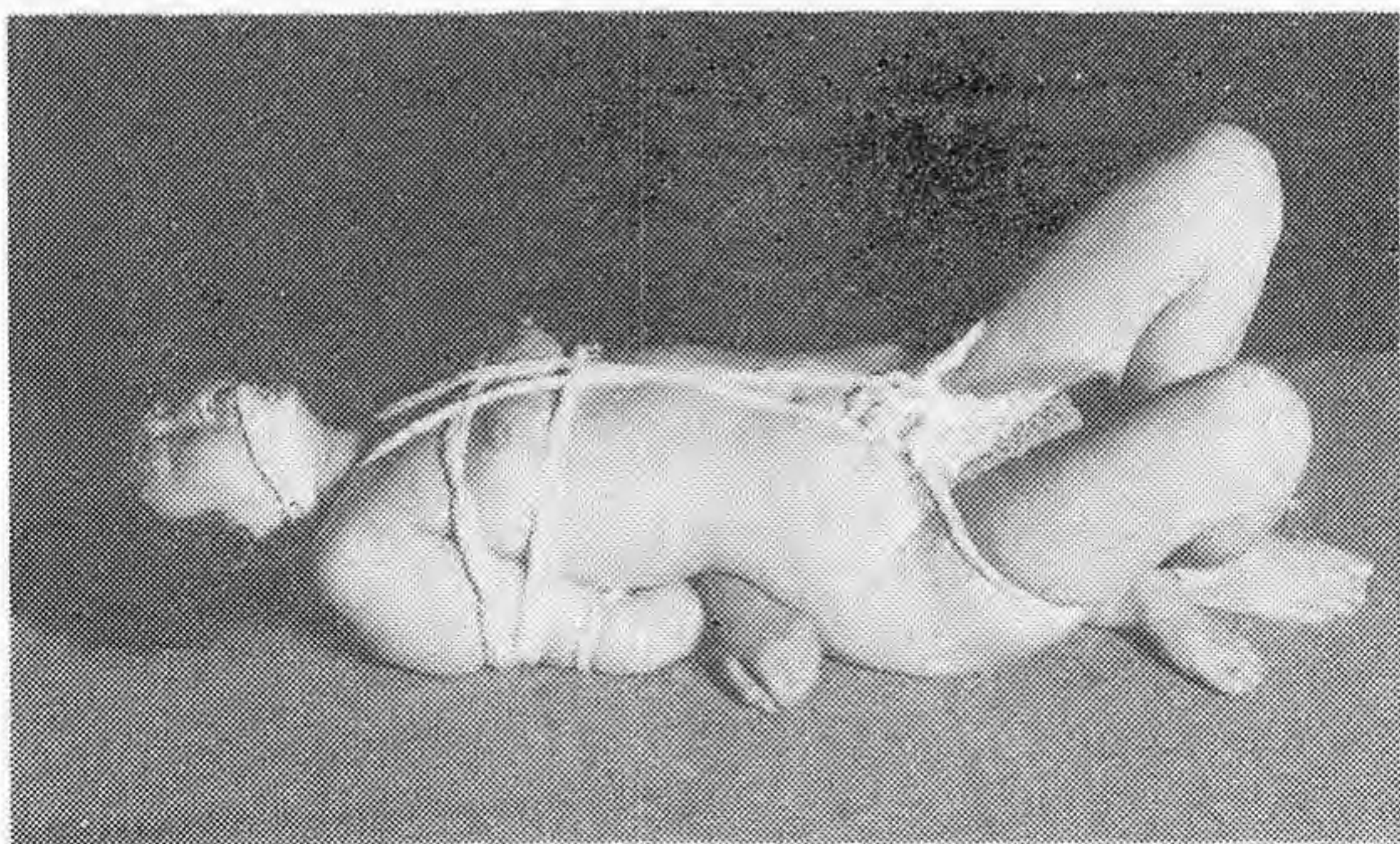
私はファンの方々から頂いた手紙を夫に見せて言いました。

「この人たちのなかから、一人でいいから、プレイをさせて……」

夫は考えているようでしたが、心の中の苦しさは、かくせないようでした。でも、いずれは許してくれることだろうと思います。

こうして、私たち夫婦のプレイは一年ぶりに再開されたのです。

夫は再びカメラを持ち出して、私



の縛られた姿を写真にしました。

「今までは、発表できないようなのばかり撮っていたからナ、今度は雑誌にのせられるようなのを撮ろう」

夫も、いつになく楽しそうでした。

我が家にも久々に春が訪れたのです。

私がお返事を差し上げた方の中には、わざ

わざ編集部経由で、長文の懇切なお誘いのお便りを頂戴した方もありました。

純子が家庭の主婦として、今すぐ貴方様のお手もとに、はせ参じて責めていただくわけにはゆきませんが、いつか、夫の許しを得ました、その晩は、楽しいプレイのひとつを待つチャンスもあるうかと思えます。



私は今、夫以外の男性の方の手で、思いのままに縛られ、責められたいと願っております。今まで、じっくりと時間をかけて徐々にMに飼育されてきた純子ですから、どのような羞かしい責めにも、耐え忍べる自信があります。

辛抱づよい純子のことですから、きつく縛り上げられたり、ムチで力いっぱい叩かれたりすることにも自信があり、従順に耐えるつもりです。

でも、どちらかと申しますと、剃毛とか、浣腸とかいった羞恥責めの方を望みます。

細の方は、純子が逃げだせない程度に、ほどほどに使って頂き、それからの責め方につきましましては読者の方々の考えられる、どのような、みだらなものでも甘んじて受けます。試してみようと思われる小道具を、お使い下さいませ結構です。

こんな純子でございますので、どうか、よろしく、お願い申し上げます。

なお、ここに同封いたしましたフィルムは先日、主人が私を写してくれたものです。現像焼付の上、もし使えますものがありましたら、誌上にご掲載いただければ、こんな喜びはございません。

王 美 齡

柏木の局が、その一命を、なげうって示した「没我の愛」は、居合わせた全員に大きな感動を与えずには、いなかった。ここでは柏木の自己犠牲を狂気じみた行為だなどと考える者は一人もなかったし、かえって自らを反省して、あの三つの誓いの意味を一層、厳粛なものとして噛みしめていたのである。そして、大変な前例が出来たものだ。若し自分がその立場に立たされたら、果たして、このよ

うに悲愴な決断を下せるものだろうかと多少不安に思わないではいられなかったのも、素直に言って自然のことだったかも知れない。なかでも敏感に反応したのは、この国の生活に不馴れな山百合子だった。東の館に禁足されている長い日々、責任者である柏木の、あたたかい庇護を受けて来た。それを実証する例は枚挙に、いとまがない程だった。しかも、その最期の言葉は、自分に代わって有明に仕えてくれるようにという遺託で、百合子も、最も感情の高揚した状態で、それを諾してしまった。ということは、彼女が被虐



第四十九回

前号まで「独裁主有明は世界中から誘拐蒐集して来た数千の裸女に畜従隷従を強制している。美女達は夫々の材質によって五段七階級に分類され、巧みに統制管理される。カンヌ沖で原潜ネプチューン号に収容された映画女優、王美齡は、はじめから一等扱いだったため直接、エステルの館に幽閉されたまま、他の女囚たちのようなレセプションを受けずに温存されていた。彼女の世話をするのは、航海中からウマの合っていたアマゾン将校高橋淑恵だった。彼女は今回の功績により大佐に昇進し近衛将校に任ぜられていたから、一層、好都合だったからでもある。

者の立場から悦虐者の立場に変わることとを容認したに等しい。少なくとも、これから与えられるであろう様々な羞恥や屈辱に、進んで直面しなければならなくなってしまったことを意味するのである。

だが何といっても、今度の事件で最も衝撃を受けたのが、当の有明自身だったということとは、誠に皮肉とも何とも言い様のないことであった。絶対、独裁者である彼は、柏木に生きよ、と命じることとも出来たであろう。それでも自殺しようとするれば予防拘禁する権力もあった。しかし、万一、自殺されてしまっ

たら、この国では最大の反逆となり、最高の刑罰を与えなければならなくなる。文字通り死屍を鞭打つことになってしまう。そうなくては又、あまりにも可哀想である。有明の躊躇は、その点にあった。その点を柏木が巧みに突いたとも言えよう。ともあれ、有明は生まれて始めて「臨終のアクメ」を体験したのである。

蜜蜂の雄は、ただ一回の交尾で死んでしまう。カマキリの雄にいたっては、雌のためにムシャムシャと喰べられてしまう。昆虫の世界では交尾が個体死を意味する例が多い。そ

れも雄ばかりである。

今や有明は、その主客を異にしたとはいえず行為とともに雌を締め殺す雄となった。そして、そのときの感覚は、まさに強烈としき言いようのないものであった。

死の執念は、有明をすっかりと囚えたまま次第に冷たくなって行った。脳死のあとも、恐ろしい程の力で有明にしがみついて、殆ど抜け出すことを不可能にしまった。さしもの有明も、快楽の極まりから苦痛の極まりに飛んで、悶絶してしまったのである。

自失した有明を、柏木の死体から引き離すことは大変なことであった。そこで佐野女医が呼ばれて注射をして寛解させたのである。さすがの有明も、気づいたとき、如何にも間が悪そうな顔をしていた。愛すべき貴妃たちが、みんな心配そうに覗き込んでいたからである。

「皆、さがってよい。今夜は、ここで泊まる私一人で寝かせてくれ」

切れ切れに有明が言った。カラカラに乾ききったような声であった。

中廊とお次が寢室を調える間、貴妃たちはめいめいの居室に引きとっていった。山本百

合子も明石の局に連れられて、元の離れに戻り、大の字なりに縛りつけられてしまった。

柏木の遺体は、特に許されて、中央の正階を通り、訓練連隊へ運ばれる。そこに死体処理室があるからである。

死体処理といっても、高位者の場合は大変な手数がかかる。レーニンの遺体は今尚、モスクワ赤の広場に生けるが如く眠っている。この国でも、高位者の遺体は慎重に処理した上で、大切に保存することになっている。前に述べたように、このような処理は訓練連隊の柏木中隊に委託される。

中隊長は青木友紀という二十五才の元プロボウラーだった。女子プロボウラーの条件は技術よりもスタイルが大切だといわれる。彼女の人氣が高かったのは、その勝負度胸と運動神経の良さは勿論だったが、特にひきしまった肢体の魅力は、数々のテレビコマーシャル出演によっても立証されていた。

その青木中隊長にしてからが、まさおになって、柏木の局の冷たい死骸を受領したのである。まして、訓練中のアマゾン女兵たちでは悲しいというより、触ることさえ恐ろしかったであろう。訓練女兵に死体処理させる目的は、多少とも、このような異常体験に

馴れさせることにあった。

一人きりで、というより、彼女だけは人ばらいの対象にならない貴和と一緒に寝て、その夜だけは指一本、触れようとしなかったのだから、稀有のことだった。

その上、苦しうに何回も寝返りをうったり、突然、大声を出したりして、貴和を妨げた。おかげで、彼女は一晚中、まんじりとも出来なかった。貴和自身も、柏木の事件から受けた興奮が大きかったからでもあろう。

しかし、翌朝になると、有明は持前の強靱な意思力で、身心ともに平素の活力を、とりもどしていた。少なくとも表面だけは、誰の目にも普段のままに映った。だが、もう一步掘り下げてみると、有明の心には未だ余燼がくすぶりつづけていた。如何に彼が、地上的な善悪から蟬脱しているといっても、自分の女の首を締めるということは、矢張り心の萎えることであつた。始めから殺すために育てた豚や牛だって、いざ自分の手にかけるとなると、躊躇せざるを得ないのが自然な人情であらう。有明は理想主義者ではあつても、あらゆる意味で異常者ではなかった。彼の精神も肉体も、共に健康であることに着目すれば

彼の苦痛は、むしろ容易に読者の共感を得られるに相異なると思う。

さらに彼は、支配者が自縄自縛に陥った時の苦しみをも味わっていたのである。泣いて馬謖を斬ったという諸葛孔明に似た悲痛な感慨だった。

当然の反作用として彼の志向は荒れ、猛々しく誰かを責め虐げたいと欲した。

有明はエステルの未決房に軟禁したままでいる絶世の美女（映画界では、こう呼ばれていた）王美齡（ワン・ミリーン）のことを思い出した。

こんなとき思い出されたことは、王美齡にとって災難としか言いようのないことだったけれども、それは有明以外には誰も窺うことの出来ない機微であつた。

この数カ月間、彼女の世話近衛侍従に昇進した高橋大佐の手に委ねられていた。

ネプチューン号に幽閉された時、当時、副長だった高橋に何故か、ひどくなつたということは前に述べた。（第六回、参照）

彼女は「一等扱い」だったために特にひどい辱かしめを受けなかったのだけれど、それだけに地上との区切りが、つけ難く、かえっ

てヒステリックになりやすかつたのである。

そうになると、誰も手がつけられなくなる。それが不思議に、高橋が来ると平静に戻るのが常だった。そんな関係が、エステルの館にも持ち越されて来ていた。

エステル館での待遇には、一貫した規則も基準もなかった。ジョセフィーヌやマリーのように、一思いに裸に引き剥がれてしまう場合もあるが、王美齡は着たいものを豊富にあたえられていた。ただ、部屋の構造や広さが規格通りだったので、全部を入れるスペースはない。それで、毎朝、部屋つきの黒人女に言いつけて取り寄せることにしている。

高橋淑恵も房までは来ない。エレベーターを昇ったところにあるロビーで面会するのである。

彼女がしなければならぬ事は、健康管理のための体育と、日本語の勉強だった。就中後者はこの国での地位を確保するために日本人以外が直面しなければならぬ第一の関門であることを、高橋は繰り返し教えた。

以上のカリキュラム以外は、全く自由だったけれども、それだけに彼女は激しい無聊に悩み始めていた。何といつても、閉じ込められた生活は単調そのものだったからである。

これが婢位や奴位、乃至は畜位、物位になった身ならば、休む暇もなく、課せられる激しい調教に、無聊を感じる余裕さえ、なくなっていたであろう。

絶世の美女という称を、ほしきままにしていた王美齡。この国の言葉でいえば「機質の良い」ことが、とりもなおさず彼女の境遇を規制していたことになる。

彼女はフラストレーションから、一層はげしい発作を起こすようになった。

その報告が有明のところへ来ていたのである。

有明の何たるかを王美齡といえども、臆気には察していた。テレビ、その他の情報手段で必要な知識は与えられていたからである。しかし、それは飽くまで「必要な」最小限度であって、現実際して新鮮さを喪ってしまふような情報の過剰供給は慎重に避けられていたから、自分の未来を占おうと必死になっている新入り女囚から見ると、何としても歯がゆい。むしろ、かえって行く末の不安を募らせるような底のものだったといつてよい。それは王美齡にとっては、全く突然やってきたのである。

いつものように、黒檀のような肌を輝かした裸形の黒人娘が、啞のこととて、黙って来るように身振りでも知らせたとき、王美齡は、高橋淑恵が今朝は又、ずい分、早く来たものだと思っただけであった。

ところが、リフトをあがったところで待ちかまえていた高橋の顔つきを見て、王美齡は即座に、とうとう来るものが来てしまったのだということを感じた。何度となく、この時が来るのを覚悟していた筈なのに、いざとなると何の心の準備もなく、ただ顔色をかえて立ちすくむばかりだった。

そんな躊躇など許されないといった様子で高橋は美齡の手をとった。

有明は、たった一人、特別な設備のある拷問室で、二人が入ってくるのを待ち構えていた。総革張りのソファに、白い寛衣(トガ)のまま、ローマ風に横坐りをしている背後の大きな暖炉では、本当の太い切株が燃えさかっている、さながら有明自身で炎の向背を負っているように見えた。

高橋淑恵が平伏するのにつられて、思わず跪こうとする美齡に、有明が、いきなり声をかけた。完璧な北京官話だった。

「礼をする前に、服を脱いで裸体になれ」

貞操帯

王美齡は涙も涸れる程に泣き続けていた。

日本人と違って、声を押さえることもなかった。それなのに、美しい悲鳴は、いっそう有明を楽しませるにすぎなかった。しかし、彼女はもう、その涙を拭く自由すら、奪われてしまっている。

味方と思って甘えていた高橋淑恵が、今は地獄の鬼女のようにさえ、感じられる。

裸になれという有明の命令に、動転して、ただオロオロしている美齡を、たちまちに剥き上げてしまったのは高橋淑恵だった。その上、天井から下がってきた二本の鉤に、バンザイをしたような恰好でブラ下げてしまったのも同じ手だった。

はじめ、赤裸が無性に恥かしく、深々とした敷物に身をまるめて、うずくまったところを、いつの間にくくりつけられたのか、両手首、両足首に細いロープがからみ、それぞれ一コずつの鉤に、つながられてしまったのである。

「シューン」というモーター音と共に、両手は天井の方へ高々と引き上げられて行った。

足は足縄で、床上を左右へ引き込まれる。こうして、王美齡の美事な肉体は、一切をあらわにして、ピンと固定されてしまったのである。

「フーン、立派なものだね」

又の名、蔡樹理になり切ってしまったように歯切れのよい中国語でつぶやきながら、抵抗も出来ない美齡のまわりをグルグルと廻る有明の姿に、哀れな美女は、ただ

「たすけて、たすけて」

と、うわごとのように叫ぶばかりだった。だがそれだけで済まされる筈はない。

「ヒューッ。アイヨー！」

悲鳴が一段と高まったのは、有明が羞かし気にかくれている小さな乳首に、そっと指を触れたからである。男を知らない乳首は小さくても、乳房全体はハチ切れるばかり



に、ふくれていた。その双の乳房がブルンプルンと震えた。身をよじって屈辱を避けようとする、はかない努力が、いっそ、いじらしかった。

何カ月も放っておかれて挙句の果てが、このような暴力で始まろうとしている。気が狂ってしまった方が、まだしも幸せかも知れない。美齡は、そう思った。しかし、数カ月の

期間が、それこそ曲者だったと言わなければならぬ。その間に、好むと好まざるとに拘らず、ある種の馴化が進んでいた。つまり、この国の異様な環境に適応して行く素地が養われていた。なる程、苦痛は新鮮であり恥辱は激烈ではあったけれども、気が狂う程ではなかったのである。

有明自らの手で、胸と腰のサイズが計られた。冷たい金属ゲージを直接、肌と感じた美齡は全身を鳥肌立てて不快さを示した。特にいわゆるプッシー・ゲージでヴィーナスのカーヴを正確に割り出して行く段になると、もう不快どころの、さわぎではない。恐怖と羞恥が入り混ざって思わず失禁し、ゲージとそれを持った有明の手を汚してしまった。あわててタオルを差し出す

高橋淑恵に向かつて、

「このサイズ通りの下着を持ってきてあげて下さい」

と、今度は英語で言いつけた有明は、手がよれたぐらい、まるで気にもしない素振りだった。しかし美齡は、みじめだった。思っても見ないのに、人前で粗相をしてしまった恥かしさ。彼女は全身を紅に染めて、身もたえをする。その太股を伝わる生暖かさが、どうしようもなく気持が悪い。その汚れを有明はキレイに拭ってやった。

高橋は、いつの間にか部屋を出てしまっていた。英語だったから美齡にも、よくわかった。どうやら下着が与えられるらしい。ああよかったと思う。

だが、そのような安心もホンの束の間でしかなかった。高橋淑恵が捧げるようにして持ってきたのはピカピカ光る鋼鉄の帯だったからである。ヨーロッパを旅したことのある美齡には、それが何であるか、すぐ判った。いまわしい中世の「貞操帯」かつて観光客に混じって苦笑しながら眺めたことのある赤錆びた鉄の工芸品、それと同工異曲ではあってもその邪悪の目的は同じであろう、その鉄の帯を、現実には自分の肌に纏わせられるのである

う。慄然と、彼女は身体を硬直させた。一縷の期待に安んじた一瞬が、それを無残に打ちくだかれた今を、一層みじめにしていた。

有明は知らん顔で、その道具を検査し始めている。

「どうかね、君のサイズにぴったりの筈だ。綺麗に磨きあげられている。ステンレスだから、錆びることもない。始めは、ひんやりして冷たいかも知れぬが、すぐに馴染んで、着けていることが楽しくなるよ」

祭樹理の北京語は完璧だった。それが又、美齡を、よけい、いらだたしくさせた。

「プハウ（嫌ッ）」

わざと南の方言で、ツンと顔をそむける。日本人には絶対あり得ないプロポーションだった。スナリと細い両足が腿のあたりで急に肉づきを増して、見事なヒップに連なっていく。やせぎすで筋肉質なのに、胸は異常なまでに張り切っている。

そんな美齡の、あられもない肢体を、なめるように見廻しながら有明が、つけ加えた。「下着を装着する前に、君の肌は、あまりに美しすぎる。そのまえにヨゴしておいてやろう。私だけの美肌を、不遠慮な視線から守っ

てやらなくっちゃあね……」

これだけの言葉で、高橋はすぐに、マスターが何を必要としているかを察した。彼女が持って来たのは小型のコンプレッサーと吹き付け道具だった。電熱を入れると、黒い粉がたちまち溶融して、アスファルトのようなネバネバした液体に変わった。ピストルのようなノブを押すと、その黒い溶液は、霧のようになって激しく飛び出して行く。

「アッ、熱いッ。バン・ツウ・ウオオ（たすけてえ）——」

絹をさくような美齡の悲鳴。みるみる、豊かな腰のあたりが、まっ黒に染まった。

「邪魔だ。片足を吊りあげろ」

有明の命令で、高橋淑恵は美齡の左足首を固定した鉤からはずした縄を天井のフックにひっかけ、力まかせにギリギリと引く。何でたまるう。美齡の左足は、激しい抵抗にもかかわらず、一ぱいに吊りあげられてしまい、黒い霧が、飛びかかって行く。

しばらくすると、美齡は黒いボディウェアを着たような恰好になってしまった。つまり頭部と手首、足首を除いて、全身が軟質プラスチックの膜で蔽われてしまったことにな

る。皮膚呼吸を制限されて、次第に不快感が増大してくる。もうろうとした知覚を、鋭い痛みが刺すように理性を、よび覚ました。

機関銃のように往復する真空パンチが、プラスチック膜に細孔を穿ち始めたのである。美齡の黒い衣裳は、網タイツのように無数の小孔をひらいて行った。これで、彼女は皮膚窒息から救われることになる。

その上、ご丁寧にも、乳房のあたりが、二つの円型にくりぬかれ、さらに下腹の辺りが

Oの字型に切り出されてしまつと、何のことはない、もっとも羞かしいところだけがあらわにされてかくす必要もない部分のみがプラスチック膜でカバーされるといふ皮肉な風態になった。

くりぬかれたプラスチック膜をメリメリとはがすとき、まるでパックをとるときのような不快感で



美齡は思わず気を喪ってしまっていた。それがすぐ氷のように冷たい刺激とともに呼び覚まされて行く。つまりステンレスの「下着」が与えられたのである。

全身がヒリヒリ、しみるように、うずく。知覚が戻っても、疲れ切った美齡は、死んだように吊り下がったまま、有明のなすがままにおぞましい鉄の下着を、ピシピシと装着されて行くのだった。

「テングデ・ヘエン・リイハイ、アイヨー」
(痛くて、たまらないわ。ああ……)

それは一種の拷問だった。丸く切りとられた双つの乳房に、かぶさるような硬いプラスチックの半球が、ステンレス製のブラジャーに、とりつけてあった。透明だから、かえって美齡の屈辱感を駆りたてていた。まん中にある小さな突起に、これも又、小さな乳首がチャンと、はまるようになっていたからである。乳頭の位置は個人差

の多いものだから、既製品では到底、このようにウマく合う筈はないのでかなり以前から計画的に採寸し、準備してあったにちがいない。

その上、鉄のブラジャーは指も入らないくらい胸を、しめつけてくる。又、半球の縁に塗りつけてあった糊が、プラスチックのボディウェアと密着して、丁度、目張りをしたようになった。

コンプレッサーの吸込

み口にホースをとりつけると、そのまま真空ポンプの働きをする仕掛けになっている。

二つのお椀に夫々とりつけてあったバルブに、有明は、ゆっくりとコンプレッサーのゴム管を接続した。

お椀と乳房との間隙に残っていた空気が吸い出されるにつれて、美齡の乳房は、たちまち、お椀一ぱいに、ふくれあがり、ぴったりと張りついてしまった。

これは又、拷問であると同時に、乳房の発達を促進させる一種の整形器の役割をも果たしているといえよう。

可愛いらしい乳頭が、ピヨコンと飛び出して、お椀のまん中にある小さな突起に具合よく、おさまっている。有明が外から磁石をあてると、突起の内側、根元にとりつけてあったゴム輪が収縮する。これで、たとえ空気が入ってしまったても、乳房は容器の中で遊んでしまうことは、ないであろう。

どのくらい経ったのだろうか。

美齡が、われにかえったとき、彼女は依然としてバンザイをしたような姿のまま、吊るされていた。

高橋の姿は、すでになく、有明だけが長椅

子の上にくつろいで、ゆっくりと盃を、かたむけている。その後にある大きな暖炉で、直径20センチもあるような切り株が、赤々と燃えている。その熱気を受けて、美齡の全身を被ったプラスチック膜は、もう完全に乾き切っていた。内側から噴き出してくる汗が、肌と膜との間を流れて、たまらなく気持が、わるい。

それより、長いこと彼女の全体重を支えてきた手首の縄目が、非情にも皮膚に喰い込んでしまったようで、その痛みが次第につのってきていた。

「ウオオ・ショウウ・テェン（手が痛いわ）」
彼女は、すすり泣きながら有明に、うったえるのだったが、彼は聞こえていくくせに、意地悪く返事をしてくれない。黙ってニヤニヤと、うすら笑いをうかべながら、コニヤツクの盃をかたむけるだけであった。そんな言い方では、返事をしてやらないぞという意味が言外にあった。

賢明な美齡は、す早く、それを覚ったのである。彼女は完全に、うちひしがれてしまった。有明の軍門に無条件で降伏する他はないと思った。不思議なことに、こう考えた瞬間から、彼女のヒステリーは嘘のように消えて

しまったのである。

そして、事実、そのあとの彼女の短い生涯を通じて、二度と、その発作を起こすことがなかったのである。ショックが、彼女を慢性のフラストレーションから解放してしまったからであろう。

「チン・ニイ・ユアンリアン・ウオオ（どうか、お許し下さい）」

打って変わったように細々と、うったえる美齡の声を聞いて、有明は美齡の武装解除が終了したことを覚った。

「いいか。これからは、どんなことでも私のいう通りにしなければならぬ。私の奴隷ともなり、ペットともなって奉仕するのだよ。そうすれば君は自由になれる。どうかね、わかったかね」

「ミン・バイ・ラ（わかりました）」

滂沱と涙を流し続けながら美齡は答えた。その涙は口惜し涙というより、むしろ歓喜のそれに近かったかも知れない。なぜなら、ステンレスの鉄帯をすら溶かすほどの情感が、全身をかけまわっていたからである。



桐原紫門絵

昭和二十年八月二十四日、上海——

在留邦人の河野一家は災厄に見舞われた。七人の乱入者におそわれたのである。河野という姓はあとで解ることだが、首領のSが四人家族の日本人を自分たちの根城に連行した。母親は四十才前後、長女二十才くらい、次女十二、三才くらい、息子十才くらいであった。

そこで四人の処分を相談ということになっ

女性切腹史

花の墓碑銘

(四)

中 康 弘 通

たとき、Sは、

「ただ殺しても面白くない。少しいじめてやる。俺にまかせろ」

というと、その長女を呼び寄せた。日本語で、

「おい貴様、自分の家族を助けたいとは思わないか。考え次第では助けてもよいが」

娘は、ただ驚くばかりで口も利けず、Sを見つめている。そこでSが言葉を継いだ。

「俺たちは、まだ日本人の腹切りを見たことがない。もしお前が、ここで腹を切ってみせてくれれば三人は助けてやる」

Sは女の顔色で反応を見ながら、

「それも、ただ切るだけではない。裸になって一文字に切り、はらわたをつかみ出してみせてくれ。どうだ」

仲間の者も呆気にとられている中で、娘は真青になって身を震わせながら、

「お願いです。ちょっと考えさせて下さい」泣きながら哀願するので、一旦ものおきに入れ、Cが見はりに当たった。

娘は一時間くらいもうつぶして泣いていたが、眼を泣き腫らした顔をあげ、おずおず、「はらわたをつかみ出すには、どれくらい刀を突っ込んだら、いいでしょう?」

と訊ねる。Cも判らないので、

「三、四寸だろう」

と云ったものの、あまりにも哀れなので、

「切腹だけは、ゆるしてくれと、もう一度、

兄貴に頼んでみたら、どうだ？」

そう、すすめた。

しかし娘は、きつとして、

「今更そんな恥さらしなことは出来ません。

でも、せめて」

と頼み込むようにいった。

「手拭いだけでも、体に巻かして下さい」

そこでCはSに、

「腹は切るが、せめて体に手拭いだけでも巻

かせてくれ、と云っているが——」

と伝えたものの、Sは聞き入れない。

娘に、駄目だ、と伝えると、娘はガツクリ

したが、

「切腹すれば、きつと家族をゆるしてくれま

すか？」

と念を押す。Cも哀れさきわまって、

「よし、必ず責任をもって助けてやる」

その一語を聞くなり、娘は

「それでは、すぐ切腹しますから、体を清め

させて下さい」

と最後の願いを述べた。夜の十時すぎである。タライに湯を与えられた娘は、思い切り

よく裸になると、体を洗い髪をときつけた。

よく見ると、五尺ちよつとの、背丈だが、

骨太で目付きは、よかった。

「名前を書いておけ」

ありあわせの紙片をわたすと、娘は、

昭和二十年八月二十四日

河野弓子

行年十八才

と、はっきり書き残した。

先刻の部屋に毛布を敷き、掠奪した軍刀の

一尺八寸五分もある刃わたりの、切先五寸残

して布で巻き締め、娘を呼び入れた。もう十

時半になっていた。

娘は、うつむいて入って来たが、刀を見る

とギクツとして立ち止まったものの、己が運

命を諦めていると見え、すぐ刀の前に正座し

た。

娘は両膝をピタリと合わせて、横たえられ

た軍刀をとり上げたが、見れば手が震え、胸

も喉も動悸で波打ち、汗が流れ落ちていく。

それでも気をたしかに持って、左脇腹へ刀

を構え、腹に力を入れようとするのだが、動

悸のため、息をとめられず、十数呼吸ののち

やっと眼をとじて齒をかみしめた娘は腹が丸

く見えるほど力を入れ、一気に四寸ほども左の脇腹に突き入れた。

ああ、とうとうやった……と見る間に、声

も立てえず前にのめった体を立て直した弓子

は、小刻みにギリギリと、腹一文字に切り進

んだ。

臍のわずか右まで切り廻したとき、体をく

ねらせ、「ああっ」と叫いた弓子は、唇許か

ら血を流しながら、左手を、血しぶきのとん

だ左膝について、あえいでいる。

傷口は上下に一寸くらいも開き、血が噴出

して正視できぬほどになった。しかし弓子は

辛うじて左手を膝から放して刀を握り直し、

「ううむ、ううむ」と二度まで呻いて、体を

左へ、刀を右に廻して、完全に右の脇壺まで

引き切ってしまった。

軍刀の刃先を腹中にとどめたまま、手を放

して前かがみになりながら、弓子は両手で両

脇腹をつかんで中央へ、ぐっと押した。たち

まち傷口は大きく開き、軍刀が抜け落ちると

ともに、はらわたが、あふれ出る。

苦しいのか、もう唇をひらいてあえぎ、肩

を波打たせた有様のまま弓子は、はらわたを

膝の先までつかみ出すと、恐ろしい形相で暴

徒を睨み廻したのち、がっくりうつぶした。

しばらく苦悶していたが、末期の水を乞うて、呑み下すと程なく絶命したのである。

もちろんSやCは、約束どおり、弓子の切腹は秘したままに家族を帰宅させたという。

この悲痛な物語りは、後年たまたま来日して「奇譚クラブ」でX氏の論考を読んだCが自身の目撃した女性切腹例として、東南アジアへ向け離日する直前に投函した書信に拠るものである。

古昔から日本には、無念腹という語と、詰腹という語がある。前者は、無念の程を示すために深く腹を切り、はらわたを手ぐり出して見せること。後者は他に強いられてやむなく腹を切ることを、それぞれ意味している。

この河野弓子の場合は、詰腹の、しかも無念腹を見せるように命ぜられたものだが、実際その心中の無念さは、はらわたをつかみ出して、なお癒やし切れぬものがあつたのではなかろうか。

考えてみるがよい。十八才といえば今日流に数えれば十七才である。女学生の年ごろでよく非力な女の身で、鋭利短小な九寸五分ならともかく、ずっしり重い軍刀をあやつって我とわが腹真一文字に切るさえあるに、更にかき切った傷口から、自ら、はらわたくり出

すとは、戦国武士さながらの壮烈さである。

この悲痛壮絶の最期は今日、筆に口に伝えられる日本軍の大陸における無法な行為が、もし実在したとしても、その何分の一かを、つぐなうに足るものではなかろうか。

ところで、この河野弓子の最期の状況を読み返してみ、最近封切りされた映画における女腹切りが、大変酷似した状況を示していたので、一筆つけ加えておきたい。

◎東映映画「徳川セックス禁止令

色情大名」について

この映画は、題名から見ると、今日流行のポルノ路線に見えるし、また内容もポルノ的部分が、ある程度のウェイトを占めている。

しかし、実際に観賞してみ、必ずしもそうでないことがわかる。まずあらすじを解説しておこう。資料はすべて、東映よりご惠贈いただいたシナリオと、映画館「ステーションキネマ」のリーフレット、および実見に拠るものである。なお出演者の皆さんの敬称は煩雑を避けるため省略させて頂く。

九州唐島藩主・小倉忠輝（名和広）は、將軍徳川家斉（田中小実昌）の第五十四子清姫

（杉本美樹）を降嫁させられるが、元来、女ぎらいで、近習森田勝馬（成瀬正孝）を寵愛している。

従って、至って権高な姫との閨房はうまく行くはずがない。筆頭家老・米津勘兵衛（殿山泰司）は、大奥年寄・藤浪（三原葉子）に叱責され、豪商・博多屋伝右エ門（渡辺文雄）に忠輝の教育方を頼み込む。ころびバテレンの伝右エ門は、隠れキリシタンでフランス娘のサンドラ（サンドラ・ジュリアン）を忠輝に配して女体に開眼させた。

ところが忠輝は薬の利きすぎで、すばらしいこの快楽を、家臣や町人・百姓に味あわせたくない、と、閨房禁止令を発した。たちまち家中も城下も騒然となる。

忠輝をサンドラに奪われた清姫の悲しみを、見かね、藤浪はサンドラを私刑し牢に縛る。森田勝馬がサンドラを救い出したが、海辺で「心は神を求めながら、肌は情欲の悪魔を求めてうずく」と嘆くサンドラを、伝右エ門は捉えて配下に凌辱させる。

家老の息・源太郎（山城新伍）に江戸への密書を奪われ、寺院に連れ込まれて女のよろこびを教えられた藤浪は、腰元梢（池島ルリ子）に自分を慰めさせようとするが、勝馬と

恋仲で未通女の梢は羞恥に涙をうかべる。そこへ源太郎が現われ、梢を逃がして藤浪を官能に酔わせる。そのさまを清姫や、源太郎の妹で唐島藩年寄・梅乃（女屋実和子）が隙見して、梅乃は藤浪から姫の世話役をとりあげる。

一方、無理な禁令を破った城下の男女四組

のうち、男は羅切されるが、家中でも森田勝馬と梢が禁令を破ってしまった。城内の一室で二人は、「死をもって殿をおいさめするため」と忠輝に明言し、切腹を覚悟の勝馬に梢は、「夫婦とは名ばかりのこんな世の中に生きるよりも……あの世で私たちは……」と、とりすぎる。



僕のイメージ画集

『孤剣の図』

室井亜砂路

忠輝は嫉妬のあまり「梢に切腹を申しつける」といい放つ。勝馬は「女子の切腹は前例のなきこと、何卒、私奴に！」と訴えるが、許されない。その夜、城中の白洲で梢は切腹して勝馬の介錯を受けた。

やがて禁令反対の暴動が起こり家中も動揺する折しも、清姫は自分の責任を感じてサンドラを博多屋の庭に訪ね、男女の仲で一番大切なものが何か、教えを乞う。サンドラは、「ココロデゴザイマス」「アイデゴザイマス」と応えた。伝右エ門は寮の異国趣味の部屋で幻燈にキリストを映しつつ、サンドラを漬そうとして、かえってひきちぎったロザリオの十字架でサンドラに眼を突き潰される。奴隷になっている異国女たちは、サンドラと共に水槽で伝右エ門を溺れ死にさせた。

サンドラは絶望の身を断崖から眼下に泡だつ波濤に投げようとして、勝馬にとめられ、勝馬に従って忠輝への諫死を前提とする愛を添寝の床で交わす。

寝所へ入って来て二人を発見した忠輝は、「おのれ、余の側室と密通したな」と怒罵するが、勝馬は「この禁令を出す権利は誰にもございません」といい放ち、サンドラの助命を乞うたのち、腹を切って果てる。

禁令を破ったサンドラは海辺で逆さ磔^{はりつけ}にかけられ、潮のみちるとともに息絶える運命にある。清姫の知らせで、勝馬の通夜の席から忠輝は、馬でサンドラを助けに走るが、処刑見届けの重臣・中村久左衛門（中村錦司）は「法はすでに殿のお手を離れて生きております」と冷たく告げる。忠輝は、「たった今から禁令は廃止じゃッ!」と叫び、サンドラの生きているような白い顔を抱えおこすが、すでにサンドラは息絶えていた。

城下には欲びの声みち、城中でも清姫とはじめて和合した忠輝は、清姫の陶酔のうちに腹上死をとげる。最後に字幕は記す――

「あらゆる生命の根源たる性を、支配し、管理検閲することは許されない。例え、神の名においても」

以上でもわかるように、男と女、女と女の秘戯愛戯にみちたこの映画が、その結語をいいた放つ権利を保有する所以は、閨房禁止なる暴挙に対して、自己犠牲をもって抗議権を主張する男女の、心情的な死の愉美が、よく愛戯の中の人間性を支えているからであろう。

換言すれば、ヒューマニズムと相殺的に見えるセルフ・サクリファイスが、愛の裏打ち

によってよく平衡を保っているといつてよいであろうか。

そして、主君なる現世的権威を神格化する二つの愛と死のなかで、梢役の池島ルリ子が演ずる切腹シーンの刹那的華麗とも見える耽美的な描写は、切腹の美学を構成しているといつていい。

その女の切腹シーンは、シナリオでは二ページ足らずの量であるが、かなり克明にカメラで捉えられている。

まず城内白州に畳二畳を白布で巻いた腹切り台に、白装束の梢が土塀を背に端座する。膝の前には三宝の上に腹切り刀がおかれている。勿論、柄をはずした抜き身の懐剣という正式のものである。

介錯人の勝馬が一礼して抜刀し、斜め後ろに立つと、前方上座に忠輝が両眼みいらいてみつめている。

梢は思い切りよく両手を白装束の衿にかけると左右に押しひらく。形のよい乳房、次いで、きめ細かな上半身が露われ、双肌ぬぎの姿は丁度、臍のわずか下から下半身をおおう白装束との対比が美しい。

すうりと手を伸ばして前なる腹切刀を右手にとり、左の掌に白紙を載せて、刀身を二巻

三巻、切先二、三寸、残して巻きしめる手さばきも、いたいたしい。

空三宝を浮かした腰の下に敷き入れて、心気をしずめながら右手に握りしめた腹切刀に左手も添えて、精一杯、腕を伸ばし、刃を左の脇腹に向け、別れの一瞥を勝馬に向けると梢のあどけない顔立ちが、さすがに緊張し切つて悲愴の色をうかべたと思うひまもなく、双手突きに発止と左の脇腹へ刃先を突き立てるところが正面から写される。

ここで肉みちて張りを持つ腹部のクローズアップとなり、左脇腹に突き立った刃を少し右に引くと、鮮血がじわじわ、にじみ出る。

刃の動きにつれて血は少しずつ腹部を伝い流れ、梢はやがて苦悶に引きつる美貌を仰向けてあえぐ。このとき閨房での梢の、汗あえて快美にあえぐ表情が幻想的にオーバーラップしたのち、現実に戻って、前のめりになりつつ右まで引き廻し、一と息ついて体を立て直した梢は、双乳にまで鮮血の散りしづく悲壮な姿で、苦痛をこらえて、唇の端に血を吐きながら、

「森田様……梢は……梢は……嬉しゅうございます。一度だけでも、あなた様と契れて」と、あえぎあえぎ告げたのち、再度双手を

前へ伸ばし、勢いつけてまろやかな双乳の間
やや下がった鳩尾の辺りへ刃を突き刺し、心
の臓まで貫いて、その柄を逆にとり、仰向け
の手をひるがえして絞るように押し下げる。

正十文字の切腹をとげて苦悶にあえぎ、今
は、うつ伏す背をくねらせながらも、立て直
し立て直し、表情も可憐さから妖美なまでの
悲愴な輝きをおびながら、

「介錯を……介錯を……お早く……」

と訴えつつ、血にまみれた右手を白布に支

き、刃を腹中にとどめたまま介錯を受けると
ころで、この切腹の場面は終わる。

梢を演じた池島ルリ子は、ポルノ女優の名
の高かった池玲子の退社を聞いて、「使って
下さい」と志願して来た、というだけに、あ
どけない美貌と美しい肢体の整った持主で、
演技もまず切腹の作法から教え込まれた、と
いうだけあって、現代娘には凡そ縁遠い悲愴
凄絶な十文字腹を、表情・姿態ともにリアル
に演じ、熱演のあまり、そのなめらかな腹部

には、鮮かな十文字の傷痕を残していた、と
いわれる。

演技指導の面で欲をいうならば、

1、切腹を命ぜられたときの梢の表情をク
ローズアップしてみたかった。

2、双肌ぬいで着衣を腰まであらわす間の
緊迫感をこめた描写が、ほしかった。

3、腹切刀を右手にして、左手でしずかに
なめらかな腹部をおしなでる梢の手の
動きの描写がほしかった。

などの欲がある。機を得て又、池島ルリ子
の熱演で、この傾向の切腹シーンを作法どお
り演じてみせて貰える映画の制作を期待して
やまない。

ともかく、十文字腹と一文字腹の違いこそ
あれ、本稿冒頭の河野弓子の切腹に、この映
画での梢の切腹が、よく似た状況経過で描写
されたのは、池島ルリ子の演技的成功といえ
るであろう。

(付記) 東映製作部および黒部竜二氏のご協
力を深く感謝し、未曾有の娘腹切りの演技に
熱演した池島ルリ子さんのご努力に讃辞を惜
しまないものです。

新発足 懸賞へ告白、手記、体験▽原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	五万円
良作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	貳万円
佳作	一篇につき	壹万円
可作	一篇につき	五千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここ
に新しく、「告白、手記、体験」の原稿を
広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな
告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字
塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告
白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表
したいという熱意のこもった原稿を求めま
す。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうま
さは求めませんから、実際に体験されたも
の、事実の裏付のあるものが大切だと思ひ
ます。従って必ず自作の未発表のものに限
ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲
載分としては、三十枚乃至五十枚が適当で
す。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さ
い。締切日は毎月十日。翌月号より発表。
一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送り
いたします。応募原稿は読者原稿と区別す
るたと「告白懸賞」とお書き下さい。

臨月腹憧憬の記

夢に見た桃子緊縛

高野原美



(一)

私の、こんなに大きくなった蛙腹を見たいと言うのネ。いいわ。妊娠ってネ、一生のうちは何度もあるわけないでしょう。だから私も、妊婦マニアの人には、一人でも多くの人に臨月の蛙腹を見せてあげたいと思っていたのだから。どう、大きいでしょ。

あら、貴方の目の色が変わって来たわネ。私の臨月腹って、そんなに魅力ある？ 貴方も奇巧の私の写真を十分に見ておられるのでしょ。大きな丸々したお腹をつき出して無理なポーズで羞恥責めも受けたわ。素っ裸で大きく開股して、羞かしい写真も撮ってもらったわ。そんな姿を見ても尚、私を見たいと言うのね。

そうね。写真はカットしてあったものね。でも当たりまえでしょ。あんな堂々と掲載されたら公然ワイセツ物陳列罪で、私まで牢に入れられてしまうものね。いいわ、見たけりゃあ見せたげる。カットされた部分を……え？ 違うって？ この臨月の堂々とした蛙腹を見たいんだって？ そうだったわね。貴方は強烈な妊婦マニアだったから。

いいわ。今直ぐ裸になって十分に見て貰う

わよ。それから強烈な浣腸をするんだったのね。嬉しいわ。

○

高野原美は、念願がかなって臨月腹の福井桃子さんと、深夜の出合いが出来、彼女の魅力的な蛙腹を十分に観賞し、羞恥責めと浣腸責めをする機会に恵まれた。

ミニのマタニティドレスの上からも、堂々と盛り上がった臨月腹は隠しようもなく目立った膨らみをし、二十六才の妊婦の魅力を漂わしていた。私は、彼女のその姿を見ると時間が惜しまれて早く服を脱いで裸になってくれることを願った。写真で見た大きくお臍がとび出して全容をみせ、充実した堅さを思わせる堂々たる丸味の臨月腹を、一分でも長く観賞したかったのである。

○

え、早く脱げて。はい、はい、脱ぎますわ。どう、私って可愛いと思わない？ ちゃんと腹帯は取って待っていたのよ。腹帯の跡がついていると失礼だと思って今朝からしてないのよ。服の下はパンティだけなの。さあ、膨れた蛙腹を十分に観賞して下さいな。ホラ、お臍がとびだして蛙腹になっているでしょ。触ってもいいわよ。内味が充実して堅

く膨れているわよ。どう？

○

原美は、奇ク誌上に発表された若い妊婦たちを愛し、毎日のようにその妊婦の堂々と盛り上がった腹を観賞していた。しかし、眼の前に温かい血の通った生々しい妊婦の丸々とした臨月腹を見て大いに感激してしまった。

私にとっては、ウエストでキュンと締めまり豊かな腰に流れる曲線美の女体以上に、この妊婦の肉体が魅力なのである。誇らし気に堂々とその丸々した腹を突き出した裸身は、威圧するように官能的で豊麗な女体美をみせていた。丸く深い影をみせていた可憐な臍窩が跡もとどめず、小山の中央で全容を見せて突出しているのは見事であった。横から見ると臨月ともなう膨らみの中心が下にさがって下腹部の丸味が急なカーブを描いているのがよく判る。

(二)

何？ パンティを脱ぐの？

貴方の手で脱がせてよ。でも、その前に手を縛って。後手に思い切りキツク縛ってね。でないとパンティを脱がされたら、私、手のやり場に困るし、緊縛されない裸なんか愉し

くないものね。そう遠慮しなくてもいいわ。

お腹には、きつくかけないでね。胸から二の腕にかけては、肉に喰い込むほど縛ってもいいわよ。ああ、いいわ。私って縛られると、たまらないのよ。ゾクゾクするわ。

さあ、もういいから脱がせて。あらっ、お尻の方からクルッと、めくるように脱がすなんて。私のお尻、どう。見事でしょう。石臼のように大きいでしょ。安産型なのよ。

あっ、そんなこと、だめよ。

○

原美は、後に回って豊かな肉付きの桃子の腰からパンティをめくってやったのである。目の前の、臨月妊婦の厚い皮下脂肪におおわれた臀部は実に堂々たるもので、彼女自身も言うような石臼型の双丘であった。まさに臨月腹の小山にも劣らぬ見事な豊満さなのだ。

「私、浣腸って凄く興味あるのヨ」と、告白するA感覚の強い桃子は、もう豊満な双丘を身悶えさせている。むせかえる芳香が漂う。

原美は、手の中で丸く縮まっているパンティを、桃子の眼前で裏返した。淡黄色の汚れが見え、それが強烈に匂っていた。

○

ああっ、そんなの、嫌。羞かしいわ、やめ

て。あらっ、こんなことを云ってはいけなかったのよね。SM好きの男の方って女が羞かしがることを強制するのが、好きなのね。凄く汚れているでしょ。私貴方にお会いするため、三日間も、はきかえてないのよ。普段なら妊娠中は、おり物が多いし、毎日、はきかえるのよ。そんなに鼻に当てないでよ。

私のようなサービス精神の旺盛な女は、そう沢山いないでしょ。気に入った？まだ匂っているの。あら、フフフ。どんなお味？妊娠した女の尿には、女性ホルモンが沢山分泌されるというから、若返るわよ。臨月腹の女の動物的な牝の匂いってとこね。

○
原美は、女が全裸の姿を見られるよりも、パンティの汚れを見られる方が、羞恥が鋭いことを知っていた。



羞恥責めの一つとして、緊縛された桃子の顔前に拡げたパンティを、匂い、舐めった後に、紐で吊った洗濯挟みにゴムの所をとめて常に二人の目に触れるように、吊り下げた。

原美は、パンティの吊られた下に、食卓を持ち出してきて、置いた。八カ月の記事の中で、桃子が「なんだか、今までお茶碗を置いていたお膳の上に、お尻を載せるのなんて、抵抗を感じるわね。……その抵抗を感じるのを押して、どんと素肌のお尻を載せるのも面白いじゃないの」と、食卓の上で羞恥責めを受けたのを思いだしたのである。

桃子を、後手縛りのまま食卓の上に仰向けに寝かせて撮影を始める。臨月腹は堅く充実して、仰臥しても小山の丸みをそのままに、大きく盛り上げている。続いて、用意したローソクに火をつけると、熱い涙を落として突き出した臍の上に立てる。桃子は、灼熱感に顔をゆがめて悲鳴をあげるが、Mらしく耐えている。熱い涙は、白い塊りとなって臍を覆って行く。

原美は、堅い小山がローソクの火に照されて揺れ悶えるさまに、この世のものと思えぬほどの妖しい美を見出して恍惚となった。

(三)

熱かったわ。皮膚の柔らかい、お臍の上にローソクをたてるなんて。でも一寸、変わった刺激だったわねえ。熱いので、ついお腹を緊張させるでしょ。きっと、お腹の赤ちゃんがビックリしたと思うわ。よく動いたもの。お腹の形が変わったでしょ。

どうするの？ そんなに足を上げろっていても、これ以上は上がらないわよ。こんな大きな蛙腹をしてるんだから。お腹がつかえるのよ。ええ、協力はするわ。こうして、お膳の上に縛られて寝かされている以上は、文字通りマナ板の上の鯉なのだから。これくらいで、どう？ あらあら端に足首を縛るの。天井から、その竹を吊るのね。足を上げてると、お腹が張って苦しいけど、我慢するわ。でも、凄いい好でしようねえ。えっ、このままで浣腸するっていうの？ ウーン。いやだっていっても、どうせは、するんでしょうから、覚悟しますわよ。

○

原美は、臨月妊婦に十分に浣腸する機会に恵まれ、落ち着きを失っていた。厚い皮下脂肪に包まれた量感のある桃子の双臀が、食卓

の上で大きく蠢く。官能的な太腿は、内面の白い薄い皮膚をとおして青い静脈を浮き上がらして、小山の臨月腹を両側から挟むようにして吊られている。羞恥ポーズの臨月妊婦の姿は、妖艶な官能美を漂わせ、動物的な牝の強烈な匂いを発散していた。桃子の臨月腹には妊娠線は殆どなく、肌の弾力のよさを物語っていた。

原美は、素早くイチジク浣腸を手にする。浣腸が好きで好きでたまらず、今までに幾度か異性の手で施されたという桃子は、簡単に薬液を受け、たちまち、二個、三個とイチジクは空になった。

カメラをセットしたが、「男の方の目の前で、物凄いポーズをとって浣腸してもらうのが、やっぱりいいわヨ。男の方だって、どうせ、私のような女の浣腸を見たいんでしょ」といった桃子の、浣腸の腹の痛みに耐えて悶える姿が、原美の目を奪い始めた。

充実した小山が揺れ悶え、時々ググッと腹の型が歪み、妊婦を責める法悦を感じさせる桃子が「痛いわ。もう耐えられないわ。トイレに……」と悲鳴をあげ始める。

原美は、悲鳴をあげ、腸内をゴロゴロと駆け廻る激痛と便意に耐えるM女性の臨月裸身を十分に觀賞し、そろそろ、便意を辛抱する



のって、私、余り好きじゃないけど、私の排泄したものが、男の人に目の前で見られるって、羞かしい中にも、ある種の期待があるものなのね”と言った。その排泄の姿をカメラに収めようと思った。

食卓の上から畳までナイロンを敷き、カメラを構えて臨月妊婦流腸のフィナレーの華麗なシーンを待つ。

桃子は、トイレに行くのを諦めたらしく、

ただ「余り近づく汚れるわよ。十分に撮ってね」と一口言うで見事な場面を展開した。

(四)

身体を二つ折れにされて後手縛りでしょ。

手は痛いし、下腹部がグツと張ってきて苦しかったわ。物凄いポーズで流腸するんだから羞かしかったわ。

え、今度は四つ這いになれって？ また、



お膳の上で？ いいわ。ご飯の時、この上で貴方に責められたことを想い出しながら食事をするのも愉しいかもね。こうなの？ 大きいみたいね。お腹が赤ちゃんの重みで垂れて皮膚が伸びる感じよ。少し大きく見えない？

イルリガートルを使うの？ 妊娠前なら、私のお腹、タンクみたいにドンドンお湯が入ったものだけど、赤ちゃんが入っているの？ そんなに入らないわよ、きつと。

くすぐったいわ。グリセリンなのね。もういいでしょう。私、A感覚に弱いよ。ウー、お湯が入るのが判るわ。少し熱いわよ。あら、お尻に、またローソクを立てたのね、二本も。人間燭台ね。お尻は苦しかったけどお尻は、そうでもないわ。こんな燭台って、男の方には面白いでしょうね。

もうお腹が圧迫して苦しいわ。ねえ、液の減りが止まったでしょう。エネマに切りかえるの？ ううん、嫌じゃない。私も興味あるわ。臨月腹に、どれだけの液が入るか知りたいわ。貴重な人体実験よ。ウー、胃が圧迫されてお腹の皮膚が痛むわよ。でも止めなくてもいいの。できるだけ辛抱するから。

苦しい。お腹が裂けそうよ。痛いわ。お腹が重苦しくって、胸が。もう止めて。千も入

ったの？ 苦しいわ。トイレに行かせて。その前に縛るといふの？ もう耐えられそうにないわ。早くしてね。もういい？ またトイレで撮るといふの？ いいわ。そのかわり、早く撮ってよ。もう全身が顫えて来たわ。

○

原美は、八カ月から桃子が浣腸を望んでいたの、奇ク誌上で浣腸フォトが掲載されるものと思っていた。それが期待外れに終わったので、桃子の浣腸シーンを撮ることができて満足していた。

しかし、私の最も興味あるのは、妊婦切腹であり、妊婦の腹裂きであった。私は、大量浣腸で疲れている桃子を、食卓に仰向けに寝かせ、大の字に縛りつけると模造の短刀を取り出して鞘を、はらった。桃子は、真剣とまちがい、「どうするのよ、そんな刀で。こわいわ」と叫んだ。

「この刀で妊婦の腹切りをしたいと思っていたんだ。念願がかなって臨月腹を思う存分に切り裂き、赤ん坊を収めた子宮やハラワタを取り出す機会に恵まれた。桃子さん、浣腸もし、腸内もきれいに洗われたことだし、腹を切られても心配することはないよ」

「いやよ。そんな怖ろしいこと。私は、妊娠

した大きなお腹を切って見たいって思ったことはあるわ。でも、お腹を本当に切られて死ぬのは嫌よ。助けて」

両手、両足を大の字に、食卓の足に縛りつけられた桃子は、縄のかかっていない身体を身悶えて哀願する。もう額に脂汗を浮かべ、大きな蛙腹が激しく喘いで波打っている。

「折角の機会だから、腹は裂かしてもらおう。」

騒がれると邪魔だから黙ってもらおうよ」

原美は、吊り下がっている桃子のパンティを丸めて口にかまし、手拭いで縛った。

「さあ、覚悟して貰うよ。このパンパンに張り切った腹は、刃をすつと当てるだけで、見事に裂けて、パツクリと傷口を大きく開けるだろうよ。中から豊かな皮下脂肪が躍り出し子宮やハラワタが湯気をあげて、生々しい姿を私の目の前に晒すことになる。M女性として、これ程の快楽はない筈だよ」

原美は、短刀を逆手に持つと上腹部にあてがい、充実した妊娠腹の、しかし、皮下脂肪の弾力を感じながら、突き出した臍まで引き廻した。

「皮膚は切れず血もでないが、生身の臨月腹に刀を走らせる感触は、昔の武将が妊婦の腹を裂いた気持を判らせるに十分であった。」

○

私、貴方が刀を抜いた時には驚いたわ。本当にお腹を切り裂かれるのかと思ってさ。死ぬのが、こわかったの。ひどい方だわ。模造刀なら、そうといってくればいいのに。でも、貴重な体験をさせてもらったわ。パンティを口に押しこめられた時、私は恐怖の中で妙な期待感をもったのよ。

私って、Mの奇妙な女だと思っわ。時々切腹を試みたい。この大きなお腹を切るとき、どれ程の苦痛だろう、なんて考えちゃうこともあるのよ。でも、浣腸の痛みですら辛抱するのが嫌なのに、お腹を切るなんて、とっても痛くって耐えられそうもないわ。でもこの私のお腹の中の子宮や腸が溢れでてくるのは興味あるのよ。全てを男の方の目の前に晒してしまえる女って、本当に幸福だと思うわ。だから、貴方が裂くっていった時、怖かったけれど、刀が突き立つ最初の激痛を期待したことは確かよ。

でも、よかったわ、死ななかって。

○

高野原美は、献身的な臨月妊婦のマゾ性に触れ、ますます憧れを深めたのだった。

——（おわり）——

カット・岩波大介



~~~~~ (一) ~~~~~

風が、さわやかであった。何で、さわやかなのか、わからない。だが、膚がうるんでいて、それにあたる感触が心地よいのである。

あの日から、則子が変わったといわれる。

そういえば、心にあった、わだかまりが、ふっきたようであった。大介の行為に対してあれはあれでよかったと自分に言い聞かせるものがあった。そのせいか、学校での生活も活発となり、

「何か、いいことがあったの」

と、同僚から冷やかされることが、多くな

|| 三部作・縄のある人生模様 ||

# 不 毛 の 愛

〔第二部〕さすらいの夜と青い朝

久 留 木 栄

った。

「とっっても、いいことなのよ」

「何」

「理想の恋人ができたのよ。永遠の人よ」

「まあ、それほんと」

と則子が底抜けに明るいので、人は、則子の心を信じかねた。

ところが子供たちは正直なもので

「先生は、およめさんにいくのかしら」

「でも、いい人の姿は見えないワネ」

「学校のお友達かしら……」

「きっとこの前、取材に来た新聞社の人よ」

と、ささやきあった。

無責任で、おしゃまな子供たちは直感だけが発達していた。だから、自分から別れたの——だから永遠の人になったの——と説明しても、永久にわからないだろうと則子は思った。また、その説明も必要のない事なのだ。心に、そっとしまっておく、そのことだけで幸せだと思った。

ともかく、この前、これが最後だといったのだ。

縛られたことに悔いはなかった。相手ののだむものを満足させてやったという満足感があった。愛は惜しみなく与え、か——その代償もまた、みのり大きいものだ。と則子は感じ



る余裕を持っていた。

それには則子の四周の生活が明るかったからにはほかならない。手首や二の腕、胸についた縄の痕が、なかなか消えないように、則子の胸に灼きつけられた大介の像は増大するとはあっても消えないのに、則子は自分のひきおこしたドラマの結果に満足して、縄の痕をかくすのに、わずかに狼狽したほかは、何も心配する事はないとタカをくくっていた。その方が、心をわずらわすより、はるかに幸せであった。そして則子は、その幸せに酔えるタイプの人でもあったのだ。

鼻うたまじりに登校し、生徒に懇切丁寧に教えた。そればかりではない。児童が、いたずらをしたり、たじろいだり、ねくじゅをしたり、ぐずついたりしたときは、てきぱきと処理するようになった。

これまで優しい一方で、どちらかといえばオドオドした新米先生だった則子の教育に、何となく自信、人生に対する自信ができたような感じに変わっていた。

「そんなにおいたをすると、お手々を縛りあげるから」

おてんばな女の子を、そうおどし、その反応を見るくらいの芸当もした。

どうして、そういう言葉が口をついて出たのか、則子は自覚していなかっただけにハッとしたが、その女の子がおとなしくなるだけで、縛るといふ言葉の大きさに驚いたものだった。自分も縛られた、そう思うだけで胸が熱くなった。恋は冒険なのだ。愛は積極的でなければと自分自身に言いかけた。それで満足だった。

だが、こうした社会、豊かな生活が消えたとき、夜、ひとりになったとき、則子は寂しかった。自分からいって別れたのだから仕方がないと、モーツァルトのセレナーデを聞きながら思い込むことが多かった。洗濯用のロープで自分の足首を縛りながら、

「何だか変ね」

と思いつつ、則子は大介を、しのんだ。その大介は、昼間想う大介とは、違っていた。昼間の大介はスクリーンにかけられた映像のようにぼやけて、よいところだけが鮮明に見えたが夜の大介は血の通った人間像だった。もっと露骨で生々しく、則子の胸の中で、いきづいていた。

「愛は真実なのだ。真実は残酷なのだ」

そう叫んでいた。

則子が大介と別れて一カ月たったころ、則子は教育研究会のゼミナーがあって、町に出た。その帰り、足は偶然、大介との散歩コースに向かっていた。どうしてそんなコースをとらせたのか。ゼミナーの同僚、男女の先生たちの熱心で力強い討議を聞いているうちにふと何か大介を思い出させる感情が刺激されたのか。ともかく見覚えのある看板の下をくぐったとき、はるか向こうに、まるで幽霊のように、さまよってくる大介を見つけ、則子は声をのんだ。

その姿は全く冥府から、さまよい出て来たというに、ふさわしかった。酒をのんでいるのではないが足元がふらつき、ただでさえ色の悪い顔が白ロウ色に変わり、髪もヒゲものび放題。肩には、いつものようにカメラをかつぎ、ダークグレイの、いきな背広を着ていたが、その背広が、うすぐろくよごれ、澄んだ目にも力がなかった。氷の破片のような冷めたさが異様にのこり、口もとには自嘲すら湧いているようだった。斜め下方をみながら近づいてくる則子にも全く気がつかないようだった。

「まあ！ 大ちゃん、貴方！」

則子は大介の前まできたとき、驚いて立ち



止まり、思わず声をかけた。

その則子は大介は、ものうげに顔をあげ、最後の力をふりしぼるようにして、わずかに微笑した。

「則さんか！ 珍しいな。一カ月ぶりか。オレとっても疲れているんだ。酒がのみたい」  
「どうかしたの」

「ああ、いまヤマ（炭坑）から帰ってきたばかりなのだ。二週間、不眠不休。まだ死人のにおいが体にしみついている。親たちの泣き声が耳にこびりついているんだ。君にあってはじめて人心地がついたようだ。悪いな、別れた友にこんなことをいってはい——」

「いいのよ。とにかく、そのスナックにでも行きましようよ。こんなところで立ち話もできないワ」

「いいネ。でも、せっかくならオレを自宅まで送ってくれないか。あそこに強いウイスキーがあるんだ。あれをのんで一気にねたい。そうすれば、君には関係のないことなんだ。ともかくオレは寝たい」

大介はそういうと、ふらりと、また歩き出した。

「待って！」

と則子は後を追った。だが大介はもうペー

スをくずさなかった。大介の家は、そこから約五百メートルくらい離れたところのマンションの入口の横だった。2DKで独りぐらしには、もったいない家だった。

その扉をあけるのもどかしいようにして大介は倒れ込んだ。則子は、この部屋は三度目だった。勝手知った水屋からウイスキーをとり出し、大介にさし出したが、大介は、あかりがまちに坐り込んだまま、しばらくは動こうともしなかった。

「こんな、ぶざまな姿を見るなよ。いまは魂のぬけがらなんだ。君も新聞記者の恋人ならもちっと主人を理解しろよ。いま、オレは何もいたくないんだ。何も説明したくないんだ。もう帰ってもいいぜ。オレは寝る」

と一気にウイスキーをあふった大介は、そのまま、はうように寝室に入り、座ぶとんを枕にすると、たちまち、かるく寝息をたてはじめた。

則子は、この恋人の態度にはショックだった。幽鬼のような大介を見ただけで驚きだったのだが、それにもまして疲れきった男の苦しそうな姿は、見るにしのびなかった。あたり一面、原稿用紙などが散らかり、チリのついた部屋も、いっさい気にならないらしく

着のみ着のままで、高いびきをかいて寝る。その無神経さも驚きであった。

——きつと何かあったんだ。——

——それは何だろう——

——いま、ヤマから帰ってきたばかりといった。ヤマとは何だろう——

則子は、大介の体に押し入れからとり出した毛布をかけてやりながら、考えていた。

新聞を見ればわかるかもしれぬ。そう思うと、則子は玄関の新聞受けにたまったままの新聞をとりだしてみた。

新聞はゆうに二週間分たまっていて、それを手にとるようにして見てハッと思ひ当たった。横見出しの大きなカットで近郊の鉱山でガス爆発があり、35人が死亡、26人が負傷したという記事がのっていた。

——そうだ。大介はこれを取材に行っていたのだ——

そう思うと、平和な楽しい生活にひたり、社会のダークサイドのできごとを、まるでヨソのことのようにしか感じなくなっている自分が恥かしくなった。

“まだ死人のにおいがしみついている”

“親たちの泣き声が、耳にこびりついているんだ”



そういった大介の言葉が、にわかに巨大な重味となって則子の上に、ずっしりかかってきた。則子は思わず、そこにすわりこんだ。そして、どうしようと思った。

とてもそこを去って家に帰ることはできなかった。大きな不安がおそってきた。どうしようもない不安にかられ、則子は音をたてないようにして部屋の掃除を始めた。それが終わると、フロをたて、米や野菜があるか調べてみた。米はあったが野菜類はなかった。そっと外に出て、近くの八百屋から野菜を買ってくる、大介が、いつ目覚めてもよいようにと仕度を始めた。

だが、大介の眠りが深いと知ると、それを仕込んだまま、自分も男くさい部屋で、男くさい毛布にくるまりながら壁にもたれ、大介を見とりながら、まんじりともせず、大介の目覚めを待った。

大介が目覚めたのは、もう真夜中を過ぎて午前二時ごろだった。

「ああーあ。ああ、則ちゃん、君はまだいたのか」

「だって、びっくりして……」

「そうだろうな。心配しなくってもいいんだああ、いい気持だ。こい！」

といいざま、いきなり大介は則子を強い力でひっぱった。則子は抱かれた。それから降る星のように顔中にキスされた。しばらく狂ったように、そうしていた大介はやがて則子を放し、

「ああ、オレ、やっぱり生きていたのか！生きていたんだ。いいなあ！この感じ」

と、さも実感が籠ったような声でいった。

「御飯たきましようね、仕込んでいたの」

と則子の声も、いつしか、はずんでいた。

「御飯！ そんなものができるのか」

「ちゃんと用意していたんですの」

「そうか、ありがたい。頼むよ」

大介は、もういつものペースをとりもどしていた。そして窓から夜空を見、明るい電灯を不思議そうに見た。それから、さも、いま気付いたといわんばかりに、

「夜になっていたのかな」

と独りごとを言い、大きく背伸びをした。

やがて大介は洗面所に行つて顔を洗っていたが、フロを見て驚いたような声を出した。

「すまんなあ！ 先に、はいつていいか」

「いいワよ」

則子が答えると大介は、ごそごそと押し入れの中から着替えをとり出し、フロに入る気

配がした。

大介がフロに入っている間に、則子は食事の用意を整え、キッチンの机に器物を並べて大介を待った。大介はヒゲをそり、こざっぱりしたVネックの白いトックリシャツを着て現われた。そこには、もう冥府から、さまよい出たような鬼気迫る姿はなかった。

則子は思わず、かけよった。

そして大介の肩に手をおくと、

「よかったワ！ よかった」

と、何が何だかわからぬままに足から力がぬけ、すがりつくように大介の体にもたれかけた。

「何を興奮してるんだ」

「だって、大ちゃんが生きかえってくれたんだもの」

「生きかえった？ そうか、そんなに疲れていたのかな——。そうだろうな、多分。でもそんな姿を見せるんじゃないかな」

「いじわる」

「意地悪は前からそうじゃないか。この前だつて縛りあげたじゃないか」

「バカ」

「おや、こんどはバカか。まあいいや。こうして元気になったんだから……。いい湯だっ



たよ。またオフロの中で縛っちゃおかな！  
とにかく、腹がへったよ」

大介は、則子を押戻すようにしながらイスに、こしかけた。

「おいしいものは何もなかったのよ。だからみそしるとハムエッグで、ごめんなさい」

「いや、ありがとう。それだけで夢のようだよ。いつもなら、食いに行くところだが、こう遅くては、そんなところもなく、またぞろ酒をあふるところだった。君のおかげで本当に助かったよ。君と一緒に食べないか。則ちゃん」

大介は最後の名前のところだけを優しく言った。

「本当に、ひどかったのネ」

「ああ、ぼくも初めてだしネ。先輩に聞いてはいたんだが、全くすさまじいの一語に尽きるよ。炭坑事故には一種のパターンがあるんだ。坑口に被害者の家族がかけつける。それが黒山のような人だからなんだ。それから死体が、ひとりあがるたびにワーンと泣き声があがる。まるでお経のような声なのだ。その中を死体はタンカで運ばれ、約一キロ離れた病院の診察室で医師の検死を受ける。それから死体安置所におかれるのだ。オレは新米だ

から坑口を見たのはわずかだった。それからすぐに、この病院と死体安置所にやられた。

ここでは警官が衣服を改め、氏名を確認していた。まっ黒な死体が病院で洗われ、人間の膚をとりもどすのだが、くしゃくしゃにつぶれた顔、千切れた手足だけというのもある。こういうのから身許を確認するのは容易なわけではない。この病院と死体安置所でオレたち各社の記者も、この目で死体の身元確認をするわけだ。オレはその日、死体の殆どを見たが、炭坑の従業員に比べ下請けの業者の人物が意外と多いことを発見した。どうして下請けが多いのか疑問に思った。身許確認に呼ばれた家族や会社の幹部に当たって話を聞くうち、炭坑が左前になって経営が苦しくなってきた。それから、その原稿をまとめ、デスクに出したのだが、それが、よいと、ほめられたんだ。それで翌日から炭住めぐりの方をやらされた。炭住めぐりで、いっそう悲惨な鉱夫の生活を知り、いきどおりを覚えた。四畳半二間という、せまい部屋にタンス一つないミカン箱一個という家もあるのだ。こんな中で、どんな子供が育つのだろうかと思おそろしくなったんだ。二週間全く不眠不休で、く

たくたになった。そこへやっと交替用員がきて、わずか一日だけの休暇をもらったというわけさ」

「それで」

「その帰りに君にあったということなんだ。ボクは、ついていたよ。君はこの一カ月間、どうしていた」

「私は平凡な生活よ。何だか前よりも幸せだった」

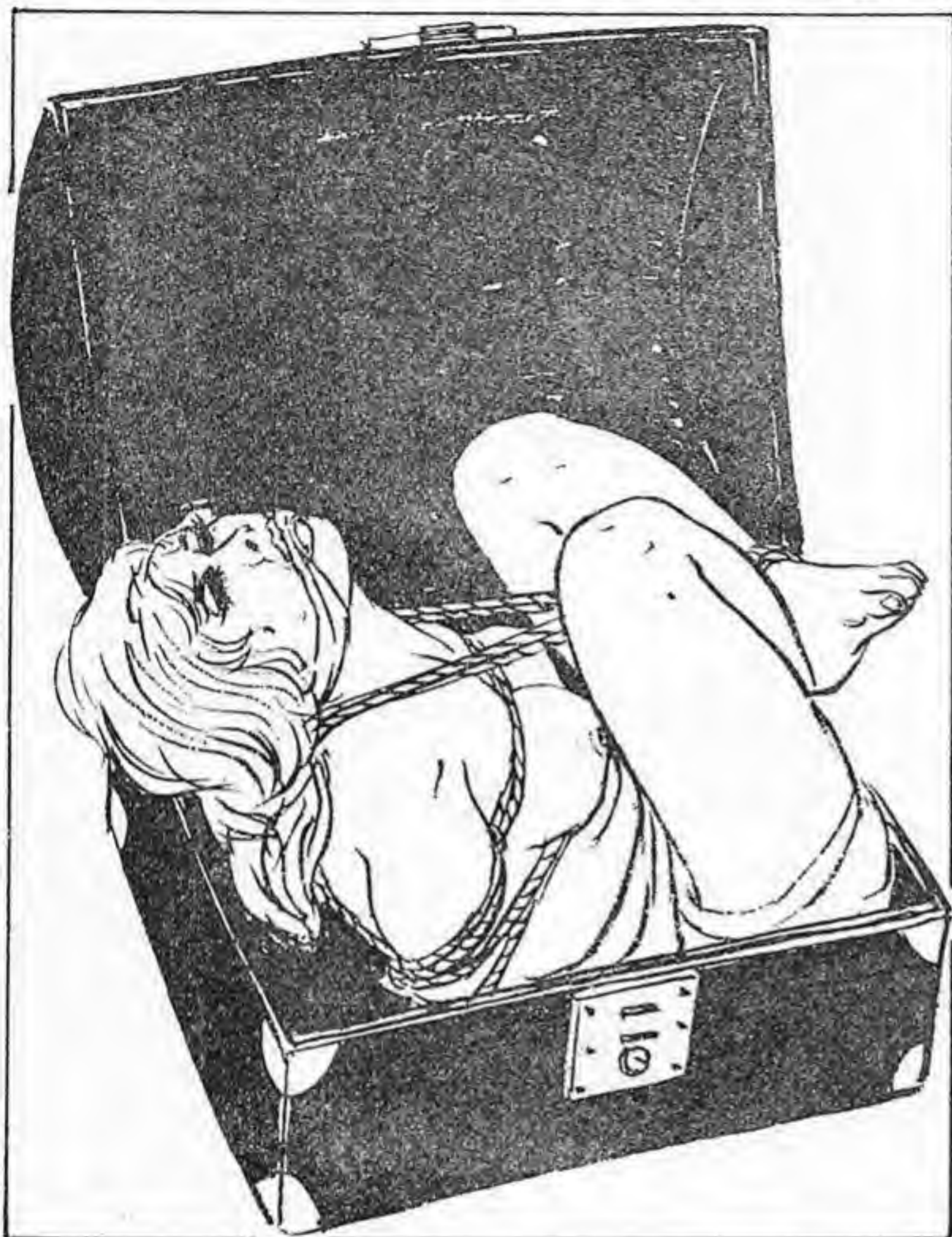
「縛ったボクをうらんでなかったのか」

「あの時、別れるといったのは私でしょ。だから、あれは仕方のないことと、あきらめていたのよ。だから別に深刻なショックはなかったワ。そのせいか心のわだかまりが、ふつきたようで、かえって明るくなり、人から変わったわと、ほめられたのよ。ずっと魅力が出てきたんですって」

「そうか、それはよかったな。それに比べオレの方は心配ばかりしていた。死体と死体の間からニューッと君が顔を出すんだ。そして「あんな変な男、大きらい」っていつて言うのだ。それからオレの本性はサジズム——縛りズムなのかと、そう思うとオレ自身が、いやになって。何もあの物凄い事件の最中に、そう思い悩まなくてもいいだろうと思ったん



イメージギャラリー ----- 『ビックリ箱?』 ----- 志羽利也



だが、あの日の君の姿は、それほどオレにはショックだったんだ。だからオレも反省したものさ。もう二度と逢わない方がいい。そう思い直しながら帰ってきたんだ。そしたら逢っちゃった」

「逢って悪かったワネ」

「そうだ。それにメシ、フロ、掃除、まるで世話女房気どりで、いらんことだ」

「あら、喜んで食べているクセに」

「そりゃ、人間だからネ。ひとりで食べるより、好きな人と一緒に食べる方が、おいしいに決まっている。食べて、また寝る。満足だ」

ネ。オレの方は、けっこうずくめだが、君は帰らなくていいのかネ」

「帰られると思うの、いまごろ。それに、あすは日曜なのよ!」

「なあんだ日曜か! よし、一カ月ぶりに生命の洗濯といこう。君のコンディションは、どうだ」

「上々だワ」

「よし。デラックスホテルでなくて悪いけれど、またやるか! 思い出した。写真ができるぜ、見るか」

「何の写真」

「バカ、君のだ」

「私の」

「そうだ、この前とったじゃないか。忘れていたのか」

「あら! いやーだ。あんな写真。でも見たいわねえー」

「それは見たいだろう。だが、見るのはよいが、またこの前と同じ、くり返しになるぜ」  
「いいワよ。一度されれば二度、三度というじゃない。好きな人に縛られるの、何ともないのよ」

「こいつ、勝手なことを言って!」

「大介は仕事をしとげた余裕で、すっかり、



おおらかになっていた。則子は、この男の変身に目をみはるようで、しみじみ男の遅しさそして二人の愛の深さに驚くのだった。

## (二)

「じゃ、写真を見せよう。だが、その前に少し、この前とパターンを変えよう。そのまま楽にイスにすわっておれよ」

「どうするの」

「ま、まかせとけ」

そういうと大介は押し入れから、まっ白な綿ロープをとり出してきた。

「やっぱり縛るのネ」

「そりゃそうさ。好きな女だからネ」

「仕方のない人ネ」

「ま、何とでも言えよ」

と大介はイスの背に則子の手を回し、則子の左右の手首に、それぞれ別のロープをかけ、まず、きっちり、とめた。この日、則子は黒のジャージのワンピースを着ていた。その服に白いロープが映えて、鮮かなコントラストを描き出して行く。

背中ロープを胸に回し、胸で交差すると、則子の自由は消えた。その余りを背中から、ふたたびイスの足に、もどし、則子の両足を

それぞれ左右の後ろのイスの足に固定すると大介は一応、縛りの手をとめた。

「さあ、暴れてもいいよ。泣いてもいいよ。」

どうぞ御自由に」

「縛りあげて、そんなことできるワケないじゃないの。人をからかってばかりいないで、どうするの」

「こうやって、写真を見せないと、破られでもしたら大変だからな。とにかくオレにとつては貴重品なのだから」

「用心のいいこと」

「だって君が、どんなにぼくにホレていたって、あの写真を見たら腹をたてるに決まってるからネ」

「どうして」

「そんな、すごい写真なんだ」

「そう」

——どうせ、すごいといっても、たかが知れているだろう——則子は、その時まで正直にそう思っていた。だが、大介が箱からとり出して見せてくれた一枚を見た途端、カーツと頭の中に火が燃え、思わず体が羞恥で、ほてり、目をつぶってしまった。

「ほら、いわんこっちゃない」

そう大介にいわれても則子は言い返す言葉

もなかった。腹が立つと大介は言ったが、それ以上に則子はブチのめされてしまったのである。

それはエビ縛り姿を足の上からとった、見るも無残な写真だった。画面の中央に真っ白な砂丘が二つ並んでいた。まん中に防風林が生えており、水たまりがあった。それが余りに露骨に描写されていたので、とても正視できたものではなかった。

「君の一番、美しいところだぜ。どんな美人でも、きれいごとを言っている先生でも、こうしてみれば同じ動物だネ。人間の一番動物らしいところ。顔や心よりオレにふさわしいものかもしれないネ。オレは、きょうも死体を見た。裸のまま炭塵にまみれた死体は、人間というより、物だった。それに比べると、この砂丘は動物だ。いきっている。この水たまりには女の生命が宿っている。喜怒哀楽。女らしさが住んでいる。オレは、そう思った。この写真をとったことで、オレは君を愛してよかったと思うよ」

大介は、うつむいている則子のアゴに手をやり、顔をあおむけた。

ひどい人！

と則子の顔に絶望から、やがて血の色が、



かよってきた。それは、しばらくして激しい怒りにかわり、唇が、ひきつった。

「腹を立てたかネ。怒れ、怒れだ。さすがの元気もののお嬢さん先生も、これにはマイッタろう。聡明であっても、理解に苦しむだろう。だが、これが自分の本当の姿なんだぜ。人間はいやらしい動物なんだ。そのいやらしさの象徴なんだ。この写真を間違えて人目にさらしでもしたら、その人間の、一巻の終わり。常識人なら、そういうだろう。オレは、それを否定するがね」

大介は言葉で、いじめながら目では笑っていた。そして強引にイスの上にまたがるように坐り、髪をひっぱって顔をあおむけ、しゃにむにキスした。キスの強姦だった。

### (三)

しばらく二人は、そうしていた。

「酒をのませて」

と最初に哀願したのは縛られていた則子だった。大介はウィスキービンをとり、ごくりと一口のむと、口うつしに則子にのませた。則子は、むさぼるように、それをのんだ。

「この前は殺して！ といったわネ。きょうは、責め殺してと、いいたいワ。私ってバカ

な女ネ。きょうぐらい死にたいと思ったことないワ」

「バカなのは君だけではないよ。ボクも同じさ。善男善女、皆バカなのさ。君とボクは環境も性格も、ちがう。君に言ったことはないけど、ぼくは女を憎んで育った。だから女を愛せない。愛する資格がないと決めこんでいる。だが、こんな男でも女に惚れることを知った。その摂理からは逃がれることができない——フランスの作家ジャック・シャルドンヌという人は『結婚愛』だの『ロマネスク』だの夫婦愛を書いた作品を発表している。そのシャルドンヌの『愛をめぐる随筆』の中に好きな男と女が出合うということは奇跡だ。

そして、この世の中は、すべてその奇跡の上に成り立っているように見える、という意味のことを書いている。女は多い。その中でよりによって君に惚れるとは。そして惚れた生活が、すべてのように思う。そんな生活がオレに送れるかどうか。送れない、と思っても、送らねばならない。あの、大事故の取材中でも、君の姿が去らなかったのだ。結婚は一生しないと記者になったとき誓った。そのオレですら結婚したいと思う。このジレンマ、不思議なことなのだ。それに勝つために

も、オレは君を憎みたい。普通の他の女のように、それ以上に強く、深く憎みたい。そう思うのだが——」

大介は、そこで絶句した。  
しゃべるのが空しくなってきたのだ。

幼い頃から、大介は女を縛るのが好きだった。小学校や中学校時代、それが変態性欲のサジズムスに属するということは知らなかった。しかし、小学校時代、泥棒ゴッコや戦争ゴッコ、主人ママゴトなどを企画し、女の子たちも仲間に入れて、よく遊んだ。美代子という少し低能の子がいて、鼻を垂れて仲間はずれにされていたが、すごい美人だった。その子を仲間に入れてやり、泥棒にしたてて、よく縛った。そのことを記憶している。中学時代は、さすがに、そんなままごと遊びはやめたが、女中のキクが相手になった。農家の出身で、これまた幾分、頭の弱い女だったキクは、強盗がはいったら、どうするか、という大介の質問に、すぐ、のってきた。そして結局は縛られる破目になった。そのころ、本や雑誌で縛られた美女の絵を見ると、ほのかな興奮を覚えたものだった。自分にサジズムスの気があると自覚したのは大学生になり、



フロイドの精神分析学をよんでからである。『これに続いて不可解なサジストたちがいます。この種の人の愛欲には、自分がその対象に苦痛と苦悩とをあたえるということ以外に目的はなく、それにも、ほめかす程度に屈辱を与えることから、肉体を傷つけることまで、いろいろあります。これを埋め合わせるかのように、その逆をゆくものにマゾヒストがあり、彼らの唯一の史感、愛する対象から、あらゆる屈辱と苦悩とを象徴的および現実的形式で受け、それを耐え忍ぶことにあります。なおまた、このような異常な条件にくつかが一つになり、からみあっているものもあります。

そして最後に、これらのグループには、それぞれ二通りあって、その性的満足を現実のなかで求める者と、このような性的満足を、たんに頭のなかで想像するだけで満足して決して現実の対象を必要とはせず、空想によって、それを代理することが出来る者があることがわかっています——世界の名著、フロイド、ノイローゼ総論、第二十講、人間の性生活、379頁から引用——

その文句を大介は、いまでも、はっきりと覚えていて。則子に、こうした自分の性生活

を押しつけることができるのか——恐らく正常な家庭に育ったであろう則子の理解を超えているのではなからうか——大介は、そう思っていた。

一方、則子は、そんなことを少しも考えてはいなかった。ただ大介の住む世界は、とても自分たちの住む世界ではないこと。まるでそれは怪奇物語のような世界であり、しかもそれを味わうには、かなりの肉体的苦痛が伴うのを、がまんしなければならぬと思っていた。責め殺して！——と言ってはみたもののそれは、ことばの綾であって、則子は決して責め殺されるのを、のぞんでいるのではなかった。縛られることも当然、嫌であった。だが、大介に逢っている時だけは、それを拒むことができなかった。八百屋お七ではないが「恋に身を焼く」という実感が次第に、つかめてきていた。

だから大介のいうことは一応、理解はできたが、納得がいくという代物ではなかった。それにしても、これからどうなるのか——

えび責めの写真のショックは、しだいに去ったが、それでも放心したように則子は天井を、ぼんやり見あげていた。

「これから、いっしょに寝ようよ。フロに入るだろう」

大介はイスに縛りつけたナワをときながら聞いた。

「そう、寝たいワ。おフロにも入りたいの。でも着替えがない——」

「洗っとけば朝までには、かわくだらう。脱水機付きの洗濯機だよ」

「そうね。それに、あと片付けもしておきたいの」

「そんなの、どうでもいいじゃないか」

「いけないワ。身だしなみよ」

「そうか。それじゃあ、早くあと片付けしろよ。それからフロだ。それまでしばらく休憩しよう」

「おフロに入るとき、また、いたずらをするの」

「モチロンだよ。そのあとで手足を縛って寝袋に詰めて、朝まで放置しておくんだ」

「どうして、そんなにイジメルの。もう一度ぐらい、優しくしてくれても、いいでしょうに」

「いや、いやだ。君には二つのツミがある。

一つは、これが最後とウソをいった罪だ。それにもう一つは、独身の男性の部屋に夜二時



までも、ねばっていて、未婚の男性を誘惑した罪だ」

「おやおや、罪って勝手につくものネ」

「うれしい罪だろう」

すっかりイスから解放された則子の肩を大介は軽く、たたいた。それからフロの湯加減

を見に行った。その間に則子は食事のあと片付けをし始めたが、口うつしにのまされたウイスキーのせい、足もとが、ふらつき、食器を洗う手もと覚束なかった。

フロには一人が入った。総ヒノキの、ぜいたくなフロだった。



イメージギャラリー

『メカニズムルーム』

岡 たかし

「のんびり入れよ。オレはフトンに入っているからな」

と案に相違して大介は優しくなった。抗議がきいたのかなと則子は、おかしかった。だがそれは実は、夜の戦いの始まりでしかなかった。大介から借りた真っ白なタオルと洗った下着を持ってフロから出たとき、脱いだ洋服は、きれいに消えていた。そればかりかドアのところにロープを握った大介が、ぬうっと立っていた。

「いい湯だったろう。覚悟はできてるネ」

そう、いうや否や、裸の腰に大介はロープをまきつけ、背中、それを縛った。余りをニメートルほど、とって置いて、そのロープの端を握り、

「洗濯物を干しなさい」

と命じた。則子は、とっさのことで、どきまぎしたが、柔順に従った。

「手を、うしろに組め」

と次の命令が下った。いわれるまま、則子は手を背中に回すと、大介は、いそいそと、その手を取り、縄を巻きつけて縛った。手首から二の腕、首と、こんどは正確に、白いロープが下から順に則子の肌をしめつけ、体の前後を菱型に、かたどって行った。



「よし、フトンに向かって歩け」

と大介は命じた。則子は、それに従う。フトンの上についたとき、大介は、いきなり足をかけ、投げとばした。手の自由を奪われている則子は、もろに右肩から落ち、

「ギーッ」

という悲鳴が、思わず口から洩れた。その則子の上に大介は、とびかかるようにして、のると、足首を合わせて縛り上げ、縄の余りを手首につないだ。逆さえび縛りの型であるが、手足をつなぐ縄はキリキリと、しめあげられては、いなかった。そんな則子をフトンにくるむと、大介は、あっという間に自分も素裸になり横に、もぐり込んできた。それと同時に電気を消した。まっくらやみの中で、大介は則子の口をさぐり、口づけした。そして自由な両手で則子の乳房を、まさぐり始めた。思いもかけぬ攻撃に則子は、とまどい、やがて軽い悲鳴をあげ、しだいに、からだをもちやしていった。そのうち、大介の手が、はたと止まった。みると大介は、すやすや寝息をたてていた。夢の中で則子を存分、責めさ

いなんでいるのかもしれない。あるいは、炭坑の地獄図を見ているのかもしれない。ときどき、うなされながらも、その顔は——目が

なれると、ほのかに闇の中に浮かんできたが——あどけない児童の顔にそっくりだった。

『きつと、いたずらっ子なのだ』

則子は、そう思った。サジズムスが、幼児から成人になる過程の中で、必ず経験せねばならない性意識の成育の残渣であるとは、則子は知らない。サジズムスの性癖のある男が子どもっぽい一面を持っていることに則子は安堵を覚えた。そして、その不自然な型のまま、大介の胸に抱かれて、則子は、ねむってしまった。

#### (四)

翌朝、最初に目を覚めたのは大介だった。窓辺に陽が高かった。ねぼけまなこを、こすってみると、横に則子が素裸で、縛られたまま寝ていた。縛るのが好きとはいえ、すまぬことをしたなと後悔の念が、おきた。しかし大介は、この素晴らしい獲物を、そのまま解放する気にはなれなかった。

フトンを持ち上げ、あおむけると、則子の足と足の間に自分の足を入れようとした。則子の手と足を結んであるヒモが邪魔になってそれはうまくいかなかったので、そこだけは、はずして手首、足首は、しばったまま強引に

割こませると、大介のからだは、すっぱり則子の足の中に入った。こうして抱くと則子の力では絶対に大介を振りほどけなくなる。大介は、則子の上半身を遊んでいる両手で、くすぐった。

則子は足を入れる時に目を覚ましていた。何か信ぜられないことをされているみたいでぼんやり大介の姿を、とらえていた。

「朝になってまでもイジメルの」

「昨夜の続きだよ。寝てしまったては身も蓋もない」

「勝手におし」

「こいつ」

「あっ——ああっ。いやん、いやーん。くすぐっては最高の味も、ふっとぶ」

と則子は甘えた。

睡眠は若い二人をすっかり、リラックスさせていた。明るい太陽の下には健康な若者の営みがあった。則子も大介も、昨夜あのまま寝てよかったと思った。爽快な一刻が過ぎると、一介は手首のナワ以外のナワのすべてをはずしてくれた。

「これはトラないの」

「これをトルと面白くない」

「いい加減にしてよ」



「何をいってゐるんだ。罪のつぐないに便所に行つて、顔を洗うまで、皆ナワツキでやるんだ。もしいやなら天井から吊りさげるぞ」

そういつて大介は笑つた。

笑いながら、いまの則子なら、そうするだろうと思つた。そのとおり、則子は従つた。そして、ナワから解放されたとき、素裸で則子は思わず大介を抱擁した。

長い長い夜の忍従の末に、かちえた自由。

愛がかくも生きて、息づくとは、則子は信ぜられなかった。この一瞬のために、すべてはあるの”と思つた。

——来てよかつた——

——やっぱり離れられない——

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱ひは致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願ひます。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢ひ致しかねます。

——これが宿命なんだ——

——どんなに大介が不幸な人であっても、添ひ遂げたい——

——どんなにいじめられても、愛がある限り痛くもかゆくもない。愛は、すべてを守ってくれる——

——たとえば、正式に結婚できなくても、男と女が、愛し合うのに変わりはない——

則子は、いろいろ考えた。

いろんな文句が頭を、よぎつた。

則子は詩人ではなかつた。しかし、二人の愛は、平凡な教師を詩人に仕上げるものと見える。

“これから、どこへ行こうとするのか、誰も知らない”

といったゲーテの詩と真実の中の青春の一節の文句のように、則子はこれからの不安を忘れて、いやその不安のために、より一瞬の幸福を適確につかもうとするように、大介の裸の逞しい胸を、こぶしでかく叩き続けていた。

そのあとで二人は下着だけをつけた。

そのままの姿で大介は新聞をとってきて、読み始めた。

一方、則子は余りもので朝食の用意を始め

た。このような生活が家庭生活というのであろう。

二人の上に、いつこのような平和な生活が訪れるか———そう思い続ける則子に、

大介は、

「おい！ 爆発の後遺症に、ガス中毒があるぞ。きょうは、さっそく大学へ行かされるのかなあ。一酸化炭素の中毒はむつかしいぞ」

と、間のびをした声でいった。

きょうは日曜日である。

恋人もいる。

だのに、この男の頭には仕事のことだけしか、ないらしい。

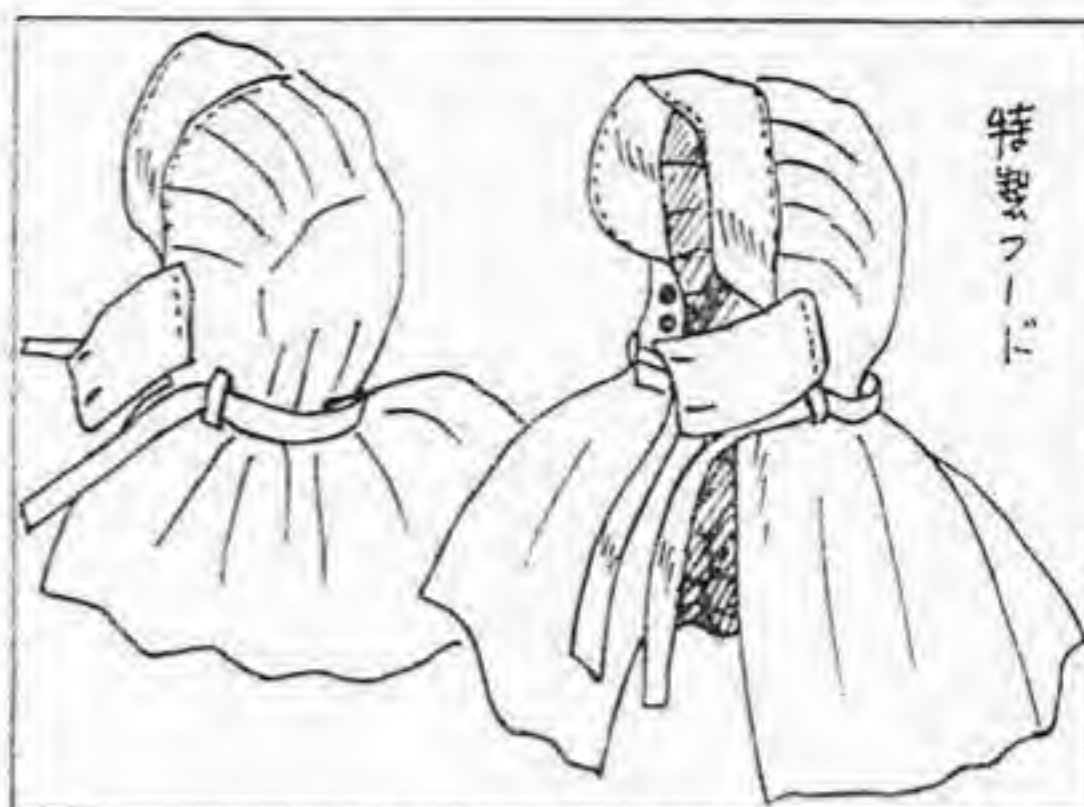
男という奴は本当に不思議な動物だと思ひながら則子は、ふと一しずく涙を落とした。

それは、うれし涙だったのか、後悔の涙だったのか。それとも、あくびのせいだったのか——。それは知らない。だが、夜の縛りつくと違って、あるセンチメンタルな情緒が女の胸を支配し始めたことは間違ひのないことのようにあった。

則子は、そこに生きる支柱を立てようとしていた。

——(第二部おわり)——





~~~~~  
△ 告 白 ~~~~~

ゴム衣泥責め

プレイの体験

文と絵 梅川 幸子

着れるだけのゴム装束をして、泥沼の中で

行なう△泥責めプレイ△について書いてみましょう。ゴム衣プレイと申しましても、着けるものは、そのときどきで違うのですが、今回の△泥責め△の際の着衣を書いてみます。

① 素肌の上にゴム引レインコートを着て腰のベルトを締め、オレンジ色のゴムの手袋（炊事用のもの）をはめます。

② 同じゴム手袋を左右一組、指の部分からみあわせて口にくわえ、その上からゴムの布（総ゴム合羽と同じ表裏共、総ゴム製のサルグツワをはめます。（このサルグツワは鼻が出るように三角形の穴が開いていて、眼の下からアゴまで隠れるようにして、首の

うしろで結ぶように作ってあります）

③ 総ゴム製の海水帽をかぶり、アゴひもを締め、ゴム引レインコートのフードを目深にかぶります。

④ 総ゴム合羽（短）を着てフードをかぶり、マスク（ベルト）を締めた上で、ゴムのズボンをはきます。

⑤ 腰まで届くゴム長（いつも愛用している茶色い農業用）をはき、穿き口に付いているヒモを、しっかりとゆわえ、脱げないようにします。

⑥ 水中胸衣（オバケゴム長）をはき、ウエストのベルトを締め、肩からゴムベルトでガンジガラメにして吊るします。この水中胸

衣は特大サイズ（文数は二十八センチ）で、ゴム長をはいた足がラクに入るものです。これを穿きますと、肩まで隠れ、ウエストを境にボツテリと胸と腰がふくれ上がり、我ながらコッケイな感じがします。

⑦ その上から特製セーターを着ます。これは⑥の長靴の部分を、自分の腕の長さに合わせて切り落とし、股の部分に、ちょうど頭が入りする位の穴をあけたもので、頭からかぶって着用し、ウエストのベルトを締め、普通の状態を着るとき、ゴムベルトを通して肩から吊り下げるための穴にゴムベルトを通して股間を縛ります。

⑧ そして引きずるようなゴム引前掛けをお尻に二枚、前に二枚巻きつけて固く縛り、更にその上からゴム引胸あて付き前掛けを首からブラ下げウエストのベルトを縛ります。

⑨ その上に総ゴム合羽（長）を前後、逆に着てベルトを結びます。このゴム合羽のフードは不要で取り外しています。なお袖口は水産用のようにアメゴムが入って締めつけやすい型——普通のものを着ます。

⑩ そして肩まで届くゴム長手袋をはめ、両方をゴムひもでゆわえて、脱げ落ちないようにして首の後にかけてブラ下げます。

⑪ その上から袖口のきつく締まる水産用総ゴム合羽を着、フードをかぶり、フードのマスクを締め、ウエストのベルトを締めて、

これで出来上がりです。

更に、この上に羽織るゴムマントは、普通の黒いゴムマント（裏は木綿地）の裏側に、表が紺色の防水布で裏に同色のゴムが張ってある男物の防水マントを重ねて縫いあわせた特製のマントです。学童用ゴムマントのように、手を出す穴も開けています。

しかも表側の黒いゴムマントは、さんざん着古して古くなったもので、強い雨に打たれると、すぐ雨が一面に浸み込み、冷たく重く肩にのしかかるのを、えらびました。

裏ゴムマントを下に縫い合せた理由は、ゴム合羽に裏ゴムの擦れあうサラサラという音と、裸でくるまったときの、えもいわれない感触が気に入ったからです。もちろんサイズは特大で、重く肩にのしかかり拘束感を味わうことが出来ます。

フードは懐かしい女児用ゴムマントを真似て作った特製フードです。ゴムマントの襟に付いているボタンで止めるものと、肩と胸をおおうケープの付いたのと二つ作りました。

今回はケープ付きのを説明しましょう。

フードは例によってカザリのヒダがたくさん付き、大きなひさしがあり、顔をかくすマスクも幅広く、眼から下、あごまで隠れる位に作っています。ケープの部分は肩と胸をゆるやかに隠す短いもの、生地は総ゴム合羽と同じ表黒、裏茶のゴム布で作りました。（ひ

さは一枚では、へなへなしますので二枚重ねて縫い合わせてあります）

これをかぶり、フードのマスクを締め、更に首まわりに通した細いゴムベルトを首で結ぶようになります。挿図をよくごらん下さいませ。まるで西洋の中世紀のお姫様のようにエレガントなスタイルでございせんこと。

こんなスタイルで雨に打たれて、泥沼に浸って、もたえようとするのでしたら、私のマニアぶりも、何をかいわんやでしょう。

時計が午前一時を指しますと、自動人形のように私は歩き出しました。

じっとしていても倒れる位、重いゴム装束で、汗が吹き出し、素肌にとったゴム引レインコートがベトベトにまつわりつきます。

口の中に押しこんだゴム手袋は舌にからみつき唾液でニチャニチャになり、わずかにサルグツワにあけた三角形の穴から出た鼻からは荒い息づかいが続きます。

ゴムとゴムの擦れ合う音を立てつつ、よろけるように玄關を降りると、そっと木戸を開け、まっくらな冷たい氷雨の降る戸外へ出てゆきました。ノッシノッシと雨足に力をこめて一歩一歩、泥沼へ向かって行く私。もし、人が見たら何と思うでしょうか。

やっこのことで泥沼の淵に着きました。この泥沼は約十メートル四方の広さで、スリパチ状になっており、ゴミやガラクタの捨

て場にもなっていて汚いところです。

私は腰を地べたにおろし、スリパチ状の三メートルほどの斜面を（赤土でヌルヌルしています）を滑り足の方から泥沼へころげ込みました。ズブズブ、ゴボゴボ……と泥の中にめり込んでゆくのですから、足腰に対する水圧（泥圧といった方がいいかもしれません）は相当、強烈なものです。

一歩一歩、大腿に真ん中の深い方へ歩いて行きますと、ゴムマントが水面に落下傘のように広がりますので、内側にしっかり巻きつけるようにし、ゴムマントも沈めました。

ゴム装束の体を、間接に締めつける泥圧がお腹、胸へとひろがり、真ん中の一番深い所に来ますと、水中胴衣スレスレの肩のところまで泥水に浸りました。

氷雨はしとしとと、冷たく降りそそぎ、特製フードのひさしから、しずくが容赦なくしたたり落ち、サルグツワから出た鼻の頭を濡らします。

思い切って膝を少しかがめ、鼻孔すれすれまで泥水に体を沈めました。

何という快感！

全身をガンジガラメに間接に締めつける冷たい泥水の圧力。でも、これだけゴム装束をまとっているのですもの、僅かなスキ間からチョロチョロと水が入るだけで、まるでウェットスーツか潜水服を着ているように、素肌



を濡らすことはありません。

皆さんの中で、こんなプレイをなさりたい方は、私のように出来るだけ沢山のゴム衣裳に身を固め、水中胴衣の腰のベルトをきつく締めておくことが大切です。でないと、腰から下に水が流れ込んで長靴の中にたまりまうと、足が重くなり、動きがとれにくくなります。更に、泥沼でも小川でも、池でも必ず背の立つところを、事前にお探しになることが大切です。

全身を間接に締めつける泥の圧力、眼の前に迫る濁った水面、吹き出す汗、鼻をつくガ

ラクタの異臭、特製フードを容赦なく打つ雨の音。

「ああ、私って何と、幸福なんでしょう」サルグツワの中では、唾液でニチャニチャしたゴム手袋を口に含んで舌にまつわらせながら、あらぬたわけたことを、声にならぬ声を次々と独り言で、つぶやき、口走らせています。

それから、泥水の中でゴムマントを揺さぶりながら両手と両足を伸ばします。バレエかダンスを踊っているように、さまざまポーズを楽しみます。

時間が経つにつれて、尿意を催してきました。こらえきれなくなり、我慢も限界に達した私は、再び膝を曲げて鼻スレスレにまで泥水に身を沈めたまま、ゴム装束の中に漏らしてしまいました。

かすかに、ジョーッ、ジョーッ——という音が聞こえ、水中胴衣の中に、チヨロチヨロ流れ、ゴム装束の足もとに生温く、たまってゆきます。

「あ、あああ……」

私は、たまらない快感に欲びの呻き声を挙げ、一步一步、岸の浅い方へ歩いてゆき、泥沼から上がりますと、大の字に仰向けになって斜面のガラクタを枕に休みました。

私は娘時代のことを回想していました。

それは、ゴムマニアと同時に泥責めプレイ

のマゾになった私の思い出でした。

戦争中、東北の田舎に疎開していました私は、田植の手伝いをしていました。今でも、そうだと思いますが、泥田で田植をする地方で、胸まで没する泥水に浸って、一日中、働くのが常でした。

ゴム装束で保温と防水——などというのはとうてい夢で、何しろ普通の野良着のままに体中（といっても胴）にヨロイを着たようにワラとゴザを巻きつけ、荒ナワで縛り、保温と防水をするだけの粗末な身なりで、一日中泥沼に浸って働くのですもの。

ゴム長にしても、はいている人は殆どなくて、地下足袋といった、いでたちでした。

こんな姿で、泥水の中で働くのですから、保温も防水もあったものではなく、しかも、ややもすると首まで沈まなければなりませんから、巻きつけたムシロやワラ、野良着を通して泥水が容赦なく浸み通り、下着も肌も濡らし、まるで裸で泥水に浸っているようになってしまいます。

私も農家の皆さんと一緒に、こんな姿で泥水に浸って田植をしましたが、もともと、ゴムマントの大好きなゴムマニアでしたから、辛い仕事も毎日に楽しみとなり、いつかはゴム装束にくるまって泥責めプレイをしようと心ひそかに望んでおりました。

また、この地方は雪が深く、冬になれば男

も女も大きなゴム長に、ごついラシヤの厚い防寒用のマントを着ており、私もこれを着ていろいろプレイをするのが楽しみでした。

ゴム装束といっても、前述した赤い女児用ゴムマント一着しか持っておらず、『ゴム装束泥責めプレイ』など、及びもつきませんでしたが、雨の降る深夜、そっと野良着に身を固めて赤いゴムマントを着て泥田に入ってみたり、あるいは冬物の防寒マントを着て、泥田に入ったりして、憂さ晴しをしました。

それから東北や北海道の漁村では、水中胴衣、総ゴム合羽、大きなゴム手袋のいでたちで、胸まで海水に浸って波のしぶきを浴びながら働く漁村の人達を見て、ますますゴム装束への欲望を強く燃やし、現在に至ったのでございます。

どのくらい、そのままでしたでしょうか。雨が小降りになり、東の空が白みはじめています。人通りがはじまって、他人にこんな姿を見られたら大変――。

私はあわててスリパチ状の斜面を上りはじめました。何しろ雨で濡れた赤土の斜面は意地悪くヌルヌルで、ちょっと登っては滑り落ち、ぶざまな格好で泥沼へ転がり込みます。

何度も何度も泥人形のようになった私は、木の小枝につかまり、小石を足場にして、ようやく悦虐の泥沼から、はい出しました。そして泥水で光るゴムマントを、はたはたさせ

つつ、小走りに家の方へ急ぎました。

キュッキュッ、ガサガザ、とゴム装束特有の音を立てて、何度も腰に巻きつけたゴム引前掛やゴムマントの裾を踏みつけて、前のめりに転び起き上がりながら、満足した快感のあとに襲ってくる孤独感。他人に見られないか、見られたのではないか――という焦燥感や恐怖感がごっちゃになり、一目散に家へ帰りました。

家へ帰りますと、そのままの姿で、お風呂へ行き、まずシャワーを浴びてゴムマントの表面の泥を洗い落とし、それから、まだ温いお湯に入り、ゴム手袋をはめた両手を動かし、手の平でゴム合羽の全身を撫でまわし、お湯の中で汚れを落とし、それが済むと、お湯の中に立ちあがったままゴム装束を次々と脱ぎすて、水を入れたタライの中に投げ込みました。

情熱の一夜が明けました。

お風呂から上がった私は素肌の上からピンク色のゴム引レインコートを着て、ベルトを締め、フードをかぶり、例の腰まで届くゴム長をはき、炊事用のオレンジ色ゴム手袋を両手にはめると、ベッドに入りました。

ベッドの敷布団と掛布団の間には、総ゴム合羽と同じ生地、表裏共総ゴム布（ゴムシート）がいてあり、丁度、私の体はサンドイッチのようになってゴムシートの中に寝る

わけです。

そして責具としてコーラの空ビン。肥後ずいきを巻いたコンドームをかぶせた腸詰めをアクセサリーに。また枕もとには悩ましい男女の秘戯をズバリ写した写真を数枚。

死んだようにグッスリ眠り、眠りから覚めますと、枕もとの写真を眺めながらベッドの中で横臥してゴムシートとゴム引レインコートの擦れあう音、ゴム引特有の匂いに包まれながら汗みどろになって、オナニーやアヌス責めのプレイに耽るのです。

ああ、読者の皆さま。

私は何故、このような恥かしい告白を続けなければならぬのでしょうか。

もし、私のような何の取得もない小柄な四十五才になるマゾ女を、好いて下さるお方がございましたら、存分に私を辱かしめ、ひとり身の淋しさをなぐさめて頂けないものでしょうか。ゴムとかゴム装束に関心をお持ちのサド傾向の方なら、男女年令は問いません。是非、是非、私の望みを、どうか叶えて下さいませ。

フェラチオ、アヌス責め、水責め、アナルセックス、泥責め……など何でも喜んでお受けいたします。

――（おわり）――

× × × × × × × ×



☆「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ☆

とうきょう おど
東京の踊り子浣腸記

／鈴木千鶴子の巻＼

塚 本 鉄 三

二十二才の

キヤット

鈴木千鶴子から電話がかかってきたとき、私はゆくりなくも、彼女と初めて逢った日のことを思い出していた。

あれは、たしか曇り日の、うすら寒い一月の末のことであつた。

遥々と東京から、東名神を車で、ぶっ飛ばして、大阪まで訪ねてくれた遠来の珍客、鈴木千鶴子を、豊中インターチェンジ近くのドライブインで迎えたのであつた。

月日の経つのは早いもので、あれから数えて、もう半年近く過ぎていゐるのだ。

そのときのことは五月号に『東京の踊子緊縛記』と題して詳しくレポートを書いたが、一面識もない若き女性、鈴木千鶴子を、逢うなり全裸にして縛り上げ、写真撮影して、そ

のルポ記事を書け——というのであるから、編集長の、あの依頼は真実きびしかった。

せめて、一回でも二回でも逢っていて、話し合ったり食事を共にするくらいの機会があったのであれば、相手の気心も知れるし、身体の特徴なども頭の中に入れておいて、事前に一応の手だてを考えておくことも出来たのである。それに、気心が知れるというか、心と心の触れ合いも生じてくるのだ。

それが、なにしろ、東京から車で来阪したヌクヌクの鈴木千鶴子。文字通りエンジンの熱気が、まださめやらぬままに、逢うなりブツケ本番でSMプレイをやらかさばかりか写真まで撮るといふのであるから、私としては、どうも、いつもと勝手が違って、ろくな写真が撮れなかった。

それに、彼女の先導で行ったモーテルが、三階建てが一室になったという豪華な設備には違いなかったが、一度も下見せずに飛び込んだ場所なものだから、只広いばかりで、あちらを使おう、こちらを使おうと、うろろうろしてしまった。素晴らしいプロポーションの彼女の肢体を活かした会心のフォトを撮ろうと企てながら、周章狼狽してしまったのは、かえすがえすも残念でならなかった。

それでも、なんとか曲りなりにでも、記事と写真を揃えて、一応の責任を果たすことが出来たというのも、鈴木千鶴子の積極的な性格と献身的な協力があつた、おかげである。

鈴木千鶴子と別れてからは彼女の魅力にとりつかれたように、なんとか今ひとたびのSMプレイをやりたいものだと願っていた。

柳の枝のように、しなやかな肢体をからませて、全身を私におつつけてきた、あの千鶴子のSMプレイの極致ともいふべき狂態を思い出すと、私の胸は思わず熱くなってくる。

寄せてきた読者通信の通りの情熱的な女性であつた鈴木千鶴子——。SMプレイの果ては、やはり彼女の望み通りの何ものも灼きつくすようなセックスプレイへと進展して





いった。縛りによって高められた千鶴子の肉体の素晴しさは、まさに、筆舌につくし難い。

とにかく、写真と記事を整えよ——という奇巧編集長からの至上命令に対して、締切りに間に合うように、あわてて書いた、あの五月号の『東京の踊り子緊縛記』という記事は、私にとっては、まことに不満足きわまりないものであった。特に現像が出来上がってきた写真を見たときは、がっかりしてしまった。

そのかわり、SMプレイの方だけを取ってみれば、初対面だというのに、もう何年もコンピを組んだ漫才師のように、ピッタリと二人の息が合い、SとMとの接点に於いて火花を散らした挙句、千鶴子のM性のすべてを、むさぼり尽すという、惑溺した甘美な一瞬を過ごすことが出来たの

であった。

もし仮に、鈴木千鶴子との第一回の邂逅に於いて、写真撮影というものを、やらなくてもよいのであったならば、もっともっと、楽しいひとときを過ごすことが出来たろう——にと、悔まれてならない。

鈴木千鶴子のすべてを知りつくした今、私の彼女に対する思慕の念は、時が経つにつれて、いや増すばかりであった。

二回目からは——。

あれもやろう、これもやろう。いくら掘っても掘っても、掘りつくせない千鶴子のSMの泉を、手さぐりででも、当たってみなくてはと、いろいろ、責め手の思案に胸をふくらませていた。

だが——。

そんな私の期待に反して、千鶴子の身体は案外、忙しかった。自宅へ電話しても、殆ど留守勝ちであった。

いつも、電話口には上品な言葉遣いの婦人が出て、「千鶴子は、今、仕事に出ています。が、どなた様でしょうか」とか、「昨日から伊豆の方へドライブに行っていますが……」とかいった返事が、その都度、返ってきた。

私が自分の名前と電話番号を言って、電話

のあったことを知らせておいてほしい——と頼んでおいたところ、二、三日してから、

「一度、大阪まで行きたいと思ってるんだけど、忙しくて、とても行けないのよ」

と、鼻にかかった甘い言葉つきで、彼女から直接、電話がかかってきた。

仕事で旅に出れば、半月から二十日ぐらいは、家を留守にするそうだし、帰れば帰ったで、いろんなモデルやCMの仕事が待っていて、息つく暇もないらしい。その合間をぬって、若さを発散する遊びも、やらなくちゃならない——となれば、これは確かに忙しい筈だ。

行動的に活発に飛びまわる鈴木千鶴子が、関西まで足を伸ばしたところを掴まえて、なんとか、第二回目のSMプレイをやりたいものだと思っただ。

芳紀まさに二十二才の若さ溢れる自慢のプロポーションの千鶴子の肢体を、思いのままに縛りまくり、責めたてて、挙句の果ては、この前のように、彼女をSM天国の春園へ誘い込みたいものだと考えていた。

そんな私の強い期待にも拘らず、時は徒らに過ぎて、世はいっしか春も去り、今や夏の季節にさしかかっていた。

そんなところへ、鈴木千鶴子から

「やっと暇がとれたので、大阪へ行くわ」

と電話がかかってきたのだから、私が一も二もなくOKしたのは、当然であった。

第一回目の浣腸

新大阪駅で鈴木千鶴子を迎えたとき、私はなつかしさで思わず小柄な彼女を抱きしめたく思った。何カ月ぶりになるだろうか。

電話では何度も言葉を交わしていたのだが、一月末から久しぶりに逢うのだから、そんな気持になって、積もる話を喋りたくなるのは、私としては自然のなりゆきだった。

それなのに、彼女の様子が変なのである。口数も少ないし、頬をこわばらせて堅くなっているのである。車に乗ってから、気持をほぐそうと、





私が懸命になって、いろいろの話題を持ち出して話しかけてみても、「ええ」とか「はい」とか返事するだけで、じっと全身をこわばらせているのだ。

私の方かというと、これから展開する華やかなSMプレイのことを、あれこれと考えると、気もそぞろ胸をわくわくさせて、いつになく口数が多くなっていた。

それが、おかしいことに、延々と、八時間にわたるSMプレイを終わり、同じ道を帰途についたときは、逆に鈴木千鶴子の方は、うきうきとして饒舌となり、自分の身の上話や友人のこと、それに仕事のことや、蛇を使うダンサーのきわどい話まで喋りだしたのだ。

私の方は疲れ果てて、ぐったりとなり、早く彼女を駅まで送り届けたら早速、別れて

ぐっすり眠りたいと思っていた。なにしろ、八時間近くも、ぶっ続けで、激しいSMプレイを展開したばかりか、三百枚近い写真を撮りまくったのである。疲れるのも無理はなかった。今迄、一回のプレイでこれ程多くの写真を撮ったことはなかった。

「最初は、なんで、あんなに無口で、堅くなっていたの？ あんたらしくもない——」
「でも、貴方に逢ったら、この前のことを思い出しちゃって、なんとなく恥かしくって。それに、今日は、どんなことをされるかと思うと、ちょっと、不安だったもの……」

しなやかな身体を、猫がじゃれるように、私にすり寄せてくる鈴木千鶴子は、あの最初の頃の堅さが、すっかりとれたばかりか、態度まで豹変してしまつて、極めて馴々しくなっていた。

その変わりようには私もびっくりしたが、それにしても、SMプレイが終わった途端、女性というものは、このように変わるのだろうか——。私にしても肌と肌とを触れ合った鈴木千鶴子が、一層、いとおしくてならなかった。ましてや、自己の惑溺した全裸の肢体のすみずみばかりか、内臓の内側まで、私に見られてしまった彼女にしては、その余韻

が、まだ残っているのかもしれない。

行き——と、帰り——。

この奇妙なコントラストは、私にとってはM女性の心理の一面が如実にうかがえて大変面白かった。

それは、さておき——。

鈴木千鶴子との、この日のSMプレイの顛末は、といえば、私が、それだけを別のバックに一まとめにしておいた浣腸器具を取り出すことより始まった。

大きいものから順に私は取り出した。

白い嘴管のついた二〇〇〇CCイルリガートル、黒い嘴管のついた一〇〇〇CCイルリガートル、二〇〇CC硝子製浣腸器、一〇〇CC硝子製浣腸器、漏斗、エネマシリンジ、五〇CC硝子製浣腸器、イチジク浣腸、二〇CC硝子製浣腸器、ホーロー引き便器、パイプレーター、コケシ人形、大筆、スポイト、直剪刀、開孔器——と、いったものだった。「うわァー、スゴイ、こんなに沢山？」

鈴木千鶴子は、畳の上に乱雑にとり出された、それらの浣腸用の小道具を見て、思わず驚きの声を放った。

△浣腸△に対して、彼女が特別の関心を持っているということを、通信で知った私は、今

日は何をさておいても、先ず△浣腸プレイ△をやらなくてはと思っていたのだ。

『浣腸』といえば、松本たえのように、

「私は、どんな責めをされても甘んじて受けますが、浣腸だけはカンニンして。浣腸以外の責めだったら、どんなことでも……」

という女性があるかと思えば、高村浩子のように、自分から浣腸責めを求め、そしてその求めに応じて浣腸器をとりだして、石鹼水を注入してやると、目をみはるようなM性を、まざまざと露呈してきた女もあった。

この鈴木千鶴子は果たしてどうだろうか。

私は、彼女が夥しい浣腸用具を眺めて、驚きの言葉を放ったのを受けとって言った。「でも、貴女は浣腸されることがお好きなんでしょう？」



「イヤ、そんなこと言っちゃ」

彼女は羞じらいを顔一面に漲らせて、うつむいてしまった。しおらしくて可愛い風情である。投げだして伸ばした脚の指が、これから展開されるSMプレイへの期待に、わななくように、ふるえている。

私の嗜虐心は、一段とあふられた形となった。恐れおののく小羊に対して、浣腸という暴力を情容赦なく、ふるいたくなくなった。

「今日は、貴女が、どんなに泣き喚いて許しを願っても、浣腸液を一杯送り込んで、貴女のお腹の中のを、一つ残らず出さしてしまふからナ、覚悟をするんだゾ」

私は二〇〇CCのポンプを手にして、浴室から持ってきた洗面器の中の湯を、吸い上げては押し出していた。湯の中に放り込んであった石鹼が溶けだして、忽ちのうちに、白い泡が洗面器の中に満ち満ちてきた。

「私、こわいわ。浣腸されるなんて……。それに……」

「それに——、なんだ、言ってみる。言いかけた言葉を途中で止めるなんて、お前らしくもないぞ。言ってみる。次を言ってみる」

「それに……、恥かしいワ、もう。そんなこと言わさないで——」

「いかん、言うんだッ。何を言いたかったか素直に言わない間は、許さんからナ」

「じゃ言うわ。浣腸されるとこわいの。それから……」

「それから、なんだ？ 言ってみる」

「それから、私って、好きでしょ。だから、その……」

「なにが好きなんだッ。言ってみるよ」

「イヤだわ、そんなこと。きまつてるじゃないの。私の口から言わすつもり？」

「いいから、言ってみるよ」

「カ、ン、チ、ヨ、ウ」

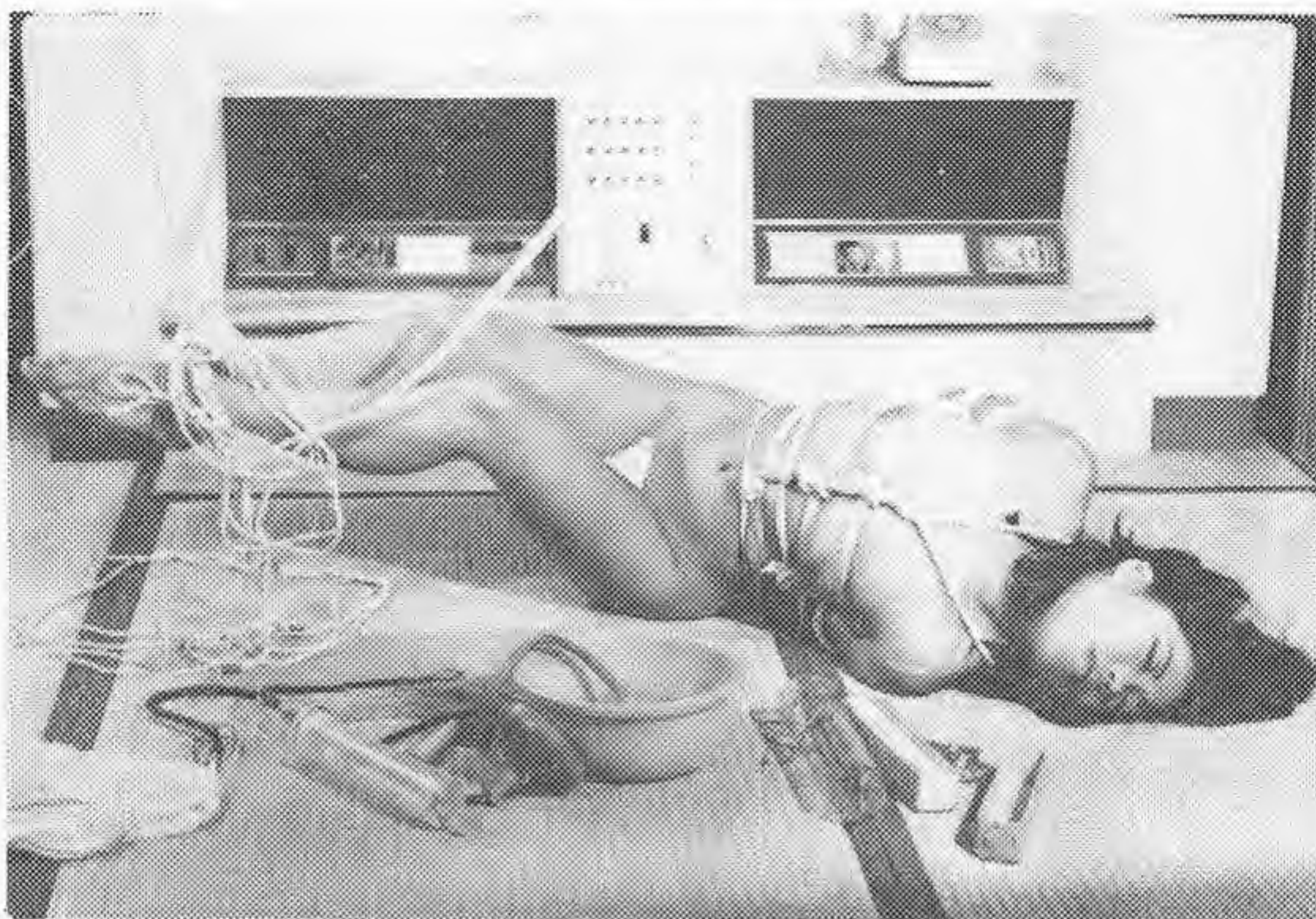
「だったら、いいじゃないか好きな浣腸を、されるんだから——」

私がポンプを動かすたびに洗面器の中の石鹼の泡は益々ひろがってきた。

「好きだから、困るんじゃないのヨオ」

「なにが困るんだ。そのわけ





を詳しく言ってごらん。理由が、はっきりしたら、止めてやってもいいんだ」

「こわいのよ。浣腸されたら私が、どんなになるかって、

——それが……」

「フン、そうか。それだったら、浣腸以外の責めだったらいいと言うのかい？」

「そういうわけじゃないけど私、今日、浣腸されるなんて夢にも思わなかったワ」

「夢にも考えていなかった浣腸をされるんで嬉しくて、たまらんのだろう？」

「そんなこと。それに、こんな大きなお道具でされるなんて、そら怖ろしくて……」

「怖ろしくて、嬉しいんだろう？ はっきりと、女らしく言ったら、どうだい。私は浣腸されるのが、大好きです——って」

「私、浣腸されたら、自分の身体が、どんなになるか、そ

れがコワクテ……」

「よし、それじゃ、それを、これから、ゆっくりと見極めてやろう」

私は二〇〇CCの巨大な硝子製浣腸器に白濁した石鹼水を、たっぷり吸引した。

「待って、待って。私、トイレへ行ってくるから、一寸待って——」

「トイレは後からで、いいんだ。どうせ、いやでも、これからトイレへは何度も通わせてやるからナ」

「そうじゃないのヨ。さっきから、あんな話ばかりしたでしょ。だからサ、わかってくれるでしょ。このままじゃ、イヤッ」

「わからないナ、このまま浣腸していけないわけは——」

「イジワル。どうしても、するって言うの。びっくりしても知らないわよ」

「とうとう観念したか。それじゃ、ゆるゆると、浣腸させてもらおうか」

私は、硝子製のポンプの先から、ともすれば石鹼液がポトポトと落ちるのを気にしながら、彼女の臀部へ近づけていった。

すっかり諦めきった鈴木千鶴子は、全身の力を抜いて、私に言われたままに尻を高く掲げたポーズをとっている。

私は右手で浣腸器を持ち、左手で押しひろげていって、あっと驚きの声を放った。

なんということだろうか……。そこに私が見たものは、鈴木千鶴子の心の昂まりを、如実に現わした……。ものであった。

彼女が、困る、困る——と、必死になって言っていたのは、このことなのか。

私は、ただ呆然と、しばし、その見事な光景を、ただ眺めているばかりであった。

たとえば言えば、うつぼかずらの壺の中に蛾がうごめいているといった風情は、まことに私の心を動かすのに十分であった。

だが、しかし、二〇〇CCの浣腸器のポンプの中に、全量吸い込んだ石鹼溶液は、いつまでも、そのままにいるわけにはいかなかった。なだらかな膨らみを持った嘴管は、絹のようにやわらかで微妙な髪の中へと吸い込まれていった。

それは括約筋という無粋な名前に似合わぬ素晴らしい包容力を持ったやわらかさと、たぐい稀な美しさを持っていた。

今までの私の経験からいえば、これは意外のことであった。大なり小なり、何らかの抵抗を受けたものであったが、鈴木千鶴子に関しては、そのつつましかな小作りの菊花

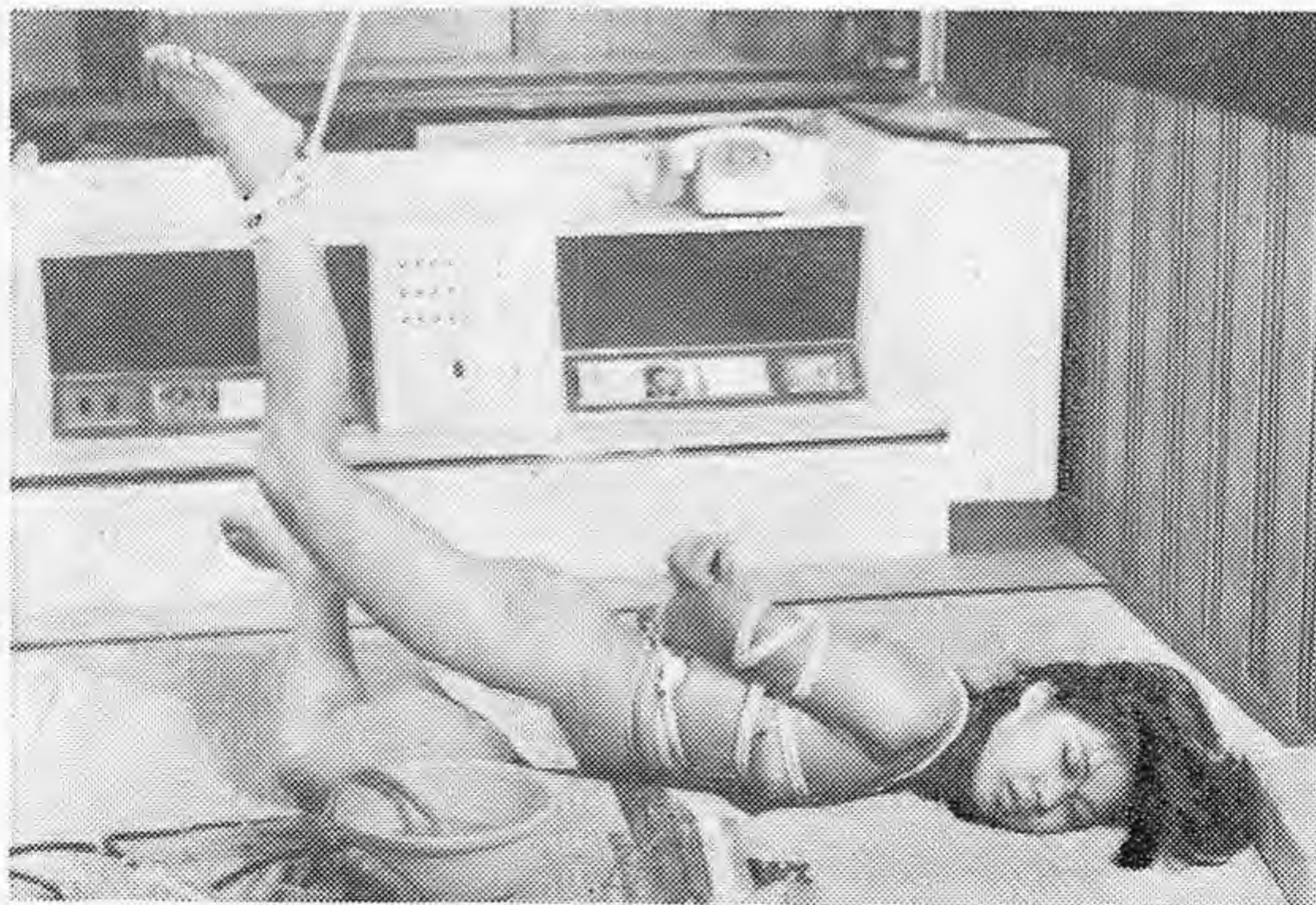
であったのにも拘らず、自らの意志によってそうするかのように比較的、大きな膨らみを持つ、その嘴管を苦もなく受け入れていったのである。これもまた、私にとっては一つの驚異であったし、また限りない愛着の念を起こさせるのに十分であった。

私の右手がポンプの把手を押すことによって、忽ち二〇〇CCの石鹼液全量は、忽ちのうちに、彼女の体内に吸い込まれていた。

私は反射的に彼女の表情をうかがった。

鈴木千鶴子は、ゆるく目を閉じ、心持ち唇を開き、畳の上についた掌で空を掴むかのように指先に力を入れているのが、なにかしら可憐であった。

私にすべてを見られてしまった——という安堵からか、彼女は尻をつき立てた浣腸ポ





ーズのままで、リラックスした姿態を、そのまま保っていた。が、しかし、その平静の状態は五分ばかりの間に過ぎなかった。

やがて――

笑窪のある可愛いお尻がもぞもぞと揺れだし、横向けにしていた顔が、次第に紅を増してきた。両膝を、ぐっと曲げて、

「ああ、お腹が、痛くなって……きたわ。もう辛抱できない。カンニンして――」

「何を言ってるんだ。まだ二〇〇CCを入れたばかりじゃないか。これからだよ」

私はもう一度、ポンプに石鹼液を吸い上げて、洗面器の中へ嘴管を下にして立てかけると、把手の重みで自然と液が出ていってしまう。再び吸い上げて両手で持つと、嘴管の先からポタポタと石鹼液がたれ、一寸、力を入れると、

勢いよく尖端から液が噴出する。

「さあ、もう一回、浣腸するゾ」

「いや、いや、もうカンニン……」

口ではそう言っているが、腹部の疼痛も少しはおさまったのだろう、拒否の言葉も極めて弱々しい。こうして、第二回目の二〇〇CCは、再び注入された。

「ああ、あああ、もう駄目、駄目だわ」

全量の注入が終わるや否や、鈴木千鶴子は激しい反応を示しはじめた。淡雪のような臀部がピクピクとケイレンして、必死になっただけを耐えているようである。

私は浣腸器を洗面器の中へ放り込んで、じっと彼女の動きを見守った。

肩口と背中、それに二の腕に、汗の玉が、ふつつつと浮かび上がっている。

「うううう……。もう辛抱できないわ。お腹が痛くて、痛くて……」

「弱音を吐くんじゃないよ。まだ五分と少しだ。ガンばって、ガンばって――」

「イヤ、イヤ、こんなところではイヤ。ねえ、お願い、トイレへ行かせて。早くウ」

「別にあわてなくなっただけだよ。僕がここでゆっくり見てあげるから、心配しなかつた方がいいよ。出してしまいなさい」

「こんな畳の上じゃ、駄目よ。出ないわ。お腹ばかり痛くって、たまらないのよ」

「じゃあ、あとでトイレへ行かせてあげるから、それまで二、三枚、写真を撮るからね、そのまま、じっとしてるんだよ」

私は三脚に据えたカメラの方へ戻ってピントを合わせた。エヤーレリーズを引いてゴム球を足で踏んでシャッターを落とすように仕掛けておいて、再び浣腸器を手にした。

「早くして、お願い。ゆっくりしてたら、出してしまうわ。あああ、お腹が……」

「出たけりゃ、遠慮しなかったって、いいんだよ。そこで思いきり出してごらん」

「イジ悪。私を困らせるようなことばかり言って……。早くしてよ」

私はシャッターを一度、二度と切ってからその都度、浣腸器をエネマシリンジ、一〇〇CC浣腸器と換え、少し宛、石鹼液を注入してやった。カメラのシャッターをセットに行くときは、わざと浣腸器を、そのままにしておいて、彼女が起き上がるのを防いだ。

エネマシリンジのゴム球を握ると、面白いように洗面器の中の石鹼液が減っていった。シュッ、シュッ——と快い手ごたえがして確かに、洗面器から彼女の体内へと液の移行

してゆく有様が感じられた。

エネマシリンジの黒色の嘴管が、ぴったりと吸い込まれていて、手を放しても抜け落ちないところを見ると、彼女は自分でも浣腸をよく施しているのではないだろうか。

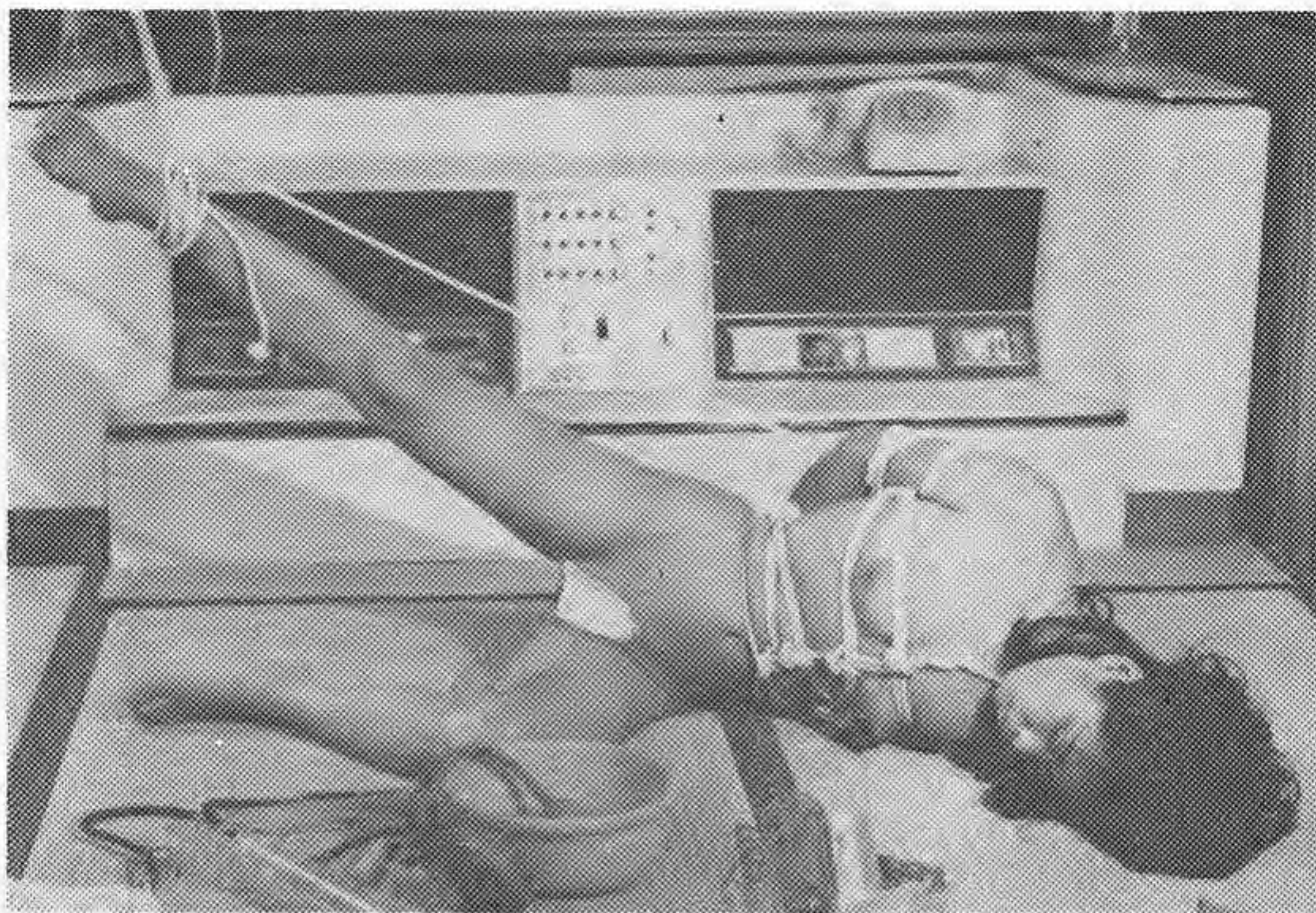
やわらかくて、包容力のある、この菊花の秘密を私は直接、自分の指で確かめてみた。思ったが、既に、そのとき彼女の忍耐力は限度に達していた。

「イイイイ、行かせて、トイレへ、行かせて。お願い！」

脇腹が、大きく波打ち、太股のあたりの皮膚が、トリ肌立っているのが、わかった。

それよりも、噴出直前の火山のように、早くも、私の目の前で胎動している、そのものが、急を告げていた。ゆっくりと、最後の決定的の場面を見ていたい——という気持ちより先に、何の準備もしてい





ないことに対して、私は、あ
わてざるを得なかった。

グリセリン浣腸

トイレへ行って排泄をすま
せてきた千鶴子は、他にいく
らでも坐る場所があるのに、
やはり、そこが儀である自分
の居場所であるかのように、
浣腸器のちらばっている中に
身を横たえたのであった。

「どうだ。沢山、出たか？」

「イヤ、そんなこと言うの。
でも私、便秘じゃないけど、
わりかし食べる方だから……
さっぱりしたわ」

「そうか。だったら、ちゃん
と後始末をしてきたか、どう
か、一度、検査してやろう」
「いやいや。お風呂できれい
に洗ってきたわよ。それより
もう浣腸はこれで終わり？」
「まだまだ、これからだよ。
ホラ、この通りイチジク浣腸
だってあるし、イルリガート

ルやエネマシリンジで、大量浣腸だって、や
りたいものネ。今のは、いわば序の口だよ」

「イチジクって可愛いネ」

「君は、自分でも浣腸してるんだろう？」

「知らないッ、そんなこと。ごらんになった
ら、わかるでしょ」

「わからないね。だから、検査をしようって
言ってるんだよ。パイプもコケシも持ってき
てるからナ。それにゴム手袋も、そのときの
ことを思って、この通り準備してきてあるん
だ。やわらかくて伸長性がありそうだね」

「まあ、そんなことを言ったりして、私を困
らせるのネ。イヤな方——」

千鶴子は顔を掩うように、がばと、うつ伏
して、私の目の前にお尻を突き出した。さっ
きの浣腸ポーズと期せずして同一になった。

「今日は、まだ一度も縛ってないが、どうだ
い、縛ったままで浣腸してやろうか」

「いいの、いいの。絶対に逃げださないから
このままで、浣腸して——」

「だったら、僕がよしというまで、我慢して
みせるんだナ。途中で泣きごとと言っても知ら
ないゾ。今日のキミは思いのままになる奴隷
なんだからナ、容赦はしないよ」

「ええ、いいわ。貴方のされることだったら

どんなことでもきく。だから、縛るって——なんて、おっしゃらないで——」

「よし、それじゃ、どんなことになっても僕は知らないゾ」

私は千鶴子をころりと、ころがして仰向けにさせた。十二分に臀部をむきだしにしておいて、エネマシリンジの黒い嘴管を、するりと根本まで差し込んだ。吸入口をグリセリン溶液を満たした洗面器に差し込んでおいて、私はゴム球を握りしめた。

「さあ、これから、君のお腹が、はちきれるまで浣腸をするからナ、覚悟しろヨ」

私は、これから起こるであろう現象を楽しく心に描きながら、シュー、シュー、シューっと、浣腸液を送りつづけた。

ゴムの管が、くくくく——と、ふるえて、浣腸液は一定のリズムでもって千鶴子の体内へと吸い込まれてゆく。

それにつれて、洗面器の中の液面も、目に見えて、下がってゆくのだ。

私は、じっと彼女の表情を、うかがった。第一回目るときと違って、至って平静である。両足を上へ挙げているのが苦痛なのか、彼女は横臥して膝を曲げ、お尻だけを突き出すような恰好になった。

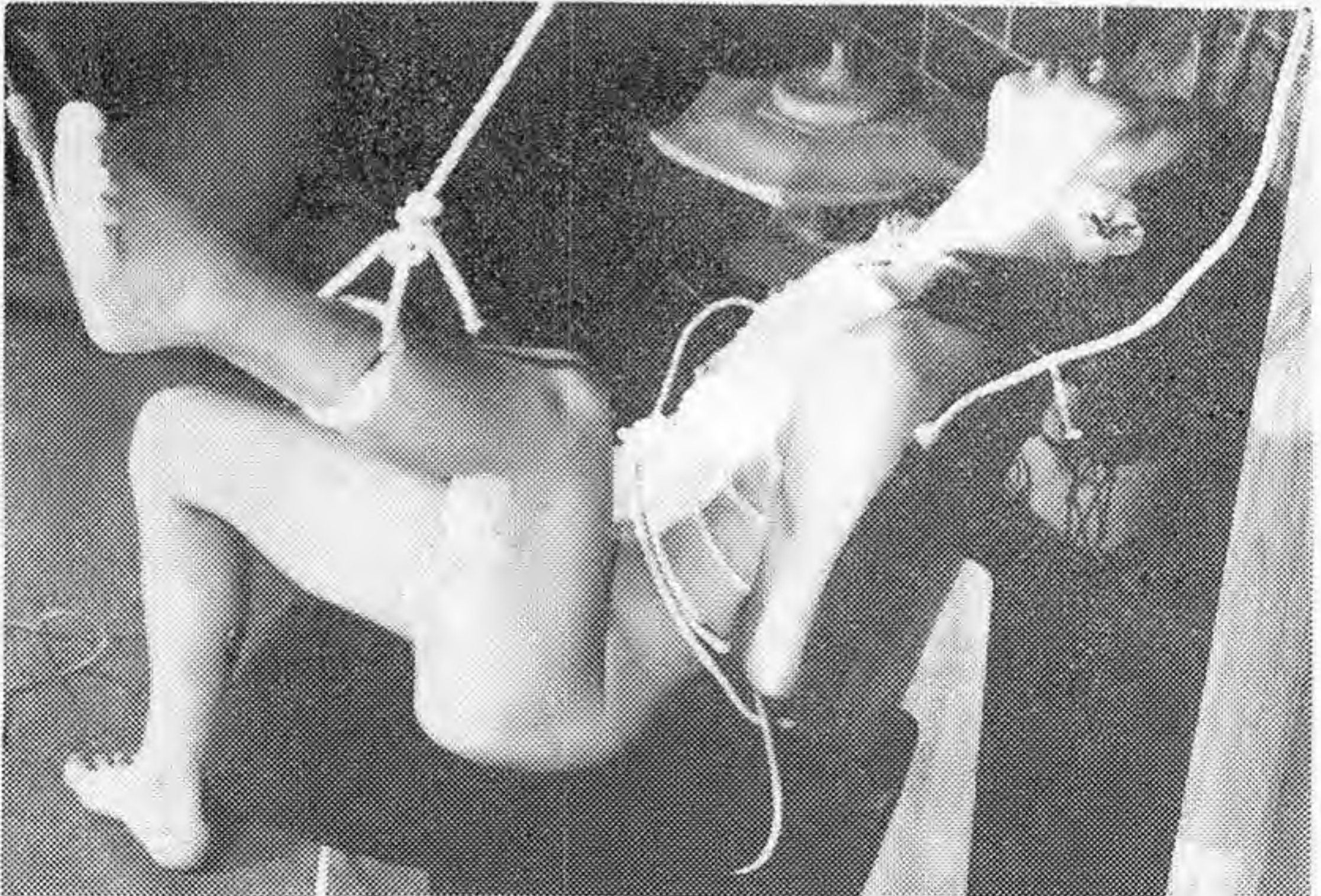
やがて、洗面器一杯のグリセリン溶液は底をつき、ゴム球を圧縮すると吸入口から逆に液が奔流する様になった。千鶴子は額に、じっとりと汗を浮かべてはいるが、まだ、何の変わった気配も見せていない。

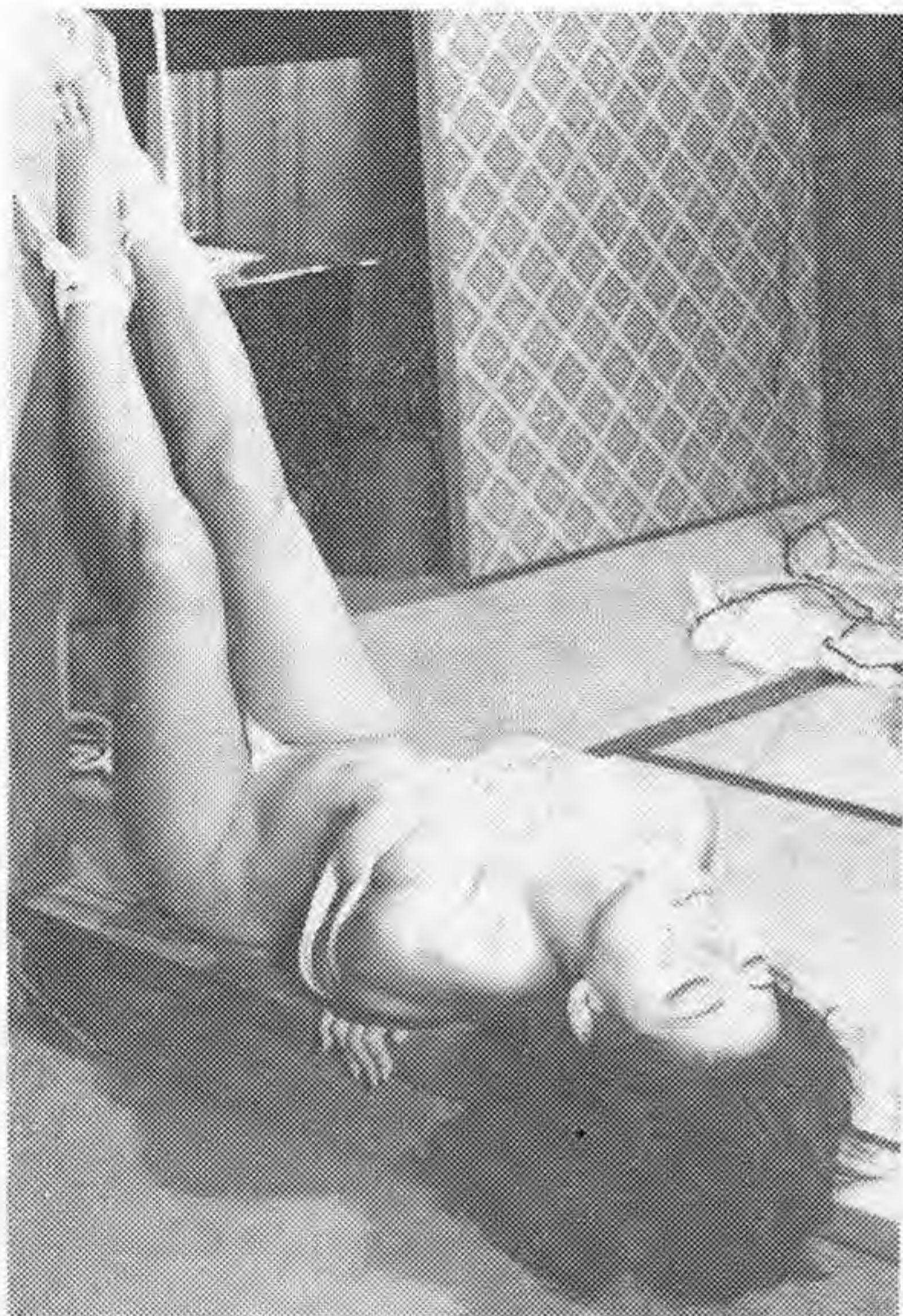
私は、すぐさま、追加のグリセリン溶液を作製した。洗面器を持って戻ってくると、千鶴子は膝を立てて両手で腹部を押えている。

「どうした？」

「お腹がゴロゴロして、気持ち悪くって、トイレへ行きたいみたい」

「よしよし、そうだろう。まだ浣腸が、足りないみたいだナ。洗面器に、もう一杯、入れたら、少しはラクになるだろうよ。さあ、やるよ。このままの姿勢で、いいんだね」
「ええ、こうしていると、いちばん、楽みたいなの」





丁度、土下座しているような恰好だから、浣腸する部位は、目の前に突き出ているといった按配だし、腹部が下になるから入れやすいわけだが、ただエネマシリンジでは、ゴムの管が短くて届かない。それで私は、二〇〇Cの硝子製の浣腸器を用いることにした。

浣腸液を補給するたびに、嘴管を抜き差し

するのが、私の目を、こよなく楽しませた。私は、今までに、こんなに美しい蕾を見たことがなかった。

羞らひを見せた、その鉤は限りない柔軟さを見せて、どこまでも伸長するかに見えた。

洗面器の中のグリセリン溶液が、三分の一ほどに減ったとき、千鶴子の全身がオコリの

ように、ふるえだした。

激しい便意を必死になって耐えているさまが、彼女が全裸であるだけに、私には、手にとるように、よくわかった。グリセリンの溶液が、腸粘膜に対して、どのような生理現象をひき起こすのかは、私にはわからないが、さっきの第一回の浣腸で、腹の中の物は殆ど排出された筈である。あとは、もう宿便のようなものだけだろうが、これから、あとのSMプレイのことを考えると、すべて一切のものが、きれいに洗い去られることは、私にとって極めて好ましいことではあった。

「ううう、痛い、痛い。下腹がねじれるように痛くなって、辛抱できないワ。トイレへ行ってもいい？」

「トイレか。トイレへ行かせてやってもいいが、どうだい、風呂場で、僕の見ている前でやってみないか。なんだったら、写真に撮ってやってもいいんだぜ」

「そんなこと、いやよ。ねえ、お願い。トイレへ行かせてよ」

「風呂場が嫌なら、そのまま、もう少し辛抱しろよ。まだ少し浣腸液も残ってるからナ」
「そんな、そんな——、意地悪言わないで、トイレ以外だったら、出ないもの」

「だったら、出るようになるまで、待ってあげるよ。ソラ、もう一押し……」

「イヤーン、やめてエ。お風呂場へでも、どこへでも行くから、入れるのだけは止めて。もう、出てしまいわ。お願い！」

私は浣腸器を洗面器の中へ投げ入れて、千鶴子を抱え上げた。膝に力を入れて歩くことの出来ない彼女の腋の下に手を差しのべて、浴室へと運んでいった。

千鶴子の

身体検査

二回にわたった浣腸によ

って、鈴木千鶴子の腹の中は、すっかり綺麗になった。私は入浴することを命じて、身体の外からも清めさせた。先ず手始めの準備行動は、これですべて終わったわけである。

いよいよ、これから本格的な女体責めが始まるわけである。いわば、今までは序曲ともいべき段階であった。



私は鈴木千鶴子という二十二才になる女性の身体検査を試みようと考えた。それは勿論外面ばかりでなく、その内面、即ち内臓に至るまで精密な検査と探究を重ねようというのであった。今までの浣腸も、そのために施したといっても過言ではないのだ。

イケニエの祭壇に伴ってきた千鶴子の前に

私は白いロープを手にして立ちほだかっていた。ゼイ肉のない、程よく引き緊まった裸身が、自慢のプロポーションを誇って、私の目の前に横たわっていた。

それは柔らかそうな肌ではあったが、一度刺戟を加えたなら、カモシカのように躍動しそうな力を、うちに秘めていそうだった。責めて責め甲斐のある魅惑的な肢体であった。

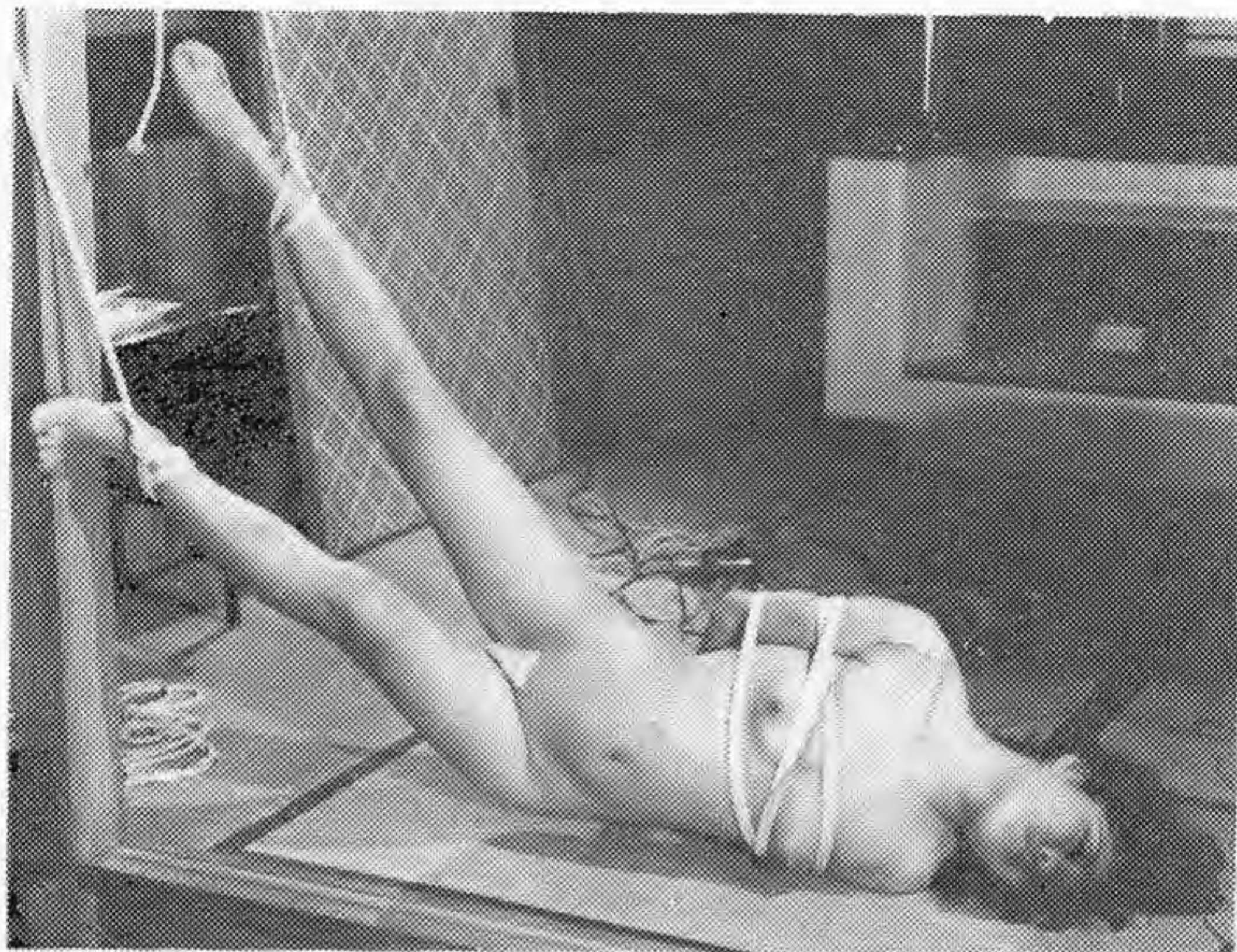
自分の思いのままに、好きなように弄ぶことの出来る、このまぶしいような若々しい女体を前にして、私の心は逸っていた。

「さあ、これから責めるゾ」

私は千鶴子にでもなく自分にでもなく、責めのきっかけをつけるために掛声をかけた。

「ハイ」

千鶴子は、すでに諦めきったように観念して歯切れのよい言葉で返事をし、静かに目を閉じていた。きっと、腹の中のを全部、



排泄してしまつて、すがすがしい気持ちで、こ

れから自分の身の上に加えられるとする責

めを、待っているのであ
ろう。

私は千鶴子を高手小手
に縛り上げた。

手首は何の抵抗もなく、
思いのままに、やわやわ
と背中の中すじ近くまで
あがる。

天井には縄を通すのに
恰好の梁が数本通ってい
たので、それに縄を掛け
て輪を作っておいた。千
鶴子の片足の足首に縄を
括り、その縄尻を天井か
ら下がった縄の輪に通し
て引き上げる。そんな私
の作業に対しても、千鶴
子は、うっとり目と目を閉
じたまま、全身の力を抜
いて為すがままにさせて
いる。

片足が次第次第に引き
上げられてゆき、洗い浄
められた、その部分が露

呈してきても、千鶴子は、も早や、何の為す
すべもないのだ。

カメラのレンズが、そんなあられもない肢
体を舐めまわすように狙ってゆく。

片足が高々と吊られ、束縛されていない方
の足は、畳の上を這いずりまわっているとい
う恰好のまま、千鶴子に対する身体検査が行
なわれていった。

「どうだ、こんな恰好で浣腸してやろうか」
私は言葉で意地悪い、いたぶりをかける。

「イヤン、イヤン、早く足を下ろして——」
千鶴子は薄目をひらいて、チラッと私の方
を見て、す早く、また目を閉じる。

可愛い感じだ。

完全に屈服させた、意のままになる可愛い
女という感じである。

「イヤ」と言っても、心からの拒否ではない
ということ、その粘りつくような語感から
も、よくわかる。いわば甘えているのだ。

私は思う存分、千鶴子の肌のタッチを楽し
んだ上で、今度は両足を揃えて上へ引きあげ
そのすべすべとした脚の肌をペタペタと叩い
てからカメラへ戻った。浣腸場面のアップを
幾枚も撮った時から、二台のカメラを三脚の
上に据え、エヤーリリースで遠隔操作しなが



らシャッターを切っていた。

千鶴子の表情を見ながら、言葉による、いたぶりを続けつつ、手ではシャッターのゴム球を握っていたのだ。両手がふさがっていてシャッターの切れないときは、ゴム球を口にくわえたり足の裏で踏みつけたりした。

いずれにしても、絶妙のシャッターチャンスをつまえては確実にネガ作りを積みかさねていった。余りにもSMプレイにばかり没入しすぎてしまっただけで、あとに写真を残すことが出来なかった場合が間々あった。

といって、発表を許されないような写真ばかりを、いくら沢山撮ったところで、これまた、読者に対するサービスにはならない。ポルノ解禁という状況ともなれば或は、そうしたものも利用価値があるかもしれないという考えから

そうしたネガも夥しい数にはなっているが、今の日本の情勢では、目下のところ、やはり発表可能のものに注力するのが得策である。

「浣腸された気持は、どうだった？」

「恥かしかったワ。自分でひとりでするときとは、また違うもの——」

「キミは浣腸されることが好きなんだろう。浣腸されたときのキミの身体を見ていたら、よくわかったよ。浣腸されることが大好きだと言ってごらん」

「そんなこと、言えないわ」

「縛っておいて、もう一度、浣腸しようか」

「縛らなくなったって、逃げださないわよ」

「でも、変わったポーズで浣腸しようと思えば縄の助けをかりないと無理なものね。こう片足だけを頭よりも高く上げたりして、こんなポーズだったら面白いと思うよ」

私は面白半分、エッチな言葉をかけて、それに対する彼女の反応を、うかがった。

「いや、そんなこと言っちゃ」

千鶴子は言葉とはうらはらに、万更でもなさそうな態度で、身体をひらいている。

実際、私は今までの数多い経験からして、千鶴子のアヌスは、まさに天下一品の逸品であることを知っていた。詳しいことをペンに

することもフォトにすることも許されないが私が惚れ込んでしまったのは事実である。

こんな女性にだったら、何度でも何度でも浣腸をやってみたい——と、思う。

浣腸がし易いようなお尻をつき出した縛り方——、その上で、私が小道具を用いた、どのような身体検査をやったか？

その詳細については、いずれ機会を改めてお話することとして、結果的には、千鶴子が生まれて初めての満足を感じたことは、帰途につく際は、ハミングを誦んで私に替わってハンドルを握ってくれたことでもわかる。

縛りの羞恥責め

この日、私はライカ判を含めて五台のカメラを準備してきていたので、撮影の場所を変えらるゝこと自体、そう大して困難ではなかったのだが、五灯のストロボとライトの配光を変えらるゝことは、いささか困難だった。

天井か壁に全部バウンズさせておけばよいのだが、それが案外禍いして、天井に近い部分の被写体にハレーションを起こしている心配も生じてきているのだ。

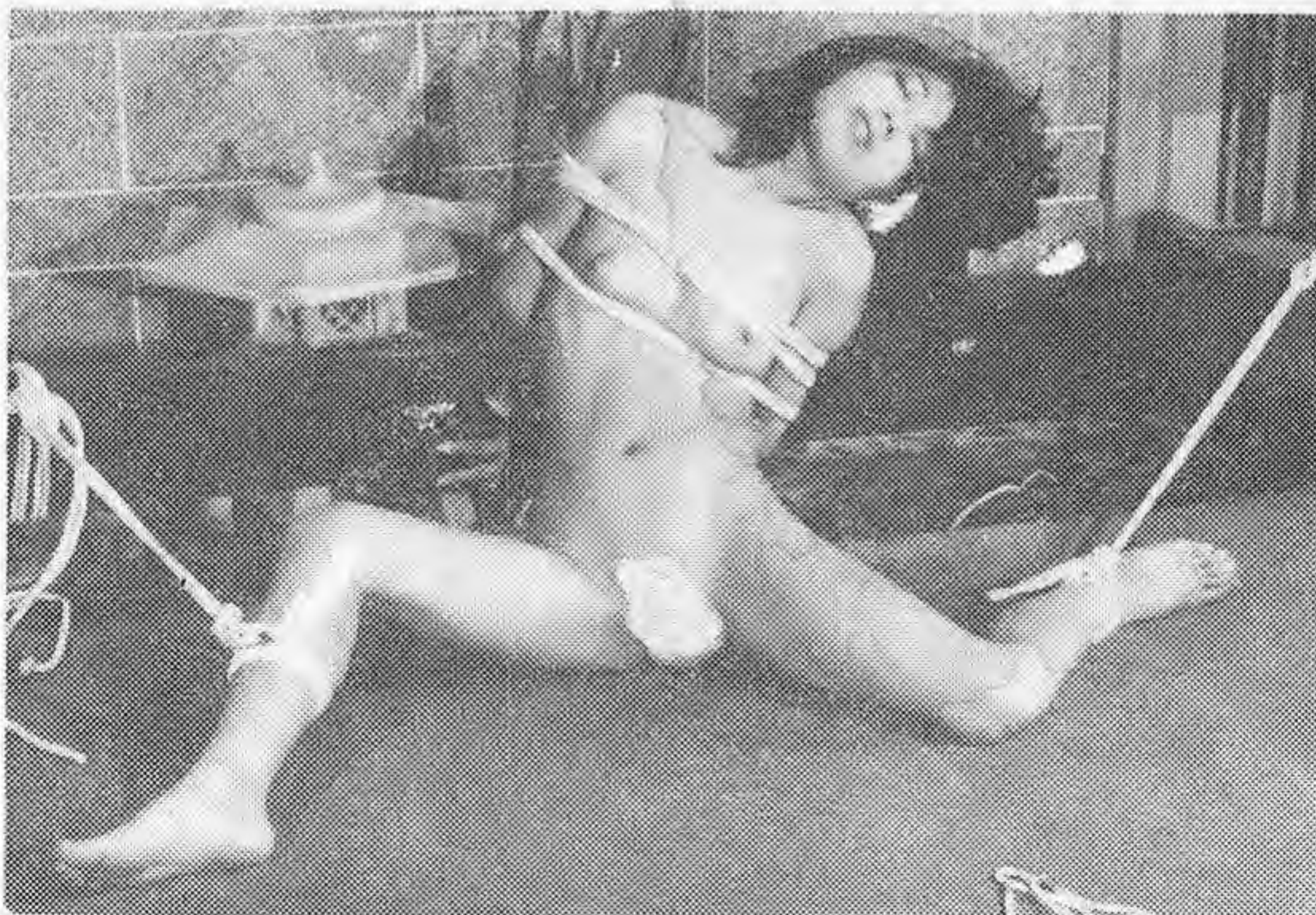
だから、部屋は一階と二階に別れていて、幾部屋もありながら、実際に使用出来る場所

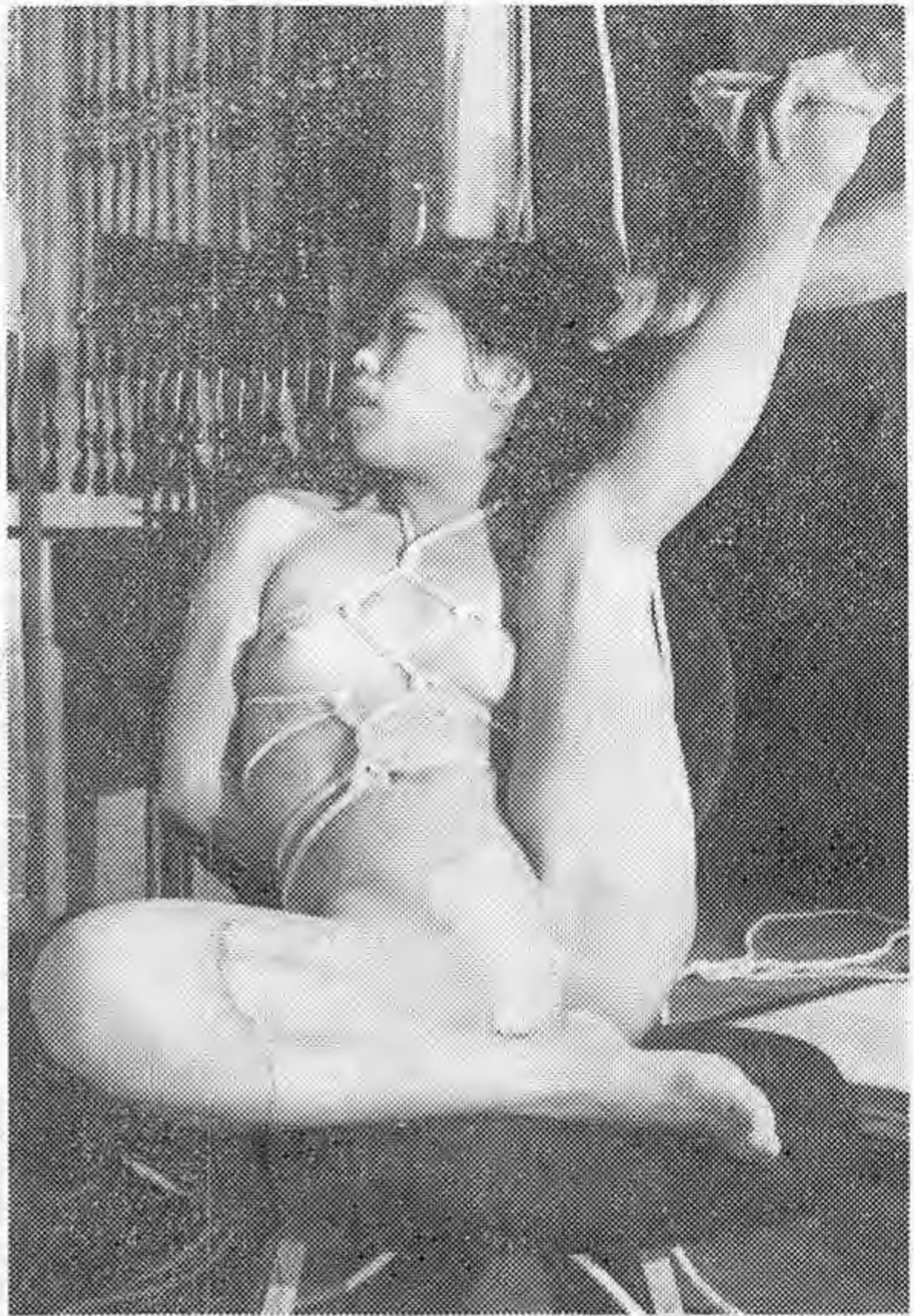
は思ったより少ないのだ。それに長焦点のレンズを使用するとなれば、どうしても、それ相応のヒケが必要になってくる。短焦点レンズによるデフォルメも、時にはポインや臀部を強調して成功する場合もあるが、全身を入れたときなど不自然さが目立つことが多くて、多用するのは憚られた。

そんなことを考えながら、私は鈴木千鶴子に対する縛りによる羞恥責めを、どのようにして加えてやろうかと思ひめぐらしていた。

先程の千鶴子に対する身体検査によって、私は彼女がアナルセックスをも十分に許容することが出来る女体の持主であることを知り得て、非常に嬉しかった。そして、そんな千鶴子の身体が、いとおしくてならなかった。

このいとおしい千鶴子を、





縛ることによって自分の愛情を示すより外はないという、せっぱ詰まった気持ちに追い込まれていた。

高手小手に縛り上げた千鶴子の身体は、くねくねとして力がなく、踊りで鍛えた肢体は粘土細工のように柔らかであった。

椅子へ坐らせて片足の足の裏を持って上へ

挙げると、苦もなく頭上まで高々とあがる。

ふわふわと絹布のような触。髪の毛をワシづかみにして引き寄せても、責められる悦びに浸りきっている千鶴子は、ただ、うっとりとして、カメラの前にあられない姿態を、正面きって晒しているばかりであった。

奇クの読者である女性でなかったなら、と

ても、縛られたままで、このような陶酔の表情を示すことはないだろう。ストリップパーとかピンク女優とかが、金ほしさのために、ただお義理で身体を縛らせているのだったら、こうした息づまるようなSMプレイが展開しないだろう———と思えた。

それから、もう、開脚縛りに憑かれたように、足首に膝頭に、縄を掛けて、じっと瞑目したままにいる千鶴子に対して、羞恥責めの連続ワザを仕かけていった。

クーラーはフル回転して盛んに冷気を送り込んでいたが、ライトをつけ放しにしていたため、部内はムンムンとする熱気が充満して、裸になっていても額や首筋から汗が、しったり落ちてきた。ライトの熱気ばかりでなく、プレイの熱気もまた、この閉めきった密室に対して過熱状態を齎すのに、大いに貢献していたかもしれない。

この開股責めの場所は、さっきの浣腸の部屋とは又別の部屋になっている。和洋折衷ということで、前者は畳敷きであり、今の部屋はカーペットを敷いてある。

私は、千鶴子の両足を思いきり左右に開かせて縄で縛って固定しておいてから、ローソク、パイプ、大筆、コケシ、鼻孔開口器など

さまざまの責めの小道具を持ち出してきた。

前田真知子は、つぶらな瞳を、ぱっちりときらめいて、私のすることを一々じっと、みつめていたのだが、千鶴子の方は、いつも静かに瞑目しているのだ。

私の為すことに対して、すべてを委せきつた表情で全身を、ゆだねているのだ。

三脚に据えられた正面のプロニカは、そんな二人の仕草を、冷徹なレンズの目で見つめていては、時々ストロボの閃光を、思い出したように放った。

すでにSMプレイが始められてから、何時間、経ったであろうか。休みなく続けられていても、疲れを感じること是一切なかった。

暑ければ暑いほど、益々元気になってくるという、まるで昆虫のような習性を持っている私の身体は、重戦車のようにエネルギーを噴出させようとしていた。

「私って、暑さにも寒さにも強いのだからそんなことは、気にしないで……」

一方、千鶴子の方も、温度や湿度の高さには一向に気にしていない風である。不快指数に対する許容範囲が、人それぞれの体質によって違うのだろうか。

全身から汗が流れ落ちるような気候を迎え

ると、私はいつも身体の底から、もりもりと精気が湧きあがってくるような気がする。いわば太陽の季節Vの訪れが、私の活躍の季節でもあるのだ。

一見、キャシャな身体つきに見える千鶴子に、このような情熱が秘められているのかと驚くほどの、打ち込みようであった。また、

延々、数時間に亘る連続プレイに耐えて疲れを知らぬタフな身体の主主でもあった。「私って、相手の方を、とことんまで満足させるサービス精神を持っているのよ」

いみじくも、彼女が言い放った、この言葉に、理想的なM女の姿勢を、私はそこに見ることが出来た。



こんこんとして尽きることのない旨酒の泉を飽食しきった私は、新しい魅力を千鶴子の上に発見したのであった。

十一時十分に到着した鈴木千鶴子を新大阪駅で迎えて、早い昼食をすませて、直ぐにこのホテルへ来たのだが、既に硝子窓の外は、薄暗くなっている。

つい先程まで、西陽が赤々とさしていたと思ったのに、あれからでも、一時間以上も経っているのだろうか。陽の落ちたのを見て、急に空腹なのに気づいた。

「もう夕食の時間だなあ」

「私だったら、いいのよ。一食ぐらい抜いたって、平気なんだから……」

千鶴子は私の両腕に抱きすくめられながら言った。まだまだ、プレイを続ける気にいるらしいのが頼もしい。

どんな事態になっても、縄を解いてくれないと言わない千鶴子——。

でも、いつしか、嚴重な高手小手の縄もバラバラに解かれて、周りにちらばっていた。

撮りも撮ったり、実に数百枚——。

さすがの私も倦きていた。

それに、新大阪駅では、十一時二十分ごろだったので、軽くテキを一枚、食べただけの

ため、腹も空いて仕方がなかった。

私は横になりながら、首をめぐらして落花狼藉のプレイのあとを眺めてみた。

三台の中型カメラと二台の小型カメラが、乱雑に縄やコードの束のところにがっているかと思えば、責めに使った棒が、まるで食べ残しの焼ソバの皿の箸のように、縄の中に、もぐっている。

責めの小道具に至っては、今やその役目を完全に果たしてしまつて、ボロ布のように打ち捨てられている。

ああ、つわものどもの夢のあと——か。

「私だったら、いいのよ。一食ぐらい抜いたって……」とは、なんと、泣かす言葉であろうか。寒さにも強ければ、暑さにも強い。そして空腹にも強い——とは全く恐れいっ





私は、このサービス精神旺盛な千鶴子を、軽々と抱えあげて、ベッドルームの方へと運んでいって、スプリングのよくきく蒲団の上へ仰向けに放り投げていた。

「今日は、お写真、沢山撮ったのネ」

千鶴子は写真撮影が順調に進展したのを、心から喜んでくれた。

そこは、なにか、Sの心とMの心の触れ合うものを鋭敏に感じとっていた。

私が一言、「もっと撮りたい」と言えば、今すぐにでもその裸身をきびしい縄にゆだねて、レンズに晒そうとする千鶴子——。

だが、私はもう、カメラを操作することには、飽きていた。一本の白い縄を手にながら、ベッドに裸身をながらえている千鶴子の方へ近づいて行った。

さすがに日が暮れてしまうと寂かである。冷房も、気のせいかな、よく効いてきた。

「今度は、いつ逢えるの？」

「そうね、七月いっぱいはお仕事がつまっていた、とても駄目なの。それに、八月の中頃までは旅行することになってるの。だから、八月の末頃だったら、どう？ 一度、東京まで、いらっしゃらない？ 私、車でご案内するわ」

「旅行って、どこへ？」

「北海道へ行くの。夏の北海道っていいわ。空も花も綺麗だし、それに景色が雄大で、とても、私、気に入ってるの」

「キミと一緒に北海道へでも、どこへでも旅行出来れば楽しいだろうけど。とにかく、八月の終わりまでは、お預けっていう、わけだね」

「ええ、残念ながら——。私、またお電話しますわ」

次に、鈴木千鶴子と逢うときは、またどのようなSMプレイが展開することか。そのときは、再びレポートを書かせて頂きたいと思う。

連載・奴隷妻小説

命預けます

△式の章 ロマンチック・ボンデージ▽

カット・小川 茂正



5 嗜虐の夜の物語

新吉と春子との巡り合いは、彼等夫婦と浩介との出会いより以上に奇縁であった。

戦後の混乱期に、郷里での平凡な生活に飽き足らず、家の者の制止をも聞かずに上京した年若い新吉。その新吉が頼った先は、同郷浜松出身の先輩の家であった。この先輩は、当時、新宿を根城に持つ新興やくざの兄貴分として、売り出しかけている男であった。その男が、こうした渡世人である事を、彼が事前に承知していたなら、きっと世話にはなら

柴 利 好

なかっただろう。従って、その後の新吉の運命も随分、変わっていたであろうとは、彼が後に告白した言葉である。

それでも彼は、現在まで辿って来た自分の過去に対して決して後悔はしていなかった。否、寧ろ、それ故にこそ、その結果として彼と妻春子との悦虐の世界を築く事が出来たのを幸せに思い、運命の女神に、心から感謝を捧げていると、いい足す事も忘れなかった。

小柄だが敏捷で苦味走った風貌を持つ新吉が、新しく踏み込んだ、この社会で認められるのには、さして時日を要しなかった。上京後、数年ならずして「良い若い者」に育った新吉は、その組のシマの界限では顔利きになっていた。

それは、ある冬の一夜であった。一時の享楽を求めて彼は赤線で行きつけの「お玉」という店に立ち寄ったが、生憎と混み合っていて、お目当ての馴染み相手に会えなかった。

店の女将は、相手悪しと頻りに謝って、「生憎こんなにたて混んでしまつて。何せ、ご覧の様な始末でしょう。ハナからお見えになるのが分かっていれば、何とかしましたものを。ああそうそう。実はこれは極く内証の話なんですけど、直ぐ裏手に懇意な家がある

んですよ。若しおよろしければ、ご案内させて戴きますわ。その代り、ウントコサ埋め合わせさせますわよ」

と精一杯の笑顔を見せられては、女将の顔も立てねばならない彼の立場でもあった。女将に付いて這入った薄暗い路地奥に、一軒の古めかしい二階建の、しもた家があった。

「ちよいと、ご免なさいよ。お一人さん、お連れして来ましたから……」

低声で家内に呼び掛けると、新吉に、
「さあさ、どうぞ、ごゆるりと。ここであら表の店と違って落着いて遊べますわよ」

と、愛想笑いを残して戻って行った。

家内から出迎えたのは、痩せた中年過ぎの男であつたが、

「いらっしゃいませ。これはこれは、新吉兄さんじゃござんせんか。ようこそその、お運びで。それにしても、お珍しい……」

とペコペコして、彼を一間へ招じ入れた。

「一寸、遊ばして貰うぜ」

と粋がつてみせた新吉が、見回したその部屋は、どことなく陰気で、大きな火鉢にも火種は少なく、ウソ寒い気配に、ついゾツとして着物の襟を合わせる。

「お飲みものは何にいたしましたしょう」

と顔を出したのは、又ぞろ今の痩せ男だったのに、少し嫌気が差した新吉は、

「おい！ この家には女はいないのかい」

と口調が荒くなる。

「申し訳ござんせん。今夜は一寸、事情がありまして……。もう、しばらく、お待ち下さい。良い子呼びますから……」

この返事。要するに此所は、しもた屋を使つてのモグリ営業に相違ない。

「何でい。これから呼ぶのか。ふざけやがって！ さっき女将が落着いてどうかといつたのは、そんな事だったのかい」

と嫌味たらしくもなる新吉であつた。

「恐れ入りやす。お詫びのし様もござんせんが、今夜の処は一つ……何せ急なお出でだったもんですから。ですが、如何でしょう。実は一人良い子が居るには居るんですが。田舎から出て来たばかりで、馬鹿に強情な娘でして。昨日から口説いてゐるんですが、こちとらのテコに合いませんので、今一寸、痛めてやっている最中なんです。若しそれでもお氣がおありでしたら、物は試し、女が来ますまで覗いてご覧になりませんか」

と狡そうに小腰を屈めての話に、
「痛めてる？ 面白そうじゃないか。一寸、

覗いて見るか」

と不図、動いた新吉の心の奥底に、俄に好奇の焰が燃え始めた。

男について這入った奥の間は、初めの部屋より尚暗く汚い小部屋で、片辺に一間の押入れがある。その押入れの中でゴトゴト音がするのを、いぶかる間もなく、男に引き出された一人の若い女。冬だというのに、白いズロース一つの裸に剥がれ、細引で後ろ手、高手小手に縛り上げられ、口には手拭いで猿ぐつわさえ嵌められている。

まるで荷物でも扱う邪険さで新吉の前に引き据えられたその女は、崩れた黒髪を前に垂らし、面を伏せて、新吉の目を逃がれようとするかの様に身体を振らせる。新吉に後ろを向けて横坐りになった女の背中で組み合わされた両の手首に嚴重に十文字に掛かった縛り縄が、如何にも痛々しかった。

「まあ一つ、見てやっておくんなさい。こうした女の様は、さしてお珍しくはありますまいが、一つのお慰みにはなりましょう。なんでしたら、このままで一つ、お賜り下さってもよろしいんですよ。では、何れ後程……」
といい残して男が去った後は、寒々と白けた空氣が漂う。

「一体全体、どうなってるんだい。ねえさん酷い目に合ってるじゃないか。さぞ苦しいだろう。第一、この寒空に裸じゃねえ」

と、いいながら新吉が近寄ると、女は一寸後ずさって僅かに顔を上げ、相手の様子を窺う風であったが、首を振り、猿ぐつわの下から

「ウウウッ！」

と呻く。

「可愛想に。さあ、取ってやるぜ」

と解いた手拭いは、意外と緩目だった。

「お客様！ 優しくして下さって有り難うございます。でも、この縄は解かないで、このままに置いて下さいまし」

「それはまた、どうして？」

「後でどんなに責められるか分かりませんもの。実は私、昨夜から、ずっとこうして押入れに閉じ込められて、もうクタクタです。本当に苦しくて、悲しくて堪まりませんの。でも、放つといて下さい。厭なことは厭なんです」

と再び面を伏せ、さも切なそうに縛られた上体を振る。両腕や乳房の辺りに喰い込んだ縄目の厳しさをを見ると、女の言葉は、まんざら嘘とも思われない。

「そうかい、分かったよ。そういう事なら、これ以上の手出しはしないさ」

若僧とはいえ、渡世人の新吉の事だから、女には不自由しなかった。こんな処で、ポット出娘に無理強いする気も起こらず、又、別段、深い考えもなく立ち去ろうとした。とはいうものの、現実には、うら若い女が、縛り上げられた無抵抗の裸身を、目のあたりに晒している煽情的光景を見ると、正直の話、やはり若い血が立ち騒ぐ新吉であった。

思わず去り兼ねて、もう一度、女の身体に近寄って、その様子を、つくづく見た彼の心に、不図一つの疑念が湧いた。というのは、細引の掛け方、縄目の結び方の一つ一つが、本当の折檻にしては、余りにも整い過ぎている様に思えたからである。

その上、現在、縄目を受けていない肌の上にも、幾筋かの縄痕が、僅かではあるが残っているではないか。その薄い縄目の跡を仔細に辿って見ると、これ又、余りにも整然として過ぎていて、全ての縄掛けが、実に丁寧に行なわれた事実を知る事が出来た。という事はこの女は全く無抵抗状態で縛られたに違いない。そうでなければ、女は力の限り暴れるだろうし、そうすれば、たとえ女の力でも、こ

んなに整然とした緊縛は、むつかしい筈である。それとも、女が折檻の途中で、気を失っている間に縄掛けされたものか。或は女を傷物にしたくない商売上の配慮から、特別慎重に扱われたのだろうか。

「ねえさん。お前さん、本当に昨夜から、こんな目に遭ってるのかい？」

「はい」

「この家で、こんな風に縛られた事は何回もあるのかい？」

「いいえ、今度が初めてです」

「一体どういう訳があるか知らないが、この縄は昨夜から縛られたなりなのかい？」

「はい、その通りです。でも、そんな事を何故、お聞きになりますの？」

「別に、どうという事はないさ。随分、長く縛られ通していらっしゃるから、可哀想になつたまでの話よ。それにしても、酷い仕打ちをするもんだねえ。でも仕方がないやねえ。出来るだけ素直になった方が、お前さんの身のためだぜ。それじゃ、ねえさん、気をつけてなあ。縁があったら又、会おうぜ」

こうして新吉は別の女の来るのを待たずにこの家を出ると、そのまま自分のアパートに帰って床に入った。が、先刻の事が気掛かり

になって、仲々寝つかれなかった。

女は明らかに嘘をついている。何故だろう？　そういえば、猿ぐつわだって、ゆる過ぎた。足の方は自由だったんだから、女がその気になれば、上体を縛られたままでも逃げ出せた筈ではないか……？

あれこれ考えると、ますます蟠りの雲が、むらむらと湧き起こって、彼は眠られぬ一夜を明かしたのであった。

6 縛られた女の美学

三日程経ってから新吉は、もう一度、例のしもた家に行ってみたくなった。女の話がどうであるにしても、何故か彼の心を捕えて放さない物が、そこにあったからである。

今度は「お玉」を経由することなく、直接に訪ねて行った。九時を少し回った頃だったが、先夜の男は不在の様子で、割合に上品な年増女が、前回と同じ座敷に彼を案内してくれた。が、その家の様子は以前同様、森閑として、人気ないものの様だった。

「旦那さんは、お初めてのお方でいらっしゃいましょうかしら？　おや、お玉さんからおみえで……さようでございますか。実は、今

夜は皆、遠出しておりまして、お生憎様でございます。でも、キズ物でよろしければ一人奥、に居るには居りますんですよ。それで、お間に合わせ戴けるんでしたら、どうぞお遊び下さいまし」

言葉使いは至って丁重だが、如何にも世間ずれたような女の振舞である。彼の方にも一思案があるので、

「いいって事よ。キズ物でも化物でも、女でありゃ構やしないさあ。物は試しというじゃないか」

と分別あり気に答えて、

「さあ、そのキズものの女ってえのは何処にいるんだい。二階かえ？」

と、わざと、とぼけてみせると、

「それじゃ、こちらへおいでなさいまし」

と連れられて行ったのは、案の定、先夜と同じ奥の間で、見覚えのある押入の唐紙の間からは、細引の端さえ、はみ出しているではないか。

「随分とまた殺風景な部屋じゃねえか。まさかこんな処で……」

と新吉が大仰に驚いてみせる。

「汚い部屋で申し訳ございません。でも、此所では一先ず、ご覧願うだけでして……」

新吉の思惑を露知らぬ年増女は、さも、したり顔に唐紙を引き開けると、中に閉じ込められていた一人の女を引き出す。先夜と全く同様、ズロース一つに剥がれた若い女が、矢張り細引で後ろ手に縛られて、オズオズした風情よろしく、新吉の前に現われ出た。が、ふと出合った新吉の目に、件の女は思わずハッとなった様子で、さっと顔を伏せてしまった。今夜は猿ぐつわは嵌められてはいない。その女こそ、正しく新吉の予想していた先夜の女なのであった。

「さあさあ、お前。いつまでも、こんなにしていれば、それで済むと思ってるのかい？」

いい加減に白状した方が身のためだよ。手癖が悪いのは一つの病気だそうだけれど……この辺で懲りそうなものだけれどねえ。それとも、まだ強情を張り通すつもりかえ？」

芝居気たっぷりに語気も鋭く、引き据えた女に詰め寄る年増の姿は、あっぱれな名演技であった。

「おかあさん！　待って。皆、私が致しました。今後は、もう二度としませんから、今度ばかりは勘忍して下さい」

「へえ。そうなのかい。だいぶ懲りたと見えるねえ。それじゃ、お仕置はこの位にして勘

弁して置こうかねえ。まあ良かったこと。これで私もお客様に顔が立つよ……。お客様。如何でしょう？ こんな娘でよろしゅうござんしたら、お遊び下さいませよ。何ですか大変、気むらな女でして、根っから悪い女じゃないんですけど、時々病氣が出るもんですから、ついこんな風にして、お仕置していた処で……」

「分かったよ。いいともさ。だいたい俺は、無慈悲なことは大嫌いなんだ。それに、こんなに謝まってることだし、兎に角、縄を解いてやりなよ。万事はその上の事だあな」

「はいはい、承知致しました。お若いに似合わず、お情け深いお方ですわねえ。早速、許してやりましょうとも……。まあ！ なんて固く締まってるんだらう、この縄は。まるきり解けやしないよ」

「よしよし。おかみさん、退きな。俺が解いてやるから……」

新吉が、そういつて年増と入れ替わって女の後ろに回った。潮時良しとばかり年増が、そそくさと奥へ消えて行くのを、件の女は見届けると、

「お客様。ご免なさい、お手数掛けて」

と、謝る。流石に後ろめたいのか、又もや

項垂れたままで面を上げようともせず、恥かしそうにしている様子の内には、照れ隠しのふてぶてしさは見られなかった。

「おい、ねえさんよお。先夜とは大分、話が違うじゃないか。フッフ……。この前、お前さんの縛られ方を見た時、随分と厳しい縄目に驚いたんだが、縄目が余り立派過ぎるんで、こいつはおかしいと睨んでいたんだが、お仕置の口実が、こうちよいちよい変わっちゃあ、さぞ芝居も、やりづらからうなあ」

新吉の皮肉たっぷりの言葉に、女は漸く顔を上げて、

「お客様、許して下さい。私だってあの晩、お縄について尋ねられた時、お芝居がバレてしまったと薄々察しがつきました。けれど、どうする事も出来なくて。今夜、男衆の松さんさえ居てくれれば、二度までも、こんなに恥かしい思いをせずに済みましたのに。本当に申し訳ございませんでした。私だって、お店の言いつけ通りに、こんな態で毎日、閉じ込められては、物好きなお客様のお相手をさせられているんですのよ。分かって下さいまし。お許し下さいまし」

と重ねて謝まった。高手縄は解けたが、まだ手首は縛られたなりの哀れな姿で、素直に

詫び入る女の言葉を聞いて、思わず不憫を感じた新吉なのであった。

「まあ、いいやな。勤めの身とはいえ、ご苦労な事だねえ。それにしても、これは全く固く縛ったもんだな。二の腕が、こんなに赤く窪んでしまつてさあ。痛かつただろう？」

と労わる新吉の心には、嘘で男の情慾を誘う、この女への憎しみは微塵もなかった。それ程に、まだまだ純真さを失ってはいない男なのであった。

若い新吉には、この女の年令を正確に当てるだけの力柄はなかったが、彼女が二十才を幾つか過ぎていくように思えた。そうとすれば、彼より二つか三つ年上に当たるのだけでも、そうした年令差を超越して、彼は彼女が何処となく氣に入ってしまった。世の中に男女の縁ほど面白くて不思議なものはない。やくざ渡世に足を踏み入れたこの男と、賤業の淵に身を沈めて、汚れ汚れたこの女とが、やがて相結ばれて、一つ世帯を持つようになるうとは、この時には神ならぬ身のお互に知る由もなかったのである。

新吉は今まで「お玉」で馴染んだ女とはキツパリと縁を切ってしまった。それほど彼女を好きになったのである。引き続いて、この

家を訪れるたびに新吉はいつも、その家の奥の一間の押入の中で裸で縛られている彼女を見出した。他の女が顔を見せないのも道理。実際は、この家に居る専属女は彼女一人で、他の女達は、夫々の持場で夜毎の網を張っていて、粋客をこの家に連れ込んで一稼ぎする仕組になっていた。彼女達とは別に呼び込み

専門の女もいて、この家まで誘って来た客を他の女達にバトン・タッチすることも行なわれた。時には、そのおこぼれに彼女が預かる事もあったらしいが、彼女の本務は所謂S・Mの世界に客を誘惑する道具として囲われている事が、何回かの訪問によって新吉にも分かって来た。



イメージギャラリー

『危険な悦楽』

志羽利也

免に角、こうした商売の間でも競争が激しいから、何か珍趣向がないと他に客を持って行かれる。そこで「お玉」の経営者の発案でこの裏の家とが共同して、こうした新規の企画を始めたのだが、それも決して独創的なものではなく、関西方面から取って来たお手本に、幾らか焼き直しをしたものらしいとの噂であった。この計画が発表された時、

「計画としては面白いかも知れないわねえ」と一応は賛同した女もあるにはあったけれども、縛られ通して客を待つ事は嫌がった。それでも一人、やんちゃな女が勇敢に引き受けて、実際に裏の家に出向いて勤めて見た事があったが、その苦痛が意外に激しいので、一晩で懲りて泣いて帰って来てしまったという話である。

そんな訳で、折角のS・M的趣向も、実際に誘拐して来た田舎娘を縛り上げて、本当に折檻する様な機会でもない限り、実現不可能な計画倒れに終わるかに見えた。丁度その時件の女、春子が同業の筋を通じて「お玉」に流れて来たのであった。新しいこの職場で、奴隷同様の、この勤めをやってみる気はないかと聞かれた時、彼女は二つ返事で平然とそれを承諾したのは、店の者達も、いささか

呆れ顔だったという。

それは端目から見れば、ボロ布同様に汚れ切った身を、流れ流れて辿り着いたばかりの哀れな女が、詮方なく引き受けた、生きるための方便として理解したかも知れない。しかし彼女にとっては、それも一理には相違なく、過去に於いて余りにも数奇な運命に弄ばれ、既にM化していた彼女なればこそその決意なのであった。

その時以来、春子はこの家で、年中殆ど休みなく縛られて暮らす身となった。もっとも一日中、縛られ通している訳ではない。毎晩粹客がやって来る、八時過ぎ頃から始めて、一応、盛り場の灯が消え歓楽の夜が更けて行く時刻まで縛りあげられて、客を待つのである。それも初めの内は、単衣とか長襦袢、或はシュミーズなどを着た上から縄を受けていたが、結局、縛り始めの時から裸のまま勝負する様になった。

緊縛そのものも、お客の顔を見てから縄打たれていたものが、それでは縛るのに時間が掛かり、その緊縛の内容も、兎角、月並になり勝ちなので面白さが足りない。それで、なるべく真に迫った演技でお客の心をつかむ様にとの店側の要求から、お客があってもなく

でも縛られ続けている方針に変わったのである。

縛り方も、如何にも素人臭い下手な縄目にして置く事もあったが、所詮S・Mを好む様な客の事故、大部分が実際には緊縛に飢えた者達だったので、勢い本格的に縛り上げざるを得なくなった。女を全裸とせずズロース一枚を穿かせたのは、一つには緊急事態に対応する配慮もあったが、最後の物として何か一つ位は身に付けさせて置いた方が、客を楽しませるという事が分かったからであった。つまりズロース一枚でも客が自分で取り除く様にし向け方が喜ばれるという狡猾なサービスなのである。

それも、ズロースの腰ゴムと裾ゴムは、特に太目の弾力の強い物を選んで嵌めた。それはズロースを脱がすのに一骨折らせた上、脱がせた後、そのキツイゴムで赤くくびれた肌が、客のS・M的情欲を刺戟するのを計算に入れての事だった。面白いのは、その粹客の中には女客も時偶、混じっていた事であった。

ところで縛り手というのは、新吉がこの家で初めて会った男衆であった。「松さん」と呼ばれるこの男は、戦前の特高上がりだった

ものが、世の中が変わって彼自身の職も一変し、当時は、この店とか、界限の用心棒を兼ねての、その筋との連絡係なのであった。いわば、この男が緊縛や折檻に掛けての本職上がりだったからこそ、春子の受けた縄目が本式の縄法に則し、その締め味や、縛り加減もツボに嵌まっていた、素人が縛り目を解こうとしてテコ摺ったのも道理なのであった。

春子は、このようにして勤めた三年ばかりの歳月の間に、この本職の手に掛かって徹底した縄目を受けた事によって緊縛という被虐の世界に完全に耽溺し切ってしまった。揚句の果て、その、おぞましい悦虐の境涯から再び浮かび上がる事の出来ない女にまで身心共に飼育され尽してしまっただけである。

一方、新吉はといえば、元来S・Mに特別の関心があった訳でもなかった。それ故、春子とその家で働いている時分さえも、彼自身から進んで責め遊びをした事はただの一度もなかった。それにも拘らず引き続いて彼女のもとに足繁く通いつめたというのは、少なくとも最初の内は春子自身、つまり彼女の容貌、肉体、声音、言葉遣いから立居振舞に至るまで全てのものが彼の好みに合致し、心を捕えて離さなかったからである。

しかしながら、繁々通い続ける内に、この新吉の心にも次第に微妙な変化が現われ始めた。彼女が裸で縛り上げられている哀れな姿を毎々見慣れ、それを愛し続けていると、彼女がこの様にして縛られている事が、何等不自然に感じられなくなって来た。縛られている事が彼女の生活そのものであり、従って縄目なしの彼女の存在などを考えられない錯覚に陥るのであった。

何回か通う内、新吉は、嚴重に縛られている女の縄を解くのが何だか惜しい様な気がする時もあった。初めは階下の奥の間で縄を解き、着物を着せてから上がった二階座敷だったが、その内に女を縄付のまま上に連れて上がる様になった。いつしか彼は、高手小手に縛られた素裸の春子の縄を解こうとはせず縄尻を持ったまま、罪人の引き回しよろしく廊下を伝い階段を昇って、二階の一間に行くのが習慣になったのである。

新吉の来訪を彼女に告げるおかみに、「春ちゃん。お待ちかねの、お引き回しの旦那がお見えだよ。精々サービスすることね」と冷やかされると、彼女は

「まあ嬉しいこと！」
と心から喜ぶ様になった。それは縛られた

ままで引き回しを受ける嗜虐の楽しさもさる事ながら、彼女はこの時、既に新吉その人を心秘かに愛し始めていたからであった。新吉に会える約束の日には、縛り手の「松さん」に向かつて

「ねえ。今夜は、あの方と、お約束の日なのよ。だから、いつもより余計、縄数を増やして、うんとキツク縛り上げて下さいな」

と、頬を赤らめながら、一層厳しい縄目をせがむ程、彼女の気構えからして格段の相違があった。

嚴重な本縄を素肌を受けて、縄目の悦虐に酔い痴れている春子の肌は、いつも氷の様に冷たかった。新吉が撫で擦する肌と縄目の間には、指一本も差し込めないまで厳しく縛り上げられている事も屢々であった。乳房の下に細引を掛けられ、腋の方までも縄目を回して縛られているために、反って形良く丸々と盛り上がった豊かな乳房。

「この寒空に、裸でいて寒くないのかい？
こんなに身体が冷たくなってるよ」

「いいえ、ちっとも。こうして縛られていると、意外と身内は温かいものなの。それに、お引き回しが嬉しくって……」

無邪気に答える彼女を尚更、愛しくなって

新吉は、縄付きのままの女体に、いい知れない愛情を感じさせられるのであった。

「ああ。私、仕合せよ。このままで、いつまでも縛られていたいわ！ もっとキツク抱いて。もっと！ もっとキツク！」

新吉の太い腕の中で、悶える様に身を打ち振るわせながら、随喜の涙に、むせぶ春子のその喜びは、勿論本来の性の喜びであった。

それと同時に、悦虐嗜好の満足感に対する喜びでもあった。そしてこれらが、やがては真心から、この新吉という一人の男に愛される心の喜びにまで成長して行ったのである。

当時二十三才になっていた春子には、多くの過去があった。しかも、それらの過去は、不幸にも彼女にとって全てが苦しく、辛い記憶の累積でしかなかった。もとよりその間に多数の男達の野獣の様な暴力のために、肉体は汚され切っていた。

やっこの思いで辿りついた、東京は新宿の片隅で、引き続いて仕合せ薄い毎日を過ごしていた彼女に、漸く本格的にS・Mの世界が開花し始めたその時、彼新吉が彼女の前に現われた訳であった。それは彼女が「お玉」に来て三年目の事になる。この純心な男の真心を知った時、彼女は心底から嬉し泣きに泣い

た。それは彼女が、この時、初めて本当の恋というものを、肉体的快樂の外にある魂の喜びを味わったからである。

7 緊縛こそ我が命

幾つかの障害を乗り越えて、やがて二人はアパートの一室に愛の巢を営む様になった。それを機に、春子はその家を辞めた。不幸な運命に弄ばれた者程、まっとうな生活を希求する心が強いものである。彼女とても、その例外ではなかった。

世帯を持って、何とか人並みの生活に這入って見ると、彼女は、愛する夫が、やくざでいる事を一日も早く止めて欲しいと願うようになった。それは、そういう社会そのものを買わしく思うのも、さる事ながら、常に暴力に明け暮れ、身体を張って生きている夫の身の上を、ひたすらに案じる純愛の現われに外ならなかった。

新吉にしても、元来が進んで這入った組織ではないのだから、決して現状に満足し切っていた訳ではなかった。それで、出来よう事なら、自分の新生面を開拓したいと本心から希望しているのを知った春子は、夫がこの渡

世から離れる事が出来るのだったら、どんな苦勞も厭わない。前の家に出て働いても構わないとまで、一途に思いつめ、彼を、かき口説いた。

折も折、都内の暴力取締まりが一層、厳しく行なわれ始めた。新吉の所属した組織は、その名前こそ少しは通っていたが、それに抵抗するには余りにも弱小であった。時世に即応して、組織は退け際も潔く解散し、その輩下も、それぞれに四散して行った。

新吉は生まれつき器用で、多少の絵心があったので、旧仲間や理解ある関係者の計らいで、同じ界隈にあるストリップ小屋の裏方として働く事になった。

愛する夫が、彼女の念願通り新生活に踏み入れられた事がどんなに春子を喜ばせたことか。いつもは割合、口実が少なく、それは教養の少ない女の悲しさ。自分のその心からの喜びを、巧みに夫に表現する術を知らない彼女であっただけに、如何にも浮き浮きした日常の立居振舞の中に、彼女の欲喜が溢れている様であった。

新吉夫婦が営んだ愛の巢は新吉がそれまで借りていた柏木のアパートの一室であった。それは木造二階建の安普請で、その二階の西

側に面した狭くて汚い部屋であった。それでも、新吉が独り身で暮っていた頃の殺風景さに較べると、これといった世帯道具が増えた訳でもないのに、女気のあるなしで、部屋全体の雰囲気、すっかり変わった。安物ながら春子が女心を込めて掛け替えた花模様の窓掛けにしても壁際に吊られた彼女の赤い着物一つを見ても、部屋全体が艶めかしく感じられ、晴れ晴れと明るくなった。

夕焼富士が美しい一刻。窓辺に独り倚って留守居の春子は小さな幸福感に胸膨らませながら、

『これが仕合わせというものなんだわ。もう絶対にこの仕合わせは放しはしない。新吉さん、愛していますわ。何処までも何時までも死んでも貴方を愛し続けます。私は貴方のものよ。貴方に私の全てを捧げ尽します！』

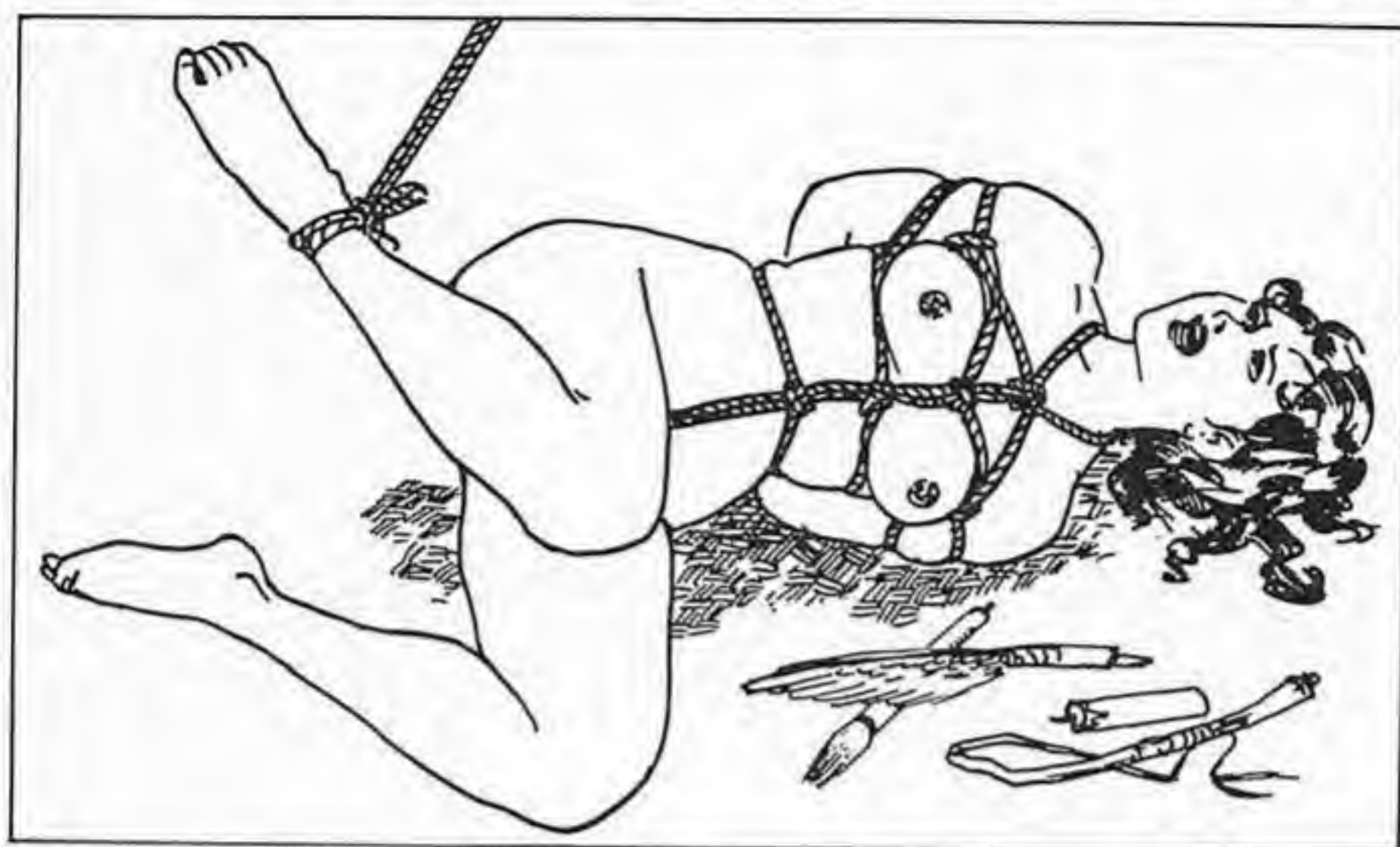
と、固く心に誓うのであった。が、

『でも、でもどうすれば良いの？』

一つの困惑が、彼女の心を曇らせた。

『この私に何が出来るっていうの？ 貴方に尽したい。貴方を喜ばせて上げたいと、どんなに心で思っても、現在の私に一体、何が出来るっていうの？ ただ、お洗濯とお掃除だけ。お料理もお裁縫も出来ないし、女らしい

-----イメージギャラリー-----『羞悦開始』-----須 坂 旭-----



仕事は、私には、まるっきり駄目なんだわ』
我れと我が身に問い掛けて、豊かな胸を両
手で抱き締めながら、尚も彼女は果てしない

悩みに身を揉み続ける。

『赤ちゃんが欲しいわ！ 私が新吉さんの赤
ちゃんを産める身体だったら。ああ、私には
それも出来ない！』

犯され、汚されて、もう何年の年月に
なるのか。彼女は、子供を産めない身体
になっている我が身の上の不幸を呪って
独り、眼頭を押さえ、忍び泣くのであつ
た。

この時である。不図、彼女は自分の両
手首に今尚、消えないまま薄茶色に残る
縄の条痕を見たのだ。その刹那、彼女な
りの一つの思案が、絶望に打ちひしがれ
た無智な女の脳裡に、稲妻のように閃い
たのであった。

「そうだわ！ これしかないんだわ！」

まるで一大発見でもしたかの様に、急
に目を輝かせると、彼女は急いで窓を閉
ざして、壁に吊るされた小さな掛け鏡の
前に立った。そして着ていた水浅黄色の
ワンピースの両肩を脱ぎ、ブラジャーを
も外して上体を裸にすると、鏡の中の自
分の肉体を、つくづくと映し眺めた。そ
の肉体には、乳房の上下やら、括れたウ
エストの辺りにまでも、未だに消えるこ

とのない被虐の記念としての縄痕が、柔肌深
く刻みつけられているのである。

『私は、私を愛して下さるお方に、そのお返
しをしなければならぬわ。今の私に直ぐ出
来る事と云ったら、縛られて愛撫される事し
かないのよ！』

この春子の一大発見こそ、新吉夫妻の一生
を通じて変わらない、愛の方向を決定づけた
ものであった。それは、他人には窺い知れな
い妖美の世界へ、彼等夫婦が踏み入れる契機
となったのである。

その夜、彼女はこの重大な決心を、心臆せ
ず、素直に新吉に打ち明けた。この事が、新
吉の春子に対する恋情を、増強しに燃え滾ら
せた事は、いうまでもなかった。

「新吉さん。私は貴方に救って戴きました。

そして汚れ切っている身体にも拘らず、貴方
の妻になる仕合わせを与えられました。この
仕合せに対する貴方へのお返しとして、それ
から貴方を真心から愛している証として、貴
方のお手でお縄を戴きたいのです。それから
そうされる事が、赤ちゃんを産めない私の、
貴方に対する、せめてもの罪滅ぼしになると
信じます。私がお店に居た時でさえも、貴方
は縄目を解きこすすれ、ご自分で私をお縛り

になった事は一度もありませんでしたわ。それは貴方がお心の優しい方だからなのを良く存じています。それでも貴方はいつも、この私が縛られて、責め折檻を受けている身体を愛して下さいましたわねえ。お願いですから私をいつまでもお店に居たあの時と同様に、愛し続けて下さいまし。私を愛して愛して、決して棄てたりなんかさないで下さい。

私は貴方の愛の代償として、一生、貴方に縛られて暮したいと思います。若しも貴方がお望みになるのであれば、奴隷にでも何でもなりますわ。どうぞ、お願いです。貴方のお手で、私に縄打って下さいまし。私を心底、愛して下さいましたら、その証としての貴方の愛のお縄を戴きたいのです。お慈悲でございます。私をお縛り下さいまし」

新吉の前に正坐して、深く首を垂れ、普段の口下手に似ず一息に、いい終わった春子は両腕を背後に回して、手首を重ねて十文字に合わせた。その手には、何時の間に用意したのか、一束の細引さえ、しっかりと握り締めているのであった。

突然のこの申し出に聊か面喰らった新吉は「まあ、お待ちよ。いきなり、そんな事いわれたって、どうしようもないぜ」

とはいふものの、つい先頃まであの家で、縄目を全身に受けて括れに括れた春子の豊麗な白い肉体に馴れ親しんだ、あの甘美な記憶が直ちに彼の脳裡に甦って来た。しかし、それを何とか落着いて彼は、

「兎に角、何だなあ。奴隷だとか何とかは少し穏やかじゃないねえ。俺達二人は、これくらいいつまでも、一緒に愛し合って暮して行くんだらう？ 何も慌てる事なんかありゃない。余り深刻に色々と思ひ詰めない方が良くんじゃないかなあ。そうは思わないか？」

と、一応は分別あり氣にいい聞かせはしたものの、矢張り男として、夫として、これ程までに一身を投げうって彼に尽そうとする、健気な妻の告白を聞いては、勢い感動せざるを得ない。

「よく分かったよ、春子。俺だってお前なしでは生きて行けない程に、お前を愛してるんだよ。それはお前だって良く知ってるじゃないか。何で棄てたりなんかするものか。仮にお前が俺に愛想をつかして、俺の処から逃げようたって左様はさせないよ。子供が出来ない事位、先刻承知の助さ。お前は俺のものだ。俺だけのものなんだ。誰が放すもんか。雁字搦めに縛り上げて、絶体に逃がしはしな

いさ。そんなにお前が望むのだったら、縛って上げようとも。さあ！ それじゃあ直ぐ掛かろうじゃないか。裸になりなよ」

と幾分、昂奮氣味にいうと、春子は喜んで「有り難うございます。縛って下さいますのねえ。私、裸で貴方に、縛ってもらえますのね。嬉しい！」

と上ずった声で叫ぶが早い、彼女はワンピースの肩を脱いで、腰から下に、ずり下げると同時に、その手でズロースも一緒にクルリと脱ぎ棄てる。そして胸に残ったブラジャーを外し終わると、両手を元の様に後ろに組んで、かしこまり、

「早く縛って！ 早くお縄を頂戴！」

と早くも悦虐の情念に燃え立つ春子の様子を、新吉は益々愛しい奴と眺め下ろしながら「ま、待てよ。そう慌てるんじゃないといたろう。窓のカーテンを引いてからにしようよ。それから表戸の鍵だって掛けなきゃあねえ。そうだろう？」

とニヤニヤ笑いを浮かべて、それでも、いそいそと動き回るだけの冷静さが残っていたのは、流石に彼も男であった。

細引の束をとって、ゆっくり解きはぐしながら

「この縄は、お前の物かい？ お前が、いつも縛られていた例の物と違うかい？」

と尋ねる新吉を見上げて、さも嬉しそうに春子は答えた。

「はい、そうですわ。お店を辞める時、松さんが記念に持って行くようになって……。それで柳行李を括って持って来たんですわ」

先刻よりは幾分、落ち着きを取り戻した彼女は、続けて

「松さんは、本当に縛り上手な人でしたわ」と懐かしそうに目を細める。

「そうだろうさ。何せ人を縛る事が本職だったんだからなあ。ところで、俺は未だ人を縛った事がないから、お前の氣に入るかどうか分からないが、兎に角やってみようぜ。とても松さんの様には縛れっこないが、初めての事だから辛抱しておくれよ。俺だってこれから一生懸命、勉強して、お前の満足行くように、きつと旨くなつて見せるからね。さて、どんな風にするかなあ」

すかさず春子は、

「それじゃあ、勝手いって申し訳ありませんけど、後ろ手の高手小手にして下さいな。私これが、一番好きな縛られ方なんですものと、早くも甘えるのであった。

六ートルに余るその細引は、初めて縄を扱ふ新吉の手には仲々負えなかった。それでも春子がいつも、あの家で縛られていた有り様を、あれこれ思い出しては、長いこと掛かって、彼女の希望通り何とか縛り終えた時、彼は汗びっしょりになってしまった。無理もない。折柄、晩春の夕風時。ただでさえ生暖かいのに、狭い部屋中、閉め切つて、裸女緊縛という慣れない作業に骨折つたのだから。

縛り上げられた春子は、うっとりとした目を見据えて、

「ああ！ 私、貴方に縛られましたのねえ。初めてお受けするお縄ですのねえ！ 私、嬉しくて、嬉しくて！」

そういうながら、遂に感極つて泣きじゃくり始めたのである。春子のその熱い涙が、ホノリ上気した形良い両頬を伝って流れ落ち豊かな胸元をヒシヒシと締め上げている横縄に溜まって、しつとりと濡らして行つた。

8 奴隷妻愛慕

「やあ。大分、昔話に身が入ってしまった様です。やれやれ、随分と陽が陰つて来ましたねえ。こりゃあ、いけないや。奴隷の奴、さ

ぞ待ちくたびれている事でしょう。そろそろ許してやらないと、こちらが晩飯にありつけませんからねえ」

新吉はそういうと、笑いながらツツと立つて押入牢の前に行き、中の様子を覗き込む。春子は可愛想に、首輪を牢格子に固く繋がれグツタリと格子に寄せ掛けた裸身を、不自然にくねらせた以前のままの姿勢で、忍び泣きに泣いていた。

「あまりお前の奴隷振りが良いんで、奴隷時間を延長してやったんだよ。でも今日は、よく頑張ったなあ。さあ出ませい！」

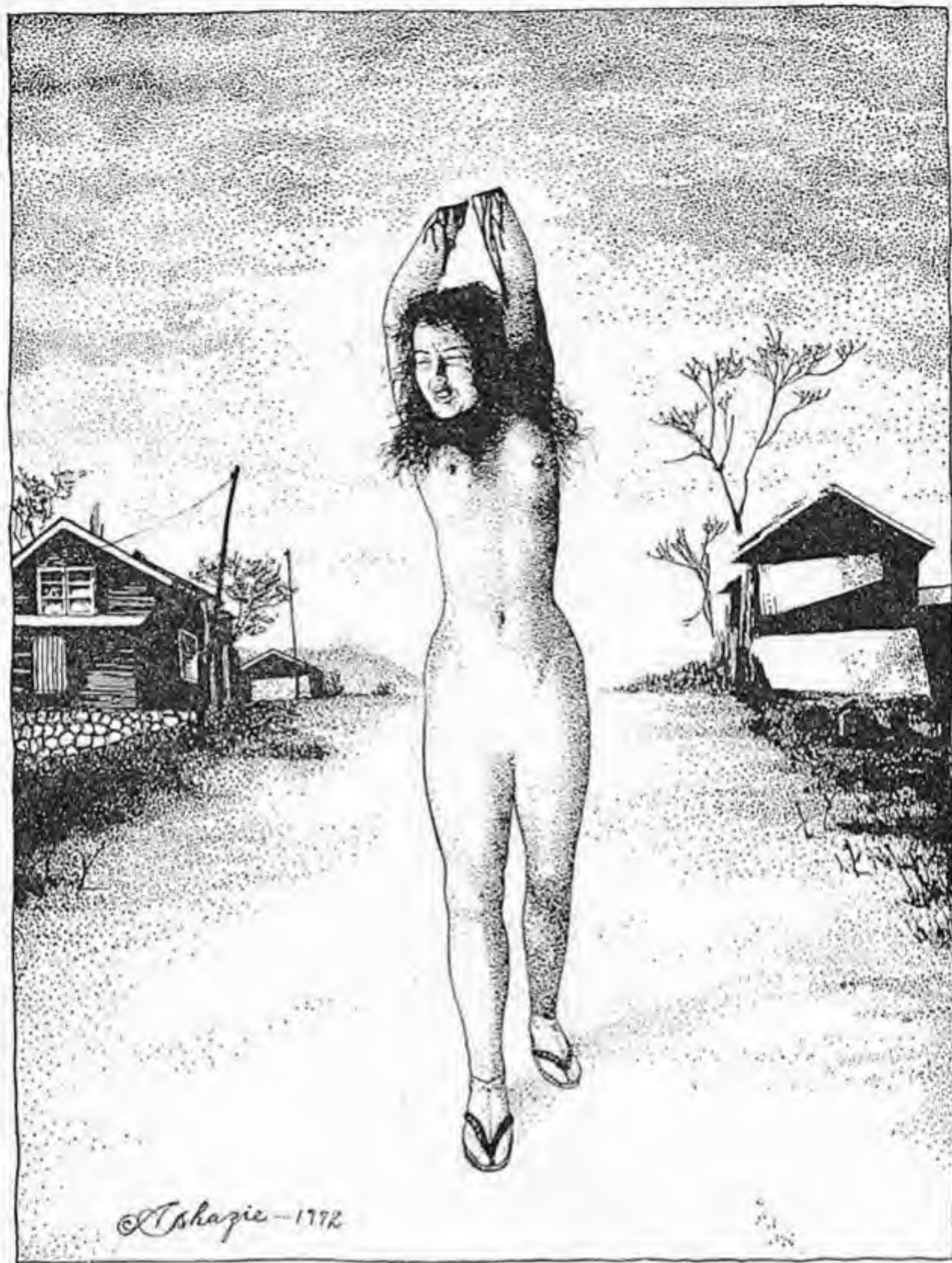
南京錠を開け、鎖を解き放つてから牢格子を開く。既に身体中が痺れ切っていたのだらう、新吉に鎖を手繰られると、春子は身体の重心を保つ事が出来ず、廊下に転がり出て来た。カチカチという鍵音と共に、細頸や手足の枷が全て外され、漸く何時間振りかたで自由の身に帰れた春子だったが、直ぐには身体を動かす事も出来ないらしく、そのまま廊下の片隅に身を横たえて、活動力の回復を待たなければならぬ様子である。その間でも、彼女のウエストを細くくびった胴鎖だけは外す事を許されないのであった。

首や手足の縛しめが外された事が、奴隷時

僕のイメージ画集

『関谷富佐子慟哭の図』

室井亜砂路



間終了の宣告になっていた。春子は暫くの休息の後、元気を取り戻し、ゆっくり起き上がると横坐りになって、初めて口をきいた。

「酷いわ、酷いわ！ 奴隷時間の延長だなん

ておっしゃって。貴方ったら、本当は私の事なんか、すっかり忘れておしまいになってたんでしょ？ お怨みですわ！」

と半ば涙声でいったものの、その実、口程

には怨んでいる様子は勿論なくて、僅かに下俯向いて口元に笑みを洩らす彼女の姿は、端目にも、いじらしく浩介には思われた。それにしても浩介は、初めて聞いた彼女の声音の美しさに、うっとり聞き惚れてしまった。

「済まない。その通りなんだよ。俺達の馴れ染めの話やら何やら、昔話が弾んで、つい長くなってしまったもんだから……」

と素直に謝まる新吉を制して、春子は曇る眼頭を押えながら、

「いいのよ。分かってますわ。私、お牢の中で、すっかり聞いておりましたもの。でも何ですわ。昔の私達の事を、本当に細々と覚えていて下さいますのねえ。それだけでも私、有り難いと思っておりますのよ。……それじゃ私、一寸、失礼させて戴いて、着物を着て参ります」

顔は上げないで、小腰を屈めると、両手で要所を隠しながら春子は、隣室に小走りに消えて行く。奴隷時間を終わった彼女は、漸く自由な人格が与えられて、一人の女として完全に尋常の振舞に戻ったのであった。

小ざっぱりした白い薄手のニットブラウスに黒のストラックスという服装で、再び浩介達の前に現われた春子は、裸体でいる時より、

すらりと着痩せして見えた。それは、その腰の異常な細さのせいなのかも知れない。彼女は部屋に戻って来ると、直ぐさま浩介に向かって改めて挨拶をし、奴隷時間中の失礼を丁寧にとびた。その上で、自分の舞台に何回も通って来て貰ったお礼を述べさえた程、礼儀を心得た女であった。彼女は

「お客様。お夕食、なさいますでしょうか？」

私マーケットまで行って参りますけど、何かお好みのご注文がお有りでしたら……」

と中腰になりかけて、主人に向かって問い掛ける。酷い奴隷時間を過ごして、今し方、やっと許されたばかりだというのに、もうすっかり世話女房に立ち戻って、何かと氣を使う春子は、その声音と同様に、真実、氣立ても優しさに違いない。

「そうだなあ。しかし、お前の腕前じゃあ、とても、こちらさんのお口には合うまいよ。いっそ外で食べようか。お前も良かったら、ご一緒しないか」

という新吉に、

「有り難とうございます。でも、何処ですの？ 駅前のこの前のお店でしたら、私、厭ですわ。あの時は、本当に恥かしくって」と、美しい眉根を寄せて答えると、浩介に

向かい、

「お客様の事ですから、何も彼もお話致しませんが、まあ聞いて下さいまし。私、この身なりの下で、身体中、縛られたままで、そのお店に連れて行かれましたのよ。手足は自由だったんですけど、胸元からお腹、腿の方まで、素肌に嚴重に縄打たれていましたので、どうしたって動作が不自然になりますでしょう？ それにブラウスはご覧の様に薄手ですので縄目が、はっきりと窪んで出てしまっているんですもの。お店の人達や回りのお客様達に怪しまれはしないかと、そればかりが氣になって、戴き物どころではありませんでしたわ。あんな惨めな思いをしたお店は、もう懲り懲り！」

と話す彼女の口元には、軽い微笑さえ浮かんでいる。果たして本当に厭がっているのかそれとも、その時の状況を思い出して楽しんでるのか分からない。

「こら、こいつめ！ 余計な話をするんじゃない。いつも口の固いお前らしくもないぜ。実は俺はこれから、その店に行く心算だったんだが、お前がそれほど厭というのなら、それも良からう。無理にとは、いわんよ。お前は家に残っておいで。その代り、不服従の罪

がどんなに重いかよく知っているだろうな。奴隷時間が解除になったばかりだといって、一寸、甘い顔を見せてやると直ぐ、つけ上がる。それが、お前の悪い癖だ。折角のお客様を前にして、主人の俺に恥をかかせた罰は覚悟して貰うよ。いいな！」

わざと凄んでみせる新吉に、春子も心得たもので、直ぐ、しおらしく首を竦めると、

「お許し下さい。これからは、よく注意しますから。でも今晚だけは、ご勘忍下さい。とても疲れていますから。今夜だけ、よく休ませて戴ければ、どんなに重いお仕置でもお受けします。どうか我がままを許して下さい！」

と、しなを作る。その艶姿の中には、M性を持った女の、飽く事のない悦虐陶醉への憧れが見られるのであった。

「よくいった。その覚悟が本当かどうか、試してみれば分かる事だ。——それじゃあ一寸出掛けて来るからな」

そういつて腰を上げた新吉に促されて、仕方なく浩介は、春子に後ろ髪を引かれる思いで、彼等の家を辞去したのであった。

やがて、連れ立って這入った駅前の小料理屋で、二人して盃を重ねる程に新吉は、妻の春子を口を極めて絶賛した。そして彼が如何

に彼女を熱愛しているかを浩介に、かき口説き、彼女こそが彼の生き甲斐である事、繰り返し強調して止まなかった。しかも、そんなにまで惚れ込んでいる彼女であるにも拘らずそれを一匹の奴隷妻として飼育し続けている我が身の因果を嘆いて、その揚句、ハラハラと涙を流すのであった。

浩介は、相手に差されるままに盃を乾しはしたけれども、こうした彼の意外の醉感を前にしては、到底、快く酔う気にはなれなかった。そして彼が、その日の午後には経験した思ひ掛けない事柄の、余りの異常さも、彼は酒に親しむだけの心の余裕を与えなかった一面の理由でもあったのである。

9 甘いお仕置

翌日の午後、浩介は再び牧山家を訪れた。昨日とは違って、招待された訳ではなかったが、彼には、春子の事が何故か気掛かりで、居ても立ってもいられなかったからである。

彼は一応、儀礼上、外から来意を告げたが返事はなく、玄関の戸も開かなかった。そこで生垣沿いに庭から縁先に回って、試みに廊下の硝子戸に手を掛けてみると、音もなく開

いた。障子の閉まった座敷の様子を窺ったが人氣は感じられない。

『本当に留守だったのか。無断で上がったかして悪い事をした』

と後悔しながら、何かしら反って安堵の胸を撫で下ろした浩介は、炬燵部屋から隣座敷に通ずる境の唐紙を引き開けてみた。その瞬間、彼の目に映ったのは、紛れもない春子の縛られた裸身であった。

玄関と座敷と台所を仕切る一本の柱。唐紙を片寄せ、片開きの戸を開け放てば直ちに得られる独立柱に、春子は裸にされ、正坐の姿勢で、細引で高手小手に縛りつけられていたのであった。

首繩に連結している高手繩が、胸から両腕に掛けて二筋ずつ、乳房の上・下に巻き締められ、胴鎖でくびれた細腰にも、別繩が三筋も掛かっている。それ等の細引は、全て身体の背面で、柱に嚴重に縛りつけてあった。両腕は柱を背負った恰好で背後に回され、両肘にも繩を回して一つに繋ぎ、手首は下向きに交叉して固く十文字に縛り上げてあった。更に肘繩は両脇を通して前に回し、鳩尾の辺で一締め締め上げてから縄尻を分け、両乳房の付根を二巻きも括り上げてある。そのために

丸々と膨張した二つの乳房は、さながらゴム毬の様にパンパンに張り切って見える。

脚部はと見ると、両腿の中程を一つに纏めて、三巻きして巻き締めた細引が腿の下に走って、正座のために見えない足首も一括して縛り上げられているらしい事が読み取れた。しかも驚いた事には、彼女の腰部には赤ん坊の様に襦袢を着けられていて、そのゴム製の襦袢の当たった下腹部からヒップに掛けても幾重にも細引が嚴重に喰い込んでいるのであった。これは当然、生理現象によって床や量りが汚されるのを防ぐ手段である事は浩介にも直ぐ分かったが、それと同時に、この彼女の緊縛が如何に長時間に及ぶ仕置であるかをも直感出来た。

矢張り案の定だったのだ。昨晚、浩介が、この家を辞した時、新吉が春子に、いい残して行ったあの言葉「その覚悟が本当かどうか試してみれば分かる事だ」といった一言が気掛かりで、又ぞろ、この家にやって来た彼の直感が、見事に当たっていたのであった。

「奥さん！ これは又、どうした事なんですか？ 例の奴隷時間とかいうヤツですか？」

と、浩介は、不意の無作法な侵入を詫びる事すら忘れて、いきなり無類な訊問を春子に

浴びせ掛ける。

猿ぐつわは嵌められていないので、自由に口をきける春子は、流石真面に浩介を見詰められない様子で、俯向き加減の伏眼顔のまま

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	四〇〇〇円(送32円)
三月分	3冊	一二〇〇〇円(送共)
半年分	6冊	二四〇〇〇円(送共)
一年分	12冊	四八〇〇〇円(送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れた方々という御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○六月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分三十二円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

「いいえ、奴隷時間ではございません。私、お仕置を受けて幸福感に浸っているんです」と、いつもの優しい声で割合平然と答えたのに彼は、いささか拍子抜けの態で言った。

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法ですから、必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料四三二円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に△本号にて前金切△の判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたしますから数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

「こんなにひどく縛られる事が、貴女には、そんなにまで幸福で楽しいんですか?」

「はい。おっしゃる通りなんです。私って変な女ですわねえ。さぞ馬鹿な女だと、思いでしょ。それが当たり前のお考えですわ。

でも私はもう、お縄なしでは暮せない女になってしまっているのです。主人は初めの内、

そんな気は皆目なかった様でしたけれど、私が無理矢理に、せがんで縛ってもらっている内に、近頃では、もうすっかり主人の方も、

お縛りに熱中する様になりました。変な夫婦とお笑いになるでしょう。けれど、これも運命というものでしょうか。私はきっと、そう

いう生まれ合わせなのですわ。今では私自身が、私は縛られるために生まれて来た女だと本気で思う様になっておりますもの」

「縛られるために生まれて来た女ですって? 真逆、そんな女が世の中にあるのですか。全体、何故なんですか。どうしてそうまで思

い込んでしまうようになったんですか?」

と訝かる浩介に対して春子は俯向いて、幾段にも縄目にくびれた自分の裸身を、心から愛おしむ様に眺めながら、彼女が辿って来た数奇な運命を、事細かに話し出したのであった。

連載・アブ紳士行状記

△宮下秀世の巻▽

(2)

M 派 交 友 録

(31)

鬼 山 絢 策

カット・岡たかし



れたので、宮下氏と会った時、それとなく話をもちかけたが、無口で話にのらない。そのうち宮下氏が、かつ子に虐められているという話を聞いた。宮下氏はプレーの時、自分は女になり、かつ子に男になってもらって責められるのを好むと言う。

最初は、なおみが宮下氏を責めていたのをかつ子に譲ったのだった。

はじめのうちは男の身なりのままで、女の言葉を使っていたのが、近頃は凝ってきて、島田まげのかつらをかぶり、長襦袢や赤い腰巻まで締めて、やるようになったと言う。

トリオブレイ

宮下氏はこの頃「プペ」に顔を見せない。かつ子の所の「姫」の方に行っているのだろう。

最初「プペ」のなおみから「宮下社長さんが、お近づきになりたいと言ってる」と言わ

その宮下氏から、なおみを通じて再度、私にプレーの仲間に加わらないかと言う申し出があった。宮下氏は極端な秘密主義で、プペで飲んでいる時は、みじんもMの気を見せない。私が話しかけても応じなかったのも、そのためだった。

男性マゾの中で性を転換するMがあることは前々から聞いていたが、現実につかるのは始めてで、私も大いに好奇心が動いた。

コンビからトリオのプレーと言うのは、それだけヴァリエティに富んでいて興味も刺激も強くなるのだが、変性男子と変性女子とのプレーというのはどんな風にやるのだろうか。

私は、なおみから相談を受けた時、

「そうだなあ、それは私より馬場君の方が適任じゃないかな」

「だって社長さんは、あなたを希望しているのよ。あなたはKクラブに小説や論文みたいの書いた事あるでしょ。あれ、社長さん、読

「うん、今度はね、いま、女の人がかぶっている現代風のが欲しいって言うのよ。だけど自分で買いに行くのは恥かしいから、あたしに買って来てくれって頼むのよ。ホテルのひと部屋借りて、そこで待っていて、私が持っていくんだからね。ホラ、ヒッチコックの『サイコ』って言う映画、見た？ あの中のアソニー・パーキンスが、自分と母親の二役、二重人格のやるでしょ。あの母親になった時のラストシーン。かつらをかむってお婆さんになってシナをつくり、ニヤリと笑うじゃない。アレ想い出して、気味悪くなっちゃったわ」

「うん、あなたはね、イヤなの？」
「イヤじゃないが——ともかく最初は彼の方が、いいと思うな。ママともプレーを経験済みだし、かつ子は男は誰だって問題じゃないだろう。どうせ、こういうことは一度で済むものじゃないから、私はあとから出るよ」
私は、かつ子という女には魅力を感じなかった。彼女とのプレーは、あまり好まなかった。

その話はそれで、しばらく途切れていた。しばらく振りで馬場氏と飲む機会ができたので、揃ってプペへ出かけた。

馬場氏にも宮下氏のプランを話したが、まだ、かつ子からも、なおみからも話はないということだった。

「ほんとに、あの社長さんときたら、凝り性なのよ。こないだは、かつらで苦労したわ」
なおみは馬場氏の薄い額のあたりにチラと目をやる。そこは馬場氏の気にしている部分だから、馬場氏に羞恥の色が出る。

「かつらって、例の島田のヤツかい」

「うん、今度はね、いま、女の人がかぶっている現代風のが欲しいって言うのよ。だけど自分で買いに行くのは恥かしいから、あたしに買って来てくれって頼むのよ。ホテルのひと部屋借りて、そこで待っていて、私が持っていくんだからね。ホラ、ヒッチコックの『サイコ』って言う映画、見た？ あの中のアソニー・パーキンスが、自分と母親の二役、二重人格のやるでしょ。あの母親になった時のラストシーン。かつらをかむとお婆さんになってシナをつくり、ニヤリと笑うじゃない。アレ想い出して、気味悪くなっちゃったわ」

「あの宮下氏の才槌頭じゃ大きくて、かつらがかぶれないだろう」

「そうでもないのよ。一番大きいサイズを選んだからね。女は髪の毛が多いでしょ。その上から、かぶるんだから、大きく出来てるのよ」

「アハハハ、そうか、なるほど」

「ブルネットのや黒いのや、ロングテールやウルフや、いろんなの、かぶってさ、かつら屋とホテルを何度も往復するんだからね。イヤンなっちゃうよ、ほんとに」

「で、どんなの、買ったの」

「黒のストレート。おかッパさんの、かつらよ。見られたもんじゃないわ」

確かに猪首で、いかり肩で、色のくろい、どちらかと言えば田舎の百姓みたいな宮下氏が女装した姿はグロテスクであろう。

「かつらをかぶったら、もう妾の足に抱きついて首突っ込んでくるんだからね。ルージュつけてるでしょ。パンティ汚されちゃ、かなわないから脱いだわよ。そしたら、どうしても飲ませてくれて、きかないのよ。フフ」
「で、飲ませてやったんですか」

馬場氏が話だけで昂奮気味に聞く。

「かわいそうだからね、立ったままでやったから着物へ流れちゃってね。汚ないわね」
馬場氏はゴクリと生唾を飲みこんだ。

覗きの智恵

かんばん近くなって、かつ子から電話がかかってきた。受けていた、なおみが、

「今晚、社長さん、かつ子と、やるそうよ。」

あの、かつらの、かぶり初めってわけね」

「一度、見学させてもらえないかね」

「そうね。かつ子に相談してごらんさい」

なおみは、かつ子に電話してくれた。私は一万円、見学料を払うからと、掛け合った。

「そうねえ、あの野郎、ふだん、えばってやがるくせに、この方となると、恥かしがり屋だからねえ。チャンと傍へ坐って見られるのは、いやがるでしょうねえ」

「どこか隠れて見られる所はないかねえ。そのホテル、和室なの」

「うん、着物着てやるから和室だと思うわ」

「じゃ押入れがあるだろう。押入れん中に入って見るってのは、どうかね」

「そうねえ、ふふふ、好きねえ、あんたも」

「いや、まじめな話だよ。だって、これから一緒にプレーするとすれば、どんな風なものか前もって見学しておきたいからね」

「それもそうね。ちょっと待ちなさいよ。あとで、こっちから電話するわ」

かつ子は金で動く女である。一万円、余禄が入るのに魅力を感じたのであろう。

「ぼくも是非、見学したいですね」

馬場氏は目をギラギラさせている。

「そりゃ構わないが、狭い押入れん中だ」

「ほんとに好きねえ。アハハハ」

三十分ほどして、かつ子から電話が掛かってきた。

「道玄坂裏の“みその”っていうホテルの二〇一号室よ。見に来て、あたしはいいいけどバレたって知らないわよ。ウフフフ。あとはそちらで、うまくやんなさいよ。じゃあね」

これだけでガチャリと切れた。

「ママ、悪いけど案内してくれないかな」

「おやおや、とんだところで、おつき合いしなくちゃなんなくなつたわね」

もう十二時を廻ったとこなので、他に客もなし、なおみは店を片づけて、三人連れ立って店を出た。歩いて二分とかからないところに“みそのホテル”があった。三階建てぐらいの小さなホテルだった。

「ここよ」

入口の前で、なおみは立ちどまった。

「なるほど——」

三人とも立ちどまった。玄関は奥の方にあるが、誰も先に行く者が居ない。馬場氏は私に頼りきっているようだし、なおみは、きびすを返しそうな素振りである。だが、ここであなみに帰ってしまったわれば困るのである。

ともかく私が歩き出した。

「おい、もう少し、つきあってくれよ」

なおみは苦笑しながら、ついてきた。

どうやら、くそ度胸をきめなくてはならな

くなってきた。うす暗い玄関の扉を押す。

「いらっしやいませ」

四十すぎの女中が出てきて、膝をついた。

男二人に女一人という組合わせに女中が、

げげんそんな顔をしたが、なおみの顔を見ると目だけで笑った様子だった。

「あの二階の一号室に案内してもらいたいんですがね」

「ハ？ あすこは、ふさがっておりますが」

「それは知ってるんだ。私は、あすこを借りた人の友人なんだけどね。ちょっと部屋だけ見せてもらいたいんですがね」

女中は明らかに拒否の表情を見せた。

その時、なおみが口をきいてくれた。

「ハゲさんでしょ。この人たち、ハゲさんのお友達だから大丈夫よ。承諾を得てあるの」

「ああ、そうですか。それでは、どうぞ」

女中と顔馴染みの、なおみのお蔭で助かった。

靴のまま上がれるのも便利である。

階段を上がって、とっつき部屋を女中が鍵であける。なおみが、すばやく千円札を女中につかませた。

中は冷房がきいていて、ヒヤリとした。

二畳ほどの控えの間があり、その奥は八畳

の和室で、向こう側に一段下がった板の間があり椅子とテーブルが置いてある。かなり、よい部屋だった。蒲団が既に敷かれてある。

「この部屋、いくらなの？ 泊まりで」

「四千円ぐらいじゃない」

なおみは悪びれずに答えた。

右側が狭い床の間で、左側に一間の押入れがある。一間あれば楽に二人もぐれるかなと思つて開けて見て、がっかりした。蒲団が上も下もギッシリ詰まっているのである。

「こりゃ、まずいなあ」

馬場氏の落胆振りは私以上である。

なおみはクスクス笑っている。

蒲団の間に手を突っ込んで見たが、腕一本さえ、やっとの詰まりようである。

「こりゃあ、だめだなあ」

「何で、こんなに蒲団が一ぱい要るんですかね。そこに敷いてあるだけで十分でしょう」

と馬場氏は私に文句をつけるような口吻だ。奥の方まで無理して手を入れて見て、到底、潜りこむ余地のないことが分かった。

「この蒲団を女中に頼んで、どこか別の室に運ばせては、どうでしょう」

馬場氏はどうにも諦めきれぬ様子だった。

「そりゃ、ちよつと無理ですね。何の理由で

蒲団を運ばせるんですか」

なおみはアッハハハと笑い出した。

「笑いごとじゃないですよ。どこか隣の部屋から覗けるとかは、ないかなあ」

まわりを見廻したが、一方の床の間はビッシリとした壁である。もしやと思つて掛軸をめくつて見たが、映画で見るような、ホラ穴は、あいていなかった。

「諦めなさい。今夜は」

なおみは帰りそうにした。

「ちよつと待てよ」

折角こうして来た手前、私としても残念である。少々意地も出てきた。

「あのね、ちよつと頼みが、あるんだけど」

「なによ、また——」

眉を寄せて、なおみは迷惑そうである。

「ぐずぐずしてると、あの二人が来ちゃうわよ」

「まあまあ、ちよつと待てよ」

私は五千円札を出して、

「これを、あの女中に握らせてさ、マスターキーを借りることはできないかな」

「そんな……」

「いやね、まあ聞けよ。あの二人が入るだろう。頃合いを見計らつて、そつとマスターキ

ーで扉を開けてもらうのさ。それだけでいいんだよ。マスターキーは返してしまつてもいいんだ」

「どうするの？」

「この控えの間から襖を細目にあけて覗くんだよ」

「だめよう、分かっちゃうわ」

襖を見ると、まん中に細い棧が何本も、はまつた障子になっている。

「この障子に穴を開けたら、どうですか」

馬場氏も一生懸命、智恵を絞る。

「だめですね。障子の穴というのは存外、目立つんですよ。一つだけ開いてるとね」

「襖が細目にあいてたつて目立つわよ」

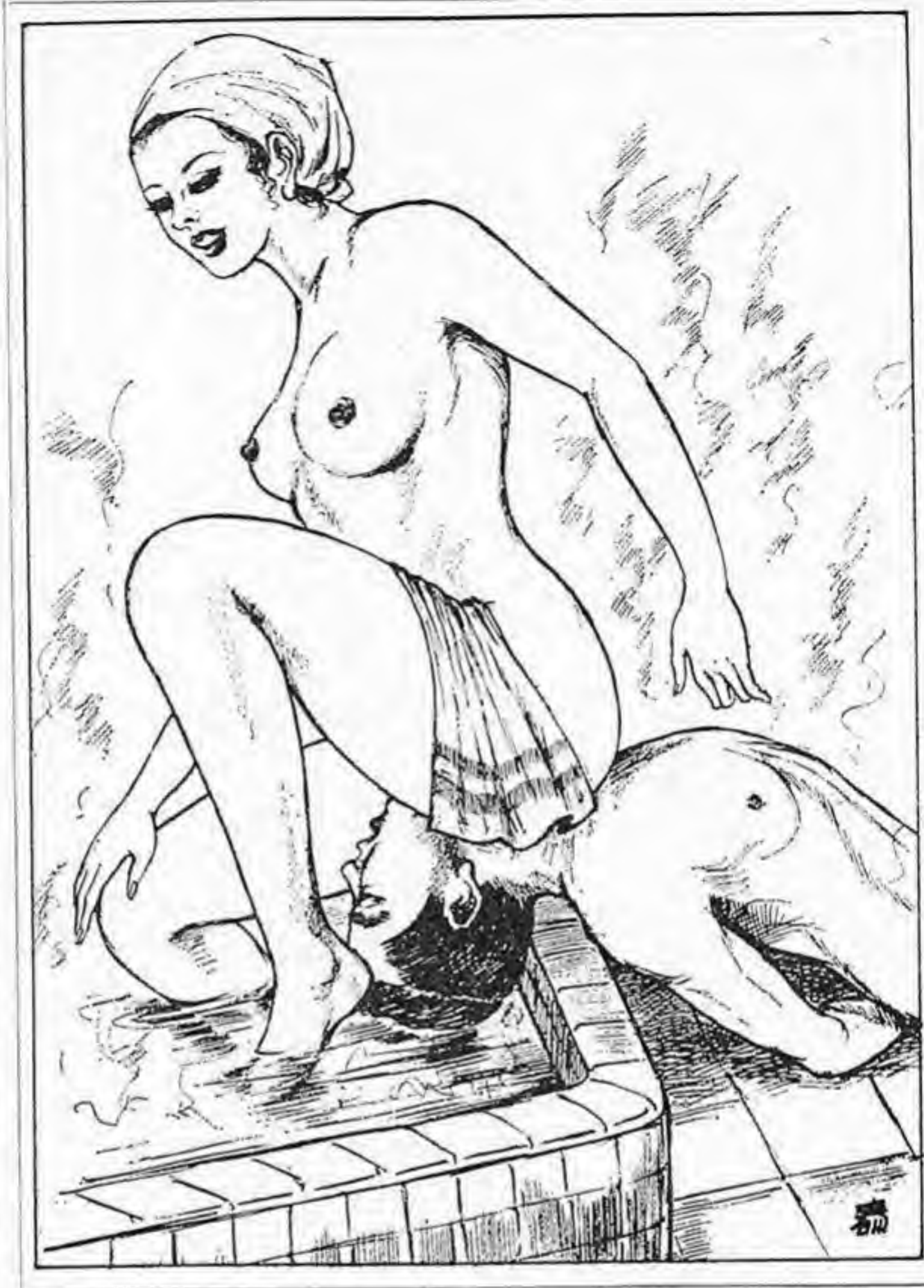
「ウム、うまい方法がある」

い も む し

私は、なおみに何とか女中を口説きおとし、てくれるように頼んだ。

「私達じゃ初顔だから、だめだけど、あんたなら大丈夫だよ。もしも女中がノーなら諦めるけどさ。ともかく、この話は、あんたの方から持ちかけてきたんだから、ひと肌、脱いでくれよ。な、頼むよ」

ナミオM画廊 『入浴タイム』 春川ナミオ



「しょうのない変態どもだね」

なおみは五千円札を握って出て行った。

控えの部屋の横に、浴室とトイレがある。

その鏡の傍に五円の剃刃が歯ブラシと一緒に置いてある。その剃刃を持ってきて、襖の真

ん中に貼ってある障子紙の下の方を二センチばかり切って、はがした。二枚の障子紙の下部全部を切りはがし、その尖端を内側に折り曲げると、五ミリほどの隙間ができた。

「どうです。そっちの部屋から見て下さい。」

ちょっと見ただけでは分からないでしょう」

障子紙の下部がズーッと横に五ミリほど透いているのだが、これは黒塗りの棧と暗部とが重なって殆ど分からない。

しかも必要とあれば、控えの間から障子紙の裾を捲くると隙間は一センチ以上も大きくなる仕掛けである。そこから部屋を覗くと、隅々まで、角度を変えれば天井まで見える。

「ちょっと開けすぎたかな。まあ、いいや」
なおみが女中を連れて戻ってきた。

「こちらへ、どうぞ——」

向かいの二〇七号室へ通された。

「マスターキーは、お貸しするわけには参りませんが、御用の時は、お呼び下さいませ」

女中は事務的に言って引き下がった。

「どうもありがとう。お蔭で助かったよ」

「ほんとにイヤなことばかり言いつけてさ。

あたし、帰るわよ。もうお役目、済んだですよ」

「まあ、そう慌てることはないだろ。お茶でも飲んでけよ。何なら、お酒をとろうか」

「いいわよ」

なおみは不機嫌だった。

「そうだ。かつ子にだけは、我々が来ていることを電話しておこうか」

「シッ！」

扉を開けたまま話をしていたが、階段を上がってくる足音に、あわてて扉を閉めた。

扉の内で足音をうかがっていると、どうやら向かいの二〇一号室に入ったようである。

扉を細目に開けておくと、間もなく女中がお茶を持って二〇一号室に入って行った。

「きみも少し見物して行かないか」

「イヤだわ！」

「まあ、そう怒るなよ。香港で指輪、買ってきてやるからさ」

「ほんと？」

すぐ御機嫌が変わるから現金なものである。

私は、なおみに煙草を、すすめた。

「向こうの部屋へ行くと、喫えないからな」

「何だかヘンな気持。これから泥棒にでも入る時みたい。アハハハ」

「あんまり大きな声で笑うなよ。お向かいさんに聞こえると、きみの声だと分かるよ。そのバカ笑いは独特だからな」

「大丈夫よ。このホテルは防音だけ完璧よ」

「そうですか」

馬場氏が立って行って、二〇一号室の扉に耳をつけて中の物音に聞き入っている。しばらくして、帰ってきて、

「なるほど聞こえませんか。ほんの少し声がするけど言葉は聞きとれません。ところで、どうですか。もう、そろそろ」

「まだでしょう」

「着つけや、メイクアップに意外と時間がかかるのよ。何しろ凝り屋なんだから」

「いつも、どうなの？ 泊まってくの？」

「ううん泊まらないわね。あたしも家が近いし、帰るわ」

二十分ほど待って女中を呼び、音のしないように鍵を開けてもらった。

なおみが帰るというのを、背中を押して中へ入れ、靴を脱いだ。幸い上がりかまちの襖が開けっ放しになっている。この方が都合がよいのだ。靴を隅の方へ寄せてソツと上がりこみ、障子の隙から三人、揃って中を覗きこんだ。

まず目に入ったのが、細長いテーブルだった。これは、さっき見た時は片隅にあったのが、今は部屋の真ん中に持ち出されている。

そのテーブルに片ひじついた、かつ子が、盃を手をしている。女中に運ばせてないからこれは、店から持ち込んできたのだろう。

かつ子はホテルの浴衣を着ているが片肌脱ぎで、裾を捲くって大あくらをかいている。

傍に、芋俵に女の着物を着せたような宮下氏が、おカッパのかつらをかむって、女のよなシナをつくって徳利を持ち、かつ子にお酌をしていた。

「ネエ、アナタ。今晚ハ、ウチへ泊マッテラシッテネ」

これが宮下氏の声であろうか。いつもは野太い声の宮下氏が、女の声とも男の声ともつかない奇妙な声を出している。

「だめだよ。俺あ、おめえを可愛がったら、家へけえるんだ。家にゃ可愛い女房が待ってるからな」

「アラ、イイジャナイノ。ソナ、ハクジョウナコト、イワナイデ」

宮下氏は、かつ子の裸の肩へ、しなだれかかる。

「うるせえッ。けえると言ったら、けえるんだ。何だッ。汚ねえツラしてベタベタ傍へ寄って来やがって！」

かつ子は手荒く突きとばした。宮下氏の肥った身体がゴロンと転がった。水色のたて縞の銘仙らしい着物を着ていたが、ひっくり返ると裾を乱して、赤い蹴出しがパツと、こぼれ、太い毛脛が出た。

「マア、ヒドイ、ソナ乱暴シナイデ」

「やかましいッ。てめえが、しつこいから、俺あ、もう帰る！」

かつ子は片手で浴衣の裾をつかみ、やくざのような格好で立ち上がった。

「アラッ、帰ラナイデ。ネエ」

宮下氏は捲くれ出た、かつ子の白い足に抱きつく。かつ子は、それを振りほどいて足をあげ、肩を思い切り、蹴とばした。

「すべため。この俺さまに可愛がってもらいてえか。やい！」

胸を足で踏んでクルツと裾を捲くる。

「行カナイデ。アタシハ、ドンナニサレモイイカラ行カナイデ」

白く、細い足に踏みにじられている、ぶよぶよした肉塊は、いも虫のように、くねくねと、うごめいていた。

猥褻とエロティック

女装した宮下氏のうごめきを見て、私は非常に猥褻（わいせつ）な感じを受けた。

ここで猥褻という表現の意味について、誤解のないように註釈を加えたい。

一般的に猥褻というと「劣情感をそそる」と解釈されているようである。

劣情というのは、どういふことなのか？ 劣情と色情とは、どう違うのか？

劣情とは、けがれた色情、情慾ということらしいのであるが、けがれた慾情などというものが現代にあるだろうか。

兄妹で恋愛しようが親子でセックスしようが、獣に抱かれようが人妻を犯そうが、それ等は一切、汚れた慾情とは見なされない。汚れた！

と感ずるのは、もっぱら主観によるものである。もはや性道德というものは現代にはないのである。宗教的な見地から見れば、現代でもあると思うのは、宗教というものを通して見た主観であって、無宗教者に向かって、「宗教では、こういう情感を戒めている。汚れたものとされている」と説いても理解できない。

話が横道にそれたが、劣情存在論は別の機会に譲るとして、猥褻という意味は、一般的に言って「色情を、そそるもの」と解釈されている。もしもそうなら、いまの世の中に猥褻は、あり得ない。猥褻と不猥褻の間に線を引くことができないからである。

だが、主観的に見れば、あり得る。そこで私個人の主観を述べさせてもらう。

私は私なりに猥褻感というものをもっている。だが、それは世にいう「色情をそそるもの」とは、全く別のものである。

私自身が色情をそそられるもの、それは絵画にしても文章にしても実景にしても、すべて、猥褻ではなく、エロティックなものとなっている。

私が猥褻と見なしているものは、ことセックスに限ったことではないが、セックスだけについて言えば、不快感、不潔感を感じて、全然、色情など、そそられない。色情などはむしろ萎えてしまうものを、さしている。

放尿直後の馬の性器を男性が見ても色情はそそられないだろう。むしろ、不潔感を感じるだけである。だから猥褻である。

だが、女性が見たら、その魅力の故に不潔感さえ、ないかもしれない。これは、もはや猥褻ではない。そういう風に区別して考えている。

猥褻とは読んで字の如く、みだりに、けがれるということである。みだらがましく、けがらわしいということだ。

筋骨逞しい美男と、豊艶な肉体の美女とが抱擁しているポルノを見ても、色情はそそられるが、汚らわしい、きたならしいと感じる

であろうか。だからエロティックではあるが猥褻ではない。

田舎のたんぼ道で、ひっくり返った八十婆さんの皺だらけの太股から、白髪まじりのしぼんだものを見せられてエロティックと感じるだろうか。これは猥褻な光景である。

一例をあげれば、そういう風に私は区別しているのである。

宮下氏を見て私は猥褻感を抱いた。

それは醜怪な容貌とブヨブヨした芋虫のような肉塊の故であろうか。

その時は、そう感じたのだが、あとになって考えてみると、そのためばかりではなかった。もっと大きな要因があったのだ。

それは、宮下氏が女装しているということだった。これが私の性向上、許しがたいスタイルだったのだ。

女性が責められる、ということは、私にとってはタヴァーなのだ。

客観的に考えれば、あらゆるセックス、その性向を理解できる——と、うぬばれている私にも、M派である本能的感覚から見れば、女性が責められることではセックスを感じないし、醜い姿態の老婆などが責められるのを

見ると、むしろ猥褻感を覚えるのである。そのくせ、私自身、時には女装してみたい、と言う気持が、ないではない。

こうなると私の猥褻論も大分、あやしくなってきた、矛盾を感じるのだが、そうはつきり割りきれないのがセックスの深遠さというものである。

障子の隙間を指でひろげると、かつ子の全身が、はっきり見える。

宮下氏には猥褻さを感じたが、かつ子の方は、これはまた、美しい絵になっている。

細い身体が私としては気に入らないが、片肌脱いで、かつこのいい乳房を見せ、唇をゆがめて宮下氏を見下ろす表情はサジスチックで、いつもの、かつ子より綺麗に見えた。

男が女装するのに抵抗を感じるくせに、女が男のふりをするのは許容するというのも、理屈に合わないかもしれないが、私には非常に魅力を感じるのである。

宮下氏は用意してきた麻縄で、きつく後手に縛られていた。

かつ子が足をあげて、足のうらで顔を撫であげたり撫でおろしたりしたあげく、足を高く上げて蹴倒した。

かなり強く蹴ったので、宮下氏の身体はゴロンと、ひっくり返って床の間の方まで転がった。

「ざまあ見ろ。うちぎたねえ豚めッ！ やい！ この俺さまを拝め！」

転がった宮下氏の顔の上に跨がり、両膝で立った。宮下氏は陶然とした表情になった。

「何だ、そのツラは。酒に酔っぱらったようなツラしやがって」

なおみは立ち上がった。

「帰るの？」

首を横に振って部屋を出て行く。

私も首が痛くなったので、熱心に見ている馬場氏一人を残して、なおみに続いて向かいの部屋で、しばらく休憩した。

「あれは前から使っていたの」

「ううん、最近じゃない。だんだん手の込んだことをやるようになったわね」

なおみは、不愉快そうな顔をしていた。

「人のやるのを、ただ見ていて、どこが面白いの」

やはり、なおみは実践派なのだろう。

「あんたも、あのかつ子のように、男になり切れる？」

「フン、ばかばかしい。あたしは、あくまで

イメージギャラリー——『パパからの電話』——岡 たかし——



も女よ。女として男を虐めるのは好きよ。あたしん時は、あんじゃなかったけど、社長さん、だんだん女っぽくなってきたわね」
「あれで女っぽくなったのかねえ。どう見ても無理だと思うけど」

「アハハハ」

「おい、あんまり大きな声で笑うなよ」

私は、なおみと、かつ子と、やはり、いろいろの点で差があるように思った。なおみは宮下氏のことを「社長さん」と言うし、かつ子の方は「あの野郎」である。つまり宮下氏を頭から軽蔑しているのである。なおみの方はプレーとなれば、どうかは知らぬが、ふだんは宮下氏を尊敬しているのである。その辺

が違うと思った。

「ああ、あたし、眠くなった。少し寝るわ」
サツとブラウスとスカートを脱いでブラジャーとパンティだけになるとベッドへ入って私の方を見て笑った。

私が扉へ鍵をかけようとする、

「鍵なんか、いいじゃないの」
サジスチックに目が光った。

襖のうちそと

「ねえ、あたしがやるなら、あなたも、やる？」

ベッドの中で私の首を抱えながら、なおみは言った。

「うん……そうさなあ」

「かつ子は、あくどいからね。昔の百軒店と同じようなことしたら、社長さんを破滅させてしまうわよ。あたしにも多少、責任があるみたいに思うのよ。別に、かつ子から社長さんを、とりあげる気はないんだけどさ」

私は、そろそろ向かいの部屋の方が気になり始めた。もう三十分ぐらいも、この部屋にいる。

「ちょっと様子を見てくるよ」

「もういいじゃないの。向こうは向こう。こっち、こっちよ」

「うん、だが、まあ、ちょっとな」

二〇一号室の扉を半分、開けると、すぐ土間の襖の蔭に馬場氏が立っていた。靴も履かずに、はだしのままで、私の顔を見ると唇へ指を持って行って「音に注意」のサインを出した。

私は、すぐ察しがついた。

かつ子と宮下氏は、控えの間から浴室へ入っているのだ。

控えの間で覗いていた馬場氏が、慌てて靴もはかずに土間へ飛び下りた図を想像すると滑稽だった。

「オラオラ、じっとしてろ。馬鹿！」

浴室からは、かつ子の声はずんではいる。

お湯の音がバチャバチャしてるが、今度は全然、覗く余地はない。

「飲ませてるんですね」

馬場氏は喉仏をピクリとさせ、うなづく。

「もう終わってます」

私達が覗いていた襖は開けっ放しになっていて、向こうの部屋が見える。私は靴を脱いで奥の部屋へ入ってみた。

派手な縞柄の女の着物が脱ぎ捨てられ、か

つらが白い裏地を見せて、ころがっている。

女物の着物の傍に男のパンツがあり、宿の浴衣の傍にパンティがあるのは奇妙な、とり合わせだった。部屋の隅に縄が蛇のように、とぐろを巻き、釣り竿の短いようなものもあった。

肩かどが部屋の真ん中近くまで持ち出されていて、中を見ると血を拭いた鼻紙が、かなり多量に入っていた。

馬場氏は「早く戻ってこい」と、手招きをしている。

「男の方は、怪我をしていましたか」

「いや、別に——」

それでは鼻血であろう。まさか、かつ子の血ではあるまい。別に大したことはない。

「もう出て来ますよ」

馬場氏はハラハラしていたようだ。

「サ、これで、よしと。サア、もう出るよ」

浴室の方で、かつ子の大きな声がする。

間もなく扉が開かれる音がして、

「ソラ、早く行け。オラオラ」

パシンパシンと尻を叩く音がする。

そっと、うかがって見ると、全裸の宮下氏の上に全裸のかつ子が馬乗りに跨がって、奥の部屋の方へ入って行くところだった。

二人が後向きになったので私は、かなり顔を出した。

突然、かつ子が後を振り返り、私を見るとウィンクし、口を開けてペロツと舌を横っちょへ出して見せた。

間もなく境の襖の閉まる音がした。

「かつ子は知ってるんですね」

「ええ、浴室へ入る時に、ぼくも見られてしまいました」

それなら、かえって気楽である。

二人は、また襖の傍へ行って坐った。

見ると襖が細目にあいている。かつ子が気をきかしたつもりなのだろう。障子の隙間はかつ子も気がつかなかったらしい。

「こん畜生ッ。もっと早く走れッ！」

覗くと、かつ子が例の釣り竿を鞭にしてピシピシ宮下氏の尻を叩いている。モソモソとテーブルの周りを宮下氏は這い廻っていた。

「どうです。あの二人の仲間に加わってみますか」

私は馬場氏に聞いてみた。

「ハ？　そうですかねえ」

馬場氏はチラと私を見たが、また、すぐ襖に目をつけた。

「フェー、もう勘忍して……」

宮下氏が、男の声で力なく言うのが聞こえた。

覗いて見ると、乗り潰された宮下氏が蛙のように、のびていた。もう女の声を出す力もなくなってしまうていた。

しかも、かつ子は、なおも、その汗みどろの顔の上に尻をのせて責めていた。

「だらしのねえ豚だ。起きろ、こら。起きてもっと走れ」

「もう……もう、だめよ」

「何言ってやがんだ。承知しねえぞッ」

尻をグリグリと顔の上で揺り動かし、鞭でビシビシと背中を叩いた。こうして男の上で責めている、かつ子は魅力的だった。

かつ子は、つと立ってコップに水差しの水を注ぎ、再び宮下氏の顔へ腰を下ろすと、

「ああ、うまい！」

水を、さも、うまそうに飲んだ。

「ア、アタシニモ飲マセテ。ネ、オ願イ」

ひと息ついた宮下氏の声が、また変てこな女の声に戻っていた。

「飲みたいか。フッフ、ああ、うまい」

見下ろし、ひと口ずつ、うまそうに飲みながら、かつ子は宮下氏の口をふさいだ。

「誰が飲ませてやるもんか、こんなうまい水

を……アハハハ、うまい。飲みたいだろう。アハハハ。飲みたきゃ、舐めろ！」

うまそうに、ひと口ずつ飲む、かつ子を悲し気に見上げながら、宮下氏は飲みたい一心で、懸命に奉仕している。その間も、ゆっくりと少しずつ、かつ子は水を飲んで行く。コップの水が残り少なくなっていく。

宮下氏は少なくなっていく水の量を必死に見つめている。

最後に、ひと口分だけ、残った。

「飲みたいか。飲ましてやろうか」

コップを顔の上で、見せびらかし、そしてそれも飲みほしてしまった。

「アハハハ、てめえなんかに、俺さまの口をつけたものを飲ませられるかい。その汚い口へあてただけでコップが汚れらあ！」

こういう時の、かつ子は別人のように綺麗に見える。

「待ってな。いま飲んだ水が、あたしの身体の中を通って行くからな。そしたら飲ましてやる。わかったか、この豚！」

ふと人の気配を感じて振り返ると、なおみが浴衣をひっかけて、煙草をくわえて立っていた。

「まだ、見てんの」

かなり大きな声である。馬場氏がギョッとして振り返ったくらいだった。

「好きねえ、全く」

なおみも上がってきて、障子の隙間に目をあてた。

奥の部屋では、かつ子が、ますます荒れ狂っていた。

宮下氏の顔を両股で、はさんで締めつけ、

「やい、こん畜生。てめえなんか、くたばってしまえッ」

髪を振り乱し、エキサイトしていた。

なおみに傍で見ていられると、私は奇妙に冷静になった。

「ちょっと荒っぽすぎるね。あれじゃ、危険だな」

「うん、あの子は自分が昂奮してくると相手のことなど、考えないからね」

障子から、のぞく、なおみの目も光っていた。

かつ子は、またパツと立ち上がると、宮下氏の頭を足蹴にした。頭を抱えてゴロゴロ転がる宮下氏を追いかけて、また、蹴る。

「こん畜生ッ。これでもかッ」

今度は頭の方から逆さに跨がった。手には竹鞭を持って、それで力一ぱい、宮下氏の腹

を叩いた。

ピシッ！ ピシッ！

鞭がうなつて、肥った胸腹に叩きつけられる。

「あんたも、ああいうの、好きなの」

なおみは馬場氏に話しかけた。そして首に手を、まきつけた。

「ハ？……」

夢中で見ていた馬場氏が、なおみを見る。

なおみの手に力が入ると、馬場氏は、わけもなく仰向けに寝かされた。

浴衣の裾を、ちよいと捲くって、いとも簡単に、なおみは馬場氏の口をふさいだ。

馬場氏は目をつぶり、みるみる顔が、あかくなった。

かつ子の猛烈な演技に、なおみも、ひきこまれた感じである。つまらないなどといって

——ご投稿下さる方へお願い——

各種原稿募集に対しての応募は歓迎致しますが、作品に住所、氏名を書かずに送付されると、稿料送呈その他で整理がつかかねる場合が生じますので、投稿作品には必ず一作（イメーヅ画も）毎に、住所、氏名、ペンネーム附記を、原稿用紙使用、縦書きと共にお願い致します。

いたが、やはり見ていると、もよおしてくるのであろう。

私は目の、やり場に困った。

障子の向こうを見たものか、こっち側に目をおとしたものか——。

だが、こうして現実双方を見比べてみると、やはり、なおみの方が、一段とすばらしい。

なおみの方は、まさに女が男を責めている図である。

かつ子の方は荒々しく、

「さあ、死ねッ！ 此奴、殺してやる。こうやって息の根をとめてやるゾ」

やっていることは、かなり猛々しく迫力がある。だが細い身体のために、どうも見た目に物足りなさがある。もちろん、これは私の主観ではあるが。

なおみの方は、やんわりと股に、はさんだだけらしいのだが、太くもり上がったその太腿が、男性を威圧する迫力を、巧まずして備えている。

かつ子の方は猛々しさを、め一ぱい表に出してしまつて荒れ狂っているが、なおみの方は一見、落ちついて余裕のあるように見られるが内心の燃えるものを抑えながら、やって

いるように見える。

つまり、大人の表情だった。かつ子の方は何となく子供っぽく見える。それというのもかつ子は小柄なせいであるかもしれない。私はどうも、やせた女や、小柄な女にはセックスアップールが、うすいのである。

これもまた、私だけの好みの故かもしれない。

それはそれとして、襖ひとつを距てて、向こうとこっちで、女が思いきり男を責め苦しめ辱かしめている光景を見たのは、私も生まれて始めてだった。

馬場氏は息苦しそうに、時々吐く息は、かなり荒く、大きな、ひびきをたてる。

向こうも夢中だから気がつかないようなものの、普通だったら、すぐ気づかれてしまうだろう。

「おい、あまり手荒くやるなよ。向こうさんに聞こえるぞ」

チラと見た、なおみの目のきれいなこと。やはり、かつ子より格段に美しい。

「聞こえたっていいじゃないの。いっそ、向こうさんと合流しましょうか」

イザとなると、やはり女は大胆だ。

——（続く）——



懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

ローソク責めの魅力と快味

村 田 恭 子

編集長さま――

私は貴誌を毎月楽しく拝見させて頂いております。（と申しまして、七、八月号の二冊だけなんです……）

今度、勇気をふるって、私の告白を書きました。奇クを読んでいるうちに、私は昔、夫によって教えられたハロー責めの喜びを、なんとか一つの形にしておきたいと思い、恥も外聞もなく、下手な文もかえりみず書いた次第です。もしお許し下されば、誌面に発表して頂ければ幸いです。もしされない時は、不勉強の報いと、あきらめます。

また、掲載されても、されなくても、私は二度と告白文は書かないつもりであります。ですから、仮に掲載されたとしても、読者の方からお手紙が参りまして、回送は一切

不用に存じます。

原稿用紙には一応、本名を書きましたが、出来ますれば名を変えて頂きたく存じます。万が一、私の存じ上げている方に読まれては困りますので――。

それから、もし編集長さまから御返事その他、頂けるようでしたら、七月下旬から八月上旬にかけて避暑のため一人旅行を致しますので、八月十日以降に到着します様に、恐れいりますが、お願い致します。

封筒に書きました住所氏名は、私の只今住んでおりますところと、本名でございますので、呉々もよろしくお願い申し上げます。

○

私がローソク責めの快楽を覚えたのはもう三年以上も前のことです。去年の秋、交

通事故で他界しました夫に教えられたものなのです。

夫は私を全裸にしますと、後手に縛り上げ私の身体という身体、顔を除いて全ての個所にローソクを滴らせるのです。そして、その後にローソクだらけになった私を、夫は力一杯、愛してくれるのでした。

始めは、ただ夫のすることに、否応なしにこたえていた私も、いつしか夜毎のならわしのようになっていました。異常な行為のように思ったのも最初のうちだけで、そのうち、そのたまらない快楽を、身体で知るようになってしまいました。

夫が他界した後、当初は、あれやこれやの事情に追い回されていた私も、身の整理を終えて夫の家から離れ、一人アパートに移り

住むようになりました。落ち着いてみますと夫を失ったくらいでもない悲しみと共に、空虚さが身のおきどころをなくしています。

幸いに、夫には生命保険がかけてありましたので、金銭の面では、今のところ何とか不自由はございませんが、時間を持て余しておりますので、近いうちには、娘時代に習った洋裁の腕をいかして、今後の生計を立ててゆこうかと考えております。

夫は生前、「SMの感覚は全ての人間にあるもので、一生それが出ないもの、ある機をきっかけに出るものがあるが、おまえの場合は後の方だな」と、よく言っておりました。今になって考えてみますと、まさしく、その通りかもしれません。

このような私の場合をマゾというのでしょうか。私は相手の方を責めるということとは、好きではないのです。専ら責められることのみに、そして、それを前戯とした愛の表現の中に、セックスの悦びを見出せるのです。

そして、それを性癖と呼ぶのなら、それほど悲しいものはございません。夫によって、マゾ感覚を引き出された私は、夫の亡き後、夫と二人で過ごしたあの異常な快楽を、もう一度、再現したいと悶えてしまうのです。

○

夫の両親は、とてもやさしい方で、私に、お前さえよければ、二年でも三年でも、ある

いは一生でも、この家に居てもよいと、おっしゃって下さいました。

その両親の言葉に甘えて、私は暫くの間、一緒に暮していました。そのうち、私がまだ若い（八月三日の誕生日で満二十三才になります）ので、良い相手が見つかったら、再婚した方がよいのではないか、とおっしゃって下さるのです。

私には涙の出る程、嬉しい夫の両親の言葉でしたが、再婚したいと思うような相手の心当たりも今のところありませんでした。

私は近頃、つくづく考えるのです。このまま、夫の思い出のなかに生きていて良いものかどうかを――。

夫と過ごした足掛け三年の月日は、楽しい毎日でした。車で箱根や芦の湖方面へドライブした時のことも忘れる事は出来ません。

給料日にわざわざ東京まで出てレストランで食事をしたこと。私の誕生日にプレゼントしてくれた洋服。ボーナスの出た時には、ステレオを買って、それから、私の好きなラテン音楽のレコードを時々買ってきてくれた夫。やさしくて、しかも精一杯、私を愛してくれた夫は、もうこの世のなかには永遠にいないくなったのです。

楽しかった出来事も、今では悲しみの思い出となり、すべての過去は悲しみの形となっていてしまっているのです。

こんな悲しい思いをするのなら、もう二度と結婚なんかすまい――とさえ思うこともあります。そういう風に思いながらも、また反面、これからの永い一生を、愛した夫の思い出の中にのみ生きてゆくことが、果たして得策であるかどうか、思い惑うのです。

かといって、亡き夫に替わる素敵な男性も私の前には現われてくれません。もっとも、私自身も、そのための努力を、今のところ少しもしてはおりませんが……。

でも私は、これから先、どの様になるものやら、わからないけれども、当分の間は一人で生きてゆくことを決心して、夫の実家を、あとにしたのでございます。夫の両親は、苦しいことがあったら、すぐにでも戻ってくるようにと、おっしゃって下さるのです。

○

そんなわけで、一人になった私は、今のところ、安アパートの一室で気ままに自由な生活を楽しんでおります。

亡き夫のことは忘れようと何回も考えたりしました。でも、一生を誓い合った人のことを、そう簡単に忘れ去ってしまうことが出来るでしょうか。それどころか、彼と過ごした日々のことを、自分の身体の上に思い出してみてもなく涙が溢れる日さえ、しばしばあるのです。

と申しますのは、やはり夫の手によって、

私の身体に直接、加えられた、あの異常とも
思える前戯的SMプレイのことです。

そして、一人暮しになった気易さから、夫
によって教え込まれたローソク責めを、自分自ら
の手で行なうて慰めているのです。

夫が愛読していた奇クを、お葬式の何日か
あと、全部チリ紙交換に出してしまったこと
を、今は勿体ないことをしています。と
いいますのは、奇クはやはり、女の身では買
いにくい本だからです。

先日、東京に出たついでに、勇をふるって
神田の本屋で奇クの七月号と八月号の二冊を
買いました。(七月号の辻村隆さんのカメラ
ハント「Mアニマルの華麗な対決」は、ロー
ソク責めの好きな私にとって大変、興味深く読ま
せて頂きました)

その本屋で、奇クの他に、色々なSM誌が
あることを知りました。夫は奇クしか読んで
いなかった様ですが……。話が横道へそれま
した。ごめんなさい。私が、しばしば行なっ
ていますローソク責めについて、少し書いてみま
しょう。

○

実際のところ、これは一人でやっているも
のですから「責められる」という受身のもの
ではありません。でも、夫がしてくれたこと
を思い出しながら行ないますので、私自身は
一応責められるという形をとりたいのです。

本当は被虐ではなく自虐なのです。

用意しますのは、長さ二二センチ、太さ二
センチと、長さ一八センチ、太さ一・五セン
チのローソク、大二本と小一本。それにロー
プ長さ一メートル位のもの一本。新聞紙、マ
ツチ、枕、それだけです。ああ、そうそう、
それからパイプも一つ、入用です。

まずロープを二つ折りにして、その中程で
部屋の柱の一メートルほどの高さの所に、し
っかりと結んで固定します。二本に振り分け
て、その先端に足首が入るように、それぞれ
左右に輪をつくっておきます。

次に新聞紙を畳の上に敷くのです。これは
タタミをロープで汚さないためのものですから
十分に枚数を使います。

夫によって最初にロープの洗礼を受けたとき
あとでタタミについたロープを掃除するのに、
大変、苦勞したことを覚えております。

それが終わったら服を汚さないために全裸
になります。それよりも先ず、ローソク責めとい
うものは、裸でなければ何の効果もないから
です。そして柱を頭にするように仰向けに寝
ます。マツチとローソクは、あらかじめ手の
届くところに置いておくのです。

こうして態勢を整えましたら、足を上にあ
げて柱の両側につないでおいたロープの輪の
中に、両方の足首をひっかけます。丁度エビ
の形になるわけです。そんな格好になったと

ころで、ローソクの小さいのを一本、後の方
にインサートするのです。これで私の身体は
燭台となったのです。

燭台の位置を固定し、ローソクが垂直に立
つようにするため、枕を腰の下にあてがい、
お尻を、ずらしたりして調節します。

そうしておいてローソクに火を灯します。
ほんの少しの後に、ローソクは最初の涙を流
します。ローソクは、ローソクを伝わり、双臀
の谷間を流れ落ちます。

亡き夫とのなつかしい巡り合いの時が、こ
の瞬間にやってくるのです。ローソクは快い刺
戟を与えて、二滴、三滴と谷間を流れてゆく
のです。私は他の二本のロープを両手に持って
自身のあらゆるところに、ローの涙を、とめ
どもなく浴びせるのです。

腕を一直線に伸ばして太腿部、花園……腹
部、乳房、腰、肩——と、気のむくままに、
ローソクを、したたり落とすのです。

ローは花びらのようにパツとひろがり、そ
して得もいわれぬ快い熱さと痛みが全身を貫
くのです。この瞬間こそ、私は亡き夫と再会
しているように感ずるのです。夫と過ごした
愛に満ちた夜が、再び訪れるのです。

私は悶えます。悶え悶えて、身体中、ロー
の涙を浴びるのです。全身にローの花びらを
咲かせるのです。そして、いつしか私は片手
の太のローソクをパイプに持ちかえて、自分

自らを快楽の坩堝の中に落としてゆきます。

野獣めいた叫び声（実際は安普請のアップトですから、隣室に聞かれるのを恐れて、声を低く、おし殺します。又、時には口の間に猿ぐつわをかましておくのですが……）を挙げて、しばらく恍惚の状態をさまよいます。

自分で自分を責めて慰めているのですが、心の中は亡き夫に責められているように思っています。そして、私の場合、いろんな会話を、ひとり言いって、あたかも二人でプレイしているように演技します。

呻き声や、喘ぎ声、悶えの言葉など、あからさまに口に出してみますと、一段と責めら

れているという気分が高まってきます。

でも、一人二役のローソク責めプレイが終わってしまいますと、いつも虚しさだけが心の底にオリのように残って、佻しい気持が、私をいたたまれなくさせます。やはり私のように夫婦生活を、しかも、異常とも思える毎夜のプレイに狂う生活を経験してきた者には一人暮しというものは辛くて淋しいものです。

文章を書くことの苦手な私が、編集長さまに、このようなお便りを書きましたのもそうした空闊の淋しさのせいでしょうか。

ふと、そうした後めたい気持にかられますが、やはり自分では、いいえ、そうではあり

イメージギャラリー 『扇風機をどうぞ』 岩波大介



ません——と、否定したい気持でいっぱいです。心の底には、読者のために誌面を開放しておられる奇クに甘えて、只今のこの自分の気持を、奇クの読者の方々に知って頂きたいと思ったからに外ありません。

誌上に載せられるものなら載せてほしいという気持と、誌上に載ってしまったら、恥かしくて、いたたまれない——という二つの気持が入り混じった複雑な心境です。

住所や本名を書かずに投函しようかと、最初は考えておりました。でも、やはり封筒にだけは、住所と本名を書いてしまいました。

或は、もし、万一、編集長さまから、お返事が頂けるかもしれない……という淡い期待が、私をそうさせたのでございます。

原稿といったものは生まれてこの方、一度だって、書いたことのない私が、原稿用紙のマス目を、たどたどしく埋めた、編集長さまに対するお便りが、陽の目を見ることなく、クズカゴにはうり込まれ、お返事さえも頂けないようでしたら、私は、このままの淋しい一人暮らしの生活を続けてゆくつもりです。末筆ではございますが、貴誌の御発展と、編集長さまの御健康を、かげながら、お祈り申し上げます。

かしこ

神奈川県横浜市港北区××町一二三
〇〇荘アパート内 村田恭子
奇譚クラブ編集長さま

S M カメラ・ハント——深田菊子の巻

羞恥責めの実態

辻 村 隆

「いつかはきっと、お目にかかるとおもてましたけど、やっと目的を果たしたみたい。ホラ、こんなに心臓ドキドキしてんのんヨ」

深田菊子は、大仰に豊かな胸を押えてみせて、心なし頬を染め、魔女めいた黒耀石の魅惑の眸で、じっと私をみつめるのであった。

モータープールのある、大阪キタの、梅田新道に近い喫茶店Rの、奥まったボックス。時間は午前十一時。開店したばかりで、客は、まだ疎である。

「もっと早く会いたかったが、キミは塚本鉄ちゃんの秘蔵ッ子だろ。彼が、なかなか首を

たてに振らないものだから、搦め手から、箕田氏を口説いて、やっと思いが叶ったというわけだよ。本当は、一番にハントしたかった——」

「それホント？」

「ああ、ほんとだとも。確か去年の八月号だったか、被虐の天使とかいうタイトルで、鉄ちゃんがカメラルポした時、私は、すぐさま箕田のダンナに頼んだのだ。ところが鉄ちゃんが承知してくれない」

「どうしてやろ……」

「キミが気に入ったからさ。若くて、ピチピ

チして、スラリと背が高く、ボリニームがあって、可愛いときちや、誰だって独占したくなるわさ。おまけに、読者通信で、我々SM愛好者の、胸を操るようなことを書くんだから。ニクい娘だよ、あんたは」

「でも、自虐っていうのかな、独りでウチ自身を苛めていても仕方ないでしょ。誰か安心出来る人とプレイしたかったの。その点では塚本のオジサンは紳士的で、それでいて、結構スゴいことするし、私を愉しくしてくれはるわ。編集部のお奨めで、三、四人のひととプレイしたけど、皆、物足りないの。アガってし

まうんネ。気を利かして、編集部の人を出てゆくのに、何だか、独りでカラ廻りしてるみたい。塚本のオジサンなら、私の好きな、甘い快美感を、十分に満足させてくれるもん。やっぱりシロウトは、あかんのネ」

純真というのか、天衣無縫、天真爛漫というのか、いいたいこと、思っていることをズバズバいつてのけて、このハタチの悦虐のエンゼルは、甘い声で楽しく囁くのであった。

大柄な花模様のノースリーブの超ミニワンピースが、ピッタリと肌に吸いついて、その下に、じかに裸身を感じ、如何にも煽情的で眩しい。

戸外は相変わらず今日も断続的に、台風含みの雨が降っていたが、彼女の周辺だけは、大輪のダリアが開いたように華やいでいた。「私に会ってみたいと、キミから言い出したそうだね」

「いけなかった？ でも、何だかウチを無視してはるみたいに思われて、センサーはウチに関心を持ってはれへんのかとおもて、きいてみただけよ」

「無視しているどころか、虎視眈々、チャンスを狙っていたんだよ。箕田のダンナから、深田菊子とプレイしてみないかと電話があっ

た時は、正直いって飛び立つ思いだった」

「それが本心なら、何故もっと早くウチに声かけてくれへんかったの？ ホン（奇ク）読んでみたかて、センセイはウチのことに關しては一言も触れてはらへん」

「鉄ちゃんに遠慮していたんだ。彼は一時、いろいろな事情もあって、SMフォトを撮る情熱を、カメラ芸術的なものにばかり力を注いでいたことがあった。奇クが、グラビヤを廃止した時点に於いて、彼は奇クの方針に押しきられ、拗ねていたんだね。いいものをいくら撮りまくっても、本に掲載しないとなると、彼の努力も空廻りだものね。それで一寸嫌気がさして、遠ざかっていたんだけど、根がSM好きの彼のことだ。箕田氏から頼まれたらイヤとはいえない。近頃では撮って書いて大張り切りで、私のカメラ・ハントも、カゲが薄い。何しろカメラではプロ級だし、センスがいいから、素人カメラの私では到底、太刀打ち出来ない。彼が大張り切りで、しかも奇クの専属だから、編集部としても、モデル女性は、今の処、次々と彼の方へ廻す。キミだって勿論、その一人だった。鉄ちゃんが情熱を失っていた頃は、箕田氏も、よく私の方へモデル女性を廻してくれたが、最近では

殆ど鉄ちゃんの方へ廻っていて、私は私なりに、独自の立場で、ハントするより仕方がない。いいコだなあと思っても、指をくわえて鉄ちゃんの大活躍を見守っているより仕方なかった。だからキミにしろ、私にとっては、所詮は高嶺の花だと思っていたから、書くことも、しなかったってわけだ」

「改めてきくけど、ウチに興味あるん？」

「勿論、大ありだ。徹底的に、羞恥責めのプレイをしてみたいよ」

「ああ、嬉し。ウチは内心、押しつけきたいに思われへんかと氣い使ったのよ。思い切って、言ってよかった」

彼女は全然、物おじしない。こんな会話を辺り構わず、平気で喋る。

近頃の若い女性は、セックスとか、レズとかいった言葉も平気で口にする。アクメが何であるかも、リビドーがどういうことかも、エクスタシーがどういう状態かも、クリトリクスが何を指しているかも、よく知っている。ミーちゃんハーちゃん向きの雑誌が、堂々と書いているし、負けじと、女性週刊誌、婦人雑誌も、派手に性の知識を売り込んでいる時代ともなれば、否応なく耳コミで吸収するのであろう。書店の立ち読み女性が、奈良林ド

クター氏の「ハウ・トゥ・セックス」などを平気で抜けて眺めている昨今であるが、流石にSM面だけは、セックスにくらべて一般向きではないようである。

その点、深田菊子は堂々としている。こうしたSMプレイの話を、さして抵抗もなく口にし、懼らく私の方から水を向ければ、彼女の交友関係のセックスや、快楽指数を平気で口にしたに違いなかった。それが彼女の場合チットもいやらしくはなく、板についている感じであった。

ハント女性で、彼女に負けず劣らず、堂々と口にする女性は、薊魔子が彼女に匹敵し、そのほか、概して人妻より、若い娘の方が、ケロリと口にするようであった。今日的な現象であろうか。

全国各地に、相当な被害を与えた梅雨の名残りの雨が、今もかなり激しく降っている。

どこかへ河岸を変えて食事するつもりだったが、鬱陶しさに煩わしくなって、この喫茶で軽食を摂ることにして、私達は尻を落ちつける。こうして向かい合って、喋っているだけで楽しい深田菊子であった。

彼女は生粋の大阪人で、住居もこの喫茶からは、歩いてきても十数分だというが、雨な

ので、タクシーを拾ったら、交通規制で相当廻り道をしたと話していた。天気なら車でくるつもりだったといって、

「もう大分、上手になりましたんよ。塚本のオジサンは、私が運転すると怖がりになりますけど、大阪の街を乗り廻せるようになったんやもの。いい加減に信用してくれはったらいいのに……」

とケラケラ笑うのであった。

「そのうちに乗せてもらおうよ」と私。

「運転しはる人は、誰でもヒトの運転が怖いそうやていいますわ。この次、ドライブしましょ。信州あたりまで行ってみたいなあ」

と夢は羽搏く表情に、サンドイッチとスパゲティを口に運びながら、私は訊ねる。

「随分、男友達が多くなってきいたけど」

「誰に？」

「そう、確かカメラルポで読んだのかな」

「初体験の彼を含めて六人。勿論、すべてセックスの経験ずみばかり。留学中のカナダの青年の前戯は素晴しかったわ。その点、日本の若者は下手よ。ガッカリ」

ヌケヌケといって、サンドイッチを頬張りながら、モグモグと続いて喋る。私は懼らく啞然たる顔付きだったに違いない。ドキリと

する言葉に、大正生まれの私は辺りを見廻して、ウロウロするのであった。

変な質問をしても、深田菊子は堂々と応える度胸のよさに、反って質問しておいて辟易した私は、急いで軽食を平らげて、この喫茶を出ることにした。

車中――。

× × ×

ここなら大丈夫、誰に聞かれる事もない。乗り換えただばかりの新車も、連日の雨でドロドロになり、洗っても無駄と、その俤に放ってあるから、未だ六〇〇キロも走っていないのに、一向に新車らしくない外観である。

深田菊子は自己顕示欲の幾分、強い娘らしく、私とは初対面であるにもかかわらず一向に私のことに関しては何も尋ねてこない。専ら、自分の意思表示の方、一点張りで、こんな娘は扱い易く、親しみ易かった。

彼女とデートする日が定まって、私は慌て、塚本氏のルポを拾い読みし、その性格や趣好、M性などを、私なりに咀嚼しておいたことが、今日の日、誠に都合よかった。

SMのプレイが、どの程度まで行なえるか一つのデータが、私の胸裡に出来上がったからである。

自虐に飽き足らず、羞恥責めを求めて、塚本氏とプレイし、彼の飼育によって、深田菊子は、理想のM女性に成長していた。彼の努力の成果を、あっさり頂戴するのだから、考えようによっては虫のいい話である。

単なる男女の結び付きだけを考えるならば先駆者によって、散々弄ばれた女性を頂戴した時、お古をいただいた様にもとられるが、SMの世界だけは、そうでなかった。

SM性に未熟な女性を、手塩をかけて飼育し、調教し、充分に被虐願望に熟した女性を紹介して貰うのは、私などの場合、手数が省け、直ちにプレイに没入出来て、好都合の上もなかったのである。

深田菊子にしても、セックスのみをとり上げていうなら、既に過去、数人の男性と交渉はあり、誠にお古にも思えるのであるが、彼等は等しく、深田菊子のM性を開花しようとはしなかった。

彼女のM性を一躍、昂揚させたのは、よきライバルの敬愛すべき鉄ちゃんこと、塚本鉄三に外ならない。過去のモデル女性に於いて彼と私は折々に、兄たりがたく、弟たりがたしという仲で、世間で謂う、〇〇兄弟ということがしばしばで、奇妙な愛憎の、親愛の友

でもある。私達の間には箕田氏という、奇クの創始者が緩衝地帯の如く存在し、私と鉄ちゃんは、相互にそのことを知りながらも、会えば余りそのことには触れない。

彼のペンは、ここにいたる時、いつもサラリと通げて、読む者をして、ハテ、彼女と彼女の仲はどこまでと首をひねるだろうし、私は又正直に、あればあった、なければないで書いてしまうタチなので、どちらかという

と、当のモデル女性を渴仰している同好の諸賢から恨まれるようなこともある。

彼のペンは散漫で、掴みどころがないし、私は会ってから別れるまでを、告白的に克明に書く方である。

彼はフォトを主体としてプレイを絡ませ、対話は少なく、描写が多い。私はドギツク、私自身書くことにハラハラして、ひょっとして引っ掛かりやしないかと内心、忸怩たる思いで、そのくせ、判っきり書ききらないと、自分の気が納まらないタチである。

それが、カメラ・ハントとカメラ・ルポの違いであろう。

判っきり、ものをいう深田菊子は、謂わば私にとって、会話の書き易い女性である。唯その会話が、何処まで許容されるかが問題で

いい換えれば、それ程に彼女の発言は、判っきりし過ぎて、流石の私をも躊躇させるのであった。

雨中の運転は、どうも苦手の私である。フロントガラスの油膜で、前方が霞み、激しい雨足で、窓を閉ざした車内は、私の心を何がなし重くさせる。救いは、彼女の嬉しい饒舌であった。モーターを求めて、車は阪奈道路に向かいつつあった。生駒方面には、この有料道路に面して、いくつかのモーターが、サービスを競い合って林立している。

自虐の方法を訊ねた私に、克明な、彼女の赤らさな告白が続いていた。私は運転に半ば心奪われ、専ら聞き手一方である。

「口と足指を使って、両手を前で縛るの。素ッ裸で、鏡の前に立って、ウチが大勢の男達の面前で曝しものになっていると思ひ込むんだわ。片脚を挙げる、両足を開くと、ウチがウチに命令するの。そう思ひ込んで、することによって、自分でも溺れてゆくのが分かるんよ。縛られた両手で強制的にオナニーされることもあるし、坊主枕にソーセイジくりつけておいて見世物にされるの。自分で命令して、自分が曝しものになって、そうさせられている。そしてアクメを感じるんだわ」

ウンウンと私は、うなずいて聞いている。

「でも、独りじゃ、つまんない。この頃あんまりやらない——必要ないもん。塚本のオジサンに羞恥責めにされていると想像してるほうが、なんぼか愉しいんだもん」

「余程、鉄オジサンが気に入ったんだねえ」

「水車小屋みたいなホテルで、水浸けにされて、オシッコに行かせないんだもん。お布団ビシャビシャに濡らしちゃった。あれは羞恥責めの最高——。ウチ、燃えて、燃えて、その濡れたお布団の上でオジサンをダウンさせてやった」

「あが大変だっただろう」

「もう二度とゆけないわ、はずかしいて……」

オジサン弁償してたわ、お布団代」

「フーン、私にや、とても出来ない」

「この次にはウンチさせるんだって……」

「やる気？」

「ウーン、でも、縛られて浣腸されて、自由きかなかったら、仕方ないもんね」

「よし、私も、その仕方ないやつを、やってやろう」

「浣腸する気？」

「ああ——」

「この間、試しにそっと独りで、やってみた

の。家中留守で、ウチ一人留守番だった時」

「何を浣腸したの」

「イチジク浣腸っていうの、あれ」

「そうだよ」

「あれを二個、入れてみたの」

「そうしたら」

「おなかグルグルいって、辛抱したけど、三分も持たず、おトイレへ駆け込んで、派手にバシャバシャよ」

「それだけのこと？」

「ウン、でも、ポンプや、ゴムの浣腸するパイプなんか、もってないもの」

「どうだった、気持は？」

「スツとした。恰度、便秘で五日間もなかったから」

「便秘症になるとニキビが出来るよ。我慢ばかりしていると便秘が、くせになる」

「ウチら女の子は、外に出た時、どうしても我慢するでしょ。だから、いけないのね」

「今日は、たっぷり浣腸してあげる」

「三日、出ないわ。でも一寸、羞かしいな、出るところ、見られるの」

「それが羞恥責めだよ」

「センサーは他の女の人にも浣腸する？」

「ああ、するね。どうも近頃、アースに興

味を持ち出してきた」

「喜んでさせる？ それとも嫌がる？」

「最初は嫌がるね。排泄につながるから、汚穢を感じるのだろう。しかし、それが、羞恥責めの最高にも、つながるわけだからね」

「センサーは、プレイのあと、セックスするの？ ハントした人と……」

彼女は俄に質問の矢を向けてきた。聞くことが、齒にきぬをきせぬ直截である。

「ケースバイケースだよ。しないとは、いわない。しかし、すべてじゃない。どんな場合もあるからね」

「センサー、ウチとなら？」

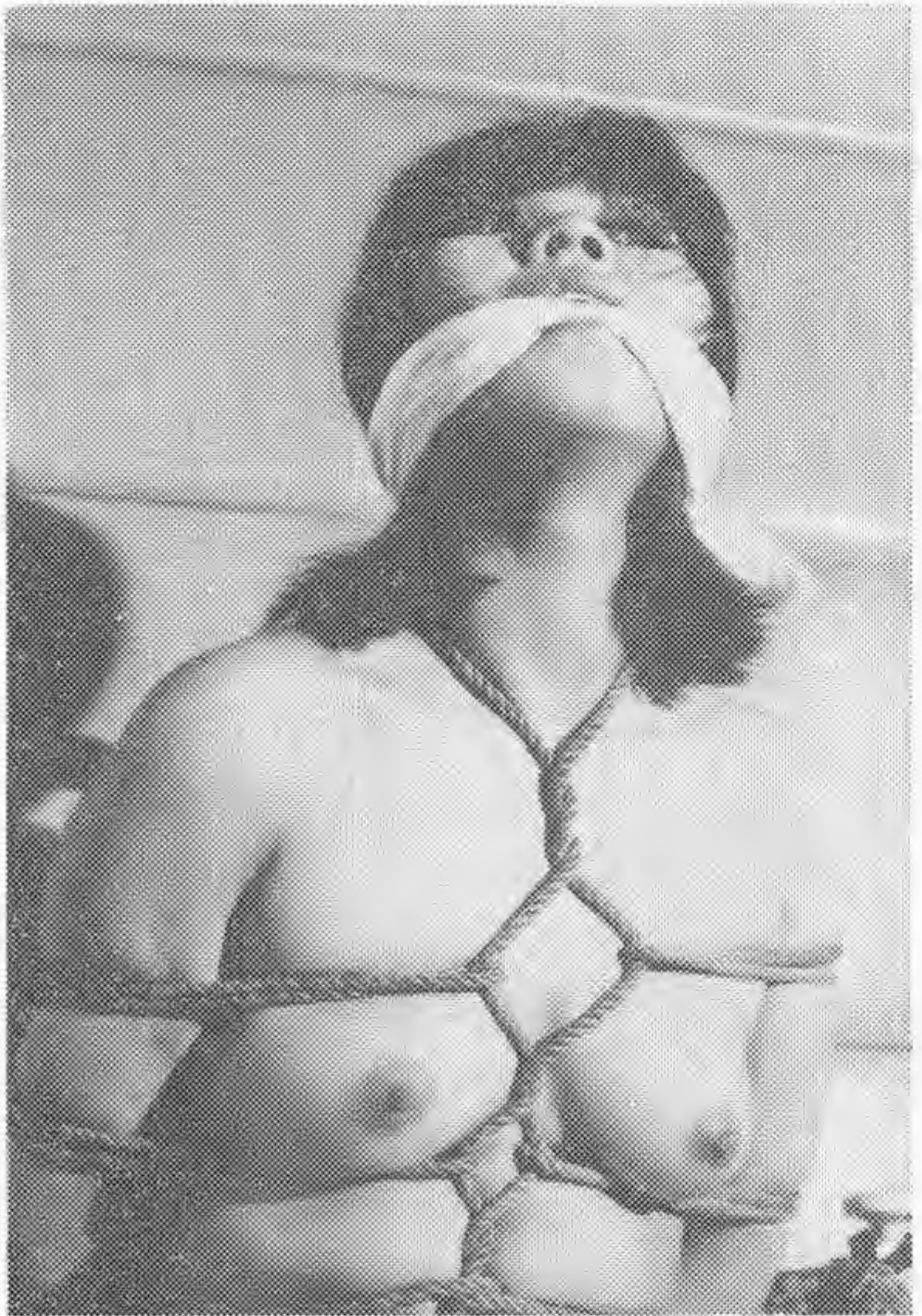
こんなズバリの質問は始めてである。興のつてのプレイの折なら、いざ知らず、これから勇躍、SMプレイの密室におもむかんとする事前だけに、どう応えてよいか一寸、迷ったが、正直に、

「ああ、キミのような可愛いMの天使なら、是非そうになりたい。誰だって、キミみたいな娘なら、そうだろう」

「そう、やっぱり……」

会心の笑みを泛かべて、蠱惑的な紅唇から皓い齒が、こぼれた。

「やっぱりって、どういう意味？」



「SM的なプレイは、セックスの前提として考えていいってこと」

「一概には、いえないがね」

「ウチの場合は、そうなの。ウチを燃えるだけ燃えさせて、何もしないなんて蛇の生殺しみたいやもん」

円らな黒い瞳が、情熱をはらんでキラキラ

と輝く。超ミニのワンピースが、坐っているうちにジリジリとずれて、襷を作って腰の辺りまでまくれ上がり、ニョッキリと豊かな太腿が、これみよがしに躍っている。水色の薄手のパンティが覗けているのも意に介さず、深田菊子は、既に私に心を許しているのか、露わに剥き出しにしていた。

若し私が、パンティを脱げと命じたら、彼女は懼らく、躊躇せず、脱ぎ捨てたかも知れない。とりようによっては挑発的でもあったが、間断なく降る雨で、運転に心奪われ、そこまでの徒然れの心のゆとりのないのが残念であった。初対面という幾許かの遠慮も、それを求め得なかった一因の様である。

生駒の山腹に近づくにつれて、雨雲は低くたれ込め、視界もさだかでなく、昼の一時を少し廻った頃というのに、まるで逢魔が刻のような暗さであった。

この日が、天候の悪日であっても、深田菊子との、愉しいプレイの構想に私の胸は、わくわくと燃え始めている。

雨なればこそ、ドライブ好きの彼女も、私に強いてそれを求めなかった。カラリと晴れた上天気なら、或はプレイに費やす時間を、ドライブの為、さかれたかも知れない。

目指すモーターが雨に煙って見える。降りしきる雨中を、一目散に、私達をのせた車は急坂を駆け上ってモーターへと辿りついた。

× × ×

いかにも心得た調子で、物なれたように、手軽な夏の服を脱ぎ捨てると、遠慮もなく、私の面前で、ブラジャーとパンティを素肌か

ら取り去った。

前触れもなく、豊かなポリウム溢れる、長身の若い全裸が、私の咫尺の間に直立し、否応なく蒼丘が、鮮烈な刺激となって、私の視線を熱く灼きつけていった。

「一緒に入ろうよ。背中、流したげる」

天衣無縫というか、全裸をいきなり曝して、悪戯っぽい眼ざしが私をみつめる。

「キミさえよかったら、すぐ行くよ」

「構うもんですか。どうせ、もうすぐ裸同志でプレイするんだもん。少し早いか、遅いかの違いだけよね」

プリプリしたおしりを振り立てて、深田菊子は、硝子窓越しに、すっかり浴槽の覗けるバスルームへと入ってゆく。

彼女にとって、全裸になることは、既に羞恥の枠外にあるようであった。テレビの、お昼のワイドショーでも、若い娘や人妻が、自分の裸像をとってもらって、当の本人が、さして照れもせず、一種のナルシズム的感慨で、プロカメラマンに撮ってもらった裸像を眺める時代である。

深田菊子の様に、裸身に自信のある女性はむしろ積極的に、男性の前に裸像を曝したがつているようであった。テレビ規制すら既に

あってなきが如く、薄手のブラジャー、パンツ姿の、恰好のいいおへソを平気で出した娘達が、CMに、歌謡番組に堂々と出ている。

ここは密室。その蔽える二つの、一握りほどの布ぎれを外したとて、今更、羞恥を云々する私の方が、時代遅れなのかも知れない。

近頃、又ぞろ腹が出てきたのを気にしながら、続いて私もバスルームへと足を運ぶと、既に湯に浸っていた菊子が招く。

「お湯の中で、塚本のオジサンに縛られたところあるわ。縄が、ずぶ濡れで解けなくて、往生したんよ」

向かいあって、意味ありげに笑う。まるで挑戦するような口吻に、思わずつられて、「じゃあ、縛ってやろうか」

と、私はその気になる。既に菊子の方からSMのプレイへの宣戦は、布告されていた。

「いいわ、縛って……」

ククと含み笑いして、ザッと湯しぶき立てて、洗い場に立つ。

さしずめ、濡れてよさそうな縄、二本をとってきて引き返すと、早くも私の心はプレイに充実していった。

心得て、彼女は両手を背後に回す。筋肉が柔らかいのか、かなり二の腕は上がり、高手

小手に縛り上げてゆく。

胸のふくらみを誇張させて、八の字にかけたその縄に、更に一本を繋ぎ、股縄にして、臀から両手首へとかけ、再び前へと戻して、二重にひしひしと、掛け絞って強くしめつけていった。

深々と喰い入る縄目に、彼女は、あーあと微かに呻いて、裸身を左右にくねらせる。

縄尻とって、湯槽のかまちを跨がせ、快い湯に、二つの裸身が沈んでゆく。

余った縄尻で両足首を湯から持ち上げさせて縛り終わると、もう菊子の全身は危なっかし、自由がきかなかった。

背後から、抱きかかえる私の手が、ごく自然に彼女の胸に伸び、そっとうなじに唇を当てると、菊子は顔をねじって吐く息が、私の頬を甘く撫でた。

「ああ、いい気持——」

彼女は思わず口をついた眩きで独り言し、それが湯加減か、緊縛のプレイか、そのどちらとでもとれる、うっとりとした表情で、陶醉をありありと泛かべ、なやましく私をみつめるのであった。

「ねえ、センサー……」

「なんだい」



「ウチを気に入らった？」

「ああ、すごく気に入った」

「ほんなら、頼みありますねん」

「キミの頼みなら、何だって、きいてあげたいよ」

「ウチを、センサーの可愛い奴隷にして、羞恥責めにしてエ——」

「奴隷？」

「ええ、すごく羞かしいめにあわされて、いじめられてみたい……」

菊子の甘い声が、粗々しく私の嗜虐心を掻き立ててゆく。円らな黒い眸は、しっとりと情に濡れて、女心はM性に熟して、被虐願望を奴隷になりたいという表現で求めている。

「よし、奴隷にしてやろう。唯今より、お前はオレの奴隷だ。どんな命令にも服従すること。よいか」

「ハイ、服従します」

彼女の声は、喜びに上ずって、この芝居がかったプレイの開幕を、心を昂ぶらせて甘受した。

私の顔は自然に綻んでゆく。願ってもないプレイの条件が、彼女自らの求めで成立していったからであった。湯の中で、私の両手が容赦なく彼女の肌に迫っていった。

菊子の快美ゾーンは広域に亘っていた。

私の指の触れるそこかしこで、彼女は憚りなき喜悦の歓声をあげ、全身は電流をかけられたように、わなないて、次第に自己を喪失していったのである。喰い込んだ縄目に尽ならぬ思いで、彼女は駄々っ子のように、身をくねらすのであった。

湯から引揚げると、濡れて固く緊った縄目を、やっと解きはぐし、改めて両手首だけを簡単に縛ると、タイルの上に長々と寝そべらせ、手首の縄尻を水道の蛇口につなぐ。

期待に弾む恍惚の瞳が、私を凝視する。

浴室の片隅に、掃除のあと、置き忘れていたのか、薄手のゴム手袋の片一方が投げ捨

てられてあった。

私の関心は、菊子の、かたちよいアヌスに激しく傾斜していった。

体中に石けんをぬたくって、すべすべした豊かな若い肌を洗浄する作業は、こよなく愉しいものであった。仰向けに寝そべった俤、彼女はすべてを任せていた。牝鹿のしなやかさで、スラリと伸びた両肢を心なしに上げ、私の快樂の仕事を、し易くしていた。

ヌルついた左手に、ゴム手袋はスリりと嵌まる。両足を握って屈曲させると、タツプりと石鹸の泡を立て、私のゴム手袋の指が、A感覚の刺激を求めて走る。

たらいの鯉が、追手を遁れてパシヤリと水面を叩いて撥ね返るように、刹那、菊子の裸身がタイルに躍った。

「あっ、いやーん、やめてーえ」

「奴隷だ！」

「ハ、ハイ」

ぐったりと腰から下の力を抜いて、彼女の息は切なげに弾んだ。

きゅっと私の指のつけ根が締めつけられるのがわかる。固型の先端が、ゴムを通して私の指先に存在を伝えた。それは石コロの様にかたく、ぬめついた感触を指先に送った。

三日分の堆積が、そこまで降下しているのだ。コロコロした排泄を、この眼でジカに確かめたい欲望に激しくかられ、しめつけられた指先を外気に、とり出す。

鼻先近く、ゴム手袋をかざすと、泡にまみれた指先に、微かに黒褐色の附着したものが懐かしいような、特有の臭気を鼻腔に送りこんできた。

私は奴隷に対する洗礼を与えるべく、ながながとタイルに伸びた、泡立つ女体を跨いで立ちほだかると、溜まっていたものを、一気呵成に吐き出していった。

奔流の勢いに泡は流され、降り注いだあとに、輝くばかりの、うっすらと桃色に染まった、あざやかな裸身が、洗礼を受けて、一入美しく息づいていたのであった。

× × ×

SMのプレイに徹すべきか、緊縛に主体をおいてフォトを撮るべきか——プレイに興到れば、いつも遭遇する問題である。

渴仰の女体を思う存分、撮りまくりたい。しかし既に、私の左手のゴム手袋が、愉しいプレイの味わいを嗅ぎとっていた。

深田菊子は奴隷になることを望み、私も又洗礼を与えた今、むなしくフォトを撮ること

のみに費やす時間が惜しかった。

カメラ・ハントと銘うった以上、プレイの模様の幾許かの記録は、誌上に発表せざるまい。使命感のようなものを感じつつ、私は縄を握って、菊子に近づく。

カメラを三脚にセットし、ストロボを装填して、長尺レリーズを繋ぐ。それだけの準備は、とりあえずしてある。

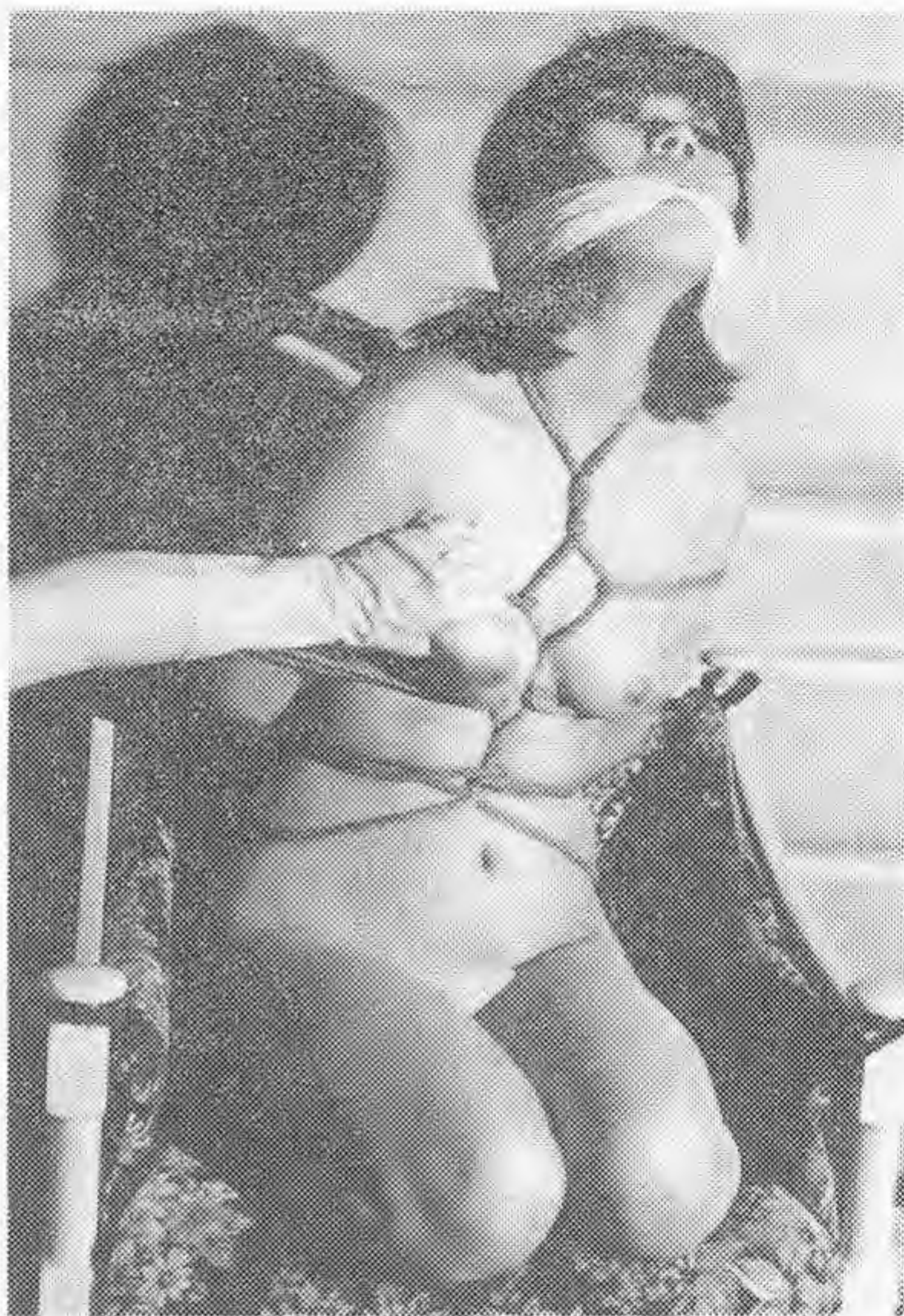
今の私にとっては、縛るという行為は、ほんのSMプレイの便法に過ぎない。女体の自由を拘束するのが目的で、かつてのように緊縛の種々にあれこれと取組み、激しい斗志を燃やしたのが、まるでウソの様であった。

二十数年、緊縛をやり通してきた今、すべての緊縛の方法は、一応、出尽した感があった。どんな縛り方をしても、いつか以前に、それを行使したように思われ、何がなし煩わしくなってくるのである。それは、すべての緊縛をやり通してきたものの、飽和の贅沢なのでもあろうか。

私は緊縛の場合、しばしば股縄をかける。肌への喰い込みが激しければ激しいほど、強烈な刺激はあっても、さて、SMのプレイとなると喰い込んだその股縄が、反対に最高の邪魔ものになるのである。そのくせ、私は今

も、相も変わらず、その愚の骨頂を、繰り返
し、繰り返して続けた。

雁字搦目の緊縛——。これも見た眼には、
強烈さを感じさせ、被虐図の最高のポーズに
みえる。しかしその結果、私の責め手は途惑
い、女体責めの小道具は、行先を求めてウロ
ウロすることも往々であった。



深田菊子は、羞恥責めを求めている。

その羞恥の根源は、何ものにも遮られず、
且、思いの尽でなくては叶わなかった。

羞恥への自由さを求めて、縄はなるべく簡
潔に使用しようと心掛ける。

そのくせ、永年の習性は、いざ縄を握れば
やはり丹念に、そして幾許かの緊縛美を求め

て走り勝ちであった。そして、縄の掛け方と
いうのが、つい辻村流ともいえる、自己の好
みに偏向してしまっているのである。

首にかけて、よじってゆく。腋の辺りで結
んで背後に廻し、両手を縛して、二の腕から
胸のよじりにかけ渡して、引き絞ってゆく。

こうした縛り方を過去、何十回、試みたこ
とであろう。

今も又、深田菊子に対し、この自己流の緊
縛を、飽きもせず始めている私であった。

縄は白肌に引き立つ茶褐色の麻縄である。
下半身を自由にして、縛り終わると晒布を
齒に喰い込ませて猿轡を、かませる。

この洋風の間にふさわしい、デラックスな
椅子に坐らせて、とも角も私はカメラに戻っ
た。余香の微かに残るゴム手袋を脱ぎかねて
その尽で種々のポーズを、とらせる。

リリースを使って、猿轡ごと髪を引っ張る
私。ヌメつくゴム手袋で、かたちよい乳房を
揉みしだく私をカメラに入れる。菊子とプレ
イしている、裸身の私自身の姿をも、コレク
ションの片隅に留めておきたい、自己顕示欲
が、私の姿をも同時に捉えていた。

彼女の反応は鮮かであった。私の奴隷とな
って、私の意の尽に、被虐の欲びを素直に現

わして憚らなかった。

乳房への反応は、とりわけ敏感であった。ぐみの実のような赤い粒を攻撃的の的にすると菊子は身をよじり、声にならぬ呻きの歓声を高々と挙げて、それは牝獣の咆哮にも似て、キリキリ奥歯をかみならして、果ては、私を振り切る勢いで、椅子からずりおちて、薄紫の柔らかなカーペットの上を、のたうち廻るのであった。

しきりに何か訴えようとして唇を動かしている。猿轡を外してやって

「どうしたの？ 縄が、きついのかい」

と、顔を近附けて声をかける。

「ああ、すっとした。きついけど我慢出来る……。あのう、ウチ、おシッコがしたいの」

ああ、そうだったのかと、思わず苦笑がのぼる。塚本氏のレポにも、確か、プレイの最中に、おシッコを訴えるくだりがあったことを思い出し、この娘は、興奮し、熱い感情が熟してくると、おシッコしたくなるクセがあるのかと可笑しくなる。

「させないよ」

「だって、したいんだもん」

「じゃあ、ここへするさ」

「又、塚本のオジサンみたいに弁償する気」

「それも困るな」

「だったら、ゆかせて……」

カーペットに転がった俤、この可愛い妖精は、駄々をこねるように腰をゆする。

こんなことなら、カテーテルを持ってくればよかった。それも羞恥責めの一つの手段でもあるからだ。唯、カテーテルの場合、よく煮沸するかアルコールにつけて、滅菌消毒しないと、雑菌が尿道に侵入して尿道炎を起こしたりすることがある。数カ月前、カメラ・ハントにならぬ、ある女性にカテーテルを使用して、そのあと、軽い尿道炎を起こされ、おシッコをする時、気持ちが悪いと訴えられ、なじみのドクター氏に診て貰って、マイシン系統の薬をのんでもらった、苦い経験があった。デリケートだから、とにかくカテーテルは使用出来ない。

フト面白い考えが浮かんできた。私は大急ぎでバスに行き、ポリ洗面器を手にして引き返してくると、

「さあ、ここへするんだよ、しゃがんで……」

観察してやるからさ」

と、転がった女体を抱きおこす。

「ここへ、すんの？ だって、顔を洗うんですよ。これで——」

「いいんだ、いいんだ。何なら、芳野眉美のように、口を当てて、のんでやってもいい」
「へー、センサーそんな趣味もあるの？」
一寸あきれた口調で、大きな黒眼が私をみつめた。

確かに私には、幾分のマゾっ気も、ある様だ。深田菊子のような、ピチピチした若い娘の、新鮮なハルンなら、のんでもみたい欲望に、フト利根的にかられたりもする。或は少量で吐き出すかも知れない。しかし、芳野眉美のいうように、じかに口を当てて、吸うように美酒を汲むその愉悦は、又別もののもでもあった。それなら出来ても、一旦コップなり洗面器に出されたものを口にするほどのマゾッ気も勇氣もなかった。

「撥ね返って辺りが濡れるのと違う？ こんな浅い洗面器にしたら……」

「それくらい、いいじゃないか。布団をベチヨベチヨに濡らしたのに較べたら——」

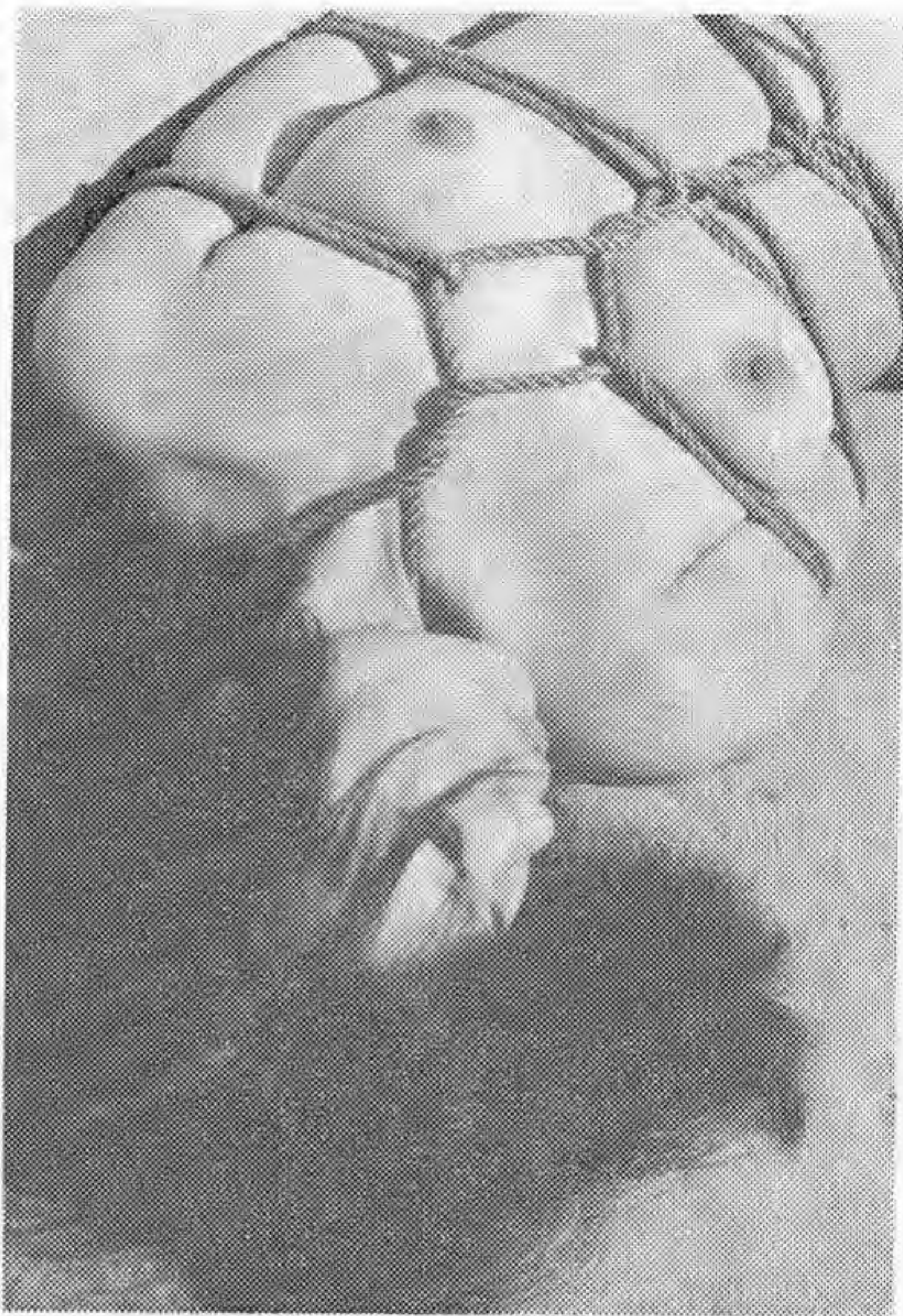
「羞かしいわ、センサーの前で」

「それが目的さ」

「いいわ、思いきって、やっちゃお」

深田菊子は蹲踞の姿勢をとった。放射する位置を考えて、ポリの湯桶を股下におく。

「出るわよう」



「一寸、待った」

あわてて、三脚からカメラを外し、私は彼女の前に長々と寝そべって、咫尺しせきの間から、その決定的、瞬間をねらった。

バシ、バシ、バシ……と、ポリの湯桶に叩きつける激しい雨足めいた音。しぶきは四散し、その霧のようなしぶきが、近々と伏せた

私の頬にもかかり、カメラにもはね返った。

時間は長くはなかった。余滴を垂らして、夕立の止んだ時点まで、私はせわしなく、何度シャッターをきったことだろう。そして、二度に一度は、ストロボの充填の、いとまもなく、無駄にシャッターを押す慌しさであった。カッとした頭脳には、ストロボ充填の、

ほんの短い時間すら、待てしばしなかったようだ。

蹲踞の姿勢から、自分で立ち上がろうとして彼女は腰に力を入れた拍子に、（ブン）と小さく、可愛らしいオナラを落として、

「あらッ」

といった。そのしぐさが、こよなく愛らしく、カメラを投げ捨てた私は、菊子を抱きしめると、思わず口走った。

「拭いてあげよう。ペーパーは要らないよ。さあ、横におなり」

私は長々と自分の舌を出してみせていた。

× × ×

事実、その行為はM性であろう。しかし、私は菊子の自由を奪って、私の思いの尽に、自分の舌端で、菊子を翻弄している。そこにSMプレイの限らない愉しさがあった。

存分に、私は味覚を満喫し、彼女も又、放恣なポーズで、自分を見失って、そのポーズを私のために開放していた。

縄を解くと、待てしばしもなく、次のプレイに移ってゆく。

「さあ、そこへ四ツ這いになっておしりを高々とあげてご覧。可愛い私の奴隷ちゃん」熱気の醒めやらぬ上体を起こすと、うるん

だ瞳が私を、なやましげにみつめ、

「ハイ、こうですか」

と、いわれた通り、双臀を屹立させ、菊子は高々とオシリを持ち上げた。

「そうだ、よしよし。そのポーズで、両手をうしろへ回して組む」

従順に彼女はポーズをとる。私の狙うのがゴム指の攻撃で、うっすら色づいて微かに蠕動していた。

めらめらと燃え上がる野望を押し殺して、私は愛用の斑^{まだら}の縄を、菊子の両手に絡ませ素早く縛り終わると、背から両肩で分けて膝裏へと掛け渡し、腕ごときつく、何重にも締めていった。ローマ字のZ型に縛り上げたのである。縄は、斑^{まだら}縄の長いのを一本きり。

「どうだ、匂うか？」

ゴム手袋を鼻に近づけ、口に銜えさせる。

菊子はイヤイヤという風に首を振った。

「分からないというんだね。じゃあ、じっくりとキミ自身のものを味わわせてやろう」

「イヤーン、センサー、かんにんして」

甘えた鼻声で菊子は、いやいやをする。その声は、拒否とは反対に、すっかり羞恥責めの、被虐の旨酒に酔い痴れた甘えであった。

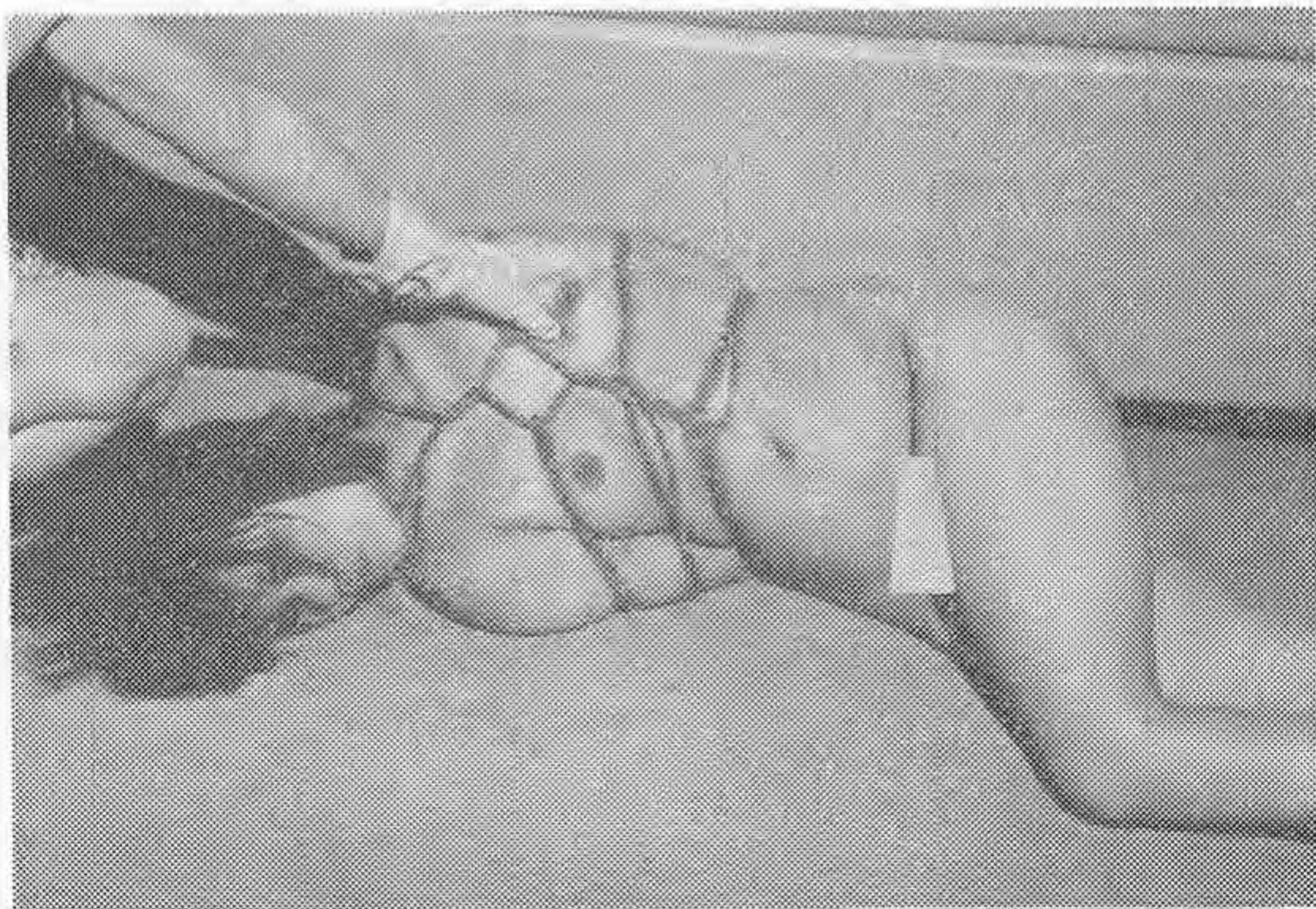
「いや、許さないぞ。奴隷は服従だけだ」

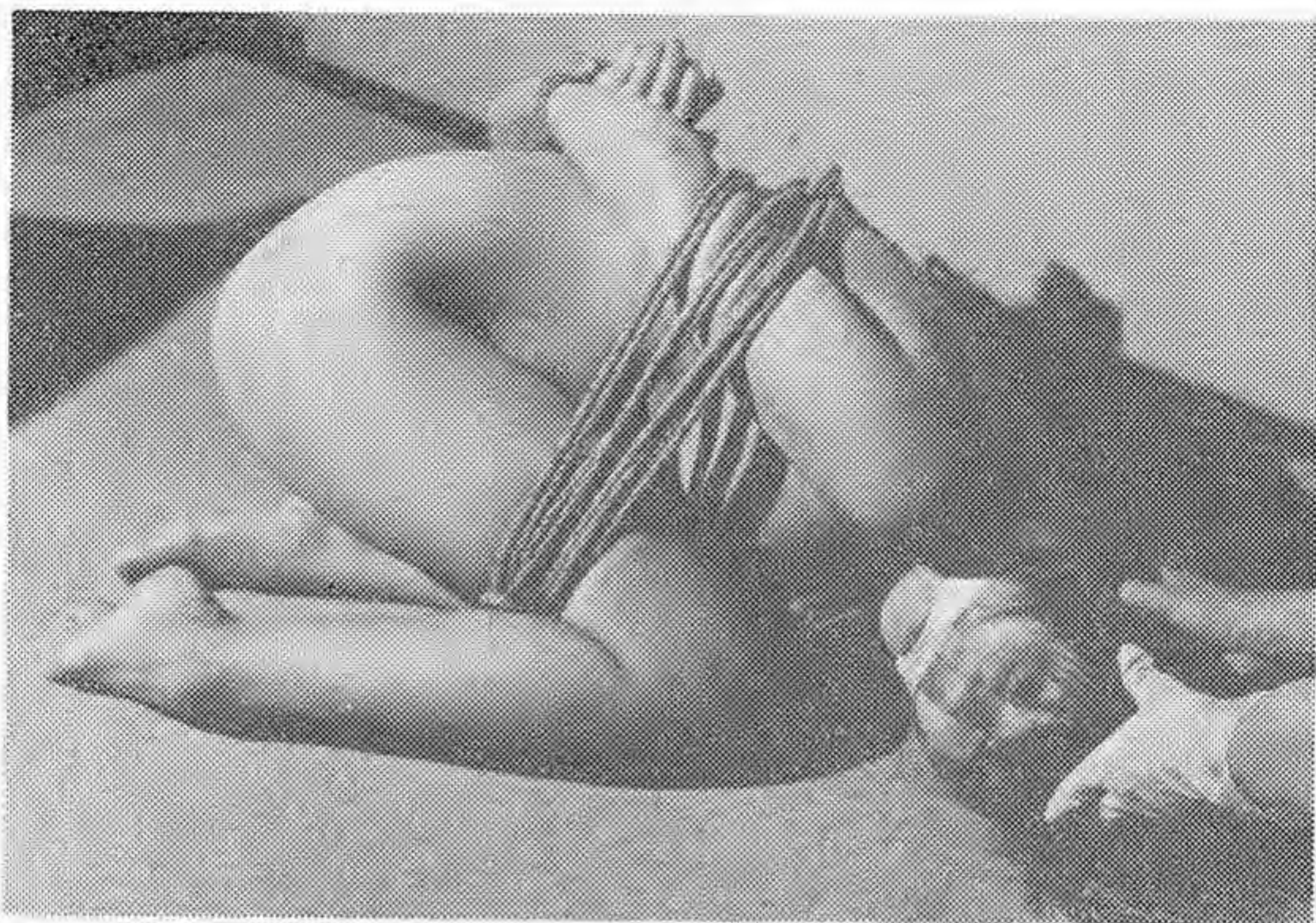
わざと、いかめしさを顔に湛え、私は矢庭に白い晒布を口腔に深く喰い込ませて猿轡をかました。膝から下の両足をバタバタさせて、彼女はウムムと呻く。浴槽で縛った、両足首の縄目が強かったのかいまだに足首に、くっきりと縄紋を遺して、あざやかである。

ゴム手の指先は、滑り止めのためであろうか、細かい粒状にザラついている。これは思いがけないハプニングの小道具であった。少々蒸し暑かったが、A感覚の深奥を探究するのにも、このゴム手袋は最適で、私はひどく気に入って、はずす気になれない。

軽く押すと、他愛もなく彼女は横ざまに転がって、浮き上がった片脚をバタバタさせる。

私の求める、羞恥責めの場所は、指呼の間にあった。





用意してきたオロナイン軟膏をとり出す。滑潤の役目と擦過傷にもよい、この軟膏は痔にも効くと宣伝されていてプレイには好都合なシロモノである。

気愧かしさを全身に漲らせて、菊子は私の行為に、可愛いおしりを顔を歪めていた。「あッ！ あッ！」

と切ない呻き声が、噛まされた猿轡の奥から洩れ、趾指が硬直してピクピクと躍る。

うっすらと色づいたゴム手袋の指先に、私の大脳神経は遅い活動を起こしている。

ぐいと鼻をつまみ上げ、

「どうだ、いい匂いだらう。よく嗅ぐのだ」

ツンと尖った鼻先を、私はその指頭で押えつけ菊子の羞恥心を煽り立てるのである。

もがいて、猿轡は舌端を押えて、口腔の奥に深く喰い込んでいる。開かれた口腔の奥

へ、私の指頭は容赦なく進入してゆく。

「あう、アー」

と、声にならぬ呻き声を挙げて、彼女は私の指先を吐き出そうとするが、唾液にまみれた指先は、菊子の口腔を隈なく、撫で廻していった。

もう、こうなるとカメラは煩わしい道具に過ぎなくなってきた。暫くは放擲して、忘我の境地で、白熱のプレイに熱中したがっている私である。

いよいよ、三日分の固型物のお出ましの段取りである。

おしりを高々と、もたげさせておいて、エネマシリンジを、とり出してくる。

液は体内に還元させるべく、ポリの湯桶にその俵、入っている。

琥珀色に、たゆたう液体は、微かな泡立ちを浮かべて、湯桶に三分の一ばかり溜まっていた。

片手に湯桶を持ってエネマの一方を、したす。既にオロナイン軟膏の塗布と数度の攻撃で、媚を含んだ桔梗の花は、戸惑い乍らも、ゆったりと弛緩している。

黒いくちばしは、苦もなくスルリと、その姿を消す。

把握する赤球——。

力をこめて、二度、三度——。

すると、琥珀の液体は吸い込まれて、目に見えて減量し、あたりに、かすかな懐かしい香りを撒いて移行し、還元してゆく。

菊子の腹腔が微かに鳴っていた。

何か訴えたげであるが、私は意地悪く、猿轡を外さない。ことここに到らば、又ぞろ注文をつけられるのが、うるさかったからである。私の気の済むまで、トコトン、プレイに徹するつもりであった。

更に、石鹼水の、追加注入をするつもりでいたが、咄嗟に考えが変わる。余り大量に注入すると、激しい排出と共に、固型物の突進が早すぎて、うっかり見落としてしまう恐れがある。あとは、湯桶を洗いがてらの、濃い石鹼液を少量、注入するだけで止めておくことにした。そろそろと顔を出す、石ころのような固型を熟視することに、羞恥責めの極限を感じたからに外ならない。

体を起こしてやると、流石に苦悶のかげが菊子の眉間に刻まれていた。

しきりに首を振って、あうあうと呻き乍ら何か言いたげである。

やっと猿轡を外してやる。自由になった第

一声は、

「ああ、おなか痛い……早く

トイレへゆかせてエ」

と、哀願する悲痛な叫びであった。

「ダメ、ダメ。もう少し、我慢するんだ」

「だって、もう洩れそうよ。

汚すわよ……」

「もう少し」

「縄をほだいてエ。あっ、もうダメ。お願い、ゆかせて」

「ホラホラ、その苦しげな顔を撮ってやる」

締めつけられた腹部がグルグルと鳴っているのが私の耳にも判っきりと聞きとれた。

「センサーの、いじわるウ。

苦しいのよ」

無理にニッと笑って、閃光が走り終わると、又、眉間に縦じわが刻み込まれる。

もうそろそろ、ここらが限度と、バスに放ってきた濡れ縄を一本とりに行き、素早く





解いていき、菊子が占めたと慌てて立ち上がろうとするのを、ぐいと引き寄せ、じっと濡れた縄で、両手首を背後に縛る。

「ああ、早く、センサー。もうダメ。本当にダメ……出そう」

菊子は必死で、こらえていた。五体をふるわせて、両脚で地団太ふんでいる。

トイレでやらせては、スナリして曲がない。この部屋でさすとなると、万一、勢い余って汚しても、あとが厄介である。さりとてこのチャンス、ムザムザとトイレへ、その俚ゆかせる手もない。

私は大きいビニール風呂敷をカーペットの上に拡げた。ほぼ、一米平方はあろうか。ついで、デラックスな椅子を、三十センチばかりの間隔をおいて、並べる。

既に彼女は、私の意図を察

して、

「いやよ、いやよ。羞かしいわ。ねえ、トイレへゆかせて」

と、しきりに訴える。それを無視して、私は先刻のポリ湯桶を、椅子と椅子との中心に据える。多少の降りこぼれはあろう。勿論ビニール風呂敷も、どこかへ捨てる気である。支度は万端、整った。

「さあ、椅子にのっかって、跨ぐんだよ。いいかい」

「イヤ、イヤ、かんにん」

哀願の眼が、いじらしい。菊子にとって、それは、最高の羞恥の土壇場ででもあったことだろう。

「さあ、早く——」

せかされて、遂に観念したのか、もう我慢の限界にきたのか、彼女はよろよろと、よろめき乍ら、左右の椅子に片足ずつのせて、跨がると、じりじりと腰を落としてゆく。

約一米離れて、飛び散る、しぶきから避難して、私はカメラを構える。その一瞬、私の心臓は、こよなき昂奮で、早鐘のように打ち始めていた。

「センサー、こんなところ見せても、ウチをいやにならない？」



「ああ、もっと好きになるだろう」

若い娘の、切実な最後の訴えであった。

深々とうなだれると共に、ザーッと、滝の様な吐瀉が、ポリの湯桶に潑ね返る。

鈍い琥珀のつらはは、直截に、糸を引いて裂くように、底辺に叩きつけられて、くろぐろとした塊りが、一丸となって顔を覗かせ始

めた。

観念からいえば細く長いもの――。

それが、黒砂糖の塊りが融け始めたかの如き形態を徐々に覗かせ、この太々しい居候は遂に私の攻撃に堪えかねてか、モックリと顔を曝したのであった。

水分を吸収して、通せんぼをしていた黒塊がドサリと落下すると、続いて堰をきったように、徐々に色薄くなつた連中が、きれぎれに飛び出して、果ては、ふやけたシンガリが、身を細らせて、尖端するどく、真紅の湯桶に落下してゆくのであった。

深くうつむいて、ウンウンと力んでいた声が徐々に納まり漂う異臭の中で、菊子はやっと顔を上げ「ウーン、センサーのばか……」

と、この現代っ娘は、羞恥に頬を染めて、消えも入りたげに呟くのであった。

後手の縄を、椅子の凭れに絡めてあるから独りでは立ち上がれない。蹲踞の姿勢は、後手の自由がきかぬだけに、かなり苦しそうであった。

力を抜くのが一目で分かり、人体の精巧さに一驚する思いで、私はゴム手袋を嵌めた手で羞恥責めの実態を確かめようとしていた。

「バカねえ、手につくじゃない」

「だからチャンと嵌めているんだ」

「その手で又ウチの顔を撫で廻すんですよ。」

「いやよ、ババちいわ」

「フフフ」

思わず含み笑いが口をつき、私は素早くビニールの風呂敷ごと、湯桶を包み込んで、トイレに捨てに立った。

赤ン坊の排便したおシメ同様の、いやらしさを感じない、エンゼルの残滓である。

プレイと割り切れば、これも愉しい作業に思われてくる。

縄尻をとくと、やつこらさと、菊子は伸々と立ち上がった。

「ああ、すつとした。でも、こんな羞かしいこと、始めて。やるわねえ、センサーは」

と、笑顔を、とり戻す。

「この湯桶で顔でも洗うかな。さあ、も一度お風呂で、ゆっくり洗いなよ」

と先に立つと、

「ええ、匂いが、しみついたみたい。お部屋中、匂うわよ。変に思われないかなあ」

と、鼻をクンクンならして、ついてくる。

燎らかに、私自身、激しい昂奮を覚えていたようである。

×

×

×

これが、SMプレイの醍醐味なのであるか——。

犇と、へばりついた深田菊子の裸身に絡まれて、浴槽でのたわむれのあと、私達は、豪華なダブルベッドに寝そべっていた。

自分で判っきり分かる、激しい疲労が、私をヘトヘトにさせていた。

精神的なアクメからくる、性の昇華状態なのである。

疲れるほど、私はこれといって動いてはいない。深田菊子とも、肉体的には結ばれてもいない。それでいて、昏迷に陥りそうな疲労を覚えているのであった。

羞恥の極致を、してやったりとする、その嗜虐の快感が終わった時、前触れもなく訪れ

た真空状態なのであるか——。

「センサー、すぐく疲れはったみたい。大丈夫？」

「ウン、どうしてだろう。妙に草臥れたよ」

「ウチのせいやないわ」

「そうだ、キミのせいじゃない。しかし、あれは強烈な刺激だったよ」



「塚本のオジサンとプレイして、お布団ビシヨビシヨに濡らした時も、すごく羞恥感じたけど、今日はあの時より、もっと羞恥したわ。一番愧かしい恰好、見られるんだもん」

「その羞恥も分析すると、生きとし生きる人間は、すべて排泄は絶対的に必要なものな。吉永小百合だって、池内淳子だって、君

に似ている弘田三枝子だって、みんな排泄している。独りでやれば何でもない日常のことが、人に見られているというだけで、どうしても、こうも羞恥の対象になるのだろうか。夫婦交換や、一室で乱交のセックスが、今ではさして羞恥の対象にならず、排泄が、ひどく羞恥を感じる。交換プレイや、乱交はすべて

がすべてやらないが、排泄は老若男女を問わず、すべてやる。その普通のことが見られると、かくも羞恥の対象になるのが、おかしいのだよ。その羞恥する女性が、幼児や赤ん坊の排泄なら平気で見てるんだがね」

「そんなむづかしいこと、わかんない」

「中国では排泄をみられても案外、平気なんだよ。戦前、私が瀋陽の平康里^{ピンカリ}という色街で遊んだ時、その抱えの姑娘達は案外、平気なんだ。トイレだって、扉もなければ、仕切りもなく、漆喰に溝をつけてあるだけだ。姑娘達は

向かい合って話をし乍ら、大も小も平気で足していた。男女の便所という程の隔りもなく姑娘達がしゃがんで用を足している側を通して便所にゆくのだが、日本人の感覚として、反って私の方が羞かしかったくらいだ。若かったのだなあ」

深田菊子は、そんなものかという風に、黙

って私に寄りそって、述懐をきいていた。文明の進歩と共に、トイレは急速に個室化しつつある。昔の公衆便所の大らかさも追々失われてゆき、デラックス化するにつれて、あの愉しい落書きも影をひそめてゆく。タイル貼りのトイレには書けもせず、書く気もしないであろう。

ストリップパーが特出しでも不思議に、一様にアヌスを曝すことは少ない。

羞恥心の薄れつつある昨今最後の羞恥のとりでは、アヌスへと偏向してゆくようである。だからこそ、私はその羞恥の剔扶を求めてA感覚へと傾いてゆくのかも知れない。

「でも、矢張り、恥かしいもんは恥かしいわ」

汚辱に繋がるだけに、文明人は、それを羞恥に転換するのであろうか。

彼女の言葉は直截である。恥かしいものは恥かしい——その恥かしさを剔扶するところに、羞恥責めの真髓が秘か



に包含されているようである。

「ねえ、センサー。もう縛らへんの」

菊子は、物足りなげに私の顔を覗き込む。

「ああ、もう少し、やろう」

「ウチ、奴隷になったんやもん。オシッコもしたし、ウンチもしたし、だから、もっと羞かしい恰好にして虐めてエ」

菊子のいう羞恥責めは、セックスに繋がっているようであった。

燃えかけては途切れる私のやり方に、内心不満を抱いているようでもあった。

塚本氏のルポでも書いていたが、彼女は積極的に、自分を露出したがる。おシッコをしても、宿便を吐き出しても、それは日常茶飯事に近くて、私自身、羞恥責めに満足しても彼女自身のリビドーは、そんな行為では一向に昂まらなかったのかも知れない。

そういわれれば、日頃は常に持ち出す女悦の器具が、今日は未だ一個も登場しない。

考えようによっては、私独り、脳裡に描いた羞恥責めを敢行して、満足し、疲労しているようでもあった。

京の市松人形のようにカットした菊子の髪を撫で、それに鼻をよせて匂いを嗅ぐうち、私の嗜虐の情念は急激に回復してきた。

（よし、もう一丁やったれ。桃源境を彷徨さ

せて、愉悦と恍惚の淵にひたりきらせて、あわよくば元気を出して、私も一丁——）
それが、いくつになっても、男の欲望であるらしい。

軽く唇にチュウをすると、勢いよく体を起こす。

「さあ、やろう」



いつもの白いロープを引き出して菊子の手をとると、例によって例の如き、私風の縛り方で、軽く一筋、股縄をかけて椅子に坐らせると、思い切って股一杯に両脚を拡げさせ、右足首のみ、凭れを通して、引っ張る。もう一方を縛らなくても菊子はこの放恣なポーズを自ら求めているのか自由の片脚を一向に閉じようとせず、晴れ晴れと、開き切りにして妖精めいた黒い瞳がキラキラと、妖しい輝き

を帯び始めていた。

黒い瞳のエンゼルは、自由奔放が、お好きらしい。

股縄を喰い込ませると、私の快樂は、縄に遮られて、思うように働かない。私は幾分、左にずらせた。

深田菊子は、それをどうとったのか、立てていた自由の片膝を、ぐんと伸ばして、膝掛けに足をのせて、自ら一杯に拡げ、どうにでもしてくれといわんばかりに、艶を含んだ双眸が、熱っぽく私に挑みかけてきた。

しゃぶりつきたいような妖精の肢体は、凝脂を泛かべて爛熟していた。

豊かな丘にチョッピリ覗く、かたく締まったベルを押すと、訪れは須臾にして女体の隅々まで伝播し、菊子は息弾ませて来訪を歓迎した。

神経過敏なベルが、私の第一の攻撃目標であっ

た。

ちっぽけなクリップで挟んだ刹那、彼女は「あーッ、いたーい」

と叫び、クリップに細縄をゆわえて、拍子を取り乍ら、引っ張ると、大仰に快樂の呻きをあげるのであった。

ついでニコのクリップが、噛みつく場所を

求めて一直線に進む。

敏感な果肉が、強いバネの力で挟みつけられて、菊子は切なげに苦悶の眉を、しかめている。

私は彼女に気付かれぬよう、そっと、カセットテープをセットした。

ま白い剥き卵のような双臀が、痛みにたえかねる如くゆすられ、微かに金属の触れ合う音が静かな密室の空気を震わせた。

私は無造作に、盛り上がった乳房をピシャピシャ叩き乍ら、片手は、クリップをピクピクと引っ張っていた。

「あーん、いたーい。センサー、かんにんしてえ」

甘えた声で、菊子は苦痛を訴える。その声はテープが、余すところなく、とらえている筈である。

男の低く押し殺した声はテープでは、ききとれにくい。私は意識して、彼女の耳許に口を、よせて囁く。

「この部屋は、特殊な仕掛けで、覗けるようになっている。誰かが



覗いているかも知れないぞ」

「本当！」

思わず、素頓狂な声をあげて、菊子はキョロキョロと辺りを見廻した。

「ハハ、そんな気のつくような処に仕掛けていない。この私だって、実は第三者の強烈なプレイを覗いたことがあるんだ。私とキミがここへ来たことを知っているから、きっと覗いているよ」

「だって、だって、センサー雨だから、ここへ飛び込みに入ったんでしょ。ウソ、ウソ」

ムキになって彼女は否定する。

「ウソなもんか。この生駒の周辺のモーターは、すべて、お馴染みさ。だから、大阪から雨中を、わざわざ、ここまできたのじゃないか。キミの、その丸出しが、まともに覗ける位置にあるんだよ」

「イヤ、イヤ、センサー。人にみられるのなんて、いや。はずかしい」

「何が羞かしいものか。こうしてやる」

私は、彼女の自由の片脚を高々と挙げて、一杯に開ききり、これみよがしに、ぐいぐいと、ゆすった。クリップが揺れて触れ合い、カチャカチャと、なった。

「もっと、思い切り見せてやるのだ。お前は

SMの奴隷だぞ。ホラ、こうしてやる。どうだ……」

ベルを挟んだクリップの細縄を、ぐいと引っ張って吊り上げると、首に回して、しっかりと結びつける。

あと二カ所のクリップを外して、荷造用の粘着テープをベッタリと貼って、左右に引っ張って、貼り広げる。

「いや、センサーやめて。愧かしい……」

「やめないぞ。もっと羞かしめてやる。いいショウだ」

爛熟の果肉のあざやかな菱形に、私の嗜虐心は一入、昂揚し、近々と鼻を近づけて、酸郁と匂う桃李の香に酔い痴れていった。

舌端が、万遍なく恩恵を与えてゆく。

恍惚の境地に、菊子は急速に陥ってゆき、甘き欲びの呻きが、容赦なく私の耳朵を圧倒していった。

裸の指が、ごく自然にAの感覚を求め、快い刺激を、ジーンと大脳神経に伝えた。

「誰かに見られてるのねえ。いいわあ見られたって……。ああ、見られても構へんわあ」

恍惚の陶醉に、彼女の羞恥の均衡は既に失われていった。瞻言のように、キレギレに眩き、縛られた身をよじって、若い娘は欲びに

泣いた。

唇を粘らせて、私は嗜虐の声を吹き込む。

「多勢のみにている前で、気の遠くなる程、羞恥責めを曝してほしいといえ」

「ああ、皆の見ている前で、思いきり羞かしめに会わせてほしい……」

「よしよし、いい子だ。代りばんこに、寄ってたかって、いじめてやる。いいな」

「ハイ、皆んなして苛めてほしいわ」

「浣腸は好きだな」

「ええ、好き……」

「判っきりいえ」

「浣腸が好きです」

恍惚の呻きの、絶え間、絶え間に、誘導的な言葉の責めが挿入されていた。菊子は忘我の境地で、命じられた通り復誦した。それは喜悦の極致を彷徨する、アクメの発声の代替にも似た、甘受の連鎖反応でもあった。忘我の恍惚さめて、自分が何を喋り、何を応えたか、懼らくは、判っきり記憶していないかも知れない。

恍惚と欲喜の余り、男の発言を、すべて許容する時が、しばしばであったからである。

そのために、私はカセットテープに、すべてを吹き込んでいる。



甘き酔いから、さめて、艶句のきれぎれ、
 瞻言を聞き返した時、深田菊子は、新たな羞

恥の思いにかられるに違いなかった。
 復誦の句が、どぎつければどぎつい程、卑

猥極まる程、その羞恥の
 反応は激しい。それが、
 新たな羞恥責めの起点と
 なって、更に激しさを加
 えてゆく一つのてだてで
 もあった。だから――。

私の強要する語句も一入
 生々しく、どぎつさを加
 えてゆく。
 「浣腸したあとに栓をし
 て、こらえるだけこらえ
 させてやる」

「ええ、こらえるわ。い
 いという迄」

「よしよし、そしておい
 て鴨居に両手を伸ばして
 縛りつけ、両脚をM字形
 に鴨居に縛って吊り下げ
 てやる。吊るしておいて
 栓を抜く。お前は、皆の
 見ている前で、吊るされ
 た後、高々と排泄を始め
 るのだ。いいな」

「ああ、皆のみにている前で、ウチは……」

「そうだ、皆のみにている前で、黄金の山を築
 くのだ。両足を一杯に開いて」

「はずかしい……でも、いう通りする」

「判っきり、お前の口から、いえ」

語気も鋭く、それを云わそうと迫る。その
 ために、私の責め手は、間断なく、女悦を昂
 めるべく努力を続けていた。

菊子の辛うじて残っていた理性は、昂まる
 快楽の関ぎに喪失を早めていった。

欲びに喘ぐ吐息から、きれぎれに、

「するわ、するわ。いわれた通りするわ……
 吊るされて、足を一杯に開いて、太いウンチ
 するわあ……」

と喚くように言い終わり、その言葉が、自
 己の激情に拍車をかけたのか、五体が硬直し
 たかとみると、叫喚はハタと罷んで、黒々と
 した瞳孔は、あらぬ方をみつめて弛緩してい
 ったのであった。

× × ×

山腹のせいか、暗雲は低く垂れ込めて、雨
 は小止みなく降り続いてた。

眼隠し、猿轡、前手縛りにし、両膝を屈曲
 させて、二の腕に繋ぎ、深田菊子は仰向けに
 なって、ベッドに転がっていた。

その耳許で、小型のカセットテープが静かに廻って、夥しい喜悦と甘受の声を流していた。私は素裸の俛、傍にゴロリと横たわり、逞しい女の欲びの声に耳を傾けつつ、彼女の反応を、この眼で確認していた。

羞恥を甦らせて、深田菊子は首を振り、輾転して自己の気愧かしさから遁れようとしていた。昂ぶる心が官能を乱しているのが明らかに分かる。受け止めようによっては、ねじれる女体が私を求めて、激しく悶えているかに、みえるのであった。

ビーンと、羽虫の響きに似た、けだるい電動音を立てて、小型のバイブが私の手に握られている。

これでもか、これでもかと、女体に挑む私自身、はかし切れぬ、未完の鬱勃たる欲望にハイド氏が、しきりに、けしかけているようであった。

その気になれば、三分足らずで吐かしきれぬ欲情を、延々と長びかせているのは、私にとっても辛いことである。据膳喰えそうな、ピチピチしたSMのエンジェルの、赤裸々な女体を前にして、SMのプレイと、奉仕の精神が、辛うじて遂行しようとする私の欲望を制御しているのであろう。

それにも限度がある。

魅惑に満ちた若い娘と、密室で羞恥責めに耽溺して、何もないという方が可怪しいくらいである。

バイブの登場となって、奔り抜けるショックで、媚を含んだ女体は激しく悶えをみせて律動し、猿ぐつわの奥底で、声ならぬ欲喜の呻きが、一入高く、くぐもって鼻腔から溢れ出ていった。

頃はよしとみて、眼隠しをとり、猿ぐつわを外してやる。

私は深田菊子を縛と抱きしめていた。

カセットテープの音が、いきなり彼女から他の女性のエクスタシーの声に替る。それがかずの子天井のノンコこと、野村信子の、失禁を伴う、忘我の失神前後の、愛欲の叫びと知っているのは私だけであった。十数分のノンコの声は、深田菊子によって消されてしまったが、音調の異なる二人の女性の声の引継ぎは、私にとって又とない得難い宝でもあった。そこには、市販の、つくられたピンクテープにない、ナマのSMの欲喜にのたうつ女性達の、刹那の声が収録されているからである。

その声の主を訊ねもせず、菊子は只管に酔

い痴れていった。

今は斟酌すべき時ではなかった。

電動をとめると、私は、この宝石を鑲めたような若々しい肉感的な女体に、鴛鴦の戯れを挑んだ。

深田菊子にとって、私が七人目か八人目か彼女自身の心が、分かっている筈である。

夕暮れ迫る窓辺に、雨音だけが、慄然と私の耳をうった。

× × ×

きかせるべきでなかったかも知れないが、彼女のたつての頼みで、私と野村信子とのプレイのテープを、イヤホンで、顔赤らめて深田菊子は聞き入っていた。

車は生駒を降ってゆく。

「ねえ、センサー。ウチのも、誰かに聞かしているの？」

イヤホンを外した菊子が、私の顔をのぞきこむようにして訊ねる。

「そんな気はないよ。私独りの愉しみだよ。」

偶々、このテープを持ってきたが、裏面は空白なんだ。うっかり巻き戻しを忘れて、その上に採ってしまったんだ。折角のいい声が消えて残念だった」

「誰方ですの、この人？」

「言えないね。それはお互いの秘密にしておこう。若しキミのを掛けたにしろ、名前は明さない」

（こういつておき乍ら、ここへノンコと明記していきりや世話はない）

「こんなにして、自分の声をきくなんて、すごく恥かしいみたい。ホンでも、あんなこと本当に言ってたのかしら。自分で自分が信じられへんわ」

「プレイに熱中している時は、分からないんだ。夢中だからね」

「あのホテルで、ほんまに誰か覗いてはったの？」

「ハハハ……、嘘だよ。考えても御覧よ。あの部屋は、それぞれ独立した一戸建ちだったろ」

「あッそうか——、どうもヘンだと思ったんだけど……」

「キミの羞恥心を掻き立てようと思ってね。だって、これみよがしに、自分の方から、みせつけようとするんだろ。あれじゃ、羞恥責めにならないよ。ああでも云わなきゃ、キミのいう、甘い快美感を盛り上がらせられないじゃないか」

「大きに、えらい氣を使ってもろて……」

深田菊子は、生真面目な表情で、前面を向いた俤、応え、思い出したように腰をモジモジくねらせて、そっと尻を浮かせた。

「ねえ、センサー。もう外して」

「何だ、未だ十分も経たないじゃないか。ずいぶん早い弱音だな。この俤で食事しようと思ってるのに」

「でも、オシリの方が痛くって、氣色悪うて叶わんわ、ウチ——」

「じゃあ、仕方がない。外せよ」

ハンドルを握る私は、残念乍ら、よそみが出来ない。暮色の雨の車道は危険極まりなかったからである。

二つの凸起のついた赤革のT字帯は、二十才の菊子にとって、寸法が肥大だったようである。モーターを出る前に、それを装着させてパンティを穿かせずに車にのらせたが、十センチもあるアヌ用の凸起は、車の動揺につれて、かなり、菊子を痛めつけたらしかった。

彼女は勇敢に、ミニのワンピースをたくしあげ、尾錠を外すと、腰をぐいと持ち上げて一気に外した。

「あらあら、センサー少し汚れてるわ。かめへんの？」

「いいとも。その俤、黒の鞆に放り込んだいてくれよ。帰ってから、ゆっくりキミの懐かしい匂いを嗅ぐとするよ」

「イヤやわ」

流石に照れるのであろうか、菊子はリヤシートに黒のショルダーバッグに手早く、しまし込んだ。

「もう、穿いていい？」

「どちらでも——」

「でも、このワンピース短いでしヨ。下手すると見えるかも」

「尚更、愉しいがね」

「エッチ」

「ハハハ」

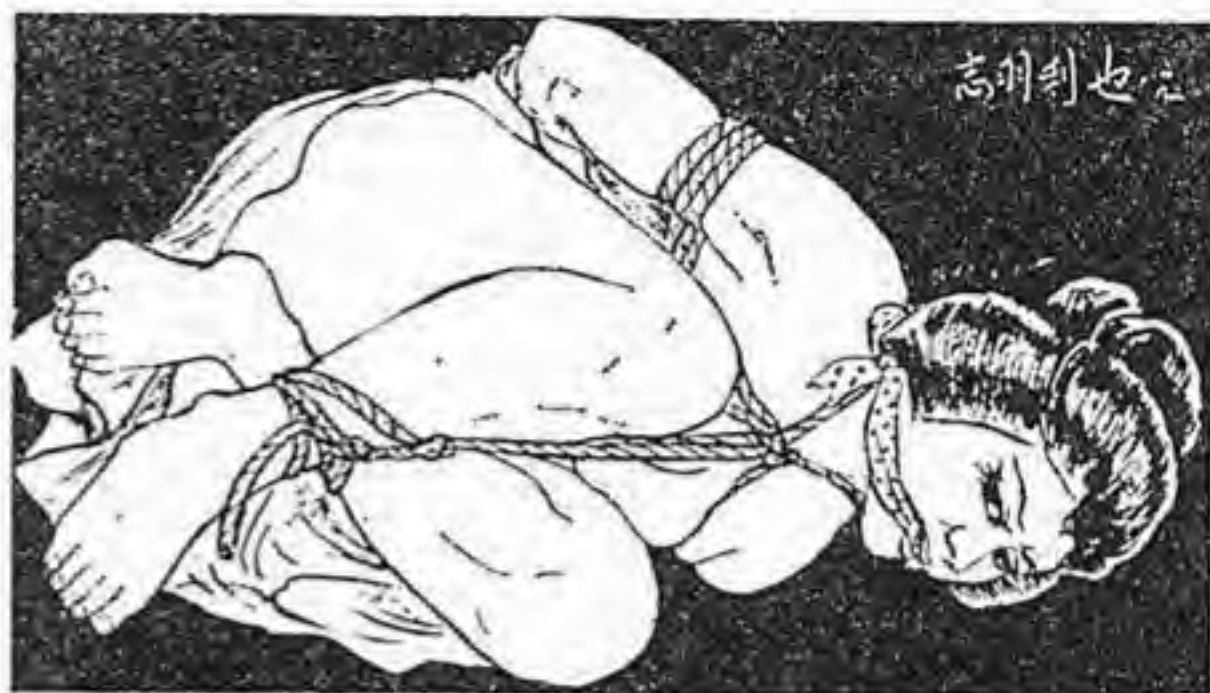
堪能した笑いで締めくくって、ハンドルを握る片手を、そっと伸ばして、菊子のむき出しの太腿を求める。

「吊られて、両脚あげてウンチしたら、後始末、大変でしヨ」

ポツリと他人事のように呟く。

「ビニール袋でも受けてやるかな」

興味を示した菊子に、内心嬉しくなあって、私は一路、大阪のキタへと車を走らせていった。



夫婦SMプレイの告白

北川楼の

裸女郎

北川まりこ

昨年十一月号に、『まりこは売春婦です』

いたします。

の見出しで、お知らせしましたように、身も心も売春婦になりきるために、一週間の特訓を主人から受け、その後も、時々、夫婦プレイに、ハ売春ごっこVを、とり入れて頂き、

まりこは、今では、すっかりパン助になりきって、お勤めできるようになりました。

最近、ハ売春ごっこVも、アイディアマンの主人の発案で、いろいろと趣向をこらし、この前の報告よりも、かなり、エスカレートしておりますので、その後の様子を、お報せ

一つは、前回の街娼婦型の「売春ごっこ」から、さらに発展して、遊廓とか、女郎屋の売春を実演しようという趣向です。

このために、今まで物置に使っていた離れを一部改造しました。

従来、全部土間になっていた一階を、半分板の間にして、土間と板の間との境は、格子にして、格子越しに、女郎がお客さんをお誘い出来るようにしました。

板の間の隅から二階へ階段を設け、二階は

畳の間に二部屋と、板の間の小部屋にしました。この小部屋は、女郎のお仕置部屋でして天窓だけの採光で、うす暗く、陰惨なムードが漂う部屋です。

中央に立縛り用の荒削りの柱、梁には吊り責め用の金具、壁には大小、様々の鞭を掛け木馬、鎖、荒縄等、ありとあらゆる責道具を集めました。

畳の間は六帖と四帖半でして、六帖の部屋には、豪華な寝具、鏡台、衣桁、屏風、行燈風の電気スタンド等、出来るだけ、なまめかしい調度を取り揃え、四帖半の部屋には、簡単な食事のできるように、折タタミ式の食卓戸棚、冷蔵庫、火鉢などを揃えました。

凝り性の主人は、離れの入口に「北川楼」と額まで掲げてくれました。土建業を営む主人にとって、この程度の改造は、お手のものとして、二人ばかり人を使って、一週間程で完成しました。

建物の改造費は、全部、主人が出してくれましたが、調度類、寝具、責道具は私の負担でした。今まで、『売春ごっこ』で、主人から手渡されていたお金を積立てていたものは足りず、残りは、まりこの借金ということにして、女郎としてのこれからの稼ぎで、返

済するようにと言ひ渡されました。

勿論、私には、遊廓とか、女郎屋とかの知識など、全然ありませんので、昔、主人が遊ばれた時のお話を承り、西口克己氏の「廓」という本を読まされたり、当時の「廓」の女郎の生活を描写した最近のポルノ映画を、いくつか、主人と一緒に観に行き、一応の知識を頭の中に入れました。

私は事業に失敗した夫の借金を返済するため、夫の手によって女郎に売られた人妻という想定の子の役。主人は、廓の主人になったり、お客になったり、その日その日の気持ちによって、いろいろの役を演じます。

「北川楼」の完成の当日は、一階の板の間に正座して、廓の主の役あるじの主人から女郎としての心得を、くどくどと承り、二階の小部屋に連れて行かれ、万一、廓から逃げ出すようなことがあれば、ここで、どんなむごいお位置を受けるかを聞かされました。

次に、六帖の間で、自分の手で着物を一枚一枚、脱いで丸裸になり、開股のあられもない恰好で、女郎としての商品を綿密に検査して頂き、最後に廓の主に味見して頂くという筋書きで実演しました。

強欲で好色な廓の主の前に、女体の一切を

さらし、挙句の果に、体をゆだねる初心うぶな人妻の表情、身のこなし、言葉使いが、真に迫るように実演しなければ承知してくれませんので、三日ばかり、この場面を繰り返し、繰り返し、演じました。

続いて、女郎がお客をとる場面の実演ですが、毎晩、夕食の後片づけが済みますと、主人から、「お前は先に行つて用意しておけ」と、命ぜられます。

この時、今夜はどんな筋書きでプレイを行なうかも知らせてくれます。命令を受けるとすぐ、お風呂に入り、丹念に体を潔め、女郎らしく厚化粧をして、丸裸のまま、薄暗い中庭の飛石伝いに離れに参ります。

主人は食後、ゆっくりテレビを見てから、大休、一時間程、遅れてお越しになります。それまで、私はお部屋を掃除し、寝具のシートを取替え、床の間にお花を掛け、お酒の用意もしておきます。勿論、一糸まとわぬ丸裸のままです。

準備が終わりますと板の間に正座して、お客様をお待ちします。お客様がお見えになりますと、格子越しに、嬌声をはり上げて、お誘いしなければなりません。廓の中では、長襦袢一枚とお湯文字だけ、着けることを許さ

れておりますが、時には、「今夜は、何も着けないで素裸でやれ」と命ぜられ、何も着けない姿で、お誘いますと、「お前は裸女郎だ」と嘲りを頂戴します。

主人は、遊び馴れた商家の旦那とか、好色な産婦人科のお医者とか、暴力団の親分とかエロ小説の作家とか、初心うぶな大学生とか、いろいろの役を、上手に扮装して演じてくれます。女郎役の私は、それに合わせて、臨機応変に嬌態を演じ、お客様のお望みにより、珍芸の披露、女体の責めにも応じます。主人はお客様の役より、廓の主の役の方を、好みまします。特に、逃げそこねた女郎のお仕置の場面を実演するのが大好きのようです。

丸裸に引き剥かれて、立縛りや吊り責めの恰好で、鞭打ちを受け、乳首にクリップを挟まれたまま、石抱きの責めを受けました。「どうも、お前と二人だけの、お芝居は、つまらない。俺は本当に廓の親方になりたい。お前を含めて何人もの女郎を抱えて、毎日、いじめ抜いてやりたいものだ」

主人は残念がります。それに、「たとえ、お芝居にしても、お前と二人だけだったら、役者が不足だ」

と、暗に、プレイに第三者を加えることを

ほのめかします。

ある晩、突然、「今夜はジキパンになれ」といわれた時は、何のことか、さっぱりわからず、とまどっていますと、「乞食相手のパン助のことを、ジキパンと言うのだ。それをお前は素裸でやれ、お前はジキパンだ。一番下等なパン助だぞ」と、命令されました。

入浴も許されず、お化粧も、そこそこに、素裸のまま、筵一枚を抱えて、庭先に追い立てられました。そんな、みじめな恰好で、薄暗い庭木のかげで待っていますと、浮浪者風に扮装した主人が通りかかりました。

例によって、媚態を演じて誘いかけますと「マッチを借せ」と申します。何のことか、

わけもわからず、「済みません。持っておりませんの」と答えますと、いきなり頬を平手打ち、されました。

「そんなことで、商売が勤まると思うのか。ジキパンは、マッチの火の明りで、お客に商品を見てもらうのだぞ」

ポケットから、自分のライターを出して、その明りで入念にお調べになり、纖毛がこげる程近づけながら、お値段の交渉をします。交渉がまとまり、一枚の紙幣を手渡され、肌にチクチク刺すような荒筵に裸身を横たえたときには、そのみじめさに、涙が出るような思いでした。

私たちの夫婦プレイも、『売春ごっこ』から、「女郎ごっこ」「ジキパンごっこ」へと次第に発展してゆき、これから先も、主人の発案で、どこまでエスカレートするかも分かりません。

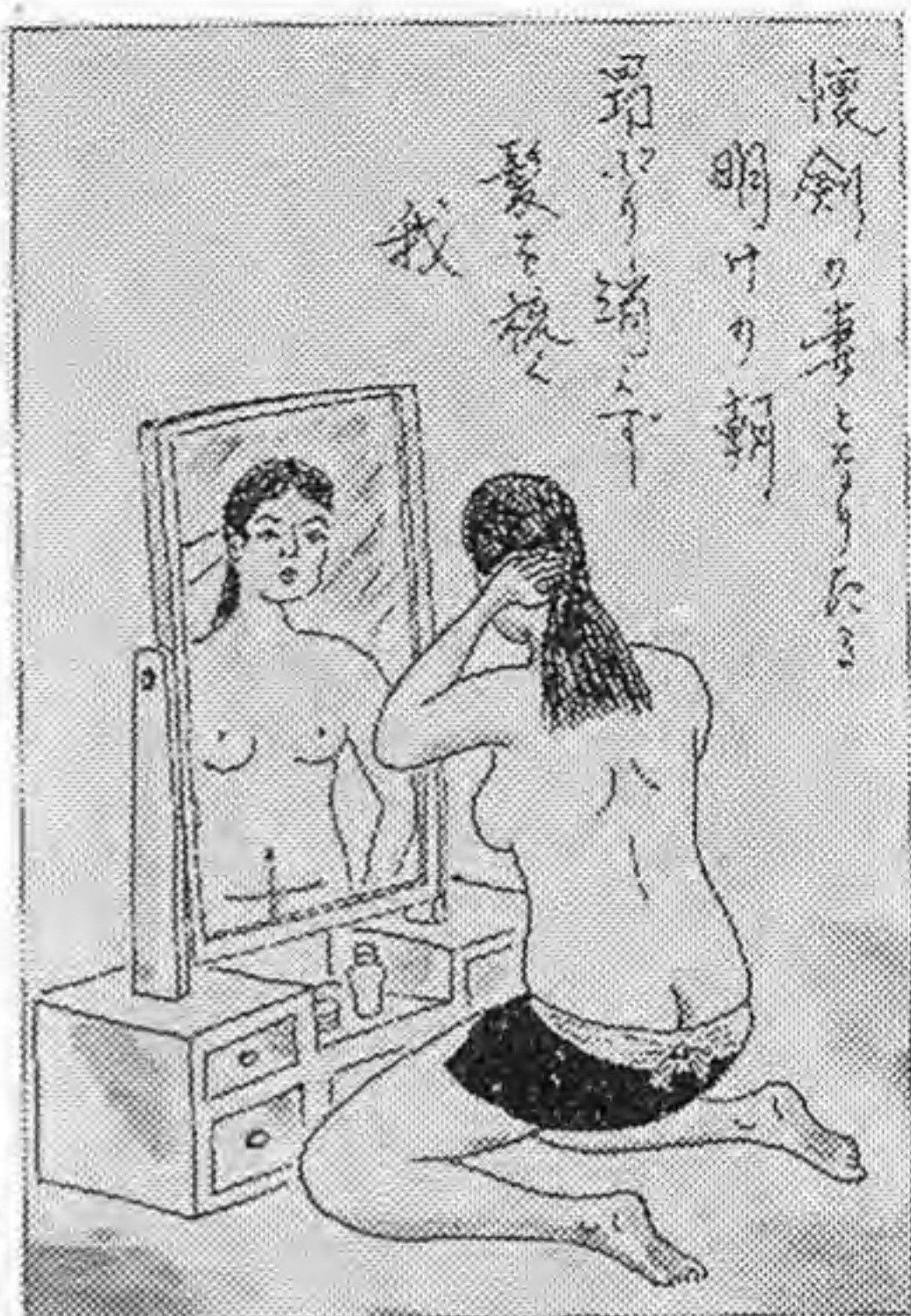
まりこは、その都度、とまどい、そのみじめさに涙を流すこともあります。だんだん飼い馴らされ、辛いこと、みじめなこと、羞かしいことに悦びを感じるマゾ女に仕立てられてゆきます。

(終)



……イメージギャラリー……『M感情発電』……飯田ひろくに……

× × × × ×



懷劍の妻になりたる明けの朝

昂ぶり消えず髪を梳く我

夏の終わり京嵐山の朝、旅館の鏡台の前で髪を直しながら窓越しに眺める私の眼に、朝日に輝く木々の緑は一際鮮かでした。まだ眠りから覚めやらぬ私のぼんやりした頭の中に昨夜の感激が、一夜明けた今も尚、余韻が残っております。

切腹に憧れ、初夜の床で懷劍の妻になり、花嫁の忠節を誓うことを願った私。そんな私が誕生したいきさつは、去年の「奇ク」五月号と七月号に掲載して頂いたのですが、私の願いが昨年八月末、新婚初夜の床で心置

切腹女の陶醉

傷

(きずあと)

痕

井上則子(文と絵)

きなく果たせたので御座いました。その時の感激は一年近くも経った今、遅ればせながら御報告のペンを握る私の脳裏に昨日のことのように甦ってくるので御座います。

懷劍の妻に憧る我が心

君の心に適い^{かな}嬉しき

宿の夕食の膳も下げられ、結婚式や披露宴に纏わる二人の楽しい語らいも一区切りついた頃、夫の心を確かめるべく、私は思い切った口を開きました。

「ねえ、あなた。私の変なお願いのこと、お姉さまから全部、お聞きになりましたの」

「うん、聞いたよ。それに則子の書いたあの雑誌も見せて貰った。姉さんは云ってたよ。結婚する二人だから、お互いに全てを理解して置かなければ、ってね」

私が「お姉さま」と呼び、夫が「姉さん」と呼ぶ方、そのヒトは、前にも御紹介しましたように私の勤めていたデパートの、呉服売場の先輩でして、「奇ク」愛読の先輩でもありまして、私はその方から切腹に対する興味を植え付けられたといって、いいお方です。

私が「お姉さま」と呼ぶのは単に職場での先輩としてそう呼ぶのであって、別に血のつながりはありませんが、夫はお姉さまの従弟な

のです。勿論、夫と知り合ったのはお姉さまの紹介に依るのですから、お姉さまを通じて私の全てを夫が知っていたとしても不思議なことでは御座いませんでした。

前以て、お姉さまから「彼には全部、話してあるから安心しなさい」と云われていたのですが、私の秘めたる願いを夫に直接、告げるのは、その夜が初めてでした。

「さぞ、ヘンな女だと思ったでしょうね」

「生き残りの大和撫子って云う感じだな。でも、そういう人だから好きになったんだぜ」

「あら、調子のいいこと云って……。それじゃあ、この間、私のお誕生日のプレゼントに、おもちゃの懐剣、買って貰ったでしょ。」

あの時、もう知っていたの？」

「あの時は知らなかったんだ。則子が、おもちゃでもいいから、女の魂としての懐剣を買って呉れて云ったろ。随分、古風な女だなと思って、それで姉さんにそのこと話したら則子の、いろんなこと、教えて呉れたのさ」

「そうだったの。それじゃあ、あの雑誌に書いたみたいなのをやってもいいかしら？」

「いいとも。則子の云う夫婦固めの切腹の儀式を二人だけでやろうよ」

純白の切腹衣装身に纏う

妻の二布恥かしき紅

時刻は、もう午後十時を廻っていました。

「それじゃ則子、そろそろ始めようよ」

「ええ、仕度してきますわ。切腹の衣装、お姉さまがプレゼントして下さったのよ」

「うん、知ってる。それで、花嫁が夫婦固めの切腹のために切腹衣装で帯に懐剣を差して新婚旅行に旅立つなんて、ロマンチックで好きだって、姉さん、云わなかったかい？」

「あらッ。あなた、そんなことまで知ってるの。でも私、恥かしくって」

「そんなにヘンな衣装なのかい？」

「ヘンって云う訳じゃないけど……。まあ今着て参りますから、御覧になって」

私は次の間に入ると、襖を閉めました。

「仕度できるまで、覗いたら嫌よ」

スーツケースから取り出した風呂敷包みの中には、お姉さまのプレゼント、切腹衣装が入っていました。

私は宿の浴衣を脱ぎ、下着も全部、取り去りました。先ず私は、自らの屍を恥かしくない状態に保つための手当てをしなければなりません。本当に死ぬのではなく単なるプレイでしたから、そこまでやる必要はな

ったのかも知れませんが、やはり、ちゃんとやってみたかったです。自分の屍が、洩れ出た汚物で汚されているなど、想像しただけでも嫌なものですから。

お姉さまに教えて貰ったように、私はマツチ棒を使って脱脂綿を少しずつ詰めて行きました。「紀子との切腹プレイ」（四十四年十一月号）の紀子さまは浣腸をされたようですが、私は手軽なこの方法を探りました。両方併用したら、より完全かも知れませんか。

次に下着を着けます。お姉さまのプレゼントは、七月号に載せて頂きました告白文の通り、あのミニの紅いお腰巻なのです。裾布は丈が三十センチ程、腰周り一メートル程の眼の覚めるような真紅のモスリン。腰布は長さ二メートル程のガーゼを巾二つ折りにして縫いつけてあり、腰布の延長を、そのまま紐にする様になっていました。腰布まで含めても総丈は四十五センチ程です。ですから、思い切り、下に締めました。腰布は身体を二周りしてお尻の上で、きつく結びましたので、ずり落ちる心配はありませんでしたが、極端なミニでビキニの紅いお腰巻です。けれどプレイの最初の段階（普通の十文字腹）では、この方が都合が良かったようです。下着は、こ

れだけです。

この上に着たのが、洋服に使う純白の薄手のウール地で仕立てた着物。水色の帯。黄色の帯締め。帯揚げはピンク。そして白足袋を穿き、お姉さまからのプレゼントの切腹衣装の着付けは、終了致しました。着物と足袋の白の中で、帯の辺りの水色、黄色、ピンクが一際、清潔なアクセントを、添えているようでした。

髪は、ロングヘアを元の所でピンクのリボンで束ね、若さを強調してみました。女は、着物のことになると夢中になってしまい、まるでファッションショーの紹介記事みたいにな

なっていました。御免なさい。

帯の左脇には、誕生祝いに夫に買って貰った懐剣を差しました。この懐剣、おもちゃとは云いながら、刀身は金属製でズッシリと重く、刃渡り二十センチ、鞘に収めた時の柄を含めた全長は三十三センチもあり、黒塗りで本物そっくりです。

鏡台に映した私の姿。それは現代に生きる私ではなく、自害を覚悟した武家娘のイメージです。懐剣は袋に入れずに、そのまま帯に差してありますので、多少ヤクザっぽいムードも滞っており、己が姿に少なからず陶醉してしまいました。

着物は純白で、しかも薄手のウール。勿論、単衣ですから当然のことながら、お腰巻の紅が腰の辺りに、ほんのり透け自分の姿ながら色っぽさが滲んでおり、それはまた、あからさまに分かる胸のふくらみと共に、私自身にとってみれば恥かしくも嬉しい風情で御座いました。

兄の君に妻の覚悟を伝えつつ

○ 懐剣握る胸のときめき

「ねえ見て、あなた。お姫さまみたいで

しょ、どう？ このスタイル」

私は、こう云いながら襖を開きました。そこには、驚きの眼で私を見上げる夫の無言の顔がありました。

夫は床の間を背に、私は夫から畳一枚分程離れて正座。静かな京の宿の一室で念願の切腹プレイが、夫婦固めの切腹と云う現実的な意義も含めて今、始まろうとしていました。

「今日から、あなたの妻にして戴く則子で御座います。命がけで夫に仕える妻の心意気の証としての夫婦固めの切腹なる儀式、あなたから御贈り下されましたこの懐剣にて務めさせて戴きます。御検分の程、宣しく御願ひ申し上げます」

畳に両手をつき、改った口調で何回も練習した口上を述べる私に、夫もまた、いつになく真面目な顔で応えて呉れるのでした。

「立派な御覚悟。謹しんで拝見致します」
儀式のムードは、知らず知らずの中に盛り上がってきたのでした。

○ 切先の辿りし痕の十文字

○ 妻の心をかき乱しつつ

「あなた。私の切腹の作法では、恥かしい姿



を御目にかけるようになりますが、御許し下さいませ」

座ぶとんの上に立ち上がった私は、両手で着物の裾を開き、それを後にはねのけるようにしながら改めて坐り直しました。

純白の着物は、その裾が小さな半円を描いて後に拡がり、帯の下で大きく左右に開いた袴裾の間に、ミニお腰巻の真紅の色が鮮かにのぞきます。

きちんとそろえた膝頭に眼を落としながら脊筋を伸ばして姿勢を正すと、帯の懐剣の鞘を払い、逆手に柄を握った右手をそっと膝に置きました。左手で袴をかき上げ、左下腹に懐剣の切先を軽く触れさせ、柄を握った右手に左手を握り重ねます。僅かな自重で袴は肌を覆うように自然にたれ下がってきますから丁度、懐剣で袴をかき上げたようになり、左右に開いた袴と思い切り下に締めたお腰巻の腰布とで囲まれた三角形を呈して、お腹が晒け出ているのです。懐剣の切先はお腰巻の腰布の上、五センチ、正中線から左十センチばかりの位置に当てられていました。

いよいよ懐剣の切先が私のお腹に突っ立つのです。胸がドキドキして参ります。私は眼を閉じると身体を少し反り身にお腹を突き

出し気味にしながら、

「では、あなた……。始めさせて戴きます。

先ず懐剣を左下腹に突き立てます」

静かにこう云うと、柄を握った両手に思い切り、力を込めました。両手は弾力のある、お腹の筋肉から、かなりの反力を受け、切先の当たった部分に局在するチクリとした痛みこれは皮膚を僅かに傷つけた痛みでしょう。それと圧迫されたことによる巾広い鈍痛とが入り混じって私の神経を刺激しました。

「ウウウッ、痛ッ。あなた、次は……。お臍の下を横一文字に切り裂くのよ」

そう云いながら私は、柄を握った右手に力を込め、弾力あるお腹の筋肉に、はね返されないように左手を刀身の峰に当て押すようにしながら懐剣を右に送りました。切先は右手と左手の力のバランスによって、ある時は速く、ある時は、ゆっくりと、そして、ある時は強く、ある時は弱く私のお腹に刺激を加えて呉れ、その度毎に自然に口をついて洩れる「ウウッ」

と云う呻き声、その合間には、演出効果を挙げるため意識的にセリフを挟みました。

「あなた、痛い……。則子の、則子のお腹が、ウウッ、今ブスブス切り裂かれているの

よ。本当の懐剣だったら、もう血がタラタラ流れ出しているのよ。凄く痛いよ。でも則子、我慢するわ。立派に切腹するから御覧になつてね、あなた。アアアッ、痛いっ！ 今、お臍の下まで切り進んだわ」

切先が正中線を通過する時の刺激は特に強烈でした。私は身を揉むようにして、その刺激に耐えましたが、その時点で私の感情的な昂ぶりは一段と激しくなり、苦痛と入り混じった性的昂奮も加わって両の乳房が堅く張つて来るのが自分でもわかりました。私は切腹プレイの醍醐味に浸り始めていたのです。

「さあ、則子の横一文字の切腹は終わりましたわ。今度は、お臍を突いて、それから縦に切り下げます。御覧下さいましね」

横一文字に切り終わって一息ついた私は胸の動悸が、やや静まるのを待って再び懐剣を握り直すと、姿勢を正して身構えました。着物で覆われたお臍を、左右に開いた袴の下で探り当てた私は切先を軽く当て、懐剣の柄を両手で握り締めると思い切り突き立てて、思わず本当に呻いてしまいました。おもちゃの懐剣とは云え、切先は鋭く、とがっていますから……。

「ウウッ、アアッ、あなたーっ」

私は、獣じみた叫び声と共に思わず腰が浮き上がり、身体が小刻みに震えるのを感じました。その後は、もう夢中でした。お臍から正中線に沿って縦に切り下げ切先はお腰巻の腰布のところで止まりましたが、私は懐剣の切先をその位置に当てたまま、暫くは肩で息をしながら放心状態で坐り込んでいました。

○

柔肌を鋭き刃先の襲う時

飲ひ洩れて妻相果てぬ

○

「如何で御座いましたか、則子の十文字腹。十文字腹を切った則子、最後は懐剣の妻になって、止めを刺しますのよ」

氣をとり直した私は、上ずった声で口上を述べると、再び燃え上がって来る新しい昂ぶりを感じながら、きちんと坐り直しました。とは申せ、純白の切腹衣裳は裾を開いたまま真紅のミニお腰巻の裾から先には太腿が恥かしく晒されているのです。上半身は、きちんと着物を着たまゝの姿であるのが、せめてもの救いと申せましょうが……。

両手で懐剣の柄を握り締めると刃を手前の方に向け、きちんとそろえた太腿に刀身をすべらせます。汗ばんだ肌に刀身の金属性の冷

たさが伝わります。私は懐剣をゆっくり手前に引きつけ、思わず身体全体を硬くしてしまっていました。

懐剣の柄を右手だけで握り、離れた左手は刀身の峰に沿って静かに切先に向かって滑ります。左手が切先に届いた時、私の両脚は、坐ったままの姿勢で自然に左右に開かれていました。左の手のひらで懐剣をしっかりと覆うようにしながら、私は思い切って立ち膝の姿勢をとりました。身体の安定を保つために、私は尚一層、恥かしい姿を夫の眼に晒してしまったので御座います。

「あなた。則子、恥かしいのよ。でも懐剣の妻になるには、こうしなければ駄目なのよ。こんな恥かしい姿、あなただから御見せするのよ」

私は理性に邪魔され、ためらいが頭をもたげた自分自身の心に、いい聞かせるように、きっぱりと、いい切りました。

立ち膝のまま、刃を上に向けた懐剣に馬乗りになったような、恥かしい姿。真紅のミニお腰巻も打合せが浅いので裾が割れ、左手だけが頼りでした。

私は左手に力を入れ、刃の位置がズレないようにして、柄を握った右手で刀身をこじり

上げて眼を閉じました。十文字腹の時の感動の冷めきらぬ私に、また新しい感動が加えられていったのです。

「あなた。則子の切腹は、こうして止めを刺しますのよ。ああ、こんな恥かしい格好を、あなたに……」

私は、しばしの間、身体を弓なりに反らし甘美な苦痛を味わい続けましたが、氣をとり直して姿勢を変え、身体の安定を保つため立ち膝のまま腰を落とし、懐剣の柄を思いきり伸ばした両手で、しっかりと握りしめたので御座います。膝頭に思わず力が入ります。

「あなた。則子、立派に懐剣の妻になりますわよ。御覧になってね。さあ……エーイッ」

一際、声を張り上げた気合もろとも、夢中になった私の両手に思い切った力が加えられました。

「ウワァアッ、痛、痛いーっ」

私は上半身を捻じ曲げるようにしながら、眼も眩むばかりの激痛を辛うじて耐えることができました。そのままの姿で歯を喰いしばって苦痛を耐えている私。でも激痛は直ぐに疼くような痛みにとって変わり、その疼痛の中から身を震わすばかりの快感が私の身体中に伝わって行ったのです。遂に私は懐剣の妻

になったのです。その時の私の満足感。それは何物にも替え難いもので御座いました。でも人間は欲の深いもの。もっと存分に……という気持ちに襲われたのでした。

「ウウッ、痛いっ。あなた、御覧になって。」

則子、懐剣の妻になりましたのよ。いざという時には……ウウッ、アアッ、こうして立派に自害を……。うれしいわ。あなた、則子、とっても幸せ。でも、でも、これじゃ、まだ駄目なのよ。ウウッ、アアッ、もっと深く突いて、存分に抉らなければ、本当の懐剣の妻とは、いえませんのよ」

再び両手で握った懐剣を、錐を揉むようにえぐったものの、その激痛は私の耐えられる限界を超えておりました。

「ギャアアッ」

取り乱した悲鳴をあげると同時に懐剣は私の手を離れ、身体の重心を失った私は、身体を投げ出すように前に倒れ込んでしまったのでした。

「痛いっ、痛いっ！これしきの苦痛が我慢できないなんて、則子みっともないわね。も、もう一度……、や、やり直すわ。則子、もっと立派な立派な懐剣の妻になりたいの」
うわ言のようにいいながら起き上がった私

の上半身は、夫のがっしりした腕に後ろから抱きかかえられていました。

「則子、立派な懐剣の妻だったよ。これ以上強く突いたら本当に切れて死んでしまうよ。痛かったら、可愛そうに……」

立ち膝のまま、夫に優しく慰められる嬉しさ。

「アアッ、本当に死んでもいいわ。則子、あなたに抱かれながら……。ウウッ、本当に自害したくなかったわ、懐剣の妻になって……」
「馬鹿だな、則子。もうこの辺が限度だよ。さあ、行こう」

私は夫に抱きかかえられたまま、よろめく足を踏みしめるようにして、ふとんの上に運ばれて行ったのでした。

○
切腹のなごりの白きうす衣ころも

○
夏の日さしに着つつ恥かし

新婚旅行を終えて東京駅に着いた私共は、その足でお姉さまに御挨拶に伺いました。

「お帰んなさい。疲れたでしょ」

冷たいジュースをすすめながら、お姉さまは私を、しみじみ眺める様子でした。

「則子ちゃん。やっぱり、その着物、着てく

れたのね。良く似合うわよ、とっても。嫌だっっていったから、がっかりしてたけど、うれしいわ」

「お姉さまって悪趣味だわ。こんな恥かしい着物、プレゼントして呉れるんですもの。色どりは涼しそうで私も気に入ったけど……透けないように裏でもつけて下さったら良かったのに」

そこへ夫が口を、はさむのです。

「洋服にスケスケがあるんだから、和服でもおかしくないさ。紅い腰巻がほんのり透けるのなんて、仲々お色気があって、いいよ」

「ほら、御覧なさい。旦那さんは御気に入りのようよ」

「そうなの、お姉さま。この人ったら、最初の晩に着て見せたら、すっかり気に入って、是非、着て歩けっていうのよ。だから私、旅行の二日目から常に懐剣まで差して、このお姫さまスタイルなの」

「あら、私が勧めたんじゃ嫌だってって、旦那さんが勧めたら着て歩くの？」

「嫌、お姉さま。でもね、本当いうと私自身も着て歩いてみたくなっちゃったの。自分でも良く説明できないんだけど、初夜の床で夫に忠節を誓って切腹する妻なんて、多分、日

本中で私一人だけでしょ。私は夫婦固めの切腹を立派にやりましたっていう優越感みたいなのができちゃって……。知らない女の人に見せつけてやりたいような気持ちになって来たのよ。まさかお腹の傷を見せて歩く訳に行かないから、せめて切腹衣裳だけでも見せてやろうって……。でも、お腰巻の紅が透けて見えるのが一番、恥かしかったわ」

「それはどうも。でもね、則子ちゃん。私があるのよ。そんな透ける着物をプレゼントしたのは訳になる絵を画いて、あの姿で前に倒れたら恥かしくない姿で自害できるって書いてたけど」



本当はそうはならないかも知れないのよ。大体、切腹って、急所でない所を切ったり突いたりするんだから仲々死に切れなくて、のたうち廻って苦しむ筈よ。そうしたら裾だって割れるし、仰向けになった姿で絶命するかも知れないのよ。だから切腹して死のうなんて思う女は、苦痛を耐える覚悟と、人前でも素裸になるという覚悟と、両方要るのよ。則子ちゃんに、その覚悟があるかどうか試すためにわざと、あんな着物、作ってあげたのよ。でも、則子ちゃんが、その着物で外を歩いたんなら、その覚悟が、できたっていうことになるかしらねえ」

「まあ、お姉さまはそんな事まで考えていらしたの。ちっとも知らなかったわ」

○ 切腹を教え賜ひし姉上の傷改めに恥かしき肌

○ 「ところで、則子ちゃん。そろそろ、傷改めを始めましょうか」

お姉さまに傷改めの検分をして戴くことは、前以て

お約束していたのでした。これは、立派に夫婦固めの切腹ができたかどうかを、第三者に証明して貰う意味を込めて、プレイの中に含めて置いたのです。

私はお姉さまと向かい合って正座し、両手をついて頭を下げました。

「お姉さま。夫婦固めの切腹をやって参りましたので、傷改めの御検分、どうぞ宜しく御願ひ致します」

「承知致しました。では、そこに立って肌をお見せなさい」

私は、ためらいながらも帯を解くと、立ち上がりました。お姉さまとの改まった言葉のやりとりが、儀式めいたムードを、かもし出して呉れていました。夫は、私とお姉さまの横から、これも正座して見つめています。

「ではどうぞ、お姉さま」

私は着物の前を開くと、お姉さまの眼に、紅いミニお腰巻一つで覆われただけの素肌を晒しました。

「あら。こんなにずり下げてお腰を締めてるの？ でも、この方が切腹には都合がいいわね。まあ、凄い十文字のミミズ腫れ。フーン痛かったでしょうね。凄いわ、則子ちゃん」

「ええ、とっても痛かった。でも則子、我慢

したのよ、齒を喰いしばって……」

「そうでしょね。でも痛いだけだった？」

「嫌、嫌そんな恥かしいこと、聞いちゃ」

私は思わず顔を赤らめてしまいました。

「懐剣の妻になったんでしょ。あんなに意気込んでいたんだから」

「ええ。もの凄く痛くて、私、夢中になって大声で悲鳴をあげてしまったのよ」

「見てあげるわ」

「もう嫌。お姉さま」

尻込みする私の身体は、お姉さまの腕に抱き寄せられてしまいました。

「駄目よ、お約束の傷改めなんだから」

私は観念してお姉さまにいわれるままになりました。無情なお姉さまの手はミニお腰巻にかかります。

「よくやったわね、則子ちゃん。満足だったでしょうね、あんなに、憧れていたんだから……。私も見たかったわ。ここんとこ皮がむけたようになって……。あら、ここは肌が少し裂けて、血が滲んでるわ。痛いでしょ、ここんとこ」

お姉さまの指に触れられて、あの時の激痛が甦って参りました。

「痛いっ。嫌、お姉さま。触ったら嫌よ」

「でも則子ちゃん、触ってみなければ傷改めにならないわよ。けれど、立派な夫婦固めの切腹だったのね。素敵だわ。いい奥さんになってね」

とお姉さまは、さも感激したようにいいました。私は、裸同然の恥かしい姿でいるのも忘れ、感激の涙が頬を一筋二筋、伝わって行くのだけが不思議に分かっていたのでした。

○

やがて、お姉さまは、いたずらっぽく笑いかけてきました。

「則子ちゃんの切腹の痕、見せて貰ったから私のも見せてあげましょうか」

中腰になって着物の前を開き、お腰巻を押し下げたお姉さまの下腹。私はハッと息をのみました。お臍から正中線に沿って、肉の盛り上がった凄い傷痕。とてもミミズ腫れの私など及びもつかない、文字通りザクザクと切り裂いたような傷痕。

「まあ、お姉さま……。本当に切腹なさったんですの。痛かったでしょうね。凄いわ、血がドクドク出たんでしょうね」

ニヤニヤ笑いながら、お姉さまは「あら、則子ちゃんたら本気にしちゃって。これね、帝王切開の痕なのよ」

といいました。

「まあ、そうだったの……」

「私が切腹に興味もったの、それからなの」

○

私は頭の中で奇想天外なことを考えていました。

「そうね、お姉さま。帝王切開って、切腹の一種なのね。ねえ、あなた。私も赤ちゃんができたなら、帝王切開で生んでもいいでしょ。」

私、麻酔もかけないで、パンパンに張ったお腹を十文字に自分で切り裂いて、血まみれになりながら自分の赤ちゃんを抱き上げてみたいわ。凄く苦しいでしょうね。則子、そういうの好き……。でも、そんなこと、きっとお医者さんがやらせて呉れないでしょうね」

「馬鹿ね、則子ちゃんたら。その気持、解らないでもないけど」

○

ところで私共は、まだ赤ちゃんができませんの。結婚してからもう半年以上も経ちますのに。夫は「懐剣の妻になんかになったからかな」と申しますので、私は「そんなことないわよ」と否定しておりますが、何となく不安な気がすることも御座います。

——(おわり)——

△手

記▽

マゾの放浪記

木村洋子



このごろの奇クの誌上を眺めておられますと女性の方が、たくさん姿を見せておられますが、私も一女性として、うらやましくてなりません。一度は、自分のことを書いてみたいと思っておりますが、なにしろ、字も文章も下手なのでチウチヨしております。

誌上に姿を見せておられる、多くの方たちと同じように、私もたぶんに、露出症的な傾向が強いので、自分のことを誌上にのせてもらいたい。自分の、みにくい責められている姿を出来るだけ、たくさんの人たちに見られたいと、せつに願っています。

もう、だいぶん以前のことになりますが、本名で△読者通信▽にのせてもらい、たくさんの方々からお便りもらった事もあります。それは、責められたい、——いじめられたい——という、やむにやまれない、自分の性癖に、いたたまれなくなつて、自分を責めて下さる方があればと、思いきって、読者通信を出してしまったのです。

私のそうした性癖も、よくよく考えて見ますれば、なにかしら、周期的なものがあるように思えるのです。そんな通信を出したのもそうした時期に当たっていたのかもしれない。

時々、いても立ってもいられないような、激しい衝動にかられるときがあり、そんなときには、前後のみさかいかもなく、突飛な行動に出ることがよくあるのです。

私が、これから洗いざらい正直に告白しますことは、すべてみな、本当のことですが、普通の人たちが見られたら、きっと本当にされないと思います。

誌上で華々しくハントされたり、ルポ記事になったり、或は自分で体験を書いていられる女性の方々のように、若くて、美しく、しかも、甘いマゾ生活の経験ではありません。私の体験は真実ではありますが、余りにも陰惨で、読まれても決して、快感を呼ぶようなものではないことは、私自身でも、よくわかっております。

でも、私は、ぜひ、この文章を誌上にのせてほしいのです。原稿の書き方も知りませんが、また間違った字もたくさんあります。だから、編集部に於いて、いかように直されても結構ですから、どうか、のせて下さい。

私は、ここ三年ばかり、ある一つの同じ仕事に、ずっとたずさわっていて、それで生活を支えています。長い放浪生活の末、現在は両親と一緒に住んでおりますので、住所はお

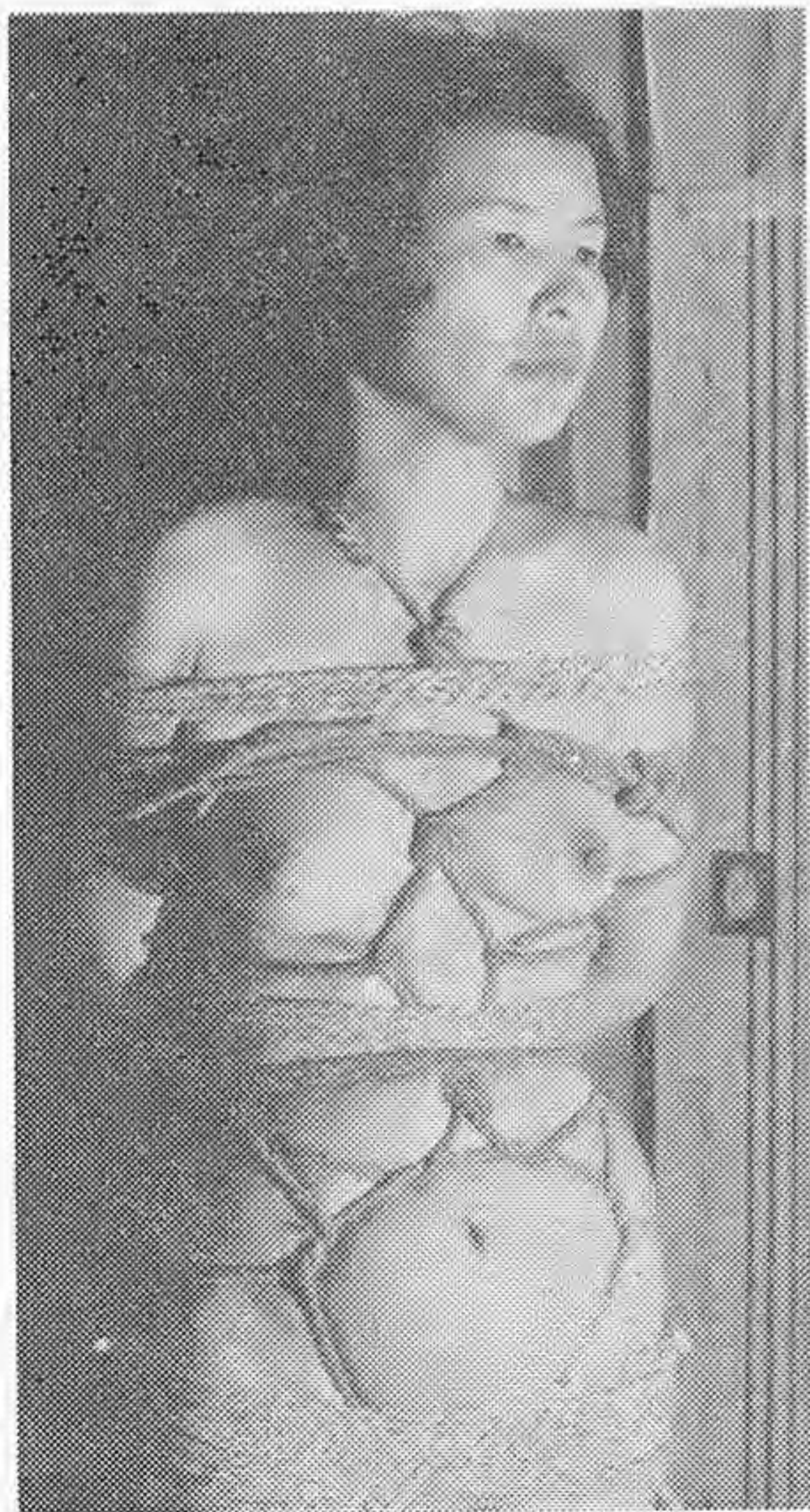
書きできませんが、近くの郵便局を局留めに使用していますから、もし御連絡などありましたら、この郵便局の名前を書いておきますので御利用下さいませ。私は、その前を毎日通りますので、時々のでいてみます。

なにかから書いていいのやら、こんな告白を書いたことのない私には、すっかり迷ってしまいましたが、編集長様におあいして、お話ししているつもりになり、あるいは、お手紙を差し上げるつもりで、書いてみます。

今から思いますと、私は小さいときから何

となく変わっていたように思います。どのようになら変わったかということは、ずっと以前の小学校時代のことは自分でも、はっきりとは、覚えてはおりませんが、それと自覚しましたときは、やはり思春期になる、少し前ごろだったかと思います。

普通の女性でしたら羞恥心から、自分の体は、出来るだけ、他人の目から、かくしたいと思うのが、当然ですが、私は変わっていてその頃から他人に見せたい——、見られたい——という気持が強かったのです。



もちろん、実際に、その頃、そういう事をしたというわけではありませんが、自分の心の中では、自分の体、殊に当然、人目から、隠しておかなければならない体の部分を他人に見られる……と考えただけで、なんともいえない切ない気持ちになりました。

それが、無理矢理に他の異性の方から強制的に見られる——ということを考えますと、もう、いても立っていられなくなるくらい、たまらなくなりました。

私の思春期は、そういう変わった思いの中から始まりました。それ以前のことについては、今は、はっきりとは思いません。

中学を出てから、しばらく、私は家の仕事を手伝っていました。私は一人子でしたし、父は家でブリキ屋（といっても修理が専門み



たいな小さな店でしたが）をやっていて、手がほしかったからです。

そのころの私は盛り場を歩きまわるのが好きで、暇さえあれば、天六、上六、大阪駅、ナンバから道頓堀、天王寺、新世界——へといやしくも人の集まるところだったら、どこへでも行きました。

環状線を利用して、京橋、鶴橋、桃谷駅などの商店街のごみごみしたところを歩きまわったりしたこともありました。天王寺とか大阪駅とか、乗降客の激しいところで、ただ、ぼんやり人混みを見ていることもありました。そのうち、私は、心斎橋とか、桜橋のようなところは、どうも自分には、なじめないものを感じとったのです。

どちらかといいますと、庶民的な下町、いわば、なんの飾りけもない、人間のナマのままの姿があらわれているところが好きで、いつとはなしに、新世界やジャンジャン横丁、西成区の山王町、地下鉄の動物園前附近といったところが好きになり、主に足が、そちらの方へ向きました。

小屋掛けのストリップの看板を眺めたり、易者とか、蛇使いの薬売りなどの大道商人が立っていると、必ず人混みの中にまじって、じっと見物するのです。温泉劇場のあたりには一軒一軒、商売のちがう店が、狭い道の

両側にずらりと並んでいて、それらを軒並みに見ていくだけでも、結構、楽しく時間がつぶせました。毒々しい絵看板のなかにも、私の夢をふくらませてくれるような絵が、いくつもありました。

映画館の前の看板を、じっと眺めながら、立っていますと、若い男が近寄ってきて、「ネエちゃん、なにしてんねん」

と言葉をかけてきたりしました。私はもう見ず知らずの人に——と、びっくりして足早やに、返事もせずに逃げだしてしまったのですが、家へ帰って、夜になりますと、あのとき、何故すぐ返事しなかったのだろうかと考え、自分の空想で思わず胸がドキドキしてしまうのです。そんな若い男に安宿の一室に連れ込まれて……と、私の空想は、自分の都合のよい筋書きで自分を主人公に進んでいくのです。

そんなときの空想はといえば、いつも強制的に暴力でもって、女の大事なところを人目にさらされる——という筋書きでした。そんなことを考えると、もう全身が狂ったように熱くなってしまうのです。

私がストリップ小屋の看板を見るのが好きなのも（中へは一度も入ったことはありません

んが）、なんだか、この私の露出症的な気持ちと通じているのかもしれない。ストリップをしている女性が、内心うらやましいという気持ちがあったのでしょうか。

そのうち、家の手伝いをしていても、余り小遣いももらえなかったし、なんとしても、自分の夢を実現させたいものだと考え、自分

で勤め口を探してきて、住込みで働くことにしました。

両親は反対しましたが、貯金が出来たら、すぐにでも帰ってくるという約束をして、やっと、納得してもらいました。

旭町の路地の中ほどにある小さなうどん屋で、使用人といっても、私が、一人きりとい





う出前専門の店です。「女の子入用」と書いてぶら下げてあった札を見て、私がとび込みで、勤めることにしたのです。

四十代の夫婦二人でやっている店で、色が黒くて、がんじょうなおカミさんはガミガミロやかましく、主人は小柄で、やせていて、比較のおとなしかったです。

私は屋根裏の薄暗い部屋をもらって寝起きしました。窓が小さいので昼でも新聞も読めないくらいでした。それでも夜はおそいので、朝はゆっくり寝るのに好都合でした。店は狭い土間に、テーブルを三つばかり置いたままなので、売り上げの殆どは出前でその出前は私が持ってゆくのです。

急な階段のアパートの入口まで、出前を持ってきたら、部屋まで持ってきてくれとい

うので、上ってゆきますと、急に部屋の中へひき込まれました。抱きすくめられて、ころがったところが万年床の上でした。

こうして、私はあっさりと処女を失いましたが、内心、「なんだ、こんなことか——」という気がしました。私が夜一人で空想しているハ強制的にハダカにされ、自分のものがあばかれるVということの方が、ずっと、私を激しく興奮させたからです。

それからは、私は、その男の誘いには、絶対にのらないようにしました。

そんなことよりも、私には、新たな楽しみがあったのです。それは、近くの天王寺公園まで行って、一人でベンチに腰かけ、じっと空想にふけることなのです。新緑の若葉の匂いが、かんばしく胸をふくらませ、私はそんなひとときは生きている幸せを感じました。

こんなことを書いても、一般の方は、とても信用されないと思います。でも、これは私が自分でしたことですから、本当のことなのです。私はブローズをはかないで行って、少し立膝ぎみに坐り、自分の前が、見えるようにします。人に見られるかもしれない——とそう考えただけで、私は目もくらむような強い快感におそわれるのです。

浮浪者のような汚れた男でもいいから、私を見てほしい、とそう思いました。(それでいて、人がいないときには股をひろげていても、人が通りかかると、ともすれば、股をあわてて合わせてしまう私でしたが、それでも、結構スリルは味わえました)

そのうち、私のいつも行くベンチの附近には、時間によって常連のような人たちのいることに気づきました。中年の女の人で、通りかかる男の人を誘っているのを見かけ、いつとはなしに口をきくようになりました。

その女の人は、自分の名前はいませんでしたが、「あんた、もし、お金がいるんだったら、男を世話してあげてもいいよ。私のお客で、あんたのような若い女の身体がほしいっていう男がいるよってナ」と、いうようなことを言って、私の身体を、みだらな目つきで見まわしました。

「私は、そんなんじゃないのよ」

自分の気持を説明しようと思いましたが、どう話していいのか、自分でもさっぱりわからず、ただ、お金がほしくって、毎日のように、ここへ来てい

るのではないということを知らせたかったのです。

「いいよ、いいよ。そんなに気にしなくたっていいのよ。私にまかしとき。悪いようには

しないから。分け前は出すよ」

その中年の女(タツさんと呼んでいた)は一人で心得て、私にいつも、このベンチへ来るように、時間を言いました。私の住込んで

いる、うどん屋からは歩いて十五分ばかりのところでした。

次の日、私はタツさんから、生まれてはじめて、お客さんを与えられたのです。私にとっては、最初のときと同じように、それ自体なんの感激性もないものでしたけれど、僅かな救いは二帖ばかりのせせこましいドヤ街の部屋へタツさんの案内で入ってゆくとき、附近の人たちから、ジロジロと見られて、なにかしら、ゾクツとしたものを、全身に感じてしまいました。

私は、もっといろんなことをして、眺められたり、触られたいと思っていたのに、その、お客さんは、あっさり終わって、さっさと帰って行ってしまいました。

私はいつしか、タツさんと組んで、そんな商売をするようになって

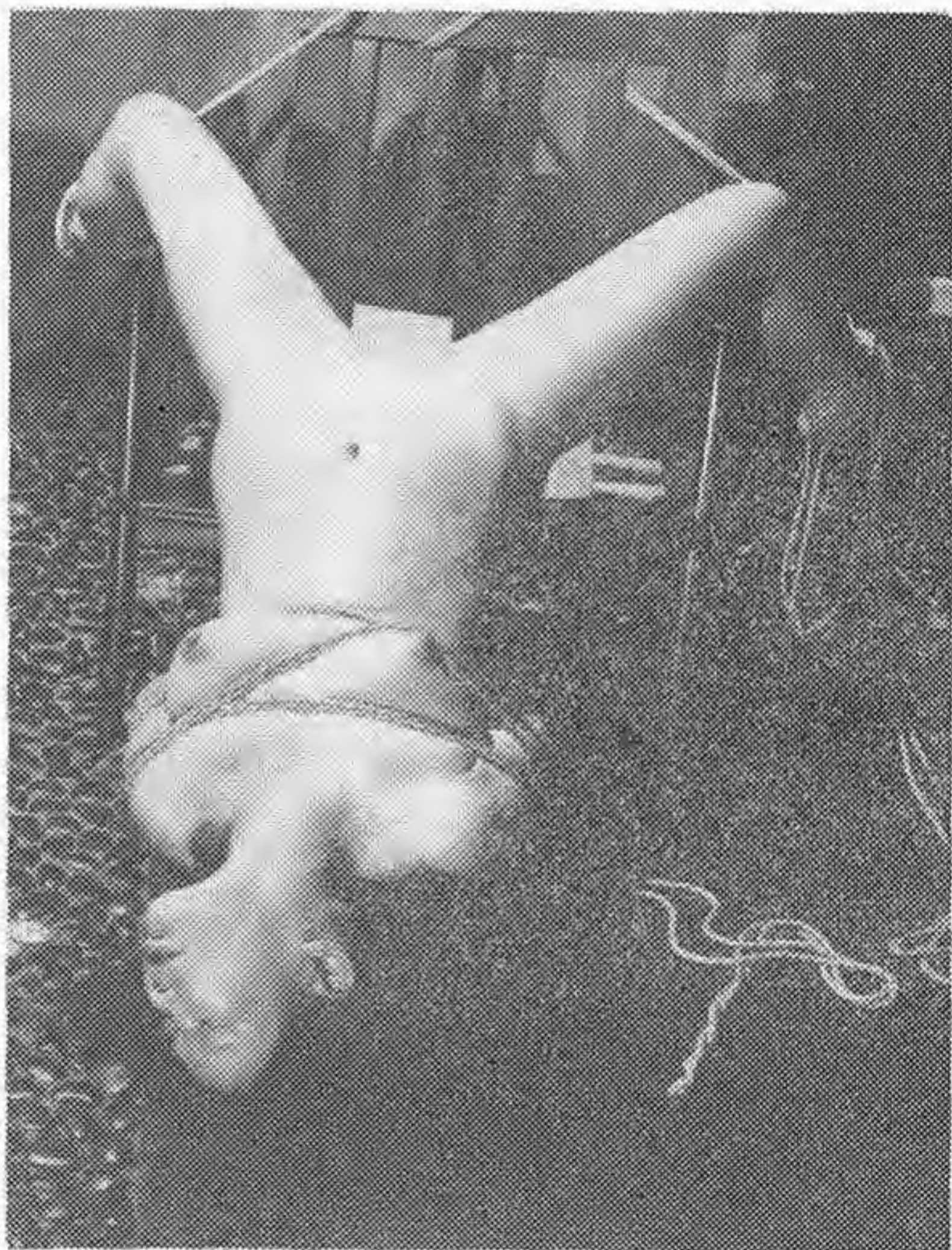


ていましたが、そのこと自体には、少しも快感をおぼえるどころか汚らしさが先に立ってしまうのでした。

うどん屋をやめてしまった私には、当座の収入を、それに求めるということをやっているだけで、やはり心は自分の体を人前にさらしたいということにあるのでした。

お客さんの中には、しつこく、私の身体をいじりまわす人があって、そんなときには、私は自分でも驚くほど大きな声を出したり、身体をふるわせたりしました。

私の身体をいじめまわすような、お客さんが毎日、来ないものかと思いましたが、そんな人は、ごく稀で、殆どの多くの人は、ささと、するだけのことを早くすまして、帰ってってしまうのです。



私は味気ない思いにかられて天王寺公園の音楽堂の裏あたりの樹立のなかへ、夕方になったら、出かけて行って、思いきり股をひろげて、人に見られはしないかというスリルを味わいました。

その頃、奇クで縛られている女の人の写真を見て、自分も、あのようにして縛られてみ

たい——と、強く思うようになりました。

編集部に手紙を出したのも、その頃です。

西成区の山王郵便局の局留めでお便りをもらい、アポロ座の前の喫茶店で待合わせて、編集部の方とお逢いして、生まれてはじめて縛りの写真を撮ってもらったことがあります、その時の感激は自分が想像しているより遥かに強烈なものでした。

当時、私の住所はきまっておりませんでした。その日、その日によって、寝場所を変えておりましたので、便りを頂く場所とてありませんでした。それで一度、お別れしてしまうと、も

う、それっきりになってしまうのでした。私は編集部へもう一度、手紙を出そうと思いつつも、日が過ぎてゆきました。

私の行きつけのドヤでは、ベニヤ板一枚で仕切っていて、隣室と声が、つつ抜けであったり、低い間仕切りで、背伸びすれば上からのぞくことが出来るが多くて、人にの

ぞかれている……声を聞かれている……と、
 そう思うことで、私は、つとめて、自分を燃
 え上がらせようと努力しました。

でも、その多くは、私のひとり相撲に終わ
 って、私はいつも欲求不満に悩まされていま
 した。奇クの編集部の方二人によって縛られ
 たときの強烈な印象が忘れられなくて、もう
 一度、縛ってほしいと思いました。

そこで、私は一室の貸間を借りました。曲
 りなりにも、〇〇荘という名前はついていま
 したが、路地の奥の猫の額のような空地を区
 切ってベニヤ板で囲ってトタン屋根をふいた
 物置小屋のような粗末な割り部屋で、五つの
 部屋が、まるで共同便所のように並んでいる
 のです。

その奥から二軒目が空いたので、私が借り
 たのです。畳二帖敷きほどの狭い部屋は、私
 のような小柄な者でも、横になると頭と足が
 ベニヤ板の壁にさわるほどで、窓はなくて、
 昼でも二〇ワットの電灯をつけておかなくて
 は暗くて何も見えません。

それでも、自分一人でゆっくり休める場所
 と持物を置いておける場所が出来たことは、
 私にとっては救いでした。それに、曲りなり
 にも郵便物を受けとることが出来るので、私



は入口の柱に、名前を書いた紙片を、のりで
 はっておきました。

再び、縛りのモデルになりたいという通信
 を奇クの編集部へ出したのは、その頃で、自
 分の身辺のことを、たどたどしい筆ながら詳
 しく書いたのですが、余りにも常軌を逸した
 告白のため、作り物と思われたのか、掲載は

されませんでした。

そのかわり、しばらくして、緊縛のモデル
 に使うから、と、出頭する日時と場所を書い
 た手紙が来ました。その頃は、まだアポロ座
 がある頃で、その前で待っていろとのこと
 でした。そこで立って待っていますと、何人も
 の若い男が、私に誘いかけてくるのです。い



いつもの私でしたら、感じの悪くない相手でしたら、誘いにのって、ついてゆくのですが、今日は編集部からの指定があったので、辛抱強く待っていました。

強度の露出傾向と被虐期待を持っている私の性癖を、やっと承知して下さったのか、最初から、私をドレイ扱いにして、ホテルの部

屋の中へ入るなり、「さあ、足を舐めろ」と靴下を脱いだばかりの足を突き出されましたので、私は両手をついて犬のように四つ這いになって、足の拇指から、指のまたにかけてペロペロと舐めはじめました。

「もっと上手に舐めろ、このノロマ」

私は、こんなことをされるのは初めてでし

た。なんで、こんなバカなことをしなければいけないのだ……という反発する心と、一人の男性の意のままに、汚らしいことをさせられることに対する、うずくような被虐心が心の中で葛藤を演じていました。足の指に茶葉子をはさむと、私の目の前につき出し、「さあ、メス犬、これをやるから食べろ」と、命令されます。流石の私も、口を固くつむって、イヤイヤをしました。

「御主人のやるものを食べんというのか」いきなり、頬を足蹴にされて、私はころりと、ころがりました。それから、もう着ているものを剥ぎとられて、忽ちのうちに高手小手に縛り上げられてしまいました。

今まで私の着ていた洋服から下着まで、部屋の隅に、なげすてられています。私は素裸のまま縛られた体を追いたてられて蒲団の敷いてある部屋へ連れてこられました。

私は、このときに責められた印象が一番強く残っていて、もう何年も経った今でも、はっきりと、その場面を覚えております。

両手をうしろ手に縛られたままで、開股から検査される……ということは、最も私の性癖に合致していましたので、自分でも恥かしなくなるくらい興奮してしまいました。責める

方の男性の方も、私をはじめでなので珍しいのでしよう。念入りに、しつこいほど、執拗に検査をして責めたてました。

そんなことがあってから、しばらくして、私が家へ出した時候見舞の手紙から、借りてある部屋の住所がわかってしまい、とうとう家へ連れて帰られました。

勤めも家から通えるところでないといけな
いと、きびしく言われて、近くの周旋屋の事
務員、デパートの出張販売員、派出婦など、
いろいろの職業を転々として、現在の仕事に
落ち着きました。

両親は私のこんな変わった性癖など、一切
知りませんから、早く結婚して親を安心させ
てくれと、私の顔を見るたびに言います。私
も出来れば結婚して、よき妻になりたいと思
います。本名で読者通信に出したときは、局
留めで沢山のお手紙を頂き、その中で数人の
方と、おつき合いました。

その中で、熱心に私に結婚しようと言いつ
つてきた人は、皮肉なことにマゾ傾向の男性
でした。年齢からいって、私とは丁度似合
いでしたが、そういった傾向の男性と、とても
結婚する気にはなれませんでした。

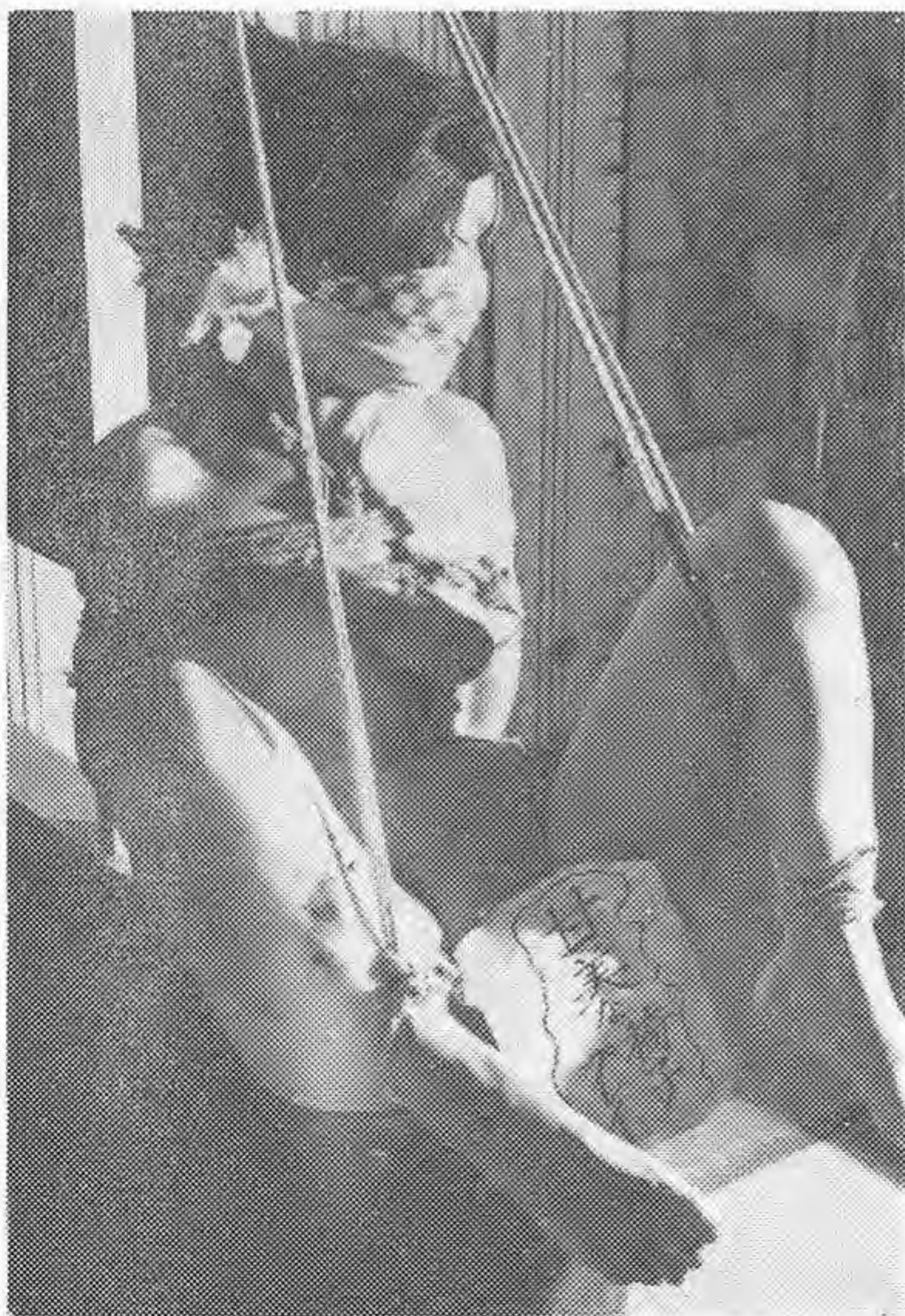
私が、もっと文章が上手だったら、自分の

してきたことを、うまく表現できるのですが
なにしろ、文章を書いたことがないものです
から、気ばかりあせっても、心のなかにある
ことを文字にすることの、むづかしさを痛感
するばかりです。

私の性癖は他のM女といっておられる方々
とは違って、非常に強度なものだと思ってい

ます。自分で考えてみても、少し陰惨で、し
かも、程度がきついようです。

今までの経験からしても、普通の男女の交
わりでは、少しも快感を示さないのです。そ
れよりも、異性に自分の身体を見られている
ということで、非常に強い快感を覚えます。
相手は誰だっていいのです。特定のこの人で



なければ……ということはありません。通りすがりの人であってもいいのです。

無理矢理、強制的に扱われるということだったら、空想するだけでも、激しい快感におそわれます。縛られること自体、特に好きというわけではありませんが、強制的に晒し者にされる……という手段のためにでしたら縛られることも好きです。

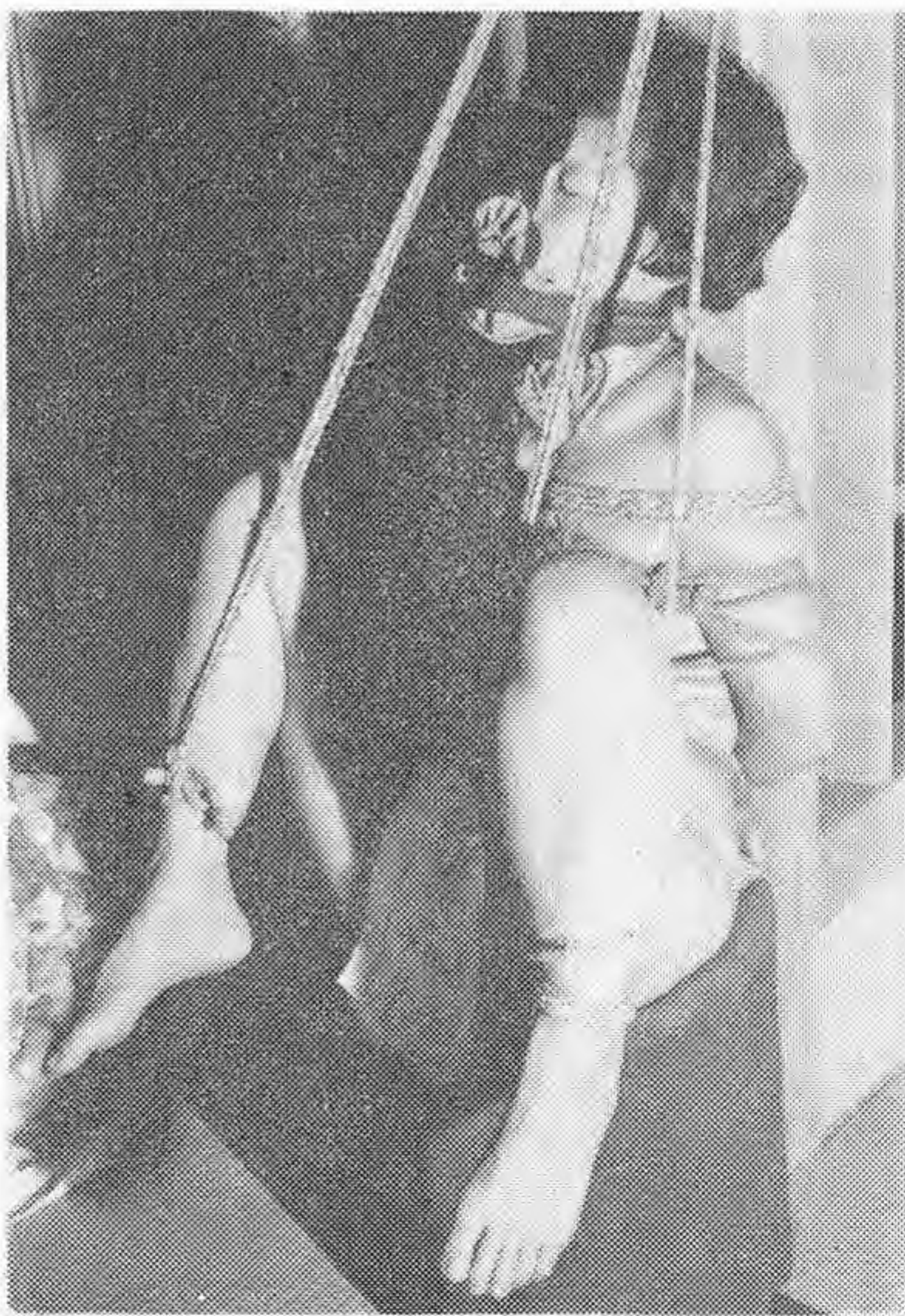
いろいろの縛り方をされたり、いろいろのポーズをさせられたりしても、自分のかくし所を検査されるとか、探られるとかいうことが含まれないことには興奮しません。

そして、いつもは、そういう状態ではないのに時々、周期的に、非常に昂進して、むしろ、そういう目にあってみたい——と思いつめるときがあります。

そんなときは、あてどもなく、盛り場を歩きまわり、暴力団にさらわれて、売春婦に売り払われる自分を想像したりします。

また、時には奇ク編集部へ、思い出したように、電話して縛ってもらったりします。でも、自分の住所も言わず、一方的に突然、電話してモデルにしてほしいというのですから三回に二回は断わられてしまいます。

幸いにして、三回に一回ぐらいは、暇つぶ



しに縛って、写真を撮ってもらうこともありですが、私はそんなとき最高の悦楽を感じ、生きていることの幸せを噛みしめるのです。

目の前に水がありながら、飲むことが出来ないという渴ききった咽喉のまま、長い間放置されているような欲求不満の苦しみの中に、私はなにかしら、靴を隔ててかゆいと

ころを搔くような、いらだたしい快感をさえ覚えるのです。

奇ク編集部に対して、このような、とりとめもない投書を書くということも、私にとっては、一つの慰めでもあり、また、自分のこんなナマの姿をさらけ出すことに対する自虐的な快さでもあります。



私も一般の女性と同じように、人並に平凡な結婚をしたいと思います。でも、このような強度のM性癖のため、その望みも果たせないでおります。誌上に姿を見せておられる、多くのM女性の方のように、ただ単に、SMを前戯として楽しむだけだったら、いいのですが、私の場合のように、SMがなければ不

感症というのでは、どうにも救いがたいでしょう。

私が二年半ばかりの間、マゾの遍歴を続けた放浪記を書くとしたら、とても、二十枚や三十枚の便箋では書ききれません。もっともと変わった経験や体験があります。けれども、一般の人には気狂い扱いにされたり、作

り話としか聞いてくれないでしょう。奇クの読者の方々だったら、どうでしょうか。本当にして下さるでしょうか。

私がもし、文章を書くのが上手だったら、皆さんを感動させるように書けるのですが、なんといっても文章はニガ手ですので、これだけ書くのが、やっとです。

私は今、至って真面目に、一生懸命で働いております。

数年前には車の普通免許もとり、今では自分で小型乗用車を運転しながら勤めに出ております。勤めている仕事の関係で、どうしても車が必要なのです。

平常のこんな私を見た人は、誰も、私のこの体のなかに、このような、いまわしいマゾの血が流れているようななどは夢にも思わないことでしょう。

私の場末の盛り場歩きは、依然として続いております。

暇さえあれば、釜ヶ崎や飛田周辺の妖しげな路地裏の細い道を、一人で歩きまわっております。そして、時折は奇ク編集部の方々に縛られ責められるのを、唯一の楽しみにしております。

股間縛りにうめく女 大手札三枚一組 川路むら子 略号△むつ 五〇〇円	羞恥責めに泣く女 大手札三枚一組 川路むら子 略号△むな 五〇〇円	妖気溢れる開股責めの女 大手札三枚一組 川路むら子 略号△むま 五〇〇円	全裸縛りで引き回す女 大手札三枚一組 川路むら子 略号△むや 五〇〇円	臀部晒し浣腸責めの女 大手札三枚一組 川路むら子 略号△むわ 五〇〇円	露出した全裸肢体の女 大手札三枚一組 川路むら子 略号△むゆ 五〇〇円	両足挙げ羞恥責めの女 大手札三枚一組 川路むら子 略号△むえ 五〇〇円	壮絶臀部責めを受ける女 大手札三枚一組 川路むら子 略号△むお 五〇〇円	悶悦海老縛り地獄の女 大手札三枚一組 川路むら子 略号△むも 五〇〇円	片足吊り全裸像の女 大手札三枚一組 川路むら子 略号△むみ 五〇〇円	開股責めと強烈縛りの女 大手札三枚一組 川路むら子 略号△かる 五〇〇円	緊縛と鼻責め悦楽の女 大手札三枚一組 川路むら子 略号△かう 五〇〇円
トイレの排泄縛りに呻く女 大手札三枚一組 川路むら子 略号△かり 五〇〇円	逆エビ責めに泣く女 大手札三枚一組 川路むら子 略号△かぬ 五〇〇円	棒責めに悶える全裸の女 大手札三枚一組 川路むら子 略号△かそ 五〇〇円	椅子責めでいためる女 大手札三枚一組 川路むら子 略号△かよ 五〇〇円	全裸で柱に縛られた女 大手札三枚一組 川路むら子 略号△かれ 五〇〇円	後手縛で顔面玩弄される女 大手札三枚一組 川路むら子 略号△かほ 五〇〇円	両手挙げ縛りで媚態の女 大手札三枚一組 川路むら子 略号△かや 五〇〇円	悦楽責めアップの女 大手札三枚一組 川路むら子 略号△かわ 五〇〇円	黒縄は白肌を彩る縛り 大手札三枚一組 中河恵子 略号△はほ 五〇〇円	全裸の女体立ち縛り 大手札三枚一組 中河恵子 略号△はふ 五〇〇円	悦虐に身もたえる美女 大手札四枚一組 中河恵子 略号△はあ 六〇〇円	菱縄は柔肌を厳しくくびる 大手札三枚一組 中河恵子 略号△はう 五〇〇円
柱に立ち縛りのさらしもの 大手札四枚一組 中河恵子 略号△はさ 六〇〇円	卓上にて開股羞恥責め 大手札四枚一組 中河恵子 略号△はめ 六〇〇円	無防備の女体開陳責め 大手札四枚一組 中河恵子 略号△はし 六〇〇円	遠山静子の立ち縛り 大手札四枚一組 中河恵子 略号△はも 六〇〇円	可憐な牝犬の調教 大手札四枚一組 木村洋子 略号△めあ 五〇〇円	マソ女の楽しい足舐め 大手札四枚一組 木村洋子 略号△めく 五〇〇円	足舐めを強要されるマソ女 大手札四枚一組 木村洋子 略号△めゆ 五〇〇円	足舐め訓練中のマソ牝犬 大手札四枚一組 木村洋子 略号△めや 五〇〇円	愛玩用メス犬の調教 大手札四枚一組 木村洋子 略号△めち 六〇〇円	鞭打ちによる感溺の表情 大手札四枚一組 関谷富佐子 略号△めめ 六〇〇円	股裂き縛りの女体に痛打 大手札四枚一組 関谷富佐子 略号△めめ 六〇〇円	海老縛りの女体鞭打地獄 大手札四枚一組 関谷富佐子 略号△めめ 六〇〇円
尻立縛りで強打に泣く 大手札四枚一組 関谷富佐子 略号△めけ 六〇〇円	鞭の痛打に悶える鉄砲責め 大手札四枚一組 関谷富佐子 略号△めま 六〇〇円	逆手吊りて晒す臀部に答 大手札四枚一組 関谷富佐子 略号△めむ 六〇〇円	全裸で晒すアゲラ縛り 大手札三枚一組 長井葉津子 略号△よあ 五〇〇円	女体二つ折り縛り 大手札三枚一組 長井葉津子 略号△よあ 五〇〇円	妻絶エビ責め地獄に泣く 大手札三枚一組 長井葉津子 略号△よえ 五〇〇円	猿ぐつわにて正坐責め仕置 大手札三枚一組 長井葉津子 略号△よふ 五〇〇円	強烈変型エビ縛り 大手札三枚一組 長井葉津子 略号△よい 五〇〇円	全裸の股間縛り媚態 大手札三枚一組 長井葉津子 略号△よや 五〇〇円	股間縛り首縄の正面裸身 大手札三枚一組 長井葉津子 略号△よれ 五〇〇円	両手吊り正面晒しもの 大手札三枚一組 長井葉津子 略号△よそ 五〇〇円	◎お申込みは前金にて、大阪市阿倍野局私書箱第14号天星社へ。早速密封にて急送申し上げます。

☆総天然色カラー新作女体緊縛資料☆

極彩色のカラーで描く
五人のM女の美しき生態

可憐な近代の姿態の深田菊子。
純情で素人っぽいの笠井奈保子。
妖艶な芸者福竜の松本たえ子。
飼育の奇みMマダム江口淑子。

五人の個性あるM女たち。
大にキッパリと現色した。
鮮明な生肌を盛りに上る女。

リマの生肌を盛りに上る女。
どちの肉吐息の重なる。
しど、肉吐息の重なる。

貫いて、肉吐息の重なる。
お梅と黒真珠のメロ。
だっ、白黒写真のメロ。

作の発端を機に、
いの美しさの端を機に、
満足の福井桃子と。

て、必らずや稀少価値を発揮する。
と、必らずや稀少価値を発揮する。
さ、必らずや稀少価値を発揮する。

大型のRサイズ、
リ断然素晴しい。
も、断然素晴しい。

を、M女のカラーに。
M女のカラーに。
を、M女のカラーに。

全裸開股開陳縛り

カラー三枚一組 略号A〇〇〇円
深田 菊子 略号A〇〇〇円
思いきり両股をひらいて開陳する。

可憐で美しい女体も、縛られて
こんなあどけない表情なのです。

白肌と赤白斑ら紐

カラー三枚一組 略号A〇〇〇円
深田 菊子 略号A〇〇〇円
真白い肌をぐっとくびる斑ら紐。

かに甘いムードを盛りあげる。

浣腸と緊縛と弄戯

カラー三枚一組 略号A〇〇〇円
福井 桃子 略号A〇〇〇円
各種の浣腸器を前にして大の字。

小に正面開股したマダムと後手高手

縛りの羞恥に喘ぐ

カラー三枚一組 略号A〇〇〇円
笠井 奈保子 略号A〇〇〇円
すぐ赤面する恥かしがり屋の奈。

う、ナマナマしい色彩の中の羞恥。

羞らしいの埒場の中

大手札三枚一組 略号A〇〇〇円
笠井 奈保子 略号A〇〇〇円
原色のな配色の中心に全裸の肌。

緊縛と羞恥のかもしだす饗宴。

晒らされた緊縛体

カラー三枚一組 略号A〇〇〇円
笠井 奈保子 略号A〇〇〇円
縄にくびられた乳房の先のグミ。

全裸を晒して縛られた美麗な女体

猿轡に悶える女体

カラー三枚一組 略号A〇〇〇円
笠井 奈保子 略号A〇〇〇円
噛まされた豆絞りの猿轡にうめ。

き、思わず開股する女体の息づまる。

全裸で見せる狂態

カラー三枚一組 略号A〇〇〇円
松本 たえ 略号A〇〇〇円
芸者福竜が全裸にひん剝かれて。

三、三種のM性を露呈してゆく。

強烈後手縛り展開

カラー三枚一組 略号A〇〇〇円
松本 奈保子 略号A〇〇〇円
如何なる強烈な責めにも耐える。

縛りあげて執拗にいたぶり抜く。

臨月腹緊縛の発端

カラー三枚一組 略号A〇〇〇円
福井 桃子 略号A〇〇〇円
覚悟はしていても出産予定日が。

目、それを払うのけで緊縛する。

便々たる太鼓腹を

もうこれ以上大きくはならない
という程思いきり突き出た太鼓腹
にも情容赦なく縄が襲いかかる。

拘束された臨月腹

カラー三枚一組 略号A〇〇〇円
福井 桃子 略号A〇〇〇円
丸々と極めて美しい線を見せた。

妊孕腹をツンと突き出させて非情
な縄は妊婦の裸身にからみつく。

蛙腹にも強烈縄目

カラー三枚一組 略号A〇〇〇円
福井 桃子 略号A〇〇〇円
出産間際の便々たる蛙腹でも苦。

手、小手縛りが肌を痛めつける。

海老責め後手吊り

カラー二枚一組 略号A〇〇〇円
江口 淑子 略号A〇〇〇円
強烈な海老責めと伸した後手を。

逆に吊り上げた姿態のなかに、あ
られもないM女の秘密があつた。

苦痛と喜悦の交錯

カラー二枚一組 略号A〇〇〇円
江口 淑子 略号A〇〇〇円
厳しい縄目で裸身をさいなまれ。

きどころない甘い喜悦であつた。

◎お申込みは前金にて、大阪市阿
倍野郵便局私書箱第14号天星社へ
略号記入の上、御注文下さい。送
料当方負担にて急送いたします。



SMの分野に於ける浣腸の位置

—(附、浣腸屋商売往来)—

平 山 連 浣

奇クを手にとって、まず初めに
見るのは、なんと読者通信なので
す。今日、SM誌のみならず、ど
の雑誌も読者欄を若干設けている
が、その殆どが、読者の目に止ま
らないのが実情であろう。また、
たとえ目に止まったところで、最
後に読まれるのが普通なのだ。

ところが私は奇クに関しては読
者通信を最初に読みます。果して
私一人かなと思っているが、そう
でもないらしい。それは奇ク自体
読者通信に、かなりの頁を使って
いる点からも、この欄は多くの読
者に、かなり好評である事は間違
いないと思う。

八月号を例にすると、読者通信
が実に十頁もあるほか、短信往来
サロンといった具合に、読者投稿
によるものまで含めると、実に三

十七頁の多きに達している。

このように読者の声を多くのせ
ている雑誌は、奇クを除いてほか
にはなく、またこの事が奇クの他
誌にみられない一大特色となつて
いる事はいうまでもない。この読
者投稿に目を通すと、たしかに文
の表現や構成は、素人だけに下手
だが、またそれなりに、真のSM
愛好の切望、がありありと、うか
がえる。

たとえ短文にしても読む者をし
て、うなずけさせるものがあり、
且、頭をひねらせるようなもの等
多種多様でバラエティに富んでい
て読みごたえは十分にある。なか
でも浣腸願望者が実に多い事であ
る。たしかに、日本のSM思潮は
従来の緊縛、ムチ叩きといった欧
米のSM主流から脱却し、我国独

特の浣腸をベースにしたものに変
わって来た事は否めない。奇クに
投稿する多くの人達が、こういっ
たSMの流れに気づき、浣腸を云
々する事は、たしかに偉い。

しかし、だからといって、緊縛
ムチ叩きをSMから否定するもの
ではない。欧米流のSMは緊縛、
ムチ叩きが、それぞれ独立したも
のとして扱われていたのが、日本
流SMでは緊縛、ムチ叩きは、あ
くまで浣腸を昇華させる為の一プ
ロセスに、すぎなくなっている。

例えば四つ這いスタイルで両足首
と両手首とを縛り、腰を高くして
アヌスがモロにあらわになり、彼
女が「苦しい」と切なく叫ぶにも
かわらず、百CC硝子浣腸器に
ドロリと濃いグリセリンを一杯に
吸い上げ、息づいてるかに見え
る菊蕾に嘴管を差し込み彼女の悲
鳴もものかわ、一気に腸の奥にま
で注入。しばらくたつと腸内をか
き回すような排泄感が襲い、顔を
ゆがめて苦悶する。

すかさず、排便をこらえている
彼女のアヌス目がけてムチを打ち
おろすと、「ヒィー」と悲鳴をあ
げ、耐えに耐えていた便が、一瞬
アヌスから溢れ、これは大変とソ
ーセージを栓のかわりにアヌスに

没入させる——、といった具合に
矢張り、緊縛、ムチ叩きは、あく
まで浣腸プレイを、より有効にす
る手段に使うのが現代流の新しい
SMの方法ではないだろうか。

奇クの読者欄の大半を占める浣
腸族は、恐らく、こういったシー
ンを願望しているのではなからう
か。これはあく迄も奇クにのった
読者の声であるが、恐らく浣腸プ
レイをみたい、或は、やりたいと
願っているのは、ぼう大な人数に
のぼると思う。浣腸ブームの今日
これ程多い何万いや何十万人とも
思われる浣腸族を多少なりとも満
足させる事は出来ないだろうか。

浣腸はなにもエロでもなければ
グロでもなく、法に触れる事はな
にもない。強いていうなれば医療
行為の一つである。だから、いわ
ゆる浣腸屋という商売があっても
よさそうだ。芸者の置屋のように
浣腸される女性を何人かかかえ、
浣腸をやってみたいと望んでいる
男性から一回千円位の浣腸代を徴
収すれば恐らくワンサと集まり、
結構、商売になると思うが、どう
だろうか。

例えば浣腸をされる女性を五人
置き、一人一日十人の男性から浣
腸されるとしても、一人で一日一

福井桃子さんの…… …M男に飼育されたい

天野 真 曾 夫



私はM男だと自認しています。と申しましても、二十六才になります現在まで、ただの一回も、そうした経験は皆無なのです。

奇クの記事が好きで、しかも、その中でもM傾向のものばかりに目がゆく私は、やはりM性なのでしょう。絵や写真、それに文章なんかを見たり読んだりしている範囲では、相当のMのベテランだと思っています。

でも、現実にはMプレイの経験は一回もないのです。こうした私が一度でもいいから、女王様と崇める女性からお恵みを賜りたいと願うのは当然のなりゆきでしょう。

そんなとき、奇ク六月号の「編集部たより」にて、福井桃子様のM男募集の記事を拝見しました。

すぐにでも応募したいという気持ちが動きましたが、Mの欲望の裏には不安が兆し、その二つが、頭の中で混乱して、お手紙を出すのが遅れてしまいました。

私のような者が、奇クの誌上で堂々と活躍されておられるマダム英美代様の下男、下働きに果して使って頂けるものだろうか——という不安が強くなります。

私は今、ある地方都市の商店に勤めており、いつでもやめて自由の身になれます。独り者です。

すぐにでも御命令通り、御指定の場所へ行くことが出来ます。

なにしろ、経験がありませんので、どんな事を望むのかといわれども困りますが、空想の中に於いては、いつも肉づきのよい年上の女性からこき使われ追いまわされている自分を快く思っています。

縛られたりムチ打たれたりすることよりも、下男よりもっとミジメな下働きを女御主人様から強制的にさせられることを好みます。もっとも、ひどい肉体的苦痛を与えられたりしたら、それが好きになるかもしれません。

福井桃子さまの言動や、お写真で拝見します容姿は、私にとって崇め奉りたく思う念願の女御主人様の理想像です。

このような方の御命令通り、追いつめられる自分の姿を想像しますと、たまらなくなります。

どうか、こんな私を、下働きにこき使って下さい。数年間にわたる給料をためた貯金もありますので、お給金は一切いりません。残り物を一日二食なり三食なり、お与え下されば、それにて満足でございます。夜は板の間の隅でも、土間でもやすませて頂ければ、これに越したことはありません。

万円の浣腸収入がいり、五人だと五万円の浣腸代がいり。一カ月、実に百五十万円の浣腸収入を見込めることとなり、誠にポロイ商売ではないか。

しかし、浣腸される女性をいかにして集めるか、これが一番ムツカシイ。

だが、やせたいと切望する女性は数知れずいる。彼女等は、食べたいものを我慢してもヤセル事に真剣だ。このような彼女こそ、浣腸の対象になる。

つまり、食べたいものは遠慮なく食べさせるが、一日に十回も浣腸すれば便が腸内に止まるいとまもなく、この事を持続すれば彼女等は自然ヤセてゆき、スタイルもよくなるというもので、肥った女性を説得すれば、案外ヤセタイ一心で浣腸屋に置く事が出来るのではなからうか。私は奇クを始め数多くのSM雑誌を見るにつけ、浣腸願望者が圧倒的に多い今日、浣腸屋という、商売があっても、一向に不思議がないと思っているが——。

なんとにしても、数十万人はいると思われる浣腸願望者の欲求不満を、少しでも満たしてやりたいものである。

〔好美のお便り〕に答えて

— SM同好者の一人として —

西原

浩



奇ク5月号に載せられた貴女様のお便りを読ませて頂きました。「SM同好者の皆様へ」という親しみのあるタイトルにつられて、ここに、同好者の一人として、お便りを書かせて頂きます。

ご主人と共にSMプレイのご研究に励まれ、よきマゾ女、奴隷妻として飼育されている御様子は羨ましく限りです。しかし、ご主人の渡部光雄氏が申しておられる通り、マゾ女として、その深奥をきわめるといふ事は、中々困難なわざであると考えられます。

SMプレイについては、想像以上に、種々のパターンがあり、その努力と考究の手段によっては、またその悦虐の度合いも違ってくるものでしょう。一対一のプレイに於いても、そうでしょうが、複数プレイによって更に強烈な願望の満足を得られますことは、既によく御存じのことだと思います。

悦虐の喜びは、恥らいによってプラスされるものであるということは、同好の諸氏が多く語られておることですが、それには、一対一よりも複数プレイの方が、より

複雑なバリエーションが加えられて妙味が深いのです。

木山春男様を混じえたプレイの告白を拝見しましたが、この方の強いサド性は、貴女様をこよなく満足させられた由。さぞ、あのトリプルプレイでは、SMプレイの醍醐味を十分、味あわれたことと思います。

貴女様のお便りの文章を拝見しそして挿入された写真を鑑賞させて頂き、私は飼育されつくしたM女の貴女様に対して、限らない愛着の念を抱くのです。そして、木

山春夫様の代りに、私が貴女様を責めてあげたいと、心から念願するのです。

映画「性倒錯の世界」も拝見しました。こうした映画に、貴女様が身を挺して出演された貴女様の勇氣と献身には、本当に敬意を表します。こうした女性が、この世に存在するということとを、私は極めて高く評価したのです。人の好みは、それぞれ顔形が違うように異なるものですから、いろいろと雑音が入ることもあるかと思いますが私は全面的に貴女様を支持したいのです。

どうか、これから、好美様の被虐にうちひしがれた美しい姿態を、奇ク誌上に登場させて下さい。私は貴女様のようなM女こそ理想の姿だと信じています。針責めにしても、ローソク責めにしても責める相手によって又新しい感覚が発揮されるものと思います。

好美様を責める人が変われば、きつと新鮮な貴女様の魅力が誌上に再現されることと思います。その意味でも、是非、私の手で貴女様を責めさせて下さい。必ずや、目をみはるような華麗な責めを展開させてあげましょう。



サディズムと マゾヒズムに

対する誤解

野村浩三

奇クを読みだして、もう何年になるか、はっきりとは思いません。それほど以前から愛読していたことになりました。

初めて手にした頃の内容と、今こうして出版されている内容と、随分変わってきた様に思えます。一番の違いは、読者からの投書が増し夫婦プレイの有様を発表した資料も多くなり、読者との結び付きが強化されたことです。

本は本、読者は読者といった断絶がないことです。「共通の目的を持った人々の集会、社交場」という意味を含む「クラブ」という言葉が生きていることは読者の一人として喜ばしく思います。

奇クを始めて手にした頃は、今の時代の様に、セックス自体が、これ程までオープン化されていなかった時です。それ故に、単なるヌード雑誌、エロ本と共に奇クも並べられていたのです。エロ本の変形として、その時には、ひっそりとしたものでした。SMって言葉そのものまでが……。

でも時代と共に、ポルノという流行語につれてSMという言葉も表面に出てきました。そして、映画に、テレビに紹介され、サディズムとは、マゾヒズムとは——と一般の人達にも遍く知られる様になってきました。

それは私達マニアにとって良い事でしょうが、サディズムにせよマゾヒズムにせよ、私達が考えていた概念とは少しニュアンスが違う異質のように紹介されている場合が多く、時折、腹立だしくさえ感じる事があります。

一般の人にはサドと言うと（マゾの場合は逆）単に異性に対して（又は同性）暴力を用いて泣かせいじめ、虐待することによって快感を覚えるとしています。

因に国語辞典を引いてみますとサディズム（Sadism）（名）相手のからだをいじめて満足する変態

性欲。△マゾヒズム△となっていきますが、こんなものでしょうか？ 私は、こんなものでない事を信じております。

私の持論の中のサディズムとは愛があって初めて成り立つものだと理解しております。勿論、ここでいう愛とは、単に性欲だけを指して言うのではないのですが、その相手を愛していればこそ、その行為をするのであって、いじめた、この気持ちこそ愛なのです。また、可愛いくて仕方ない、愛していることが基盤なのであって、セックスそのもののなのです。

然し残念なことに、SMという材料を金儲け主義に利用したエコノミックアニマルが余りにも多いということ。日活映画のポルノ摘発と、その流れに逆らっている婦来が見えますが、セックスシーンに誇張し、そのシーンがやたらに目につき、ややもするとストリーとは別個な存在となってしまうのは、ただのブルーフィルムでしかありません。

この原因はと言えば金儲け主義の為ではないでしょうか。真の美を追求する気持ちこそ、その努力がなされてこそ、時間が解決するのだと思っております。

女性を縛る。緊縛された写真。それは美しいものでなければなりません。耽美、この言葉こそ、女性緊縛写真そのもののなのです。セックスだけを楽しもう、その楽しみの為にセックスを用いようとする風潮が今の世の中にあります。とすれば、SMも、その材料にしよう——という考えも成程、考えられます。しかし、もう一度よく考えて欲しいと思います。

この世の中でSMは、とかく白い眼で見られ勝ちです。人間は誰でも多かれ少なかれ、SMの要素は持っています。誤った伝え方をされているとしたら、一体どうなるのでしょうか。

その為にも、単なる暴力行為だけを表面に押し出して、いかにもこれがSMだと言っている雑誌こそ排撃しなければならぬと思います。

「妊婦の腹を裂き胎児を掴み出した殺生関白の話」。この人はサドなのでしょうか。私の持論からすれば単に狂人でしかありません。

然し誤った宣伝の為、これらに属する人、最近起こった事件でいえば、大久保清、連合赤軍の永田洋子。こんな狂人とSMを一緒にされては大変な迷惑を受けます。

緊縛許可証 青山三樹

ビジネスの必要上から蒐集した
ヌード・フォトに、たまたま混じ
る数葉の緊縛フォトを分離分類、
SMと刻して別項目に整理したの
が、そもそも事の始まり。

以来十数年、蒐集量の増加につ
れ、それらのものを通じて知り合
う同好の士の、ハントで鍛えた誘
いの言葉にうまく乗せられ、いつ
しか演じ演ずるプレイメイトに、
いろどり添える道具立てなど、あ
れやこれやと気を配る凝りよう。

遊びつかれ、騒ぎつかれて日が
暮れて、一同（といっても三名を
越えないグループですが）こちら
で少し休もうかと、本業にたちも
どり、そのまま今に続いた冬眠状
態。

さる日、酒色喧噪の街、新宿か
ら東に車を走らせて約7分、ちり
ばむネオンの灯を足下にみる高台
のマンション、十数度目の妾宅を
その中に構えた友人の「グレージ
ーな妾宅開き」に招かれ、飲んで
食べ、みせつけられての数時間。
妾宅開設、日が浅く、かたづけ
きれず、そのままに、リビングル

ームの片隅に積み上げられたマン
スリーの、中に目につく背文字が
一つ——奇譚クラブ——。

化政期、歌川国貞の傑作、艶本
『今様三体志』にある——扉を見
越しの本所松は。垣付の建仁寺と
碧をあらそい。根張三尺の祢村川
石は。皮むきの四谷丸太とともに
滑かなり。鳴子をぎいと開きつけ
て入来る旦那どの。

と、ご当家の旦那どのが粋を競
うには、招待されての悪態で申し
訳ないが、文政と昭和の妾宅では
あまりにも、へだたりが大きい。

羽虫のような音を出すルームク
ーラーで涼を求め、四囲すべて鉄
筋コンクリートに、アルミサッシ
プリント合板の新建材が刑務所と
の違いを主張する。

——枕本を見る囲い女と、その旦那
——の風情も、また遠く、現代
の囲い女は、ライトグリーンのア
イシャドーをひく二十二才のクラ
ブ・ホステス。

パイプ責めが、大好き（旦那敬
白）な彼女は、小柄ながら均整の
とれた上半身を、青い横縞のマリ

わが家の妖花——小田原一郎——



ンシャツで包む。

小さい乳首が左右ボツンと突き
出てわかるノーブラジャー。ビー
ルや水取りに立ったが、二つのま
るいふくらみが、弾力的に跳動し
て挑発する。薄いクリーム色のホ
ットパンツが下半身を僅かに覆い
大きなコードペンダントのやわら
かい光が、すんなりのびた両脚を
ほの白く浮かび出す。

その細い両の足首に、尖端に触
覚でも持つかのうちに、二条のロ
ープが、しのび寄る。
それは生あるものか、深く濃い

暗赤色の絨氈の上に、白く細い軌
跡を描く。

速くもなく、遅くもなく、音も
ない——二巻き、三巻き、足首に
まわりついたロープは、この小
世界の一さいの動きを停止させ得
る神秘的な能力のあるもののごとく
微動だにしない、かるく開いた、
なめらかな脚線にそって、はい上
がる。

ペンダントの白光がスポットラ
イトのように、すばまり周囲の暗
い闇に落とし、ソファの女性のみ
を円い光茫の中に捉える。その光



鼻責め法楽

山井二良

斎藤香根様。

初めてこの欄でお目にかかります。私は会社員で30才です。いつも、ご投稿を私も読ませて戴いておりますが、鼻孔に穿孔するまでには、なられていないご様子に、お見受け致します。

私自身、鼻に対する穿孔は後に残るので出来そうにありません。又、他の人にも出来ません。私の鼻責めは、どうしても痕跡の残らない程度の責めと愛撫の交叉が中心になっています。

奇クの誌上の話題になりますが鈴木千鶴子様のフォト、美しい鼻孔に私の心も躍るようです。残念ながらことに正面で見せて戴けませんでしたが、八月号の篠原レイ子様

の鼻責めでは魅了されました。余りの可憐な鼻孔と責めとに、心乱れる私です。羨ましいと溜息が出るこのごろの私なのです。斎藤様は千人もの女性の鼻をつまんでみたり、のぞき込まれたりされてるようですが美しい鼻孔は、鼻腔もさぞ美しいことでしょう。

鼻孔及び鼻腔も、三段に分かれて美しく狭められてるのを見るのも楽しい私です。

ともあれ、思わず嘆声の出るのは八月号P63の鼻責めです。当分私も、さめてはうつつ——になりそうです。数少ない、鼻孔に関心のある、かくれた読者の方々も是非、奇クへのご投稿を心から待っています。

又、奇ク編集部の方も、鼻責めだけでなくとも、鼻孔の正面アップも考慮してご掲載下されたら幸いに存じます。

斎藤様、駄文でごめん下さい。是非、誌上でのお返事お願い致します。
(沼津市・山井二良)

の輪は身につける、すべてのものを拒否し剝奪する。

一糸まとわぬ裸身の焦点にある柔らかな纖毛が、すべてが停止している中で何故かそのみが火焰状に、そよいでいる。

カラカラ、カラカラ——乾いた音。いつのまにか、ペンダントは天空の星のように高く小さい。それと入れ代るように、二つの滑車が重々しく、その位置を占める。

あの乾いた音は、女体を越えて伸びきったロープが、それぞれの滑車にすがる音。溝をくぐった二条のロープは、二つの滑車の真下に立つ、男の手の中で一つになった。

そのとき、女の目は天地逆転の地獄をみた。

どうしたのオ、ミキ酔ったア——嬌声は短い妄想を絶ったが、長い冬眠にも終止符を打った。

無為の空白は、倦んだことでも新鮮さと呼ぶ。愛用のカメラを手にハント再開！

地下鉄神宮駅前に近い和風スナックは、午前一時、二時になって女性客が多い。OLや女子学生が、飲んで、くだまく小さな店。この店でコネを持ち、二、三度おつきあいのある女性と所選ばず

の一発勝負。

ひとりよがりの作品を、ためらいつつ、お送りしましたのが、ひと月前。

奇ク編集子のお目にとまり、鄭重なご返信に接した次第で、汗顔恐縮。しかし、このご返信こそ、まことに奇譚クラブ公認の「緊縛許可証」すなわち、これぞ「緊縛のライセンス」。

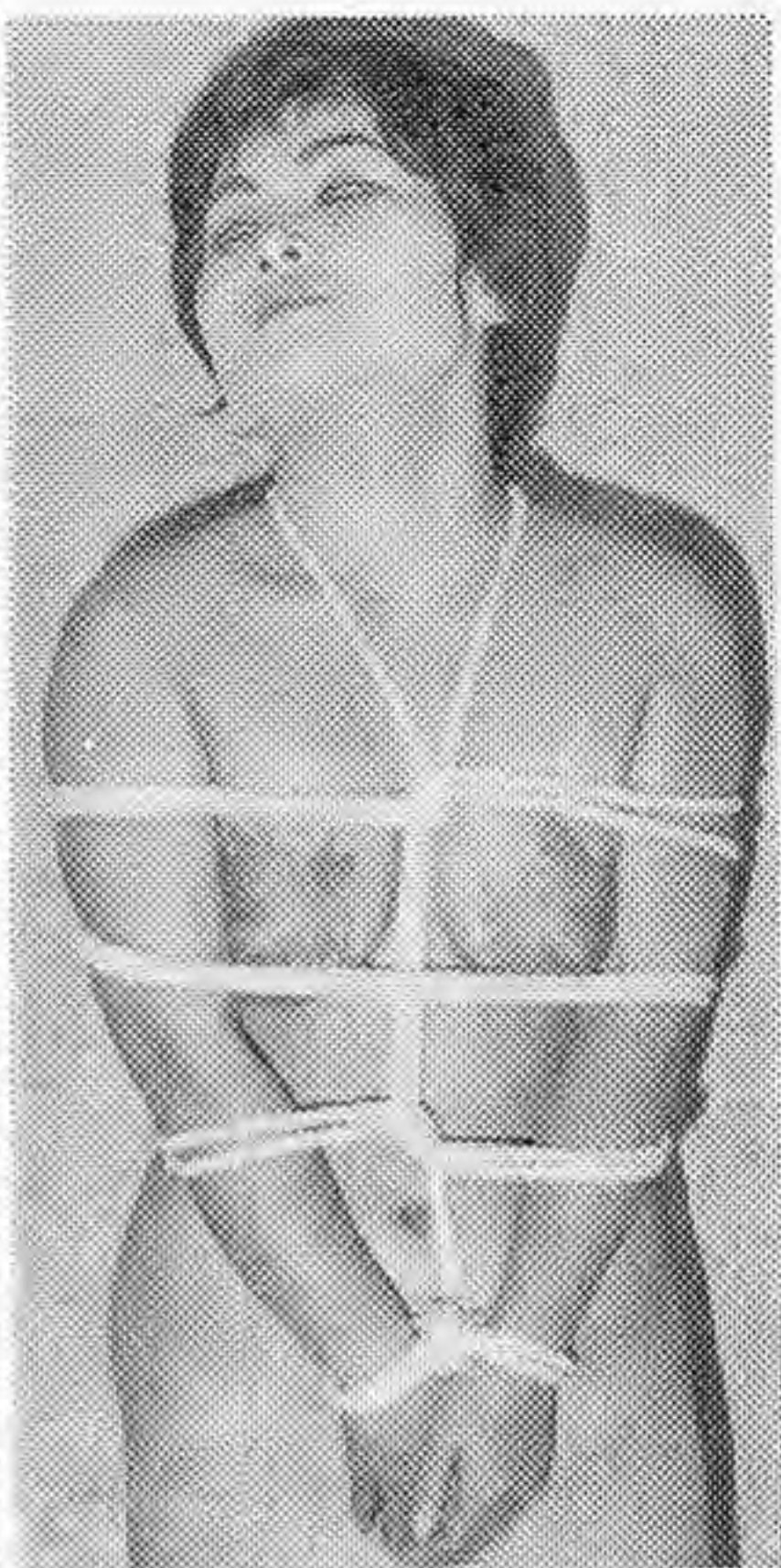
巷にネオンの灯る頃、雀荘席の埋まる頃。落花狼藉早き頃、それぞれの街が国際色も豊かに、夜の顔をとりもどす。プロもセミプロも、アマチュアも、夜の顔に変身する。

表参道も青山通り寄りを左に入った、ややくすんだビル、地階とも一階ともつかぬ、ゆったりと席を設けた茶店は、一日の仕事から解放された男の憩いの場。

デレクターチェアに深々と腰を沈め、壁面を飾るメラネシア諸島の土民が作る怪奇な二面像に目を向けて、黙念と水割りに時をかける初老の男こそ、「緊縛許可証」を手にしたロープマンです。

お氣がつかれたら、女性奇士の皆さん、一声、お声をかけて下さい。

——夜は長い。



—早坂信治夫人に贈る—

『早坂夫人慕情雑記』

扇 由 起 夫

奇クを毎月愛読させて頂いておりますが、何とも口では表現出来ぬ様な味わいがあった、噛みしめれば噛みしめるほど、たまらない趣きが湧き出てくる、不思議な魅力を持った楽しい雑誌に十分満足しておる昨今です。

過去、本年四月号に唯一回、雑文『私とプレイした人達』雑感一を掲載して頂きましたが、その後仕事に追われてペンが執れぬまま日が経ちました。毎月、新しい奇クを求めますと、新しいプレイフト、新人女性の登場、とりわけ

辻村先生のカメラハントの目ざましい活躍。それに夫婦プレイに励まれる方々の告白や写真と、ただただ目を見張るばかりです。

その中で、特に私の印象に残っている方々、古くは、梨花悠紀子大塚啓子、絹川文代、山原清子。

そして比較的、新しい方で、荒尾慶子、再デビューの谷山久美子、深田菊子、高村浩子、岸悠子、笠井奈保子、早坂夫人が特に強く脳裡に灼きついていきます。

これらの方々は、皆、それぞれにきわだった特色を持たれ、また

プレイの好み、容姿、姿体と、いづれをとっても男性諸氏を魅了する色気を強力に放射、発散させています。

今回は特に私の好みに合致した早坂夫人にファンレターを差し上げた。ペンをとりました。奇クへの早坂夫人の登場は三月号の八夫婦プレイの経歴、私達の場合、初回で、二回目は、六月号の『家内のフォトを誌上に見て』です。初めて見たフォトで、少なからず「ドキッ」とカタズをのむ感動を覚え、以後時間の経過するに従っても、なお、「あき」が来ない所に、その良さを見出し得た様な気がします。

早坂夫人について、私なりに考えてみますのに、一、夫人の容姿が大幅な垢抜けをしていて、プロのモデルの様なムードを、どこことなく持っている様な、また持っていない様な、そんな中に素人的？な良さ、そんな両端の良さを集積したところに強くひかれます。

二、全部、綺麗に剃毛しておられるその魅力がたまらないです。三、刺青ペインティングの良さ。これは文句なしに素晴らしい。

以上の三項目を更に具体的に、私なりの感想を述べてみますと、

第一の容姿、肢体の垢抜けしている点は、夫人自身、若々しくて美人であることは、男として大変羨ましい限りで、その美しさが第一です。その若くて美しい肢体の基盤の上に、長い間、夫婦プレイを楽しんでこられた実績が、プレイ向きの美しいムードを形成してきただと思われれます。

単なる美しさ——ばかりでなく美しさプラスαが発揮されているように思います。手近な例では、岸悠子、深田菊子も、そんなSM的カラーに染まって来ておられる様です。早坂夫人は美しいばかりでなく、大変、色白でハダが美しい方の様に見受けれます。

第二に、全部剃毛しておられる点。昨今、奇ク誌上でも、この剃毛という言葉が盛んに取り上げられ、何か一つの流行の様な風潮さえ見られます。剃毛をされている方、された方など、数え上げれば相当の方々へのぼるものと予想されます。

関谷富佐子、荒尾慶子、谷山久美子、三浦純子、安井喜久子、佐野みさ子……等々。その中で、早坂夫人と安井喜久子（このお二人しか知らないが）は、将来的に完全に新芽が萌え出ない様に剃毛を

— マゾ女の妄想 —

われは見世物

北川 まりこ

肌を刺す視線に裸身さらしつっ
媚びの微笑み われは見世物
両手をば背中に組みて客席に
縄受けに行く われは見世物
われ勝ちに群りきたる客の手に
裸身を預ける われは見世物
キリキリと肌に喰い込む荒縄に
マゾの火燃ゆる われは見世物
ガツチリと縄掛けされし後手の
身をくねらせる われは見世物
クジ引きの運を掴みし責め役に
引き立てられて われは見世物
周囲から飛びくる責めの注文を
ウツトリと聞く われは見世物
中央に下がりし鎖が手繰られて
片足吊りの われは見世物
どよめきの中で責め役得意げに
ふるいしカミソリ われは見世物
屈辱の芸の人気のあつまりし
タマゴも尽きぬ われは見世物
みじめにも後手のまま悶え抜く
浣腸恨めし われは見世物
責められて尚燃え上がる情念の
サガ羞しや われは見世物
ひたすらにMの境地に浸りつつ
被虐にむせぶ われは見世物

されているとの事。その勇敢かつ
決断には感服せざるを得ません。

女性本来、有るべき所に、ある
べきものが無いと言うドキッとす
る感激。青々と剃り上げられ、玉
の肌の触覚的楽しさ。有るべき物
がないという羞恥心。その羞恥心
がSMプレイに於いて大きな威力
を発揮すると思います。永久的に
生えない様にする抜毛作業もよい
が、また、生えれば剃り、剃っては
伸ばすのも、一つの楽しみである
ことも言えます。

またプレイを離れて世間一般的
に考えますとき、剃毛された女性
は千人に一人も無いと思うと、そ
のエリート的意識と、無いという
淋しさを感じ、且つ、困惑される
ことが無いとも限りません。その
両極端の意識を、どう調和させ、
現実活かされているのか……。
その辺の手記でも発表される折が
あれば、きつと貴重な資料になる
事と思います。

とにかく、永久的剃毛には、双
手を挙げて賛意を表したいと思っ
ます。

第三の刺青ペインティングの良
さ。我国では刺青の歴史は大変暗
い。罪人に対する罰から発展
し、いまだに、その思想は低くて

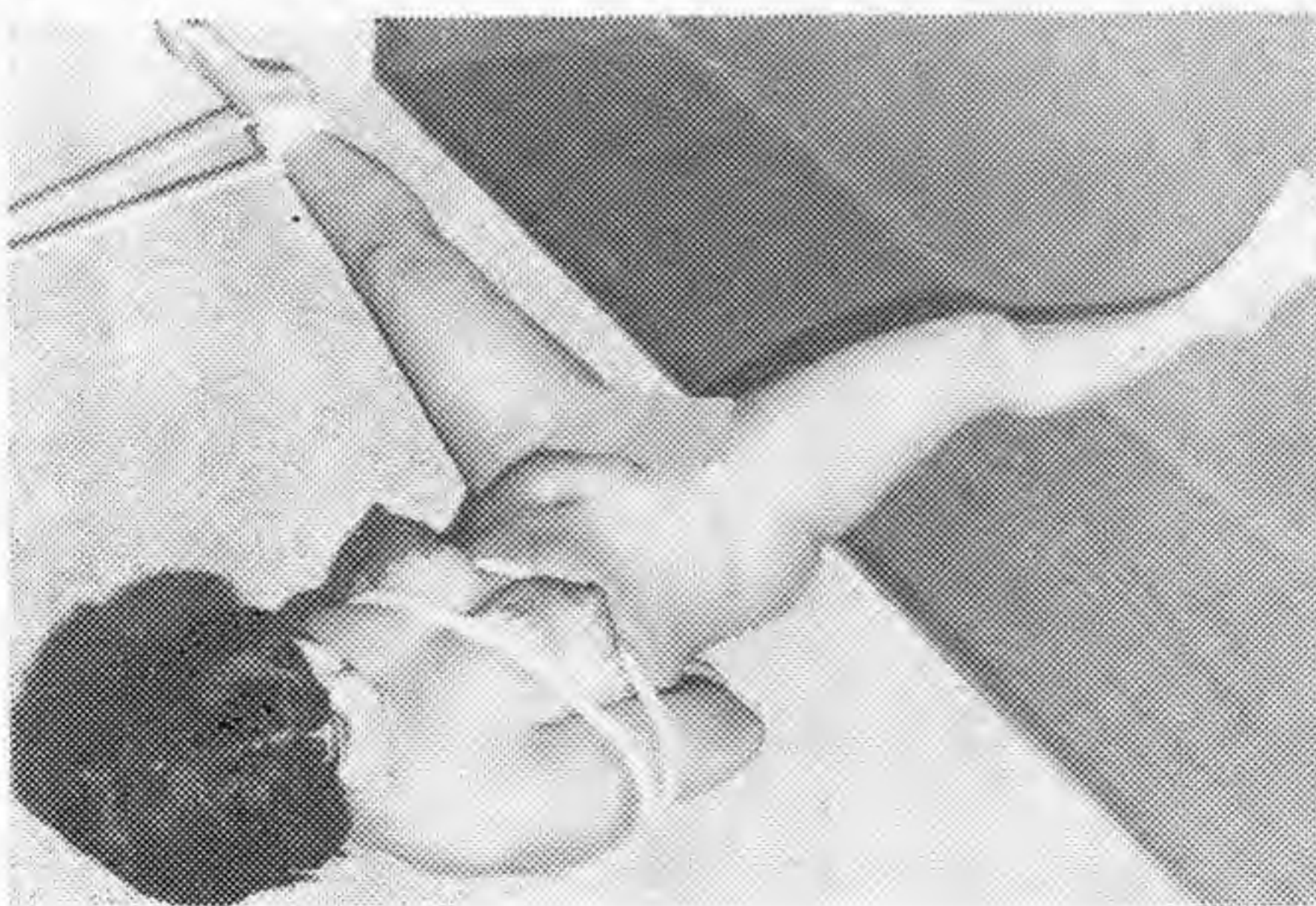
暗いものです。しかし、外国では
そうでもないらしく異常美を求め
る装飾の一種として珍重されてい
るようです。

ボディ・ペインティングの利点
は、好きな時に、好みに応じた図
柄を描け、いつでも消せるところに
あると思います。

白いロープに比し
て浮き出る色。プ
レイに悶える女体
から躍動する図柄

——と、想像した
だけでも楽しいも
のです。私の提案
として、奇ク三月
号の読切創作「愛
しの薔薇奴」の文
中にある「鼠蹊部
を彩る色鮮かな薔
薇の刺青」。これ
を一度、おためし
になつては如何で
しょう。バラでな
くても、お好みの
図柄で……。さら
に楽しいプレイが
進行することを祈
ります。

もうご存知かも



しれませんが、フト、新聞で見か
けました「メーキャップ用カラー
クレヨン」なる化粧品が発売され
ているとか。ボディペインティン
グに使えば、実に、面白いそうで
す。価格はセットで三千八百円。

奴隷志願の牡犬

江田秀昭

僕が浣腸というものを知ったのは中学の二年の時です。ある雑誌でビール浣腸をしている記事があり、それを読んでから浣腸が好きになり、23才の今でも、一人で浣腸をたのしんでいます。その方法を次に書いてみます。

一、石油ポンプでの浣腸

どこの家庭でもある石油を瓶に詰めるときあのホースを利用して、ビニールのホースの先を紙ヤスリで丸くして使っています。僕の場合は、水、又は微温湯を大量に注入するのに用いています。

バケツに半分ぐらいの水を注腸すると、すぐに苦しくなりトイレへ行きたくなります。辛抱するだけ辛抱して、トイレへ飛び込んで行って一気に排泄するときの気持ちよさ。大量注腸するために、この際は一切薬品は使いません。冷水は腸を冷やし、夏は涼しいです。今日はどの位入るか、と考える極限まで辛抱するのは一種の楽しみで、バケツ一杯ぐらいまでは入れたことがあります。冷水をバケツ一杯も浣腸しますと、お腹の外

からでも冷えているのが、手ですわって、よくわかります。

一、エネマシリンジでの浣腸

この道具を買い求めてからは僕の浣腸プレイも内容が豊富になりました。使い方はいろいろありますが、一番面白いのは、嘴管の先にコンドームをつけて、アヌスに挿し入れ、水と一緒に注入するのです。こうしますと、中で水と共にコンドームもふくらみます。それにつれて腸もふくらみ、とても楽しくなります。

また、水の代りに空気を入れても、コンドームが中で風船のようにふくらみ、マゾの僕にとってはたまらない被虐感を覚えます。

三、イルリガートルでの浣腸

五百CCのイルリを用いて、風呂で一人プレイをします。今では千CC位なら楽に入ります。これは時間をかけて、ゆっくりと微温湯を浣腸するのによく、刺激は少ないかわりに、落着いて浣腸の楽しさを味わうことが出来ます。

四、ビールの浣腸

僕の待望していた浣腸です。や

馬になりたいッ！ 佐野 寿



はり風呂場でイルリガートルを利用してビール二本を浣腸します。ビールのアルコール分が徐々に腸を通して身体中に回ってきて、うっとりとした、よい気分になります。浣腸の中でもビール浣腸は最高の気分が味わえます。

こうしたプレイをやっている中に、一人でやることの淋しさをつくづく感じました。一人ではマン

ネリになるばかりでなく、やはりマゾの僕は、僕を牡犬として飼って下さる女御主人にお供えしたいのです。もし、こんな僕を飼って下さる女王様がおられましたら、僕に命令して下さい。

どんなことでも、浣腸とアヌス責めについてでしたら、女王様の御命令に従います。

(群馬県・江田秀昭)

和装の似合う山添清子様へ

船^{フナ}橋^{ハシ}喬^{タカ}雄^オ

私は奇クを愛読して十五、六年になります。

少年の頃、友達と一緒に見に行った時代劇映画の中で、美しい女の人が縛られている場面が出てきたとき、思わずドキリとして、心の高鳴るのを抑える事が出来ませんでした。

それから後、時代小説の挿絵などから、縛られている女の人の絵を探すようになり、切り抜いてはそっと眺めてひとり興奮したものでした。

挿絵の中の縛り絵の多くは、美しく、なやかな女の人が裾を乱し、肌もあらわに縛り上げられて



イメージ画

「強盗遊び」

志羽利也

じつと羞恥と苦痛に耐えて居る姿でした。そんな縛られた女の人の挿絵を眺めて興奮した私は、其の頃からSの気があったのでしょうか。

戦後、本屋の店頭でなにげなくめくった雑誌のグラビアを見たところ、ハッとショックを受け思わずページを閉じてしまいました。まるで自分の心の奥底を、白日の下にさらけだされたように思えたからです。然し、どうしても、もう一度見なければ居られない心の底から突き上げて来るものがありました。

再び、そっと開いて見ました。

ああ、私の求め求めていたものがまぎれもなく、そこにあったのです。でも、どうしても求める事が出来ず、元の通りに伏せた雑誌の表紙には「奇譚クラブ」と書いてありました。

私は四年程前から、プロの女性ばかりを相手にですが、実際に縛りを行なう様になりました。ですが私は、あまりS性が強くない様なのです。

奇クを見ながらの想像の上では相当強いS性を持っているつもりですが、さて実行する段になりますと、プレイの途中で縄がゆるん

でしまう様な縛り方しか出来ないのです。

M性のある女性からは、「もっと強く縛ってもいいのよ」とか、「もっと縄を沢山かけたら……」と促される始末で、羞かしいくらいです。それでも、私は女を縛らずには居れない程、血が騒ぐ事があるのです。

私は少年の頃に得た衝撃が、時代劇の映画の着物を着た女の人の縛られた姿であつたせいとか、裸身よりも着物を着たまま縛るのが好きなのです。なかでも、美しい長襦袢姿の女を縛る時は、激しく燃え上がる様な快感を味わう事が出来ます。

山添清子様。貴女は着物が良くお似合いだと思います。そして私は、貴女に、キチンと着た着物姿が、次第次第に崩れてゆく辱しさを、充分に味あわせてあげたいと思うのです。

私は、相手が女性ならば誰でも——という気にはなれない性質なのですが、女性の貴女にとっては尚さらと思います。男性であれば誰でも——というようなことは絶対にないだろうと思いますので、文通からでも、御交際願えたらと思います。



隆 村 辻 <第100回>

早いもので、『楽我記』と称する、身辺雑事を、奇クサロン欄に書き始めてから百回目を迎えた。昭和三十九年五月号から掲載して既に八年半、長い様な、短いような歳月であった。

懐かしさにかられてバックナンバーをとり出し、さて冒頭は如何と開いてみると、こんな書出しである。

（「奇譚三十九夜物語」ひとつで汲々とする私だが、編集部からおしりを叩かれて、枯木も花の賑わいに、奇クサロンの片隅を、またぞろ、とりとめもなく埋めることになったが、諸賢よろしく——）

とある。

またぞろというのは、以前、よく似た身辺雑事で「話の屑籠」というタイトルで書いていたからである。奇クの筆禍事件で、私も参考人として警察から呼び出され、卑猥な言動で、面白半分の取調べを受け、それでイヤになって二年間許り、奇クを遠ざかったことがある。「話の屑籠」も、それを契機に打ち切ったのだが、改めて編集部への要請で、『楽我記』として復活した次第であった。

「楽我記」第一回の奇クのグラビヤは、梨花悠紀子、大塚啓子、絹川文代の全盛時代で、現在のようなSM雑誌の氾濫もなく、アングラのSM主流として、奇クの独走時代でもあった。

団鬼六氏の「花と蛇」「鬼六談義」。芳野眉美氏の「続濡れにぞ濡れし」。佐治麻造氏の「宇宙のどこかで」それに私の「奇譚三十九夜物語」等が連載ものとして続いていた。

既に私と同様、この人達も、十年選手、二十年選手で、それぞれの分野で今も活躍しておられる。思えばお互いに息の長い話で、吾人を今日あらしめたのは、勿論、奇クの大きな抱擁力と功績のお蔭

と肝に銘じている。奇クと俱に、私の禿筆「楽我記」が、第二百回第三百回を迎えられたら、こんな芽出度いことはない。

× × ×

芽出度いというのは、第百回を迎え、少なくとも過去を振り返って、曲りなりにも健康でこられたからだと思うからである。

若し仮に、延々第三百回を迎えられたら、私のよわいは六十数才になんなんとしている筈である。

途次、糖尿病になってしまったが精力の方も、さして衰えず、今日に到って尚、元気に、カメラ・ハント出来る自分の健康を祝福したい気持ちで一杯である。

愉しいSMプレイが出来る条件の、最大の公約数は、先ず健康であることであろう。

渡部好美さんのダンナの、渡部光雄氏が、糖尿から余病を併発しあちこち悪くなってきた、幾分プレイの意欲を失っている。彼を診断している、同好のドクター氏の話では、彼の肉体は五十才年令の弱り方だという。

又、東京へ去った増田喜代司さんが、自ら希んで、再び大阪へ転勤し、昨日、久し振りに私宅を訪問したが、公害か過労か、軽く胸

を侵されている。可愛い盛りの子供さんを、ちょっとした不注意で、急性肺炎を手遅れにして、亡くしたショックもあってのことであらうが、もう一年以上もSMプレイらしいプレイはしていないと言う。幸い、みゆき夫人は再度おめでたで、八月頃、出産予定ときいたが、あの双生児を胎んだ時の様な、妊婦に対する意欲は全然なく、撮る気にもならないといった。

私の謂う「緩々」の一時期なのであらうが、一つには、健康の勝れぬ原因もある。

こうして、相も変わらず、M女性を求めて探究する私自身、糖尿痛という厄介な持病を背負い乍らも、兎も角も健康であることを、しみじみ感謝している、昨今である。

× × ×

車を新車に乗り換えたのを機会に、カーステレオのテープを四、五本、買うつもりで、大阪ミナミの、虹の街の地下街のレコード店を覗いたら、SMテープが堂々と売り出されているのには、一驚した。どうせワケのわからぬ出版社であるが、戸川昌子監修と銘打って、（サドの悪徳の栄え）だとか

(緊縛にのたうつ)とか、(恍惚の答打ち)とか、タイトルだけは何となくSM好みである。こんなものを掛けて、車を走らせも出来ないが、根が物好きな私のこと、奉仕価格九五〇円という安さに、騙される気で買って帰り、車にのって、声を落としてかけてみたらどうにも莫迦々々しくなって聞いておられない。作為の鞭音と、女の悲鳴、果てはアクメに似た声で終わる。そんな繰り返して、御丁寧に解説つきである。

こんなテープに較べたら、同好仲間でないが、私の非日常性を知っている悪友が、先日聞いてくれたと持ち込んできた、カセットテープの方が遥かに面白かった。

六十分テープの半面の三十分が女性のオナラの集大成である。彼の奥さんや妹を始め、彼の奥さんが経営している喫茶店の女子従業員や来客の女性、その他エトセトラで、よくまあ、根よく撮り溜めたものと呆れたり感心したりでこんなテープは一寸、珍しい。

喫茶店のトイレに隠しマイクを仕掛け、根よく撮ったというが、オシッコの音はすべてカットしてオナラだけピックアップしたとは惜しい。

PUN—SU—PPU—BU—
—BURUBURU—PI—
BUBU……

と、こうして収録したものをきくと、女性たりといえども、オナラの音は、決して男性に遜色をとらない。

可愛らしい音が、案外ブスかも知れないし、派手で大きなヤツが妙齡の美女であるかも、分からない。音はすれども姿はみえぬ、ホンにお前は屁のような。を地でいったシロモノに、洪笑、爆笑、とどまるところを知らなかった。裏半面の三十分にも、女性のオナラを引き続き集め、女性の悲願千人屁を達成するのだと張り切っていたが、オヤジのこんなたくらみを知ったら、喫茶店の女性従業員は逃げだしてしまうだろうし、女客はこなくなるだろうと思ってもみたが、覗くわけでなし、これなどツミのないイタズラである。

× × ×

カメラ・ハントにも書かなかった、とっておきのフォト二葉を、第百回の、ささやかな記念として発表します。彼女——三宅満恵さんにお見せして、数あるフォトの中から、この程度なら構わないと許可をもらったシロモノである。



というのは、書かないという約束で撮り、その後もしばしば、フォトを交えてのSMプレイに耽り、その被虐性は抜群で、私にとって、は、プレイに耽溺出来る、秘かな愛すべき女人でもあったからである。いわば私のプライベートの交際際といってよいM女性であった。

幸か不幸か、彼女は子宝に恵まれず、それが大きな要因の一つとなつて、結婚後四年で離婚し、今は年老いた母親と、気楽なマンション暮らしの生活である。故郷の京都府下に、相当の土地を有し、近くに膨大なマンモス団地が出来るので、彼女の所有の地は鰻昇りに

昂り、一年前、約二反許り土地造成業者に売り渡して、三八〇〇万近く転がり込み、遊んで暮せる結構な身分であった。

彼女とのめぐり合いなど、精しく書けば、忽ち一篇のSMカメラ・ハントが出来上がるが、女二人で大金を有する危倶と不安さから彼女の警戒心は人並以上に強かった。そんな気楽な身分であることも、やっと最近、知ったくらいである。ハントの場合、若干の報酬はつきもののなのに、この人は、いつも反対に、私に高価な贈物をしてくれて、殆ど金を使わせたことがない。SMプレイが、孤独と憂

愁を慰める唯一の手段でもあったらしい。

奇クの読者であるが、投稿や通信など、一切したことがない。私と彼女の出会いには、テレビ局に匿名で電話して私の住所を知り、掛けてきたのである。

最初は、一般のM女性かと、しきりにハントの掲載を頼んだが、どうしても承知しない。しかし、私が書かないと約束すると、その献身的な協力は凄まじい許りで、どんな緊縛、どんな態度も許容し強烈な責めも甘受して、そのあとに訪れる、陶酔のめくるめく、ひとときは、どの女性よりも快樂至極であった。

グラマーな、二十八才という爛熟した肉体は、SMプレイの愉しさを知って、今や一途である。しかしプレイの主導権は彼女が握っていて、矢も楯も耐らぬ時、彼女から電話があつて私は彼女のマンションを訪れてゆくのであった。

母親が、結婚先の妹夫婦の家や、親戚に出向いた時で、帰宅しないと見越した日に限っている。だから未だに私は、彼女の母親と一度も顔を合わせたことがない。

撮ったフォトやネガは、すべて彼女の、絶対、合鍵のない秘蔵に

納まっている。

頼み込んで、やっと陽の目をみたのが、この二葉である。このフォトを得た交換条件で、私は彼女を、一、二泊のドライブ旅行につれてゆくことを約束させられた。嬉しい条件である。

私が金銭、物質に他意のないことを知り、彼女は近頃、やっと心から私を信ずるようになった。世の中には、こうした女性を騙してウマウマと金を巻き上げる輩が余りにも多いため、つい用心深くもなるのであろう。



彼女はA感覚への関心も強い、

開孔器を嵌め、大きく押し拡げられた菊座に、蛇口のホースをいれセントラルヒーティングで、温冷自在の二つのカラーンを調節して、一杯にひねる。かなり流出するが洗面器二杯ぐらいの、ほぼ三リットル近く注入して、腹をポンポンにさせたこともある。何でも試せる女というものは得難い。いつ迄プレイの仲が継続するか知れないが、私独りのM女性にしておきたい人である。彼女も又、それを切望しているのであるが――。

つい、おノロケになってしまった。

新しい細も、ニコンの最高級のカメラも、浣腸や女悦の器具一式も、彼女のマンションに、隠匿されている。請われる俚に、私が暇をみて買い集めては持参したものである。

彼女を訪れる場合、私は、てぶらでよかった。SMのプレイだとすぐ分かる、愛用のショルダーバッグを持ち出す必要もなかった。浪花節と漫才と、寛美の新喜劇の好きな、庶民的な彼女は、大金持ちの独身女性にかかわらず、ちっとも気取ったところがない。服装だって、流行を追わず、極く平凡である。

そんな気取らない彼女が、私は好きである。

二葉のフォトを提供する気になったのも、愉しいSMプレイに対する、彼女のささやかな歓びの、しるしであらう。

一カ月に一度か、隔月に一度のプレイ。そんな偶のプレイに、彼女はすべての情熱を賭けて挑んでくる。だからこそ、もう一年半にもなるのに、細く長く続いているのかも知れない。

編集子に対するある通信

鳥居宣孝

謹啓、先日は深田菊子という美少女の写真を御鄭重にも御送り下さり、ありがたく存じました。

私は大学では国語を研究し、大学院で教育哲学を研究しまして、大学で教育原理の教師をし、高校

で国語の教師をしてきた者です。

若い娘に対して深い教育愛の心をもつ私を分かってくれる女子学生もいました、いつも私は、いわゆる、かわい子ちゃんとか、ペットとかマスコットといわれる女子

学生にめぐまれて何でもうちあげた話をきいてやっていろいろ処置し、世話をしました。

高校、大学にかけての女子学生のなやみの一つは便秘です。うつぶせになって、お尻をたかくもち上げた高校女子学生に、私は上手に浣腸器をさしこんでやって、浣腸をしてやりました。が、ふだんは甘えているこの女子学生が、かたくなっています。けれど、次に手当てをしてやるとき、この学生

は、先生は国語の先生というよりまるで医者さまみたいですね、と、にっこりしました。

でも、うつぶせになって、ひざを立てて、お尻をたかくもち上げた女子学生に、私が浣腸器をさしこんで上手に浣腸してやっても、彼女はさせられているポーズがエロチックなので、何か他のことを連想するらしくて、なやましそうでした。

やはり、うつぶせになって、お尻をもち上げた短期大学の女子学生に、私が浣腸をしてやったときこの女子学生は、校医さんに浣腸をされたとき、息をとめなさいといわれたことがありましたが、そんなことはしなくてもいいのですね、と、私の手当ての仕方をほめてくれました。

ある夏休みに近いあつい日に、ニキビがたくさんでていて、大学に通学するのがつらいと、女子学生が告白しました。それで私は、貴女は身体検査のとき痔の検査を受けたかとききました。このかわいくて体位のすばらしく立派な女子学生は、はだかのお尻を、お医者さんにみてもらうことなんか平気です、といいました。

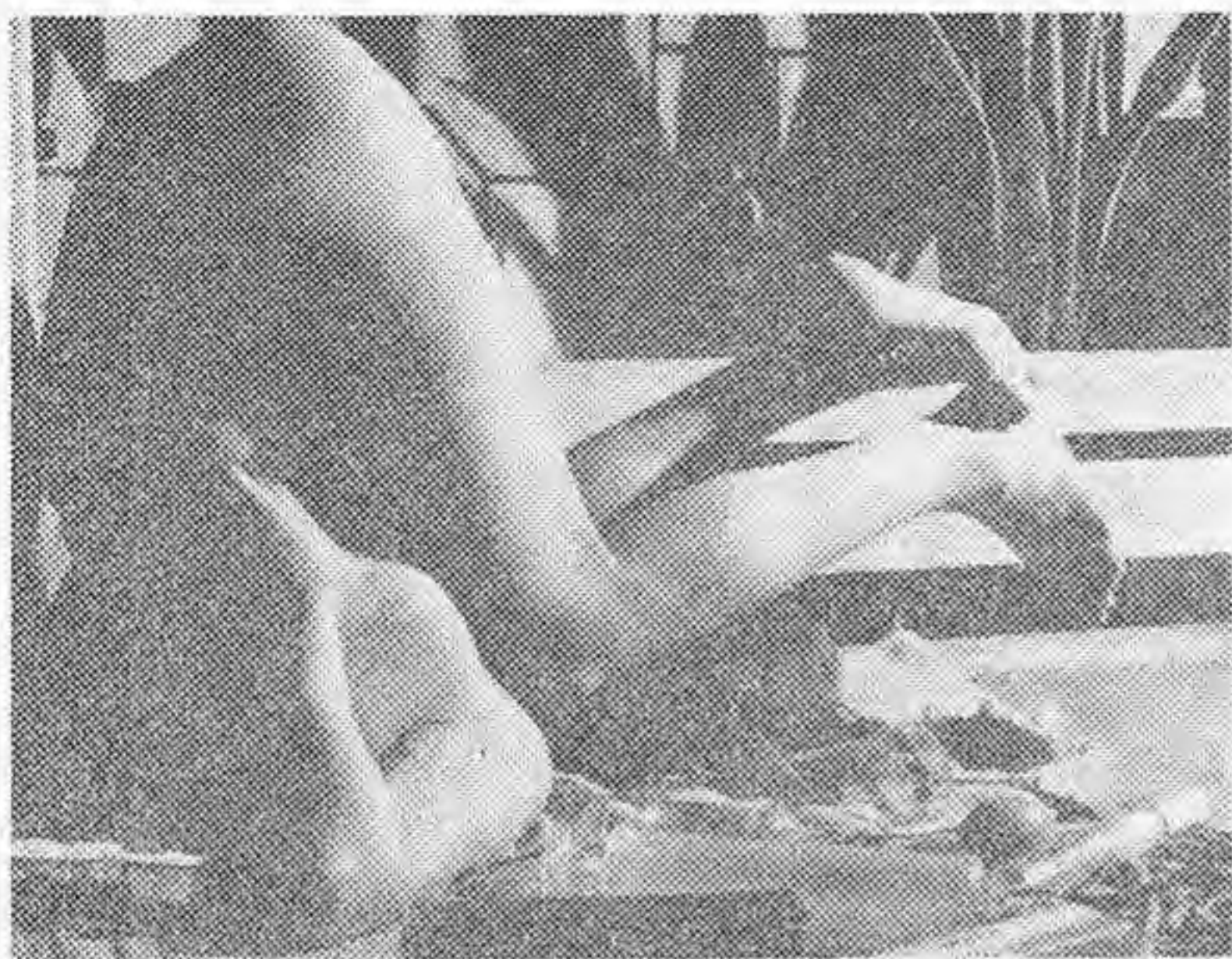
私はこの女子学生にグリセリン

浣腸を、してやりました。彼女は、この手当てを受け、すっきりしてとてもよろこび、夏休みになるまで毎日のように私を下宿にたずねて手当てを受けました。

私の経験からも、アメリカで少女や若い娘のいる家庭には、かならずグリセリン浣腸器とイルリガートルを、そなえてあって、朝、お通じのなかった少女は、すぐ親にたのんで浣腸して下さいといひどんなに忙しくても、親はよろこんで浣腸をしてやり、少女や若い娘が結婚するまで、親はこの手当てをしてやるのが普及しています。

少女や若い娘の健康と美容のために日本の親も、もっと少女や若い娘に、この手当てをしてやるのがよいと思います。深田菊子という美少女の写真は、たくさんもっていても、人に上げると、とても喜ばれますから又、送って下さい。

うつぶせになって、かわいいお尻をもち上げた深田菊子という美少女に浣腸をしてやっているありさまは、ロマンチックで多少エロチックなところがあって、たのしいものだと思います。浣腸されている深田菊子という美少女の写真、また送って下さい。



私でも『縛りのモデル』に
使ってもらえますか？

江崎悠子

私は少し大柄なんです。身長が一六七センチ、体重が六三キロもあります。美容体操を毎日やっていますが、余りやせません。絵画専門学校での絵のモデルをやった経験が少しばかりありますが「縛り」については、経験はありません。奇クを見たとき、こんな雑誌のモデルになりたいと思い、

お手紙を書きました。雑誌の方で私のような者がダメでしたら、読者の方でもかまいません。身体は大柄ですが、学生ときからスポーツをやっています。ですから柔らかさはあります。ですから大体のポーズはとれるつもりです。絵のモデ

ルをしているときは、三十分ぐらいいは、同じポーズでいたこともありませんし、辛抱づよいことには自信がありますので、縛られたり流腸されたりすることは、出来ると思います。

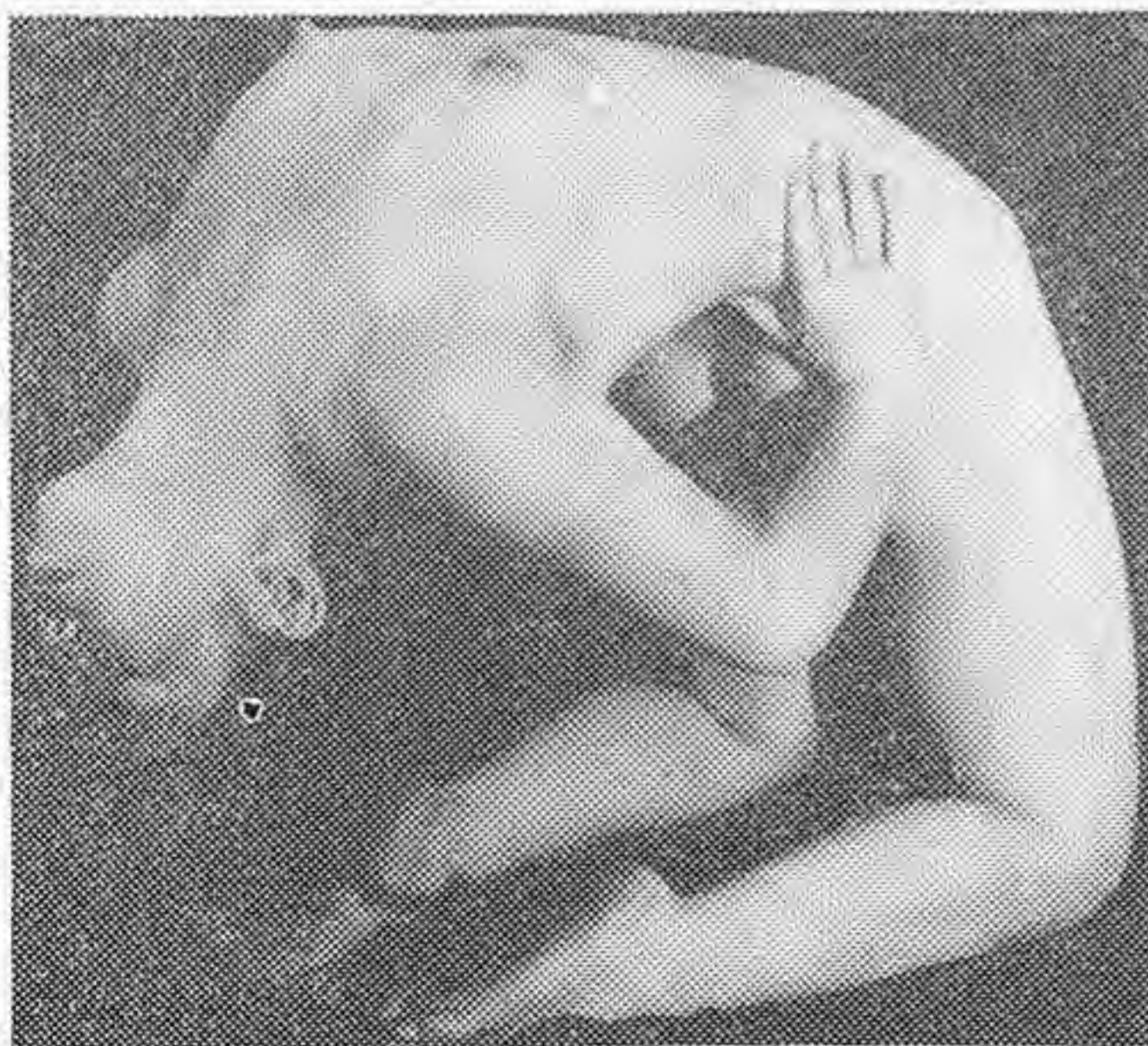
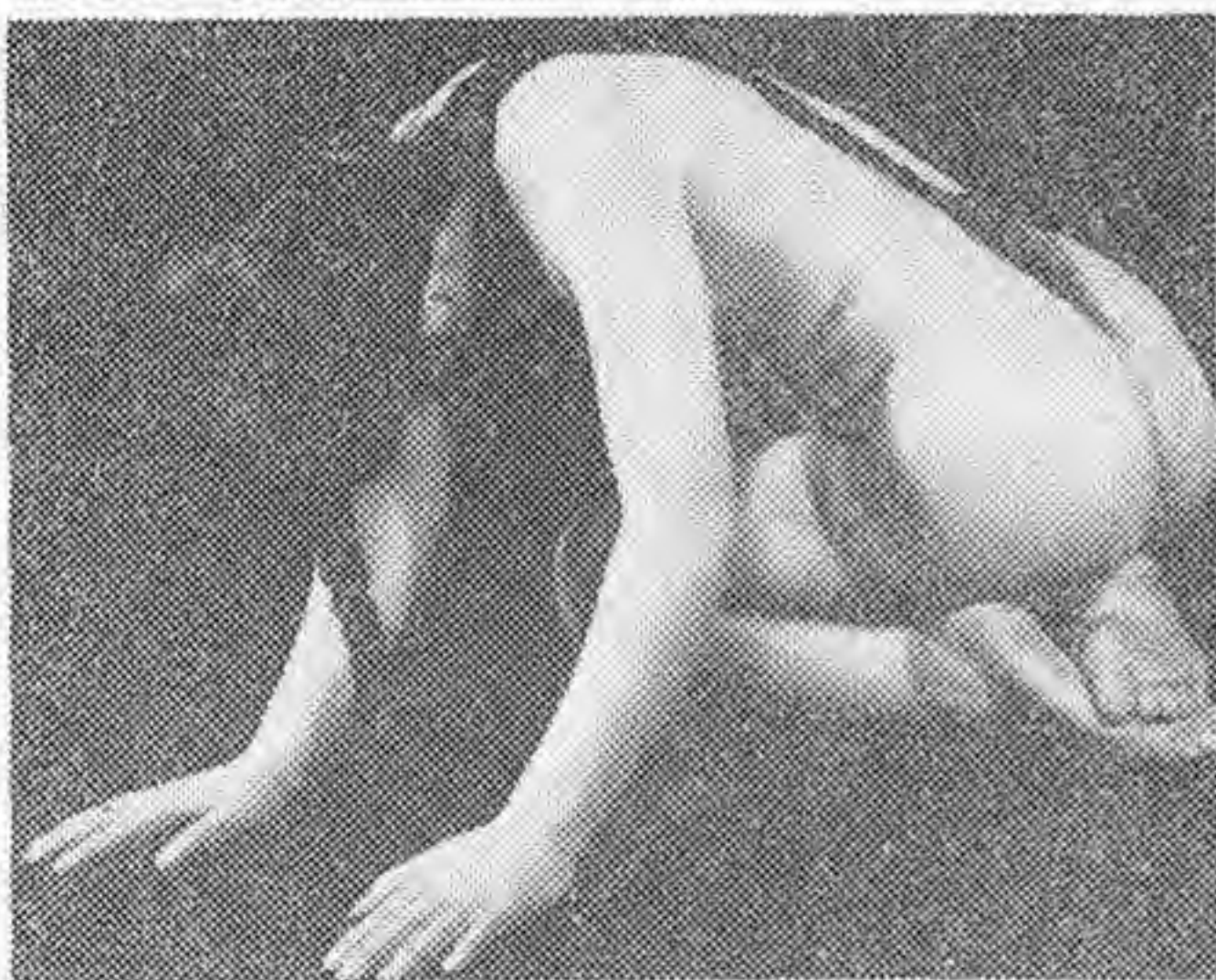
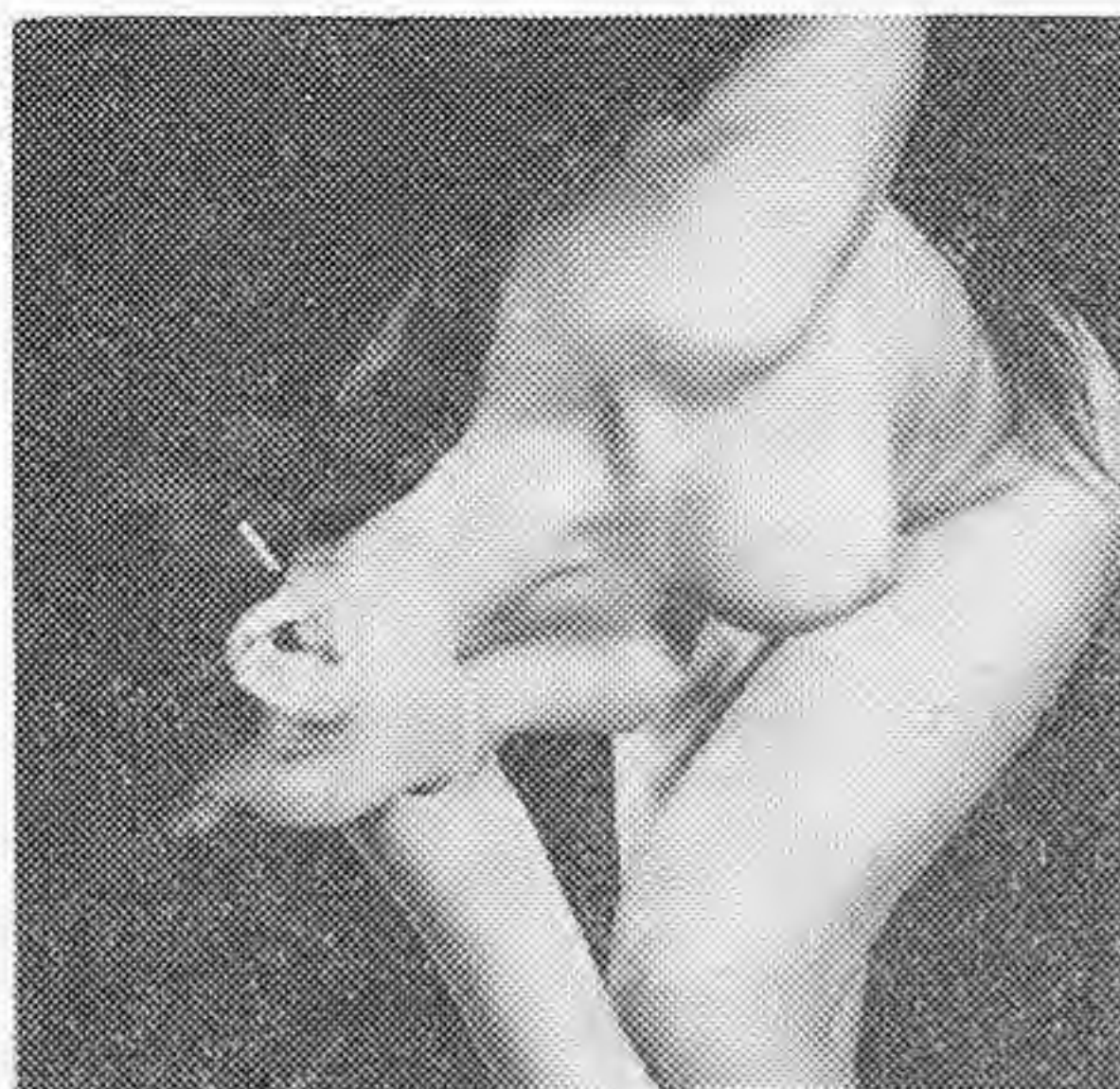
絵のモデルをしているとき、うつしてもらった写真がありますので三枚ばかり同封しておきます。京都に住んでおりますが、往復の交通費さえ出して頂ければ、どこへでも参ります。写真は顔のわか

らないのばかり選びましたので誌上にのせて下さっても、かまいません。スタイルには自信はございますが、フェイスには自信はございません。

こんな私でもよろしかったら、一度試みに、使ってみて下さいませんか。

まだ奇クは見始めで、何も知りませんので、よろしく御指導頂ければ幸いです。

(京都市東山区——江崎悠子)



八月号 奇ク雑感………梶 美 鬼

いよいよ充実の奇譚クラブ

やはり『奇譚クラブ』に口絵写真がない『なんて、『クリップ』を入れないコーヒ―』みたいなものである。七月号よりも更に、質、量ともに厚みを増して、颯爽と姿を現わした奇譚クラブ八月号！

特に私にショックを与え、興奮させられたのは、前田真知子の開股フォトである。見るからに白い肌を思わせる女体。大学生の時よりも、初々しさは失われてしまっただが、逆に女らしい、なまめかしさエロっぱさが出てきた。

やはりSM写真は責め役の手なり足なりが加わっていた方が迫力がある。女の豊かな乳房を縛り、尻を割り、苦しみ悶えさせてこそSM写真の極致が現出する。

八月号の口絵の第一頁を開いて私は戦慄した。前田真知子が乳首の真上を、固くきつく縛られ、両足を高々と男の手によって持ちあげられ、あわれっぽい表情を正面のカメラに向けている。

このポーズでなら、バイブレーター、浣腸責め、指による責め、女体開き——と、どんな羞恥責めでも思いのままである。

次々と男によって、黒髪をいたぶられたり、横にころがされ白い尻を足先でおさえつけられたり、仰向けの女の足をぐっと持ちあげられ、太股縛りの上、股にくい込んでいる縄が、はっきり見える。

ポーズ、責め具合も、全く抜群の写真だが、手の指の反り具合、軽く口を開き、顔をそらした、甘く訴えるような表情は素晴らしい。

近頃、SM雑誌が増えてSM写真が巷に溢れているが、殆ど商売用のニセ物ばかりである。本当の意味でのSM写真というのは極めて少ない。前田真知子こそ商品ではないマゾモデルである。それはこの絶妙な表情を見れば、よくわかる。新鮮で実感と親近感が、見る者の心を強く搏つのである。

本文にも、彼女の告白文「夢遠き日頃」が流れるような文章と、口絵写真に勝るとも劣らぬ文中の責写真が満載されている。今年の数多い傑作中の傑作である。

辻村氏のカメラハントのフォトにはよく出るポーズだが、今までの彼女は滅多に両足を開かなかつた。両足首を縛られ、胸につく程

強くひきつけられ、大きく開ききった両足。こうすると、白線で消された真知子の女の秘密が、容易に想像出来る。

そうした片足を持ち上げられ、正面を向いたポーズが三葉もある中の一枚は左足をぐっと持ち上げられ、正面に視線をむけているもの。白線がなければ真知子の唇は軽く開き、纖毛は柔らかく風になびいているだろう。

毎月、新しいモデルの出現に心をおどらせて期待しているが、今月号は又々辻村氏が三人のモデル（一人は、もうお馴染みの英雄、悠子夫妻）の紹介がある。いつも新鮮な新開拓を求めてやまない氏のフォトは、まさに圧巻である。中でも、奥村マリの本格大の字縛りは稀有のフォトである。

豊かなポリニウムで恥らう「七つの土鈴と玉手箱」の笠井奈保子の初々しさ。お嬢さんがはじめてイヤイヤ縛られたという可愛さがある。逆にベテランの中に、大胆にも切り込もうという福井桃子。何でも、わかり切っている、縛られる事を楽しんでいるような彼女。見る人をもみ込んでしまうような、心にくい表情。ポーズも益々大胆になり、両足をもちあげ、女

体を正面にむけたり、柱に強く右足をひきあげて縛られ、股を八字に開いて、ニッコリ笑ったり、四つん這いになり浣腸器で、くすぐられたり、SMの中に全ての読者を強く、ひき込んでいく。

今月号で最もうれしかったのは塚本鋭三氏の「私の縛った思い出のM女たち」。これは私の一番気に入った緊縛史であった。各緊縛モデルの特徴と思い出。各美人モデルへの剃毛責め。深田菊子への排尿責め。SMファンにはノドから手が出る責めである。

更に氏は女体の開き具合を、しっかりとレンズにうつし込んでいる。そのカメラワークの腕も確かである。今後の一層の活躍を大いに期待したい。今や氏は奇クのバックボーンとしての確固たる地盤を確いたというべきである。

奇クサロンの最上卓也氏の提供された写真。凄じい迫力である。

さて、九月号は、どんな責めフォトを見せてくれるか。今から大いに楽しみである。八月号にて、「パロディ花と蛇」の休載は淋しかった。SM雑誌の氾濫する今日本家の奇クの純粹SMの味をすてず、ファンのためにも更に一層の前進を期してほしい。

S M 代 理 妻

佐野 みさ子

みさ子は、奇クを愛読されるみな様の『代理妻』になりたいと願っております。

人妻とのプレイを望んでおられる方々の『SM代理妻』になり、思う存分のSMプレイとセックスとを、大いに楽しみたいと思っております。

夫にかくれてSMセックスを楽しむスリルもまた格別です。みさ子の男性遍歴も、今では、すでに十名位になり、SMプレイの回数も何回やったか数えきれません。

SMプレイとセックスが、みさ子の生甲斐です。縛られたままのセックスは最高に素晴らしいものです。そして、みさ子はプレイの相手の男性の方に、オシャブリの奉仕を自分から積極的にするのを悦びとしております。

近々、ある男性とSMプレイをやる予定ですので、いずれその有様を奇クに発表するつもりであります。奇クに発表して、ファンの皆さまに読んでいただけたらと思います。一層、張り切れます。皆さまのSM代理妻である、み

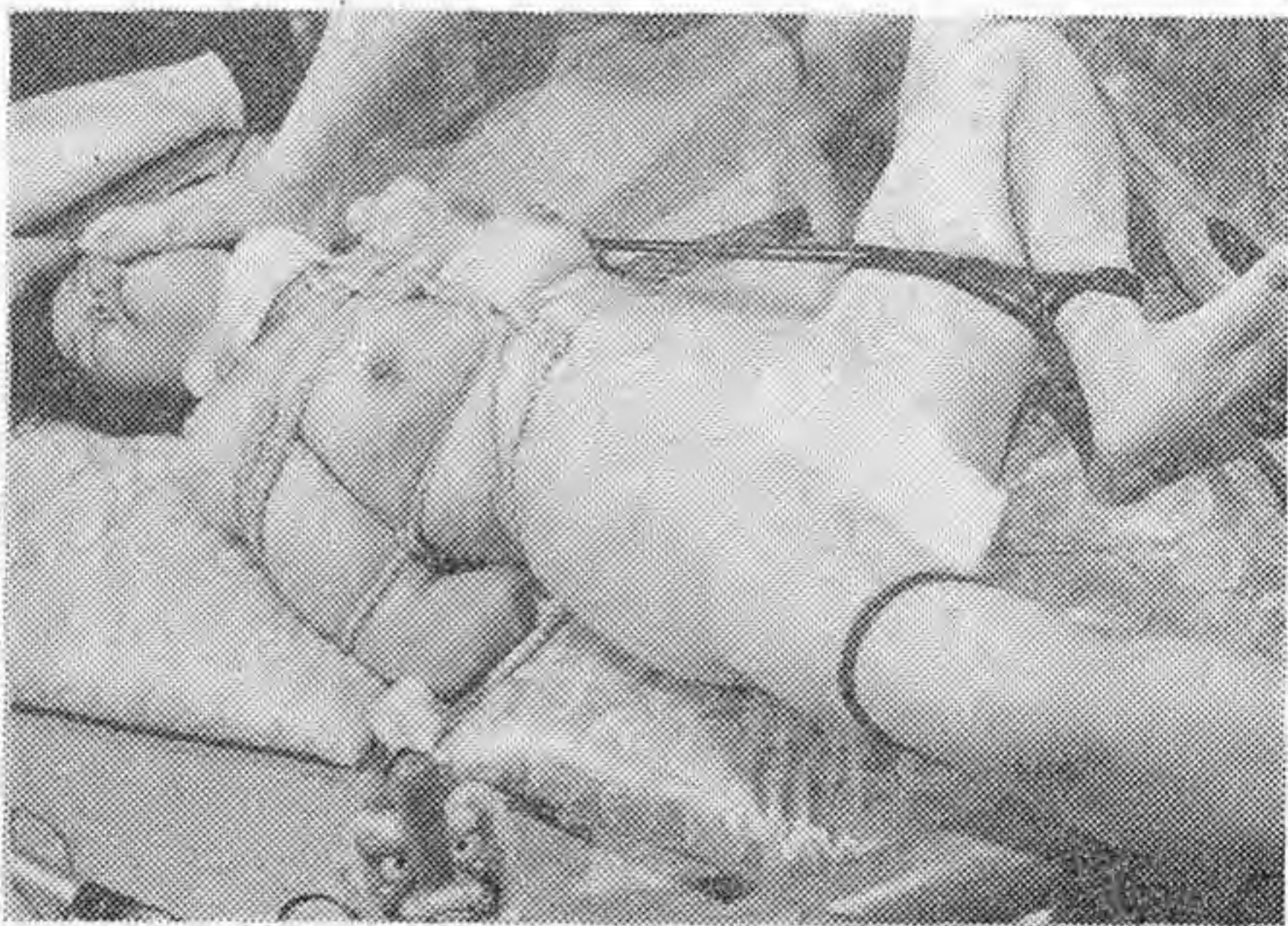
さ子を、どうか今後とも、いっそう可愛がって下さいませ。

同封のフォトは、ロマン派生さんとの、二回目のプレイをやった時のものです。

プレイの時には、ロマン派生さまにも、お願いして全裸になつてもらいました。そうしないと、みさ子には気分が出ないからです。

それから、み

さ子は奇ク編集部へ、私を取材して下さるようお願いしておりますので、みさ子の全裸で縛られた、あられもないポーズが、見事な写真となつて、誌上を飾ることができるかもしれません。



みさ子は、とことんまで、羞恥責めのいろいろで、いじめ抜いてほしいのです。

みさ子は、皆さまの代理妻なので、ですから、どうぞ、ご遠慮なく、名乗りをあげて下さいませ。

編集部だより

○この頃、読者の方々からの投稿が増えてきましたので、奇クサロンVの欄も大幅に増頁しました。本文の方も極力、読者の方々のために開放したいと思っておりますので、葉書でも結構ですから、どうか、どしどし、お寄せ下さい。

○手始めに、次号あたりから、読者投稿の告白などを出来る限り多く載せたいと思います。本誌では、読者通信欄Vに於いて、読者の方々からの通信や短文を掲載しておりますが、読者の皆様の共通の広場として提供しております、この欄を最大限に御利用下さい。

○読者通信Vは、誌上にて、読者と読者の相互間、読者と編集者や寄稿家、執筆者、モデルなどへの呼び掛け、誌上での対話、その他、読者の方々の意志を誌面に表現する媒体として大いに活用して頂きたいと思っております。なんなりと御遠慮なくお寄せ願いたいと思います、お待ちしております。

○中河恵子さんから久々に寄稿があつて「縄とライトとカメラ」と題して九月号に掲載しましたが

M女通信 雨の降るある日のこと

高 村 浩 子

私はどちらかと言いますと、外と、よけいに外出するのがオック出するのは好きではありません。ウになります。

特別の用がない限り、家の中に本を製ってくるかも知れないというに、毎日のように雨が降ります

そんな私ですが、台風6号が日

本を製ってくるかも知れないというに、毎日のように雨が降ります

決して、数多くの

方にいじめられたい……などとは思いません。

たった一人の方でいいのです。私は、そういう、たった一人の方を求めて、滝のように降る雨のなかを、被虐の旅に出かけました。

この頃は、私に対して、お手紙を下さる方も少なくなりました。次々と誌上には、若くて美しい、そして新しい方が姿を見せておられるのですもの、忘れられてゆくのも、無理はありません。

一時は、とても、こんなには、お返事は書けないと悲鳴をあげるほど、沢山のお手紙を頂きましたが、この頃は、お便りどころか、誌上でも、余り浩子のこととは話題にのぼらなくなりました。でも、浩子は、ひとり、ひっそりと暮しておられます。SMに対する情熱を人一倍、胸に秘めながら……。

浩子の身の上に、また変わったことがございましたら、思い出したようにM女通信を出させて頂こうと思います。今のところは、これという特別に変わった話題を皆さま方に提供するようなことはありません。

浩子に対して、沢山のお手紙を下さった読者の方々には、誌上で、厚くお礼申しあげます。

近々来阪されることですのでまた何か取材出来れば新しいフォトで誌上を飾れるかと思っています。

○昨年の誌上に度々珠玉の告白を寄せられた荒尾慶子さんから、暑中見舞の便りを貰いました。身辺の変化から御無沙汰していたとのことでした。書くべきことは余りにも書きつくしたということからペンを休めていたそうです。

○編集部から、告白を書くように依頼し、また御本人も食指を動かされていた川路むら子さんは中々思うように書けないから、という断わりの手紙を寄せてきました。

長短に拘らず、体験とか手記、告白を書いて下される女性の方、どうか通信をお寄せ願います。御都合さえ悪くなければ、こちらから取材に伺わせていただきます。

○佐野みさ子さんから、カメラハントに応募下さいました。誌上に度々登場されてはいますが、辻村隆氏の筆で、すべての裸身をさらしたいと願う彼女の要望を是非具現してほしいものです。

○抜群のプロポーションを誇る鈴木千鶴子さんは、八月末に来阪とのこと。予告していました富田由美子さんは都合によって八月下旬までハント出来ないそうです。

奇クの『三人娘』をいじめたい

世田谷 一郎

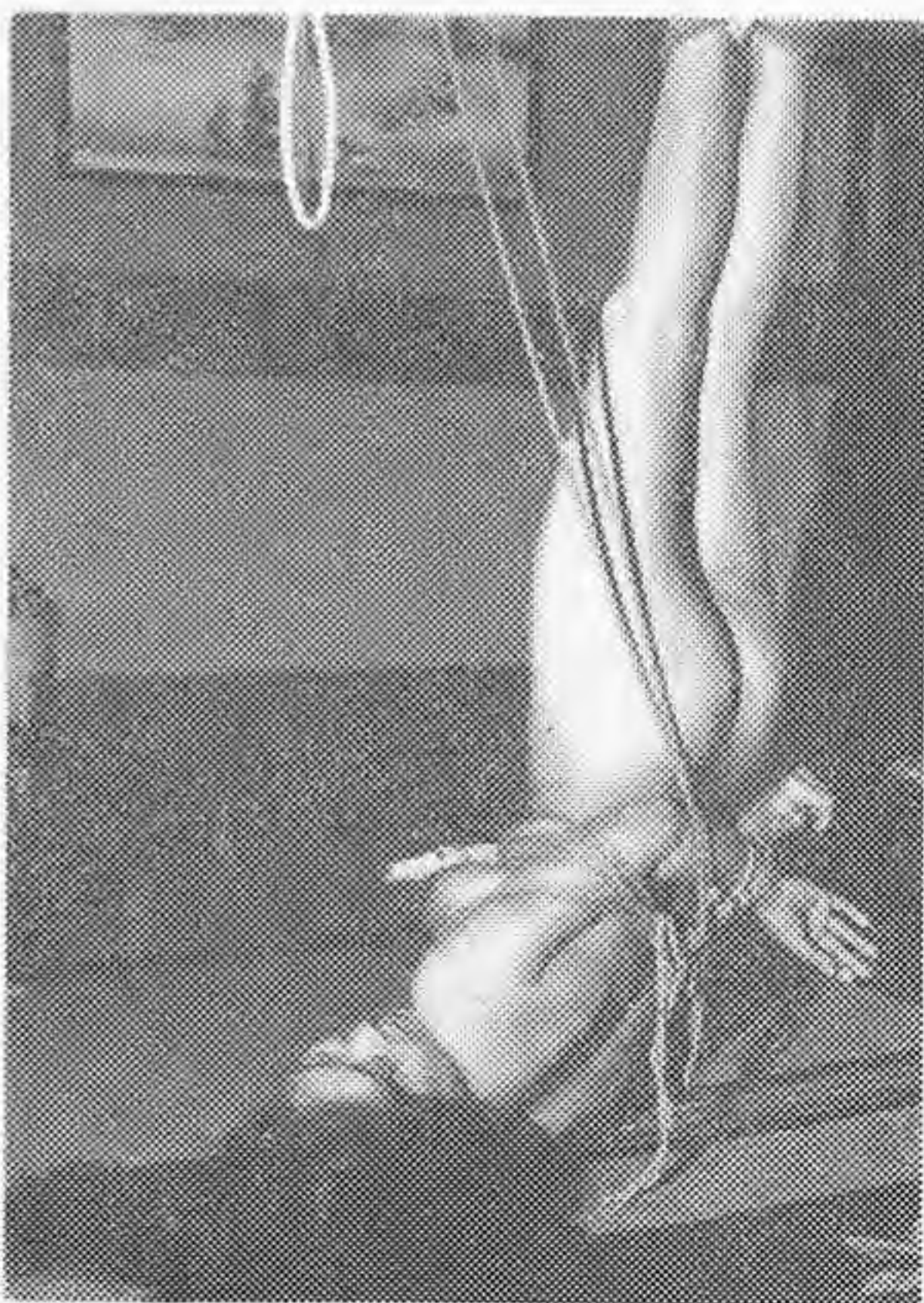
私は奇ク八月号に始めて出した便りを、読者通信にのせてもらった世田谷一郎です。まだ若輩未熟ではありますが、よろしく、お願い致します。

奇ク八月号を読んでいるうちに私は、なにかしら益々ファイトが湧いて来ました。理由はわかりません。とにかく、身体の中から、もりもりと勇気のようなものが、

むしろ湧き出てきたのは事実です。

私は、笠井奈保子、高村浩子、前田真知子。この三人のお嬢さん（マゾ女）を徹底的に、いじめ抜いてみたいと思います。

この三人は、生い立ちも、性格も、また容姿も、それぞれ違っていますし、従ってM度も、三人それぞれ違うことと思います。



でも、とにかく私は、三人のM女を、いじめたいのです。

責めのアイデアとして頭に浮かぶのは、素裸のマゾ女体を雁字搦めに縛り上げ、その美しい肉塊を心ゆくまで翻弄し、思いきり辱かしめ、彼女らのマゾの血をエクスタシーの極致へと燃え上がらせてやりたい。

もしも私が、あなた方を責めるチャンスに恵まれたら、容赦なくマゾペットの家畜のように扱うつもりです。また八月号の読者通信に書いた色々な責めも加味したプ

レイも試みたい。しかし、私の荒々しい言動の裏には、あなた方が可愛いからこそ、いじめてやりたいという衝動にかられるのだと言う事を忘れないで欲しい。

本の内容に変わるが奈保子の猿轡をされ緊縛されたマゾの媚態は私を魅了しつつ、暫時フォトから目を離せなかった。真知子の場合は、マゾに悶えるプロフィルが奈保子同様、えも言えぬ甘酸っぱい芳香が、誌面から漂ってくる様な錯覚に陥る位、すばらしい肢体であった。

「奇ク特派員記者」を志望

小杉 実

小生の性向としましては、性による、満足とは切り離し、あくまでプレイによる陶酔であります。一連の緊縛スタイルじゃなく、着衣のまま（但し下着は全部取っていただいております）で羞恥責めを行ないます。

ロープの使用については、どうも自信がなくフォトに撮ると、だらけた感じになるのは勉強不足なのでしょう。モデルとしましては肥満体で大柄な女性ならば、この上もない喜びです。

野外などで露出による羞恥心をくすぐるプレイを好みのモデルによって行なうならば、自分も一緒になりフォトにおさまることによって起こる喜びは、S性だけじゃなく露出癖もある事は確かです。

初めから塚本氏や辻村氏のようにルポを、すらすら書けるかという事については少々疑問であり、又、誌上に載っているような素晴らしいフォトを撮る事も無理というものです。

素人らしいカメラアングルでルポ致しますれば、それなりに愛読

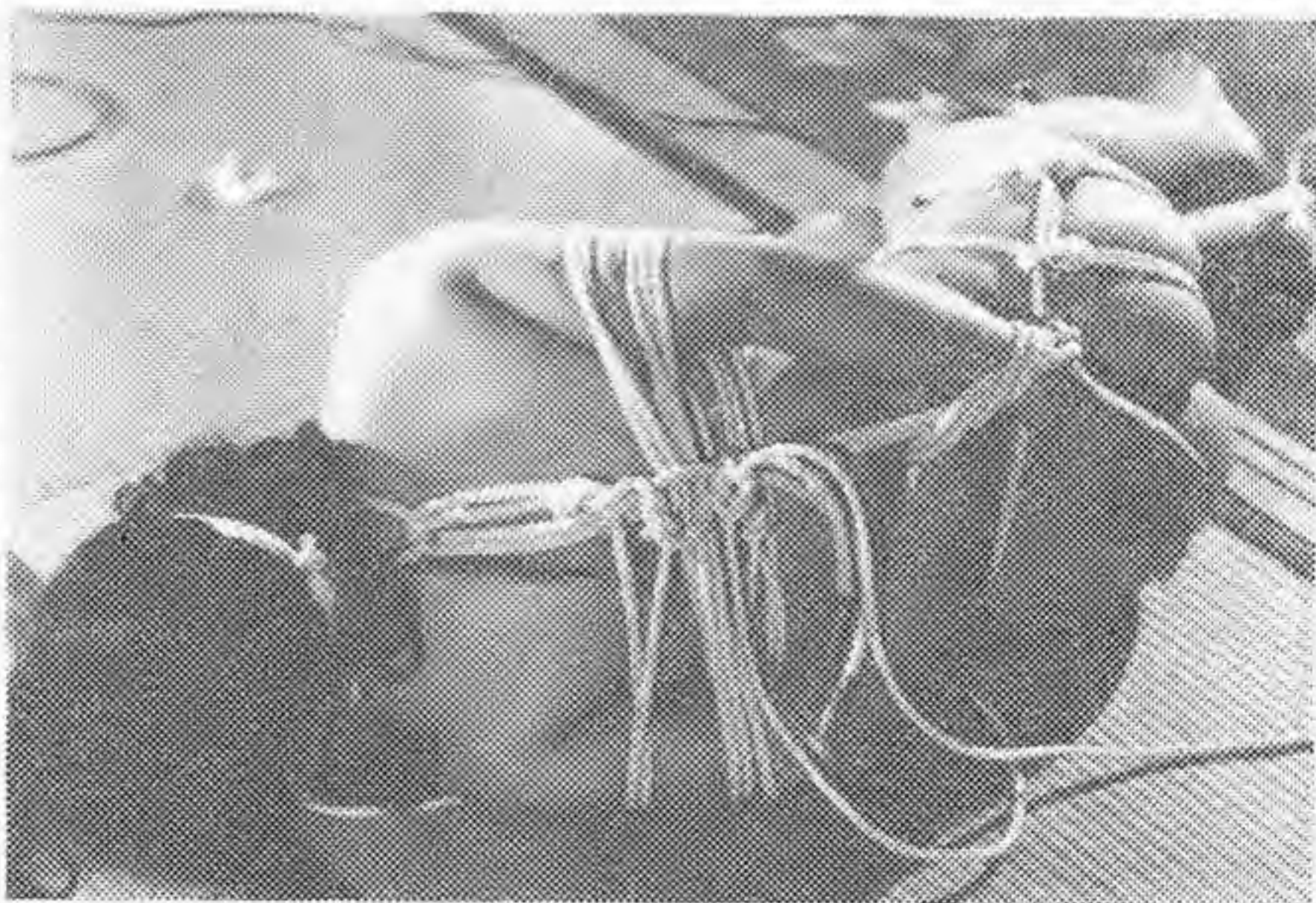
者の共鳴を受けるのではないかと考えます。老舗の奇クのマンネリ打破策として、自分をぜひ特派員として任命していただきたいと思っています。

文科系の出じゃないので、この通りの文章です。海の物とも山の物ともわからぬ小生、どうせボツになりましようが、写真技術に至っては稍々良好ですので、条件は採用というアンパイには参りませんか。

次に愛読者諸氏へ。四〇才から五〇才迄の御夫婦の方で、本誌をテキストとして共に研究しようと思われる方は、おられますか。

小生、三十二才、身長一七三、体重六四、過去に結婚の経験がありますが、現在、独身です。但し関東地区居住の方に限ります。

勤務が民間企業ではないので、一応ペンネームを使用させていただきますが、本名住所は本誌編集部に御届けしてあります。SMに関心のある御夫妻の回春のお役に立つ程、スタイルには自信があります。（東京都・小杉実）



それに、浩子のマゾの境地に悶悦する七月号のフォトは、猿轡をされ後手に縛られているのが大変肉感的だった。

本文の中で、三人のマゾ女性自分なりに自身の被虐性を自覚し

で、相当面白い記録が撮れると思います。彼も、サド傾向の人間です。念のため。

私の、この拙い文章を読まれまして、なんらかの反響を読者通信に寄せて下さい。

て献身しているのが好感が持てる。彼女らの文章を読んでゆくと段々とマゾが昂揚しているのが明確に、わかる。とにかく、一度、SMプレイがしてみたい。その時は必ずマゾ奴隷として凌辱し、責めの限りを尽し悦虐の桃源境に浸らせてあげます。

私は8ミリの興味を持っていて、出来れば三人のM女性の悦虐姿態を映して見たいと思っています。また友人にセミプロのカメラマンがいて現像なども自由に出来るし、カラー写真も可能なの

浣腸責め地獄の妊産婦 大手札四枚一組 略号△ほな△ 増田みゆき	浣腸責めの甘い恐怖 大手札三枚一組 略号△とか△ 中河 恵子	浣腸液注入直後の状況 大手札三枚一組 略号△とま△ 中河 恵子	強制浣腸の各美姿態 大手札三枚一組 略号△とみ△ 中河 恵子	浣腸責めの美態開陳 大手札三枚一組 略号△とめ△ 中河 恵子	浣腸を待つポーズ 大手札三枚一組 略号△とも△ 中河 恵子	エネマと縛りの恐怖 大手札三枚一組 略号△よて△ 長井葉津子	エネマ責めの恐怖 大手札三枚一組 略号△よる△ 長井葉津子	浣腸器を弄び愛撫する女 大手札三枚一組 略号△よる△ 長井葉津子	イルリガートルの浣腸責め 大手札三枚一組 略号△よる△ 長井葉津子	浣腸にむせび泣く女 大手札四枚一組 略号△つゆ△ 大島 照代	身動き出来る浣腸地獄 大手札四枚一組 略号△つえ△ 大島 照代
浣腸とオシメ装着 大手札四枚一組 略号△ひそ△ 大塚 啓子	強制浣腸責めの序曲 大手札三枚一組 略号△よか△ 長井葉津子	襲いくる浣腸器嘴管の先 大手札三枚一組 略号△より△ 長井葉津子	鼻孔の奥を探索する魔手 大手札三枚一組 略号△はむ△ 中河 恵子	開孔器にてひろく鼻孔 大手札三枚一組 略号△はら△ 中河 恵子	なぶられる拘束裸身の鼻 大手札三枚一組 略号△はれ△ 中河 恵子	仰臥した緊縛女体の鼻なぶり 大手札三枚一組 略号△はに△ 中河 恵子	美女の鼻をもてあそぶ 大手札三枚一組 略号△ちる△ 左近麻里子	美女の鼻孔を觀賞する 大手札三枚一組 略号△ちれ△ 左近麻里子	開孔器で検査する鼻孔 大手札三枚一組 略号△ちき△ 左近麻里子	鼻孔に煙草挿し込み責め 大手札三枚一組 略号△ぬと△ 美木乃々子	可愛い鼻責めのアップ 大手札五枚一組 略号△ぬは△ 美木乃々子
強烈縛りで顔面翻弄 大手札八枚一組 略号△ぬほ△ 美木乃々子	可憐乙女の鼻をいたぶる 大手札四枚一組 略号△るえ△ 一宮百合子	鼻責めと鼻孔のアップ 大手札三枚一組 略号△ねけ△ 中河 恵子	鼻責めの陶醉境 大手札三枚一組 略号△なは△ 大塚 啓子	淫虐鼻なぶりの形相 大手札三枚一組 略号△ない△ 大塚 啓子	鼻の穴を責める 大手札三枚一組 略号△なく△ 大塚 啓子	夫婦連縛にて鼻責め 大手札十枚一組 略号△らか△ 増田みゆき	鼻責めに悶える女 大手札七枚一組 略号△むる△ 木村 洋子	顔を凌辱される女 大手札四枚一組 略号△むよ△ 木村 洋子	鼻責めと緊縛 大手札五枚一組 略号△うい△ 大塚 啓子	鼻責めによる悦楽 大手札二枚一組 略号△きな△ 東浦・大塚	美しい鼻をいたぶる 大手札三枚一組 略号△ゆは△ 遠藤百合子
乳房いじめの責め 大手札二枚一組 略号△とお△ 大塚 啓子	豊かな乳房を責める 大手札三枚一組 略号△とき△ 東浦ひかる	逆エビ吊り責め 大手札六枚一組 略号△りつ1△ 梨花悠紀子	逆胴吊り責め 大手札六枚一組 略号△りつ2△ 梨花悠紀子	大の字逆さ吊り 大手札二枚一組 略号△むの△ 増田みゆき	豊満乳房しばり責め 大手札三枚一組 略号△うは△ 長野 良子	吊り打ち責め 大手札三枚一組 略号△やり△ 関谷富佐子	腰元の吊り責め 大手札二枚一組 略号△こり△ 村井知可子	乳房強調膨隆責め 大手札三枚一組 略号△こわ△ 佐々木真弓	エネマシリッジ挿入責め 大手札三枚一組 略号△えね△ 大塚 啓子	ワシづかみ責めの乳房 大手札三枚一組 略号△えう△ 大塚・東浦	強烈乳房責め五態 大手札五枚一組 略号△てら△ 山原 清子

パイプ責めに呻めく女 大手札三枚一組 略号八きわ 松本 たえ	体内に奔流する浣腸溶液 大手札三枚一組 略号四〇〇 深田 菊子	八カ月の妊婦裸身開陳 大手札三枚一組 略号五〇〇 福井 桃子	後手高手小手縛り三態 大手札三枚一組 略号五〇〇 鈴木千鶴子
両足挙げ柱宙縛り 大手札三枚一組 略号五〇〇 松本 たえ	浣腸フレイを楽しむ美女 大手札三枚一組 略号四〇〇 深田 菊子	柱縛りの九カ月腹妊婦 大手札三枚一組 略号五〇〇 福井 桃子	卓上の緊縛悦虐姿態 大手札三枚一組 略号五〇〇 鈴木千鶴子
強烈黒縄縛り悦虐地獄 大手札三枚一組 略号五〇〇 松本 たえ	オシメから生ゴムカバーへ 大手札三枚一組 略号二〇〇 深田 菊子	引き回された妊婦腹 大手札三枚一組 略号五〇〇 福井 桃子	全裸浴室での股間縛り 大手札三枚一組 略号五〇〇 鈴木千鶴子
羞恥責めに陶酔する女 大手札三枚一組 略号五〇〇 松本 たえ	おムツに排便する乙女 大手札三枚一組 略号二〇〇 深田 菊子	膨隆妊婦腹の股間縛り 大手札三枚一組 略号五〇〇 福井 桃子	悶える踊子の欲情処理 大手札三枚一組 略号五〇〇 鈴木千鶴子
猿轡と縄に涕泣する瞬間 大手札三枚一組 略号五〇〇 松本 たえ	生ゴム製のオムツカバー着用 大手札三枚一組 略号二〇〇 深田 菊子	鏡に映る太鼓腹縛り 大手札三枚一組 略号五〇〇 福井 桃子	美しき全裸の縛り 大手札三枚一組 略号五〇〇 鈴木千鶴子
柱宙縛りと逆さ縛り責め 大手札三枚一組 略号五〇〇 松本 たえ	メロン腹白縄縛り 大手札三枚一組 略号一八〇 深田 菊子	蛙腹誇張の緊縛美 大手札三枚一組 略号五〇〇 福井 桃子	柱縛りと脚挙げ縛り カラ一三枚一組 略号一〇〇 前田真知子
足を吊られた悦虐に泣く 大手札三枚一組 略号五〇〇 松本 たえ	正面柱縛りの蛙腹 大手札三枚一組 略号五〇〇 福井 桃子	足挙げ縛り蛙腹妊婦 大手札三枚一組 略号五〇〇 福井 桃子	麻縄高手小手首縛り カラ一三枚一組 略号一〇〇 前田真知子
浣腸溶液を圧入される 大手札三枚一組 略号四〇〇 深田 菊子	開脚縛り妊娠腹 大手札三枚一組 略号五〇〇 福井 桃子	卓の脚に縛った蛙腹妊婦 大手札三枚一組 略号五〇〇 福井 桃子	荒縄強烈エビ縛り カラ一三枚一組 略号一〇〇 前田真知子
全裸で受ける三種の浣腸 大手札三枚一組 略号四〇〇 深田 菊子	蛙腹を晒す開股責め 大手札三枚一組 略号五〇〇 福井 桃子	九カ月妊娠腹の緊縛美 大手札三枚一組 略号五〇〇 福井 桃子	荒縄悦虐羞恥責め カラ一三枚一組 略号一〇〇 前田真知子
イルリの嘴管挿入浣腸 大手札三枚一組 略号四〇〇 深田 菊子	太鼓腹強調片足吊り 大手札三枚一組 略号五〇〇 福井 桃子	豆絞りの猿ぐつわ哀情 大手札三枚一組 略号五〇〇 前田真知子	悶える強烈海老責め カラ一三枚一組 略号一〇〇 前田真知子
突き刺さる浣腸器の恐怖 大手札三枚一組 略号四〇〇 深田 菊子	妊孕緊縛美の極致 大手札三枚一組 略号五〇〇 福井 桃子	逆エビ地獄の美女 大手札三枚一組 略号五〇〇 前田真知子	柔肌をくびる厳しき縄目 カラ一三枚一組 略号一〇〇 前田真知子
自ら施す浣腸の悦楽 大手札三枚一組 略号四〇〇 深田 菊子	美しき妊孕腹緊縛 大手札三枚一組 略号五〇〇 福井 桃子	麻縄亀甲菱縄縛り 大手札三枚一組 略号五〇〇 前田真知子	緊縛の全裸女体をいびる カラ一三枚一組 略号一〇〇 前田真知子

両足首括り逆さ吊り

大手札五枚一組 略号ハさかV
梨花悠紀子

手足逆さ宙吊り

大手札五枚一組 略号ハさとV
梨花悠紀子

逆さ吊りの女体を析檻

大手札五枚一組 略号ハさせV
梨花悠紀子

メンスバンド着用替コム見せ

大手札五枚一組 略号ハへみV
東浦ひかる

股に喰い込む黒フンドシ

大手札三枚一組 略号ハとしV
東浦ひかる

股を開いた黒フンドシ姿

大手札三枚一組 略号ハとひV
東浦ひかる

開股逆さ吊り姿態

大手札三枚一組 略号ハちてV
左近麻里子

禪美・表と裏の二態

大手札二枚一組 略号ハちけV
左近麻里子

強烈責め被虐の果て

大手札五枚一組 略号ハりおV
梨花悠紀子

踊り子の美しき緊縛

大手札三枚一組 略号ハりこV
絹川 文代

股間縛りの法悦境

大手札三枚一組 略号ハぬこV
絹川 文代

相撲禪着用の艶姿

大手札12枚一組 略号ハぬわV
美木乃々子

六尺禪着用の艶姿

大手札七枚一組 略号ハぬおV
美木乃々子

パリスSSバンド着用

大手札三枚一組 略号ハおこV
東浦ひかる

サカエメンスバンド着用

大手札三枚一組 略号ハおえV
東浦ひかる

サカエ軽便型バンド着用

大手札三枚一組 略号ハおたV
東浦ひかる

パリスメンスバンド前開き

大手札三枚一組 略号ハおいV
東浦ひかる

携帯用白色メンスバンド着用

大手札三枚一組 略号ハおかV
東浦ひかる

パリスバンド着用縛り

大手札三枚一組 略号ハおはV
東浦ひかる

パピアメンスバンド着用

大手札三枚一組 略号ハおしV
東浦ひかる

相撲禪を締めた女

大手札五枚一組 略号ハそいV
東浦ひかる

メンスバンド着用開股ポーズ

大手札三枚一組 略号ハつんV
東浦ひかる

黒ゴム衣後手縛り

大手札三枚一組 略号ハなほV
木村 洋子

ゴム衣緊縛悶悦姿態

大手札五枚一組 略号ハなへV
木村 洋子

ゴム衣とゴムの猿ぐつわ

大手札三枚一組 略号ハなとV
木村 洋子

甘美なる椅子プレイ

大手札四枚一組 略号ハなあV
中河 恵子

開股拷問椅子の正面責め

大手札四枚一組 略号ハなたV
中河 恵子

オムツ着用の股間縛り

大手札四枚一組 略号ハむくV
東浦ひかる

オムツ着用フェチフォト

大手札七枚一組 略号ハむねV
大塚 啓子

オシメをつける二人プレイ

大手札六枚一組 略号ハむしV
山原・東浦

ゴムのオムツカバー強制着用

大手札六枚一組 略号ハむにV
山原・東浦

生ゴムの猿ぐつわ責め

大手札四枚一組 略号ハむこV
木村 洋子

オシメ着用と女学生

大手札七枚一組 略号ハうえV
大塚 啓子

六尺フンドシの女性像

大手札四枚一組 略号ハくろV
関谷富佐子

黒フンドシを着用した女

大手札四枚一組 略号ハくふV
大塚 啓子

黒フンドシの女(背面)

大手札三枚一組 略号ハくうV
遠藤百合子

黒フンドシの女(正面)

大手札三枚一組 略号ハくまV
遠藤百合子

黒フンドシを誇る姿

大手札三枚一組 略号ハくわV
遠藤百合子

黒フンドシ背面刺青模様

大手札三枚一組 略号ハくこV
山原 清子

黒フンドシ入墨姿

大手札三枚一組 略号ハくのV
山原 清子

黒ふんどし媚態の魅力

大手札五枚一組 略号ハくなV
山原 清子

白晒六尺フンドシの姿態

大手札五枚一組 略号ハけすV
刑部 典子

黒六尺フンドシを締めた女

大手札五枚一組 略号ハけせV
刑部 典子

フンドシ姿の羞らい

大手札三枚一組 略号ハふへV
栗本 ミチ

フンドシ姿の女の魅力

大手札三枚一組 略号ハふのV
栗本 ミチ

六尺禪の羞じらい

大手札五枚一組 略号ハふけV
横尾 峯子

双臀に喰い込む禪

大手札五枚一組 略号ハふくV
横尾 峯子

禪美に羞じらう女

大手札六枚一組 略号ハこんV
玉田美佐子

血紅女体切腹絶命ポーズ

大手札四枚一組 六〇〇円
梨花悠紀子 略号△せん▽

女体切腹シリーズ

大手札12枚一組 一八〇〇円
大塚 啓子 略号△せい12▽

血紅切腹祭壇に果てる女体

大手札三枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号△せぬ▽

首桶に落ちる女的首

大手札三枚一組 五〇〇円
水野加代子 略号△せへ▽

愛妻の切腹を介添えする

大手札三枚一組 五〇〇円
水野加代子 略号△せほ▽

切腹する女体を介錯する

大手札三枚一組 五〇〇円
水野加代子 略号△せは▽

血紅使用介添え切腹

大手札五枚一組 八〇〇円
大塚・東浦 略号△きつ▽

介添え切腹の女

大手札四枚一組 六〇〇円
甘木 春子 略号△あか▽

自刃した血まみれ屍体

大手札10枚一組 一五〇〇円
山原 清子 略号△えし▽

自らの腹を切り裂く女

大手札三枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号△やい▽

自ら柔肌を切り裂く場面

大手札三枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号△やえ▽

自らの下腹に突き刺す刃

大手札三枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号△やお▽

血紅女体切腹苦悶悦楽表情

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号△くえ▽

哀婉美女の血紅切腹

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号△るな▽

絞首刑に果てる女体

大手札二枚一組 四〇〇円
新宮夫人 略号△るく▽

引回しと晒の処刑

大手札二枚一組 四〇〇円
新宮夫人 略号△るに▽

血紅使用血まみれ切腹

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号△わい▽

殿中の自決女体切腹

大手札三枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号△わこ▽

切腹美態から絶命ポーズへ

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号△わは▽

女体自刃の美態

大手札三枚一組 五〇〇円
細川アヤ子 略号△ねに▽

女体切腹媚態

大手札二枚一組 四〇〇円
細川アヤ子 略号△ねは▽

肉体美少女全裸切腹

大手札五枚一組 七〇〇円
長野 良子 略号△なせ▽

禪裸女血斗凄惨場面

大手札五枚一組 七〇〇円
絹川・大塚 略号△らは▽

和洋争斗場面展開

大手札六枚一組 八〇〇円
田中・愛川 略号△らり▽

血紅使用斬られる美女

大手札七枚一組 一〇〇〇円
絹川 文代 略号△らふ▽

鎌腹を切られる女

大手札二枚一組 四〇〇円
愛川・田中 略号△らく▽

咽喉笛を刺される女

大手札二枚一組 四〇〇円
愛川・田中 略号△らみ▽

斬首の瞬間

大手札三枚一組 五〇〇円
新宮夫人 略号△のき▽

晒台の女の生首

大手札三枚一組 五〇〇円
新宮夫人 略号△のく▽

全裸正面切腹姿態

大手札三枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号△のみ▽

切腹に悶える悦虐裸身

大手札三枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号△のそ▽

切腹した裸女の屍体

大手札12枚一組 二〇〇〇円
大塚 啓子 略号△のい▽

美しき裸女の屍体

大手札12枚一組 二〇〇〇円
大塚 啓子 略号△のり▽

屠腹される女体

大手札12枚一組 二〇〇〇円
大塚 啓子 略号△のる▽

立腹切腹に悶える女体

大手札10枚一組 一八〇〇円
大塚 啓子 略号△のさ▽

切腹に苦悶する裸女

大手札10枚一組 一八〇〇円
大塚 啓子 略号△のむ▽

絞首された女体

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚 啓子 略号△のひ▽

斬首処刑場面

大手札二枚一組 四〇〇円
新宮夫人 略号△くし▽

絞首刑にされる女

大手札三枚一組 五〇〇円
新宮夫人 略号△こけ▽

血まみれ血斗場面

大手札12枚一組 二〇〇〇円
山原清子外 略号△えみ▽

ゴムフエチの美体

大手札四枚一組 六〇〇円
梨花悠紀子 略号△こま▽

ゴム包みの束縛女体

大手札四枚一組 六〇〇円
東浦ひかる 略号△こは▽

メンスバンド只今着用

大手札三枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号△もか▽

白禪刺青女体脇差切腹

大手札10枚一組 一八〇〇円
山原 清子 略号△ひに▽

白禪刺青女体短刀切腹

大手札10枚一組 一八〇〇円
山原 清子 略号△ひぬ▽

ゴム衣着用緊縛

大手札三枚一組 五〇〇円
水本 茂美 略号△みす▽

メンスバンドを脱ぐ女

大手札三枚一組 五〇〇円
遠藤百合子 略号△ゆお▽

月経帯を着けた緊縛

大手札三枚一組 五〇〇円
遠藤百合子 略号△ゆす▽

竹棒と猿轡と縄と

大手札四枚一組 略号△せて▽ 六〇〇円

麗身の裏と表縛りの綾

大手札四枚一組 略号△せと▽ 六〇〇円

裸身に悶えるマゾの表情

大手札四枚一組 略号△せり▽ 六〇〇円

豆絞りの猿轡と縛りの表情

大手札四枚一組 略号△せれ▽ 六〇〇円

私を虐めて下さい。お願い

大手札四枚一組 略号△せろ▽ 六〇〇円

悦虐夫人のマゾの表情

大手札三枚一組 略号△せや▽ 五〇〇円

全裸の股間縛り

大手札四枚一組 略号△せら▽ 六〇〇円

ムチの一打に反る裸身

大手札三枚一組 略号△もれ▽ 五〇〇円

富佐子の裸身を陳列

大手札三枚一組 略号△もる▽ 五〇〇円

尻を立てたムチ打ちポーズ

大手札三枚一組 略号△もて▽ 五〇〇円

片足吊り上げて鞭に泣く

大手札三枚一組 略号△もな▽ 五〇〇円

私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 略号△もね▽ 五〇〇円

脂ぎった豊満女体縛り

大手札三枚一組 略号△もむ▽ 五〇〇円

鞭が柔肌に炸烈する

大手札三枚一組 略号△もう▽ 五〇〇円

滑車吊りで揮う甘い鞭

大手札三枚一組 略号△もき▽ 五〇〇円

両手万才に縛りムチ打ち

大手札三枚一組 略号△もこ▽ 五〇〇円

狂う鞭に哀切の表情

大手札三枚一組 略号△もみ▽ 五〇〇円

エビ縛りの鞭打ち

大手札四枚一組 略号△しと▽ 六〇〇円

安井喜久子

大手札四枚一組 略号△めり▽ 六〇〇円

鞭と縛りに夢心地の表情

大手札四枚一組 略号△めも▽ 六〇〇円

烈しい鞭は美肌からむ

大手札四枚一組 略号△める▽ 六〇〇円

狂う鞭に狂うムチの女王

大手札四枚一組 略号△めさ▽ 六〇〇円

両手吊りの女体に鞭の雨

大手札四枚一組 略号△めせ▽ 六〇〇円

鉄砲縛りの鞭打ち地獄

大手札四枚一組 略号△めて▽ 六〇〇円

逆エビ開股の女体に鞭打ち

大手札四枚一組 略号△めひ▽ 六〇〇円

ムチ打ちに悶絶した女体

大手札四枚一組 略号△めへ▽ 六〇〇円

強打にのけぞる悦虐表情

大手札四枚一組 略号△めふ▽ 六〇〇円

羞恥責めによる法悦境地

大手札四枚一組 略号△めら▽ 六〇〇円

足挙げ開股羞恥責め

大手札三枚一組 略号△あけ▽ 五〇〇円

梨花悠紀子

片足挙げ姿態にムチ打ち

大手札三枚一組 略号△こら▽ 五〇〇円

両手吊りに悶えるM女

大手札四枚一組 略号△くい▽ 六〇〇円

開股責めに泣く女

大手札四枚一組 略号△くあ▽ 六〇〇円

両手万才吊りで晒す女体

大手札四枚一組 略号△くむ▽ 六〇〇円

開股羞恥責めにむせぶ

大手札四枚一組 略号△くめ▽ 六〇〇円

片足挙げ吊り責め

大手札四枚一組 略号△くも▽ 六〇〇円

両膝頭開股宙吊り

ムチの強打に泣く裸身

大手札四枚一組 略号△むち▽ 六〇〇円

足吊りの被虐肢体

大手札三枚一組 略号△らえ▽ 五〇〇円

鞭打ちにうねるM女

大手札三枚一組 略号△らあ▽ 五〇〇円

鞭に狂う女の悦虐表情

大手札三枚一組 略号△らて▽ 五〇〇円

美しき女体マゾの境地

大手札三枚一組 略号△らせ▽ 五〇〇円

全裸開股膝頭縛り

大手札三枚一組 略号△ねさ▽ 五〇〇円

菱縄縛り竹棒責め

大手札三枚一組 略号△ねし▽ 五〇〇円

開股竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 略号△ねろ▽ 五〇〇円

手足縛り逆エビ責め

大手札三枚一組 略号△ねき▽ 五〇〇円

竹棒の開股強烈縛り

大手札三枚一組 略号△ねく▽ 五〇〇円

首縄後手高手小手縛り

大手札三枚一組 略号△ねこ▽ 五〇〇円

竹棒開股ムチ打ち縛り

大手札三枚一組 略号△つい▽ 五〇〇円

〔極最新版〕 新人M女性羞恥責め写真集

V組 百態 大手札印画紙 (9×13) 極鮮明焼付写真

各組 一組一枚 (送料共)

五組五枚	八〇〇円
十組十枚	一五〇〇円
二十組二十枚	二八〇〇円
五十組五十枚	五〇〇〇円
百組百枚	八〇〇〇円

(郵便番号545-91) 天星社
大阪市阿倍野局私書箱14号

複写による不鮮明な緊縛写真が
出回っているようですが、これは
全部特殊マニアの蒐集用として一
粒選りのネガから直接印画紙に焼
付した極めて鮮明な逸品揃いばか
りです。きつとファンのアルバム
を最高に充実させると信じます。
大阪市阿倍野局私書箱14号天星社
へ前金にてお申込み願います。

☆

9	蠟燭責後手縛り(富田由美子)
8	ネどうでもして(高村 浩子)
7	全裸縛玄閼晒し(三浦 純子)
6	荒縄柔肌いじめ(前田真知子)
5	超強烈エビ責め(三浦 純子)
4	逆エビ凄絶苦悶(前田真知子)
3	完全二つ折締め(三浦 純子)
2	トイレ排泄強要(三浦 純子)
1	足挙げ羞恥責め(深田 菊子)

36	海老開脚強制責(深田 菊子)
35	淫虐蠟燭の挿入(福井 桃子)
34	足挙げ責の羞恥(江口 淑子)
33	雁字搦目の女体(江口 淑子)
32	大の字片足挙げ(高村 浩子)
31	開股強制棒責め(前田真知子)
30	マダム責の哀愁(江口 淑子)
29	恍惚バイブ責め(江口 淑子)
28	豊満な女体開陳(福井 桃子)
27	店での全裸縛り(福井 桃子)
26	両足吊りの苦悶(江口 浩子)
25	正面股間縛晒し(高村 浩子)
24	強烈麻縄の緊縛(前田真知子)
23	本格的な麻縄責(前田真知子)
22	柱縛り開股強要(福井 桃子)
21	鮮烈股間縛の縄(深田 菊子)
20	菱縄股間縛前面(深田 菊子)
19	ゴム人形の恐怖(江口 淑子)
18	胡坐縛りの羞恥(江口 淑子)
17	後手吊上げ猿轡(高村 浩子)
16	強烈尻腸ポーズ(高村 浩子)
15	両手挙前面晒し(福井 桃子)
14	麗しのマドンナ(荒尾 慶子)
13	正面の妊婦縛り(富田由美子)
12	菱縄縛正面開放(江口 淑子)
11	妊婦縛りの圧巻(富田由美子)
10	羞恥の源を抉る(江口 淑子)

68	羞恥責を待つ女(深田 菊子)
67	尻立蠟燭悦虐(福井 桃子)
66	引回される全裸(江口 淑子)
65	M女を責め尽す(前田真知子)
64	片足挙げ開股縛(江口 淑子)
63	菱縄悲し泣く(江口 淑子)
62	責めに呻くM女(高村 浩子)
61	喰込む股間縄責(江口 淑子)
60	スナックで縛る(福井 桃子)
59	黒髪前に垂れる(福井 桃子)
58	尻腸責めのあと(福井 桃子)
57	股間に喰込む麻(深田 菊子)
56	浴室での尻腸責(江口 淑子)
55	人の字型羞恥縛(江口 淑子)
54	剃毛責めの結果(荒尾 慶子)
53	両手両足開責め(三浦 純子)
52	美肌に映える縄(荒尾 慶子)
51	料理される女体(高村 浩子)
50	猿轡に呻く麻縄(高村 浩子)
49	エビ責めの序曲(江口 淑子)
48	美しき緊縛女体(荒尾 慶子)
47	苛酷の宴果てて(高村 浩子)
46	菱縄股間縛猿轡(前田真知子)
45	太鼓腹全裸正面(富田由美子)
44	猿轡に悶える女(高村 浩子)
43	高々と後手緊縛(福井 桃子)
42	女体美を晒して(深田 菊子)
41	後手錠吊上げ責(江口 淑子)
40	マダム全裸開陳(江口 淑子)
39	美女の全裸縛り(荒尾 慶子)
38	麻縄逆エビ惨酷(前田真知子)
37	全裸立像後手縛(富田由美子)

100	椅子開股羞恥責(前田真知子)
99	荒縄後手二つ折(前田真知子)
98	正座する股間縛(荒尾 慶子)
97	股間縛の引回し(江口 淑子)
96	強烈麻菱縄掛け(前田真知子)
95	引回される妊婦(富田由美子)
94	開脚を強要せよ(富田由美子)
93	妊婦大の字縛り(富田由美子)
92	無惨白肌の縄痕(前田真知子)
91	がっちり後手縛(深田 菊子)
90	マダム開股の図(福井 桃子)
89	淫虐に晒す女体(高村 浩子)
88	柔肌に喰込む縄(荒尾 慶子)
87	羞恥責臀部露出(三浦 純子)
86	後手吊上げ責め(三浦 純子)
85	猿轡咽喉輪縛り(三浦 純子)
84	海老責の耐久度(荒尾 慶子)
83	足挙げ強制開陳(高村 浩子)
82	大の字縛り正面(高村 浩子)
81	強烈海老責地獄(江口 淑子)
80	後手胴締股間縛(深田 菊子)
79	豆絞りの猿轡縛(深田 菊子)
78	裏門を開放する(深田 菊子)
77	全裸一直線開股(福井 桃子)
76	白肌に喰込む縄(荒尾 慶子)
75	両手両足吊り責(江口 淑子)
74	嚴重菱縄緊縛責(江口 淑子)
73	強制足挙臀部晒(高村 浩子)
72	縄の山と尻腸器(福井 桃子)
71	被縛者のマダム(江口 淑子)
70	剃毛の女体展開(荒尾 慶子)
69	凌辱に捧げる体(高村 浩子)

「秘蔵版写真一掃分譲品」

昭和四十年頃より四十二年頃にかけて天星社に於て分譲して、おりに止りなつておりました。その後、まじつたSM資料写真は、その分譲中になつておりました。望まされ、近くなつて再開を強く望まれ、増をいたします。御注文の、早は五日間の予定で、作成の上、早速御送付申上げます。

△Mフォト▽

馬乗り女王様行状記

大手札四枚一組 略号△〇〇〇円
花田沙登子

両足の首絞め責め 略号△〇〇〇円
大手札三枚一組

花田沙登子 略号△〇〇〇円
花田沙登子

肩車の臀部に喘ぐ 略号△〇〇〇円
大手札三枚一組

花田沙登子 略号△〇〇〇円
花田沙登子

女王様の臀臭をかかす 略号△〇〇〇円
大手札二枚一組

花田沙登子 略号△〇〇〇円
花田沙登子

足舐めの強制 略号△〇〇〇円
大手札三枚一組

花田沙登子 略号△〇〇〇円
花田沙登子

女王様の牡犬調教 略号△〇〇〇円
大手札八枚一組

花田沙登子 略号△〇〇〇円
花田沙登子

△入墨女賊拷問刑罰集▽

女賊仰向け木馬責め 略号△〇〇〇円
大手札三枚一組

山原 清子 略号△〇〇〇円
山原 清子

全裸の入墨女賊折檻 略号△〇〇〇円
大手札三枚一組

山原 清子 略号△〇〇〇円
山原 清子

入墨女答打ち白洲糾問

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
山原 清子

ハリツケ女賊拷問

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
山原 清子

凄絶エビ責め拷問

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
山原 清子

全裸の四つ這い木馬責

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
山原 清子

逆さ吊りのお仕置

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
山原 清子

大の字磔女賊処刑

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
山原 清子

△日本女性拷問刑罰集▽

三角木馬責め 略号△〇〇〇円
大手札三枚一組

美木乃々子 略号△〇〇〇円
美木乃々子

石抱き算盤責め

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
美木乃々子

凄惨女囚海老責め

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
美木乃々子

女囚竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
美木乃々子

白洲答打ち折檻

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
美木乃々子

非情の囚女開股責め

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
美木乃々子

美木乃々子 略号△もぬ▽

土壇で胴斬りの仕置

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
美木乃々子

白洲調べに悶える囚女

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
美木乃々子

△M写真M場面決定版▽

裸女二人の尻の下にうごめく 略号△〇〇〇円
大手札十二枚一組

大塚・山原 略号△〇〇〇円
大塚・山原

二女にいじめられるM男 略号△〇〇〇円
大手札十二枚一組

山原・大塚 略号△〇〇〇円
山原・大塚

美女二人から縛られる男 略号△〇〇〇円
大手札十二枚一組

大塚・山原 略号△〇〇〇円
大塚・山原

男馬を乗り潰す裸女二人 略号△〇〇〇円
大手札十二枚一組

山原・大塚 略号△〇〇〇円
山原・大塚

痛烈、ムチ打ちのご馳走 略号△〇〇〇円
大手札十二枚一組

大塚・山原 略号△〇〇〇円
大塚・山原

首絞めでM男に止どめを刺す 略号△〇〇〇円
大手札十二枚一組

山原・大塚 略号△〇〇〇円
山原・大塚

汚臭と足舐めの強要 略号△〇〇〇円
大手札十二枚一組

大塚・山原 略号△〇〇〇円
大塚・山原

二女の臀臭にむせび泣く男 略号△〇〇〇円
大手札十二枚一組

山原・大塚 略号△〇〇〇円
山原・大塚

パンプスの下に喘ぐM男 略号△〇〇〇円
大手札十枚一組

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

豊満な太股で首を股責め 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大手札十枚一組 略号△〇〇〇円

大塚 啓子 略号△〇〇〇円

男奴隷緊縛虐待への過程

大手札十枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

顔面騎乗の女王様

大手札五枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

△女体切腹フォト▽

腸露出無念腹切腹 略号△〇〇〇円
大手札十枚一組

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

マニヤの切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅切腹決意版

大手札十枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅切腹凄惨姿態

大手札十枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

大塚 啓子 略号△〇〇〇円
大塚 啓子

血紅美女の切腹

大手札三枚

明瞭な臨月腹の妊娠線 大手札四枚一組 略号八りき 増田みゆき 六〇〇円	膨満の妊娠腹の緊縛 大手札四枚一組 略号八おみ 中河 恵子 六〇〇円	産み月の膨大な腹 大手札三枚一組 略号八よま 安原さゆり 五〇〇円	膨満腹も露わな両手挙げ縛り 大手札三枚一組 略号八のろ 木戸 悦子 五〇〇円
双胎の臨月腹を鑑賞する 大手札四枚一組 略号八りけ 増田みゆき 六〇〇円	妊婦開股縛り哀歎 大手札四枚一組 略号八わう 中河 恵子 六〇〇円	麻縄でくびった妊婦腹 大手札四枚一組 略号八よは 中河 恵子 六〇〇円	竹棒責めに喘ぐ九力月妊婦 大手札三枚一組 略号八のは 木戸 悦子 五〇〇円
妊婦の乳房を縛り弄そぶ 大手札四枚一組 略号八りさ 増田みゆき 六〇〇円	八力月の妊婦開股責め 大手札四枚一組 略号八わの 中河 恵子 六〇〇円	ころがされた緊縛の妊婦 大手札四枚一組 略号八よほ 中河 恵子 六〇〇円	十文字縛りの妊婦腹 大手札三枚一組 略号八のに 木戸 悦子 五〇〇円
妊婦後手縛り引き回し 大手札四枚一組 略号八りし 増田みゆき 六〇〇円	妊婦腹誇張の開股縛り 大手札四枚一組 略号八わえ 中河 恵子 六〇〇円	臨月妊婦の革紐縛り 大手札四枚一組 略号八よに 中河 恵子 六〇〇円	柱縛りに苦しむ九力月の妊婦 大手札三枚一組 略号八のほ 木戸 悦子 五〇〇円
亀甲縛りの臨月妊孕美 大手札四枚一組 略号八りた 増田みゆき 六〇〇円	妊孕美人の媚態立像 大手札四枚一組 略号八わお 中河 恵子 六〇〇円	見事に美しい臨月腹妊婦 大手札四枚一組 略号八よち 中河 恵子 六〇〇円	開股責めと椅子縛りの妊婦 大手札三枚一組 略号八のへ 木戸 悦子 五〇〇円
乳房緊縛の双胎臨月腹 大手札四枚一組 略号八りち 増田みゆき 六〇〇円	妊孕美人の媚態坐像 大手札四枚一組 略号八わき 中河 恵子 六〇〇円	臨月の妊婦麻縄縛り 大手札四枚一組 略号八よら 中河 恵子 六〇〇円	脈打つ全裸の臨月腹 大手札三枚一組 略号八こふ 中河 恵子 五〇〇円
臨月双胎蛙腹の股間縛り 大手札四枚一組 略号八りぬ 増田みゆき 六〇〇円	両手吊り片足挙げの妊婦 大手札四枚一組 略号八わく 中河 恵子 六〇〇円	臨月の妊婦全裸鑑賞 大手札四枚一組 略号八よへ 中河 恵子 六〇〇円	猿轡にうめく臨月妊婦腹 大手札三枚一組 略号八この 中河 恵子 五〇〇円
浣腸される妊産婦 大手札三枚一組 略号八りひ 増田みゆき 五〇〇円	縛られた妊婦の艶姿 大手札四枚一組 略号八わす 中河 恵子 六〇〇円	羞らう妊婦の裸身前向立像 大手札三枚一組 略号八のま 木戸 悦子 五〇〇円	革紐による臨月腹股間縛り 大手札三枚一組 略号八こや 中河 恵子 五〇〇円
臨月妊婦の全身像 大手札二枚一組 略号八りせ 安原さゆり 四〇〇円	両手一本吊りの妊婦 大手札四枚一組 略号八わち 中河 恵子 六〇〇円	九力月の妊婦腹を晒す 大手札三枚一組 略号八のめ 木戸 悦子 五〇〇円	逆さ吊りの臨月妊婦 大手札三枚一組 略号八さめ 金原奈加子 五〇〇円
臨月妊婦腹の側面 大手札三枚一組 略号八りそ 安原さゆり 五〇〇円	臨月の妊婦三態 大手札三枚一組 略号八わち 中河 恵子 六〇〇円	九力月の妊娠腹を縛る 大手札三枚一組 略号八のこ 木戸 悦子 五〇〇円	両手吊りの臨月妊婦 大手札三枚一組 略号八さる 金原奈加子 五〇〇円
妊婦臨月腹のアップ 大手札二枚一組 略号八りと 安原さゆり 四〇〇円	動物的な臨月妊婦の腹 大手札三枚一組 略号八よみ 安原さゆり 五〇〇円	便々たる太鼓腹に縄掛け 大手札三枚一組 略号八のし 木戸 悦子 五〇〇円	強烈縛り妊婦責め 大手札三枚一組 略号八さる 金原奈加子 五〇〇円
恵子の妊孕美緊縛 大手札四枚一組 略号八おに 中河 恵子 六〇〇円			妊婦全裸縛りの全身 大手札三枚一組 略号八さに 金原奈加子 五〇〇円

奇ク活躍若手人気五人娘緊縛写真集

K組 百態 大手札印画紙 (9×13 極鮮明焼付写真)

各組 一組一枚 (送料共)

五組五枚	八〇〇〇円
十組十枚	一五〇〇〇円
二十組二十枚	二八〇〇〇円
五十組五十枚	五〇〇〇〇円
百組百枚	八〇〇〇〇円

(郵便番号545-91) 天星社
大阪市阿倍野局 私書箱14号

最近の奇ク誌上に於て口絵或は本文の写真や告白手記などで大活躍している若くて美しいM女たちの印画紙に焼付けたフォトを女体緊縛コレクトマニアの方々の為に譲りします。この素晴らしく迫力に満ちた奇ク独特の華麗な蒐集品を、どうかファンの皆様のお手元で愛して下さいよう願います。

☆

9	8	7	6	5	4	3	2	1	36	35	34	33	32	31	30	29	28	68	67	66	65	64	63	62	61	60	100	99	98	97	96	95	94	93	92
排泄を耐える女(笠井奈保子)	臀部と後手縛り(前田真知子)	縄で開股を強要(深田 菊子)	後手足首後吊り(高村 浩子)	柔肌にむぎき縄(深田 菊子)	M女なればこそ(高村 浩子)	ポリウムを縛る(笠井奈保子)	引回し股間縛り(深田 菊子)	正面から狙う眼(鈴木千鶴子)	形よきお脐悦情(深田 菊子)	転がされた女体(笠井奈保子)	もっと股を開け(笠井奈保子)	宙に浮いた苦痛(鈴木千鶴子)	全身に喰込む縄(高村 浩子)	片足挙げ柱縛り(深田 菊子)	総てをさらして(前田真知子)	強烈な股間縛り(鈴木千鶴子)	菱縄縛りに喘ぐ(笠井奈保子)	反り返った女体(鈴木千鶴子)	嚴重な後手縛り(笠井奈保子)	逆片足エビ責め(前田真知子)	猿ぐつわの表情(笠井奈保子)	二ツ折りの仕置(鈴木千鶴子)	強烈麻縄の魔力(笠井奈保子)	正面片足引上げ(前田真知子)	高々棒吊り両足(深田 菊子)	羞恥股裂き責め(前田真知子)	豊かさを縛る縄(笠井奈保子)	美しき縛り表情(深田 菊子)	大の字開股責め(深田 菊子)	顔を向けないか(前田真知子)	強制された開股(笠井奈保子)	階段で開く両脚(深田 菊子)	諦観の晒しもの(笠井奈保子)	乳房責と股間縛(高村 浩子)	痛いから許して(前田真知子)

〔女相撲と禪関連資料〕

御要望により再分譲開始します

裸女レスリング熱戦譜

大手札40枚一組 五〇〇〇円
山原・大塚 略号△れす▽

好取組女相撲三番勝負

大手札10枚一組 一五〇〇円
大塚・東浦・木村 略号△うむ▽

迫力実戦好取組女相撲

大手札10枚一組 一五〇〇円
大塚・東浦・木村 略号△うめ▽

取組む女相撲三人娘

大手札七枚一組 一〇〇〇円
大塚・東浦・木村 略号△うゆ▽

マワシを締める三人娘

大手札五枚一組 八〇〇円
東浦・大塚・木村 略号△うや▽

二女真迫格闘場面

大手札三枚一組 五〇〇円
大塚・玉田 略号△のか▽

女子全裸斗争場面

大手札三枚一組 五〇〇円
玉田・大塚 略号△のわ▽

裸女相搏つ取り組み

大手札八枚一組 一二〇〇円
大塚・啓子 略号△えく▽

禪裸女の寝業乱斗

大手札五枚一組 一〇〇〇円
木村・大塚 略号△めき▽

禪裸女の真剣な争斗

大手札五枚一組 一〇〇〇円
大塚・木村 略号△めん▽

女相撲連続写真(四つ相撲)

大手札10枚一組 二〇〇〇円
山原・大塚 略号△めれ▽

女相撲連続写真(投げ業)

大手札10枚一組 二〇〇〇円
山原・大塚 略号△めよ▽

女相撲連続写真(投げ合い)

大手札12枚一組 二四〇〇円
山原・大塚 略号△めわ▽

女斗美立業大立回り

大手札10枚一組 二〇〇〇円
大塚・山原 略号△めた▽

女斗美寝わざ妖艶攻合い

大手札10枚一組 二〇〇〇円
大塚・山原 略号△めな▽

女斗美妖蛇の固め業

大手札12枚一組 二四〇〇円
大塚・山原 略号△めそ▽

女と女の争い髪のかみ合い

大手札10枚一組 二〇〇〇円
山原・大塚 略号△めか▽

女同士の争い髪をかみ

大手札10枚一組 二〇〇〇円
山原・大塚 略号△めね▽

女子レスリング首絞め業

大手札12枚一組 二四〇〇円
山原・大塚 略号△めつ▽

女子レスリング押え込み

大手札12枚一組 二四〇〇円
大塚・山原 略号△めお▽

白晒六尺禪姿(背面)

大手札四枚一組 六〇〇円
遠藤百合子 略号△しろ▽

白晒六尺禪姿(正面)

大手札四枚一組 六〇〇円
遠藤百合子 略号△しは▽

六尺禪を着用し終るまで

大手札20枚一組 三〇〇〇円
山原・清子 略号△ひは▽

砂浜での真剣裸女格闘

大手札12枚一組 二四〇〇円
東浦・大塚 略号△すえ▽

草原で止とめをさす格闘

大手札12枚一組 二四〇〇円
東浦・大塚 略号△すう▽

松林の中の裸女死闘

大手札12枚一組 二四〇〇円
大塚・東浦 略号△すき▽

琵琶湖畔での女相撲

大手札20枚一組 四〇〇〇円
大塚・東浦 略号△すよ▽

女相撲真迫連続スナップ

大手札10枚一組 二〇〇〇円
大塚・東浦 略号△すな▽

室内女相撲熱戦模様

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・東浦 略号△すも▽

相撲禪着用連続フォト

大手札11枚一組 二〇〇〇円
大塚・啓子 略号△すま▽

相撲禪を締ゆ込む

大手札四枚一組 六〇〇円
遠藤百合子 略号△すい▽

女相撲激しい投げ業

大手札八枚一組 一五〇〇円
大塚・木村 略号△すね▽

女相撲組打ちの美体

大手札八枚一組 一五〇〇円
木村・大塚 略号△すか▽

女斗立術の応酬

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・木村 略号△すち▽

寝業の女レスリング

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・木村 略号△すほ▽

女斗の連続場面展開

大手札九枚一組 一八〇〇円
木村・大塚 略号△すく▽

女斗立術の攻撃場面展開

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・木村 略号△すた▽

室内女相撲好取組み

大手札六枚一組 一二〇〇円
東浦・大塚 略号△すみ▽

湖畔女相撲連続スナップ

大手札10枚一組 二〇〇〇円
大塚・東浦 略号△すふ▽

女相撲四十八手の内六手

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・木村 略号△すは▽

女相撲四十八手の内六手

大手札六枚一組 一二〇〇円
木村・大塚 略号△すむ▽

湖畔女相撲迫力場面展開

大手札20枚一組 四〇〇〇円
大塚・東浦 略号△すや▽

湖畔女相撲熱戦場面点景

大手札20枚一組 四〇〇〇円
東浦・大塚 略号△すゆ▽

実戦女相撲業の応酬

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・東浦 略号△すに▽

実戦さながら女相撲図絵

大手札六枚一組 一二〇〇円
東浦・大塚 略号△すぬ▽

雪崎京人指導女相撲実戦

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・東浦 略号△すの▽

迫力抜群実戦女相撲

大手札六枚一組 一二〇〇円
東浦・大塚 略号△すつ▽



新興住宅街に住む二十三才の新妻ですが、実は一年ほど前から、ふとした動機で奇クを知り、ずっと主人に隠れて読み続けて参りました。心の中では熱烈なSMファンになってしまっているのですけれども、官庁勤めの主人には何も訴えることも求めることもできないで、純粋なSM友達を求めたいと願いながら、切なく自慰的なSM独りプレイを、ひそかに行なっております。私の幻想の中のSM友達は愛犬のジョンで、このジョンを寝室に入れると、馴れたも

ので私の意向のとおり責めかかってまいります。両足を開き目を閉じますと、ジョンの息づかいを柔肌に感じ、男達に責めさいなまれる甘美な幻想に耽ることができま

(吹田市・安部美代子)

和歌山の橋本文代様にお呼びかけいたします。小生は二十六才の多少？ サジスチックな男性で、三年ぐらい前から本誌を読みはじめました。今までSMを理解してくる女性を……と思いつながら、今日に至っています。お互いに満足できるプレイをしたいと思っております。特に小生は写真に興味があり、縛られた女性の、羞恥に満ちたフォートを、ぜひとも、とってみたいのです。文代よ、私の前に一糸まとわぬ姿で、私の命ずるままになれ。私の奴隷として、私に奉仕せよ。良い返事を待つ。

(徳島・砂土三世)

○

青山かおり様。七月号では貴女のお便りを全く信じ難い思いで拝見しました。過去に、いくたびか女王様方の呼びかけがありました。が、これほど私の胸にひびくアップローチがあったでしょうか。今もこの便りを書くにあたり、読み返したところですが、未だ信じられないでいるのです。ひょっとしてだれか男性マゾヒストのいたずらではないかとさえ疑えるほど、マゾヒストの心理を掴んでいる文章なのです。しかし考えてみれば、いたずらであれ、まことであれ、今お便りを書くこととしている私の心境には、それは関係のないことらしく思えます。たとえ、これが言葉の遊びだとしても、トルコ風呂などでの所詮、空虚なものでしかないプレイより妄想をたくましくできる点だけでも私には嬉しくマゾヒズムは半分、空想の世界だと思っている私には、女王様に手紙を書くという現実には充分に興奮させるだけのものがあるのです。胸にふき上げるイマジネーションがらみの欲望は、もしも貴女の呼びかけが、いたずらだったらいいう憂慮を遙に凌ぎ、ペンをとる気持を遂に抑え切ることができま

のであるとしたら、ああ私は貴女に先ず何をなすべきでしょう。私の心は、うちふるえ、この興奮は、もはや、これ以上、ペンを持っていることさえ不可能にしています。どうか一度だけ、お目にかからせていただくわけにはま

貴女へ万感の想いをこめ、今日も明日も、私は眠れぬ夜を過ごすこととしましょう。(東京・青井只雄)

○

十数年来の奇クファンで四十二才のSMマニアです。日蔭でひっそりとSMを楽しんできました私にとつては、今日この頃のSM誌の氾濫は、めまぐるしいほどで、派手な極彩色のグラビヤ写真や口絵には、とまどいすら感じていますが、ある意味においては、あまりに控え目な奇クの、いつにかわらぬ編集ぶりに喜びと落胆との入りまじった複雑な気持ちです。最近になって奇クも世間の波に抗しきれず、グラビヤを復活させました。が、まだまだポーズでも、小説中に現われる単語も、つましさに徹底している状態のように思えます。風俗文獻誌としての奇クならばこそその表現でしょう。噛みしめれば深い味わいを残す奇クの

本質を残したまま、より派手な責めの表現を願う次第です。グラビヤの復活向上、口絵採用、小説における女性の部分の表現を奇クに願うのは無理なことでしょうか。せちがらい現世にあって、せめて妄想のうちにでも、美しい女性の羞恥責めを夢見てみたいと願うのは私一人でしょうか。

(神戸市・大西弘明)

前々から女王様より責められたいと思ってたM一〇〇%の男です。女王様の思いのままになるドレイです。人間トイレにして飼って下さい。髪の毛長い福井桃子女王様、私の手と足を縛って動けないようにしてから私の尻をムチでぶって下さい。沖縄美人の座間明子様、見事な体格の女性ですね。私はこのような立派な体格の女性にムチ打たれ、虐められたいと思います。

〓御送金についてお願い〓

現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されています。現金での御送金の場合には必ず「現金書留」でお願い致します。他に、振替、定額小為替、普通小為替等の方法もありますのでご利用下さい。便宜上「切手代用」にても結構ですが、その場合は必ず一割増にてお願い致します。

ます。東京の青山かおり女王様。私は奴隷志望の牡犬です。どうぞマゾ男として飼って下さい。ここに尻尾を振って女王様の御前に跪きます。女王様の思いのままにして下さい。一生、トイレ、犬、ドレイになります。

(福岡県・飯塚正一)

小生は片田舎に住む平凡な人間です。小生は生来SMに凝り、ここ数カ月奇クを熱読しています。奇クの魅力は読者自身の出版物であるように思われる新鮮さと親近感が第一頁から終わりまで満ちていることです。自分と同じ身近かな友人が、雑誌のなかに沢山おられることは如何にも心強く、奇クという雑誌が他人の様には思えないのです。田中首相が庶民的だと言われていますが、奇クは本当に読者と一緒に歩んでいる雑誌だということが痛感されます。SMプレイは種々雑多ですが、小生は緊縛に特に興味を持っております。記事や文章も好きですが、写真によって表情とか縛り方などを見るのが大好きです。その点、奇クは文中に沢山の写真がのっていて、とても楽しく読めます。と申しますのは小生、SMに関してまだ門

をくぐったばかりの青二才だからです。(群馬県・境 百々三)

皆さん今日は。いつも皆さんの投稿を嬉しく拝見していますが、私もどうぞ仲間に入れて下さい。最近、映画、TVや雑誌、出版物等に取りあげられて、「SM」も流行語のように使われていますが、本当にSMについて理解し、関心のある方は意外に少ないのではないのでしょうか。しかし、この奇譚クラブに投稿されている方は本当にSMに関心をお持ちだからだと思います。互いにSMを理解し真に求めあう者同志の間にこそSMの欲求は存在し得ると言えましょう。私は、そのような方との交際が願いです。私については、SMの快楽の深さは「事実上小説より奇なり」と知り、体験している者だと申しあげればお分かり頂けると思います。美しい女性よ。青春の思い出に、貴女の陶酔の姿をフォトに、8ミリに撮して差しあげましょう。Mの女性、Mの男性よ。めくるめくSMプレイに耽溺し、快楽のうずき誘い行きましょう。

(東京都板橋区・黒沼 猛)

〇

私は奇クを愛読しています34才になる独身の女性です。専門の洋服デザイナーの仕事に専念していません。只今、東京でお店を持ち僅かですが人を置いて順調にやっております。奇ク誌上で辻村様や塚本様のカメラハント、ルポなどを拝見しております、私も何といたしますか、一緒になってSMプレイにお仲間入りしている様な気持ちになってしまいます。私は自分で車を持っておりまして、大阪までぐらいいしたら参ることが出来ます。お店の方は少しでしたら店員にまかせておけますから、三泊までぐらいいしたら滞在も出来ます。その点、独身ですから誰にも遠慮する必要はありませんので楽です。私はどちらかといえば男性から責められたい気持の方が強いので辻村様とか塚本様でしたら好都合ですが、年下の男性でしたら、場合によれば責めることも出来ます。ただしこの方は経験はありません。責められる方だったら若いとき、数度経験があります。誌上に写真が出て私も構いません。読者の方のなかで私に興味を持たれた方はお便り下さい。

(東京都世田谷区・寺田陽子)

○

小生はふとしたことから奇クを愛読する様になってまだ一年ほどしかならない21才になる京都在住の某私大経営学部四回生に在籍する若者です。その一年の間に奇クのバックナンバー数年分を集め、また数々のSM雑誌を読破する程のSMマニアになりましたが、小生にはSMの体験はおろか異性との関係すら皆無に等しいのです。そこでSMのパートナーを求めるために、あらゆる雑誌に投稿し掲載されたものからの返事は殆ど不真面目なものばかりでした。ところで小生のSMについての知識は雑誌によるものだけですが、この一年間に、小型パイプ、30cc浣腸器、イルリガートル、エネマシリンジ、ネラトンカテテル、大型スポイト、尿道洗滌器、腔開口器、肛門開口器、乳房吸引器、綿棒、手錠、綿ロープ各種など所持しておりすが、まだ使用するチャンスに恵まれておりません。小生の女体責めには、浣腸などのアヌスを中心とした緊縛、羞恥責めなどを好み、ムチ打ちなどの苦痛を伴う責めは余り好きではありません。どうか小生のSMパートナーとなつて下さる方、すぐにでも

連絡して下さい。遠方の方とは文通を、御夫婦の方とはトリプルプレイをしたいと思っております。

(京都市・奈良 豊)

○

月末になってくると私は落ち着かなくなる。それは書店に奇クが出ているか気になって仕方がないからである。ある月は三日も前から朝、会社へ行くときに「奇譚クラブは来ていないか」と尋ね、帰りに又尋ねた。そうして三日間の朝と晩、ききに行ったので、三日目の夕方、その書店へ顔を見せたら、主人は私の顔を見るなり、黙って奇クを出してくれた。「貴方を含めて、毎月二十冊は売れますね」と言っていた。八月号を買って満足し、そして九月号も手に入れた。こんな熱心な愛読者だか通信を出すのは、今回が初めてである。生来、文章を書くのがニガ手なのと筆不精のためである。八月号の口絵のトップのフォト、前田真知子の「美しき縛しめ」はよかった。真白いのびのびした肢体の美しさも、さることながら、ノールブルなフェイスの真知子が、たまらないMとしての絶妙の表情をしている。なんとという美しさだろ

うか。私はこのフォトを見るなりたまらなくなつて思わず発散してしまつた。カメラが羨しい。本文もまた抜群。前田嬢の「夢遠き日頃」という告白が出ているので尚よかった。九月号は手にするなりわくわく。鈴木千鶴嬢が口絵で活躍。本文に文章がなかったが、これも大いに、私の期待する処。そのかわり塚本氏の「霖雨余情」で前田嬢のフォトが沢山あって楽しめた。読者からの投稿が非常に豊富なのは、いかにも私達の雑誌という感じがして嬉しかった。

(東京都・菅井謙一)

○

私には伊都子という女性があり週に一、二度、私の部屋に於いてSM的愛情を深めておりますが最近、伊都子はいつになく縄に対して喜びを示すようになり、私も大いに気をよくしております。これも日頃奇クを欠かさず愛読している賜物だと思っておりますが、奇ク誌上に於ける読者の方々の投書は私たちファンには大変参考になります。なにも知らなかった伊都子にも奇クを見せて啓発しています。が、この頃では彼女の方が積極的

ころから私たちのSMプレイが開始されます。縛り方は奇クで習ったものを用いています。部屋の中央にある机の上におお向けに寝かせて、手と足を四つの机の足に括ったロープの掛け方は最近でも傑作の一つだと思っております。縛り方というよりも、それからあとの責めが、また楽しみでした。伊都子は可愛い顔を美しくゆがめて涙を流しながら、呻き続けます。しかし、そのうめきは歓喜のうめきなのです。私は愛しさのあまりもっとももっと、いじめ抜きたくなるのです。そして、いつも私たち二人の間に奇クがあります。九月号では小田原一郎氏の「妻に止められたプレイフォト発表」の四枚の写真の中で、四枚目の、両足を膝の所で縛られて、ひらききった所に対する責めは、私も経験があります。興味のある縛り方です。私も近々伊都子の写真をとるつもりでいますので、いざれ奇クサロンの仲間入りが出来ることと思っております。(神奈川県・浅間信次)

○

奇ク九月号いち早く入手、たのしく拝見しました。口絵写真ばかりか本文中にも盛沢山の写真が満載されていて、興味深く、時のた

つのも忘れしました。読者の方の投稿の写真が多いのもよかったですね。八奇ク入門Vという秘めたる悦楽、青山三樹さんの写真、六枚はいずれも見事な出来ばえで、短文ながら説明の文章も楽しいものでした。次号にもぜひこうした文章のつづきをのせてほしいものです。本文では「紫陽花の咲く朝」の笠井奈保子さん、私好みの肥り気味のスタイル。いかにも素人嬢らしい表情がまた可愛いんです。このような肉づきのよい清らかなお嬢さんを、この手で縛って責めたいものと、かねがね願っています。二三二頁のフォト、口にかまされた白布の猿ぐつわは、責めのムードをよくあらわしています。太股のつけ根をきつく縛られているとはいえ、自らの意志で大きく股を開いた奈保子さんの心情を思うと、私は大いに同情します。乳房の上下左右を縛った白ロープも美しいムードをかもし出しています。八月号では惜しくも休載になっていた「パロディ花と蛇」。九月号では花々しく見事な美女の悦虐場面を展開していて私たちをよるこばせてくれました。責めの宝庫である「花と蛇」の中で、ありとあらゆる女体責めを開陳して文

字通り八花V(美女群)と八蛇V(野獣群)の葛藤場面を、永遠に奇ク誌上で、続けてほしいものです。山光純氏は団氏と違って変に大家ぶらず若さもあるようですから、本当に奇ク誌友の代表として責めの極意をふりしぼって活躍して下さい。大いに、期待しています。奴隷妻小説の「命預けます」の第一回連載が始まりましたが、書き出しの1、魅惑の残酷ショールから、中々面白そうで、愛読する小説になりそうです。小見出し、なかなかうまいです。好きになれそうな小説としてこれからの展開をたのしみにしています。

(静岡県・伊東潤一)

私は27才の一度結婚生活を経験した女性です。夫とは一年前に協議離婚して今は一人で暮らしております。理由は性的にうまくゆかなかった為、夫に女が出来て不仲になったのです。身長一六四センチ体重五九キロで、少し大柄で肉づきはよい方です。奇クを読むのが好きで性格はMです。特にしばられることが好きです。縛られないことには感じが出ません。前の夫はこんな私の性格を理解してくれず一方的に私を不感症呼ばわりし

<p>笠井奈保子の自由日記帳</p> <p>六月号のカメラルポに引き続いて七月号の「奈保子の日記帳」で示した彼女の純情で無垢な肉体が、ピチピチとされた若さに溢れる肉体が、縄に縛られることによる一層の煽情的にマニアの胸にたく迫ってきます。誌上では顔をあからさまで晒すことは差控えねばなりませんでした。彼女の表情、羞恥の魅</p>	<p>豊満臀部晒し責め</p> <p>大手札三枚一組 略号八るるV 五〇〇円</p> <p>笠井奈保子</p>	<p>猿轡に悶える全裸</p> <p>大手札三枚一組 略号八るるV 五〇〇円</p> <p>笠井奈保子</p>	<p>エビ縛りのグラマ</p> <p>大手札三枚一組 略号八るるV 五〇〇円</p> <p>笠井奈保子</p>	<p>羞恥の魅力を縛る</p> <p>大手札三枚一組 略号八るるV 五〇〇円</p> <p>笠井奈保子</p>	<p>緊縛羞恥表情各種</p> <p>大手札三枚一組 略号八るるV 五〇〇円</p> <p>笠井奈保子</p>	<p>「観世音菩薩さまの縛り」</p> <p>数カ月ぶりに訪れた松本たえに對して行われた責めは、塚本氏の</p>
<p>柱縛りの悦虐肢体</p> <p>大手札三枚一組 略号八るるV 五〇〇円</p> <p>松本 たえ</p>	<p>羞恥責め悶悦表情</p> <p>大手札三枚一組 略号八るるV 五〇〇円</p> <p>松本 たえ</p>	<p>強烈責めに泣く女</p> <p>大手札三枚一組 略号八るるV 五〇〇円</p> <p>松本 たえ</p>	<p>エビ縛り開股責め</p> <p>大手札三枚一組 略号八るるV 五〇〇円</p> <p>松本 たえ</p>	<p>片足吊りに悶える</p> <p>大手札二枚一組 略号八るるV 四〇〇円</p> <p>松本 たえ</p>	<p>両足吊り宙縛り責</p> <p>大手札二枚一組 略号八るるV 四〇〇円</p> <p>松本 たえ</p>	<p>開股責めに痺れる</p> <p>大手札三枚一組 略号八るるV 五〇〇円</p> <p>松本 たえ</p>

て、いつも喧嘩がたえませんでした。文通で知り合った男性と数度プレイをした結果では、縛りの外にはアヌス責め浣腸責め二穴責め（尿道ワグナ）も好きです。エネマを使っただけの責めも好きです。ここに三枚ばかり写真を同封しておきます。読者の方々とプレイもしたいと思います。これから、私がどんな責めを好きになるか、それはわからないと思います。どうかこんな私を責めてみて下さい。私は東京に住んでいますので、大阪までは行けません。こちらまで出張して下さるのでしたら、誌上のモデルになってもかまいません。革具による拘束も、まだやったことはありませんが、好きになれそうです。仕事の都合で遠くへ出かけることは出来ないのです。（一人暮らしの生活を私一人の腕で支えていますので）東京に在住の方、または近くに在住の方で、Mモデルを探しておられる方（ムチとかキズをつけるような責めはイヤ）一度私をお試し下さいませんか。好報をおきかせ下さいませ。

（東京都荒川区・中村恵美子）

奇譚クラブの写真はいずれも見事なものばかりで、いつも感心し

て拝見しておりますが、吊りの好きな私にとっては、吊り責め写真が少ないのを常々残念に思っております。それが九月号で辻村先生のカメラハントで『吊りの醍醐味』という渡部好美さんの吊り責め写真がいっぱい載った文章を拝見し、思わず快哉を叫びました。いろんな形の吊り責め写真が十数枚にわたって載っていたのには、たんのうしました。特に後手吊りのままで高く吊り上げられたのなんか、さすがにMの渡部好美さんだと思いました。それから、久々に中河恵子さんが告白文を書かれましたね。奇譚クラブを忘れずにいてくれたことは嬉しいと思いましたが、奇クがこうした豊富なM女たちによって支えられているのだと思うと、これからは渡部好美夫人や中河恵子さんのような方が、どんどん出現されることを読者の一人として心から願っています。川路むら子さんはどうしておられますか。私の大好きなM女の一人です。読者通信にでも、お顔を見せて下さい。お願いします。

（兵庫県・三田浩隆）

大分暑さもきびしくなったようですが、読者の皆様、いかがお暮

☆福井桃子の臨月腹と臨月腹緊縛写真

愈々迎えた福井桃子さんの臨月は私達妊婦ファンの待望の日でありました。出産間際までSM資料として自分の妊娠した女体を提供された福井桃子さんの協力によって、ここに見事な文献を残すことが出来ました。八カ月から始まった九カ月の極鮮明な資料はきつとマニアの方々を熱狂させることとされています。どうか文獻的価値高きこの妊婦資料を各月一括して蒐集下さるようお願いいたします。

出産直前の緊縛美

大手札三枚一組 略号八ぬせV
福井桃子 五〇〇円
出産を目前に控えた臨月腹の上と下に縄を掛け便々とした見事なまでに丸く膨らんだ妊婦を縛る。

臨月腹の開股縛り

大手札三枚一組 略号八ぬくV
福井桃子 五〇〇円
もうこれ以上大きくならないという程最大限に膨らんだ妊婦に対して命ずる苛酷な開股縛り。

堂々たる臨月縛り

大手札三枚一組 略号八ぬよV
福井桃子 五〇〇円
フットボールのように膨らんだ丸い臨月腹を堂々と突き出して縛られた妊婦は羞らひを含む。

両手吊り臨月妊婦

大手札三枚一組 略号八ぬりV
福井桃子 五〇〇円
両手を縛って吊れば臨月の妊娠腹をかくすことも出来ず羞じらいながら巨大なメロン腹を晒す。

逞しき腹と臀部

大手札三枚一組 略号八ぬしV
福井桃子 五〇〇円
後手に高々と縛られた臨月妊婦の豊かに脂肪のつた白のよう臀部と蛙腹の異様なまでの美景。

後手縛りの太鼓腹

大手札三枚一組 略号八ぬぬV
福井桃子 五〇〇円
両手を厳しく高小手縛りにされているのでパンク寸前の羞かしに巨大な腹部をかくす業もない。

全裸臨月腹の展示

大手札三枚一組 略号八ぬいV
福井桃子 五〇〇円
あと数日でお産するという膨大な臨月腹を晒した縛りなしの全裸の全身像で妊婦の神秘を見よ。

臨月の奴隷犬調教

大手札三枚一組 略号八ぬのV
福井桃子 五〇〇円
巨大な臨月腹の全裸だけでも恥かしいのに、首に犬の首輪を巻か

て福井桃子の妊婦シリーズは今回は完結しますが貴重な資料として是非お求め下さるようお願いいたします。

しですか。夫婦プレイのやり易い季節になってきました。適度の刺激の中に円満な夫婦生活を送られる方々にお呼びかけしたいと思えます。私は結婚して五年。普通だったから、倦怠期にさしかかるところですが、夫婦生活のなかにSMプレイを導入して以来、すっかり新婚時代の昔にかえって夢よう一度というわけで、珍しさと新鮮さに毎晩を楽しんでいます。家内もSMが大好きになり、自分から荒物屋でロープを買ってきたり、責め小道具になるようなものを見つけたしてくる昨今です。ロープは店の主人から何に使うのかと聞かれて困ったそうです。奇くではなるといっても、夫婦プレイの体験談が豊富なので私達にも大いに参考になり、また羨ましくも思っています。駆け出しの私達夫婦ですが（二十九才と二十五才）そのうち、誌上に出してもらえような告白が書けるかもしれません。SMプレイの条件は、それがプレイ（遊び）であるためには単なる残虐であってはなりません。そこに愛情が介在する事が必要です。それには一生を共に過ごす約束を交わした夫婦の中のプレイが理想的ではないでしょうか。思いきつ

た姿態や行為が許されるばかりではなく、その後のセックスも当然の事として許容されるからです。私は夫婦のSMプレイを結婚後数年の夫婦の方々に、おすすめたと思います。男性の愛情を一層かりたてる羞恥を軸として、演じる夫婦プレイの姿態は本当に生々しいものです。どうか今後共、奇ク誌上に先輩諸兄弟の体験談をお寄せ下さい。私も何れ出させて頂きます。（北九州市・春川俊治）

KKは、数年来愛読しております。田舎に住んでおりますこととて刺戟も少なく僅かに誌上によって大都會のことを偲び自分の心をなぐさめております。7月号8月号9月号の誌上にて笠井奈保子さんの縛られた姿態を拝見、その初々しさに感じいたしました。私は自分の職業柄、今まで投書などは差し控えておりましたが貴女のファンになり勇気を出してペンをとりました。貴女は自分ではケンソンして不器量のように言っています、が、なかなかどうして若々しい魅力に溢れて庶民的なのが、なかなか、よろしい。八月号では「七つの土鈴と玉手箱」という如何にも少女趣味らしい日記を発表されて

☆笠井奈保子の若々しき肢体を緊縛す

六月号のカメラ・ルポで、その初々しい緊縛姿態を誌上に登場させた笠井奈保子さんは女性の緊縛フォトを見るのが大好きだといふ。第一回第二回のお嬢さんであるが、その鮮鋭なるカメラを駆使して、その真の成果をここに印刷紙に焼き付けて、その写真によつてファッショナブルのアルバムの一頁を盛大に飾りたいと思う。乞う御一見！

女体の悦虐を抉る

大手札三枚一組 略号八ぬな 五〇〇円
笠井奈保子
縄―それは奈保子にとつて果たしてどのような刺戟を与えるのだろうか。この恍惚の表情を見よ。

若さを縄でくびる

大手札三枚一組 略号八ぬな 五〇〇円
笠井奈保子
の溢れる女体を思ひのまゝに縄によつて縛り上げ弄ぶSの醍醐味。

緊縛の姿態に恥ず

大手札三枚一組 略号八ぬな 五〇〇円
笠井奈保子
白い頬を真赤に染めて縛られることを恥ずる乙女は肢体をエビのように屈伸させて表情に現わす。

乙女の女体を曝く

大手札三枚一組 略号八ぬな 五〇〇円
笠井奈保子
奈保子の猿轡をかまされた表情の垂れるほど正確にあばく。

開股縛りの決定版

大手札三枚一組 略号八ぬな 五〇〇円
笠井奈保子
肉ののった太股を縄によつて強制的に広げさせられた美しくも妖しいムードの漂う女体開陳版。

羞恥縛りの種々相

大手札三枚一組 略号八ぬな 五〇〇円
笠井奈保子
ふりまく二十才の乙女の柔肌。

若き肢体美を縛る

大手札三枚一組 略号八ぬな 五〇〇円
笠井奈保子
伸びやかな若々しい肢体を思いきり開陳して緊縛美をいっぱいに

縄に依る悶悦姿態

大手札三枚一組 略号八ぬな 五〇〇円
笠井奈保子
縛られたことで心中の動揺をかくしきれず真白い全裸の肢をくねくねとくねらせて悶える乙女。

縛りを耐える表情

大手札三枚一組 略号八ぬな 五〇〇円
笠井奈保子
縛られることが好きなのか嫌いなのかわからぬが、強烈に縛られ必死に耐える表情は美しい。

乙女の女体を曝く

大手札三枚一組 略号八ぬな 五〇〇円
笠井奈保子
奈保子の猿轡をかまされた表情の垂れるほど正確にあばく。

開股縛りの決定版

大手札三枚一組 略号八ぬな 五〇〇円
笠井奈保子
肉ののった太股を縄によつて強制的に広げさせられた美しくも妖しいムードの漂う女体開陳版。

羞恥縛りの種々相

大手札三枚一組 略号八ぬな 五〇〇円
笠井奈保子
ふりまく二十才の乙女の柔肌。

若き肢体美を縛る

大手札三枚一組 略号八ぬな 五〇〇円
笠井奈保子
伸びやかな若々しい肢体を思いきり開陳して緊縛美をいっぱいに

縄に依る悶悦姿態

大手札三枚一組 略号八ぬな 五〇〇円
笠井奈保子
縛られたことで心中の動揺をかくしきれず真白い全裸の肢をくねくねとくねらせて悶える乙女。

縛りを耐える表情

一層貴女が好きになりました。貴女を開拓された塚本鉄三氏が「私の縛った思い出のM女たち」を書いておられるが、私も彼のように貴女を自らの手で縛ってみたい。世の荒波にまでもまれていない貴女の白い肌を。

(鹿児島県・荒井猛雄)

○ この頃はSM雑誌がはんなし
ていると言われていますが、私は
奇クが一番好きです。それは読
みごたえがあつて隅から隅まで読
者の身になって作られているから
です。ブームにのつてケバケバし
く売らんがために場当たりで流行に
おくれまいとして我も我も急造の
バラックにペンキを塗りたくった
西部劇のセットのようなにも私
はもうあきあきしてヘドが出そう
です。なんでもかんでもSMを書
いたら売れるというニセ物のやり
方には、いくらSMの好きな私で
もフンガイです。さて近着の奇ク
九月号、さすがに歴史と伝統を誇
るSM誌の本家だけあつてズンと
胸の底にまで響く重量感には、こ
たえられないものを感じました。
奇クサロンの充実はいいですね。
写真あり、絵あり、告白あり、コ
ントあり、短文ありで、まさに百

花繚らんといったところ。私もそ
のお仲間入りしたいと思つても、
身のほど知らぬ愚か者。それでい
て、奇クを開いて見ると、なんと
なく身体の底から力が湧いてきて
何かを書きたくなるから不思議で
ある。これは一体、奇クのどんな
ところに魅力があるのだろうか。
「大噴火」は48回とは、よく続い
ている。満四年に、なるんだね。
「花と蛇」の十年には遠く及ばな
いけれど。辻村御大の「カメラハ
ント」も御老体(失礼)を押して
よく続く。永いことは良いことじ
やないかもしれないが、永遠に続
いてほしいものだと思つて拙いペ
ンをおく。(山口県・名村史郎)

○

九月号「妖花の泉」は流石、流
腸体験だけに流腸法がこまかく書
かれていた。ただ八七頁の薬液の
種類の項にドナンと食酢がぬけて
いるのはウカツであろう。ドナン
食酢ともグリセリン以上の即効性
のあるのは、流腸マニアなら常識
となつてゐるのに。さらに女性に
流腸する場合、ビールや酒といっ
たアルコールものを流腸するのも
興味がある。これを流腸すれば上
から飲んだように酔わないまで
も、矢張りアルコール分が腸壁か

ら吸収されて酔心地になるのは事
実、いうなれば流腸酔である。上
条氏は八八頁下剤の使用の項でヒ
マシ油と流腸の併用を説き、簡単
に排泄させるといつているが両者
併用の場合、排泄感強烈なだけ
に、とことんまで排泄を耐えさせ
る処に流腸の真の醍醐味がある。
この場合、ただアヌをおさえた
だけでは強烈な排泄感に負けるの
でソーセージを栓のかわりにアヌ
スに深く没入した方がよい。そう
するとヒマシ油と流腸液の即効果
がソーセージの栓で喰ひ止められ
排便はしたし便は出さずで腸内は
どろり狂い、この世の終わりの思
う位の苦しさに正に流腸の極致を
味あうことが出来る。流腸のよさ
は耐えに耐えた後、思い切つて排
便する処にある。

(東京都・流腸キチ生)

○

九月号は秀逸、SMの求めて止
まない美の集積、殆どの頁が同好
の士の共感を呼んだことと思う。
奇クは、求めても許されぬSMの
夢の世界を、この重苦しい重圧の
世相のうっぶんの中で我々に開い
てくれた。久方ぶりの中河恵子、
二年間の育児に専念とはあったが
娘時代と異なり熟しきった彼女は

より素晴しかった。佐野みさ子、
M女の本当の美しさを宿した女。
マニアとして彼女の勇に感謝した
い。押しつぶされたバナナが目
浮かぶ。「パロディ花と蛇」遂に
千代の樹液を吸わされる静子夫人
は圧巻。見事な心理責めのテンポ
であつた。妖花の感深し笠井奈保
子。羞恥感良し。更に責めの向上
を期待する。奇クサロン、小田原
一郎氏妻女のプレイフォト、甘美
のきわみ。継続してご発表を乞う
のみ。読者通信の高田礼子嬢は近
代嬢らしい割きつた書簡で私を酔
わせてくれた。サインペンでアヌ
スを責めるM願望の娘。写真同封
とあつたが新モデル登場を期待す
る。SMが世間で白眼視されるな
かにあつて、淡々と珠玉の名篇を
数少ないマニアのために綴り続け
てくれる奇クに感謝しつつ夢から
さめて充溢する精気を宿し、私は
今朝もつつがなく真面目で平凡な
一社会人として仕事に出かけるの
です。(兵庫県・苦木桃太郎)

○

南川恭子さん。京都は不思議な
都です。古い都でありながら革新
的な都であり、学問の都でありな
がら遊蕩の都でもある。えもいわ
れない魅惑ゆえに又奇クの舞台と

しても登場するのでしょう。そんな京都から貴女の呼びかけ、これも京都の魅力です。私がSMとか流腸とかの世界を知ったのは、七八年前になりますか。高校生だった私が裏窓という雑誌を知り、その耽美の世界に急速にひき込まれて行きました。しかし、流腸という行為には、子供のころ病院にて無理やりされた時のあの一種なざしがたい感じが、不快感としてしか思い出されず理解できなかったものです。裏窓が廃刊になって数年、奇巧の読者になってから、流腸もまたSMプレイの一分野であった事を知り、認識不足と、この道の広さに改めて感じいったものです。生物の生存して行く為には摂取、排泄、生殖の三要素が有り人間はこの内、摂取と生殖に関しては、その可能ながりの知恵をしぼって、それを快楽として追求しているのだが、なぜか排泄だけは継子あつかいされています。自然に帰れとか、人間性回復などと言われている今日、トイレ評論家なる職業が堂々とマスコミに取りあげられている様な現象を見ても食事やセックスを楽しむのと同様に流腸という行為が是認されてもいいのでは——と思うのですが。

南川恭子さん、行為だけでなく、それに付随する様々なプロセス、即ち海や山の場合とか時間ETCを工夫する事によって、一層すばらしい物になると思うのですが。私といるいろいろなプレイしてみませんか。私は美術図書の編集者をしていて二十六才の男性。将来、小説を物にしようと思っています。

(京都市下京区・日柳 園)

貴誌を愛読して十数年になる者ですが、最近特に感じていることや貴社へのお願いなどで一筆執った次第です。巷に氾濫しているSM誌の多さをみても、又この関係の映画その他の多いのを見ても、SM人口の増加はすさまじいもので、将にSMブームであります。然るに各誌の内容をみるに特にM関係の小説では、その筋も単純であまりに露骨で表現も直接的であります。そこには、あまりにも非現実的なものも多く、心より感動するような深味のあるものがありません。非常に不自然な設定、導入の後、またたく間に、鞭打ち、挿尿、その他が露骨な表現のまま進行してゆきます。心理描写(登場人物の)などは全くつけ足しです。これでは如何に熱心な読者も

飽きがきます。SMは本来その行為そのものよりも、そこに描かれる両者の心理的なものの推移により深い興奮を感じるものだと思います。貴誌のかなり古い号には、そのような深味のある小説がかなり多く載りました。表現は現在ほど露骨ではなくとも作品としては格段と優れております。今や多くの読者は曾って貴誌を飾った作品群をなつかしみ、今一度の再現を、待望しております。例えば、「アイアナ夫人」「宇宙のどこかで」「モッキンバード」「マゾヒズム天国」などの作品です。しかし、

のかも知れません。前記のM小説集なら、大衆向けがすると思えます。とにかく現在多くの書店に氾らんしている類のM小説は、もはや完全に飽きられつつあります。リバイバルの方がずっと素晴らしいです。M人口もかなり入れ替ったり新しく生まれていますので、決して単に古い作品の再登場ではありません。どうか一つお考えになってみて下さい。失礼ですが匿名にしますが、まじめな気持で記したものです。

(東京都・新宿住人)

このような作品は今や読むことは至難の業です。仮に古本屋でみつけても高価でとても手やすく入手できません。そこで貴社にお願いですが、上記のような作品をまとめて臨時号として出して頂きたいのです。繰り返しますが多くの読者は、今や熱望していると思います。前年、沼氏の、「家畜人ヤプー」や「ある夢想家の手帖」が出版されたが、特に前者は多くの購読があったと聞きます。或は、これが今日のSMブームの火つけ役になったとも云えます。後者はエッセイでややむづかしく、一つずつの話が短いために今一歩だった

高松志朗様。九月号で私への御厚情溢れるお呼びかけ、誠に有難うございました。八月号の奇クサロンに、貴兄のお名前を拝見いたし、確か私の古い記憶に聞き覚えのあるお名前と、早速、古い奇クを調べまして、昭和四十年一月号に掲載された二葉のフォトと「SM夫婦の友を求む」と題した貴兄の投稿を、改めて読ませて戴きました。その頃より、すでに貴兄が夫婦プレイの実践者として、交換プレイに並々ならぬ情熱を傾け、今日のブームを予測された先見さには、敬服すると共に感心させられました。丁度、その頃の私も、

次号(十一月号)は九月二十五日に発売いたします

倒錯の世界に、心ゆくまで話し合える友を求めたいと願いながらも告白する勇気もなく、唯々長い間怨念を抱き続け、今日までまいりました。しかし今の私は、貴兄のお呼びかけに、知遇の友を得た欲びと、相通じる嗜虐趣味に共鳴を覚え、今まで日夜、懊悩しながら見果てぬ交換プレーの願望を断念できず、悩んでいた私の心に、現実的可能性を確信することができ大いに飲んでいる次第です。若し奇巧編集長のお許しさえ戴ければ、私達夫婦共々、貴兄との御交際をお願い申し上げ、積念の思いを是非、実現したい考えでございます。なお只今、文筆にうとい家内に、ペンを採らせ、告白文を綴らせております、いずれ、奇巧の誌上に掲載をお願い申し上げます。望に似通ってしまった家内の性癖にも、御理解を載きたいと思っております。貴兄の、御多幸をお祈り申し上げると共に、理想の実現の一日も早やからんことを願って私の御返事に、かえさせて戴きます。

(神戸・早坂信治)

○

連載時代S小説「紫蘭の門」を愛読しています。さて名は体を表わすと申しますが、作者風流極道軒氏はそのままに、文章は風流で内容は極道の趣があります。さればこそ、暴虐の責め手、穢弄の魔手に陥ちた菊亭貴子は屈従して元禄屋の内儀に、久我雅子は葉室邦行の妻になると云う、凡手では滅多にお目に掛かれぬ佳境を展開し得たのでしょうか。それだけでも誠に有難い世界なのですが、そうしたわけか元禄屋は「勅使殿をお慰め申すために自分の女房を、ほれこのようにさし出しましたわ」と貴子にとっては忘れられない中納言高明の前でのたうつ裸身を更にしたぶり、女をその愛人の前で罵りものにするという、この上ない男の快楽を満喫して止まないのです。一方、雅子とて同じこと、三度も陥落した後で、なおも珍妙な彼女にとっては、哀切な裸踊りをやらされる。全く女にとっては、たまったものでなく、彼女等が、「アッ、アッ、アッ」としりあがり、に喘いだり、「アッ、ほんとう

に、お許し下さいませ」と、必死に哀願するのも、あながち無理ではない。それでも私達読者は、「お、おやめく下さいませ」と作者に中止を申込む筈もなければ、「あっしには、関わりのねえこと……」と、木枯し紋次郎程に無関心でもない。汲めどもつきぬ興趣が絶妙な男女の対話と共に一段と盛り上がるのを期して待つばかりである。

(京都市左京区・田中 明)

○

小さい頃から女性ばかりの間で育った為か、全くではないのですが、あまり女性には関心のない二十三才、一七四cmの青年。先日、偶然本誌を見つけ、さっそく買って帰り夢中になって読みました。特に文中の緊縛女性のフォト、まるで自分がその縄にかけられていくような気持です。私が女ならば喜んで縄を受けカメラの前に立ちたい位です。朝まだ薄暗い頃、近くの林の中を女性の水着や negligee を着て歩いたり、又自分で縄目をかけても満足出来るはずもなく、緊縛のフォトを眺めながら自分がこの女だったらと思えばぐんぐんと膨らみます。今夜又一人の部屋で乳房のない胸にブラジャーを着け

股間縛りの出来ぬ所へパンティをはき白い negligee を着て本誌のフォトを眺めております。自分をそのモデルにダブらせながら。

(豊中市・吉田礼一)

○

貴誌を愛読して早いもので十五年になりますが、初めて投稿します。八月号の前田真知子さんの告白手記とグラビア頁の写真を見てからはペンをとらずにはおられなくなりました。前田真知子さんは、これまで貴誌に登場したモデルの中で梨花悠紀子さん以来の人だと思えます。もちろん前田真知子さんの分譲写真は貴誌に初めて掲載された時に求めましたが、八月号の告白にも書いてある通り、体がやせられたようですが、顔は前に比べ、若くなられたように思われます。稚さといったものが感じられるのは、M性に目覚めてきたためだと思いますし、写真でも、それがよく表情に出ていっていると思います。前田真知子さんの、他のモデルにない知的な美しさを、これから誌上に披露して下さい。

(長崎・前田真知子ファン)

○

始めてお便りします。山形の最上卓也様。あなたのプレイ・レポ

ートを拝見させてもらい、ペンをとった次第です。私は二十三才、同県に居住している一SM同好者です。まだプレイ経験はありませんが、あなた様のような方から、いろいろお聞きしまして愛好者の仲間入りしたいと思っておりますので、よろしくお願いします。

(山形・S
M研究生)

私は、サルグツワの大ファンです。若い娘が手足を縛られ、サルグツワをはめられ、もがいている

場面を考えただけでゾクゾクしてきます。最近ではSMの雑誌が、たくさん出ていますが、サルグツワ大特集というようなものが、まだ発行されておりませんので、ぜひ実現されることを、期待しています。また、裸よりシュミーズ一枚とか、セーラー服を着て、髪をお下げにした美しい娘がサルグツワをはめられているところや、日本の着物姿の美女がサルグツワをはめられて、もがいているところなど、のせてほしいと思います。

(岡山市・西大寺寅彦)

私は、まだプレイの経験のないS研究生です。経験がないというのは、二十代という年令のせいもあるでしょうが、私は一風、変わったS派人間なのです。自分でいうのもなんですが、詩や文学を感ずるロマンチックな青年です。事実、血が出るようなものは好きではありません。私は女囚愛好家なのです。女囚という状況、設定に、たまらなくシビれるのです。

国家権力の縄に支配される女の方が犯罪者であり、捕縛も処刑も公表され、自らの罪の意識を恥じる女囚。そんな女囚になってみたいとあこがれるMの方も多いと思います。これは、あくまでも二人のプレイであって虐待ではありませんせん。もし少しでも私の牢役人、刑務所看守に興味を持ったなら、お便り下さい。二十代のM派女囚志願の方、お待ちしております。

(神奈川県・岩田)

○本誌既刊雑誌は左記、一覽表の通り
 行の在庫のつては、在庫の僅少にな
 ものもあります。から、お早い目に
 御注文願います。○七月一日の郵送料
 い、全面的に改訂の必要が生じ、ま
 たの御承願います。尚、既刊し
 号以外で、三カ月以上御予約の場
 合は送料の全額を当社に負担致し
 します。節は、人数小包括にての
 注文の節は、人数小包括にての
 注文の節は、人数小包括にての

昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭
 和和和和和和和和和和和和和和和和
 434343434343424241414141414141
 年年年年年年年年年年年年年年年年
 1211654321161110876542
 月月月月月月月月月月月月月月月月
 号号号号号号号号号号号号号号号号
 送送送送送送送送送送送送送送送送
 共共共共共共共共共共共共共共共共
 三三三三三三三三三三三三三三三三
 八八八八八八八八八八八八三三三三
 二二二二二二二二二二二二二二二二
 円円円円円円円円円円円円円円円円

[illegible][illegible]

V

に『危険な悦楽』ネ、なんて小生意気なことをいったこともあるが、その『虐悦開始』感覚は急速に育ち、近頃は独りで『関谷富佐子慟哭図』ヨ、とかなんとかいって、汗まみれでM女悶悦ポーズの熱演もする。見かねて、『入浴タイム』にしてやるがプレイ中は『パパからの電話』など勿論無視するし『扇風機をどうぞ』とすすめても見向きもしない。暑くても彼女の官能ルームは『M感情発電』できつとエアコンされているのだろう……。

○とまあ、本号の『イメーჯギャラリー』一覽コジツケ小説？ を『モノした』のは『ケッシテ暑サ負ケデ頭ガ余計ニボヤケタワケデハナイ』といいたいところですが、実は九割方がそうらしいと思われるのは確かです。

『ジ画』寄稿をお待ちするのは確かです。

△體驗、告白、手記▽

△創作、小説、物語▽

発表作品に限ります。これら
 と思う作品は必ず誌上に取り
 上げます。腕試しの意味で奮
 って御投稿願います。採用篇
 には賞金十万円迄贈呈。

△感想、論評、批判▽

本誌に關連したものでした
 ら話題の内容は問いません。
 忌弾なき皆さまの御意見を
 待ちします。採用篇には二千
 円以上の賞金を贈呈します。

△(映画、雑誌)通信▽

映画、雑誌、演劇、新聞、
 単行本或はその他見聞など
 特に興味をお持ちになった事
 項の通信をお待ちします。出

本誌に関連したものでした。

ら話題の内容は問いません。忌弾なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二千元以上の賞金を贈呈します。

映画、雑誌、演劇、新聞、

單行本或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出

ま方のための公共の広場とし

て開放しています。 御遠慮なくお寄せ下さい。

予約に限り

一月分(1冊)	四〇〇円	送32円	▽
三月分(3冊)	一二〇〇円	送共	▽
半年分(6冊)	二四〇〇円	送共	▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さるば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

十月号

(第二十六卷第十号)
(通刊第二百九十六号)

昭和四十七年九月二十日
昭和四十七年十月一日
印刷
発行

編纂人	杉原 虹
発行人	村田 俊
印刷人	北吉 夫

大阪市住吉郵便局私書函第四十一号

発行所 暁出版株式会社

番便郵
振替口座大阪四二七八三番
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二一日)
国鉄大局特別扱承認雑誌第二一〇号

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の検討、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に注意する各条例に指定されないうち、充分に注意して編集したてており、ますが、本来成人向として発行を企図しており、ます、関係上、十八才未満の方には絶対販売さらないよう、特にくれぐれも、お願ひ申し上げます。